新潟県埋蔵文化財調査報告書　第152集

上信越自動車道関係発掘調査報告書XIX

下馬場遺跡・細田遺跡

２００５

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書 XIX

下馬場（しもばば）遺跡・細田（ほそだ）遺跡

２００５

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡インターチェンジから分岐し、長野県を経て新潟県上越市に至る全長203kmの高速自動車国道です。この路線は関越・磐越自動車道と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として、沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和63年度から建設用地内の埋蔵文化財について調査を開始し、平成9年度には中郷インターチェンジ～上越ジャンクション間の発掘調査を終え、県内の現地発掘作業を終了しました。

本書は平成9年度に行った下馬場遺跡・細田遺跡の発掘調査報告書です。下馬場遺跡は弥生時代後期から終末期にかけての集落跡です。竪穴建物跡が14軒確認され、内部から弥生土器・石器などが出土しました。また、管玉などの玉作りに関係した遺物も出土しており、県内の弥生時代後期の玉作りの状況を知る貴重な資料となりました。細田遺跡では、主に弥生時代終末から古墳時代、奈良・平安時代の遺物が多く発見されました。また、少量ではありますが縄文時代や中世・近世の遺物も出土しており、長い期間にわたる遺跡周辺の土地利用の痕跡が明らかになりました。

今回の調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った上越市教育委員会、並びに地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局（現日本道路公団北陸支社）・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成17年8月

新潟県教育委員会

教育長　武藤　克己

例　　言

1　本報告書は、新潟県上越市大字下馬場字浦山836ほかに所在する下馬場遺跡と同市大字黒田字細田305番地1ほかに所在する細田遺跡の発掘調査記録である。

2　両遺跡の調査は上信越自動車道の建設に伴い、日本道路公団から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、発掘調査は調査主体である県教委が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に委託し、実施した。下馬場遺跡は平成９年４月23日～11月14日、細田遺跡は平成９年４月14日～８月26日の期間で二次調査を実施した。

3　出土遺物および調査に関する各種資料は、一括して県教委が保管・管理している。

4　遺物の注記は、遺跡の略記号・出土地点・層位を続けて記した。註記の略記号は下馬場遺跡は「下ババ」、細田遺跡は「ホソダ」と記している。

5　遺物番号は下馬場遺跡では土器と石器・石製品・鉄製品の別にそれぞれ通し番号を付している。細田遺跡では、遺物の種別に関係なく通し番号を付した。本文・観察表・図版の番号はすべて一致している。

7　引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅴ章２下馬場遺跡の樹種同定と３細田遺跡の樹種同定については各節末に記した。

8　調査成果の一部は現地説明会・埋文事業団年報等で公表されているが、本報告書の記述をもって正式報告とする。

9　本報告書の作成にあたり、自然科学分析は以下の機関に委託した。

1　下馬場遺跡出土炭化材の年代測定　　株式会社加速器分析研究所

2　下馬場遺跡出土炭化材の樹種同定　　パリノサーヴェイ株式会社

3　細田遺跡出土木製品の樹種同定　　株式会社古環境研究所

10　遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託して編集を行った。なお、図版作成・編集に係り、委託業者に支給した資料は以下のとおり。写真類はすべてデジタルデータを使用し、遺構写真はポジフィルムからデジタルデータ（フォトCD）化し、遺物写真はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影した。

本文・挿図：テキスト形式［文字］・Excel型式［表］、トレース原図、張り込み版下

遺構図面図版：原図（修正済）・仮レイアウト図・文字データ

遺物写真図版：トレース図（個別）・拓影・仮レイアウト図

写真図版：デジタルデータ（CD・MO）・仮レイアウト図

11　本報告書の執筆・編集は尾崎高宏（埋文事業団　班長）が担当した。ただし、第Ⅱ章は県教委既刊報告書［小池2000；山崎2004］を改変して掲載した。また、細田遺跡出土墨書土器の赤外線写真撮影と文字の判読は田中一穂（埋文事業団　嘱託員）が行った。

12　発掘調査から本報告書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

相田泰臣　赤澤徳明　甘粕健　伊藤秀和　小熊博史　金子拓男　小島幸雄

笹澤正史　上越市教育委員会　関雅之　高橋勉　竹之内耕　立木宏明　中野由紀子

日本道路公団北陸支社　野田豊文　野水晃子　橋本博文　秦繁治　馬場伸一郎　廣瀬時習

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の方法と経過 …… 2
A　一次調査 …… 2
B　二次調査 …… 3

3　整　　理 …… 4

4　調査体制 …… 4
A　下馬場遺跡 …… 4
B　細田遺跡 …… 5

5　整理体制 …… 5
A　細田遺跡木製品の整理と保存処理 …… 5
B　報告書作成に係る整理作業 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境 …… 6

2　歴史的環境 …… 7
A　縄文時代 …… 7
B　弥生時代 …… 7
C　古墳時代 …… 9
D　古　　代 …… 9
E　下馬場遺跡・下馬場古窯跡群について …… 9

第Ⅲ章　下馬場遺跡

1　調査の概要 …… 11
A　グリッドの設定 …… 11

2　地形と基本層序 …… 11

3　遺　　構 …… 12
A　概　　要 …… 12
B　遺構の計測・記述方法 …… 12
C　遺構各説 …… 13
1）竪穴建物 …… 13
2）弥生時代の土坑・性格不明遺構・ピット 16
3）木炭窯 …… 16
4）縄文時代の土坑 …… 17

4　遺　　物 …… 17
A　遺物の概要と記述の方法 …… 17
B　弥生土器 …… 17
1）文様・調整・胎土 …… 17
2）分　　類 …… 19
3）分布状況 …… 26
4）遺物各説 …… 27
C　縄文・その他の時期の遺物 …… 35

D　弥生時代の石器・石製品 …… 36
1）石　　器 …… 37　2）玉作関連資料 …… 39
3）石 製 品 …… 43　4）鉄 製 品 …… 43
E　包含層出土石器 …… 44
1）剥 片 石 器 …… 45　2）磨 石 類 …… 45
5　自然科学分析 …… 46
A　下馬場遺跡出土炭化材の年代測定 …… 46
B　下馬場遺跡出土炭化材の樹種同定 …… 48
1）は じ め に …… 48　2）試　　料 …… 48
3）分 析 方 法 …… 48　4）結　　果 …… 48
5）考　　察 …… 49
6　ま　と　め …… 52
A　出土土器の編年的位置付け …… 52
B　玉作関連資料について …… 55
1）下馬場遺跡の管玉製作工程 …… 57
C　集落について …… 61
1）竪穴建物の構造 …… 61　2）集落構造の変遷と遺跡の性格 …… 62

第Ⅳ章　細 田 遺 跡

1　調査の概要 …… 64
A　遺跡の立地と周辺の地形 …… 64
B　グリッドの設定 …… 64
2　基 本 層 序 …… 65
3　遺　　構 …… 65
A　概　　要 …… 65
B　遺構の計測方法と呼称 …… 65
C　遺 構 各 説 …… 65
1）弥生・古墳時代の遺構 …… 65　2）古代の遺構 …… 67
3）中世の遺構 …… 68　4）時期不明の遺構 …… 68
4　遺　　物 …… 69
A　概要と記述の方法 …… 69
B　縄文時代の遺物 …… 69
1）縄文時代の土器 …… 69　2）縄文時代の石器 …… 69
C　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物 …… 70
1）概要と分類 …… 70　2）各　　説 …… 72
D　古墳後期の遺物 …… 74
E　古代の遺物 …… 75
1）概　　要 …… 75　2）分　　類 …… 75
3）遺 物 各 説 …… 78
F　中・近世の遺物 …… 81
G　木 製 品 …… 82q
5　自然科学分析 …… 83
A　細田遺跡出土木製品の樹種同定 …… 83
1）は じ め に …… 83　2）試　　料 …… 83
3）方　　法 …… 83　4）結　　果 …… 83
5）所　　見 …… 86

6　ま　と　め …… 90
A　弥生・古墳時代 …… 90
B　古　　代 …… 91

《要　　約》 …… 92

《引用参考文献》 …… 94

《観　察　表》 …… 97

挿図目次

第１図　上信越自動車道路線図と下馬場遺跡・細田遺跡の位置 ……1
第２図　下馬場遺跡・細田遺跡一次調査範囲とトレンチ配置図 ……2
第３図　高田平野周辺の遺跡 ……8
第４図　下馬場古窯跡群表採資料 ……10
［下馬場遺跡］
第５図　下馬場遺跡グリッド設定図 ……11
第６図　4D25・4E1付近基本層序 ……12
第７図　遺構形状の分類と呼称 ……12
第８図　土器の部位と名称 ……19
第９図　弥生土器分類図（1）……21
第10図　弥生土器分類図（2）……22
第11図　弥生土器分類図（3）……23
第12図　弥生土器分類図（4）……24
第13図　弥生土器分類図（5）……25
第14図　弥生土器出土量分布 ……26
第15図　縄文土器重量分布図 ……36
第16図　4Eグリッド出土鉄滓 ……44
第17図　下馬場遺跡出土炭化材顕微鏡写真 ……51
第18図　下馬場遺跡出土土器の変遷図 ……53
第19図　下馬場遺跡竪穴建物の変遷 ……56
第20図　管玉製作工程（鉄石英）……58
第21図　管玉製作工程（緑色凝灰岩）……59
第22図　管玉工程品法量分布グラフ ……60
［細田遺跡］
第23図　細田遺跡グリッド設定図 ……64
第24図　細田遺跡の層序 ……66
第25図　弥生～古墳前期の土器分類図（1）……71
第26図　弥生～古墳前期の土器分類図（2）……72
第27図　杯蓋・有台杯の重ね焼き分類 ……76
第28図　古代の土器分類図 ……77
第29図　細田遺跡の木材（1）……87
第30図　細田遺跡の木材（2）……88
第31図　細田遺跡の木材（3）……89

表　目　次

第１表　下馬場遺跡出土弥生土器口縁部・底部残存率集計表 ……26
第２表　1号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……27
第３表　2号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……27
第４表　3号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……28
第５表　4号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……28
第６表　5号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……29
第７表　6号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……29
第８表　7号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……30
第９表　8号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……30
第10表　9号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……31
第11表　10号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……31
第12表　11号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……32
第13表　12号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……32
第14表　13号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……33

第15表　14号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……33
第16表　SX5出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……33
第17表　SX8出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……34
第18表　遺物包含層出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……34
第19表　時期・グリッド別縄文土器出土点数一覧 ·35
第20表　遺跡出土石器石材・種別一覧 ……37
第21表　遺構別管玉工程品集計表（1）……42
第22表　遺構別管玉工程品集計表（2）……43
第23表　放射性炭素年代測定結果一覧 ……47
第24表　樹種同定結果 ……49
第25表　下馬場遺跡竪穴建物出土土器の編年的位置付け ……55
第26表　15P'グリッド出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……73
第27表　15Q'・15R'グリッド出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……73
第28表　細田遺跡（全体）弥生～古墳前期の土器口縁部・底部残存率集計表 ……74
第29表　細田遺跡古代土器口縁部・底部残存率集計表 ……75
第30表　SD6出土土器口縁部・底部残存率集計表·78
第31表　SD4出土土器口縁部・底部残存率集計表·79
第32表　15P'グリッド出土土器口縁部・底部残存率集計表 ……79
第33表　細田遺跡出土木製品観察表・樹種同定結果一覧 ……85
第34表　細田遺跡出土墨書土器一覧表 ……90

図版目次

［下馬場遺跡　図面図版］

図版 1　下馬場遺跡　全体図
図版 2　1号竪穴実測図（1）
図版 3　1号竪穴実測図（2）1号竪穴遺物出土位置図
図版 4　2号竪穴実測図（1）2号竪穴遺物出土位置図
図版 5　2号竪穴実測図（2）3号竪穴実測図（1）
図版 6　3号竪穴実測図（2）3号竪穴遺物出土位置図
図版 7　4号竪穴実測図（1）
図版 8　4号竪穴実測図（2）　4号竪穴炭化材・遺物出土位置図
図版 9　5号竪穴実測図
図版10　6号竪穴実測図　6号竪穴遺物出土位置図
図版11　7号竪穴実測図（1）
図版12　7号竪穴実測図（2）7号竪穴遺物出土位置図
図版13　8号竪穴実測図　9号竪穴実測図（1）
図版14　9号竪穴実測図（2）10号竪穴実測図
図版15　11号竪穴実測図（1）
図版16　11号竪穴実測図（2）11号竪穴遺物出土位置図
図版17　12号竪穴実測図（1）
図版18　12号竪穴実測図（2）13号竪穴実測図（1）
図版19　13号竪穴実測図（2）13号竪穴遺物出土位置図
図版20　14号竪穴実測図
図版21　弥生時代の土坑・その他（1）
図版22　弥生時代の土坑・その他（2）
図版23　弥生時代の土坑・その他（3）
図版24　弥生時代の土坑・その他（4）時期不明炭窯
図版25　縄文時代の遺構（1）
図版26　縄文時代の遺構（2）
図版27　縄文時代の遺構（3）
図版28　弥生時代の土器（1）
図版29　弥生時代の土器（2）
図版30　弥生時代の土器（3）
図版31　弥生時代の土器（4）
図版32　弥生時代の土器（5）
図版33　弥生時代の土器（6）
図版34　弥生時代の土器（7）
図版35　弥生時代の土器（8）
図版36　弥生時代の土器（9）
図版37　弥生時代の土器（10）
図版38　弥生時代の土器（11）
図版39　弥生時代の土器（12）
図版40　弥生時代の土器（13）続縄文土器　縄文時代の土器
図版41　弥生時代の石器（1）
図版42　弥生時代の石器（2）
図版43　弥生時代の石器（3）
図版44　弥生時代の石器（4）
図版45　弥生時代の石器（5）
図版46　弥生時代の石器（6）
図版47　弥生時代の石器（7）その他
図版48　玉作関連資料（鉄石英）（1）
図版49　玉作関連資料（鉄石英）（2）
図版50　玉作関連資料（緑色凝灰岩）ヒスイ関連資料
図版51　石製品　鉄製品　遺物包含層出土石器（1）
図版52　遺物包含層出土石器（2）
図版53　遺物包含層出土石器（3）
図版54　遺物包含層出土石器（4）

［細田遺跡　図面図版］
図版55　細田遺跡　全体図
図版56　遺構平面図（1）
図版57　土層断面図（1）
図版58　遺構平面図（2）
図版59　掘立柱建物柱平面図
図版60　遺構平面図（3）
図版61　遺構平面図（4）
図版62　土層断面図（2）
図版63　遺構平面図（5）土層断面図（3）
図版63　遺構平面図（6）土層断面図（4）
図版65　遺構平面図（7）
図版66　縄文時代の土器・石器
図版67　弥生終末～古墳前期の土器（1）
図版68　弥生終末～古墳前期の土器（2）
図版69　弥生終末～古墳前期の土器（3）
図版70　弥生終末～古墳前期の土器（4）古墳中・後期の土器
図版71　古代の遺構出土土器（1）
図版72　古代の遺構出土土器（2）
図版73　古代の遺構出土土器（3）
図版74　古代の土器（1）
図版75　古代の土器（2）
図版76　古代の土器（3）
図版77　中世の土器・陶磁器（1）
図版78　中世の土器・陶磁器（2）石製品　近世陶磁器
図版79　木製品（1）
図版80　木製品（2）
［下馬場遺跡　写真図版］
図版81　下馬場遺跡　遺跡周辺の景観
図版82　下馬場遺跡　遺跡全景（1）
図版83　下馬場遺跡　遺跡全景（2）、4号畝
図版84　下馬場遺跡　竪穴遺物、現況、層序、管玉制作関連遺物、続縄文土器
図版85　下馬場遺跡　鉄製品、スタンプ文、刺突文、炭化米
図版86　下馬場遺跡　1・2号竪穴建物完掘　全景
図版87　下馬場遺跡　3・4号竪穴建物完掘　全景
図版88　下馬場遺跡　5・6号竪穴建物完掘　全景
図版89　下馬場遺跡　7・8号竪穴建物完掘　全景
図版90　下馬場遺跡　9・10号竪穴建物完掘　全景
図版91　下馬場遺跡　11・12号竪穴建物完掘　全景
図版92　下馬場遺跡　13・14号竪穴建物完掘　全景
図版93　下馬場遺跡　1・2・3号竪穴建物
図版94　下馬場遺跡　3・4号竪穴建物
図版95　下馬場遺跡　5・6・7号竪穴建物
図版96　下馬場遺跡　7・8・9・10号竪穴建物
図版97　下馬場遺跡　10・11・12号竪穴、13号竪穴（火葬場跡）
図版98　下馬場遺跡　13・14号竪穴、竪穴群全景
図版99　下馬場遺跡　SK1・2・3・4
図版100　下馬場遺跡　SX5、SK6・7、SX8、SK9・10
図版101　下馬場遺跡　SK12、SX13・17、SK18・19・20・22
図版102　下馬場遺跡　炭窯1・2・3・4・5・6
図版103　下馬場遺跡　炭窯7・8、陥穴状土坑列、JSK1
図版104　下馬場遺跡　JSK2・3・4・5・6・7・8
図版105　下馬場遺跡　JSK9・10・11・12・13・14・15・16
図版106　弥生時代の土器（1）
図版107　弥生時代の土器（2）
図版108　弥生時代の土器（3）
図版109　弥生時代の土器（4）
図版110　弥生時代の土器（5）
図版111　弥生時代の土器（6）
図版112　弥生時代の土器（7）
図版113　弥生時代の土器（8）
図版114　弥生時代の土器（9）古墳時代の土器　続縄文土器・縄文時代の土器
図版115　弥生時代の石器（1）
図版116　弥生時代の石器（2）
図版117　弥生時代の石器（3）玉作関連資料（1）
図版118　玉作関連資料（2）ヒスイ関連資料　石製品　鉄製品　遺物包含層出土石器（1）
図版119　遺物包含層出土石器（2）
［細田遺跡　写真図版］
図版120　細田遺跡
図版121　細田遺跡
図版122　細田遺跡
図版123　細田遺跡
図版124　細田遺跡
図版125　縄文時代の土器　弥生終末～古墳前期の土器（1）
図版126　弥生終末～古墳前期の土器（2）
図版127　古代の土器（1）
図版128　古代の土器（2）
図版129　古代の土器（3）
図版130　古代の土器（4）
図版131　木製品
図版132　墨書土器［文字一覧］（1）
図版133　墨書土器［文字一覧］（2）

第Ⅰ章　序　　説

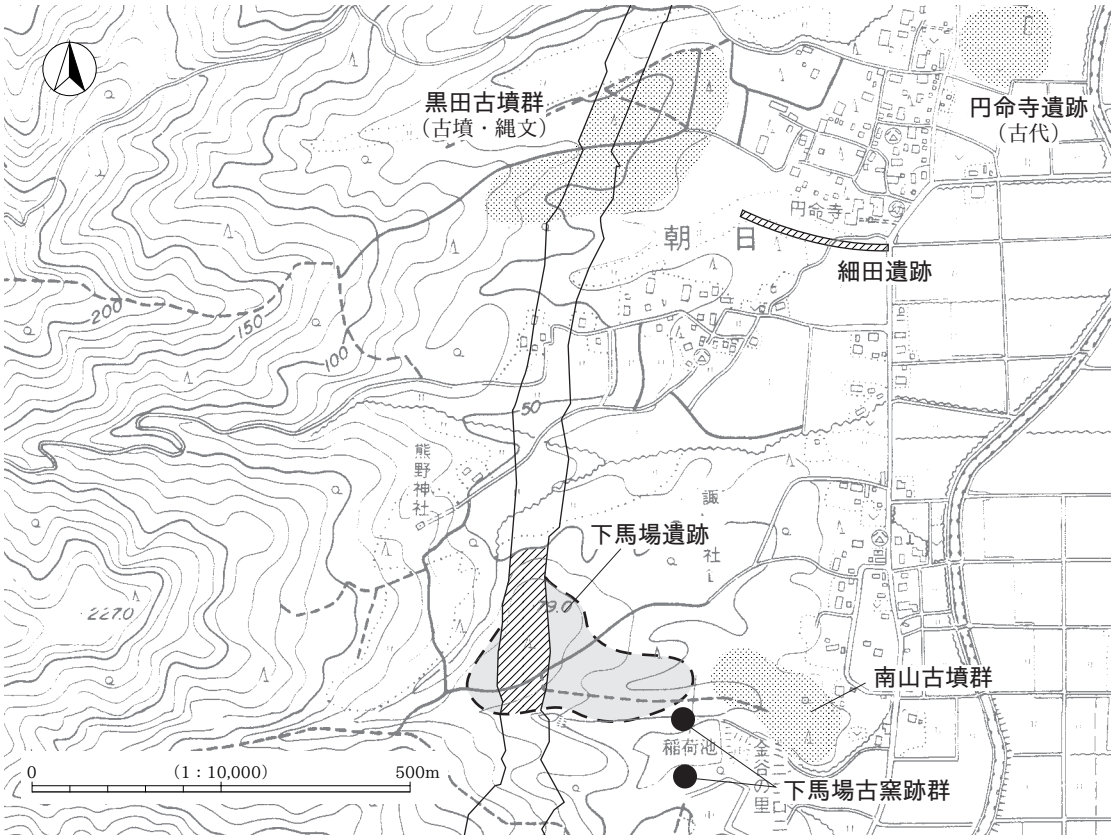
1　調査に至る経緯

上信越自動車道（以下、上信越道）は、群馬県藤岡ジャンクション～新潟県上越ジャンクション間の総延長203kmにわたる高速自動車国道であり、関越自動車道と北陸自動車道を結んでいる。

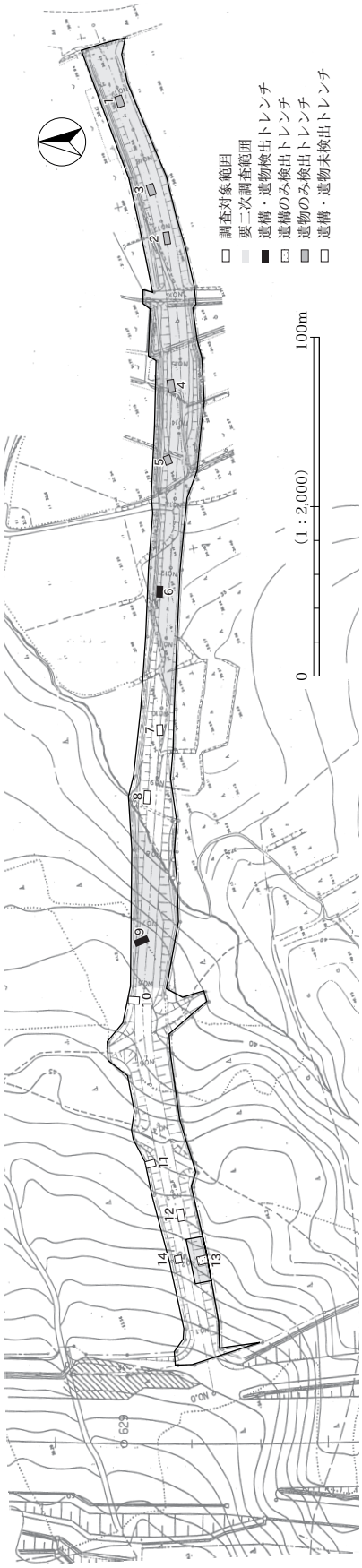
下馬場遺跡・細田遺跡に係る上信越道第11次施工命令区間（新潟県中郷村（現妙高市）～新潟県上越市）は、昭和48年に基本計画が、平成元年に整備計画がそれぞれ決定され、平成２年11月に施工命令が出された。施工命令に先立ち新潟県教育委員会（以下、県教委）は日本道路公団（以下、公団）の依頼を受けて平成２年４月に第11次施工命令区間にあたる三市町村（中郷村・新井市（現妙高市）・上越市）の踏査を実施し、周知の遺跡18か所、新発見遺跡10か所、遺跡推定地25か所について埋蔵文化財調査が必要である旨公団新潟建設局に通知している。

下馬場遺跡については、同一の尾根の続きに「下馬場古窯跡群」が周知されており、窯跡２基のほか、古墳１基、半埋没の住居跡４軒が上越市教育委員会の調査により報告されていた［上越市教委1989］。そのため尾根上16,300m^{2}の範囲については遺跡推定地No.40明日ヶ原牧草地（下馬場遺跡）として一次調査が必要である旨を伝えた。

細田遺跡については、上信越道本線工事のために計画された工事用道路部分である。公団・県教委の事



第１図　上信越自動車道路線図と下馬場遺跡・細田遺跡の位置



前協議により、丘陵上～縁辺部にかけた場所のため遺跡が存在する可能性が高いこと、かつ深度1m前後の掘削を伴う工事であることから、4,750m^{2}について一次調査が必要である旨を伝えた。

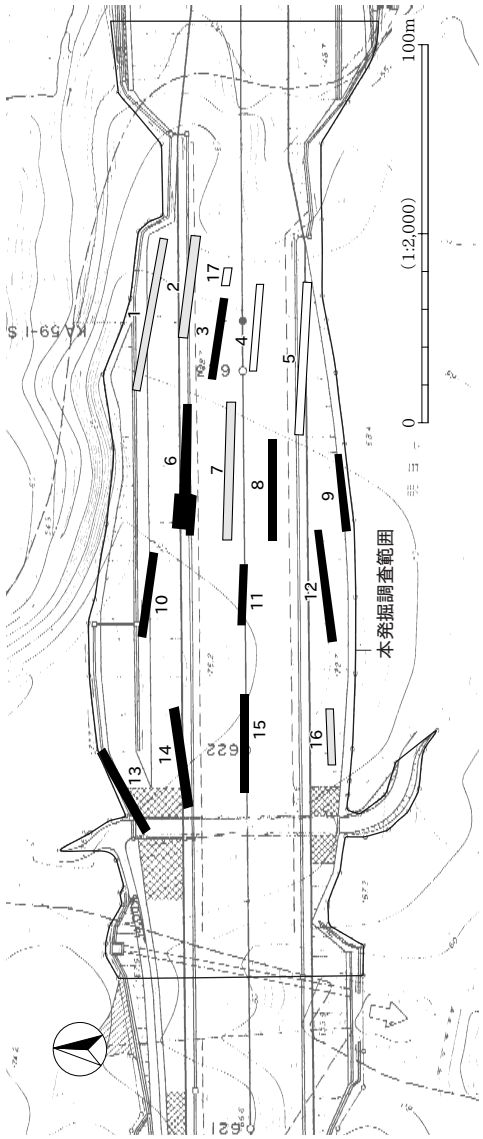
2　調査の方法と経過

A　一次調査

［下馬場遺跡］

平成８年度に16,300m^{2}を対象に調査を実施した。対象地の地形および現況は、丘陵上（平坦面）の牧草地と南北縁辺部の雑木林に分けられる。

牧草地部分の対象地には任意の位置に合計17か所に試掘坑（トレンチ：合計面積860m^2）を設定し、バックホーと人力により堆積土を薄く掘削、精査して遺構・遺物の有無、土層の堆積状況



第２図　下馬場遺跡・細田遺跡一次調査範囲とトレンチ位置図

を確認した。調査の結果、北側の裾部のトレンチ（1～5Tr）では遺物包含層に相当する層が検出されたが、それ以外のトレンチでは牧草地の造成により遺物包含層が削平されていた。遺構は竪穴建物跡３軒・土坑３・炭窯３基が検出された。遺物は縄文土器（縄文早期）・弥生土器・磨石等の遺物が出土した。

丘陵の南北縁辺部の雑木林の調査では、下草を刈り払い、地形の観察を行った。その結果、北側では、円形の落ち込み３か所（径1.5～3m）、断面Ｌ字形の段切りが存在した。南側では法線内に２基、法線外に１基の竪穴建物跡と考えられる落ち込み（窪み）を確認した。東方100mには、上越市教育委員会の調査［上越市教委1989］で確認されている半埋没状態の住居跡（4棟）が存在し、これらと酷似しているため、一連の遺跡である可能性が高くなった。以上の結果から、16,300m^{2}について二次調査を行う必要があると判断した。

［細田遺跡］

平成８年度に4,750m^{2}を対象として調査を実施した。調査は対象地の任意の位置に合計13か所の試掘坑（トレンチ：合計面積98m^2）を設定し、バックホーと人力により堆積土を薄く掘削、精査して遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認した。

調査対象地の地形は、丘陵および丘陵斜面部、丘陵裾部～水田（低地）部分の２つに分けることができる。丘陵部分では、トレンチ９で竪穴建物と考えられる落ち込みを検出し、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器などが出土している。トレンチ13では、黒田古墳群15号墳の周溝の一部と思われる落ち込み１基を検出した[1)]。

一方、水田部分では、間層（砂層）を挟み、上層で古代の須恵器・土師器が、下層で古墳時代前期の土器が多数出土した[2)]。

以上の結果から、黒田古墳群15号墳の周辺70m^2、トレンチ９周辺500m^2、トレンチ１～６周辺2,100m^{2}の合計2,670m^{2}について二次調査が必要であると判断した。

B　二次調査

［下馬場遺跡］

二次調査は平成９年４月21日～11月14日の期間で実施した。

４月21日～25日に調査区を横断する道路北側について重機（バックホー）を使用して表土除去を行った。５月７日から作業員を投入し、一次調査の段階で半埋没住居を確認した道路南側の下草刈りと清掃を行い、現況の地形の落ち込みを記録した。道路北側については遺構確認を開始した。６月上旬には道路南側の表土掘削が終了し、引き続き遺構確認を開始し、竪穴建物のほか、土坑（炭窯を含む）・ピットと思われるプランを確認した。引き続いてプランの半裁もしくはサブトレンチを掘削して遺構の状況の確認を行った。６月下旬にはバックホーにより南北斜面部の表土および遺物包含層の掘削を行った。遺物の出土がごく少量で遺構も検出されなかったことから、この部分についての調査を終了した。７～９月にかけて竪穴建物跡の調査を進めた。玉関係資料の出土も確認されたため、剥片・削片などの微細遺物回収のため、掘削を土嚢袋に全量回収し、調査に並行して水洗・選別を行った。８月30日には現地説明会を実施し、230名の参加があった。９～10月には竪穴建物以外の弥生時代の遺構（土坑・ピット）、縄文時代の遺構

1）丘陵及び丘陵斜面部（センター杭No.1～8）の570m^{2}は、古墳の一部を含むことから黒田古墳群の範囲内とし、同遺跡の調査班が二次調査を実施した［尾崎2002］。

2）丘陵裾部～水田部分（NO．11～19付近）の2,100m^2（上下層合計4,200m^2）を細田遺跡として調査した。

（陥穴状土坑）、時期不明の炭窯の調査、11月上旬には旧石器時代の遺物の有無について試掘調査を行った。11月14日までにすべての作業を終了し、現場を撤収した。

［細田遺跡］

二次調査は平成９年４月14日～８月26日の期間で実施した。

砂の敷設による重機の搬入路を設置ののち、表土除去を開始した。５月上旬から作業員を投入し、丘陵裾部である調査区西側端から順次、遺物包含層の掘削を開始した。水田（低地）部分の東側では、南北両側が耕作中の水田であったため、水の浸み出しが著しく、壁の崩落も起こったため、シートで被覆するとともに、南側に排水溝を兼ねたトレンチを掘削した。遺物が集中して出土した15O'・P'・Q'・R'グリッドを除き、遺物包含層の掘削を６月下旬にほぼ終了し、遺構の精査・遺構掘削を行った。８月26日にはすべての作業を終了し、現場を撤収した。

3　整　　理

出土遺物の水洗・註記作業は、発掘調査と並行して行った。調査現場で作成した遺構図面・写真や記録類の整理、各遺構の台帳（遺構カード）作成など基礎整理作業は平成９年度の冬期間に行った。なお、細田遺跡の木製品については、平成12年度に自然科学分析用試料採取（切片作成）、平成13年度に図化・写真撮影を行った。保存処理は平成14・15年度に糖アルコール含浸処理を行った。

報告書作成整理作業は県教委が埋文事業団に委託し、平成16年度に行った。作業内容は以下のとおり。

遺物：事業団職員が接合・復元、実測個体の選出・図化・トレース・写真撮影（ニコンD100使用）

遺構：原図・仮版作成を事業団職員が行い、トレース・版組を（株）セビアスに委託した。

版下作成・印刷製本：版下作成から印刷製本の作業工程は、印刷用図面・写真・文書編集のデジタル化に適応するため、作業の一部を（株）セビアスに委託した。委託した業務は遺構図面のデジタルトレース・従前まで印刷業者の行っていた版構成作業一般である。埋文事業団では本文・挿図の作成、図版のレイアウト・編集作業を行った。

4　調 査 体 制

A　下馬場遺跡

［一次調査］

調査期間　平成８年12月２日～12月13日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　平野　清明）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総　　括	藍原　直木	事務局長
	管　　理	山上　利雄	総務課長
	庶　　務	泉田　　誠	総務課主事
調査	総　　括	亀井　　功	調査課長
	指　　導	藤巻　正信	調査課調査第一係長
	担　　当	田海　義正	〃　主任調査員
	職　　員	加藤　　学	〃　文化財調査員

［二次調査］

調査期間　平成９年４月21日～11月14日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　平野　清明）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総　　括	藍原　直木	事務局長
	管　　理	山上　利雄	総務課長
	庶　　務	泉田　　誠	総務課主事
調査	総　　括	亀井　　功	調査課長
	指　　導	藤巻　正信	調査課調査第一係長
	担　　当	小池　義人	〃　主任調査員
	職　　員	近藤　克人	〃　主任調査員
		鹿野　弘之	〃　文化財調査員
		江口　志麻	〃　嘱託員

B　細田遺跡

［一次調査］

調査期間　平成８年12月24日～12月25日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　平野　清明）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総　　括	藍原　直木	事務局長
	管　　理	山上　利雄	総務課長
	庶　　務	泉田　　誠	総務課主事
調査	総　　括	亀井　　功	調査課長
	指　　導	藤巻　正信	調査課調査第一係長
	担　　当	小田由美子	新潟県教育庁文化行政課主任調査員
	職　　員	島田　昌幸	調査課文化財調査員
		沢田　　敦	〃　文化財調査員
		山崎　　天	〃　嘱託員

［二次調査］

調査期間　平成９年４月14日～８月26日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　平野　清明）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総　　括	藍原　直木	事務局長
	管　　理	山上　利雄	総務課長
	庶　　務	泉田　　誠	総務課主事
調査	総　　括	亀井　　功	調査課長
	指　　導	藤巻　正信	調査課調査第一係長
	担　　当	杉田　健一	〃　主任調査員
	職　　員	吉澤　　環	〃　主任調査員
		海津　　知	〃　嘱託員

5　整理体制

A　細田遺跡木製品の整理と保存処理

［平成12・14・15年度］

作業内容　平成12年度（実測図作成・分析用切片採取）

　　平成14・15年度（糖アルコール含浸処理）

整理主体　新潟県教育委員会（教育長　12年度　野本　憲雄　14・15年度　板屋越麟一）

整　　理　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総　　括	須田　益輝	事務局長：12・14年度
		黒井　幸一	〃　：15年度
	管　　理	長谷川司郎	総務課長：12・14年度
		長谷川二三夫	〃　：15年度
	庶　　務	椎谷　久雄	総務課班長：12年度
		高野　正司	〃　：14・15年度
整理	総　　括	戸根与八郎	調査課長：12年度
		岡本　郁栄	〃　：14年度
		藤巻　正信	〃　：15年度
	指　　導	鈴木　俊成	調査課資料担当課長代理
	担　　当	三ツ井朋子	〃　保存処理班長
	嘱託員（12年度）	坂上有紀　内山輝美　葛西美津子　北見順子　木山京子　高野智恵子　室塚真弓　吉田珠代	
	嘱託員（14年度）	今野明子　笹崎文子　木山京子　吉田珠代	
	嘱託員（15年度）	今野明子　木山京子　室塚真弓　吉田珠代	

B　報告書作成に係る整理作業

［整理作業：平成16年度］

整理期間　平成16年４月１日～平成17年３月31日

整理主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

整　　理　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総　　括	黒井　幸一	事務局長
	管　　理	長谷川二三夫	総務課長
	庶　　務	高野　正司	総務課班長
調査	総　　括	藤巻　正信	調査課長
	指　　導	高橋　　保	調査課整理担当課長代理
	担　　当	尾崎　高宏	〃　班長
	嘱託員	小倉睦子　笹崎文子　高野智恵子　広野　澄　柳谷栄子　渡辺和子　渡辺容子	

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

下馬場遺跡は上越市大字下馬場字浦山、細田遺跡は同市大字黒田字細田に所在する。両遺跡は高田平野西側の丘陵（西頸城丘陵・山地）付近に位置する。下馬場遺跡はこの丘陵地帯から伸びる標高約70～78mの尾根（台地）上、細田遺跡は標高約30～35mの黒田古墳群の存在する丘陵の裾部から低地（青田川の形成した扇状地）にかけた場所に立地する。

高田平野（以下、平野）は、新潟県の南西部に開けた沖積平野である。平野北縁には海岸線に平行して潟町砂丘、北東部は米山（993m）をはじめとする米山山地が存在し柏崎平野との境をなす。平野北東部から南東にかけては東頸城丘陵があり、南東側では菱ヶ岳（1,129m）、鍋倉山（1,289m）などが連なる関田山脈が長野県との県境をなしている。一方、今回報告の２遺跡の所在する平野西側は丘陵・山地帯であり、北から鉢巻山（412m）、南葉山（949m）、重倉山（1,029m）、大毛無山（1,429m）、火打山（2,462m）、妙高山（2,446m）などの山々が連なる。平野南側は妙高火山の岩屑流・火砕流によって形成された火山山麓丘陵である。

平野にはこれら周辺の山地・丘陵から多くの河川が流入している。平野第一の河川である関川は妙高山系に源を発し北流して日本海に注ぐ。途中、矢代川・青田川・正善寺川などの西側丘陵地帯に源を発する河川、大熊川・別所川・櫛池川・飯田川など関田山脈を源とする河川が合流する。関川をはじめとするこれらの河川が運ぶ大量の土砂により、平野南側を中心とする河川流域には扇状地が発達している。これらの扇状地と平野北縁の砂丘地帯を除けば、平野の大半は氾濫原性低地で占められる。氾濫原性低地は上位の高田面、下位の関川面、関川両岸の関川氾濫原面に区分され、大部分は高田面で占められる。また、高田面上の河川および旧河道沿い（特に保倉川・飯田川流域）では度重なる氾濫により形成された自然堤防の発達を顕著に見いだすことができる。

弥生時代以降の集落遺跡の大半は、高田面および高田面上の自然堤防に立地する。古手の遺跡では、吹上遺跡（上越市大字稲荷：弥生中・後期）、中島廻り遺跡（上越市大字戸野目：弥生後期）、子安遺跡（上越市大字子安：弥生後期・古墳前期）、北割遺跡（上越市大字東中島：古墳前期）、津倉田遺跡（上越市大字中真砂：古墳前期）、下割遺跡（上越市大字米岡：弥生後期～古墳前期）等がある。下割遺跡では古墳時代の遺物包含層のさらに下層（現地表下約4m前後）から縄文後期の土器が試掘調査により出土しており、低地部分での弥生以前の遺跡の存在が明らかとなった［尾崎2003］。

下馬場遺跡付近の丘陵地を構成する表層地質は、泥岩・砂岩の互層堆積物が固結して形成された新第三紀系の能生谷層で、下馬場遺跡の乗る中門前層は能生谷層の上位にある。これらの層はいずれも非常に軟弱で地滑りの多発地帯となる。下馬場遺跡および北側に所在する黒田古墳群の立地する緩傾斜の地形は地滑りにより形成されたものと推測される。

これらの緩斜面を含む丘陵縁辺部には愛の風段丘（標高40m前後）、平山段丘（標高20m前後）と呼ばれる洪積段丘が南北に連なっている。段丘上には頸城ローム層と呼ばれる層が堆積しており、大塚遺跡（上越市大字灰塚）・蛇谷遺跡（上越市大字向橋）・黒田古墳群（上越市大字黒田）・下馬場遺跡（上越市大字下馬場）でこの層内から旧石器が出土している。

2　歴史的環境

A　縄 文 時 代

高田平野（以下、平野）周辺の縄文時代の遺跡は東頸城丘陵および西頸城丘陵上や平野北縁の砂丘上および潟町潟湖群周辺に多く分布している。氾濫原性低地部分では、八反田遺跡（上越市春日山町：早期～後期）、下割遺跡（上越市大字米岡：後期）、池田遺跡（上越市大字木田：晩期）など数は少ないが、現地表から深く埋没して存在することが明らかになっている。

報告の２遺跡が位置する上越市域では縄文時代の遺跡は39か所が報告されている［寺崎2003］。本報告書の下馬場遺跡は縄文時代早期・前期・中期・晩期の遺物、細田遺跡では縄文中期・後期・晩期の遺物が出土していることから遺跡数は41か所となる。

縄文草創期の遺跡は山屋敷Ⅰ遺跡（上越市山屋敷町）で局部磨製石斧、黒田古墳群（上越市大字黒田）、蛇谷遺跡（上越市大字向橋）で有舌尖頭器が出土している。下馬場遺跡においても尖頭器が１点あり、上越市域では３例目となる。

早期以降の遺跡については、各遺跡の存続期間から後期までの遺跡と後期以降の遺跡に２分することができる。草創期～晩期まで長期にわたる遺物が確認されているのは山屋敷Ⅰ遺跡のみであるが、裏山遺跡、大塚遺跡および今回報告の下馬場遺跡では小規模であるが断続的に早期～後期（下馬場は晩期）までの遺物が出土している。

B　弥 生 時 代

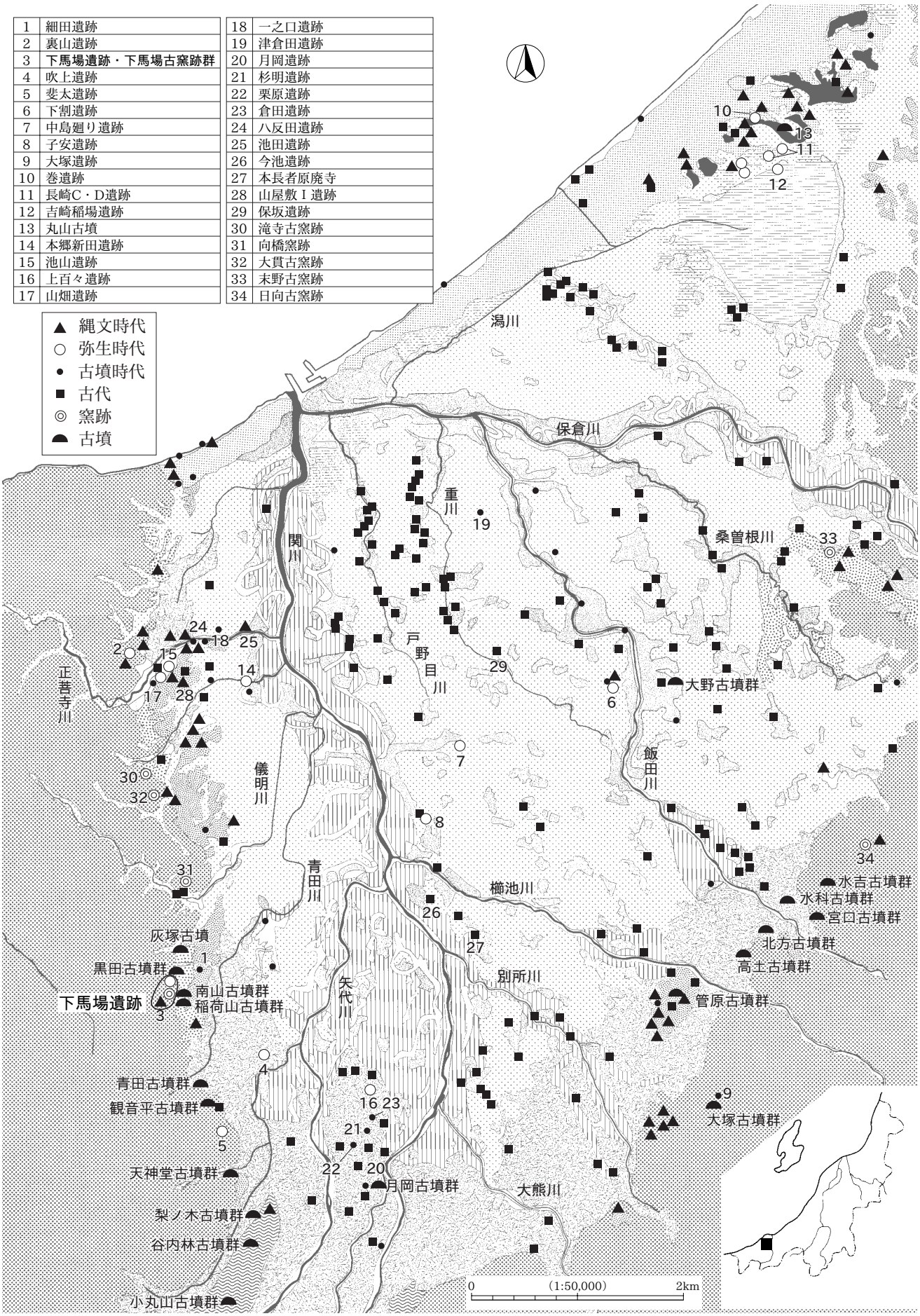
高田平野周辺の弥生時代遺跡は、大きく分けて、潟町潟湖群周辺・関川流域の低地・西頸城丘陵縁辺部・妙高山麓の４つの分布域に分けることができる。

潟湖周辺は、最も遺跡の分布が濃密で、巻遺跡出土のクリス形石弋、坂の下の銅鏃、長崎・吉崎間の石刀などが知られている［室岡1981・1983］が、いずれも表採遺物で、発掘調査が実施されたのは丸山古墳のみである。丸山古墳の墳丘盛土下から竪穴建物跡が検出され、後期後半の土器が出土した［小野・桑原ほか1988］。潟湖周辺は縄文時代以来継続して遺跡が存在しており、内水面が安定した生活資源を供給していたと考えられる。

関川流域の沖積地では前項で述べた、吹上遺跡・中島廻り遺跡・子安遺跡・下割遺跡のほか、本郷新田遺跡（上越市大字藤巻）、池山遺跡（上越市大字藤新田）、上百々遺跡（妙高市大字上百々）がある。吹上遺跡では、弥生中期のさまざまな系統の土器が出土しており、緑色凝灰岩の管玉製作が行われていた。上百々遺跡では中期の栗林式、後期の箱清水式など信州系の土器がまとまって出土した。正善寺川流域の段丘上（平山面）では山畑遺跡（上越市大字岩木）で後期終末期の竪穴住居１棟が確認された。

西頸城丘陵縁辺部には、高地性集落の裏山遺跡（上越市大字岩木）・斐太遺跡（妙高市大字宮内）・下馬場遺跡（上越市大字下馬場）の３遺跡がある。裏山遺跡は弥生時代後期後半の遺跡で、平成７・８年度に上信越道関係で発掘調査が行われ、竪穴建物８基・環濠３条を検出したほか、鋤先６点を含む11点の鉄製品のほか砥石・軽石製研磨具など鉄器使用に伴う遺物が多数出土したことで注目される。斐太遺跡群は1955～58年にかけて東京大学考古学研究室によって調査が行われ、半埋没の竪穴らしき窪みが百両山地区で47か所、上ノ平・矢代山地区で24か所確認された。そのうち６基の発掘が行われ、１基のみが方

1	細田遺跡	18	一之口遺跡
2	裏山遺跡	19	津倉田遺跡
3	**下馬場遺跡・下馬場古窯跡群**	20	月岡遺跡
4	吹上遺跡	21	杉明遺跡
5	斐太遺跡	22	栗原遺跡
6	下割遺跡	23	倉田遺跡
7	中島廻り遺跡	24	八反田遺跡
8	子安遺跡	25	池田遺跡
9	大塚遺跡	26	今池遺跡
10	巻遺跡	27	本長者原廃寺
11	長崎C・D遺跡	28	山屋敷Ⅰ遺跡
12	吉崎稲場遺跡	29	保坂遺跡
13	丸山古墳	30	滝寺古窯跡
14	本郷新田遺跡	31	向橋窯跡
15	池山遺跡	32	大貫古窯跡
16	上百々遺跡	33	末野古窯跡
17	山畑遺跡	34	日向古窯跡



第３図　高田平野周辺の遺跡

形の土坑、その他は方形の竪穴建物であった。また、建物群の存在する平坦面の東西に、南北方向に伸びる環濠が巡っている。平成12～14年度には史跡追加指定・整備を視野に入れた分布・確認調査が新井市（現妙高市）教育委員会により実施され、従前までの周知範囲の南側（矢代山Ｂ地区）で新たに60か所以上の竪穴・竪穴状の窪み、二重環濠、区画溝、方形台状墓等が発見された。吹上遺跡は丘陵から東側へ約1.5km離れた青田川扇状地扇端部の小丘陵状の台地周辺に立地する。調査の結果、弥生中～後期（中期を主体とする）の遺構・遺物を検出した。遺構は環濠・竪穴建物・掘立柱建物・方形周溝墓・土坑墓が確認されている。また中期の玉作り関連の遺構・遺物も確認されている。銅鐸形・銅弋形土製品など祭祀遺物の存在も注目される［木島・笹澤2003］。

C　古 墳 時 代

古墳時代の遺跡は、近年沖積地の開発に伴う発掘調査の結果、資料数が増加している。

前期では、一之口遺跡・子安遺跡・津倉田遺跡・下割遺跡・中島廻り遺跡などが確認されている。墳墓では、観音平古墳群に前方後円墳２基が分布調査により確認された［佐藤2004］。また、沖積地上では子安遺跡で「周溝遺構」２基、中島廻り遺跡では「古墳」２基が検出されており、前期末～中期の大野古墳群（上越市三和区大野）では16基の円墳［吉川2001］、中期の月岡遺跡（妙高市大字月岡）でも３基の円墳が確認された。中期後半～後期では頸城西部古墳群（西頸城丘陵縁辺部・矢代川中流域）と頸城東部古墳群（櫛池川・飯田川扇状地上）と総称される［金子・高橋・秦1980］群集墳が形成される。集落遺跡では初期須恵器などが出土した中島廻り遺跡（上越市平成町）や一之口遺跡（上越市大字木田）など古墳前期から断続的に古代まで存続する遺跡もある。

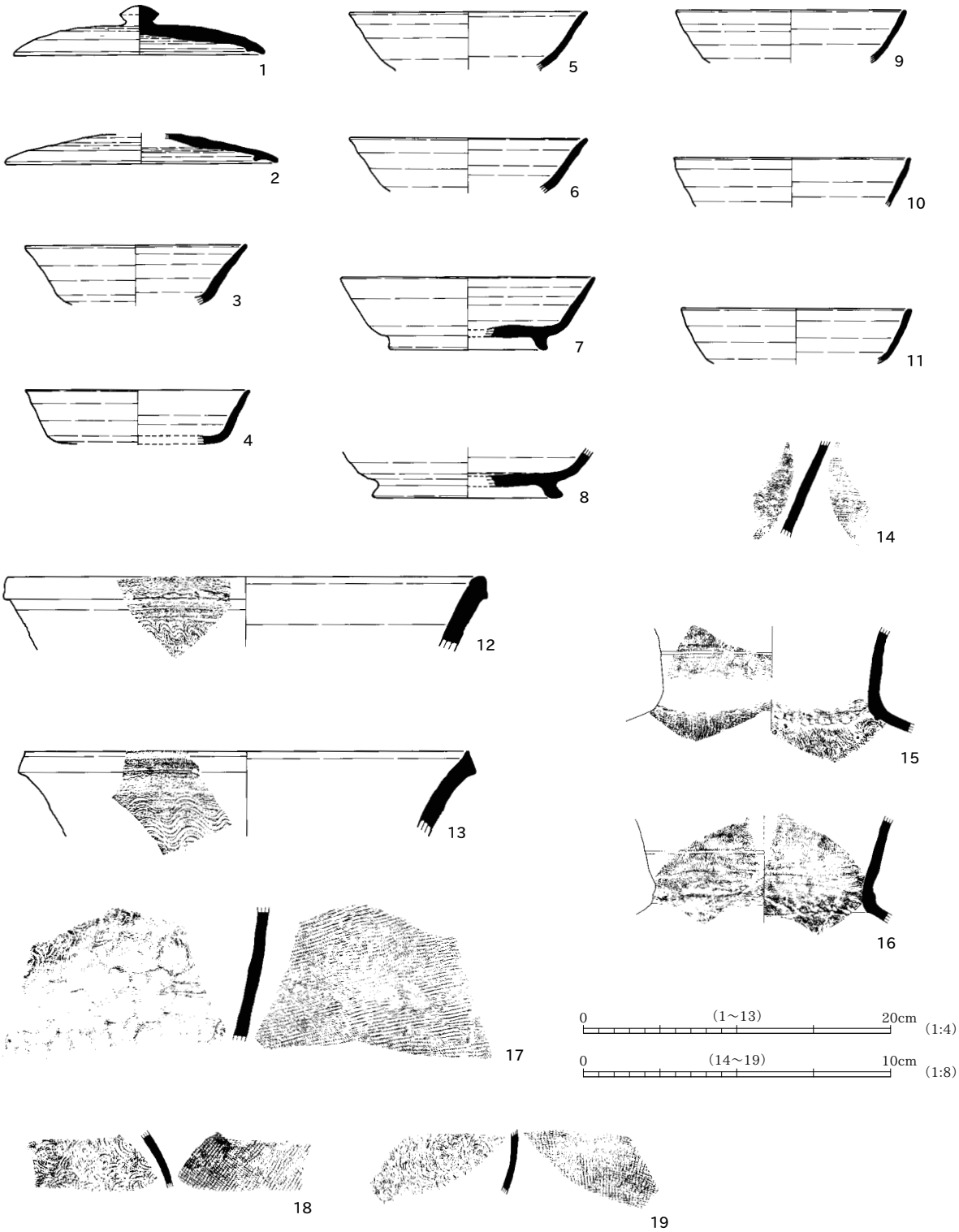
D　古　　代

高田平野周辺は古代の行政区分の「頸城郡」にあたり、当初は越中国に属していたが、８世紀初頭に蒲原・古志・魚沼郡とともに越後国に編入された。編入後、『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」と記されているように国府が置かれ、越後国の行政・文化の中心地となった。沖積平野を中心に数多くの遺跡が確認されている。今池遺跡（上越市大字今池）、子安遺跡（上越市大字子安）、保坂遺跡（上越市大字保坂）、本長者原廃寺など、国府や国分寺との関連性が考えられる遺跡が多く調査されているが、国府・国分寺の特定には至っていない。郡衙（頸城郡）では、栗原遺跡（妙高市大字栗原：大型の掘立柱建物や「郡」や人名の墨書土器、円面硯、銅製帯金具など出土）や倉田遺跡（妙高市大字栗原：倉庫と考えられる総柱建物を検出）が関連遺跡として推定されている。生産関連の遺跡では、須恵器窯跡が多く知られており、下馬場窯跡群（７世紀末）を最古として、西頸城丘陵（北から滝寺・大貫窯跡、向橋窯跡、下馬場窯跡）および東頸城丘陵（末野窯跡群、日向窯跡群）周辺に分布する。

E　下馬場遺跡・下馬場古窯跡群について

下馬場遺跡・下馬場古窯跡群は上越市教委の範囲確認調査［市教委1989］により、須恵器窯２基、半埋没の竪穴住居跡４棟、古墳１基が確認されている（新潟県遺跡台帳には窯跡が「下馬場古窯跡群」、竪穴建物群は「下馬場遺跡」、古墳は「南山古墳群」として登録されている）。次頁に図化・掲載の資料は、平成９（1997）年に窯跡の存在する稲荷池の水抜きが行われ、旧地形が露出した際に汀線付近で表面採取されたものである（整理箱３箱分）。遺物の時期については、口縁端部がかえりをもつ杯蓋の存在から７世紀後半と推測さ

れ、高田平野付近で最古期に位置づけられる窯跡である。採集遺物の大半は甕片で、そのほかには、有台杯・杯蓋なども少量含まれていた。小片のため図化していないが、土師器片（甕か）も若干量見られる。甕片は大きく２種あり、厚手大型のものと薄手のものに分けることができる。中でも薄手のものでは、内面の同心円当て具痕の中心部が円形の突起状になるものが特徴的に見られる。図化にあたっては器種のバラエティ、器形・調整の特徴的なものを選択して行った。



第４図　下馬場古窯跡群表採資料

第Ⅲ章　下馬場遺跡

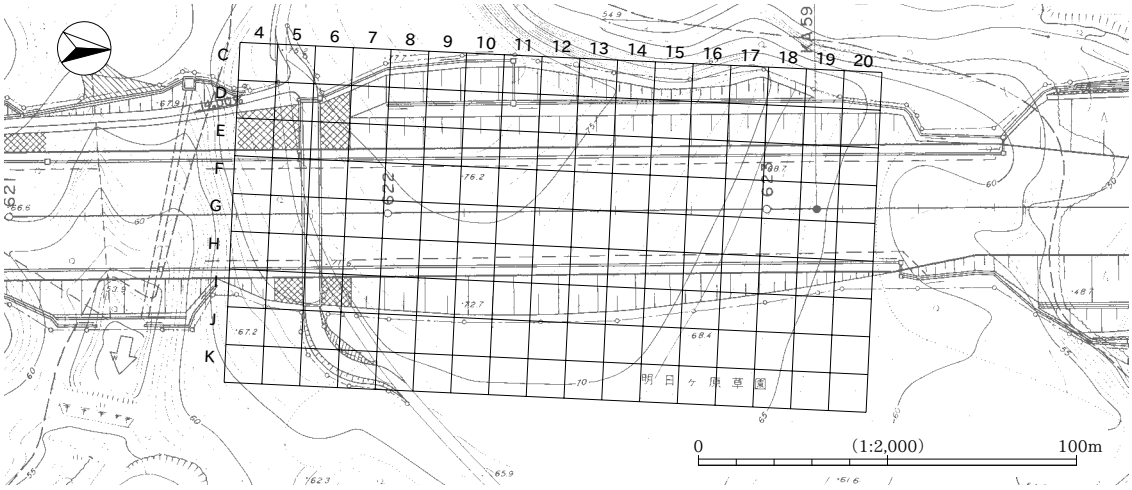
1　調査の概要

A　グリッドの設定

国家座標の数値上で南北方向に100mの距離を持つA点［X=118.930.000、Y=-24.230.00］とB点［X=119.030.000、Y=-24.230.000］を基準に国家座標の軸に合わせてグリッドの軸方向を設定した。大グリッドは10m四方とし、南から北へ算用数字、西から東へアルファベットを昇順に付し、両者を組み合わせて「4D」のように表記した。小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割して算用数字を付し、大グリッドに続けて「13G1」のように表記した。

国家座標値は旧座標系を使用しており、新しい座標系との対応関係は以下の表のとおりである。

杭	日本平面直角座標系第Ⅷ系（旧座標）	新座標　JGD2000系（計算値）
A点：8G杭	［X=118930.000、Y=-24230.000］	［X=119280.7651、Y=-24510.7473］
B点：18G杭	［X=119030.000、Y=-24230.000］	［X=119380.7635、Y=-24510.7472］



第５図　下馬場遺跡グリッド設定図

2　地形と基本層序

遺跡は西頸城丘陵の東端が沖積地に接する台地あるいは尾根に立地し、南北両端は比較的急勾配の斜面となっており、沢へとつながる。遺跡の中心となる台地は最高点が標高であり、西から東へ緩やかに傾斜している。この丘陵（台地）は砂・礫・ローム質土の堆積物で構成されており、本来は土壌が丘陵全体を覆っていたと考えられるが、後世の牧草地造成により削平を受けているため、遺存状況は良くない。以下に示す基本層序が残存するのは遺跡南縁の一部のみである。その他はⅡ層が完全に削平され、Ⅲ層も上部が削りとられていた。

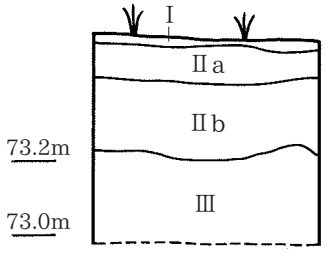
Ⅰ　：暗褐色土。表土。未分解の腐植からなる。植物の根が密生する。

Ⅰｂ：暗褐色土。耕作土および牧草地造成土。黄褐色土がまだらに混じる。

Ⅱａ：黄褐色土。炭化物粒（径2mm以下）をごく少量含む。植物の根が密生する。

Ⅱｂ：褐色土。炭化物粒（径3mm以下）を少量含む。ややしまりの弱い土層で、縄文時代早期～中期、弥生時代の遺物包含層。

Ⅲ　：黄褐色土。遺構確認面としたローム質土。ごく微細な黒色粒子（スコリア？）をごく少量含む。しまりがある。



第６図　4D25・4E1付近基本層序

3　遺　　構

A　概　　要

下馬場遺跡からは弥生時代後期後半の竪穴14軒・土坑16基・性格不明の落ち込み３基・ピット４基を検出した。その他、遺物を伴わないため詳細な時期は不明であるが、丘陵北側縁辺部に15基からなる縄文時代の陥穴状土坑列、土坑１基を検出した。また、円形および方形の炭窯（伏焼窯）８基を確認した。

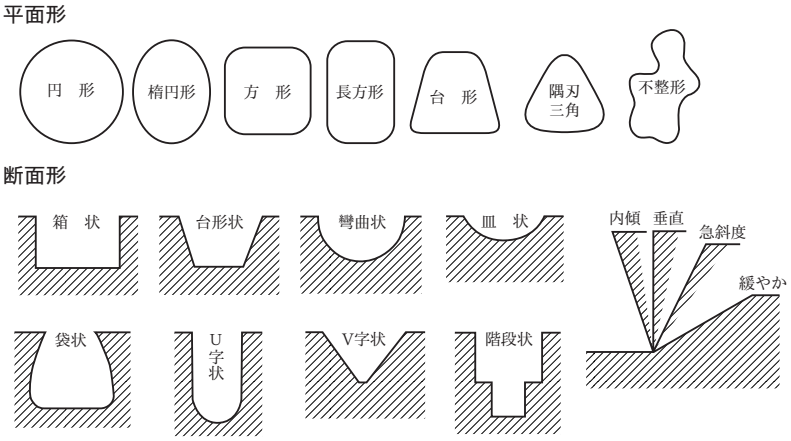
竪穴建物は平面形および主柱穴の配置から①隅丸方形で主柱穴４本のもの、②隅丸長方形で主柱穴２本のもの、③円形で柱穴を環状に配するもの、④その他・不明のもの、以上大きく４つに分類することができる。各竪穴建物・土坑はすべて単独で存在し、切り合い関係を持たない。

B　遺構の計測・記述方法

遺構の説明には観察表・本文・図面図版・写真図版を用いる。遺構の呼称は遺構種類・遺構番号の順に遺構の種類ごとに１から通し番号を付した。個々の遺構の位置・規模・形状・出土遺物・埋土の状況・切り合い関係などについては巻末の観察表に記載しており、本文中では特別な場合を除き個々については触れない。平面の形状・計測値については確認面での数値であり、深度は確認面のうら高い箇所からの深度を採用している。遺構の平面形・断面形の呼称は「奈良崎遺跡」［春日2002］の分類に基づき記載した（第７図）。竪穴の主軸については、長軸方向を主軸方位とした。方位は北から東西に振れる角度を「Ｎ－○○°－Ｅ（またはW）」と表記した。

遺構の図面図版は全体図と建物跡・土坑などの個別図、断面図、エレベーション図（横断面図）で構成する。断面図の土層註記は農林水産省農林水産技術会議事事務局・財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帳』を使用し、統一的な色の記述を行った。

遺構の写真は、調査の過程に応じて、検出状況・土層の断面・遺物出土状況・完掘状況等を撮影しているが、重要な遺構、残存状況の良好なもの、遺構の特徴を良好に示すものなどを選択的に掲載している。



第７図　遺構形状の分類と呼称　〔春日2002から転載〕

C　遺構各説

1）竪穴建物

1号竪穴（図版２・３／写真図版60・67）

11Iグリッドに位置する。地形的には南西から北東の方向に向かって緩やかに傾斜する場所に立地する。堆積土断面図のライン（A－A'・B－B'）で４分し、北東をＡ区とし、時計回りにＡ～Ｄ区と区分する。Ａ・Ｂ区（東側）は削平されており、壁の立ち上がりは確認できなかったが、柱穴の配置状況から平面形は直径８～8.5mの円形であると推測される。柱穴は円形に７基を配している。ピット５－ピット７－ピット８－ピット１それぞれの柱間は約3mあり、その他が約２～2.5mであるのに対して広くなっている。西～南西側では幅約20cmの壁溝があり、壁際および壁溝内からは、土器類のほか多数の管玉製作の工程品が出土した。また、Ｄ区では炭化した板材を検出した。削平されていることもあり床面の残存状況はあまり良好ではなく、硬化も認められなかった。炉跡および焼土の痕跡は確認できなかった。

2号竪穴（図版４・５／写真図版60・67）

9G・H、10G・Hグリッドに位置する。地形的には北西から南東の方向に向かって緩やかに傾斜する場所に立地する。堆積土断面図のライン（A－A'・B－B'）で４分し、北東をＡ区とし、時計回りにＡ～Ｄ区と区分する。Ｂ・Ｃ区が削平されており、壁の立ち上がりは確認できなかったが、壁および幅15～40cmの壁溝が残存するＣ・Ｄ区の形状から、平面形は一辺9mの隅丸方形であると推測される。遺構の中心には、直径約30cm、深さ約7cmの掘り込みを持つ炉跡を検出した。Ｃ区では直径約25cmの範囲で床面の赤化部分を確認した。柱穴は炉を中心として対称形に４本配している。ピット５～７は貯蔵穴であると考えられる。北側～西側～南側では壁溝を確認した。遺物は壁際および壁溝内からは土器類のほか、砥石類が出土している。

3号竪穴（図版５・６／写真図版61・67・68）

10Eグリッドに位置する。地形的にはほぼ平坦面に立地する。堆積土断面図のライン（A－A'・B－B'）で４分し、北東をＡ区とし、時計回りにＡ～Ｄ区と区分する。Ａ区（北東側隅）とＢ区（東側）で、削平により途切れる以外は、壁溝が全周する。一辺約5mの隅丸方形の平面形を持つ。柱穴は遺構の中心から東に若干ずれた位置で対称に４本配している。遺構の中心には長軸40cm、短軸25cm、深さ8cmの浅い掘り込みを持つ炉跡を検出した。炉跡は壁面の橙色化が見られ、堆積土中には多数の焼土・炭化物を含んでいた。また、中心の炉以外に、明確な掘り込みを持たないが、焼土の集中範囲がＡ区（北東隅）１か所、Ｂ区（南東隅）２か所、Ｃ区（西側）１か所、Ｄ区（西側）１か所で確認している。焼土は床面よりも盛り上がったようにあり、焼土直下の床面（地山）は赤色化していないが、被熱により硬化していた。ピット５は貯蔵穴で直径約56cm、深さ40cmで、断面が階段状に一段窪む。Ｄ区西～北側の壁際付近から土器類がまとまって出土している。

4号竪穴（図版７・８／写真図版61・68）

8D・E、9D・Eグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（A－A'・B－B'）で４分し、北東をＡ区とし、時計回りにＡ～Ｄ区と区分する。床面は北から南に緩やかに傾斜している。幅10～25cmの壁溝を持つ。Ｂ区東側は削平により壁溝は検出できなかった。長軸6.2m、短軸5.7mの隅丸方形の平面形を持つ。柱穴は建物中心から対称に４本配している。また、建物中心では長軸44cm、短軸40cm、深さ27cmの掘り込みを持つ炉跡を検出した。ピット５は貯蔵穴で長軸86cm、短軸64cm、深さ34cmの平

面隅丸長方形で、北側に階段状の段が存在する。床面直上に堆積する８層中からは、建物の構造材および屋根材と思われる角材・板材・棒材などの炭化材が散乱状態で出土した。Ｄ区北西隅では、板材・棒材のまとまりが確認できる。炭化材の間から出土した土器類にも二次焼成痕が認められることから焼失建物であると推測される。炭化材の一部について樹種同定を行ったところ、板材はクリ・キハダ、角材はクリが用いられている。隣接する裏山遺跡［小池ほか2000］で竪穴建物跡の樹種同定が行われており、６号ではクリ、７号ではキハダという結果が示されており、当竪穴はこれらと類似した材を使用していることが確認された。

５号竪穴（図版９／写真図版62・69）

8F・Ｇグリッドに位置する。埋土断面図のライン（Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'）で４分し、北東をＡ区とし、時計回りにＡ～Ｄ区と区分する。Ａ・Ｂ区側は削平により壁の立ち上がりの遺存状況が良好でないが、長軸4.8m、短軸4.5mの隅丸方形の平面形を持つ。床面は東から西に緩やかに傾斜している。壁際には、幅約20～25cm、深さ約10cmの壁溝が巡る。Ｂ～Ｄ区の壁溝の内側には幅25～50cmの平坦面（棚状遺構）が存在した。柱穴は建物北半（Ａ・Ｄ区）で２基を確認したが、南半（Ｃ・Ｄ区）の対称位置で柱穴を確認することはできなかった。建物中心から北東寄りでピット４を検出した。直径約50cm、深さ18cmで、堆積土中に炭化物・焼土を含むことから掘り込みを持つ炉と思われるが、壁の橙色化は認められない。南東（Ｂ区）の壁のラインに平行して平面楕円形のピット３を検出した。床面の硬化部分は確認できなかった。

６号竪穴（図版10／写真図版62・69）

7E・Ｆグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'）で４分し、北東をＡ区とし、時計回りにＡ～Ｄ区と区分する。斜面下方に位置するＡ・Ｂ区は削平により壁の立ち上がりの残存状況が良くない。平面形は長軸推定4.6m、短軸4.0mの隅丸方形（長方形に近い形状）である。Ａ・Ｃ・Ｄ区では幅約10～25cmの壁溝を検出した。柱穴は遺構の中心から長軸方向に２本対称に配している。遺構の中心に掘り込みを持つ炉跡を検出し、Ｂ区では貯蔵穴と思われるピット３を検出した。ピットの堆積土中から壺、台石が出土した。ピット北側からは管玉製作の工程品のほか、チャート・玉髄などの原石（小礫）が出土した。Ｐ（土器）１の壺形土器内部にチャート・玉髄・緑色凝灰岩などの原石が入った状態で出土した。本遺構では鉄石英・緑色凝灰岩の管玉工程品よりも、チャートなどの小礫の持ち込みが顕著に認められるが、用途等については不明である。また、Ｃ区南東隅では床面に白色の粘土塊があり、北側から大型の砥石が出土した。粘土については、竪穴の貼り床、鍛冶炉などの火床遺構の一部（炉床の貼り粘土）などの可能性があるが、検出範囲が狭く、被熱痕跡等がないことから用途・機能については不明である。

７号竪穴（図版11・12／写真図版63・69・70）

5D、6Dグリッドに位置する。堆積土断面図・横断面図のライン（Ａ－Ａ'・Ｅ－Ｅ'）で４分し、北東（東）をＡ区とし、時計回りにＡ～Ｄ区と区分する。斜面下方のＡ・Ｂ区（東～南東側）は削平により壁の立ち上がりが残存していないが、直径8.8m（Ｅライン）の円形の平面形を持つと思われる。柱穴（ピット１・２・５～７）を円形に配している。ピット３・４については、直径が40cm以上と他よりも大きく、位置的にも中心方向にずれるため主柱穴ではない可能性が高い。中心からは直径50cm、深さ約10cmの掘り込みを持つ炉を検出した。壁の立ち上がりが残存していたＣ・Ｄ区の壁際から土器類のほか、鉄石英の管玉工程品が出土した。

８号竪穴（図版13／写真図版63・70）

4Dグリッドに位置する。削平および木根の撹乱により遺構の残存状況は良好ではなく、底部付近がわ

ずかに残るのみである。西～北側では壁の立ち上がりがわずかに残存している。北西側の隅、西側の壁際でスタンプ文を持つ器台などがまとまって出土した。柱穴・炉跡などは検出できなかった。

9号竪穴（図版13・14／写真図版64・70）

5F・G、6F・Gグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（A－A'・B－B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。東側～南側（A～C区）の壁の立ち上がり・床面は削平により残存していない。平面形は長軸4.4m、短軸3.4mの隅丸長方形である。柱穴を長軸方向に2本対称に、中心からは南よりに配置している。C区では、2か所で床面の硬化と焼土粒の集中範囲が認められた。焼土1は直径約20cmの円形、焼土2は長軸約50cm、短軸35cmの楕円形の範囲である。焼土は3号竪穴と同様に床面よりも盛り上がった状態で検出され、焼土直下は赤色化していないが硬化している。ピット3は貯蔵穴であると思われる。遺構北側と南東隅で一括土器が出土した。

10号竪穴（図版14／写真図版64・70・71）

8Iグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（A－A'・B－B'）で4分し、北東（東側）をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。斜面下方にあたるA・B区は壁・床面が削平により消滅している。ピット1の位置関係から推測すると、長軸方向に主柱穴2本を持つ長方形の建物の可能性が高い。焼土1については位置・規模から建物中心の炉跡の可能性がある。焼土1以外にも、床面の硬化・焼土粒の集中範囲を2か所（焼土2・3）で検出した。焼土は床面よりも盛り上がった状態で確認されている。また、竪穴D区の堆積土1・2層およびピット1の埋土から炭化米合計247粒、総重量1.64gが出土した。北東側の壁際から貯蔵穴と思われるピット2を検出した。

11号竪穴（図版15・16／写真図版65・71）

5Iグリッドに位置する。一次調査の段階から窪みとして認識されていた半埋没の竪穴である。堆積土断面図のライン（A－A'・B－B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。遺存状況は良好で、壁際から平面輪状に埋没していった状況が土層から認識できる。柱穴を建物中心から4本対称に配置している。柱間は2～2.5mである。壁溝は幅約20～30cmで、北東～東側を除く範囲で検出した。建物中心からは炉跡は検出できなかったが、建物西側のD区で浅い掘り込みを持ち、床面の硬化・焼土粒の集中する範囲を5か所で確認した。規模および平面形は、焼土1は直径40cmの円形、焼土2は長軸60cm、短軸45cmの楕円形、焼土3・4は直径約30cmの円形、焼土5は長軸約50cmの楕円形（撹乱により不明）である。いずれも床面よりも盛り上がったような状態で確認されており、焼土直下は硬化している。貼り床等の床面の硬化は確認できない。北東隅では壁のラインに平行して掘られた長楕円形のピット5を検出した。土器はB区（南東側）・D区（西側）の壁際で集中して出土した。

12号竪穴（図版17・18／写真図版65・71）

6・7Jグリッドに位置する半埋没の竪穴である。堆積土断面図のライン（A－A'・B－B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。長軸6.2m、短軸4.9mの隅丸長方形のプランを持つ。幅約15cmの壁溝が北東～東側を除き全周する。柱穴を長軸方向に2本対称に配している。竪穴中心から直径約25cmの浅い掘り込みを持つ炉跡がある。竪穴北側隅の壁際から土器がまとまって出土した。堆積土からは玉作関連の遺物はほとんど出土しなかった。東側の壁際から貯蔵穴と思われるピット3を検出した。

13号竪穴（図版18・19／写真図版66・71・72）

5Hグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（A－A'・B－B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。長軸5.9m、短軸4.9mの隅丸長方形のプランを持つ。幅約15cmの壁溝を北

半のみで検出した。柱穴を長軸方向に２本対称に配している。建物中心には長軸55cm、短軸45cmの不整楕円形のプランを持つ炉跡がある。竪穴北側には直径50cmの浅い窪みを持つ床面の硬化・焼土の集中範囲を２か所で確認した。竪穴北東側で土器・砥石が出土し、北西側隅で針状鉄製品が出土した。

14号竪穴（図版20／写真図版66・72）

5J、6Jグリッドに位置する半埋没の竪穴である。道路用地外を含めた調査着手前の現況測量では深さ約30cmの窪みが見られた。大半は用地境界外のため、北西側の隅の一部を検出したのみである。窪みの形状、調査によるコーナー部の状況から一辺約5m程度の竪穴と推測される。埋土からは、刺突文を持つ鉢や赤彩の鉢などが出土している。

2）弥生時代の土坑・性格不明遺構・ピット

土坑（図版21～24／写真図版73～75）

ピットとの区分は明確ではないが、長軸60cm以上のものを土坑とした。計測値がそれ以下でも土坑としたものもある。土坑は長軸（直径）130cm前後のSK1・2・3・4・6・7、断面形状が袋状のSK17・18・19に分類される。SK1・2、SK3・4は２基の規模の類似した土坑が比較的近接して存在することから２基を１群として捉えることができる。SK6・7・17・18についてもさらに区分できる可能性があるが群として捉えることができる。堆積土中からは遺物はほとんど出土していないが、SK7・17・19の堆積土から弥生土器が出土した（315・327・328）。

これらの土坑については、石川県押水町冬野遺跡群等で確認されている「大型土坑」［北野1991］に形態等の共通性が認められる。機能・用途については貯蔵穴の可能性が指摘されている［三浦1980］。

一方、SK17～19の袋状土坑については「袋状貯蔵穴」として高床式倉庫と並存・補完する穀物の貯蔵庫の可能性について温度・湿度の測定実験などの結果から指摘されている［杉本2004］。九州、山陰・中国地方の丘陵・台地上の集落遺跡で大規模に群集して検出されている。貯蔵穴は、竪穴建物・掘立柱建物・環濠などと同様に集落の重要な構成要素の１つとして捉えることができる。

土坑内から植物遺体等は確認できなかったため、貯蔵物は特定できないが豪雪地帯での貯蔵物が西日本の事例と同様に穀物類であるかどうかも含め、今後の事例の増加を待ちたい。

ピット（図版22～24）

ピット（Pit）14・16・21・23の４基を検出した。それぞれのピット周辺部の精査を行ったがいずれも単独で検出されており、柵や掘立柱建物等を構成するような連続性・規則性は認められなかった。

性格不明遺構（図版21・22／写真図版74・75）

SX5・8・13・17がある。SX5は浅い皿状、SX8は長楕円形で底面南西側端にピット状の落ち込みを持つ。SX8では堆積土中から多数の土器が出土した。甕の形態から見て遺跡内で最も新しい時期（漆町編年５・６群か）の遺構であると推測される。

3）木　炭　窯（図版24／写真図版76・77）

伏焼窯とも呼ばれる簡易的な炭窯である。平面形状が方形（隅丸方形）のCSK1・2・4・8と円形のCSK3・5・6・7がある。CSK2出土の炭化物は放射性炭素年代測定を実施したところ、1,240±40BPで、古代に属するとの結果が得られた。

4）縄文時代の土坑（図版25～27／写真図版77～79）

16基の土坑を検出した。JSK16を除く、15基はいわゆる陥穴土坑であり、遺跡北側で2列の群として捉えることができる。いずれも覆土から土器類などの遺物が出土していないため時期は不明である。覆土は概して黒褐色土を主体とし、部分的に壁の崩落によると思われる黄褐色系土がブロック状に混じる。底面付近では微細な炭化物を含んでいた。

陥穴土坑A列（JSK1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12）

列の西側では等高線と平行に近いが、JSK3よりも東側では等高線に直交するように弧を描く。JSK7・6・12は平面形が円形に近い。いずれも壁の立ち上がりは垂直に近く、JSK12では底部のピットは検出できなかった。

陥穴土坑B列（JSK13・14・15）

等高線と直交するように弧を描く。平面形は円形に近い。断面形は台形状に近い。いずれも底部の小ピットを確認できなかった。

JSK16

上部は削平されているため底部付近しか残存していなかった。堆積土は炭化物を多く含み、底部からは若干浮いた状態であるが、中央付近から礫が1点出土した。

4　遺　　物

A　遺物の概要と記述の方法

遺物の説明には観察表・本文・図版（図面・写真）を用いる。出土遺物には弥生時代（後期～終末期）の土器・石器・石製品（管玉製作工程品含む）・鉄製品、続縄文土器、旧石器、縄文時代（早・前・中・後・晩期）の土器、縄文時代の石器が出土している。遺物包含層が削平されていたこともあり、大半が弥生時代で、竪穴建物などの遺構出土遺物である。図化にあたっては遺構出土のもの、残存状況の良いもの、出土例の少ないものを任意に選択し、図化したすべてについて観察表に記載した。竪穴建物出土石器のうち、床面の直上で出土した遺物（図面図版遺物出土状況図でS.○○としたもの）については掲載・未掲載の別なく竪穴ごとの一覧表を作成し、種別・法量等を記した。観察表は土器・石器など遺物の種別により観察項目が異なるため種別ごとに作成した。観察項目は出土位置・計測値のほか、土器については製作痕跡（調整痕や黒斑等）や消費・使用痕跡（被熱・摩耗）など、ライフヒストリー的な観察［川畑1999］も行った。石器については消費・使用痕跡まで触れることができなかった。個々の遺物の詳細は基本的に観察表に記すこととし、特記事項のあるもののみ本文中での説明・記述を行う。

B　弥 生 土 器

1）文様・調整・胎土

a　文　　様

下馬場遺跡出土土器のうち、有段口縁甕は約3割（口縁部残存率）あるが、凹線文・擬凹線文などの文様が入る甕はそのうちの約1割前後しか確認することができない。西谷遺跡［滝沢1992］、裏山遺跡［小池ほか2000］などとも通有の状況が見られる。その他の文様では、壺・高杯・器台類に刺突文・圧痕

文・スタンプ文などが施される。以下に文様種別ごとに概要を記す。

①凹線文

布・指・革などを用い、横ナデの手法により施した沈線状の文様。複数の沈線が平行するような場合でも１本ずつ施文される［小林・佐原 1964］。新潟県内における凹線文については裏山遺跡における分類［小池ほか前掲］があり、凹線文Ａ～Ｃ類に区分している。大半が「凹線文Ａ類（横ナデ手法による起伏の弱い）」であるため細別を行っていない。口縁端部の摘み上げや有段口縁の稜部分の強調による沈線状の窪み（強い横ナデにより生じる）は凹線文には含めていない。

②擬凹線文

擬凹線文の施文手法について次の３手法が指摘されている［谷内尾 1983］。①ヘラ状工具のヘラ先で１本ずつ数条にわたって施文する。疑似擬凹線文［品田 1990］とも呼ばれる手法・文様である。②細かい切り込みを入れた櫛歯状工具で施文する。③板材の柾目小口面に生じる自然面の凹凸をそのまま利用して施文する。擬凹線の形態的な分類については滝沢の分類を参照した［滝沢 1993］。

擬凹線文Ａ類　沈線は比較的幅広くシャープで施文後の口縁部外面が平坦なもの。

擬凹線文Ｂ類　沈線幅はＡ類に比して狭く、施文後の口縁部外面は丸みを帯びる。

擬凹線文Ｃ類　沈線間の幅が狭いもの。

③刺突文・圧痕文・沈線文

紡錘状　板状もしくはヘラ状工具の小口端部を押圧したもの。滝沢「刺突文Ａ類」に相当するもの。裏山遺跡同様に押圧後、工具を反時計回り（左回り）方向に短く引っぱるものが多い。

点　状　列点状の刺突文が見られる。滝沢「刺突文Ｅ類」に相当するもの。

その他　爪形の圧痕文（26）、Ｖ字状の刺突文（324）のほか、313 は貝殻状の原体による刺突文か。

沈線文　出土量は少ない。213 は山形の集合沈線を持つ。128 では刺突文と組み合わされる。

④スタンプ文

渦文と鋸歯文を併用するもの（220・339）、渦文のみのもの（221・342）がある。

⑤その他

貼り付けによる棒状浮文を持つもの（324・338）、貼り付けの突帯上に凹線文を施す 238 などがある。また、明確な文様は確認できなかったが、赤彩品の中には表面全体ではなく、173 のように部分的（受部下部・脚部は棒状？）に彩色するものが見られた。

b　調　　整

土器群は全体的に風化が進み、残存状態はあまり良好ではない。土器表面の調整痕跡や赤彩の有無が不明瞭なものも多く見られた。甕・壺類に多く見られるハケメは、目の粗い条線状のものと、目の細かなものの大きく分けて２種類の原体が存在すると思われる。甕・壺類の内面や底部外面に多く見られるナデのうち、ハケメと同じ原体を用い土器表面の平滑化を主に指向するものを「スリナデ」とした[1]。その観点で、主にヘラ状工具を用い、器壁を薄くすることを目的とするケズリ調整とは区別して記載した。甕類ではケズリ調整をするものは少なく、行っていても内面下部など部位が限られている場合が多い。

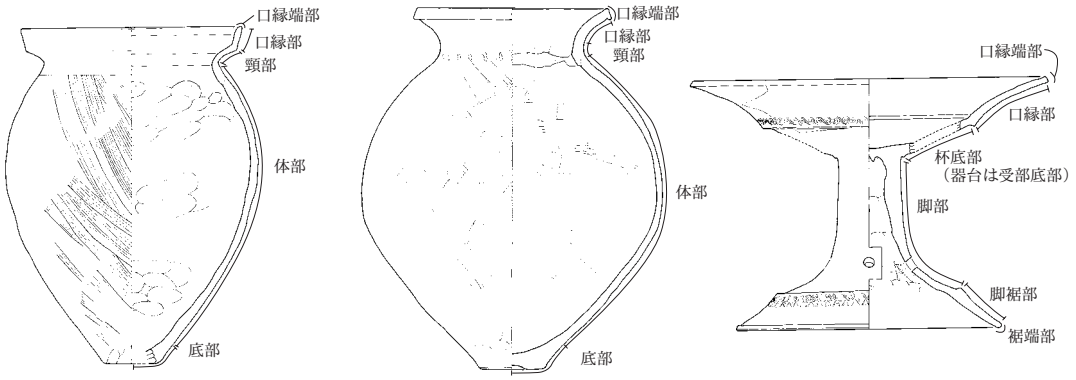
1）「スリナデ」については、寺沢薫がいわゆる「ハケメ」「ナデ」を含めた細分案を提示している［寺沢 1980］。以前までの「ハケ（指）ナデ」との混同を防ぐため、ハケメ状の工具を用いた器面のナデ付けに限定して「スリナデ」とここでは呼称する。

C　胎　　土

各器種を通じた胎土の特徴は、白色の風化礫の混入が特徴的である。ミガキ調整される壺・高杯・器台などでは表面上目立たないが、割れ面の観察では礫の混入が目立つ。観察表で白色粒子（白と記載）としたものは直径1mm以下の混入物、小礫としたもの（直径5mm以下）はいずれも風化礫由来の混入物であると思われる。

2）分　　類

甕・壺・鉢・蓋・高杯・器台などの大別器種に分類後、細分を行った。土器の図化が主に口縁部破片を中心に行っているため、分類も口縁部の形態や調整に基づいている。遺物の大きさによる分類も本来は必要であるが、資料数が限られているため分類の要素としては含めていない。土器各器種の部位名称は第8図のとおりである。



第8図　土器の部位と名称

a　甕 形 土 器

甕A類　口縁部有段で外面に（擬）凹線文を施すもの。口縁部の形状から3つに細分される。A1類は段が明瞭で、口縁部が直線的に上方に伸びるもの。A2類は段が明瞭で、口縁部が直線的にやや外傾して伸びるもの。口縁端部は面を持つものは290のみでその他はすべて丸くおさめている。A3類は段が不明瞭で、内面の段部分の屈曲がないもの。

甕B類　口縁部有段で無文のもの。口縁部の形状で6つに細分される。甕の中でも最も出土量が多い。B1類は段が明瞭で、口縁部が直立もしくは外傾して直線的に伸びるもの。B2類は段が明瞭で、外反して伸びるもの。B3類は段が明瞭で、頸部が短く、口縁部が比較的長くのびるもの。B4類は段が弱く不明瞭で、口縁部が外傾して直線的にのびるもの。B5類は段が弱く不明瞭で口縁部が短く外反するもの。B6類は段が弱く不明瞭で、口縁部が直立して直線的に伸びるもの。

甕C類　口縁部が断面「く」の字状のもの。6つに細分される。C1類は口縁端部を上方を摘み上げ、外面に面を持つもの。有段甕とも呼ぶことも可能な器形であるが、横方向の強いナデにより面が形成されたものと考えられる。C2類は口縁端部を上方に摘み上げ、下方に垂下するもの。C3類は口縁端部を上方に摘み上げ、内傾する面を持つもの。C4類は口縁端部を上方に弱く摘み上げ、内傾する面を持つもの。C4類に比して端部の面は狭い。C5類は頸部外面の屈曲が不明瞭で、外傾して直線的に伸びるもの。C6

類は口縁端部を丸くおさめるものを一括した。

甕D類　内湾気味の口縁を持ち、肩部があまり張らず、縦長の器形のもの。いわゆる「八幡山式」の範疇で捉えることができる［渡邊2001］、東北系と北陸系の折衷土器。

b　壺形土器

壺A類　口縁部有段・短頸で、（擬）凹線文を施すもの。

壺B類　口縁部有段・短頸で、無文のもの。口縁の伸びが長いもの。

壺C類　口縁部有段・短頸で、無文のもの。口縁が内湾気味に伸びるもの。

壺D類　口縁部有段で、広口になるもの。頸部の長いもの（D1類）、短いもの（D2類）がある。D1類では口縁部が長く伸びるものが多い。

壺E類　口縁部有段の長頸壺を一括した。口縁部の長さで２つに区分できる。E1類は口縁部の長いもので口縁部が直線的・外傾するものもしくは外反するものがある。E2類は口縁部の短いもので、段というよりは端部の面取りの範疇で捉えることができる。口縁端部を内傾気味に引き出すもの（274）、上下に引き出し面を持つもの（166・253）が見られる。その他、E類の肩部でヘラ描きを持つもの（189）が１点見られる。

壺F類　口縁部有段で端部に面を持ち、ハケ原体による刻み目状の刺突を施す。１点（300）のみ確認した。近江系の受口状口縁壺の系譜を引くものと考えられる。

壺G類　口縁部断面が「く」の字状のもの。

壺H類　「無頸壺」。口縁部が短く上方に伸びるもの。

壺I類　体部にスタンプ文・刺突文を持つ壺。小型品が多い。

壺J類　体部中半に突帯を持つ小型壺。

壺K類　細頸の壺を一括した。口縁部資料が少ない。

壺L類　口縁部の断面形状が「く」の字状の小型壺。点数は少ない。

c　鉢形土器

鉢A類　口縁部有段で（擬）凹線文を施すもの。口縁が長く外反するもの（21）、外傾して直線的に伸びるもの（140）、直立気味に伸びるもの（163）がある。

鉢B類　口縁部有段で、無文のもの。内外面をミガキ調整する。

鉢C類　口縁部有段で、受口状のもの。端部に内傾する面を持つもの。赤彩されるものが多く、刺突文を持つものもある。

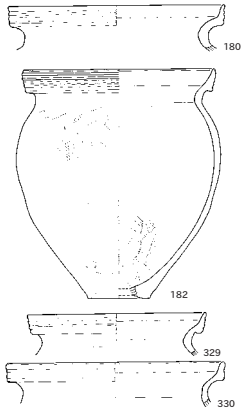
鉢D類　口縁部有段だが、段が外面のナデにより作り出され不明瞭なもの。口縁部内湾気味のものが多い。

鉢E類　内湾気味の器形で平底のもの。

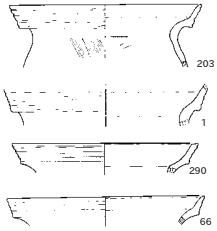
d　有孔鉢形土器

出土数は少ないが、有段で平底のもの（216・219）や丸底に近いもの（326）が見られる。

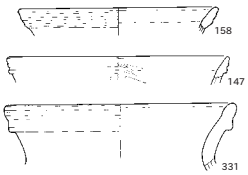
甕A1類



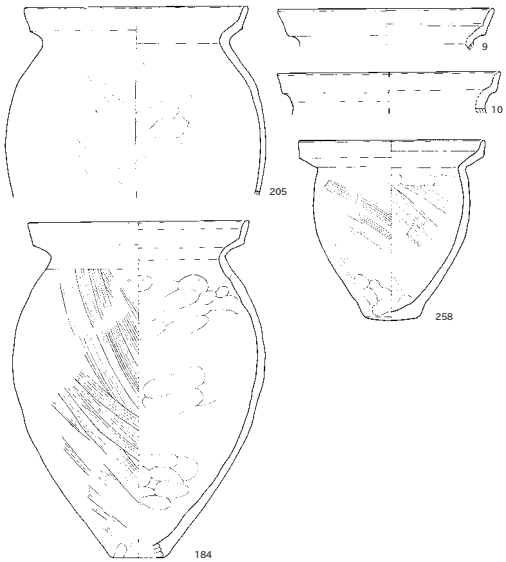
甕A2類



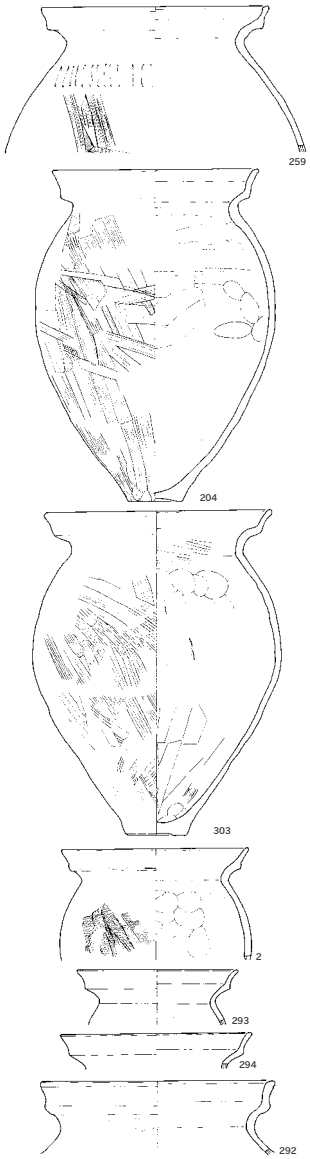
甕A3類



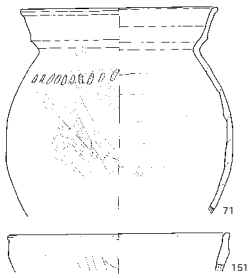
甕B1類



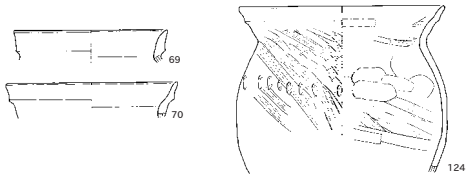
甕B2類



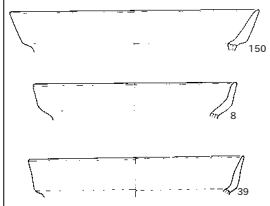
甕B3類



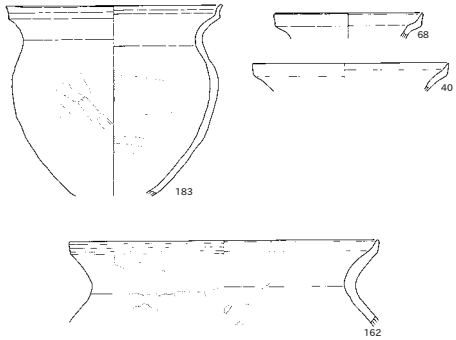
甕B5類



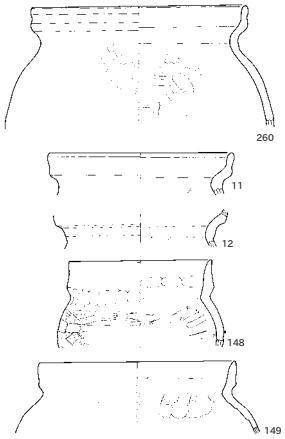
甕B4類



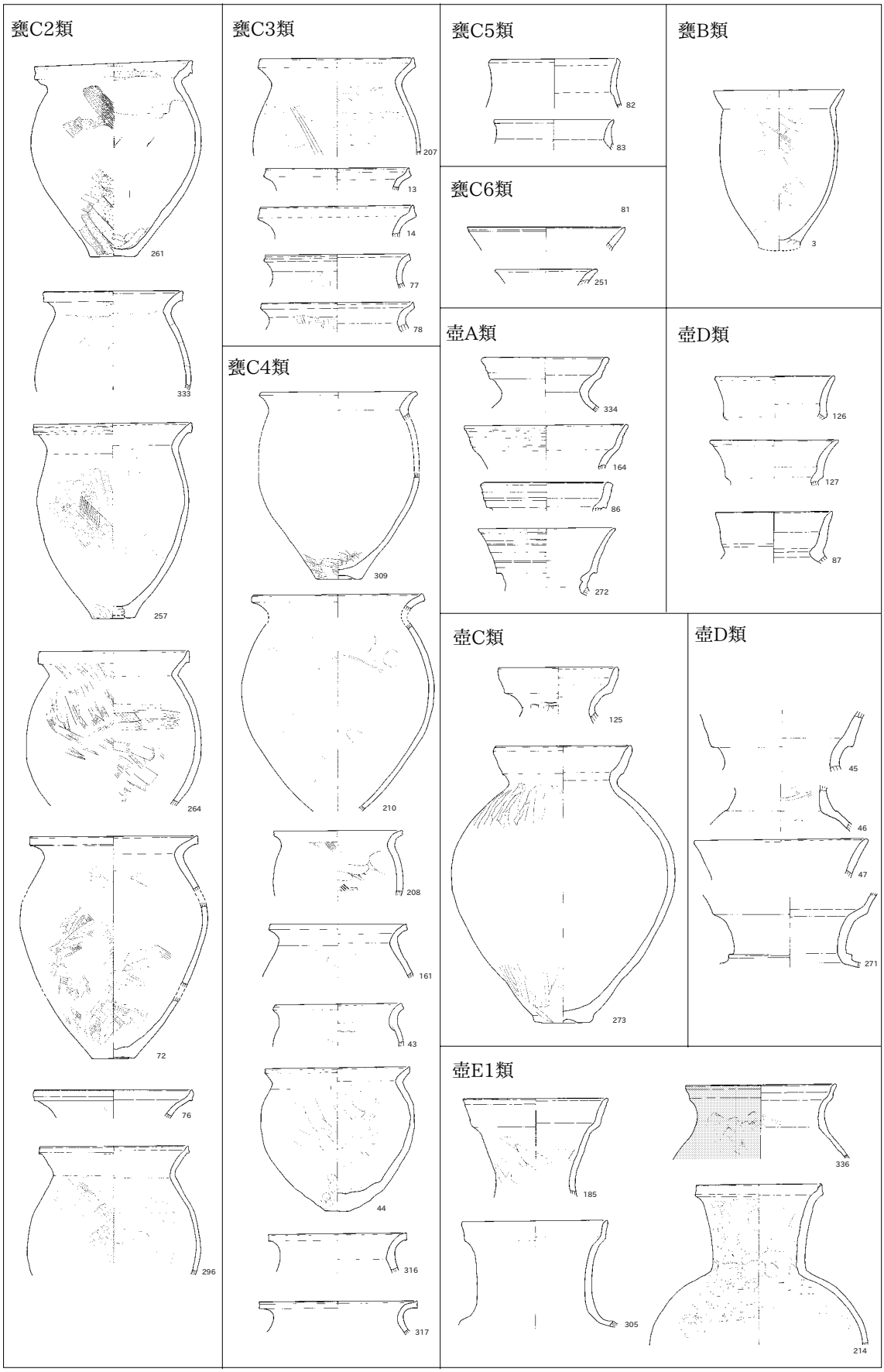
甕C1類



甕B6類

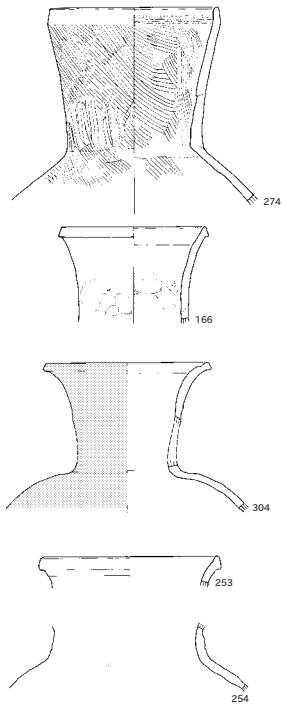


第９図　弥生土器分類図（1）　〔S＝1：6〕

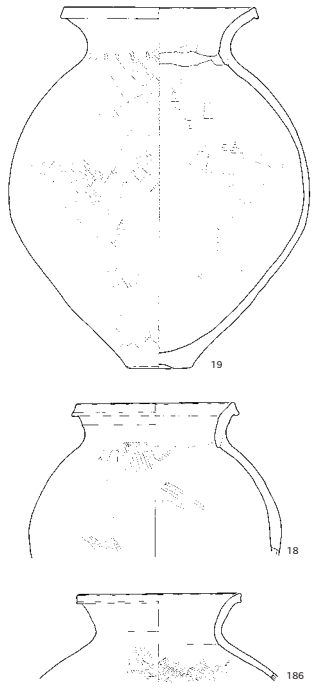


第10図　弥生土器分類図（2）　〔S＝1：6〕

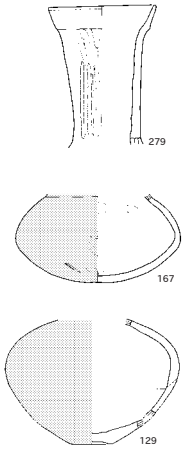
壺E2類



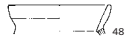
壺G類



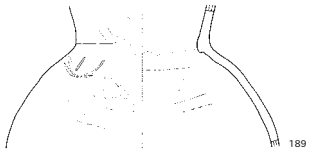
壺K類



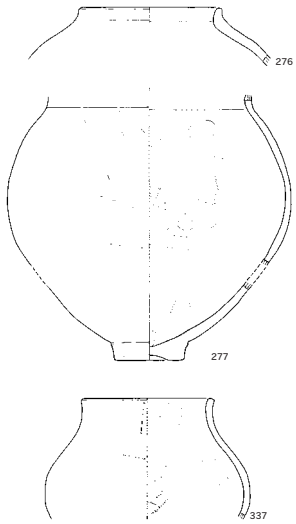
壺L類



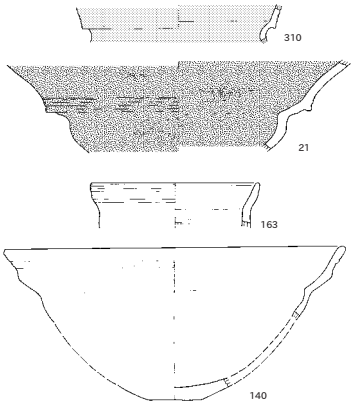
壺E類（体部）



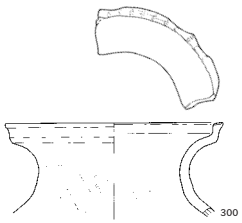
壺H類



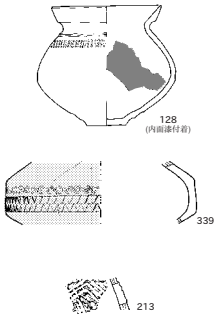
鉢A類



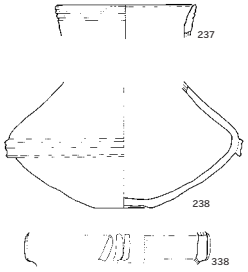
壺F類



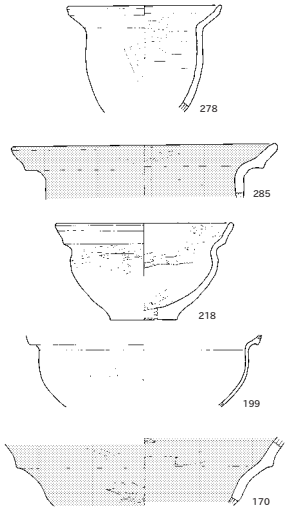
壺I類



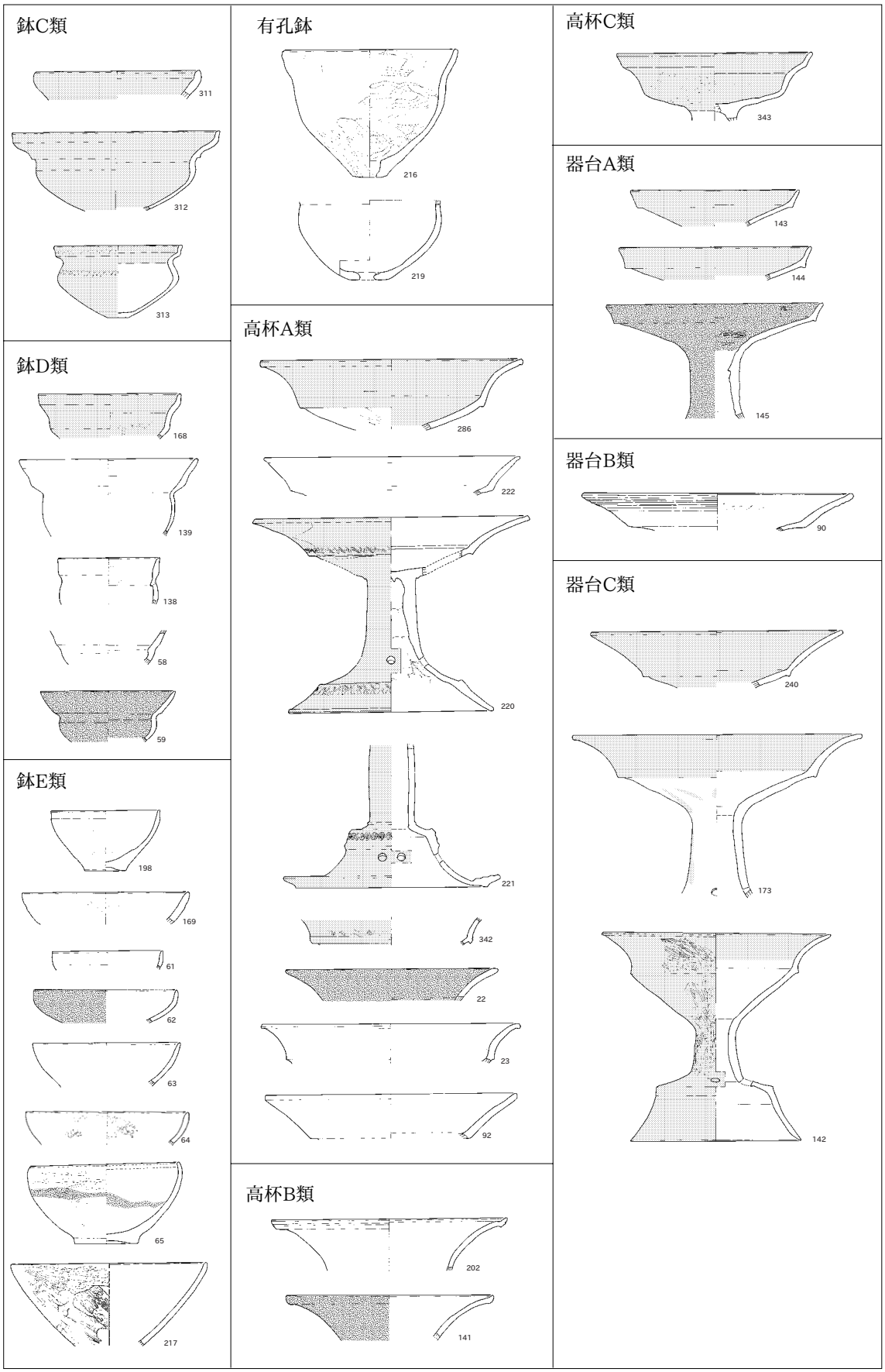
壺J類



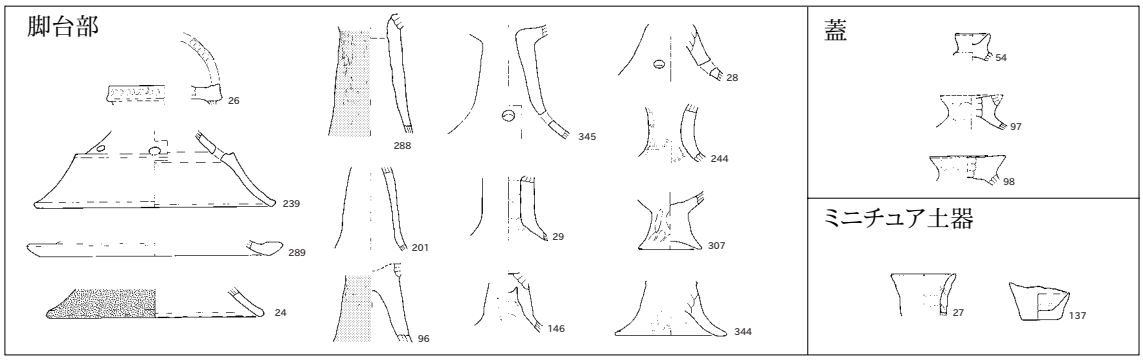
鉢B類



第11図　弥生土器分類図（3）　〔S＝1：6〕



第12図　弥生土器分類図（4）　〔S＝1：6〕



第13図　弥生土器分類図（5）　〔S＝1：6〕

e　高　　杯

高杯Ａ類　杯部有段で、口縁部が長く外反するもの。杯部のみのものが多く、脚部の形状は不明であるが、220では脚部も有段で、段の稜付近にスタンプ文（渦文・鋸歯文）が施される。221は棒状の脚で脚台の段部にスタンプ文（渦文）が施され二孔一対の透孔を持つ。

高杯Ｂ類　外反する杯部を持ち、口縁端部を上方に摘み上げるもの。

高杯Ｃ類　口縁部有段のもの（343）。１点のみである。

f　器　　台

器台Ａ類　受け部が有段で、段部（口縁部）が短いもの。

器台Ｂ類　杯部有段で外反し、（擬）凹線文を持つもの（90）。１点のみである。

器台Ｃ類　受け部が有段で、段部（口縁部）が長く外反するもの。脚部も有段のもの（142）がある。

器台Ｄ類　受部段の側面にスタンプ文（渦文）を持つもの。

g　脚　台　部

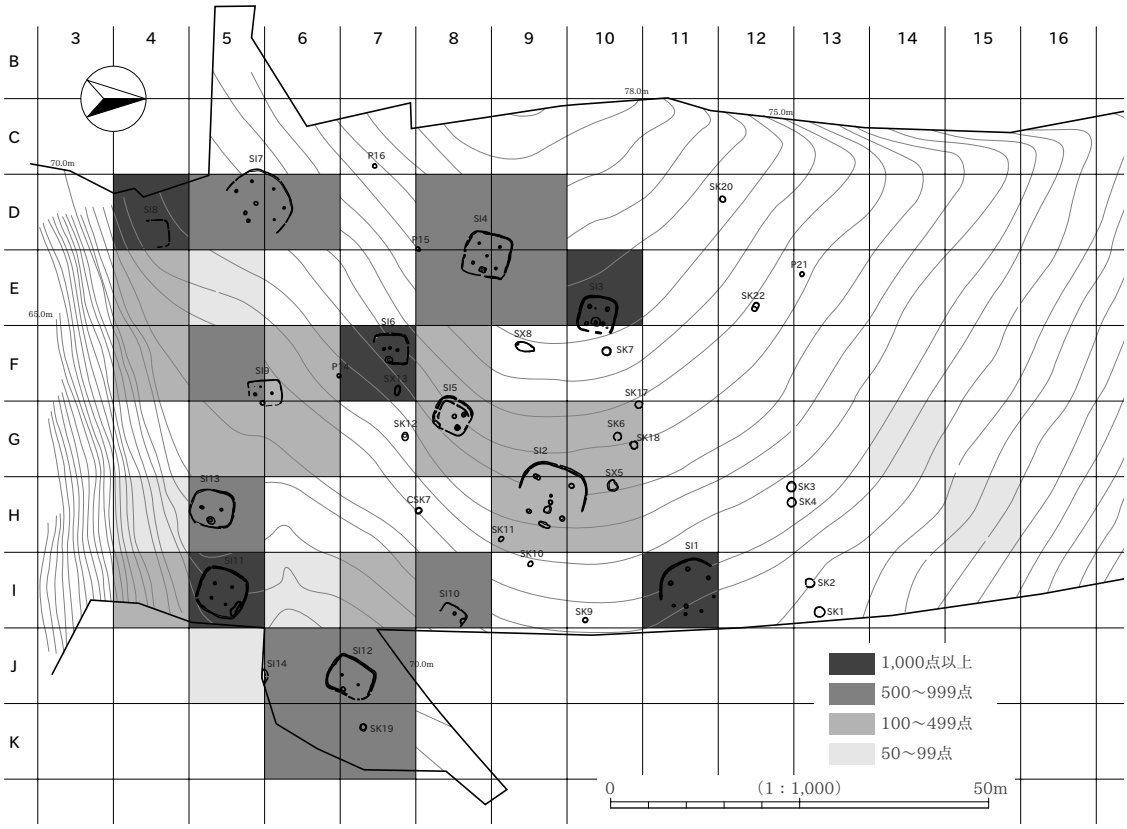
器種の判別が困難なものも含むため、高杯・器台の脚部、鉢・壺類の台部を一括した。26・239は有段の脚部で、26は爪形の圧痕文が巡る。289は裾端部の上方に平坦面を持ち、断面三角形状となるもの。その他、柱状（288）、脚上部は柱状で裾部が大きく開くもの（345・201・29）、八の字状に開くもの（146・96・244・28）、鉢か壺の台と思われる低脚のもの（307・344）などがある。

3）分 布 状 況

遺跡からは総計25,733点、口縁部残存率で1976.5／36個体（口縁部破片数1,287点）、底部残存率で4269.5／36個体（底部破片439点）の弥生土器が出土している。大別器種ごとの個数、比率は以下の表のとおりである。器種で最も多いのは甕で、全体の約5割を占める。中でも遺物の分布状況は第14図に示したとおりであるが、竪穴建物内およびその周辺部に集中しており、特に3号・11号竪穴で多くの遺物が出土している。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	543	513	27.5%	39.9%	-	-	-	-
甕	514	337	26.0%	26.2%	2269	228	53.1%	51.9%
甕か壺	0	0	0.0%	0.0%	36	2	0.8%	0.5%
小型甕	27	9	1.4%	0.7%	36	1	0.8%	0.2%
有段壺	243	78	12.3%	6.1%	-	-	-	-
台付壺	0	0	0.0%	0.0%	9	1	0.2%	0.2%
壺	249.5	94	12.6%	7.3%	973.5	104	22.8%	23.7%
小型壺	17	9	0.9%	0.7%	72	4	1.7%	0.9%
壺か鉢	0	0	0.0%	0.0%	72	3	1.7%	0.7%
有段鉢	77	33	3.9%	2.6%	36	1	0.8%	0.2%
有台鉢	0	0	0.0%	0.0%	5	1	0.1%	0.2%
有孔鉢	26	7	1.3%	0.5%	121	10	2.8%	2.3%
鉢	116	55	5.9%	4.3%	405	35	9.5%	8.0%
高杯	39	27	2.0%	2.1%	61	14	1.4%	3.2%
高杯か器台	48	90	2.4%	7.0%	52.5	29	1.2%	6.6%
器台	59	34	3.0%	2.6%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	83	4	1.9%	0.9%
ミニチュア土器	18	1	0.9%	0.1%	38.5	2	0.9%	0.5%
合計	1976.5	1287	100.0%	100.0%	4269.5	439	100.0%	100.0%

第１表　下馬場遺跡出土弥生土器口縁部・底部残存率集計表



第14図　弥生土器出土量分布

4）遺物各説

遺構出土土器は各遺構単位で記述し、それ以外は遺物包含層出土土器として一括した。各遺構出土土器群の年代観については後述する「第Ⅵ章 まとめ　1 下馬場遺跡出土土器の年代観」に遺構ごとの年代観の変遷を示した。

a　竪穴出土土器

1号竪穴（図版28）

総計1,488点の土器片が出土した。そのうち口縁部破片が52点、底部破片が26点あり、口縁部残存率で120／36個体、底部残存率では205.5／36点の土器が出土した。南西側・北西側の壁際で完形に近い3・19等が出土している。甕類ではB類（4～12）が多く、A類の凹線文系のものと合わせると甕の約6割（口縁部破片数）を占める。3は甕D類としたもので、遺跡全体でも1点のみの出土である。内湾気味の口縁を持ち、東北系と北陸系の折衷様式である八幡山式C類［渡邊2001］に類似する土器である。口縁部には横ナデ調整は見られず、指の圧痕のみが見られる。19は口縁端部に面を持ち、面に放射状（斜方向）のハケメが見られる。頸部には指による連続した押圧痕が見られる。これらの調整痕は装飾的な意味を兼ねているとも考えられる。20は鉢B類で、丸みを帯び、深身の形状のもの。21は口縁部が長く外反し、段の側面に擬凹線文が施される。25の高杯は口縁部が外方に長く延びる。26は器台（？）の脚部で、段部の上面・側面に爪形の圧痕文を持つ。27は内外面に輪積み痕を残すミニチュア土器である。30～35は甕底部、36・37はミガキ調整が見られる壺底部である。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	37.5	20	31.3%	38.5%	-	-	-	-
甕	16	8	13.3%	15.4%	101	11	49.1%	42.3%
小型甕	13	5	10.8%	9.6%	0	0	0.0%	0.0%
壺	34.5	10	28.8%	19.2%	99	12	48.2%	46.2%
高杯	5	2	4.2%	3.8%	0	0	0.0%	0.0%
高杯か器台	1	1	0.8%	1.9%	3	2	1.5%	7.7%
器台	13	6	10.8%	11.5%	0	0	0.0%	0.0%
ミニチュア土器	0	0	0.0%	0.0%	2.5	1	1.2%	3.8%
合計	120	52	100.0%	100.0%	205.5	26	100.0%	100.0%

第2表　1号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

2号竪穴（図版29）

総計1,121点の破片が出土した。口縁部破片は52点、底部破片は24点あり、口縁部残存率で106.5／36個体、底部残存率で231.5／36個体の土器が出土した。甕類ではC類が多く、鉢B・C類も目立つ。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	3	2	2.8%	3.8%	-	-	-	-
甕	24	13	22.5%	25.0%	89.5	12	38.7%	50.0%
小型甕	14	4	13.1%	7.7%	36	1	15.5%	4.2%
有段壺	3.5	3	3.3%	5.8%	-	-	-	-
壺	4	3	3.8%	5.8%	22	2	9.5%	8.3%
小型壺	7	5	6.6%	9.6%	0	0	0.0%	0.0%
有段鉢	5.5	1	5.2%	1.9%	-	-	-	-
鉢	43.5	20	40.8%	38.5%	52	6	22.5%	25.0%
高杯	2	1	1.9%	1.9%	0	0	0.0%	0.0%
高杯か器台	0	0	0.0%	0.0%	6	2	2.6%	8.4%
器台	0	0	0.0%	0.0%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	26	1	11.2%	4.2%
合計	106.5	52	100.0%	100.0%	231.5	24	100.0%	100.0%

第3表　2号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

39は口縁部が比較的長く、外傾して伸びる。44は内面に指の圧痕（ナデ）が連続して残る。底部外面付近のみをケズリ調整する。46は二重口縁壺の頸部から肩部か。48は小型壺で砂礫の少ない精良な胎土である。56は大型の高杯で、別づくりの脚部を杯部に挿入したものか。鉢Ｄ類の58・59は頸部外面に強い横ナデを施すことにより外面の段を作り出している。59は口縁が内湾気味に伸び、内面が赤彩される。62は浅い椀状の器形のものか。65は竪穴北西隅から完形で出土した。外面は横方向のミガキ調整で仕上げられ、内外面に赤彩の痕跡と思われる帯状の赤色部分が見られる。

３号竪穴（図版29・30）

総計4,074点の土器片が出土した。口縁部破片は90点、底部破片は62点あり、口縁部残存率で173.5／36個体、656.5／36個体の土器が出土した。甕が80%以上（口縁部残存率・口縁破片数）を占める。甕は有段のＡ・Ｂ類よりもＣ類が圧倒的に多く出土している。特にC2・C3類の口縁端部摘み上げを行うものが目立つ。壺では、Ａ類（86）、Ｂ類（87）、Ｅ類（89）、Ｇ類（88）がある。

66・67は外面に擬凹線文を持つ。71は口縁部が比較的長く伸び、端部は丸くおさめ、外方に引き出す。72～76はC2類で口縁端部に有段状の広い面を作り出す。C4類としたものを含めると広い面を作り出すものがＣ類では全体的に目立つ。87は外面の段が明瞭ではない。88は外面に横方向のミガキ調整が施される。90は外面の風化が著しいため不明瞭だが、杯部外面に擬凹線文を持つ。95は内外面赤彩され、杯部に段を持ち、段部に擬凹線文を施す。97・98は比較的大型の摘みを持つ蓋である。99～112は甕、113～119は壺の底部である。底部は上げ底のものが多い。119は鉢で、内面はミガキ、底外面に不整方向の線状痕が見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	39	26	22.5%	23.3%	-	-	-	-
甕	108	49	62.2%	60.0%	437.5	38	66.6%	61.3%
有段壺	10	4	5.8%	4.4%	-	-	-	-
壺	10.5	5	6.1%	5.6%	164	18	25.0%	29.0%
鉢	0	0	0.0%	0.0%	36	4	5.5%	6.5%
高杯か器台	2	2	1.2%	2.2%	1	1	0.2%	1.6%
器台	4	4	2.3%	4.4%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	18	1	2.7%	1.6%
合計	173.5	90	100.0%	100.0%	656.5	62	100.0%	100.0%

第４表　３号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

４号竪穴（図版31）

総計2,033点の破片が出土した。口縁部破片は80点、底部破片は42点あり、口縁部残存率で168／36個体、底部残存率で531／36個体の土器が出土した。甕が全体の約30％（口縁部残存率比）を占め、有段・非有段の比率はほぼ同じ位の割合である。高杯・器台が比較的多く、小片のため「高杯または器台」

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	21	15	12.5%	18.8%	-	-	-	-
甕	29	15	17.3%	18.8%	220	23	41.5%	54.8%
甕か壺	0	0	0.0%	0.0%	36	2	6.7%	4.8%
有段壺	28.5	7	17.0%	8.8%	-	-	-	-
壺	2	2	1.2%	2.5%	54	3	10.2%	7.1%
小型壺	10	4	6.0%	5.0%	72	4	13.6%	9.5%
有段鉢	10	5	6.0%	6.3%	-	-	-	-
鉢	3	3	1.8%	3.8%	108	5	20.3%	11.9%
高杯	1	1	0.6%	1.3%	0	0	0.0%	0.0%
高杯か器台	20	11	11.9%	13.8%	5	4	1.0%	9.5%
器台	25.5	16	15.2%	20.0%	0	0	0.0%	0.0%
ミニチュア土器	18	1	10.7%	1.3%	36	1	6.7%	2.4%
合計	168	80	100.0%	100.0%	531	42	100.0%	100.0%

第５表　４号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

としたものを含めると約27％となり、甕とほぼ同じ割合となる。

121は口縁部が上方に直線的に伸び受口状となる。124は口縁部有段で内湾気味に伸びる。125は壺C類で内湾気味の口縁部を持ち、段下部を稜状に引き出す。山陰地方系譜のものか。128は小型の有段壺（装飾壺）で外面に縦３段が１単位の列点（円形）刺突が見られる。内面中半に漆と思われる付着物が見られる。胎土は海面骨針を多く含み、砂粒等をほとんど含まない精良な土である。遺跡で通有の胎土とは異なるため搬入品と思われる。140は鉢Aとしたもので、口縁部外面は摩滅により不明瞭であるが擬凹線が２条確認できる。内面の屈曲部は稜のように尖った断面形状である。142は器台C類で、杯・脚部に段を持つ。杯部は脚部から外方に直線的に伸び、口縁部は大きく外反する。脚部の屈曲部付近に円形の透孔を持つ。143～145は器台A類としたもので、段の伸びが短く、段下部を稜のように引き出すものが定量見られる。内外面を赤彩する。

５号竪穴（図版32）

総計466点の土器片が出土した。口縁部破片は33点、底部破片は８点あり、口縁部残存率で43.5／36個体、底部残存率で116／36個体の土器が出土した。器種は甕・壺・有孔鉢のみしか確認できなかった。甕が８割弱を占め（口縁部残存率比）、有段のB4・B6類の口縁部直立もしくは直線的なものが目立つ。147は擬凹線系甕のA3類に分類したが、擬凹線は１条しか見られない。148・149は甕B6類で、頸部に強い横ナデを施すことにより段部を作り出している。148では指の圧痕が内外面に横方向に連続して見られ、体部は下方から上方に向かってケズリ調整する。151は頸部以下が不明であるが、口縁端部の形状や外面のわずかな稜の存在から３号竪穴出土の71の土器に類似した器形のものであると考えた。154～156は甕底部、157は有孔鉢である。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
甕	6.5	2	14.9%	6.1%	108	7	93.1%	87.5%
有孔鉢	0	0	0.0%	0.0%	8	1	6.9%	12.5%
有段甕	34	30	78.2%	90.9%	-	-	-	-
有段壺	3	1	6.9%	3.0%	-	-	-	-
合計	43.5	33	100.0%	100.0%	116	8	100.0%	100.0%

第６表　５号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

６号竪穴（図版32）

総計1,365点の土器片が出土した。口縁部破片は104点、底部破片は39点あり、口縁部残存率で95.5／36個体、底部残存率で209.5／36個体の土器が出土した。器種では壺類が多く、中でも長頸有段のE類が目立つ。158は擬凹線文（B）が施される。159は口縁部外面に凹線状の横ナデが施され、端部はほぼ水平な面を持つ。近江系譜で捉えることができるものか。162は大型の甕で、口縁端部を上方に引き上げる。164は壺A類で外面に擬凹線文（A）が見られる。166は壺E2類としたもの。口縁端部を上下方向に引き出し、内傾する面状となる。167は竪穴南東側で出土した外面赤彩の小型壺である。口縁部は残存していなかったが体部は完形で、チャート・緑色凝灰岩などの母指頭大の小礫（原石）が中

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	9	3	9.4%	2.9%	-	-	-	-
甕	16.5	11	17.3%	10.6%	55	8	26.3%	20.5%
有段壺	10	7	10.5%	6.7%	-	-	-	-
壺	41	11	42.9%	10.6%	126	24	60.1%	61.5%
鉢	7	4	7.3%	3.8%	18	1	8.6%	2.6%
高杯か器台	12	68	12.6%	65.4%	10.5	6	5.0%	15.4%
合計	95.5	104	100.0%	100.0%	209.5	39	100.0%	100.0%

第７表　６号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

に入った状態で出土している。171は深みで口径が比較的小型の高杯である。172・173は受部有段の器台である。173は口縁部外面は全面赤彩が施されているが、受部下位は縦（斜）方向に帯（棒）状の赤彩部分が見られることから文様状に塗彩されていると思われるがモチーフ等は摩滅により不明である。174～176は甕底部、177は外方へ大きく開くことから鉢の底部とした。178・179は外面にミガキ調整が見られる壺の底部である。

7号竪穴（図版33）

総計1,519点の土器片が出土した。口縁部破片は278点、底部破片は24点あり、口縁部残存率で165／36個体、底部残存率で253／36個体の土器が出土した。器種では有段甕が約4割（口縁部残存率比）を占め、擬凹線文を持つもの（180～182・壺では187）が見られる。183は口縁端部を上方に強く摘み上げたことにより外反する有段状となる。184は内面にケズリ調整は見られず、すべて指の圧痕（ナデ）である。189（壺E類か）は肩部に記号文を持つ。記号文の種類は十字文・連続弧（三日月）文、U（V）字文、ジグザグ文、多条線文［北野1991］がある。施文器種は長頸壺もしくはその系譜を引くもの、施文部位は頸部付近が多いとされる［楠1989］。本遺跡例はU字形に近い形状であるが、U字の中央に線が入るいわゆる「イカリ形」のモチーフの可能性がある。「イカリ」形は石川県押水町上田出西山遺跡［三浦1980］で出土例がある。190は壺K類（細頸壺）の体部と思われるが赤彩の有無は不明である。191～194は甕底部、195・196は壺底部である。197は蓋で外面赤彩でミガキ調整を施す。摘みは上部が窪む（環状の摘み）。199は口縁部（段部分）の残存状態が良くないため文様の有無は不明である。丸みを帯び、深身の体部を持つ。202は口縁端部が強く上方に引き出され、外面に面を持つ。面の中心に横ナデ痕があり、凹線状となる。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	66.5	244	40.3%	87.8%	-	-	-	-
甕	1	1	0.6%	0.4%	142	16	56.1%	66.7%
有段壺	28	9	17.0%	3.2%	-	-	-	-
壺	36	8	21.8%	2.9%	74	5	29.2%	20.8%
鉢	13	6	7.9%	2.2%	37	3	14.6%	12.5%
高杯か器台	7	3	4.2%	1.1%	0	0	0.0%	0.0%
器台	13.5	7	8.2%	2.5%	0	0	0.0%	0.0%
合計	165	278	100.0%	100.0%	253	24	100.0%	100.0%

第8表　7号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

8号竪穴（図版34）

総計1,072点の土器片が出土した。口縁部破片は200点、底部破片は35点あり、口縁部残存率で179／36個体、底部残存率で312.5／36個体の土器が出土した。甕が約7割強（口縁部残存率比）あり、非有段の甕C類の比率が多い。有孔鉢の比率は竪穴群の中で最も高い。壺は明確に形が把握できるものはE類（214）のみである。203は擬凹線（A類）が施される。内面はケズリ調整によると思われる砂粒の動きが

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	44	58	24.6%	29.0%	-	-	-	-
甕	87	123	48.6%	61.5%	126	11	40.3%	31.5%
壺	0.5	2	0.3%	1.0%	0	0	0.0%	0.0%
有段鉢	8	2	4.5%	1.0%	-	-	-	-
有孔鉢	26	7	14.5%	3.5%	72	2	23.0%	5.7%
鉢	9.5	5	5.3%	2.5%	48.5	6	15.5%	17.2%
高杯	3	2	1.7%	1.0%	61	14	19.5%	40.0%
高杯か器台	1	1	0.6%	0.5%	5	2	1.6%	5.7%
器台	0	0	0.0%	0.0%	0	0	0.0%	0.0%
合計	179	200	100.0%	100.0%	312.5	35	100.0%	100.0%

第9表　8号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

見られる。204～206は甕Ｂ類であるが、204は内面下部のみケズリ調整によると思われる砂粒の動きが見られる。205の内面はナデもしくはスリナデ調整のみである。207では体部内面の中半付近を横方向にケズリ調整する。212は小型の甕か。213は山形状もしくは波状の文様が見られることから装飾壺の可能性がある。214は頸部が縦方向のミガキ、肩部が横方向のミガキ調整が施されている。体部内面上位はケズリと思われる砂粒の動きが見えるが調整単位は不明である。215は有孔鉢で、底部から大きく開く器形である。216は有段の鉢Ｂ類に類似した器形を持つ有孔鉢である。内外面下部にミガキ調整を施す。217は底部付近が残存していないため鉢Ｄ類とした。有孔鉢は一般的に被熱による器面の赤化や外面へのススの付着が見られることから217についても有孔鉢の可能性もある。218は山陰系譜で捉えることができる。220・221は杯・脚部有段の高杯で、220は渦文Ｄ類［栃木1987］と鋸歯文のスタンプ文を併用する。221は渦文Ｄ類のスタンプ文のみである。渦文はいずれもＺ字ⅢA1類で、サイズはＭに分類される。

9号竪穴（図版35）

総計1,116点の土器片が出土した。口縁部破片は36点、底部破片は53点あり、口縁部残存率で46／36個体、底部残存率で258.5／36個体の土器が出土した。甕が約65％を占め、そのうち有段系の甕が約3割を占めるが、器形が把握できるものは少ない。224～226は同一個体の可能性がある。237・238は同一個体で、口縁部有段長頸で体部中半に貼り付けによる突帯があり、台付ではなく平底のものである。口縁部に擬凹線文、体部の突帯上に凹線文を持つ。228・231・232は甕の底部でいずれも上げ底である。229は粒子が細かな胎土を持つ。壺もしくは鉢の底部か。233・235・236は壺の底部である。233では内面にケズリ調整が見られる。234は底部有孔の鉢である。240～243は高杯で、有段・深身で外方に大きく開くものが特徴的に見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	10	6	21.7%	16.7%	-	-	-	-
甕	20.5	9	44.6%	25.0%	133	27	51.5%	50.9%
壺	8.5	5	18.5%	13.9%	76	9	29.4%	17.0%
有孔鉢	0	0	0.0%	0.0%	27	5	10.4%	9.4%
鉢	0	0	0.0%	0.0%	4.5	1	1.7%	1.9%
高杯	4	13	8.7%	36.1%	0	0	0.0%	0.0%
高杯か器台	3	3	6.5%	8.3%	18	11	7.0%	20.8%
器台	0	0	0.0%	0.0%	0	0	0.0%	0.0%
合計	46	36	100.0%	100.0%	258.5	53	100.0%	100.0%

第10表　9号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

10号竪穴（図版36）

総計697点の土器片が出土した。口縁部破片は8点、底部破片は10点あり、口縁部残存率で23／36個体、底部残存率で102.5／36個体の土器が出土した。高杯・器台・鉢などの器種が見られず、甕・壺を主とする。246は有段無文で、内面に縦方向のケズリ調整が見られる。251は甕C6類の小型品か。壺ではＥ類が確認され、252と同一個体の253・254がある。255は甕の底部、256は細かな粒子の胎土を持つ壺か鉢の底部である。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	2.5	1	10.9%	12.5%	0	0	0.0%	0.0%
甕	19	6	82.6%	75.0%	51	6	49.8%	60.0%
壺	1.5	1	6.5%	12.5%	15.5	2	15.1%	20.0%
壺か鉢	0	0	0.0%	0.0%	36	2	35.1%	20.0%
合計	23	8	100.0%	100.0%	102.5	10	100.0%	100.0%

第11表　10号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

11号竪穴（図版36・37）

総計2,670点と最も多くの土器片が出土した。口縁部破片は155点、底部破片は49点あり、口縁部残存率で362／36個体、底部残存率で620／36個体の土器が出土した。口縁部有段の甕・壺の比率が高い。

257は内面を横方向にスリナデ調整する。258は口縁部が頸部から外方に大きく開き、直立気味に上方に伸びる。口縁は比較的短い。259は口縁端部に内傾する面を持つ。肩部に刺突文を持つ。近江系の系譜で捉えられるもの。260は口縁が上方に直線的に伸びる。口縁部中央に凹線状の強い横ナデ痕が見られる。261・263・264は口縁端部を上下方に引き出した比較的広い面を持つ。261は内面をケズリ調整する。263は肩部に刺突文が見られる。265～269は甕の底部でいずれも底部上げ底状のものである。271は頸部に突帯が巡る。272は摩滅および器面の剥落のため不明瞭となっているが、擬凹線文の痕跡が見られる。273は口縁部が内湾気味に伸びる段を持ち、体外面は縦方向のミガキ調整を施す。274は壺E2類で内外面ともにハケ調整される。頸部上位で縦方向のミガキが若干見られる。275は口縁部上位はハケ調整を消すようにナデ調整が施される。276・277は同一個体の可能性があり、口縁部の立ち上がりがわずかしかない。広口壺とも分類できる器形であるが無頸壺とした。279は細頸の長頸壺で、外面は縦方向のミガキ調整が施される。278は口縁部端部を上方に摘み上げ、外面に凹線状の緩やかな窪みを持つ。280～283は壺の体部～底部で外面下部（底部側面）にミガキ調整が見られる。284は胎土が精良で、外方に大きく開く。壺か鉢の底部であると思われる。285・287は同一個体の可能性がある有段の鉢である。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	148.5	55	41.0%	35.5%	-	-	-	-
甕	65	33	18.0%	21.3%	390	33	62.9%	67.3%
有段壺	94.5	27	26.1%	17.4%	-	-	-	-
壺	9	11	2.5%	7.1%	190	14	30.6%	28.6%
壺か鉢	0	0	0.0%	0.0%	36	1	5.8%	2.0%
有段鉢	20	19	5.5%	12.3%	-	-	-	-
鉢	2	2	0.6%	1.3%	0	0	0.0%	0.0%
高杯	20	7	5.5%	4.5%	0	0	0.0%	0.0%
高杯か器台	0	0	0.0%	0.0%	4	1	0.6%	2.0%
器台	3	1	0.8%	0.6%	0	0	0.0%	0.0%
合計	362	155	100.0%	100.0%	620	49	100.0%	100.0%

第12表　11号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

12号竪穴（図版38）

総計1,431点の土器片が出土した。口縁部破片は76点、底部破片は13点あり、口縁部残存率で189／36個体、底部残存率で139／36個体の土器が出土した。甕が6割以上を占める。有段・非有段の個体数は有段が若干上回っているが、ほぼ拮抗している。290は口縁端部上方に面を持ち、外面に擬凹線文を施す。291は外面に凹線文が見られる。295は小型の甕でC4類に分類した。296の甕は最大径が体部の中半、297は体部上半（肩部）に最大径を持つ。両者ともに頸部の屈曲が明瞭で外方に比較的長く延びる。300は壺F類としたもので、口縁部が受口状で端部に内側に傾斜する面を持つ。面にはハケ原体によると思われる刻目が施される。近江地方に系譜を持つ。本来は口縁部外面の段付近にハケ原体等で刺突文（刻目）を施すが、本遺跡では持たない。301は甕の底部で内外面にスリナデの痕跡が見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	66	29	34.9%	38.2%	0	0	0.0%	0.0%
甕	56	25	29.6%	32.9%	56	8	40.3%	61.5%
有段壺	9	1	4.8%	1.3%	-	-	-	-
壺	41	13	21.7%	17.1%	48	2	34.5%	15.4%
鉢	17	8	9.0%	10.5%	35	3	25.2%	23.1%
合計	189	76	100.0%	100.0%	139	13	100.0%	100.0%

第13表　12号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

13号竪穴（図版38）

総計664点の土器片が出土した。口縁部破片は28点、底部破片は23点あり、口縁部残存率で68.5／36個体、底部残存率で250／36個体の土器が出土した。甕は有段のもののみで、約6割を占める。図化できたものは6点のみで、甕B2・壺E1・E2類が見られる。303は内面は主にスリナデ調整される。307は外面の風化が著しいため、成形時の指の圧痕のみしか確認できない。壺か鉢の脚台と考えられる。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	41	17	59.9%	60.7%	-	-	-	-
甕	0	0	0.0%	0.0%	137	12	54.8%	52.1%
有段壺	7	2	10.2%	7.1%	-	-	-	-
壺	15.5	7	22.6%	25.0%	68	5	27.2%	21.7%
有台鉢	0	0	0.0%	0.0%	5	1	2.0%	4.3%
鉢	3	1	4.4%	3.6%	31	4	12.4%	17.4%
高杯か器台	2	1	2.9%	3.6%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	9	1	3.6%	4.3%
合計	68.5	28	100.0%	100.0%	250	23	100.0%	100.0%

第14表　13号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

14号竪穴（図版39）

総計131点の土器片が出土した。竪穴のごく一部の調査であるが、甕C類（309）、鉢A類（310）、鉢C類（311～313）等が出土している。311・312は内湾気味の口縁を持ち、端部は内側に傾斜する面を持つ。近江系の受口状口縁を意識したものか。313は受口状の口縁を持ち、口縁部（段側面）・肩部に刺突文が見られる。美濃系譜の可能性がある。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
甕	9	5	22.5%	50.0%	36	5	50.0%	83.3%
有段鉢	31	5	77.5%	50.0%	（鉢）　36	1	50.0%	16.7%
合計	40	10	100.0%	100.0%	72	6	100.0%	100.0%

第15表　14号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

SX5・SK7・SX13・SK17・SK19（図版39）

いずれの遺構も少量の土器しか出土していない。SX5では、図化した有段口縁壺（D2類：314）1点に加え、甕の破片5点が出土したのが唯一例外で、他の遺構では図化したもののみしか出土していない。

体部破片が多く、詳細な時期決定は難しいが、竪穴出土遺物とほぼ並行する時期であると思われる。324はSX13出土土器で、体部中半に突帯を持つ壺（壺J類）であると推測される。突帯上にはV字様の刺突文が見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
甕	3	5	42.9%	55.6%	7	1	100.0%	100.0%
有段壺	4	4	57.1%	44.4%	0	0	0.0%	0.0%
合計	7	9	100.0%	100.0%	7	1	100.0%	100.0%

第16表　SX5出土土器口縁部・底部残存率集計表

SX8（図版39）

口縁部破片数で38点の土器片が出土しており、口縁部残存率で72／36個体の土器が出土している。有段系の甕A・B類は少なく、C類が多い。いずれも端部に面を持つ。319は内面にケズリ調整が見られる。320は体部外面に目の粗いハケが見られる。321は不整形であるが底部平底の鉢E類である。322は内面にケズリ調整、底部には線状痕が見られる。325は壺の口縁・底部で、口縁部は摩滅により調整不明であるが、底部付近の外面にはミガキ調整が見られる。326は体部内湾気味に伸び、砲弾型の器形の有孔鉢である。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	2	2	2.8%	5.3%	-	-	-	-
甕	44.5	26	61.8%	68.4%	108	6	65.9%	50.0%
壺	15.5	7	21.5%	18.4%	7	2	4.3%	16.7%
有孔鉢	0	0	0.0%	0.0%	14	2	8.5%	16.7%
鉢	10	3	13.9%	7.9%	35	2	21.3%	16.7%
合計	72	38	100.0%	100.0%	164	12	100.0%	100.0%

第17表　SX8出土土器口縁部・底部残存率集計表

b　包含層出土土器（図版40）

竪穴・土坑・性格不明遺構を除く、遺物包含層からは口縁部破片で35点、口縁部残存率で112／36個体の遺物が出土している。壺の比率が7割近くを占める。出土位置状況は先に挙げたグリッド別分布状況図から概観すると、竪穴から少し離れた場所のものが多く、器種も337～339の壺・343の高杯など竪穴出土遺物で欠落する精製器種（赤彩含む）が目立つ。細かな位置関係が不明なものが多いが、集落内（野外）での祭祀に用いられた個体である可能性も考えられる。330・331は凹線状の大きな窪みの中にごく浅い沈線状の窪みが数条平行して見られる。横ナデの可能性もある。333は口縁端部を上下に引き出して面を持つ。337は外面は精緻なミガキ調整、内面はハケおよびケズリ（スリナデ？）調整する。338は壺体部中半の突帯部分と思われ外面に貼り付けによる棒状浮文が見られる。339も壺体部と思われる。体部外面にスタンプ文（渦文と上下対向する鋸歯文）が施される。342高杯の杯部（有段）と思われるが、段側面にスタンプ文（渦文）が施される。343は内外面赤彩される有段鉢状の高杯である。体部は横方向のミガキ調整が見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	19	5	17.0%	14.3%	-	-	-	-
甕	6	4	5.4%	11.4%	36	1	34.3%	11.1%
有段壺	45.5	13	40.6%	37.1%	-	-	-	-
台付壺	0	0	0.0%	0.0%	9	1	8.6%	11.1%
壺	30	9	26.8%	25.7%	30	6	28.6%	66.7%
有段鉢	2.5	1	2.2%	2.9%	-	-	-	-
鉢	5	2	4.5%	5.7%	0	0	0.0%	0.0%
高杯	4	1	3.6%	2.9%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	30	1	28.6%	11.1%
合計	112	35	100.0%	100.0%	105	9	100.0%	100.0%

第18表　遺物包含層出土土器口縁部・底部残存率集計表

c　続縄文類似土器（346・347）

346・347は同一個体である。347は、12号竪穴の覆土から出土した。胎土は直径1～3mmの白色の混入物（石英・長石）を多く含み、明らかに遺跡内の他の土器群とは異なる土であるため、搬入品であると思われる。県内では五泉市大倉山遺跡［五泉市史編集委員会1994］、中条町兵衛遺跡・四ツ持遺跡［水澤1998］、柏崎市（旧西山町）内越遺跡［大森1983］、巻町南赤坂遺跡［前山・相田2002］、新潟市（旧豊栄市）椋遺跡［未発表］などがある。

横方向の弧状のモチーフを描く点で北海道白老町アヨロ遺跡出土土器などに類似し、恵山式土器の影響を受けた土器であると思われる。時期的には後北C1式に比定される資料であると思われる[1)]。両者ともに地文を施した後に沈線文・刺突文を施す。346では条の走行とは無関係に2本1単位の弧状の沈線文が描かれる。その沈線文の間には円形（D字状？）の刺突文が施される。347は地文ののち、弧状の沈線とその下位には平行する沈線文が描かれる。下馬場遺跡の続縄文土器については、後北C2・D式併行期で

1）石川日出志氏のご教示による。

あるとの指摘がされている［水澤1998；前山1999］。

C　縄文・その他の時期の土器

総計3,622gの土器が出土した。時期的には縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期と、量的には少量ずつながら長期間にわたる遺物が出土している。それぞれの点数・重量の割合は以下の表のとおりであるが、小片・無文のものが多く、時期の特定が難しいものは時期不明とした。縄文早期の分布範囲は5E・5Gグリッド付近で５点以上あり、その他では大グリッドあたり１～２点が出土している。全体的な傾向としてはグリッド６列以南で出土量が多い。調査前の現況では５・６列以北は後世の牧草地造成により遺物包含層が削平されていたことから、分布量の差異は地形改変の影響によるものが大きいと推測される。

早期（348～356）

348～355は早期前葉～中葉の押型文系土器、356は沈線文系土器である。348は内外面に横位の山形文が密接せず施文される。349は外面のみに山形文を持つ。文様下部が無文となっているため、密接しない文様構成であると考えられる。350～354は菱目文である。350・351では文様間の無文域が見られることから、山形文と同様に密接しない文様構成であると考えられる。355は楕円文が施文されているが小片のため文様構成は不明である。356は沈線文系土器で、山形状に施文した刺突文（原体は貝殻か）が２条（上部にも数条続くか？）見られる。下部の区画内に貝殻腹縁文を横位施文する。

前期（357～361）

前期の土器群は早期と類似した地点に多く、４～5D・Eグリッド付近で多く出土している。357～359は、胎土に繊維を含み、非結束の羽状縄文を施すものである。360は山形・横位の結節状浮線文を施す。前期末（十三菩提式）に比定される。361は底部で外側面に絡条体の圧痕が見られる。

中期（362・363）

全体量が少なく、とりわけ分布範囲が集中する箇所は認められないが、グリッド６列以南の遺物包含層残存部分で主に出土している。362は口縁端部および口縁部から縦に垂下する隆帯上に連続爪形文を持つ。半隆起線による横区画が見られる。363は斜方向の集合沈線が見られる。ともに中期初頭に比定される。

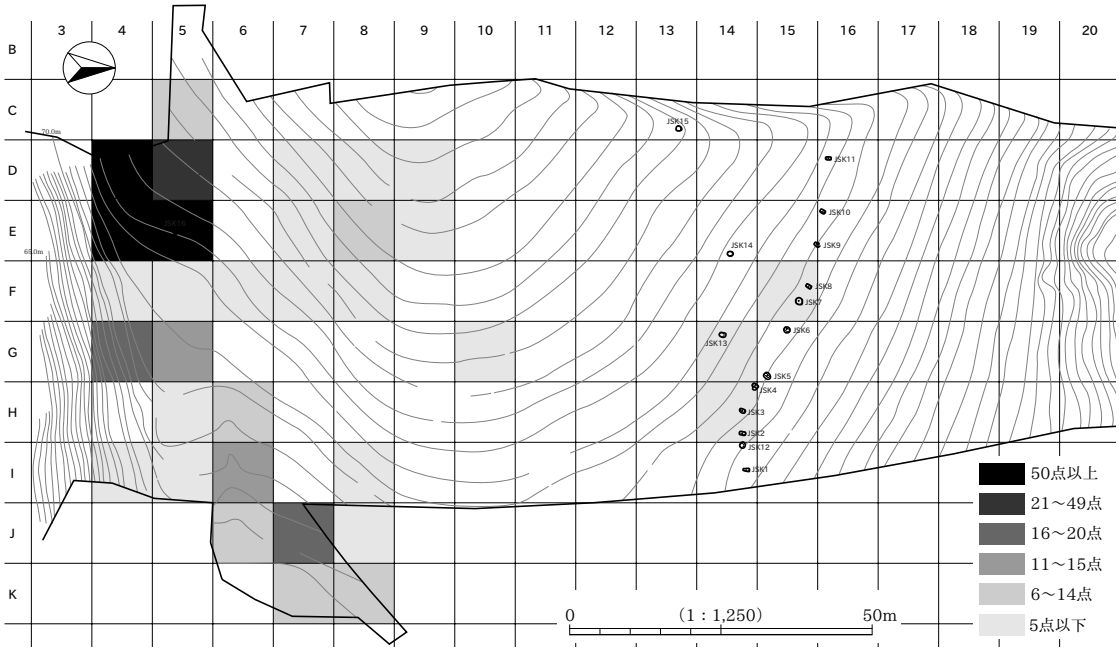
後・晩期（364～373）

分布範囲は４・5D、4E、7Jグリッドで大グリッドあたり５～10点が出土している。364～366は同一個体である。口縁部は無文である。367・368は同一個体で、口縁部に楕円状の突起を持ち、口縁部内面にはナデによる沈線状の窪みが見られる。体部外面には隆起線文(工字文)が見られる。

（複数グリッドにかかるものは按分した）

大グリッド	早期	早期～前期	前期	中期	後期	後期～晩期	晩期	時期不明	合計
4D	1		28	8			6	46	89
4E	2	1	58	2			10	24	97
4F			2					2	4
4G	1							18	19
4I	1							3	4
5C								6	6
5D			6		3		10	4	23
5E	7		37					6	50
5F	2								2
5G	11							2	13
5H	1					1		3	5
5I								4	4
6F			4						4
6H								7	7
6I	1		5					5	11
6J			5	1				1.5	7.5
7D	1								1
7E								3	3
7F			1					1	2
7J	1		2	2	8			3.5	16.5
7K				8					8
8D			1				0.25	1.75	3
8E	1		2.5				0.25	5.75	9.5
8F			1						1
8I			1						1
8J				1					1
8K			2	6				1	9
9D			0.5				0.25	0.25	1
9E			1				0.25	0.25	1.5
10G			2						2
14G								4	4
14H	1			2					3
15F								1	1
地点不明				2				1	3
総合計	31	1	159	32	11	1	27	154	416

第19表　時期・グリッド別縄文土器出土点数一覧



第15図　縄文土器重量分布図

371は口縁端部に沈線が1条あり、その下位は無文帯である。372・373は同一個体で、山形の突起を持つ甕の口縁である。

時期不明（374・375）

374は底部で側面に1条の沈線を巡らせる。375は土器片円盤で曲線状の沈線が見られる。

弥生中期（376～378）

中部高地系（栗林式：弥生中期後半）の土器群であると思われる［中島1994；石川2002］。376・377は同一個体である。斜め方向の櫛描が見られる。横羽状文の一部であると思われる。377は斜め方向の櫛描が施される。破片下部に横方向の沈線状の窪みが1条見られる。横方向の直線文の一部である可能性がある。378は地文の縄文ののち山形文が施される。

D　弥生時代の石器・石製品

各竪穴から砥石・磨石類を中心とした石器が出土しており、その他軽石製研磨具・台石等がある。石材はいずれも搬入品と考えられる。

石器・石製品群の組成は各竪穴間で相違が見られ、大きく分けて3つのタイプに区分される。①砥石と磨石類を主体とする竪穴（2・3・5号竪穴）、②砥石・磨石類のほか管玉製作工程品（ヒスイの分割品も含む）を持つ竪穴（4・6・11・12号竪穴）、③管玉製作工程品が主体となる竪穴（1・7号竪穴）がある。

1・7号竪穴ではとりわけ多くの管玉工程品が出土している。そのほとんどが打割や形割などの工程段階のもので、剥片・チップ類が他の竪穴に比べ圧倒的に多い。1・7号竪穴では研磨のための砥石類はほとんど出土せず、他の竪穴で多く出土していることから、形割などの打割の工程と研磨の工程が竪穴ごとに分業化されていた可能性も考えられる。

基本的にこの項で弥生時代の石器として取り扱ったものは主として竪穴建物などの遺構から出土した石器・石製品である。遺物包含層出土の石器は縄文時代～弥生時代までの遺物を含んでおり、これらの中にも弥生時代の石器が含まれている可能性がある。しかし、磨石類が多く、時期的な区分が困難であるため「E　包含層出土石器」として基本的に別項に記載する。一部、弥生期の可能性が高いと判断したものは本

項で記載する。

竪穴出土石器・石製品のうち、ドットで取り上げを行ったものについては掲載外遺物を含め、竪穴ごとに種別（器種）・石材・法量を巻末の観察表に記した。また、各竪穴ごとの石器の数量・組成表も合わせて記している。竪穴ごとの石器・石製品を含めた全体観はこちらを参照されたい。また、出土量の多い砂岩製の砥石については粒度の違いで大きく３つに区分し観察表に記載した。①粒径１～2mm（またはそれ以上）の砂粒が混じるもの（粗）、②一般的な砂岩のイメージのもので、粒径1mm以下の砂粒のもの（中）、③シルト岩に近い極めて粒の細かなもの（細）で、同一の砥石の中でも、砂岩の性質により粒度の違いがある場合は主要な使用部分の粒度により分類・記載した。

1）石　　器

a　有溝砥石（1～16）

図化した16点の内、13を除くその他すべては竪穴から出土した。石材は９が凝灰岩、15が泥岩で、それ以外はすべて砂岩である。溝の断面形状から断面Ｖ字状もしくは鋭角なもの（1～3・6・10～16）、半円形のもの（5・7）、半円形とＶ字状もしくは鋭角な溝、幅１～2mmの線状の溝（線状痕）が併存するもの（4・8・9？）に分類される。その他、浅い穿孔が見られるもの（13・14）、敲打が見られるもの（15）がある。

１の表面は分割面、２の表面は破面であり、破損部分の再利用かもしくは意図的に打割し、研磨面の更新を行っている可能性がある。４は表面・右側面に半円に近い溝を持ち、表面にはさらに幅の狭い線状の溝が見られる。６は表面の上部側縁に８は大型の砥石で、表面に断面半円に近いものが見られるが、裏・

石材名		石偶	石刃	管玉(欠損品含む)	管玉工程品	玉関係	勾玉	丸玉	打割工程品	石鏃	石鏃未成品	尖頭器	両極石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	磨石類	研磨具	砥石	台石	石錘？	石核	剥片	原石	器種不明	合計
安山岩	個数		1								1			6			40				1		14	4		67
	重量(g)		3.72								6.85			179.38			15289.6				39.7		158.91	497.79		16175.95
角閃石安山岩	個数																1									1
	重量(g)																649.3									649.3
火山礫凝灰岩	個数																1									1
	重量(g)																382.5									382.5
滑石	個数					1		1																		2
	重量(g)					0.1		0.44																		0.54
軽石	個数																	5								5
	重量(g)																	82.24								82.24
凝灰岩	個数					4									1	1	54		19	1	1		14	38		133
	重量(g)					0.68									352.23	51.27	11446.95		9879.47	26210	35.6		336.26	587.07		48899.53
玉髄	個数					38																				38
	重量(g)					131.19																				131.19
珪化岩	個数													1												1
	重量(g)													21.23												21.23
頁岩	個数											1											6			7
	重量(g)											0.36											5.38			5.74
結晶片岩	個数															1										1
	重量(g)															85.33										85.33
黒曜石	個数	1								2													13	1		17
	重量(g)	3.6								1.21													7.59	31.37		43.77
砂岩	個数																50		67	2				6		125
	重量(g)																14999.07		85274.86	18860				161.85		119295.78
蛇紋岩	個数					3										3							1	2		9
	重量(g)					10.86										176.86							104.93	49.36		342.01
水晶	個数					10																				10
	重量(g)					0.76																				0.76
チャート	個数					175							2				2					1	10	46		236
	重量(g)					487.62							10.62				209.31					22.47	89.69	701.77		1521.48
泥岩	個数																		2				1		1	4
	重量(g)																		1306.3				1195.5		21.06	2522.86
泥岩（珪化）	個数		1																							1
	重量(g)		10.83																							10.83
鉄石英	個数			2	4364																			1		4366
	重量(g)			0.41	1252.13																			7.25		1258.12
ヒスイ	個数					7	1		2																	10
	重量(g)					214.07	10.3		272																	496.37
ヒン岩	個数																2			1						3
	重量(g)																379.28			2380						2759.28
流紋岩	個数				1																		1			1
	重量(g)																						18.54			18.54
緑色凝灰岩	個数			5	387																					392
	重量(g)			0.32	251.69																					252.01
合計	個数	1	2	7	4751	238	1	1	2	2	1	1	2	7	1	5	150	5	88	4	2	1	60	98	1	5431
	重量(g)	3.6	14.55	0.73	1504	845.28	10.3	0.44	272	1.21	6.85	0.36	10.62	200.61	352.23	313.46	43356.01	82.24	96460.63	47450	75.3	22.47	1916.8	2036.46	21.06	194957.2

第20表　遺跡出土石器石材・種別一覧

両側・上・下面はＶ字状の溝を持つ。９は上下が原石の丸みを残し、それ以外の４面を使用している。表面は断面Ｖ字状に近いが、裏面・右側面は丸みを帯びている。10は大型品で、左側が粗粒、右側が中粒で、右側で破損している（接合して図化）。右側の中粒部分が研磨により皿状に窪む。窪んだ面に線状の溝が若干見られる。11は上側縁に剥離痕を残すが、剥離面にも部分的に研磨痕が見られる。剥離により研磨面の更新を行ったものか。13・14は錐状の工具によると思われる直径１～3mm、深さ２～3mmの断面円錐形の孔を持つ。孔の表面は平滑で回転運動によるものと思われる。13は２か所、14は９か所見られる。弥生後期の玉作では穿孔に鉄製の針が用いられることが報告されており［富田1997；野島・河野1997］、これらの孔も穿孔の工程と関連する可能性がある。近隣の裏山遺跡でもこうした孔を持つ砥石が１点出土している。しかし、孔が使用面の平坦部だけではなく、丸みを帯びた側縁近くにもあり、穿孔の台として使用したとは素材の固定・安定性の面から考えにくい。穿孔具の先端調整（研磨）等に用いたのであろうか。15は、表面に研磨痕・線状痕、表面上部から左側面上部にかけて敲打痕が見られる。表面右～下の側縁には研磨による平坦面を持ち、裏面方向からの研磨とも合わせて断面形が尖る。16は右・下側面が破断している。表・裏・左が使用面で、左・裏は凹石として使用した痕跡が見られる。

b　その他砥石（17～25）

図化した９点のうち、23を除くその他は竪穴からの出土遺物である。石材は22・25が凝灰岩、23が泥岩である以外、砂岩である。17は接合品で、表面以外は破断面である。表面には折断とは別の古い剥離痕が見られ、研磨を受けている。研磨面の更新のための剥離痕か。19は裏面に錐状工具による穿孔が見られる。21は大型・四角柱状のもので、４面を使用している。金属刃器によると思われる細かな線状痕が若干見られる。平滑な平坦面を持つ。表面は砂岩の粒度の相違により滅減の差が生じ、若干の凹凸が認められるが、概ね平坦な面である。22は表面に使用により緩やかに窪む。23は表面には細かな線状痕、裏面は剥離が見られる。裏面の剥離は部分的に研磨を受けている。24・25は小型・四角柱状のもので４面を使用する。24では側縁に原石面を残すほか、研磨面の更新・もしくは整形による古い剥離痕が研磨されきらずに残る。25は使用により側縁も整った角を持つ。形態的には古代以降の遺跡でも一般的に見られるような砥石（仕上げ砥）に類似する。左側面・裏面に古い剥離痕が残る。

c　台　　石（26～28）

いずれも竪穴の床面出土の資料である。26はヒン岩で下部は破断する。裏面は平滑で、線状痕が若干見られる。27は凝灰岩で、表面が上を向いた状態で出土している。ガジリにより線状痕の有無は不明であるが、平滑で若干の光沢を有する。28は砂岩で、表面中央部付近が使用により窪み、擦痕とその上部には敲打による表面の荒れが認められた。後述する34の磨石も同一の竪穴（6号）から出土しており、セットとして使用したものと推測される。用途については不明であるが、後述する玉作関連で、研磨剤として瑪瑙・玉髄が用いられることが報告されており［田海2000］、本遺跡においても研磨剤を作るために用いられた可能性も考えられる。

d　磨　石　類（29～38）

35を除き、いずれも竪穴出土の遺物である。29は上側縁に敲打痕を持ち、表面中央の欠損部付近には凹痕を持つ。30は右側面に弱い擦痕が認められる（自然の可能性もある）。31は右側面に敲打痕、表裏は

擦痕が見られる。32は裏面に擦痕があり、平坦な面を持つ。33は表・右側面に擦痕があり、平坦な面状になっている。34は上・右側縁に敲打痕、表面中央に凹痕を持つ。35は左・下側面を除く全面に凹痕が見られるものである。ただし、これらの凹痕は縄文に通有のものと異なり、金属で抉り取られたように皿状に浅く窪み、表面平滑なものである。類似した磨石が裏山遺跡で報告されており、弥生期の可能性が指摘されている［野水・加藤・石田2000］。36も35同様に裏面に浅い窪み状のものが見られる。上面は敲打痕が見られ、主として下面に微細な擦痕が見られる。37は上面、38は下面が平坦で擦痕が見られる。

e　軽石製研磨具（41～45）

計5点すべてを図化した。面的に摩耗しているものが多いことから研磨具とされているものである。

近隣では裏山遺跡で165点（遺構内は27点）が出土しており、大きく分けて5つの使用痕跡が見られることが報告されている［野水・加藤・石田前掲］。①面状摩耗痕（表面が平らに摩耗した痕跡）②溝状擦痕（断面円形状の物体の摩擦による断面半円または弧状の痕跡）。③筋状擦痕（鋭利な物体による切り込み状の痕跡）④刺突孔（錐・箸状の物体による刺突痕跡）。⑤円錐形穿孔（回転運動や抉り取りによるもの）があり、1つの研磨具の中に、複数の使用痕跡が見られる場合がほとんどである。

41は表裏面に鋭利な刃物による筋状擦痕・面状の擦痕、刺突孔が見られる。42は表面に面状と溝状の擦痕が見られる。円形の刺突痕跡も見られる。43は表面に筋状擦痕と円形の刺突孔、裏面には面状・溝状の擦痕が見られる。44は表面と左側縁に面を持つ。円形の刺突痕跡を持つ。45表面上部は鋭利な刃物により切り取られたように角を持ち、下部は面状の擦痕が見られる。裏面は円形の刺突が見られる。

f　そ　の　他

39は泥岩の剥片で裏面は原石面である。表面には上部と左右側縁に剥離が見られる。遺跡内では研磨痕を持つ泥岩が出土していることから、砥石の素材として持ち込まれた可能性がある。40は蛇紋岩で、裏面は原石面、表面は上下および左側面方向からの剥離が見られる。敲石の可能性があるが、裏面には敲打の痕跡は確認できない。46・47は上下方向からの剥離が見られるもので、断面扁平な形状である。形状からは石錘の可能性もあるが、46のように表裏に擦痕が見られ、研磨により扁平な形状となった可能性が高い。

2）玉作関連資料

この項で取り上げるのは砥石等の工具類を除く、玉作（管玉・勾玉）の遺物である。とりわけ遺跡では1・7号竪穴建物を中心に鉄石英・緑色凝灰岩の管玉製作工程品、原石から研磨・穿孔までの一連の工程資料が出土している。施溝分割技法は緑色凝灰岩の工程品で確認された（明瞭なものは1点のみ）以外は、すべて打割技法のみである。打割の特徴としては、定型化されたパターンはあまり見られず、石核由来の剥片もしくは両極打撃により作り出された扁平板状の素材を横置きにして分割し、角柱体を生み出すものである。分割面の観察からはコーン・バルブの発達しないものが多く見られる。技法的には古墳前期の玉作遺跡である柏崎市行塚遺跡の玉作技法（Ⅰ類）により近い技法である。

a　鉄　石　英（48～88）

原石・石核（48～50）

原石段階もしくは石核形成段階までの資料を一括した（ブランクも含む）。48は板状の石核で、平面形が

上下が平行・直線的になるように剥離したもの。右側面は原石面か。49 は石核で、裏面は原石面を残す。原石の上下を平行になるように剥離した後、縦方向（表面上部：下から上方向の剥離）に打ち割ったもの。左右側面には石核調整を施して方形に近い平面形を作り出しているが、表面には稜が残り断面三角形に近い形状となる。50 は裏面が分割面、左側面上半と上側面に石核調整剥離を施す。右側面・左側面下半は原石面（古い剥離）である。

両極打撃による板状素材（51 ～ 59）

両極打撃により両極状石器に類似した平面方形で断面平坦な素材を作出する工程品を一括した。51 は下側面に両極打撃による平坦面を持つ。裏面は原石面を残すが、右下部から剥離を入れ平坦面を作出する。下部には一部研磨の痕跡が見られる。52 は裏面に両極打撃による平坦面を持つ。53 は表面に上下方向からの両極打撃による剥離、右側面方向からの剥離が見られる。左側面は両極以前の整形の剥離か。54 は表面に上下両極からの剥離が見られる。左側縁に微細剥離が見られる。55 は表裏面に上下方向からの剥離が見られ、左右両側面は裏面からの打撃により直線的に分割される。56 は表面に上下方向からの剥離が見られる。左右側面は表裏方向からの打撃により直線的に分割されている。57 は表面に左右方向、裏面に上下両極の剥離が見られ、平坦面を作出する。左側面は裏面方向からの打撃による分割面である。58 は裏面に原石面を残す。左側面が節理面、右側面は表面方向からの打撃で分割された面である。59 は裏面が素材面、上・下・左・右側面は分割面である。

薄手の剥片で分割痕が見られるもの（87 ・ 88）

87 は上下面が分割面で、バルブがあまり発達しない。88 は上・左側面が分割面である。

分割による角柱状素材（60 ～ 67）

60 は三角柱体に近い形状のもの。上面は素材面と思われ、摩擦痕が見られる。61 は裏面右方向から分割剥離痕が見られる。左・右側面は素材面を残す。63 は表・裏面に側面方向からの分離痕が見られる。64 は裏面に素材面を残す。65 は裏面に素材面を残す。左側面は表面方向からの打撃による分割面である。66 は表・裏面に素材面を残す。左側面は表面方向からの打撃による分割面である。67 は表・裏が素材面、右が表面方向、左が裏面方向からの分割痕跡が見られる。

側縁剥離の見られるもの（68 ～ 73）

角柱状素材の側縁に連続した細かい剥離を施すものを一括した。68 は正面に比較的細かな剥離調整をする。右・裏面はわずかに研磨の痕跡が認められる。69 は表・裏面に素材面、上面は原石面を残す。表面の左・右・上面には連続した剥離が見られる。70 は左・右側面が素材面で表面に細かな剥離が見られる。裏面は分割面である。71 は表裏が素材面、左右両側面に側面剥離する。図では表現できないが、拡大鏡の観察では、裏面上部には針状の工具によると思われる打点が見られる。72 は裏面が主要剥離面である。73 は表面上部に素材面を残す。表面下部に細かな剥離が見られる。石核段階の調整剥離の可能性がある。

研磨・穿孔するもの（74 ～ 86）

74 は表面を研磨する。表・左面下部と裏面は原石面を残す。右側面は裏面方向からの分割面である。75 は上・右側面が分割面である。その他の面は研磨されており、側縁剥離の痕跡等は見られない。黒褐色に近い発色の石材である。76 では表裏面に研磨後の剥離が見られる。77 は表面を研磨する。角柱状素材に比べて幅広で、左右側面が分割面であることから、通常の仕上げ工程の研磨ではなく、分割時の接地の安定性を増すために平坦面を作出したものである可能性が高い。78 は四角柱状となる。79 は上端部分が丸みを帯びている。80 ・ 81 は下部を欠損する。82 は穿孔段階の資料である。孔径は上部で径約 1.5mm、

下部で約1mmである。83は細長のもので、遺跡内で明確に長い製品はこの1点のみである。両端に本格的な穿孔に先立つ予備的な穿孔（以下予備穿孔とする）と思われる径・深さ約1mmの孔が見られる。84は上部が欠損面である。半裁状に径の半分も欠損しているため孔の内部が観察できる。孔内面は上部の方向がわずかに太く、下部に向かって狭まる形状で、内面は非常に平滑で、光沢を有している。85は下部がわずかに欠損する。孔は上面では径約1.5mm、下面では約0.05mmほどしかない。印象材（歯科治療等に使用する型取りのための素材）による孔内部の型取りの結果（図版58カラー写真参照）断面細円錐形の孔であることがわかった。印象材表面も非常に平滑で、内眼的には線状痕等は見られなかった。86は表裏ともに剥離面で、穿孔段階での破損品の一部であるとも推測されるが、穿孔段階で長さを揃えるために打ち割られたものの一部である可能性も考えられる。

b　緑色凝灰岩（89～107）

緑色凝灰岩製の管玉製作工程も鉄石英同様に打割技法が基本となるが、一部、弥生中期の段階からの流れを引く施溝分割技法の可能性があるものが含まれている唯一96の裏面右上部に長5mmで光沢を有する擦切（施溝）の痕跡が見られる。93・94・97は縦方向の剥離が見られるもので、いずれも上面が分割面であるため施溝の痕跡が不明だが、縦方向の剥離が見られる。

原石～角柱状素材（89～93・97）

89は裏面に原石面を残す。下面を平坦に作り出しているが上・左・右面は原石面付近の白濁部分が占める。90は正面は節理面である。上面が平坦となる。左・右・下面は裏面方向からの剥離により直線的に調整しているが、右側面が他の面に対し斜めの状態に剥離面が形成されたため角柱状とはならなかった。91は表・裏面が側面方向からの分割面である。横断面は三角形状である。右側面には研磨痕跡が見られる。92は左・右面が表面方向からの分割面で裏面には素材面を残す。右側面の分割面では針先状の工具によるバルブが形成される。93は右側面が研磨により鏡面状の光沢を帯びる。下面は表面方向から、裏面は下面方向（角柱状素材の縦方向）からの剥離により平坦面を形成する。左側面は表面方向からの分割面である。表面は上下左右からの剥離が見られる。97は上面が研磨され鏡面状に光沢を有している。下面は素材面の平坦部をわずかに残す。表および左・右側面は下方向（縦方向）から剥離調整する。上面の研磨加工は、打面に対向する面の平坦化・安定化をはかる目的で行われたものと推測される。

板状素材（94～96・98）

角柱状素材のうち、薄手で断面長方形の板状のものである。94は上・左・右側面が分割面である。裏面には素材面を残し、縦方向の剥離痕が見られる。95は平面長方形の板状に成形されている。いずれの面でも上下方向（縦方向）からの剥離（分割）は見られない。96は左側面に原石面を残す。右側面は裏面方向からの分割面である。98は表（右側）面と左側面は横方向からの分割痕が見られる。側縁に細かな剥離（側面剥離）が見られる。

研磨・穿孔（99～107）

99は研磨段階のもので、右側面に横方向の剥離（分割？）痕跡が残る。100は研磨により多角柱状となるもの。101は白色を帯びた石材である。側面を幅約1～2mm程度の面取りにより多角柱状に整形している。上面に深さ0.05mmにも満たないかすかな穿孔（予備穿孔）の痕跡が認められる。102は白色を帯びた石材である。上下方向からの穿孔が見られるが貫通していない。103は流離構造がはっきり確認されるが、研磨工程品の中では最も緑色の強い石材を使用している。下部を若干欠損する。孔径は上面の孔

SI1　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数			30			3	27	155	3	7	225
	重量（g）			38.43			5.88	31.86	5.23	24.05	124.75	230.2
緑色凝灰岩	個数	1		1		1	2	1	36			42
	重量（g）	0.06		1.31		0.4	0.94	0.31	0.98			4

SI2　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数			1								1
	重量（g）			1.13								1.13
緑色凝灰岩	個数										1	1
	重量（g）										50	50

SI3　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数			4			1	2				7
	重量（g）			8.65			0.63	1.56				10.84

SI4　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数			5								5
	重量（g）			6.32								6.32

SI6　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数							1				1
	重量（g）							0.18				0.18
緑色凝灰岩	個数			3				7			1	11
	重量（g）			8.43				2.69			25.46	36.58

SI7　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		2	101	19	2	9	81	3721	9	1	3944
	重量（g）		0.41	192.4	77.22	0.37	15.66	83.97	107.83	180.32	16.32	672.65
緑色凝灰岩	個数	1	1	4			1	22	52		4	85
	重量（g）	0.08	0.02	3.4			0.92	1.34	2.31		0.03	8.1

SI8　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数									2		2
	重量（g）									76.06		76.06

SI9　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数			1				4				5
	重量（g）			1.17				7.73				8.9

SI11　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数									1		1
	重量（g）									10.38		10.38
緑色凝灰岩	個数			2				1				3
	重量（g）			3.01				0.19				3.2

SI12　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数			1								1
	重量（g）			0.67								0.67
緑色凝灰岩	個数	1										1
	重量（g）	0.12										0.12

SI13　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数			1				34	33	1		69
	重量（g）			4.29				2.12	1.36	17.58		25.35
緑色凝灰岩	個数		1	8	2		1	37	193	1		243
	重量（g）		0.04	5.43	3.42		0.3	20.89	6.41	8.13		44.62

包含層　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数			42	6		1	50		2	3	104
	重量（g）			73.15	17.08		1.05	78.14		20.88	17.89	208.19
緑色凝灰岩	個数				1			1		3	1	6
	重量（g）				3.67			0.1		62.79	38.83	105.39

第21表　遺構別管玉工程品集計表（1）

遺跡全体　管玉工程品石材別組成表

石材名		完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		2	186	25	3	14	199	3909	18	11	4365
	重量（g）		0.41	326.21	94.3	0.77	23.22	205.56	114.42	329.27	158.96	1250.87
緑色凝灰岩	個数	3	2	18	3		4	69	281	4	7	392
	重量（g）	0.26	0.06	21.58	7.09		2.16	25.52	9.7	70.92	114.32	252.01

第22表　遺構別管玉工程品集計表（2）

がわずかに大きい。孔内部の型取りでは内面は平滑で、線状痕等は見られなかった。孔の断面（型取りによる推定）が中半下よりでごくわずかにふくらむことから両側穿孔の可能性もある。104では上面の孔が下面の孔に比べて径が大きく、103同様に孔が中半下よりでわずかにふくらむ。105は半裁状に欠損し、下部も欠く。孔内は平滑で線状痕等は確認できない。孔径は、上部から下部へわずかに狭まる。106 は長さ0.5cmと101・102の約1/3、104と比べても約半分と短いものである。孔内部の型取りでは、下方に狭まる形状であることから、上面方向から穿孔されたと考えられる。107は欠損品で上部の一部であると考えられる。

c　ヒ　ス　イ（108～115）

ヒスイ関係の資料については微細な剥片資料を除きすべて図化・掲載した。遺跡ではヒスイ製の勾玉1点が出土している。製作途中の未成品は出土していないが、打割工程品が出土していることから、小規模な製作が行われていたと考えられる。108～111は原石である。110は全面に縦横に走る亀裂が見られ、表面も風化したように細かな荒れが見られる。こうした亀裂は加熱処理による可能性が高く、裏山遺跡でも同様の事例が確認されている［野水・加藤・石田2000］。112・114は擦切（施溝）の痕跡が見られるものである。111は表面に研磨痕が見られる。112は表面右上部に濃緑色の部分があり、この部分の抽出のために分割されたものと思われる。3か所の擦切溝が見られる。表面左上、右側面は施溝面で、研磨により平坦面が作り出されている。石材表面は黒味を帯びており、加熱処理された可能性がある。113は裏・左が分割面である。擦切痕は見られない。114は表面下部に擦切溝が見られる。115は勾玉の完形品で、裏面方向から穿孔される。表面の孔周辺は貫通の際に剥離した窪みが残る。孔の断面は円錐形に近い形状である。

3）石　製　品

丸玉（116）

石材は黒褐色の滑石で、不整方向の研磨痕が見られる。上面は平坦で、下部に向かって丸みを帯びる。穿孔は上から下方向への片側穿孔で、孔内面には横方向の細かな線状痕が見られる。

石偶（117）

石材は白色の流離構造が見られる石である。中半の左右側縁に両面調整し、くびれ部を作り出している。続縄文土器と共伴することが多く、東北地方に類例が多く見られる。

不明石製品（118）

石材は泥岩で、裏・上下を欠損する。表面には研磨による斜め方向の線状痕が見られる。横断面の観察からは左右両側にすぼまり、残存する右側面には幅2.5mmの平坦面を持つ。表裏、左右が対称形となる製品の可能性もあるが、器種は不明である。

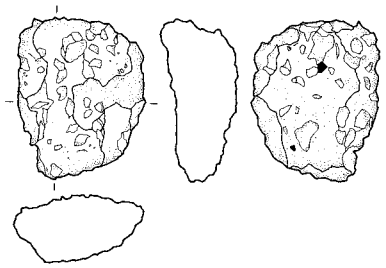
4）鉄　製　品

鉄鏃1点・板状鉄製品3点・鉈1点・針状鉄製品9（？）点が出土している。すべて竪穴から出土してい

る。竪穴建物の項でも触れたが、2・3・9・10・11・13号竪穴では炉の他に複数の焼土面（焼土の集積および床面の硬化箇所）をもっており、金属刃器によると思われる有溝砥石の存在から、遺跡内での鍛冶工程の存在が推定できる。福井県林・藤島遺跡では幅1mm前後の微細な鉄製針が多数出土している。これらは微細遺物や鍛造剥片・粒（球）状滓の採集を目的とした土壌の洗浄・磁石による選別によるところが大きい。調査時に玉作関連の遺物採取を目的とした土壌の水洗・選別は行っているが、磁石による微細遺物（小型製品・鉄片・鍛造剥片・粒（球）状滓）の選別を実施していないため、鍛冶関連遺物の有無は不明である。可視的なものでは4Eグリッドで鍛冶滓と思われる鉄滓1点が出土している。滓は楕円形で遺物表面に細かな気泡が見られる。表面に火床面に由来すると思われる黄灰色の粘質土が付着する。長さ2.1cm、幅1.7cm、厚さ1.0cm、重量3.27gと小型で、断面は椀状でいわゆる椀形滓の形状に類似する。裏面には、鍛造剥片と思われる皮膜状の微細な付着物が見られる。遺跡周辺では中世期と推定される炭窯を検出しているが、古代・中世の遺物がほとんど出土していないことから、弥生期のものである可能性もある。

鉄鏃（119）

上・下は欠損しており形状は不明。下部は銹膨れにより地金の原形をとどめないが、上方では断面が両刃である。



第16図　4Eグリッド出土鉄滓〔S＝1:1〕

板状鉄製品（120・121）

120は厚さ約1～2mmで、上部から下部に向かって幅・厚さがすぼまる形状である。上下は欠損している。表面には一部木質の残る部分が見られる。器種は不明である。121は断面長方形の板状の鉄製品で上下は欠損している。

不明鉄製品（122）

122は断面長方形の板状で、上部は欠損している。下部は銹に覆われているためはっきりと木目が確認できないが、木質に挿入された部分である可能性がある。木質部分以外の部位で刃がつけられたような痕跡は確認できなかった。器種は不明である。

鉈（123）

側面に若干の湾曲が見られる。断面形は、下部が長方形、上部は両刃になることから鉈とした。上下は破断している。

針状鉄製品（124）

全長で7.5cmあり、合計9本の針状の鉄製品が束となって銹着している。X線撮影像からは上下が欠損したものも含まれるが、先端が丸みを帯びて尖っているものも見られる。法量的には長さ5cm以上・幅2～3mmの長いもの（7本）と、表面中央付近に長さ約3cm、幅1mmの細く短いものの2種が存在するようである。針状の鉄製品については、福井県林・藤島遺跡［冨山1997］、京都府奈具岡遺跡［河野・野島1997］等が知られており、林・藤島例では穿孔具と押圧剥離具の大小2種の法量のものの存在が報告されており、本遺跡も同様の可能性がある。しかし、本遺跡の法量の大きなものは幅2mm程度と幅細で、押圧剥離具として耐えうる強度があるかどうか疑問が残る。法量の大きなものについては、形状そのままが製品ではなく、より細い針状に加工する前段の棒状の素材である可能性も指摘しておきたい。

E　包含層出土石器

遺物包含層中からは、旧石器時代・縄文時代～弥生時代の石器、弥生時代の石製品・玉作関連資料が出

土している。剥片石器類については形態から旧石器・縄文期の時期判断が可能であったが、磨石類については弥生時代の竪穴出土遺物と比較して形態的な相違が認められないものが多く、時期判断が困難であるため、時期については言及していない。

報告は、地山ローム層から出土した旧石器時代の石刃２点、縄文時代の石鏃３点・石鏃未成品１点・磨製石斧５点・打製石斧１点・両極石器２点・不定形石器４点、時期不詳の磨石類33点を図化した。

1）剥 片 石 器

石刃（125・126）

125は珪化した泥岩、126は安山岩である。いずれも剥離面を打面とする。125は表面の左側縁～右側縁下部に連続した微細剥離痕が見られる。126は風化により側縁の二次調整の有無は不明である。

石鏃（127～129）

127は基部を欠損した有茎鏃であると思われる。表面での加工は縁辺部でとりわけ入念であるが裏面では素材の剥離面を残す。先端部ほど調整が細かく直線的で鋭い。128は凹基無茎鏃で、肩部が欠損している。側縁に細かな調整が施されている。

磨製石斧（131～135）**・打製石斧**（136）

132は使用により基部が欠損したと思われ、上部の厚みが薄い。再生のため研磨されているが、破損時の剥離（整形剥離の可能性もある？）が表裏上部に残る。133は表裏面および刃部を研磨する。基部～両側縁は原石面が残る。134は表面右側縁と、裏面に整形剥離が残る。135は表面の右側縁・裏面の側縁に整形剥離を残す。左右両側面を研磨する。136は短冊形のもので、表裏に原石面を残す。

両極石器（137・138）

いずれもチャートで、上・下２方向（極）からの剥離が見られる。137は上部に連続した剥離が見られる。138も表面上部・裏面下部に比較的細かな剥離が見られる。

不定形石器（139～142）

139は下側縁に微細剥離１調整が見られる。上部が欠損しており、石鏃の未成品の可能性もある。140は円形に近い形状で側縁に調整剥離が見られる。141は横長剥片が素材で、表面右側縁に細かな剥離が連続する。打製石斧の調整剥片である可能性もあると思われる。142は珪化岩で、横長の剥片を素材とする。調整剥離痕は見られない。

2）磨　石　類

143～146は「特殊磨石」とも称されるもので、断面形状が三角形に近い礫の側面稜部分を使用する。その他については使用痕跡の組み合わせにより細分した和泉Ａ遺跡の分類（Ａ～Ｇ類）［加藤1999］に基づいて観察・記述する。Ａ類：磨痕のみ、Ｂ類：磨痕＋凹痕、Ｃ類：磨痕＋敲打痕、Ｄ類：磨痕＋凹痕＋敲打痕、Ｅ類：凹痕のみ、Ｆ類：凹痕＋敲打痕、Ｇ類：敲打痕のみのものである。磨痕については表裏に見られる明らかに滑らかな面と側面に見られるざらついた平坦面の範囲をスクリーントーンで示した。しかし滑らかな面と自然面の識別基準は観察者の感覚的なものであるため、必ずしも客観性を得たものではない。敲打痕も面的な広がりを持つものについてはスクリーントーンでその範囲を示した。

5　自然科学分析

A　下馬場遺跡出土炭化物の年代測定

株式会社　加速器分析研究所

1）年代値の算出にはLibbyの半減期5568年を使用する。

2）BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前か表す。

3）付記した誤差は、標準偏差（1σ）に相当する年代で、次のように算出する。

複数回（通常4回）の測定値についてX^2検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差とする。

4）δ^{13}の値は通常は質量分析計を用いて測定を行うが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}補正をしない場合の同位体比および年代値も参考として掲載した。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。

$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R) / ^{14}A_R] \times 1000$　　（1）

$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB}) / ^{13}A_{PDB}] \times 1000$　（2）

$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C / ^{12}C)_S$または$(^{14}C / ^{13}C)_R$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C / ^{12}C)_R$または$(^{14}C / ^{13}C)_R$

δ^{13}は、質量分析器を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C / {}^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準とし、その値からのずれを計算する。

ただし、今回の分析では加速器により測定中に同時に$^{13}C / ^{12}C$も測定しているため、標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることがある。この場合には表中に［加速器］と注記した。

また、$\Delta^{14}C$は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の^{14}C濃度を、δ^{13}の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$　［$^{14}A_S$として$^{14}C / ^{12}C$を使用するとき］または

$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$　［$^{14}A_S$として$^{14}C / ^{13}C$を使用するとき］

$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - ^{14}A_R) / ^{14}A_R] \times 1000$（‰）

貝殻など、海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的その貝と同一時代のものと思われる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percennt Modern Carbon）がよく使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のとおり。

$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000$　（‰）

$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100$　（%）

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age;yrBP）が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC / 100)$

分析試料・結果は以下の表のとおり。試料は４号竪穴（焼失建物）の炭化材、７号・12号竪穴覆土出土の炭化物、２号炭窯出土炭化物である。

IAA Code No.	試　　料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-40252	試料採取場所 ：上越市大字下馬場字明日ヶ原	Libby Age(yrBP) : 1,950 ± 40
	下馬場遺跡	δ 13C(‰)、(加速器) = -28.24 ± 0.99
	試料形態 ： 木片・炭化物	Δ 14C(‰) = -215.3 ± 3.6
	試料名(番号) ：SI4-55	pMC(%) = 78.47 ± 0.36
		δ 14C(‰) = -220.5 ± 3.2
	(参考) δ 13C の補正無し	pMC(%) = 77.95 ± 0.32
#590-1		Age (yrBP) : 2,000 ± 30
IAAA-40253	試料採取場所 ：上越市大字下馬場字明日ヶ原	Libby Age(yrBP) : 1,960 ± 40
	下馬場遺跡	δ 13C(‰)、(加速器) = -26.79 ± 1.09
	試料形態 ： 炭化物	Δ 14C(‰) = -216.4 ± 3.6
	試料名(番号) ：SI4-66	pMC(%) = 78.36 ± 0.36
		δ 14C(‰) = -219.2 ± 3.1
	(参考) δ 13C の補正無し	pMC(%) = 78.08 ± 0.31
#590-2		Age (yrBP) : 1,990 ± 30
IAAA-40254	試料採取場所 ：上越市大字下馬場字明日ヶ原	Libby Age(yrBP) : 1,770 ± 30
	下馬場遺跡	δ 13C(‰)、(加速器) = -31.13 ± 0.88
	試料形態 ： 炭化物	Δ 14C(‰) = -198.0 ± 3.4
	試料名(番号) ：SI7-D-4	pMC(%) = 80.20 ± 0.34
		δ 14C(‰) = -208.1 ± 3.0
	(参考) δ 13C の補正無し	pMC(%) = 79.19 ± 0.30
#590-3		Age (yrBP) : 1,870 ± 30
IAAA-40255	試料採取場所 ：上越市大字下馬場字明日ヶ原	Libby Age(yrBP) : 1,900 ± 30
	下馬場遺跡	δ 13C(‰)、(加速器) = -26.50 ± 0.64
	試料形態 ： 炭化物	Δ 14C(‰) = -210.8 ± 3.3
	試料名(番号) ：SI12-1	pMC(%) = 78.92 ± 0.33
		δ 14C(‰) = -213.2 ± 3.1
	(参考) δ 13C の補正無し	pMC(%) = 78.68 ± 0.31
#590-4		Age (yrBP) : 1,930 ± 30
IAAA-40256	試料採取場所 ：上越市大字下馬場字明日ヶ原	Libby Age(yrBP) : 1,240 ± 40
	下馬場遺跡	δ 13C(‰)、(加速器) = -24.00 ± 1.07
	試料形態 ： 炭化物	Δ 14C(‰) = -143.4 ± 3.9
	試料名(番号) ：CSK2-1	pMC(%) = 85.66 ± 0.39
		δ 14C(‰) = -141.7 ± 3.5
	(参考) δ 13C の補正無し	pMC(%) = 85.83 ± 0.35
#590-5		Age (yrBP) : 1,230 ± 30

第23表　放射性炭素年代測定結果一覧

B　下馬場遺跡出土炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1）はじめに

新潟県上越市に所在する下馬場遺跡は、高田平野西縁部丘陵上に立地している。本遺跡では発掘調査の結果、弥生時代後期後半の竪穴住居跡や土坑、縄文時代の陥穴状土坑列、時期不明の炭窯等が検出されており、竪穴住居跡では、焼失等により住居構築材と考えられる木材が炭化、残存する状況や時期不明の炭窯では木炭が残存する状況が確認されている。

本報告では、竪穴住居跡や炭窯から出土した炭化材の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

2）　試　　料

試料は、弥生時代後期後半の住居跡（SI4）から出土した炭化材９点と、時期不明の炭窯（CSK2）から出土した炭化材１点の計10点である。なお、SI4－10に３片、CSK2－１に２片と複数の炭化材が認められたことから、これらの炭化材も樹種同定を実施することとした。したがって、分析試料は計13点となる。

・SI4

SI4は、丘陵の尾根上に構築された住居跡で、床面は一辺約５～6mの隅丸方形を呈する。炭化材は、住居跡北西部に集中し、特に北西隅付近に大型の炭化材が集中する傾向が認められる。これらの炭化材は、北・西壁に沿って出土するものと、壁から住居中央部方向に延びるもの等がある。分析試料は、これら大形の炭化材とともに、住居跡内北東側や中央付近の細片化した炭化材の集中より採取された試料である。

・CSK2

当遺構は、伏せ焼の炭窯である可能性が指摘されている。なお、遺物が共伴しないことから炭窯の操業時期は不明である

3）分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

4）　結　　果

結果を第31表に示す。炭化材はすべて落葉広葉樹で３種類（クリ・カツラ・キハダ）に同定された。以下に各種類の解剖学的特徴等を記す。

・**クリ**（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・**カツラ**（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）　　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は極めて高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～30細胞高。

・**キハダ**（*Phellodendron amurense Ruprecht*）　　ミカン科キハダ属

試料はいずれも孔圏部の保存状態が悪い。環孔材で、孔圏部は２～５列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～５細胞幅、１～30細胞高。

遺構	時期	試料番号	形状	点数	樹種
SI4	弥生時代後期後半	1	板材	1	クリ
		6	角・棒状材	1	クリ
		63	板材	1	キハダ
		10	角・棒状材	3	クリ（3）
		16	角・棒状材	1	クリ
		55	板材	1	クリ
		56	板材	1	カツラ
		66	板材	1	キハダ
		64	板材	1	キハダ
CSK2	時期不明（古代?）	1		2	クリ（2）

第24表　樹種同定結果

5）　考　　察

a　住居跡の木材利用

SI4から出土した炭化材には、落葉広葉樹３種類（クリ・カツラ・キハダ）からなり、中でもクリが比較的多い。分析試料とした炭化材は、出土状況や形状等の特徴から住居構築材と考えられることから、少なくとも３種類の広葉樹が住居構築材として利用され、クリが多く利用されていたと推測される。なお、炭化材は出土時の形状観察により板状、角・棒状に分類されている。この分類による樹種の傾向を見ると、角・棒状材はいずれもクリのみからなり、板状の炭化材は広葉樹３種類が認められた。本分析結果によれば、炭化材の形状により木材利用の差異があるように見える。ただし、当住居跡では今回の分析試料を含め大量の炭化材が出土しており、本分析結果が全体の傾向を示しているか課題が残る。今後、この他の炭化材についても調査を行い、検証する必要がある。

ところで、当住居跡の炭化材を構成する木材の特徴を見ると、クリは重硬で強度や耐朽性が高い特徴を有し、カツラは強度は中庸であるが、木理が通直で加工性が高いといった特徴を持つ。キハダは、強度は中庸であるが、耐水性が比較的高い種類である。これらは、丘陵から山地の谷斜面等に生育している種類であり、遺跡周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。

上越市内では、弥生時代後期の高地性集落跡とされる裏山遺跡において、弥生時代の竪穴住居跡（6号住、7号住）２基から出土した住居構築材と考えられる炭化材３点の分析調査が行われている［パリノ・サーヴェイ株式会社2000］。この調査成果によれば、クリ（6号住）、キハダ（7号住）が認められているが、試料数が少ないため住居構築材に用いられた木材の種類構成や主体となる種類等の確認までには至っていない。本分析結果と比較すると、クリ・キハダの２種類が認められている点で共通することから、当該期の住居構築材として用いる種類として、これらの木材が普通に利用されていた可能性がある。

b　炭窯の炭化材

炭窯は、古代の可能性があるが、時期の詳細は不明である。当遺構から出土した炭化材は、製炭された木炭の一部と考えられ、２点の試料はいずれもクリと同定されたことから、CSK2では少なくともクリを木炭の材料としていたと考えられる。

本遺跡の周辺地域の炭窯から出土した木炭の分析調査は、妙高山東麓に位置する関川谷内遺跡、前原遺跡、丸山遺跡、八斗蒔原遺跡等で行われている［パリノ・サーヴェイ株式会社1998・2004a・2004b；古環境研究所2004］。これらの調査成果によれば、関川谷内遺跡（妙高高原町）の平安時代の炭窯では全点がコナラ節に、前原遺跡（中郷村）の平安時代の所産と考えられる４号炭窯では、炭化材の大多数がブナ属に、丸山遺跡（中郷村）の時期不明の２号炭窯や八斗蒔原遺跡（中郷村）の平安時代の所産と考えられる１号炭窯では全点がブナ属に同定されており、本遺跡の炭窯で認められたクリは確認されてい

ない。

クリ、コナラ節、ブナ属の木材は比較的重硬な材質を有する点で共通するが、木炭にした場合にそれぞれ材質が異なる。コナラ節は硬く火持ちする炭に、ブナ属はやや軟質な炭に、クリは軟らかくガサガサして立ち消えする炭になるとされる［岸本・杉浦1980］。

このように、木材の樹種により木炭の性質が異なる点を考慮すると、用途を考慮した目的的に樹種を選定し、それぞれ異なる木炭窯で焼成した可能性がある。今回の分析結果では、木炭の用途を明らかにするまでには至らないが、今後、本遺跡で検出された炭窯の性格を検討することも含め、さらに、炭窯から出土する炭化材等の分析や調査事例を蓄積し、炭窯と木炭の樹種の傾向を検討することが望まれる。また、木炭が利用される生産遺構等についても同様な分析調査を行い、当時の木炭利用の用途を明らかにしたいと考えている。

引用文献

岸本定吉・杉浦銀治　1980 『日曜炭やき師入門』 総合科学出版　p.250

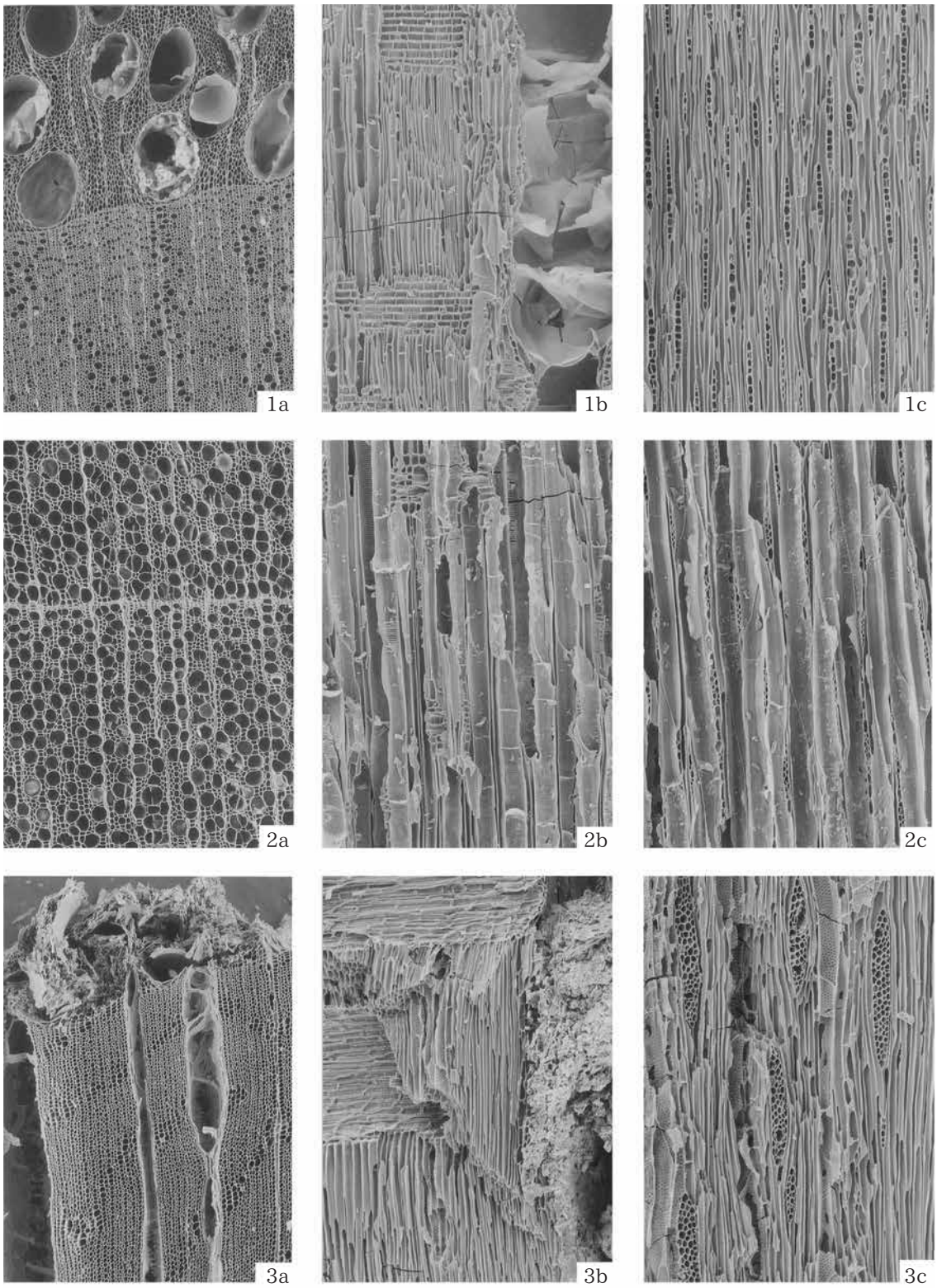
パリノ・サーヴェイ株式会社　1998 「関川谷内遺跡における自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ 関川谷内遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　p.55-59

パリノ・サーヴェイ株式会社　2000 「裏山遺跡から出土した炭化材の年代と樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ 裏山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　p.89-92

パリノ・サーヴェイ株式会社　2004a 「炭化材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第129集 上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅺ　八斗蒔原遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　p.28-29

パリノ・サーヴェイ株式会社　2004b 「炭化材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第130集 上信越自動車道関係発掘調査報告書XII 前原遺跡 丸山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　p.70-72

株式会社古環境研究所　2004 「前原遺跡出土炭化材の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第130集 上信越自動車道関係発掘調査報告書XII 前原遺跡 丸山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　p.46-53



1. クリ（SI4-1）
2. カツラ（SI4-56）
3. キハダ（SI4-64）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

第17図　下馬場遺跡出土炭化材顕微鏡写真

6 ま と め

A 出土土器の編年的位置付け

遺跡からは口縁部残存率で1976.5／36個体の土器が出土した。遺物包含層が削平されていたこともあり、土器の大半が竪穴建物（床面もしくは堆積土）から出土したものである。小片が多いため、器形の復原が難しいものも含まれるが、高杯・器台や甕（有段）の口縁形状からある程度の先後関係を示す。遺構出土土器の時期決定にあたっては、滝沢編年［滝沢2000］およびそれ以降の時期は川村編年［川村2000］を基軸とし、1～5期の5段階で出土土器及び遺構の変遷を捉えた。頚城周辺の主要な遺跡・遺構の変遷、既往編年案との対応関係は第33表のとおりである。

下馬場1期（法仏式古段階・滝沢2期古）　**8・9・11・13・14号竪穴出土土器群**

甕　有段・凹線系のA類は少なく、有段・無文のB類が目立つ。14号竪穴を除く各竪穴から出土しているB1・B2類（近江系の流れのもの）では口縁部内面の稜が明瞭で、口縁部の延びはあまり顕著ではない。その他の甕では、断面「く」の字状で口縁端部を上下に引き出し広い面取りをするC2類が特徴的に見られる。264の土器は後期前半（猫橋式・滝沢1期）の糸魚川市後生山遺跡3号住居跡出土土器に類似する。しかし、後生山例よりも球形に近い体部を持ち、肩部の刺突を欠く点は新しい傾向といえるか。

壺　口縁端部を有段状に摘み上げるE1類（214・274など）が見られる。柏崎市戸口A遺跡［品田1990］（AⅡ段階）に多く見られる。

鉢　近江系譜の受口状口縁を持つもの（312）や有段の鉢B類（218・285など）も目立つ。口縁・肩部に刺突文を持つ、美濃地方に系譜（条痕文系の受口鉢）が求められるもの（313）も含む[1)]。11号・14号は全体的に後期前半からの流れを引く器形が多いことから1期の中でも古い様相を示す。

高杯・器台　高杯A類、器台A類など杯・受部、脚部有段で棒状脚のもののみである。スタンプ文（渦文・鋸歯文）を持つもの（220・221）も見られる。口縁部が比較的長く外反するものも一部見られ（286）、時期的に1段階下がる可能性がある。

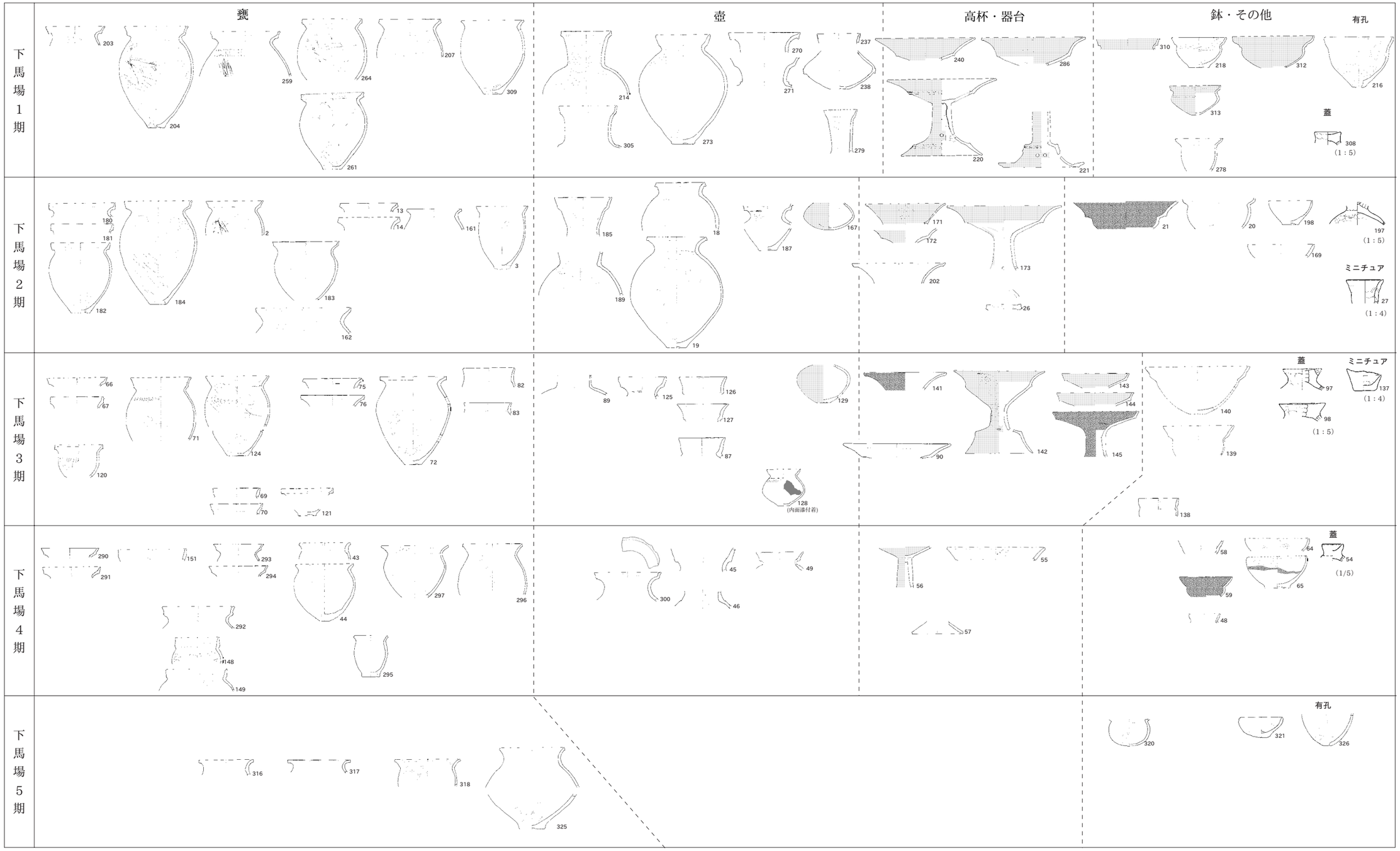
下馬場2期（法仏式新段階・滝沢2期新）　**1・6・7・10号竪穴出土土器群**

甕　擬凹線系のA類（1・180～182）は、1段階と直接比較検討ができる資料が少なく（203：1点のみ）、1段階との明確な差異は確認できない。その他の甕では口縁端部の下方への引き出しが弱まるC3類が増加し、端部を上方に引き上げるものが目立つようになる。C1類（162・183）についても、上方の摘み上げを顕著に行うことで有段状にしていることから、C3類増加の流れの中で捉えることができるか。D類の「八幡山式」に類似する土器も見られる。

壺　長頸のE類（166・185・253・254）が続く。短頸・球胴のG類（18・19・186）が加わる。G類でも18と186を比較すると186では短頸化が進んでいる。K類の細頸壺（167）も見られる。

鉢　鉢A類では、口縁部が大きく外反する21が見られ、1段階の310と比較して新しい傾向を示す。

1）赤沢徳明氏のご教示による。岐阜県関市砂行遺跡［成瀬ほか2000］で時期的な変遷が示されている。施文方法は口縁部および肩部に列点刺突、肩部に櫛描文を持つ砂行Ⅱ－1もしくはⅡ－2段階（法仏併行期）に位置付けられている。



第18図　下馬場遺跡出土土器の変遷図（S＝1：10）

<table>
<tr><th colspan="2">下馬場遺跡</th><th colspan="2">越後</th><th colspan="2">頸城周辺の主な遺跡・遺構</th><th colspan="2">南能登</th><th colspan="2">南加賀</th><th rowspan="2">北陸型式</th></tr>
<tr><th>時期</th><th>遺構の変遷</th><th>［滝沢2000］</th><th>［川村2000］</th><th colspan="2">頸城</th><th colspan="2">［栃木1995］</th><th colspan="2">［田島ほか1986］</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td>1期</td><td></td><td colspan="2">後生山3号住</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">1群</td><td>猫橋</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1期</td><td>SI11・SI14</td><td rowspan="2">2期（古）</td><td rowspan="2"></td><td colspan="2">裏山4号竪穴</td><td rowspan="4">7期</td><td>1</td><td rowspan="2">2群</td><td rowspan="4">法仏式</td></tr>
<tr><td>SI8・SI9・SI13</td><td colspan="2">子安SX191・下割SX27</td><td>2</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2期</td><td>SI1</td><td rowspan="2">2期（新）</td><td rowspan="2"></td><td colspan="2">上ノ平・矢代山</td><td>3</td><td rowspan="2">（＋）</td></tr>
<tr><td>SI6・SI7</td><td colspan="2">1・2号住</td><td>4</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3期</td><td>SI3・SI4</td><td rowspan="2">3期</td><td rowspan="2"></td><td colspan="2" rowspan="2">百両山10号土坑・子安SE645</td><td rowspan="4">8期</td><td>1</td><td rowspan="2">3群</td><td rowspan="4">月影式</td></tr>
<tr><td></td><td>2</td></tr>
<tr><td rowspan="2">4期</td><td>SI2</td><td rowspan="2">4期</td><td rowspan="2"></td><td colspan="2" rowspan="2"></td><td>3</td><td rowspan="2">4群</td></tr>
<tr><td>SI5・SI12</td><td>4</td></tr>
<tr><td rowspan="4">5期</td><td rowspan="4">SX8</td><td rowspan="4"></td><td>1段階</td><td colspan="2">津倉田SX104　　細田遺跡</td><td rowspan="4">9期</td><td>1</td><td>5群</td><td rowspan="2">白江式</td></tr>
<tr><td>2段階</td><td colspan="2">上ノ平・矢代山24号住</td><td>2</td><td>6群</td></tr>
<tr><td>3段階</td><td colspan="2" rowspan="2">下割SX1317・津倉田SK461・津倉田SK287</td><td>3</td><td>7群</td><td>古府クルビ式</td></tr>
<tr><td>4段階</td><td>4</td><td>8群</td><td></td></tr>
</table>

第25表　下馬場遺跡竪穴建物出土土器の編年的位置付け

椀状のＥ類（169・198）が加わる。

高杯・器台　高杯Ｂ類（202）、器台Ａ類（173）など口縁部の発達が見られるもののほか、前代からの流れの口縁部が短いもの（23）も含まれる。

下馬場３期（月影式古段階・滝沢３期）　**３・４号竪穴出土土器群**

甕　有段系の甕ではＡ類があまり見られず、無文のものではB3類（71）の口縁部の発達するものやB5類の口縁部段が不明瞭なものが増加する。その他、Ｃ類では、前代よりも口縁端部を上方に弱く引き出すC4類が目立つようになる。

壺　有段・短頸のＢ類（87・126・127）・Ｃ類（125）が見られるようになる。前代からのＥ類（89）も一部残ると思われる。

鉢　段が不明瞭なＤ類（138・139）が見られる。前代よりも小型化すると思われる。段内面の屈曲部が明瞭でなく、直線的に伸びるものが多い。

高杯・器台　器台Ｃ類では脚部が短くなる。新たにＡ類（143～145）が見られるようになる。

下馬場４期（月影式新段階・滝沢４期）　**２・５・12号竪穴出土土器群**

甕　有段系の甕では、B3類、B4類、B5類などの段が不明瞭なもののほか、上方に直線的に延びるB6類が目立つようになる。C4類では前代よりもさらに口縁端部の摘み上げが弱く、面取りの幅は前段階よりもさらに狭くなる傾向にある。

壺・鉢　壺ではＤ類が大半を占める。Ｆ類は１点のみ（300）。鉢は椀状のＥ類が多く、有段部が不明瞭なＤ類も残る。

その他　高杯・器台などその他の器種については小片が多く、様相は把握し難い。

下馬場５期（白江式～古府クルビ式段階・川村１～４段階）　**SX8出土土器群**

SX8出土土器群のみである。川村の３・４段階に対応する資料のみで、１・２段階に相当する資料は確認されていない。土器の上では若干の空白期が存在している。有段系の甕は見られなくなり、C4類で占められる。体部球胴の鉢（320）や体部砲弾形の有孔鉢（326）が見られる。

B　玉作関係資料について

越後・佐渡地域は、出雲・丹後・加賀地方などとともに玉（ヒスイ製玉類・管玉等）の製作が盛行した地域で、57遺跡が確認されている［田海2003］。

越後では玉作遺跡の多くが海岸部に位置する。中期の管玉製作遺跡では、柏崎市下谷地遺跡が知られており、工程の復元案が提示されている［斎藤1979・1983］。その他、和島村大武遺跡［春日1997：未報告］、土坑や工房建物群を持つ上越市吹上遺跡［木島・笹澤2003：本報告は未刊］においても工程の復元が可能な資料群が出土している。後期では、糸魚川市後生山遺跡で平面円形の３号竪穴から玉作関連遺物が出土した。また、上越市裏山遺跡からも少量であるが管玉製作関連の遺物（ヒスイ製勾玉の工程品もあり）が出土している［野水・加藤・石田2000］。一方、佐渡では新穂玉作遺跡群の出土遺物による製作技法の検討［計良1961］や近年発掘調査が行われた平田遺跡の成果が報告されている［田海2000］。弥生以降の管玉製作については、古墳時代前期の遺跡である柏崎市行塚遺跡（吉井遺跡群）において製作技法の復元が行われている［伊藤1985］。

弥生時代後期の管玉製作工程については、これまで県内において資料数が限られていたこともあり状況があまり把握されていなかった。今回下馬場遺跡では、工程の復元が可能な資料群が出土しており、ここでは下馬場遺跡の玉作の工程とその特徴についてまとめる。

1）下馬場遺跡の管玉製作工程

下馬場遺跡では鉄石英および緑色凝灰岩の管玉製作が行われているが、全体では石材の比率で約９割強を鉄石英が占める。使用石材の比率は、下馬場２段階で鉄石英の圧倒的高率に変化すると考えられる。第29図・第30図に鉄石英、緑色凝灰岩ごとの製作工程を示した。

鉄石英の管玉工程品の技法的な特徴としては、①打割のみで角柱状素材を得る、②両極打撃により扁平素材の作出、③扁平素材の分割による角柱状素材（四角柱体）の作出が挙げられる。扁平な素材→分割→角柱状素材という大枠は存在するものの、細部では多様なあり方を示す。

a　鉄　石　英

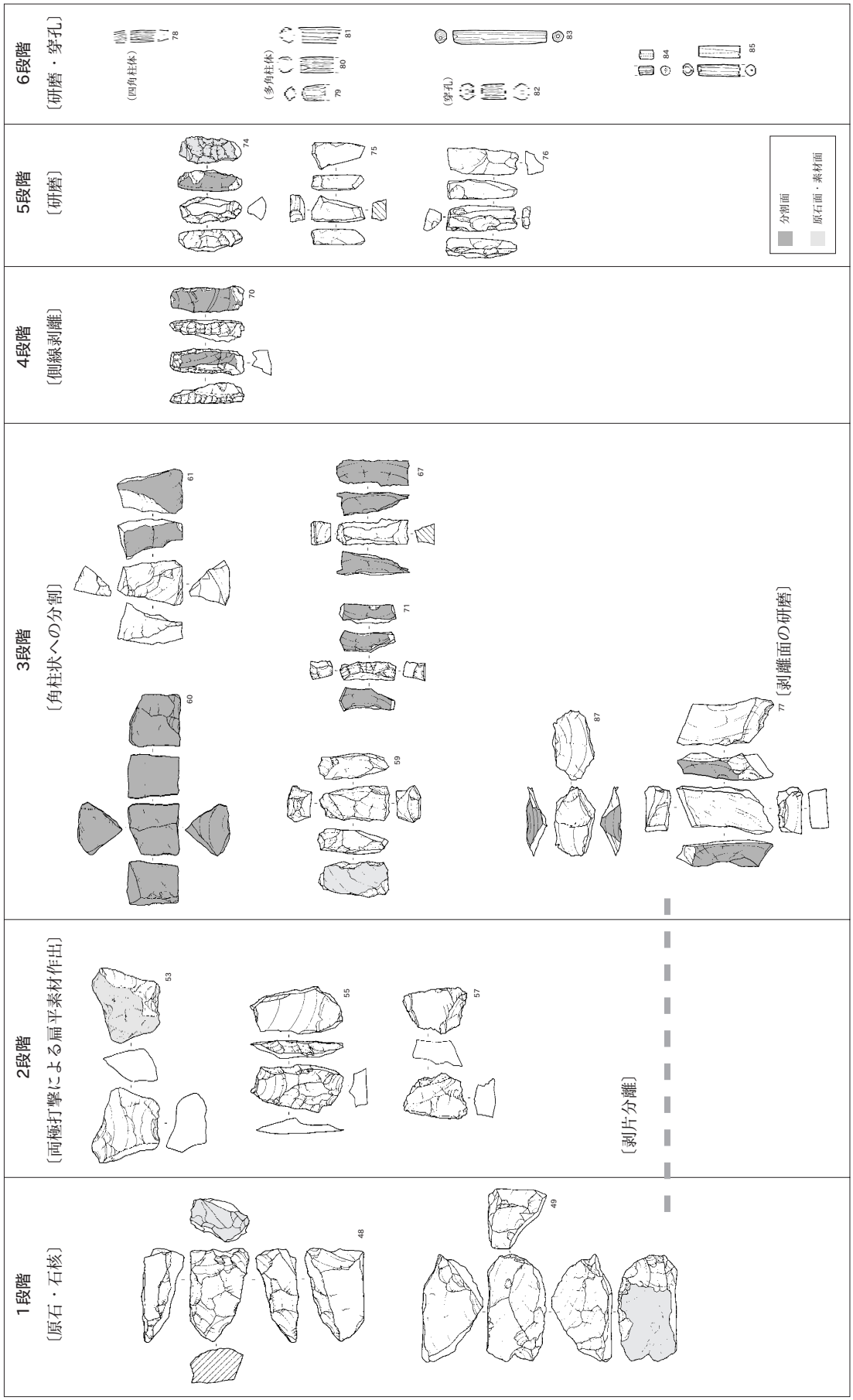
鉄石英の管玉工程については６つの段階に区分することができる。

１段階は原石もしくは石核の調整段階の資料群である。遺跡で出土した原石は図化・掲載した以外のものでも大きさが5cmを越えるものはほとんど見られず、小型の原石のみである。

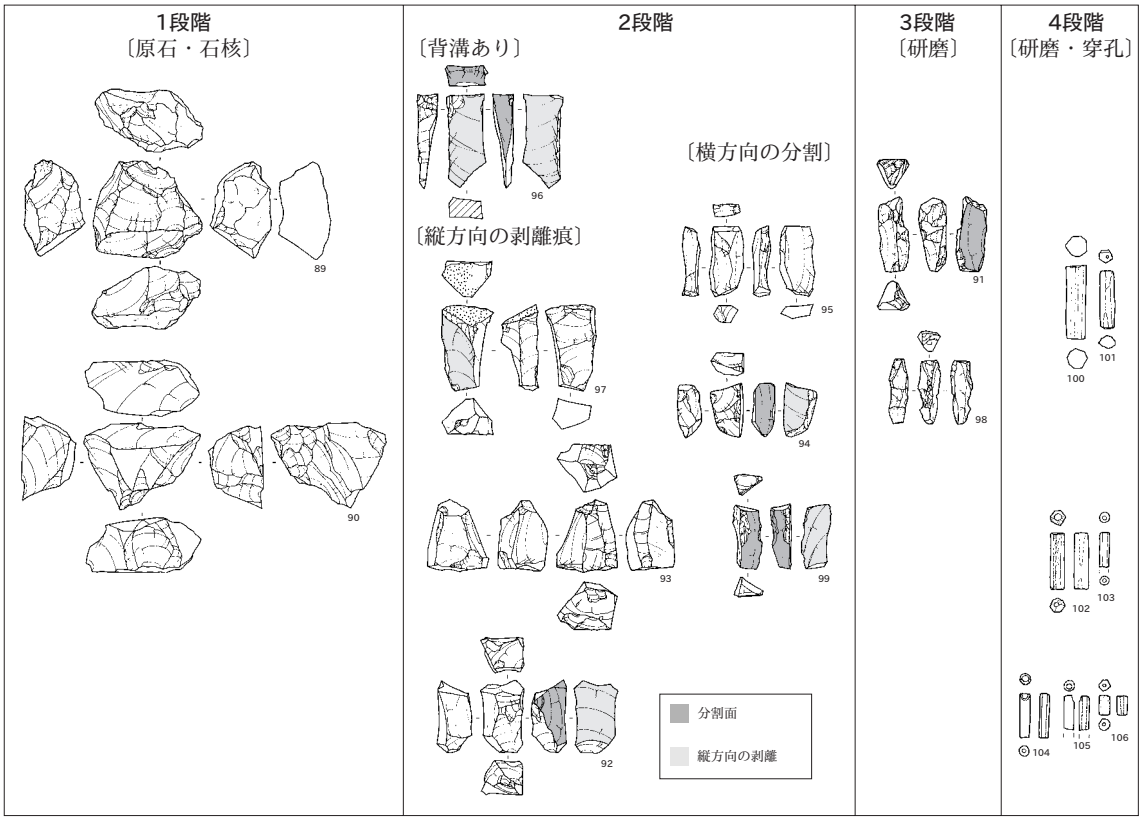
１→２段階の工程では、53・55・59など両極打撃により方形に近く扁平な素材を作り出す。下馬場遺跡では石核になり得ないような小さな原石が多いことから、原石を有効かつ最大限に利用するため選択された技法であると思われる。また、良好な事例が存在しないため図化していないが原石が比較的大きい場合の石核由来の剥片素材もこの工程に含まれる。

２→３段階では、両極状の素材、剥片素材など扁平素材を表裏面方向から分割し、角柱状の素材を作り出す。分割面は打撃によるコーンやバルブの発達が明瞭に見られないものが多い[1)]。70・77・67では

1）馬場伸一郎氏のご教示による。「ドライバー状工具」を使用すると打点付近に線状の痕跡が確認されることが指摘されている［久田・馬場2003；宮田・馬場2004；馬場2004］。他に針状工具による打点痕跡（62表面、71裏面）の存在についてもご教示いただいた。こうした工具使用痕跡の把握には顕微鏡（低倍率）による観察が不可欠であるが、今回はミクロな観点での分析ができなかった。



第20図　管玉製作工程（鉄石英）



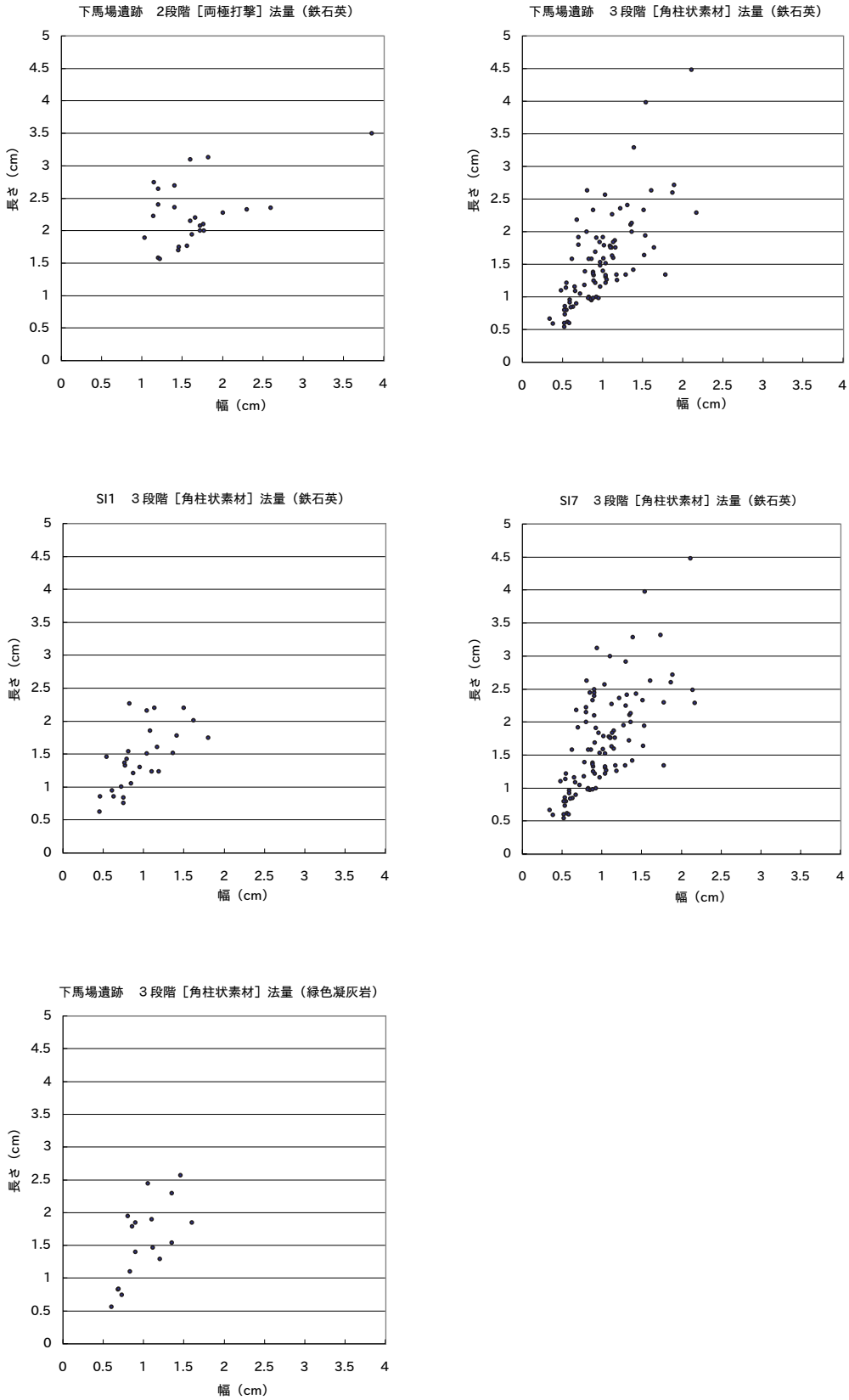
第21図　管玉製作工程（緑色凝灰岩）

扁平な工具（ノミかタガネ状の工具：鉄器か）による線状の打撃痕跡が見られる[2)]。

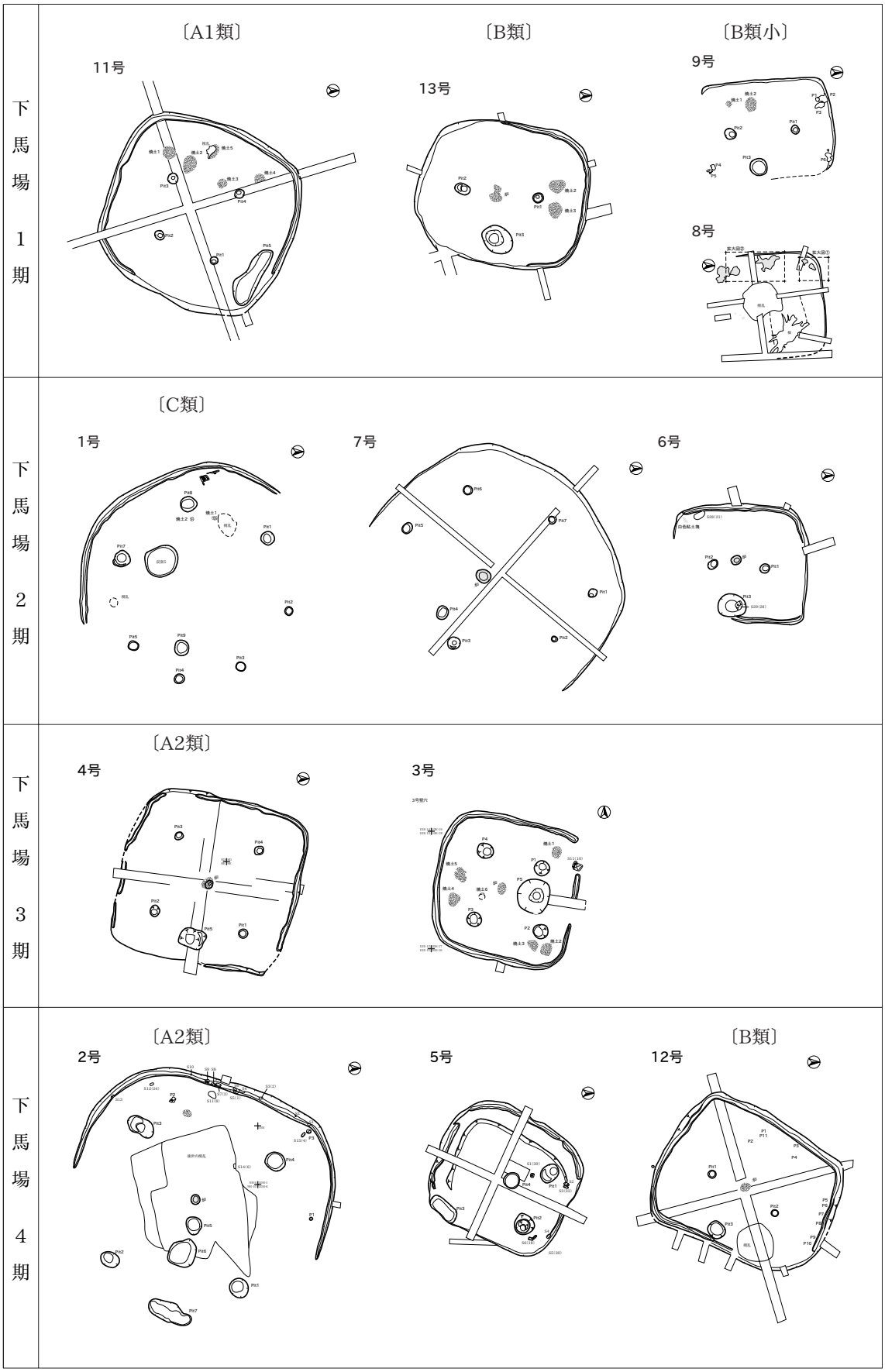
4段階は側稜剥離工程［計良1961］と呼ばれる側縁への連続した剥離を持つものである。一般的には角柱状に近い素材のねじれを取るために施されるという。出土資料中で典型的にこの工程の痕跡が見られるものは少なく、必ず行われていた工程であるとは考えにくい。その点では、中期段階の「諏訪田技法」］［寺村1993］・「大中の湖技法（琵琶湖周辺、近畿北部）」［佐藤1970］との共通性がある。

5段階は研磨、6段階は研磨および穿孔段階である。完形品は少ないが、研磨段階の資料からは大小2種類の管玉製作が行われていたと考えられる。また、穿孔はまず、82・83のように両面に予備的な穿孔ののち、本格的な穿孔が行われると思われる。84・85では孔の片側が広く、もう一方に向かって細くなる形状であり断面形状からは片側からの穿孔に見える。しかし、後述する緑色凝灰岩の工程では100のように両側穿孔のものが見られること、予備的な穿孔が上下両面に見られることなどから鉄石英においても両側からの穿孔が行われた可能性を指摘しておきたい。孔の断面は平滑に仕上げられており、穿孔時の孔の食い違い等は確認できない。細い工具で穿孔・貫通させた後、穿孔用とは別の工具で仕上げた可能性も考えられる。穿孔段階での工具の使い分けについては、河野・野島が京都府奈具岡遺跡の事例の検討で別工具による2段階の穿孔が行われていた可能性を指摘している［河野・野島2003］。なお、穿孔具については石針特有の穿孔方向に直交して生じる線状痕が見られないことから鉄製工具であると思われる。実際、穿孔具の可能性がある針状の鉄製品が13号竪穴から出土している。

2）時期的に近い遺跡では富山県東砺波郡福岡町下老子笹川遺跡では周溝を持つ竪穴建物から玉作関連資料が出土している。実見の限りでは下馬場遺跡と同様に角柱状の側面に横方向からの打割の痕跡を残すものが見られる。



第22図　管玉工程品法量分布グラフ



第19図　下馬場遺跡竪穴建物の変遷（S＝1：200）

第31図に２段階（両極状素材）と３段階（角柱状素材）の法量を示した。２段階では幅1.0～2.0cmの範囲に法量が集まるが、３段階にはいると幅がその半分の0.5～1.0cmの範囲に集まっており、分割による法量の減少が看取できる。長さに関しては２段階の半分程の1.0cm以下のものも見られるが、1.0～2.0cmの範囲のものが多い。資料がまとまって出土した１号・７号竪穴建物それぞれの３段階の法量は数値の集中範囲に大きな差異は認められない。ただし、７号で2.5cm以上の比較的長さの長いものが少量存在しており、６段階83の法量の製作に関わるものとも推測される。

b　緑色凝灰岩

資料からは４つの段階に区分できる。扁平な素材を分割する点では鉄石英の工程と共通するが、２段階とした資料群では96のように擦切（施溝）と分割に伴う縦方向（角柱に対する方向）からの剥離痕跡が典型的に見られるものや、擦切痕は見られないが92・93・97のように縦方向の剥離痕跡を持つものが存在する。１から２段階の一部の工程のみであるが弥生中期の玉作に盛行する施溝分割が残ると思われる。

c　玉作と鉄製工具

弥生時代の鉄製工具の導入にあたっては、玉作が先導的な役割を果たしたという指摘［野島・河野2001］がある。玉作関連工具（穿孔具や分割具）で鉄製品の出土が認められた遺跡事例としては、京都府八木町池上遺跡［田代ほか2002］、京都府弥栄町奈具岡遺跡［田代1993；河野・野島1997］、福井県福井市林・藤島遺跡［冨山1997］などが知られている。また、鉄製工具は確認されていないが、石川県塚崎遺跡・石川県小松市一針Ｂ遺跡［久田ほか2002］、猫橋遺跡などでは施溝分割に鉄製工具が使用されていた可能性が指摘されている［馬場2004］。本遺跡でも穿孔具もしくはその素材と見られる13号竪穴出土針状鉄製品やバルブの明瞭でない打割工程品の特徴から扁平な鉄製工具の使用が推測される。

Ｃ　集落について

1）竪穴建物の構造

越後における竪穴建物の構造については、都出比呂志の竪穴構造（主柱穴配置・炉の構造）の違いによる地域性の把握［都出1989］に基づき、越後の状況を検討した論考が、川村・品田・滝沢［川村1996・品田1992・滝沢1995］により提示されている。川村は新井市上ノ平・矢代山遺跡１・２号住居址を北陸と北信濃地域の折衷的な構造であると指摘したほか、滝沢は５・６期（新潟シンポ５・６期）での竪穴平面プランの方形化と求心構造への統一化の動きを指摘している。

下馬場遺跡の竪穴建物は、Ａ類：平面隅丸方形で主柱穴が４基のもの、Ｂ類：平面隅丸長方形で２基主柱構造のもの、Ｃ類：平面円形（多角形の可能性あり）で環状に主柱穴を配置するもの、以上３つに分類できる（分類の呼称は［小池1998・小池ほか2000］のものをそのまま使用）。Ａ類は柱穴と炉の配置関係から対称構造のA1類と求心構造のA2類に細分できる。Ｂ類については、長軸方向の規模で大小２つが存在する。能登の後期後半にも継続して存在するとされ、越後での類例は上ノ平・矢代山24号住居址のみである。また、Ｃ類の平面円形のものについては、玉作関連の打割工程品が多く出土しており、県内の事例では時期的に先行する糸魚川市後生山遺跡１号住居跡（滝沢１期、玉作工房と推定される：平面円形）との共通性が見られる。周辺地域の事例では、石川県宿東山遺跡６号住居跡（下馬場１～２期併行）［北野1987］で鉄製品・砥石などの集中的な出土から特殊性が指摘されているほか、富山県高岡市下老子笹川遺跡B6地区２号住居

跡やB5地区12号住居跡では玉作関連遺物が多数出土している遺構が平面円形のプランを持つ。平面積的に見ても規模の大きなものが多く、遺跡の中心的な建物として位置付けることが可能なようである。

2）集落構造の変遷と遺跡の性格

今回の調査範囲内では、妙高市斐太遺跡群や上越市裏山遺跡と同じように、沖積面との比高差が約40mの高台に立地することから、先に挙げた２遺跡と同様に防御的集落であると評価される。竪穴の時期的変遷は第33表・第28図のとおりである。当初は法仏式単一の遺跡と時期ごとの立地や建物の特色を挙げる。

１期はA1類の11号竪穴とＢ類の13・８・９号竪穴（規模大１・小２）で構成される。立地は丘陵南側の斜面際にまとまる。玉作は小規模ながら確認できる。13号では、比率的に緑色凝灰岩が鉄石英を上回る。針状の鉄製品のほか、針状の工具で穿孔された痕跡を持つ砥石が出土しており、玉作への鉄器の導入はこの段階ですでに行われていると思われる。

２期はＣ類の１・７号竪穴とＢ類の６号竪穴で構成される。立地は標高72～75m付近にあり、１・７号の中間に６号が位置する。玉作が最も盛行した段階で、１・７号で工程品、６号では工程品は少ないが玉作に関連すると思われる小礫（チャート）などが多く出土している。玉作の素材は鉄石英が大半を占めるようになる。

３期は３・４号竪穴の時期で標高77m付近に２基が近接して立地する。建物の構造はA1類のみで構成される。焼失建物の４号からは凝灰岩製の仕上げ砥（25）、３号では炉以外に複数の焼土面が存在し、大型の砥石（10・21）や緻密で溝を持つ９が出土している。これらは明らかに金属の加工に関連すると思われ、３期以降は玉作関連の遺物はほとんど見られなくなる。また、遺構出土ではないが、続縄文土器（346・347）・石偶（117）など北方系の遺物も出土している。土器の特徴から３期～４期（後北C4式期・C2・Ｄ式中葉）に位置付けられる。

４期は、規模の大きなA1類の２号竪穴と小規模で棚状遺構を持つ５号竪穴（A1類か）およびＢ類の12号竪穴で構成される。３期でＢ類は見られなかったが、一方、２号では、有溝の砥石（1～6・8）が大量に見られるようになるなど金属加工の痕跡はさらに顕著となる。

５期以降になると、調査範囲内で竪穴が確認されなくなる。時期的位置付けが可能なものとしてはSX8のみであり、明らかに遺跡は衰退している。この時期は滝沢の指摘する防御的集落の消失・新集落成立の画期［滝沢1999］とも符合し、細田遺跡・津倉田遺跡・下割遺跡など沖積平野へ遺跡の分布は移っていく。

今回の調査範囲・遺跡周辺の尾根及び台地縁辺では、裏山遺跡・斐太遺跡で確認されたような環濠は発見されていない。竪穴跡が現況で半埋没状態の窪みとして確認できたことを考えると環濠も溝状の窪みとして認識されると思われる。こうしたことから推測すると下馬場遺跡では元々環濠を持たない集落である可能性が高い。

また、人々の活動によって生じる土器の廃棄場が確認されていない。立地から推測すると遺跡南北の沢斜面が適地と考えられるが、土器類は僅かに出土したのみである。調査範囲北側を中心に遺物包含層が削平を受けた影響も考えられるが、比較的包含層の残存状況の良かった調査範囲南側でも出土量は少ない。土器は竪穴建物に遺棄された土器が主であり、遺構毎の年代観の変遷からは一定の存続期間を持つものの、常住的性格の集落ではない可能性もある。下馬場のムラは「主村・本村」に対する「分村・支村」的な集落で、玉作関連や金属加工に関する石器および金属器の出土から、生産工房的（専業的な工房である可能性も含め）役割を担った遺跡であるとも推測される。

裏山遺跡については出土遺物の平時性から戦闘の軍事拠点としての砦といった性格よりも本拠の集落が所有する財の一時避難や管理保管の役割を担った遺跡［小池 2004］との評価、斐太遺跡群については裏山遺跡・下馬場遺跡等の「親ムラ」としての拠点的な性格［甘粕 2001］が指摘されている。

頸城平野西縁の「防御的集落」は少なくとも裏山－下馬場－斐太を含めた一定領域の丘陵地帯の中で「親ムラ－支村」があり、それぞれが異なる空間機能・専業的役割を担っていたと思われる。

下馬場・裏山では墓域は確認されていないが、これらの集団の墓域が拠点的な集落に集約されるのかどうかも含め、今後の調査事例の増加と検討が待たれる。

第Ⅳ章　細 田 遺 跡

1　調査の概要

A　遺跡の立地と周辺の地形

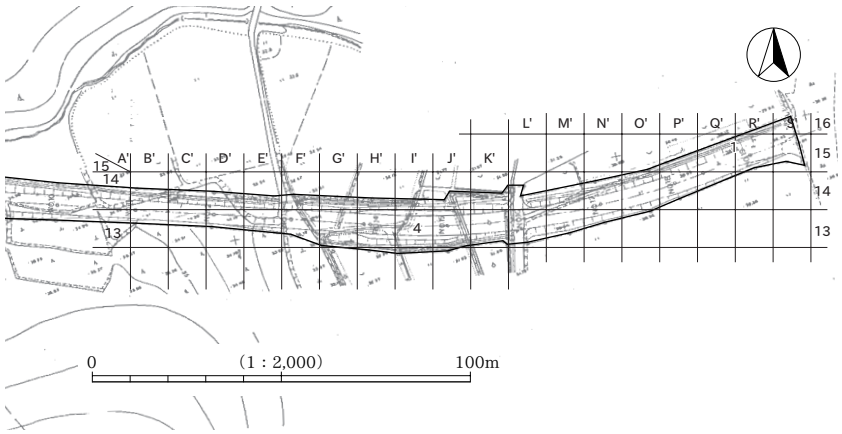
細田遺跡は西頸城丘陵の東端が沖積地に接する裾部（端部）から沖積地（低地）にかけて立地する。遺跡の現況は山林と水田・畑地、標高は30～35mである。南西側約600mに下馬場遺跡、西側の丘陵上～丘陵斜面部に黒田古墳群が存在する。遺跡の東側には青田川が北流し、北西方向に開く扇状地形を形成している。遺跡の低地部分はこの扇状地の扇側部にあたり、南西から北東方向にわずかに傾斜している。

B　グリッドの設定

細田遺跡のグリッドは近接する黒田古墳群の調査グリッドを延長して設定した。黒田古墳群の国家座標の数値上の２点を基準に国家座標の軸に合わせてグリッドの軸方向を設定した。Ａ点（2Jグリッド杭）［X=119529.849、Y=－24218.200］とＢ点（7Jグリッド杭）［X=119579.849、Y=－24218.200］である[1)]。グリッドは10m四方とし、南から北へ算用数字、西から東へアルファベットを昇順に付し、両者を組み合わせて「4D」のように表記した。

小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割して算用数字を付し、大グリッドに続けて「13G1」のように表記した。

杭	日本平面直角座標系第Ⅶ系（旧座標）	新座標　JGD2000系（計算値）
Ａ点：2J杭	［X=119529.849、Y=-24218.200］	［X=119880.6052、Y=-24498.9466］
Ｂ点：7J杭	［X=119579.849、Y=-24218.200］	［X=119930.6043、Y=-24498.9461］



第23図　細田遺跡グリッド設定図

1）国家座標値は旧座標系を使用しており、新しい座標系との対応関係は表のとおりである。第111集「黒田古墳群」中では7J杭の値が［X＝119577.997、Y＝－24206.774］とあるが上記に訂正する。

2　基 本 層 序

遺跡は黒田古墳群の所在する丘陵の裾部から沖積地への変換点に位置する。土層はG'グリッド付近を境に丘陵部分と低地部分に区分することができる。遺構の集中したA'～F'グリッドでは丘陵と同じ黄色系のローム土（①～⑥まで）が確認面土となっている。

低地部分では部分的に存在するⅣ層（灰色シルト：洪水層か）を間層として、Ⅲ層（暗褐色土：古代遺物包含層）とⅤ層（黒褐色土：弥生～古墳遺物包含層）の２時期の遺物包含層が存在する。場所によってはⅣ層が存在しない場所（特に⑬～⑯）も見られ、ⅣもしくはⅤ層上面で明確な遺構は確認されなかった。遺構確認面はⅥ層の灰色シルト（黄灰色・黄橙色の場所もある）である。土層説明・堆積状況は第18図に示した。

3　遺　　構

A　概　　要

細田遺跡からは古墳時代後期の土坑１基、古代（奈良・平安）の掘立柱建物４棟、井戸２基、土坑22基、溝５条、性格不明の落ち込み２基、中世の土坑１基、時期不明の土坑２基を検出した。その他、土色の違いによる明確な平面形は確認できなかったが、上層で古代の土器集中範囲１か所、下層で弥生時代末～古墳時代の土器集中範囲２か所を検出した。いずれも調査区北側寄りで、平面溝状・長楕円形状の分布範囲をもって確認された。

B　遺構の計測方法と呼称

遺構の説明には観察表・本文・図面図版・写真図版を用いる。遺構の呼称は遺構種類・遺構番号の順に遺構の種類ごとに１から通し番号を付した。遺構の分類については、個々の遺構の位置・規模・形状・出土遺物・堆積土の状況・切り合い関係などについては巻末の観察表に記載しており、本文中では特別な場合を除き個々については触れない。遺構の形状・計測値については遺構確認面での数値であり、深度は遺構確認面の高い部分からの深度を採用している。遺構の平面形・断面形の呼称は「奈良崎遺跡」［春日2002］の分類に基づき記載した。掘立柱建物の主軸については、長軸方向を主軸方位とした。方位は北から東西に振れる角度を「N－○○°－E（またはW）」と表記した。

遺構の図面図版は１／3,000の全体図と１／100の分割平面図、１／80の建物跡個別図、１／40の土層断面図・エレベーション図（横断面図）で構成される。断面図の土層註記は農林水産省農林水産技術会議事事務局・財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帳』を使用し、統一的な色の記述を行った。

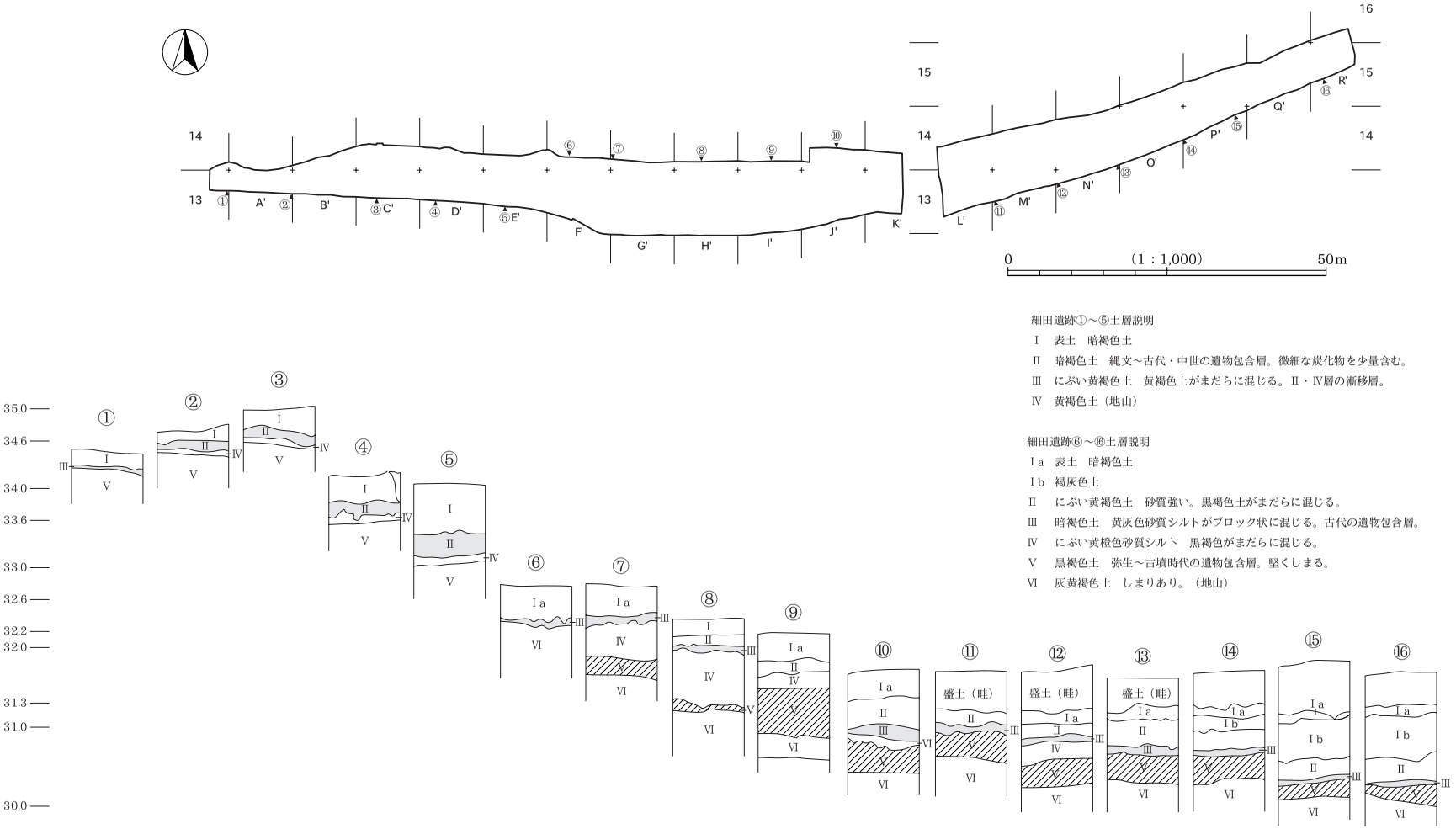
遺構写真は、調査の過程に応じ、検出状況・土層の断面写真・遺物出土状況・完掘写真等を撮影しているが、重要な遺構、残存状況の良好なもの、遺構の特徴を良好に示すものなどを選択的に掲載している。

遺構の平面形・断面形など、分類および呼称は前章（13ページ第７図）と同様の分類基準により記載する。

C　遺 構 各 説

1）弥生・古墳時代の遺構

西側の丘陵上から裾部にかけて黒田古墳群が位置しており、古墳群（古墳中・後期）に先行または併行



細田遺跡①～⑤土層説明

Ⅰ　表土　暗褐色土

Ⅱ　暗褐色土　縄文～古代・中世の遺物包含層。微細な炭化物を少量含む。

Ⅲ　にぶい黄褐色土　黄褐色土がまだらに混じる。Ⅱ・Ⅳ層の漸移層。

Ⅳ　黄褐色土（地山）

細田遺跡⑥～⑯土層説明

Ⅰa　表土　暗褐色土

Ⅰb　褐灰色土

Ⅱ　にぶい黄褐色土　砂質強い。黒褐色土がまだらに混じる。

Ⅲ　暗褐色土　黄灰色砂質シルトがブロック状に混じる。古代の遺物包含層。

Ⅳ　にぶい黄橙色砂質シルト　黒褐色がまだらに混じる。

Ⅴ　黒褐色土　弥生～古墳時代の遺物包含層。堅くしまる。

Ⅵ　灰黄褐色土　しまりあり。（地山）

第24図　細田遺跡の層序

する時期や、今回の調査で主に出土した弥生終末期～古墳時代前期の遺物に対応する時期の遺構の存在が期待されたが、SK29の覆土から古墳時代後期の甕が出土している他は、弥生・古墳期の遺構と断定できる遺構は確認できなかった（SX3では古墳後期と古代の遺物が出土しているが出土状況が不明のため時期は不詳である）。地山・遺構埋土の違いによる明確な平面形・掘り込みは確認されなかったが、14・15P'グリッドと15Q'25・15R'1グリッド付近の２か所で土器が集中して出土している。これら２か所では遺物の分布状況が不整形な帯状もしくは長楕円形状の密集範囲として確認された。出土遺物は完形品が少なく小片が多いことなどから推測して、溝状もしくは土坑状の落ち込みや自然の窪地などに遺物が廃棄された状況である可能性も考えられる。

2）古代の遺構

掘立柱建物（図版97・98／写真図版120・121）

３棟の掘立柱建物を検出した。主軸方向および柱穴の形状、重複関係から、SB20・26→SB21・22への変遷を捉えることができる。SK24・28・29・30の４基についても、形状・規模が類似することから掘立柱建物の一部である可能性がある。

SB21　13C'・14D'グリッドに位置する２×２間の側柱建物。主軸方向は東偏71°、面積は8.4m^2、ピットの平面形は円形である。SB20・22、SE37と重複する。SB20、SE37よりも新しい。SB22との前後関係は不明である。

SB22　13C'・14C'グリッドに位置する２×３間の側柱建物。主軸方向は西偏20°、面積は14.1m^2、ピットの平面形は円形である。SB20・21、SE37と重複する。前後関係は不明である。SD27との軸の類似性がある。

SB20　14C'・14D'グリッドに位置する。桁行方向で５基の柱穴（4間）を確認した。主軸方向は東偏70°である。南側に続く柱穴が見られないため、北側調査範囲外に延びていると推定される。SB21・22、SX23と重複する。SB26と主軸方向が類似する。柱穴の平面形は不整形で、ピット１は円形であるが、ピット２～４では隅丸方形に近い形状を持つ。

SB26　13C'・13D'グリッドに位置する。桁行５間、梁行２間以上の大型の側柱建物であると推定される。主軸方向は東偏66°である。桁方向については、西側方向の壁際で柱穴の痕跡が認められないことから５間以上は延びないと判断した。柱穴の平面形は隅丸方形で長軸1.1m前後である。いずれの柱穴も地山土由来の黄褐色ブロックが混じる黒褐色土が埋土で、単層であった。柱の痕跡等は確認できなかった。ピット１～３の底面付近から柱底面のあたりの痕跡と思われる窪みが確認された。

Pit24・28・29・30　掘立柱建物等の柱穴の可能性があるものである。平面形は円形で、直径が80cm前後と規模も類似している。

井戸（図版97／写真図版）

SE37の１基のみである。遺構埋土は、黒褐色土（ごく少量地山由来の黄褐色土ブロックが混じる）の単層で、掘削時も底部付近から湧水が顕著に見られた。底部付近から礫が出土した。廃棄時に礫を投げ入れ、その後一気に埋め戻されたと推測される。SB21と重複し、覆土の観察からは柱穴よりもSE37が新しい。

溝状遺構（図版95・97・99・102／写真図版122・123）

SD27　13C'・14C'グリッドに位置する。遺物は出土していないが、SB21と軸が類似することから、掘立柱建物に近い時期の溝であると判断した。

SD38　13E'グリッドに位置する。撹乱により北側が削平されている。建物のある平坦部から若干傾斜する変換点の位置にある。SD27と対応する溝の可能性も考えられる。

SD5　13・14G'グリッドに位置する。SK1と重複する。軸が掘立柱建物群に類似した方向であることから遺構群を囲む区画溝の可能性がある。

SD4　14L'グリッドに位置する。東西方向に延びる溝であるが、東側は調査範囲外、西側では平面形が不明瞭となり、全体形は不明である。途中SD6とつながっているが、覆土の違いによる前後関係は認められなかった（同時存在の可能性が高いか）。遺構埋土中から古代の須恵器・土師器が多数出土した。特に土師器無台椀が遺物の８割程を占め、外側面に「凡」の墨書を持つものが特徴的に見られる。

SD6　14L'グリッドに位置する。SD4同様に西側が不明瞭で確認できなかった。堆積土中から須恵器・土師器が出土した。SD4よりも幅が広い。北側で４本の杭からなる杭群44を検出した。杭は遺構の北側の底面付近に列をなすことから土留めの杭列の可能性がある。

土坑・ピット（図版95～99、101～103／写真図版121～124）

遺構平面形の長軸・短軸の長さに比して深度の浅いものを土坑としたが、土坑とピットの区分は必ずしも明確ではない。掘立柱建物として認識したピット以外にも17基のピットが確認された。建物や柵等の構造物を構成するものとも考えられるが、調査幅が狭いため、組み合わせを捉えることはできなかった。

SK35　13E'18グリッドに位置する。遺構埋土中から「人人」の墨書を持つ須恵器無台杯、須恵器有台杯が出土している。

性格不明遺構（図版96～101／写真図版122～124）

SX3　13・14J'グリッドに位置する。長楕円形の平面形を持つ土坑である。遺構底部には沢の自然堆積によると思われる砂・小礫層があり、その上部を黒褐色系のシルトが覆っていた。底部付近の堆積土中から、古墳時代後期と推測される非ロクロの土師器甕片・ミニチュア土器のほか土師器無台椀、須恵器甕片などが出土している。

SX23　14D'グリッドに位置する。楕円形の平面形を持ち、SB20の柱穴を切る。堆積土からは、須恵器有台杯、土師器無台椀・小甕が出土しており、古代もしくはそれ以降の遺構である。

SX10　13F'グリッドに位置する。南側は調査区外のため全体の形状は不明であるが、北半部分は隅丸方形に近い。覆土中からは古代の須恵器・土師器片が出土している。底面は平坦ではなく、弧状になっておりピットなども確認されなかった。

3）中世の遺構（図版95・96／写真図版121）

SK39　13A'グリッドに位置する。南側半分は調査範囲外のため不明であるが、円形の土坑である。埋土底部付近から礫・五輪塔の空風輪、水輪、地輪が出土した。

SK36　14C'グリッドの調査区北端に位置する。覆土上面で中世土師器（324）が出土した。SB20のピットと平面規模が類似することから、古代の可能性もある。

4）時期不明の遺構

杭群（図版94・100・102／写真図版124）

５か所で木杭が集中して確認された。古代の遺物包含層中から上部先端が確認されていることから、少なくとも古代以降のものであると推測される。検出箇所の特徴から、①溝や落ち込みの縁辺に列をなすも

の（杭群43・44）、②沢地形付近にあるもの（杭群41・42）、③その他（杭群40）に分類できる。斜面や水路の土留めなどの機能が考えられるが、性格は不明である。樹種同定の結果から、主にクリ材を使用していることが確認された。

4　遺　　物

A　概要と記述の方法

出土遺物は平箱（約長54cm×幅34cm×深10cm）で約50箱であるが、主体となるのは古代および弥生終末期～古墳前期で、縄文時代、古墳中・後期、中世、近世の遺物も少量出土している。古代については遺構出土のものも定量見られるが、その他のものについては遺物包含層からの出土遺物である。

遺物の大半は各時代ともに土器（陶磁器類含む）で、その他少量であるが縄文時代の石器、中世の石製品、時期不明の木製品等も出土している。

遺物の記述は、時期ごとに区分し、かつ、遺構・遺物包含層の別に記述する。遺物個々の特徴・計測値等についてはそれぞれの観察表に記載しており、特別な場合を除き本文中では触れない。観察表は図化・掲載した遺物すべてについて遺物の種別（土器・石器・木製品）ごとに作成した。土器類についてはライフヒストリー的な観察［川畑1999］も行い、「製作痕跡・使用痕跡・転用痕跡（二次使用）」として観察表に記載している。「使用痕跡・転用痕跡」については、判別が難しいものもあり、感覚的に分類したものも少なからずある。本文では時期・遺物種別ごとの概要や、遺構一括遺物の概要・組成について記述する。

B　縄文時代の遺物（図版94）

1）縄文時代の土器（1～14）

1は中期初頭、2～11は後期（前葉～中葉）、12は晩期に位置付けられる。1は横位の隆帯で区画し、隆帯上に連続爪形文を施す。区画内にも横方向に連続爪形文を施す。中期初頭に比定される。2はくびれ部に刻目を持つ隆線が見られる。3・4は同一個体で、くびれ部に刻目を持つ隆線、体部は磨消縄文が見られる。5～8は同一個体で磨消縄文が見られる。9は斜行する沈線文が見られ三角形状となる。10は磨消縄文と多条細沈線による渦巻き文が見られる。11は沈線文が見られる以外は無文である。12は外面に沈線を持ち、口縁部に沿って内面に沈線状の窪みが見られる。13は外面に縦方向の羽状縄文が見られる。内面には何らかの器具でこすり取られたような下から上への砂粒の動きが見られた。14は底部で敷物の圧痕が見られる。

2）縄文時代の石器（15～21）

15は縦長の剥片を素材とする。表面右側面下部・裏面下部側縁に連続した微細剥離痕が見られる。下端は使用による回転運動により尖った形状となる。

16・18～20は蛇紋岩、17は凝灰岩の磨製石斧である。17・19は上部が破損面で、中半から基部を欠損している。16～18は両側面に研磨による面を持つ。19は両側縁に整形剥離痕を残す。20は刃部・基部ともに使用による剥離が見られる。裏面にはススが付着する。

21は凝灰岩の打製石斧で表面の側縁に整形剥離が見られる。裏面は素材の剥離面を残し、右に連続した整形剥離が見られる。全体的に大きな剥離により整形され、側縁には細かな加工があまり見られない。

C　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物（図版106～109）

1）概要と分類

弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物は甕・壺・鉢・蓋・高杯・器台等が確認される。明確な平面プランを持つ遺構は確認されなかったが、15P'杭付近、15Q'20・25～15R'5付近の2か所で平面帯状に土器が集中して確認された。これらは溝や落ち込みなど遺構の可能性も考えられるため「土器集中区」出土遺物その他については包含層出土遺物として一括した。調査範囲が狭小であるため遺跡の本体は不明であるが、調査範囲内では北側寄りに遺物が集中して確認されている。

甕

A類　口縁部有段で、擬凹線を持つもの。口縁部が直線的に上方に伸びるもの（A1）と外傾して伸びるもの（A2）がある。

B類　口縁部有段で、無文のもの。外反気味に伸びるもの（59・82・83）、外傾して伸びる（61）ものがある。

C類　口縁部の断面形状が「く」の字または逆「コ」の字状のもの。口縁端部の形状により細分される。

C1類　端部に面を持ち、上方を摘み上げ、下方も引き出すもの。

C2類　端部に面を持ち、上方を摘み上げるもの。C1類の系譜を引くと思われるものも含む（63・64・86）。口縁部から頸部の長さで細分することが可能。

C3類　端部が丸いもの。

C4類　屈曲部から上が内湾気味に開くもの（66）。

D類　内湾気味に立ち上がり、端部に内傾する面を持つもの。いわゆる布留系の甕。92は口縁端部の面取りをしていないが布留系甕を模倣したものと考えられる。

E類　体部に櫛描文（中部高地系）が施されるもの（30）。器形および口縁部の形状等はC類に類似しており、文様のみを模倣したものか。

壺

A類　口縁部が有段で擬凹線を持つもの。甕の分類同様、口縁部が直立気味に立ち上がるものと、外方に開き気味に伸びるもののほか、擬凹線の窪みに同心円のスタンプ文を持つものがある。

B類　口縁部有段で無文のもの。段内面の屈曲が明瞭なものと、不明瞭なものとがある。不明瞭なものについては外面に強いナデを施すことにより段（稜）を作り出している。

C類　二重口縁壺（67・105）。明瞭に頸部・体部の形状までわかるものは出土していない。

D類　口縁が緩やかに外反するもの（100・106）。口縁部の長さにより細分できる。

E類　口縁端部に面を持ち、上方に摘み上げ、下方を引き出すもの。

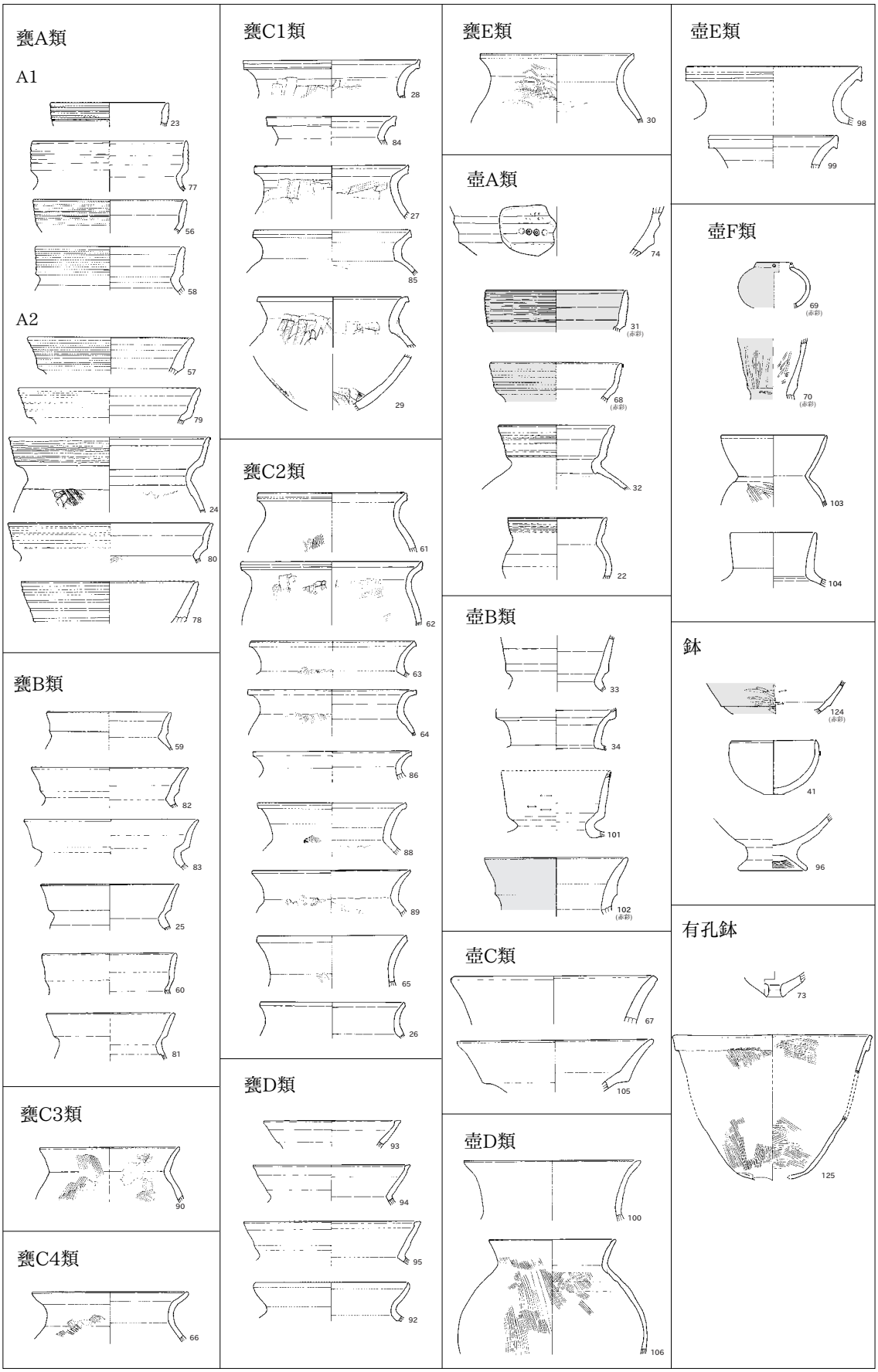
F類　小型の壺を一括した。69は短頸壺。無頸壺とも呼ぶことができるか。口縁～体部の屈曲部付近に孔を持つ。70は細頸壺である。内湾気味に開く口縁を持つもの（103）、直立気味に立ち上がる口縁を持つもの（104）が見られる。

鉢

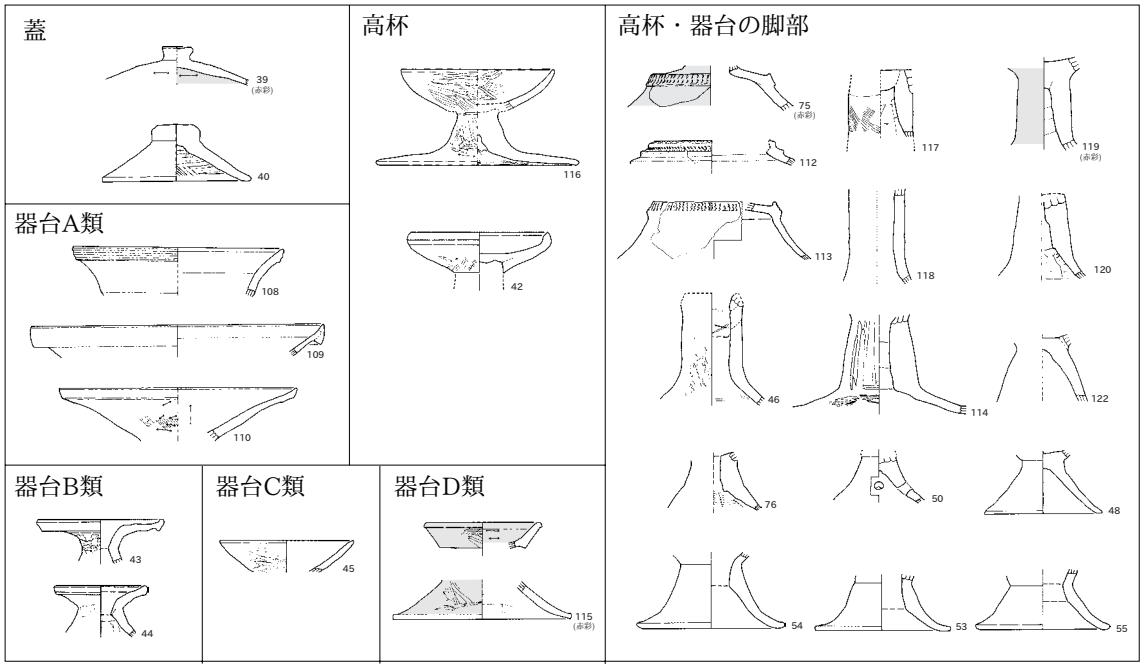
有段のもの（124）、内湾気味の器形で平底のもの（41）、96は有台鉢である。出土量は少ない。

有孔鉢

底部に孔を持つ鉢。125は口縁部に貼り付けによる帯状の段を持ち、底部は推定径3cmの孔を持つ。



第25図　弥生～古墳前期の土器分類図（1）



第26図　弥生～古墳前期の土器分類図（2）

蓋

「八」の字状に広がるもの（40）と内湾気味に広がるもの（39）が見られる。

器台

A類　受部が大型で深身のもの。端部に粘土帯を貼付するA1類（109）と端部に面取りし、上方に摘み上げるもの（110）がある。

B類　小型で、受部端に面を持つもの。上方・下方に引き出すもの（43）、面取りのみのもの（44）がある。

C類　小型で、受部内湾気味に開くもの。

D類　小型で、受部に段を持つもの

高杯

図化できたのは2点のみである。半球状の杯部を持ち、脚部が八の字に大きく開くもの（116）と、浅い椀状の杯部を持つもの（42）がある。

バリエーションはあるが、出度数が少ないため、細分は行っていない。

脚部

脚部に稜を持ち、段の上部や側面に刺突文を施すもの（75・112・113）。棒状に伸びるもの（117～119）、棒状に伸びた後裾部で開くもの（120・46・114）、内湾気味に開くもの（122）、貫通孔が比較的大きなもの（53～55）が特徴的に見られる。

2）各　　説

14P・15P'土器集中区（図版106／写真図版125）

口縁部破片数で50点、口縁部残存率で114／36個体の土器が出土した。甕が約7割（口縁部残存率の比率）を占める。擬凹線を持つ甕A類や壺A類では口縁部の伸びが比較的長く、直線的に伸びるものが多い。甕C類では口縁端部を上下に引き出して面取りをするもの、上方のみを引き出すものの2種がある。

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
土　器	有段甕	28	11	24.6%	22.0%	0	0	0.0%	0.0%
	甕	49	22	43.0%	44.0%	81	5	40.9%	35.7%
	有段壺	4.5	2	3.9%	4.0%	0	0	0.0%	0.0%
	壺	12.5	8	11.0%	16.0%	81	8	40.9%	57.1%
	有孔鉢	0	0	0.0%	0.0%	36	1	18.2%	7.1%
	鉢	13.5	4	11.8%	8.0%	0	0	0.0%	0.0%
	高杯	6.5	3	5.7%	6.0%	0	0	0.0%	0.0%
合計		114	50	100.0%	100.0%	198	14	100.0%	100.0%

第26表　15P'グリッド出土土器口縁部・底部残存率集計表

壺類はいずれも有段で、Ａ類（31・32）とＢ類（33・34）がある。30は北陸系の通有の甕の器形を持ち、口縁形状からはＣ類に分類可能であるが、体部外面に２本１単位の櫛描文（波状文・連弧文）を持つ。施文のモチーフは中部高地系（箱清水系の櫛描文土器）の影響が見られるが、２本１単位は東北を含めた北方系の土器に多く見られる施文方法である。３者の要素が混在した折衷土器の可能性もある。42は高杯に分類したが、台付の鉢の可能性もある。脚部の挿入痕が見られる。器台では口縁端部を上下方に引き出し面を持つ43と、面取りのみを行う44がある。39は蓋で、内湾気味に開く器形のもので、内外面にミガキ調整を施し、外面に赤彩する。40は外反気味に開く器形で、外面は二次的な焼成痕跡（赤化）が見られる。内面には放射状のハケ調整が見られる。53～55は、器台の脚部で比較的大きな貫通孔を持つ。53・55では二次的な焼成痕跡（外面の赤化）が見られる。

15Q'・R'土器集中区（図版107／写真図版126）

口縁部破片で68点、口縁部残存率で212.5／36個体の土器が出土した。甕類が７割近くを占め、中でもＣ類が多い。口縁端部を上方に摘み上げ、面取りを施すものが多く見られる。壺類では口縁部に段を持つ壺が多い傾向にある。69は小型の短頸壺で、蓋との固定のための直径5mmの孔を持つ。67は口縁下部（段～頸部）が欠損しているが有段口縁壺と思われる。下部の破断面に擬口縁に施された刻目の凹凸が見られる。70は長頸壺の系譜を引くものである。71は底部に草の茎状のものと籾と思われる圧痕が見られる。74は幅の広い凹線の窪みに竹管による刺突文と、その上部の窪みには爪形の刺突が施される。75は高杯か器台の脚部で有段のものである。段側面に突帯状に粘土を貼り付け、横方向に連続する爪形の刺突が施される。

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
土　器	有段甕	33.5	11	15.8%	16.1%	0	0	0.0%	0.0%
	甕	110	39	51.8%	57.4%	161.5	12	37.5%	36.4%
	有段壺	37	8	17.4%	11.8%	0	0	0.0%	0.0%
	壺	2	2	0.9%	2.9%	93	5	21.6%	15.2%
	台付甕？	5	2	2.4%	2.9%	0	0	0.0%	0.0%
	鉢	2	1	0.9%	1.5%	39	2	9.0%	6.1%
	高杯	2	1	0.9%	1.5%	0	0	0.0%	0.0%
	器台	21	4	9.9%	5.9%	80.5	10	18.7%	30.3%
	蓋	0	0	0.0%	0.0%	摘み57	摘み4	13.2%	12.1%
合計		212.5	68	100.0%	100.0%	431	33	100.0%	100.0%

第27表　15Q'・15R'グリッド出土土器口縁部・底部残存率集計表

遺物包含層出土遺物（図版108・109／写真図版126）

上記２か所の土器集中区を含めた遺跡全体では口縁部破片が519点、口縁部残存率で1227.5／36個体の土器が出土した。

甕類だけを見ても、月影系のＡ類（77～80）から布留系のＤ類（93～95）まで時期幅を持つものが含まれる。84は口縁端部の上下を引き出し、幅広の面を持つもので古手の様相を持つものか。87は口縁部

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
土　器	有段甕	84.5	39	6.9%	7.5%	0	0	0.0%	0.0%
	甕	716	317	58.3%	61.1%	1461.5	119	55.8%	45.2%
	有段壺	49.5	12	4.0%	2.3%	0	0	0.0%	0.0%
	壺	103	43	8.4%	8.3%	647	49	24.7%	18.6%
	有孔鉢	21	7	1.7%	1.3%	45	2	1.8%	0.8%
	台付甕	0	0	0.0%	0.0%	9	4	0.3%	1.5%
	鉢	63	27	5.1%	5.2%	121	16	4.6%	6.1%
	ミニチュア鉢	22	1	1.8%	0.2%	36	1	1.4%	0.4%
	高杯	64.5	32	5.3%	6.2%	67	31	2.6%	11.8%
	高杯か器台	2.5	2	0.2%	0.4%	21.5	6	0.8%	2.3%
	器台	94	33	7.7%	6.4%	126.5	30	4.8%	11.4%
	蓋	0	3	0.0%	0.6%	摘み83	摘み5	3.2%	1.9%
	不明	7.5	3	0.6%	0.6%	0	0	0.0%	0.0%
合計		1227.5	519	100.0%	100.0%	2617.5	263	100.0%	100.0%

第28表　細田遺跡（全体）弥生～古墳前期の土器口縁部・底部残存率集計表

断面がくの字状に屈曲し、内面に明確な稜を持つ。内面上部をケズリ調整する。88・89は壺とも分類可能な口縁部が長く外反するものである。96は台付甕の台部である。93～95は布留系甕で口縁部の形態の比較では畿内の編年観では布留1式頃に比定される。92は内湾気味の口縁を持ち、端部を上方に摘み上げる。端部処理は異なるが、布留系甕を模倣したものか。100は広口で比較的長頸の壺、103は小型の丸底壺で内湾する口縁が付く。104は小型で上方に直線的に伸びる口縁を持つ（直口壺）。105は二重口縁壺である。111は器種不明であるが、外面に円形の竹管文、その上下に点状の刺突列を施す。112・113は高杯か器台の脚部で突帯状に粘土を貼り付け、横方向の刺突文を施したものである。114は比較的大型の脚部である。116は杯部が半球状で脚裾部が大きく開くものである。115は受け部に段を持つものである。脚部では棒状に伸びるもの（117～119）。裾部にむかって緩やかに開くもの（120）。ハの字状に開くもの（121）、内湾ぎみに開くもの（122）がある。127～129はいわゆる「畿内系屈折脚の高杯」である。脚部の調整は確認できる限りでは縦方向の比較的長いストロークのミガキ調整が施される。127は胎土が濃い褐色（赤味が強い）で、中部高地系の土器群の胎土に類似する。内面は横方向のケズリ調整が施されるが、単位が不明瞭である。128は脚内部上半が中実状で、内部中心に棒状工具の刺突によると思われる窪みが見られる。この2点については脚部高と同じくらいの長さの細長い板状（棒状）の工具を差し込み器面に沿って回転させてえぐり取るような調整を施している可能性がある。そのため内面のラインが直線的で、奥ほど狭まっていくと思われる。対して128は脚部内面上部に径5mm程の工具による刺突痕が複数見られるが、内面をケズリ調整せず、ナデ調整のみ施す。類似した脚部形態であるが技法の相違が見られる。

D　古墳後期の遺物（図版109／写真図版126）

遺物によっては、小破片レベルでの古墳前期の土器群との識別は困難である。したがって弥生末から古墳前期とした土器群の口縁部残存率の数値中に古墳後期の土器群が含まれている可能性は高い。明確に形状を把握し、図化したものは130～137の11点で、古墳後期（6・7世紀）に比定される。130は須恵器長頸瓶の体部で肩部に稜を持つ。胎土の特徴から7世紀後半の下馬場窯跡の可能性がある。132・133・134は高杯脚部で133・134は杯部内面の黒色処理が見られる。135は支脚でナデの整形痕が見られる。136・137はミニチュアの土器で詳細な時期は不明である。

E　古代の遺物（図版99～104）

1）概　　要

遺跡出土遺物の大半が古代の土器であり、須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・木製品などが出土している。須恵器は杯蓋・有台杯・無台杯・長頸瓶・小瓶・短頸壺・広口壺・小型壺・小甕、土師器は甕・小甕・鍋・無台椀・有台椀・内面黒色処理の無台椀などの器種が見られる。灰釉陶器は椀・皿類、緑釉陶器は蓋の摘み（壺蓋か）が１点のみであり、これら陶器類については図化可能なものすべてを掲載した。

SD4では土師器椀が主体となる一括資料が出土している。15O'・15P'・15Q'グリッドの調査区北側端では明確な平面プランは確認できなかったが、帯状に土器が集中して出土したことから落ち込み・溝等の遺構である可能性がある。そのため「土器集中区」として遺物包含層出土遺物とは区分している。

2）分　　類

まず、土器の種類（須恵器・土師器・灰釉陶器など）・器形の特徴から甕・壺・杯・椀などに分類し、須恵器杯類、土師器椀類については製作技法・法量等からさらに細分した。須恵器甕・壺類などの貯蔵具は北野博司氏の分類［北野1999］を用いた。なお、観察表中の須恵器の焼成痕跡（降灰・重焼き痕）は新潟県埋蔵文化財調査報告書「沖ノ羽遺跡Ⅲ」の分類［春日2003］を使用した。

須恵器

杯蓋Ａ類　宝珠形の摘みがつくもの。口径が12～15cm前後のもの（A1類）、16～18cm前後のもの

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
須　恵　器	有台杯	284	74	6.60%	4.67%	794	96	9.63%	8.76%
須　恵　器	無台杯	415	97	9.65%	6.12%	1420.5	144	17.23%	13.14%
須　恵　器	杯類	312	143	7.26%	9.02%	3	1	0.04%	0.09%
須　恵　器	杯蓋	361	112	8.40%	7.06%	（摘み）279	（摘み）9	3.38%	0.82%
土　師　器	内黒有台椀	0	0	0.00%	0.00%	2	1	0.02%	0.09%
土　師　器	内黒椀	48.5	18	1.13%	1.13%	103	16	1.25%	1.46%
土　師　器	有台椀	0	0	0.00%	0.00%	60	6	0.73%	0.55%
土　師　器	椀	2174	790	50.56%	49.81%	3854.5	558	46.76%	50.91%
灰 釉 陶 器	碗	10.5	3	0.24%	0.19%	14	3	0.17%	0.27%
灰 釉 陶 器	皿	5	3	0.12%	0.19%	0	0	0.00%	0.00%
食膳具合計		3610	1240	83.96%	78.19%	6530	834	79.21%	76.09%
須　恵　器	長頸瓶	19.5	5	0.45%	0.32%	125	7	1.52%	0.64%
須　恵　器	瓶類	18.5	8	0.43%	0.50%	32	7	0.39%	0.64%
須　恵　器	小瓶	16	2	0.37%	0.13%	64	3	0.78%	0.27%
須　恵　器	甕	11	5	0.26%	0.32%	36	23	0.44%	2.10%
須　恵　器	甕か壺	0.5	1	0.01%	0.06%	0	0	0.00%	0.00%
須　恵　器	壺か瓶	3.5	2	0.08%	0.13%	23	5	0.28%	0.46%
須　恵　器	壺	7.5	3	0.17%	0.19%	89.5	9	1.09%	0.82%
須　恵　器	小型壺	9	1	0.21%	0.06%	36	2	0.44%	0.18%
灰 釉 陶 器	長頸壺	4	1	0.09%	0.06%	0	0	0.00%	0.00%
貯蔵具合計		89.5	28	2.07%	1.77%	405.5	56	4.94%	5.11%
土　師　器	甕	268.5	165	6.24%	10.40%	56	5	0.68%	0.46%
土　師　器	小甕	285.5	125	6.75%	7.88%	1171.5	192	14.20%	17.52%
土　師　器	壺	2	1	0.05%	0.06%	30	1	0.36%	0.09%
土　師　器	甕か鍋	24	17	0.56%	1.07%	26	4	0.32%	0.36%
土　師　器	鍋	12.5	8	0.29%	0.50%	25	4	0.30%	0.36%
煮炊具合計		592.5	316	13.89%	19.91%	1308.5	206	15.86%	18.80%
須　恵　器	円面硯	4	1	0.09%	0.06%	0	0	0.00%	0.00%
須　恵　器	不明	3.5	1	0.08%	0.06%	0	0	0.00%	0.00%
その他合計		7.5	2	0.17%	0.12%	0	0	0.00%	0.00%
古代合計		4299.5	1586	100.00%	100.00%	8244	1096	100.00%	100.00%

第29表　細田遺跡古代土器口縁部・底部残存率集計表

（A2類）とする。天井部の形状が平坦なものと湾曲したものとにさらに細分が可能である。

杯蓋Ｂ類　円環状の摘みがつくもの（265）。１点のみである。

突帯付蓋　227、１点のみである。口縁端部は外反し、かえりを持たないと思われる。天井部の外周に貼り付けの突帯があり、宝珠形の摘みを中心として同心円状の刻線を持つ。後述する（61～62頁）が「上野型有蓋長頸壺蓋」［神谷・桜岡1997］に類似する形態をもつ。

有台杯Ａ類　内湾気味に立ち上がる体部を持つ。比較的厚手のもの。全形がわかるものは231のみであるが、器高が5.2cmと深身である。

有台杯Ｂ類　直線的に立ち上がる体部を持つ。口径10～12cm、器高3.5cm前後のもの（B1類）と口径15cm前後、器高６～7cmのもの（B2類）がある。

有台杯Ｃ類　口径が12～14cm前後で、器高が３～4cmのもの。

有台杯Ｄ類　その他のものを一括した。228は稜を持つ杯で底部はケズリを施す。274は口径9.4cm・器高4.8cmの小型で深身の器形である。

無台杯Ａ類　底部ヘラ切りのもの。口径11～13cm、器高３～4cmのもの。底径は246・248を除き、７～9cmの範囲におさまる。

無台杯Ｂ類　底部回転糸切りのもの。底部付近の側面に強い横ナデを施し、高台状に窪むのが特徴。

無台杯Ｃ類　器高が3cm以下で、薄手のもの。いわゆる佐渡小泊古窯跡群産といわれるもの。

円面硯　１点のみである。脚部に短冊形の透かし窓を持つ。

長頸壺　肩部に稜を持つもの（A類）、肩部が丸くなで肩のもの（B類）とする。

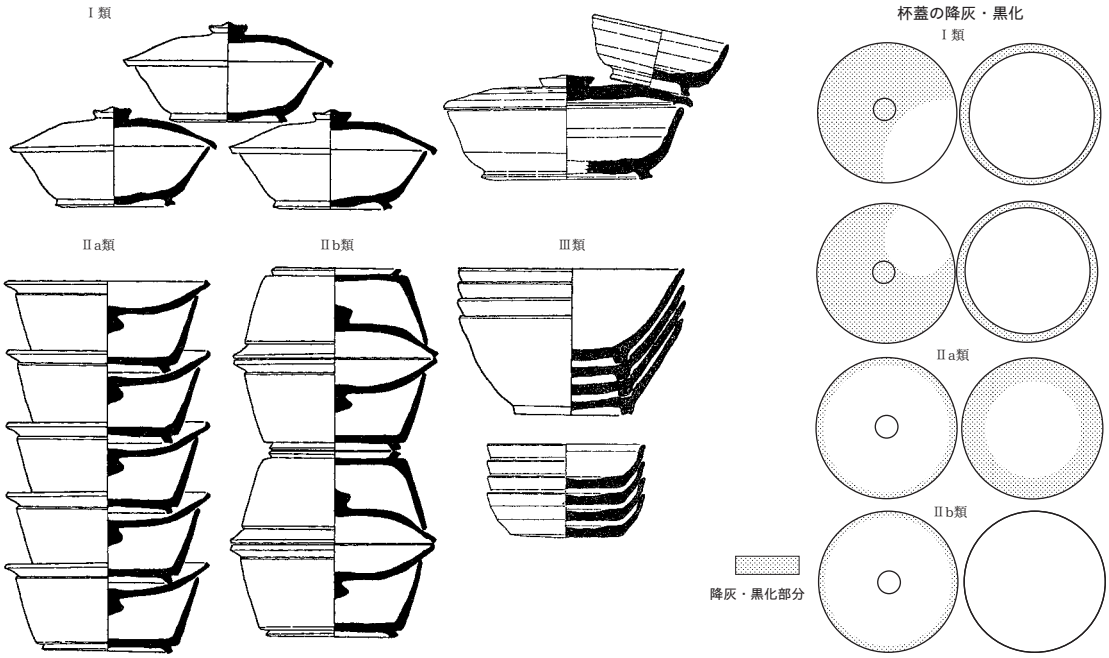
壺　図化できた口縁部資料は、小型の広口壺（288）と短頸壺（255）のみである。

突帯付壺　301のみである。突帯付四耳壺の可能性もある。外面はタタキ調整、内面はナデ調整する。

甕　口径30cm以下の小型の甕が大半を占める。

土師器

無台椀Ａ類　器高指数25～30のもの。口縁端部の形状で細分される。



第27図　杯蓋・有台杯の重ね焼き分類［春日2003］

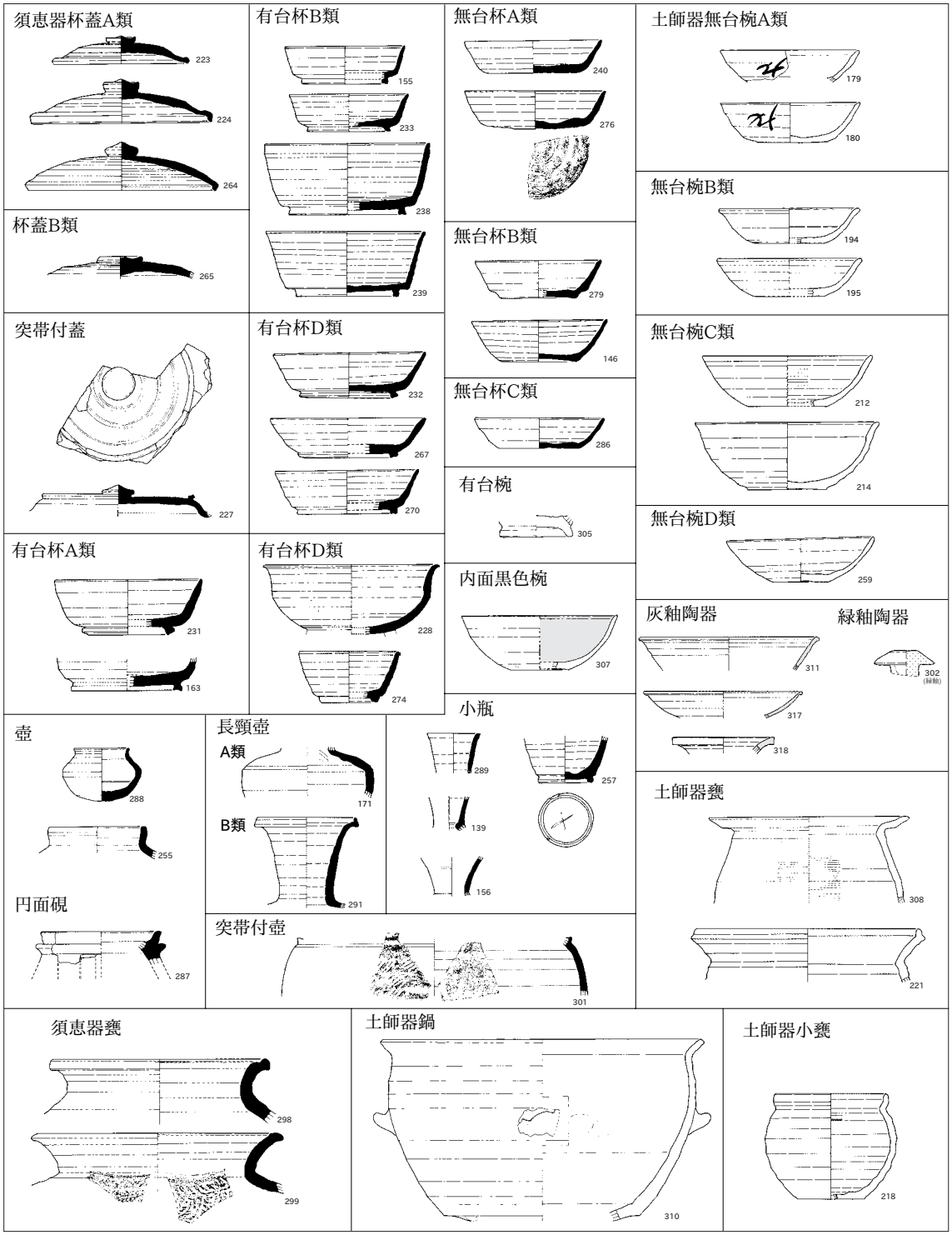
A1類：口縁端部が外反して尖ったような形状となり、端部内面が内傾する面状となるもの（179～188）

A2類：口縁端部が外反し、丸くおさめるもの（189～202）。

無台椀Ｂ類　器高指数30～33で体部が内湾気味に立ち上がるもの（203～208）。

無台椀Ｃ類　器高指数30～37前後のもの。

C1類：内面にカキメ調整・ミガキ調整をするもの。



第28図　古代の土器分類図

C2類：ロクロナデ成形で、口径・器高の大きなもの。

無台椀Ｄ類　底部から体部下半にかけてロクロケズリするもの（259）。破片を含め、出土量は少ない。

甕・小甕・鍋　口径よりも器高が大きいものを甕、小型で平底のものを小甕、器高よりも口径の大きいものを鍋とする。小破片では、甕と鍋の識別が困難であるため、口縁部残存率の集計では「甕か鍋」とした。

黒色土器椀　内面黒色処理された土器。破片を含めた遺跡での出土量は少ない。

3）遺物各説

古代の遺物の年代観については、春日真実による時期区分および年代観を用いる［春日1999］。

遺構出土遺物（図版110～112／写真図版127・128）

SK29　138は甕で、内外面に粗い原体によるハケメが施される。成・整形にロクロを使用せず、長胴気味の体部を持つ。口縁部および底部が残存していないため詳細な時期は不明であるが古墳時代後期～飛鳥時代（6～7世紀代）の甕と推測される。

SK37　須恵器小瓶（139）、須恵器甕（140）である。Ⅴ期（9世紀前半）頃に比定されるか。

SK23　須恵器有台杯（141）、内外面にススの付着する土師器無台椀（142）・小甕（143）が出土している。Ⅴ期頃に比定される。

SX3　ミニチュア土器（148）・甕底部（149）はロクロを用いない。両者ともに調整痕として指の圧痕（指ナデ）が内外面に見られる。これらについては古墳時代後期と推測される。土師器無台椀Ｃ類（150）、須恵器甕（151）が出土している。春日Ⅵ期に比定されるか。

SK35　底部に「人人」の墨書を持つ須恵器無台杯（145・146）が出土している。147の須恵器有台杯は西側丘陵産と考えられる。

SD5　須恵器甕片（152）１点が出土した。胴部破片のため詳細な時期は不明。

SD6　須恵器杯蓋Ａ類（153）・有台杯Ｃ類（154）・Ｂ類（155）・小瓶（156）・甕（158～161）は春日編年Ⅴ期（9世紀前半）に比定される。Ⅶ期（10世紀前半）頃に比定される灰釉陶器皿（157）１点も出土している。詳細な出土状況は不明だが、混入の可能性もある。

SD4　破片数で304点、口縁部残存率で870.5／36個体の土器が出土した。須恵器杯蓋１点、有台杯３点、無台杯４点、長頸壺２点、壺、甕３点、土師器無台椀38点、小甕４点、甕１点、灰釉陶器１点を図化した。174は小甕としたが、広口壺の可能性もある。土器の機能別の構成比率は口縁部残存率計測法で食膳具（須恵器杯類・土師器椀類）は94％、貯蔵具（須恵器甕・壺）0.4％、煮炊具（土師器甕・鍋）5.5％で大半を食膳具が占める。底部残存率の集計でもほぼ同様の傾向が見られる。食膳具の構成は口縁部残存

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
須恵器	有台杯	5	2	17.2%	22.2%	15	2	38.5%	33.3%
須恵器	杯類	3	1	10.3%	11.1%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	杯蓋	11	1	38.0%	11.1%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	椀	1	1	3.4%	11.1%	14	2	35.9%	33.3%
灰釉陶器	皿	2	1	6.9%	11.1%	0	0	0.0%	0.0%
食膳具合計		22	6	75.9%	66.7%	29	4	74.4%	66.7%
須恵器	壺か瓶	0	0	0.0%	0.0%	10	2	25.6%	33.3%
須恵器	甕	1	1	3.4%	11.1%	0	0	0.0%	0.0%
貯蔵具合計		1	1	3.4%	11.1%	10	2	25.6%	33.3%
土師器	甕	6	2	20.7%	22.2%	0	0	0.0%	0.0%
煮炊具合計		6	2	20.7%	22.2%	0	0	0.0%	0.0%
古代合計		29	9	100.0%	100.0%	39	6	100.0%	100.0%

第30表　SD6出土土器口縁部・底部残存率集計表

率計測法で須恵器4.5％、土師器椀89.4％と土師器が圧倒的に多い。須恵器はⅤ１期を中心とした時期の資料と考えられるが、小泊古窯跡群産と推測される須恵器無台杯（169・170）、口縁端部外反のA1類（179～188）、大型品を含むＣ類（上越市今池遺跡SD3に類似：Ⅵ期）、内面黒色土器椀（220：Ⅵ期）、灰釉陶器（222：Ⅶ期？）など、Ⅴ～Ⅵ期を主とし、それ以降の時期の下がるものも若干含まれる。

172は高台内に墨痕のある長頸壺底部（転用硯？）である。土師器無台椀A1類のうち、法量や口縁端部の形状（端部内面に面を持ち、尖り気味のもの）が極めて類似したもの（179～184・185は墨書はないが器形は類似）の外面に「凡」の墨書を持つものが存在する。また、187・197のようにタール状・スス状の付着物を持つものも存在する。

15O'・15P'・15Q'北端遺物集中区（図版113・114／写真図版128・129）

明確な平面プランは認識できなかったが、調査区北側で帯状に遺物の集中が見られた。溝や落ち込みなどの遺構の可能性もあるため、遺物包含層出土遺物とは分けて記述した。範囲としたグリッドは調査区北端にかかる部分で、15O'25・15P'1付近では特に遺物が集中して出土した。

遺物の集中が見られた範囲にかかるグリッドでは口縁部破片数で128点、口縁部残存率で547／36個

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
須恵器	有台杯	5.5	1	0.6%	0.3%	77	6	5.1%	3.1%
須恵器	無台杯	12.5	4	1.4%	1.3%	102	12	6.8%	6.1%
須恵器	杯類	16	8	1.8%	2.6%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	杯蓋	6.5	2	0.7%	0.7%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	内黒椀	2	1	0.2%	0.3%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	椀	776.5	265	89.2%	87.2%	1088	122	72.7%	62.2%
灰釉陶器	有台碗	0	0	0.0%	0.0%	12	2	0.8%	1.0%
食膳具合計		819	281	94.0%	92.4%	1279	142	85.4%	72.4%
須恵器	長頸瓶	0	0	0.0%	0.0%	27	1	1.8%	0.5%
須恵器	瓶類	1	1	0.1%	0.3%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	壺か瓶	1	1	0.1%	0.3%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	壺	1.5	1	0.2%	0.3%	3.5	1	0.2%	0.5%
須恵器	甕	0	0	0.0%	0.0%	36	23	2.4%	11.7%
貯蔵具合計		3.5	3	0.4%	1.0%	66.5	25	4.4%	12.7%
土師器	甕	6.5	4	0.7%	1.3%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	小甕	33	10	3.8%	3.3%	151	29	10.1%	14.8%
土師器	甕か鍋	5.5	4	0.6%	1.3%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	鍋	3	2	0.3%	0.7%	0	0	0.0%	0.0%
煮炊具合計		48	20	5.5%	6.6%	151	29	10.1%	14.8%
古代合計		870.5	304	100.0%	100.0%	1496.5	196	100.0%	100.0%

第31表　SD4出土土器口縁部・底部残存率集計表

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
須恵器	有台杯	149.5	32	27.3%	25.0%	290	23	23.8%	27.1%
須恵器	無台杯	182	31	33.3%	24.2%	571	36	46.9%	42.4%
須恵器	杯類	57.5	28	10.5%	21.9%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	杯蓋	94.5	19	17.3%	14.8%	摘み123	摘み4	10.1%	4.7%
土師器	椀	50	10	9.1%	7.8%	96	12	7.9%	14.1%
食膳具合計		533.5	120	97.5%	93.7%	1080	75	88.7%	88.3%
須恵器	瓶類	0	0	0.0%	0.0%	4	1	0.3%	1.2%
須恵器	小瓶	0	0	0.0%	0.0%	64	3	5.3%	3.5%
須恵器	壺	5	1	0.9%	0.8%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	甕	1.5	1	0.3%	0.8%	0	0	0.0%	0.0%
貯蔵具合計		6.5	2	1.2%	1.6%	68	4	5.6%	4.7%
土師器	甕	3	2	0.5%	1.6%	9	1	0.7%	1.2%
土師器	小甕	0	0	0.0%	0.0%	61	5	5.0%	5.9%
土師器	甕か鍋	4	4	0.7%	3.1%	0	0	0.0%	0.0%
煮炊具合計		7	6	1.2%	4.7%	70	6	5.7%	7.1%
合計		547	128	100.0%	100.0%	1218	85	100.0%	100.0%

第32表　15O'・15P'グリッド出土土器口縁部・底部残存率集計表

体の土器が出土した。須恵器杯蓋４点、突帯付杯蓋１点、有台杯11点、無台杯15点、短頸壺１点、小瓶２点、土師器無台椀２点、小甕１点を図化した。土器の機能別の構成比率は口縁部残存率計測法で食膳具は97.5％、貯蔵具1.2％、煮炊具1.2％である。大多数を占める食膳具の内訳は約９割を須恵器が占める。227は突帯の付く蓋で、外面頂部に同心円の沈線を引く。向橋１号窯跡（上越市大字向橋）では山笠形の天井部を持つ蓋に突帯の付くものが見られるが、器形が大きく異なる。天井部の平坦な器形は、群馬県北・西部の須恵器窯に多く見られる「上野型有蓋短頸壺蓋」に類似する［神谷・桜岡1997］[1)]。240～247は底部回転ヘラ切りの須恵器無台杯248～254は底部回転糸切りの須恵器無台杯である。

墨書土器は６点出土している。判読可能なものでは、「十」（229・247）、「下」（250）、「宮」（258）がある。237・252については「几」の字を模倣したようにも見え、236も「几」の字状を含めた複数の文字が重なって書かれているようにも見える（237についてはヘラ書きの記号も見られる）。236・237・252は胎土・技法からいずれも西側丘陵（滝寺・大貫古窯跡群）の製品と推測され、産地と文字の共通性が認められる。また、230の底部高台内全面に墨痕が見られた（転用硯か？）。

時期については、228などⅣ１期（８世紀前半）から現れるもの、259の底部外面にケズリを持つ土師器無台椀など、古・新の時期の遺物が混じる可能性がある。杯類では底部の切り離し技法が回転ヘラ切りのもの（240～247）のほか、底部回転糸切りの東海系譜の須恵器杯類（235～239・251～254）も存在することから概ねⅣ２～Ⅴ１期に比定される資料と考えられる。

遺物包含層出土土器（図版114・115／写真図版129・130）

須恵器杯蓋５点・有台杯９点・無台杯12点・円面硯１点・小型壺１点・小瓶１点・長頸壺７点・突帯付壺１点・小甕３点、土師器無台椀２点・有台椀２点・甕２点・鍋１点、内面黒色土器椀２点、緑釉陶器壺蓋？１点、灰釉陶器椀５点・皿２点・長頸壺１点を図化した。包含層出土の墨書土器は９点出土しているが、２点は小片でかつ墨点しか確認できないため図化していない。墨書土器では「人人」（281・282・283）がある。283は281との書体の共通性から「人人」とした。273・284もこれらとの類似性から「人」もしくは「人人」と判断した。これらの５点はいずれも西側丘陵（滝寺・大貫古窯跡群）の製品と推測され、15O'・15P'土器集中区の墨書の状況に類似する。280・285については判読できなかった。272は高台の断面三角形のもので底部に直径約5mmの孔を持つ。無台杯では、275～277が底部ヘラ切り、279～284が底部糸切りの痕跡が見られる。279～283は底部回転糸切りの無台杯。285・286は佐渡小泊窯産のものでⅥ期か。287は円面硯で海の部分が残存していないため使用痕跡は不明。288は小型の壺、289は小瓶の口縁部か。290～297は長頸瓶の口縁部・肩部・底部である。肩部に稜を持つものは見られない。297は焼成不良の須恵器としたもので黒色土器のような外面が黒色で光沢を帯びた発色を示す。301は突帯付壺で、外面はタタキ、内面はナデ調整を施すものでⅦ期か。302は器面の剥落が著しいが緑釉陶器の蓋（壺蓋か）の摘み部分である。白色緻密な胎土を有する。305は有台椀の底部でⅦ期に比定されるか。307は内面黒色処理された椀で外面下部はケズリ調整する。Ⅵ期に比定されるか。308・309はロクロ成形の甕である。308は口縁部が大きく外反する。内面は目の細かな原体によるハケ（スリナデに近い）調整を行う。310は鍋で底部から体部下位はケズリ調整を施す。把手が体部

1）群馬県内での類例は、群馬県月夜野窯跡群沢入Ａ支群（月夜野町）、秋間窯跡群東谷津古窯支群（安中市）、乗附観音山窯跡群（吉井町）・ハヶ峰窯跡群（大胡町）などに見られる。しかし、群馬県の事例では円環状の摘みが付くものが多く、突帯だけでなく鍔の付くものが多い。群馬以外の事例では秋田県手形山２号窯（８世紀中頃）出土「鍔付須恵器蓋」［伊藤2001］、石川県高松町八野ガメ山窯跡でも類似した蓋が出土している。両者には擬宝珠の摘みのものも見られる。

中半に付く。残存部位では1か所のみ対になると思われるが単位は不明である。底部平底か。311～318は灰釉陶器で碗・皿類が出土している。時期についてはⅤ～Ⅵ期を中心に、灰釉・土師器有台椀など時期の新しいものが含まれる。

F　中・近世の遺物（図版116・117／写真図版130）

SD4から出土した177・188（混入か）を除いて、その他はすべて表土および遺物包含層からの出土遺物である。中世の遺物では土師器皿、白磁碗、青磁碗、瀬戸美濃焼（天目茶碗・皿・深皿）、珠洲焼（擂鉢・小鉢・甕）、石製品（五輪塔）がある。近世では肥前系磁器（碗・仏飯器）、京焼系陶器（皿）、肥前系陶器（碗）、越中瀬戸（皿、広口壺）がある。

中世土師器（319～326・348）

319・320は底部が突出するいわゆる柱状高台のもので、ロクロ成形で底部は回転糸切り痕を施す。321～324は底径が大きなタイプである。時期的には12世紀代に比定される。325・326はいわゆる「京都系土師器」で手ずくね成形のものである。326は口縁端部を上方に摘み上げる。

348は断面台形状の器形を持つもので、鍋と思われる。内外面ともにススの付着、黒化が見られた。把手や耳等の有無は不明である。

中世陶磁器（327～347）

白磁（327）　碗の底部1点のみである。

青磁（328・329）　328・329は龍泉窯青磁の碗である。328は底部、329は外面に鎬のある蓮弁文が見られる。329は13世紀前半に比定される［横田・森田1978］。

瀬戸・美濃焼（330～332）　330は天目茶碗で、内面は全面、外面は体部下半まで鉄釉を施す。露胎部分は灰色で高台脇に段を持つと思われる。331は皿で口縁部が直線的に延び、端部に面を持つ。口縁部（内外面）のみに灰釉を施す。底部は回転糸切り後、無調整である。332は折縁の深皿でいずれも口縁部が外反気味に延び、内外面とも灰釉を施す。口縁端部が内外に開き断面三叉状となる。時期は330が14世紀後半～15世紀、331～333は15世紀後半に比定される［藤澤1991］。

珠洲焼（333～347）　333～342はすり鉢、343は壺、344～347は甕である。他にはSD4で出土した177・178がある。177・178・333の鉢は口縁端部（内端）を摘み上げ、内面に卸目を持たないもので吉岡編年のⅡ期に比定される。334・335の底部も卸目が見られないことから同じくⅡ期か。336は口縁端部に平坦な面を持ち、12条1単位の卸目が見られる。Ⅳ期に比定される。340・341の底部は卸目が密に入らないもので、同じくⅣ期に比定される資料か。337・338は口縁端部が内傾する面を持つもので、Ⅴ期に比定される。339・340の底部は卸目が密に見られることからⅤ期以降に比定される。壺・甕類については体部破片のため詳細な時期は不明であるが、擂鉢と同様の時期幅を持つと思われる。

石製品（349～351）

五輪塔（349～351）　3点ともSK39の一括出土遺物である。349は空風輪である。350は地輪で下面には成形時の敲打痕が残る。両者の石材は角閃石を多く含む安山岩を使用している。351は水輪で、上下面のほぼ中央に直径約3cmの円形の窪みを有する。石材は凝灰岩である。石材が異なるため、349・350と1対とはならないと思われる。時期の特定は難しいが15～16世紀代か［水澤幸一2004］。

近世陶磁器（352～359）

いずれも時期的には17世紀後半～18世紀前半頃のまとまりとして捉えることができる。近接する黒

田古墳群調査範囲でも同時期の陶磁器類（肥前系陶磁器・京焼系陶器・越中瀬戸等）が出土しており［尾崎2002］、産地・器種等の組成に類似性が認められる。

肥前系磁器（352・353）　352は丸碗で、外面に草花文が描かれる。353は仏飯器で畳付を釉剥ぎする以外は全面に施釉される。体部下半には幾何学模様が描かれる。

京焼系陶器（354）　器形は皿で、内外面は黄色味がかった透明釉、表面に細かい貫入が見られる。高台内には暗褐色の鉄釉が施される。胎土はいわゆる京焼風肥前系陶器（唐津）とは異なり、暗褐色の緻密な土である。

肥前系陶器（355）　内外面鉄釉で見込みに白泥が見られる。

越中瀬戸（356～359）　内外面に鉄釉を施す。356は皿、357～359は広口壺である。

G　木　製　品（図版118・119／写真図版131）

いずれも包含層出土のものである。360・361は下駄で、360は小型品である。362～366は曲物の底板である。いずれも柾目板である。362は円形の板で、側面に木釘の孔が5か所見られる。366は板材で、表裏左右は面取りされる。上部は欠損、下部は二次的な加工により尖った形状になる。367は表裏に黒漆が塗布される。368は上・左右側面を欠損する。下側面が丸みを帯びた面取りを残すことから曲物底板の転用品と思われるが用途は不明。369は表面が滑らかに面取りされた痕跡が見られるが、裏面は縦方向の分割面を残す。表面には微細な擦痕（線状痕）が見られ、8か所に穿孔（貫通は4か所）が見られる。下部の隅に炭化部分（火を受けた痕跡）が見られる。370は棒状の木製品で一端が尖った形状となる。371は上下を欠損する。表面に線状痕、右側面に焼けこげが見られる。372は表・裏・右側面に面取りされる。上・下・左側面は丸みを持たせるように加工される。373は表面中央部分を凸状に面取りする。建物の部材等か。374は上・右・裏面が欠損面。柾目の板材であるが用途は不明。375は全面を面取りする。上側面は丸みを帯びた面取りが見られる。376は下部は丸みを持たせた面取り、上部は欠損のため不明であるが、円形の孔が開けられていたと思われる。左側面中央には上斜め方向から長楕円形の孔（長1.5cm・幅4mm・深さ7mm）が開けられる。377は建物の部材等か。右半分・下部を欠損する。上部には長さ約8cmの孔が開けられる（ホゾ穴と思われるが丸みを帯びている）。378は上部を欠損する。上部に向かって幅が広がり、方形の孔が開けられる。何らかの製品の柄の部分とも考えられるが不明である。表面の右側縁に刃物による線状痕と削り痕が見られる。379～391は杭である。下部の先端部を尖らせるように加工が施される他は樹皮を残したままのものがほとんどである。材ではクリが最も多く、その他もクスノキ科・モクレン属・カエデ属・ナツツバキ属など遺跡近隣の雑木類を利用している。

5　自然科学分析

A　細田遺跡出土木製品の樹種同定

株式会社古環境研究所

1）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2）試　　料

試料は、細田遺跡より出土した曲物、下駄、柱、板材、杭など木製品33点である。

3）方　　法

あらかじめ新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片が作製されていたものを、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4）結　　果

結果は第32表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　第24図1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木であり、材は水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　第24図2・3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質より、スギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。なおスギの特徴は示すが、分野壁孔の型が不明瞭な試料はスギ？とした。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　ヒノキ科　第24図4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15細胞高である。

以上の形質より、ヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。なおヒノキの特徴は示すが分野壁孔の型が不明瞭な試料はヒノキ？とした。

サワラ　*Chamaecyparis pisifera* Endl.　ヒノキ科　第25図5

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型であるがスギ型の傾向を示すものもあり、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、サワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、肌目緻密である。ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

ブナ属？　*Fagus?*　ブナ科

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、２～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質より、ブナ属と思われるが、本試料は横断面の切片が存在しないので、同定には至らなかった。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬かつ緻密で靱性があるが保存性は低い。容器などに用いられる。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　第25図6・第26図7

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、クリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材である。現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。なお、クリの特徴は示すが小片のため、横断面において年輪界部分が存在しない試料は、クリ？とした。

モクレン属？　*Magnolia?*　モクレン科

横 断 面：小型の道管が、単独あるいは放射方向に２～３個複合して多数散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、導管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。繊維状仮道管がしばしば薄い横隔壁で仕切られている。放射組織は上下端のみときに直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、１～３細胞幅であるが２細胞幅のものが多い。

以上の形質より、モクレン属と思われるが、本試料は横断面の切片が存在しないので、同定には至らなかった。モクレン属にはホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する、常緑または落葉の高木ないし低木である。

クスノキ科　Lauraceae

横 断 面：中型から小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質より、クスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ属、クロモジ属、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無など

試料No.	報告No.	グリッド	層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	結果（学名）	樹種	木取り	備考
1	376	13H'10	Ⅱ下	用途不明木製品	(25.45)	3.5	1.85	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	板目	
2	372	13H'10	Ⅱ	用途不明木製品	17.35	3.8	2.2	*Magnolia?*	モクレン属？	柾目	
3	389	13H'10	Ⅱ	杭	(13.1)	2.8	1.7	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	丸材	
4	375	13H'19	Ⅱ中	用途不明板材	(19.1)	3.9	1.65	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	板目	
5	360	13H'21	Ⅱ下	下駄	(14.1)	6.9	2.5	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	板目	
6	367	13H'24	Ⅱ中	用途不明板材	(10.2)	2.6	0.5	*Chamaecyparis pisifera* Endl.	サワラ	柾目	表面は黒漆あり
7	369	13I'1	Ⅱ上	用途不明木製品	(16.85)	5.0	1.25	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	板目	
8	366	13I'1	Ⅱ上	用途不明木製品	(11.9)	1.95	0.62	*Chamaecyparis obtusa* Endl.?	ヒノキ？	柾目	
9	362	13I'2・11	Ⅱ中	曲物底板	10.0	9.25	0.8	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	柾目	
10	363	13I'8	Ⅱ中	曲物底板	(10.75)	(4.0)	0.9	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	柾目	
11	－	13K'5	Ⅱ上	曲物	2.8	7.4	0.5	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	柾目	
12	370	14J'11	Ⅱ下	棒状木製品	(13.85)	1.0	1.0	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	柾目	
13	365	13I'13	Ⅲ上	曲物底板	(12.4)	(4.8)	1.1	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	柾目	
14	377	13J'21	Ⅲ上	柱	(40.5)	(7.1)	6.0	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	割材	
15	364	13J'22	Ⅲ下	用途不明木製品	(11.9)	(1.95)	0.6	*Cryptomeria japonica* D.Don?	スギ？	柾目	底板の可能性あり
16	373	13J'22	Ⅲ下	用途不明木製品	13.25	2.75	1.9	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	板目	
17	374	13K'3	Ⅲ上	用途不明木製品	(15.5)	(3.6)	1.5	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	柾目	
18	368	13K'4	Ⅲ中	用途不明木製品	(8.9)	4.95	1.0	*Chamaecyparis obtusa* Endl.?	ヒノキ？	柾目	底板を再利用している
19	361	13K'8	Ⅲ上	下駄	18.8	8.8	3.1	*Cryptomeria japonica* D.Don?	スギ？	板目	
20	371	14M'21	Ⅲ上	用途不明木製品	(8.9)	2.7	1.5	*Cryptomeria japonica* D.Don?	スギ？	柾目	
21	390	13J'13	－	杭	59.1	7.7	4.8	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	割材	
22	378	15O'21	－	用途不明木製品	32.95	4.1	2.1	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	割材	
23	391	15O'・16O'	－	杭	(20.15)	3.5	3.0	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	丸材	
24	379	13J'13	－	杭	(43.0)	7.3	3.3	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ?	クリ？	割材	杭２
25	380	13J'13	－	杭	(55.85)	5.7	4.2	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	割材	杭５
26	381	13J'13	－	杭	(43.25)	4.9	3.85	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	割材	杭７
27	382	13J'12	－	杭	(42.6)	3.3	3.5	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	割材	杭９
28	383	13J'18	－	杭	(27.4)	6.0	5.2	Lauraceae	クスノキ科	丸材	杭11
29	384	13J'23	－	杭	(25.9)	4.6	4.5	*Acer*	カエデ属	丸材	杭15
30	385	14J'3	－	杭	(21.65)	5.9	5.6	*Stewartia*	ナツツバキ属	丸材	杭16
31	386	13H'24	－	杭	(51.6)	3.7	3.8	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	割材	杭18
32	387	13H'23	－	杭	(55.5)	9.9	7.9	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	割材	杭19、黒色付着物あり
33	388	13H'25	－	杭	(12.1)	5.35	5.2	*Fagus?*	ブナ属？	丸材	杭24

第33表　細田遺跡出土木製品観察表・樹種同定結果一覧

で細分できる。しかし、本試料は道管径以外の点が不明瞭な為、クスノキ科の同定にとどまる。なお本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

カエデ属　*Acer*　カエデ科　第25図8

横 断 面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質より、カエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデなどがある。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

ナツツバキ属　*Stewartia*　ツバキ科　第25図9

横 断 面：小型で丸い道管が、ほぼ単独で散在する散孔材である。早材部から晩材部にかけて道管の径は緩やかに減少する。晩材部において、軸方向柔細胞が短接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は異性である。道管と放射組織との壁孔は階段状である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下端の1～4細胞ほどが直立細胞からなり、1～3細胞幅である。

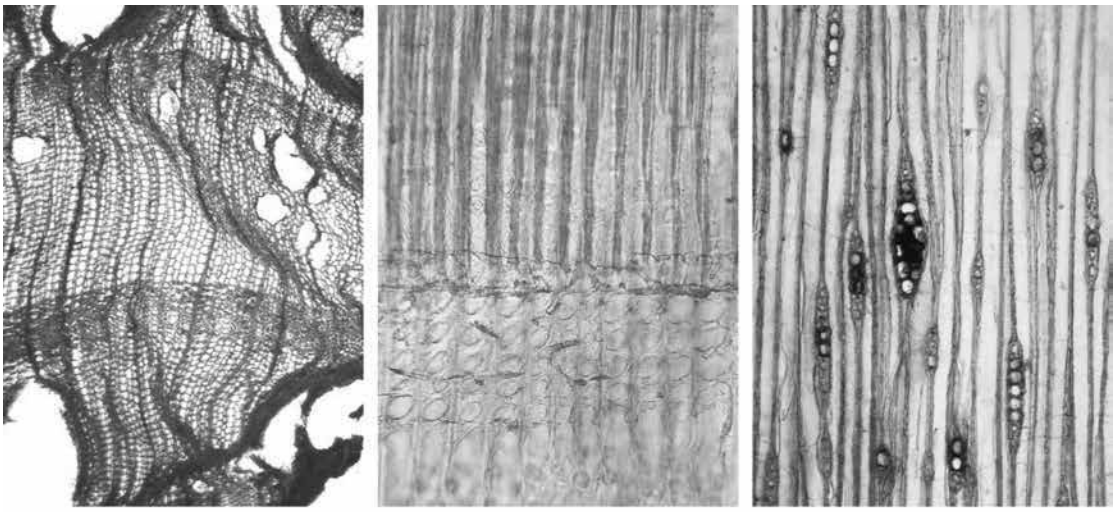
以上の形質より、ナツツバキ属に同定される。ナツツバキ属にはナツツバキ、ヒメシャラなどがあり、本州（福島県、新潟県以西）、四国、九州に分布する落葉の高木である。材は強靱かつ堅硬で、現在では建築（特に皮付床柱）、器具、彫刻、旋作、薪炭などに用いられる。

5）所　　見

同定の結果、細田遺跡の木製品は、マツ属複維管束亜属1点、スギ14点、スギ？2点、ヒノキ1点、ヒノキ？1点、サワラ1点、ブナ属？1点、クリ7点、クリ？1点、モクレン属？1点、クスノキ科1点、カエデ属1点、ナツツバキ属1点であった。最も多いスギは、曲物、下駄、柱などに使用されていた。スギは温帯に広く分布し、特に中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。次に多いクリは、すべて杭に使用されていた。クリは、温帯に広く分布し、暖温帯と冷温帯と温帯の中間域では、純林を形成することもあり、乾燥した台地や丘陵地に分布し、また二次林としての性格を持つ。マツ属複維管束亜属、ヒノキ、サワラは、温帯を中心に分布する針葉樹である。ブナ属にはブナとイヌブナがあり、温帯上部の冷温帯から温帯中間域の落葉広葉樹林帯に分布する。またモクレン属、クスノキ科、カエデ属、ナツツバキ属も、温帯域に分布する広葉樹である。以上の事から、いずれの樹種も遺跡周辺からもたらされたと考えられる。

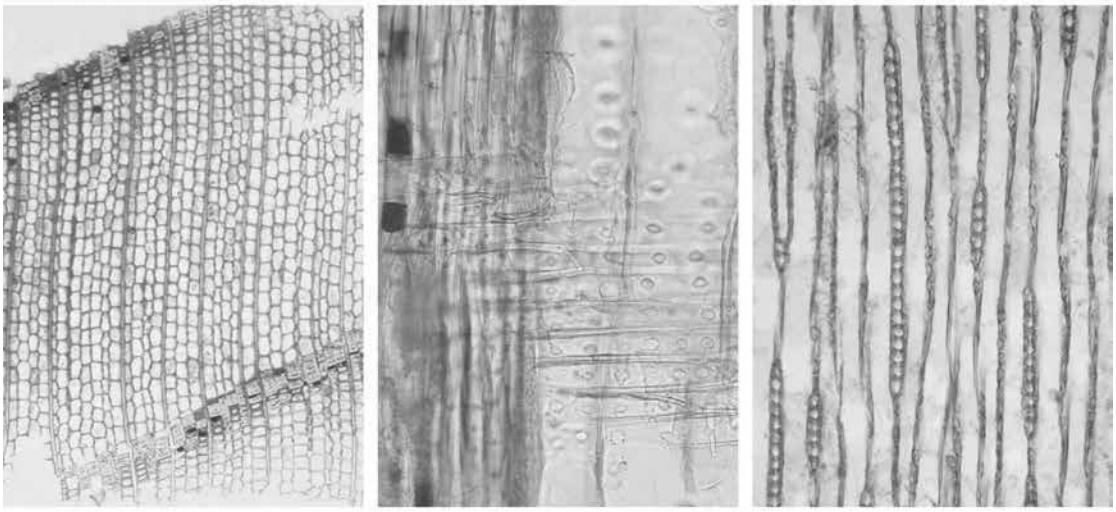
参考文献

佐伯　浩・原田　浩　1985　「針葉樹材の細胞」『木材の構造』　文永堂出版　p.20-48
佐伯　浩・原田　浩　1985　「広葉樹材の細胞」『木材の構造』　文永堂出版　p.49-100
島地　謙・伊東隆夫　1988　『日本の遺跡出土木製品総覧』　雄山閣　p.296
山田昌久　　1993　「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第1号　植生史研究会　p.24



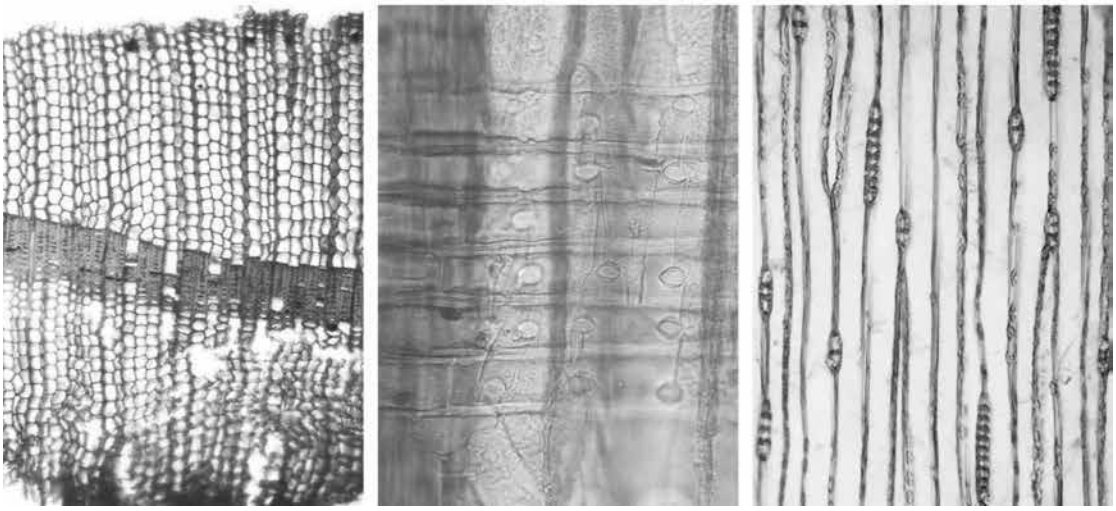
横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.1mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

1．No.23 杭 マツ属複維管束亜属



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.1mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

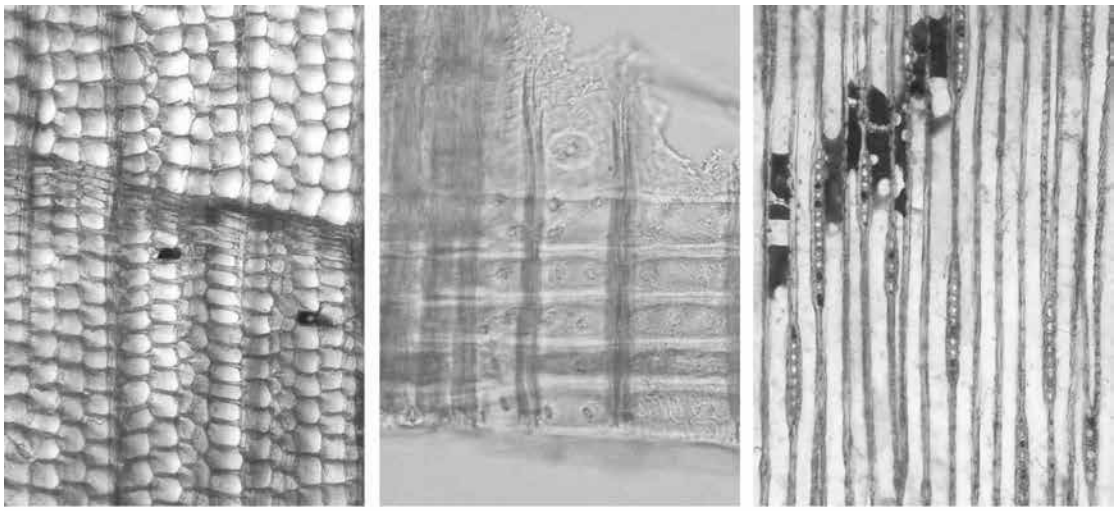
2．No.9 曲物底板 スギ



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.05mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

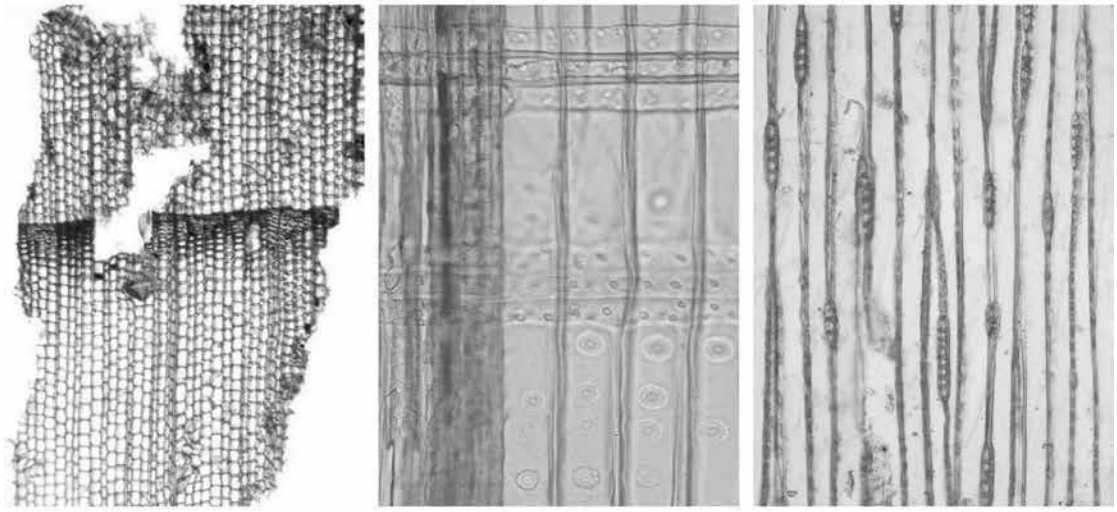
3．No.17 不明 スギ

第29図　細田遺跡の木材（1）



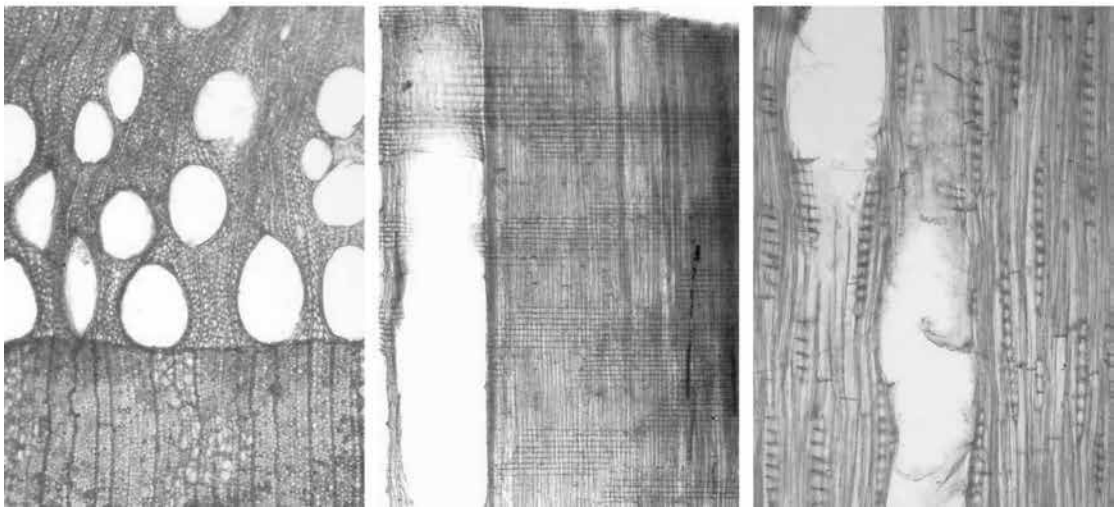
横断面 ━━━━ : 0.2mm　放射断面━━━━ : 0.05mm　接線断面━━━━ : 0.2mm

4．No.18 不明（底板再利用） ヒノキ



横断面 ━━━━ : 0.5mm　放射断面━━━━ : 0.1mm　接線断面━━━━ : 0.2mm

5．No.6 板材 サワラ



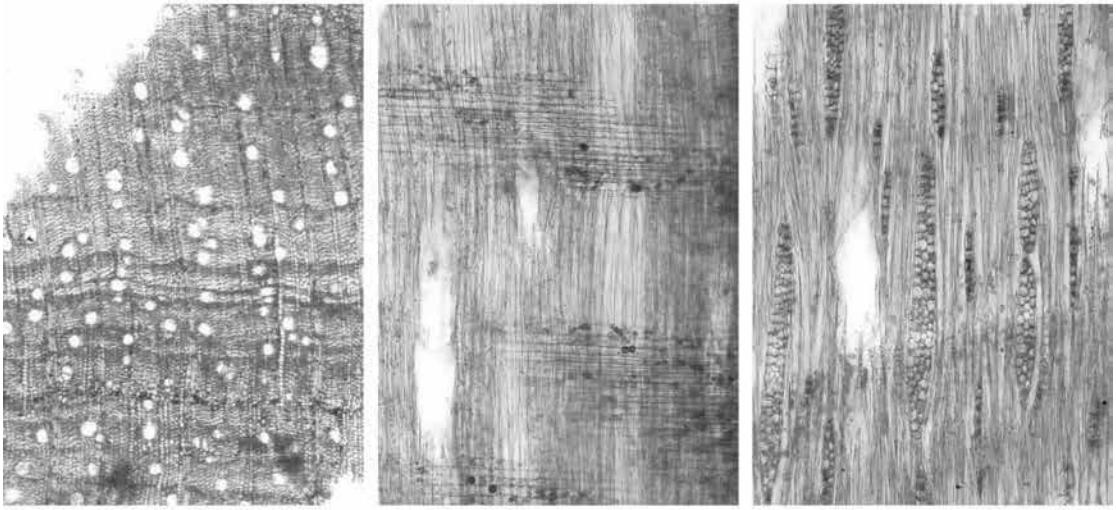
横断面 ━━━━ : 0.5mm　放射断面━━━━ : 0.5mm　接線断面━━━━ : 0.2mm

6．No.31 杭 クリ

第30図　細田遺跡の木材（2）

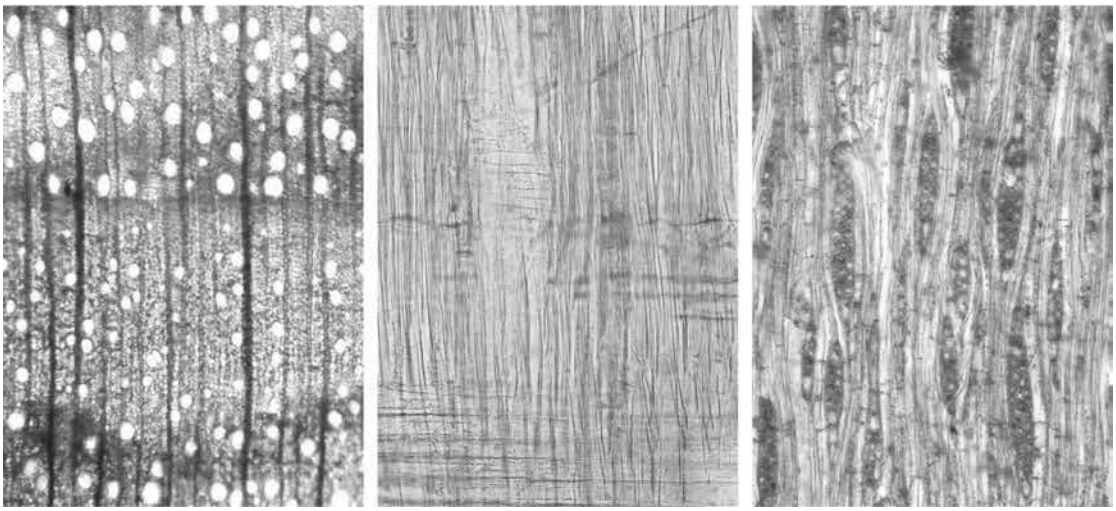
横断面 ━━━━ : 0.5mm　放射断面━━━━ : 0.5mm　接線断面━━━━ : 0.2mm

7．No.32 杭 クリ



横断面 ━━━━ : 0.5mm　放射断面━━━━ : 0.2mm　接線断面━━━━ : 0.2mm

8．No.29 杭 カエデ属



横断面 ━━━━ : 0.5mm　放射断面━━━━ : 0.1mm　接線断面━━━━ : 0.2mm

9．No.30 杭 ナツツバキ属

第31図　細田遺跡の木材（3）

6 ま と め

A 弥生・古墳時代

第４節で記述したとおり、遺跡からは1227.5／36個体の弥生終末期～古墳前期の土器のほか、少量ずつではあるが古墳前期末・古墳後期の土器が出土した。中でも弥生終末～古墳前期の土器群は、丘陵上に存在する下馬場遺跡竪穴群の終焉期（下馬場５期）を中心とした遺物である。調査では明確な平面形・掘り込みを有する遺構は確認されなかったが、14・15P'グリッド、15Q'25・15R'1グリッドの２地点で廃棄行為に伴うと思われる遺物の集中範囲（集中区と呼称した）が確認された。

遺物の集中範囲が調査区北側寄りで確認されていることから遺跡本体は調査区外の北側方向に存在する可能性がある。土器集中区の編年的な位置付けは以下のとおりである。

14・15P'グリッド集中区出土土器は、甕Ａ類（23・24）や壺Ａ類（22・31・32）など擬凹線文を持つものが定量見られる。その他の甕では、断面「く」の字状の甕Ｃ類も端部を上方に摘み上げるC1類が多い。43・44などの北陸系の小型器台が見られることから下馬場５期を中心とする時期に位置付けられる。

15Q'25・15R'1グリッド集中区出土土器は、甕Ａ類・壺Ａ類が定量見られること、壺Ｆ（69・70）や刺突文を持つ器台脚部（75）が見られることから下馬場４～５期に位置付けられる。

その他、遺物包含層出土遺物については、甕Ａ類の77～80、甕C1類の84・85、器台Ａ類の108～110、刺突文を持つ脚部（112・113）など、土器の集中範囲同様に下馬場４～５期に位置付けられる資料を主とする。若干時期の下がるものも含んでおり、壺Ｆ類の103（川村５段階）や甕Ｄ類（布留系甕）の93～95（川村６段階）、畿内系の柱状屈折脚の高杯127～129は前期末（～古墳中期前葉）（川村６・７段階）に位置付けることができる。

細田遺跡の土器は、下馬場遺跡で確認できなかった下馬場４・５期を中心とすることから下馬場遺跡の空白期を埋める資料群であるといえる。直接的な関連性は指摘できないが、丘陵上に立地する下馬場遺跡（防御的集落）の廃絶したのち、丘陵裾～沖積地上に立地する細田遺跡へとつながると見ることもできる。丘陵上から平野へという越後地域内での集落動向［滝沢1999］とも一致した動きといえる。

墨書No.	報告No.	墨書銘	器種	墨書部位・方向	グリッド	遺構	備考
1	145	「人人」	須恵器無台杯	底部外面	13E'18	SK35	
2	146	「人人」	須恵器無台杯	底部外面	13E'18	SK35	
3	179	「凡」	土師器無台椀	体部外面倒位	14L'11	SD4	
4	180	「凡」	土師器無台椀	体部外面倒位	14L'11	SD4	
5	181	「凡」	土師器無台椀	体部外面倒位	14L'11	SD4	
6	182	「凡」	土師器無台椀	体部外面倒位	14L'11	SD4	
7	183	「凡か」	土師器無台椀	体部外面倒位	14M'8	SD4	
8	184	「□」	土師器無台椀	体部外面	14L'6	SD4	
9	229	「十」	須恵器有台杯	底部外面	15O'21	-	
10	236	「□」	須恵器有台杯	底部外面	15P'12・13	-	
11	237	「□□□□」	須恵器有台杯	底部外面	14N'25・15O'16	-	ヘラ記号あり
12	247	「十」	須恵器無台杯	底部外面	15P'12	-	
13	250	「下」	須恵器無台杯	底部外面	15O'1・15P'7	-	
14	252	「□」	須恵器無台杯	体部外面横位	15P'2	-	
15	258	「宮」	土師器無台椀	体部外面	15Q'25	-	
16	273	「人か」	須恵器有台杯	底部外面	13G'20	-	
17	280	「□」	須恵器無台杯	底部外面	13H'13	-	
18	281	「人人」	須恵器無台杯	底部外面	13H'6	-	
19	282	「人人」	須恵器無台杯	底部外面	13G'19	-	
20	283	「人人か」	須恵器無台杯	底部外面	13G'15	-	
21	284	「人人」	須恵器有台杯	底部外面	13G'20	-	
22	285	「□」	須恵器無台杯	体部外面	13L'15	-	
23	－	「□」	須恵器杯類	体部外面	13H'13	-	
24	－	「□」	須恵器杯類	体部外面	13K'8	-	

第34表　細田遺跡出土墨書土器一覧表

B　古　　代

細田遺跡では春日編年［春日1999］のⅣ～Ⅵ期（8世紀後半～9世紀後半）を中心とする土器が出土した。丘陵裾部の平坦面に掘立柱建物跡４棟が確認されている（SK24・28・29・30も建物の一部である可能性があるが数には入れていない）。柱穴に遺物を伴わないため細かな年代は不明であるが、切り合いおよび主軸方向からは３時期の建物跡が確認できる。SB26・20→SB21→SB22への変遷を追うことができる。SB21とSB22の切り合いは明確ではないが、主軸方向が異なるため、SB26の主軸方向により近いSB21を古く見た。SB26は柱穴の掘形の形状が隅丸方形で桁行５間のもので、遺跡の中心的な建物跡であると考えられる。このSB26と軸を同じくするSB20は同時に存在したものと思われる。井戸（SE37）は立地、切り合いからSB26・20時期に伴うと考えられる。SD27・5・38は地形の傾斜の変換点付近に位置し掘立柱建物群の軸に類似することから区画溝の可能性がある。

遺物では、15O'・P'・Q'の調査区北端遺物集中区では春日編年のⅣ２～Ⅴ１期の遺物が出土している。口縁部残存率からは須恵器に大幅に組成が偏る。SD4では「凡」の墨書を持つものを含む土師器椀を定量含む。時期的には春日編年Ⅴ～Ⅵ期の遺物を主体とする。口縁部残存率からは土師器椀に組成が大幅に偏る。その他、遺物包含層出土についてはⅤ～Ⅵ期を中心とする遺物が出土している。また、遺跡では判読可能「凡」・「人人」・「十」・「下」・「宮」など、合計24点の墨書土器が出土している（第34表・図版132・133写真参照）点も注目される。「凡」・「人人」は、同じ器種・器形の土器に同じ文字を記している。

遺跡はⅣ期に成立し、Ⅴ～Ⅵ期をピークとし、以降も断続的に続いていく（12世紀以降も）。Ⅳ～Ⅴ期は、有力農民層による新たな耕地の開発と初期荘園の成立の時期と重なる。頸城平野周辺の遺跡で初期荘園との関連が指摘されている遺跡は上越市越前遺跡、上越市頸城区榎井Ａ遺跡などが知られており、区画溝で囲まれた区域に掘立柱建物跡が配置される集落構造を持つ。特筆される遺物は、越前遺跡では、墨書土器（十・中・大・笠・□古・京都（部カ）・毛人・田□）施釉陶器・木製の祭祀具（斎串・舟形木製品・弓形木製品）、榎木Ａ遺跡では墨書土器（北舘・北・舘・人・庄など）・施釉陶器・荘園の役夫動員に関連する木簡が出土している。これらの２遺跡は沖積地上の小河川脇に位置し、内水面交通の利便な立地環境を考えると、開発領主層が関与もしくは、公的性格（物資の集積・輸送など）の強い、中核的な遺跡であると推測される。

対して細田遺跡の立地は、西頸城丘陵の裾部に位置し、開発対象となる青田川流域の沖積地（扇状地）が見渡せる場所にある。遺跡の立地および遺構・遺物（円面硯・墨書土器・施釉陶器など）の内容から、中核的な遺跡に属し、開発領域（沖積地・扇状地）の各所に形成された生産拠点としての役割を担った遺跡であると思われる。

要　　約

［下馬場遺跡］

1　遺跡は新潟県上越市大字下馬場字浦山863番地ほかに所在する。調査範囲は高田平野西縁の丘陵上（台地上）に立地し、現況は牧草地・山林であった。標高は70～78mである。

2　発掘調査は上信越自動車道の建設に伴い、平成９年４月21日～11月14日にかけて実施した。

3　弥生時代後期から終末期にかけての竪穴建物14軒、土坑16基、ピット４基、性格不明遺構３基が確認された。その他、縄文時代の陥穴土坑15基・土坑１基、時期不明炭窯８基を検出した。調査範囲北側では後世の牧草地造成のため、遺物包含層および遺構確認面の地山面の一部が削平されていた。南側の山林部分は遺物包含層が比較的良好に残存していた。そのため弥生時代の遺物の大半は遺構の堆積土および竪穴床面出土の遺物である。

4　遺物は、弥生時代後期～終末期（一部古墳時代前期）の土器・石器・石製品（管玉製作関連・ヒスイ）・鉄製品のほか、旧石器２点、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の土器、縄文時代（早・前期？）の石器が出土している。

5　石製品では、管玉の製作工程品が円形の竪穴建物である１・７号竪穴を中心に出土している。遺跡における管玉製作は弥生後期後半（法仏式併行）段階のみで行われており、弥生終末（月影式期併行）段階には管玉製作は行われなくなる。使用石材は13号竪穴の段階（下馬場１期）では、緑色凝灰岩が多いのに対し、１・７号竪穴の段階（下馬場２期）には鉄石英が約９割を占めるようになる。

6　製作工程は石材ごとの特徴が見られる。鉄石英は両極打撃により、扁平板状の素材を作り出し、その板状の素材を分割して角柱状の素材を得る。角柱状の素材には長辺に対し、横（側面）方向からの打撃痕が見られる。緑色凝灰岩では、擦切溝（施溝分割）の痕跡を持つものが見られ、また、角柱状の素材長辺に対し、縦方向からの剥離痕跡が見られるものがある。しかし、鉄石英同様に横（側面）方向からの打撃痕が見られるものも存在する。

7　管玉の穿孔は、弥生中期段階に見られるような、穿孔方向に直交して生じる線状痕が見られないこと、孔表面が平滑で、光沢を帯びることから、鉄製工具による穿孔の可能性がある。

8　鉄製品では13号竪穴建物出土の針状鉄製品（銹着大小９本？）が特筆され、玉作工具（穿孔具）の可能性が高く、注目される。遺跡では鉄鏃１・板状鉄製品３・鉈？１も出土しており、複数の焼土面を持つ竪穴（２・３・９・10・11・13号）や有溝砥石（金属刃器の痕跡）も含め、使用のみならず、遺跡内で、金属加工が行われていた可能性も考えられる。

［細田遺跡］

1　細田遺跡は新潟県上越市大字黒田字細田305番地１ほかに所在する。調査範囲は高田平野西縁の丘陵裾から青田川左岸沖積地（扇側部）に立地する。標高30～35mである。遺跡西方の丘陵上から斜面部には周知の黒田古墳群が隣接する。

2　発掘調査は、上信越自動車道本線工事用道路の建設に伴い、平成９年４月14日～８月26日にかけて実施した。

3　弥生時代終末期～古墳前期、奈良～平安時代の遺物を中心に、縄文時代（中・後・晩期）、古墳時代後

期、中世、近世の遺物が出土した。

4　弥生時代終末期～古墳前期は２か所で土器の集中が見られたが、明確な遺構は確認できなかった。遺跡の成立時期は、下馬場遺跡の竪穴の終末の時期（月影式併行）と重なっており、新潟県内における同一時期の丘陵上から沖積地へという遺跡立地の動向と軌を一にしていると推測される。

5　奈良～平安時代は、掘立柱建物４軒、井戸１基、土坑・ピット23基、溝５基、性格不明遺構２基が検出された。掘立柱建物の軸、切り合い関係等からは概ね３時期の変遷を追うことができる。大型の建物SB20・26は隅丸方形の柱穴掘形を持つ。

6　溝（SD4・SD6）からは土師器を中心とする一括資料が出土した。明確な落ち込みは確認できなかったが、15P'、15Q'・R'の２か所では須恵器を中心とする土器が一括出土した。

7　中世では12世紀代から15世紀までの土器・陶磁器類（中世土師器・青磁・白磁・珠洲焼・瀬戸美濃焼）のほか、土坑内から五輪塔が出土した。

引用・参考文献

甘粕　健　2001　『裏山遺跡と倭国大乱』 新潟日報事業社

石川日出志　2002　「栗林式時の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100合併号　長野県考古学会

伊藤恒彦　1985　「行塚遺跡の玉造り」『吉井遺跡群－新潟県柏崎市吉井遺跡群発掘調査報告書－』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第４　新潟県柏崎市教育委員会

伊藤武士　2001　「第五章 奈良・平安時代の生産遺跡 手形山窯跡」『秋田市史』第７巻古代資料編　秋田市

井上唯雄ほか 1985　『月夜野古窯跡群』 群馬県利根郡月夜野町教育委員会

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

尾崎高宏　2002　『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅷ 黒田古墳群』新潟県埋蔵文化財調査報告書第111集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2003　「上越地内（米岡地区・下割遺跡隣接地）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成14年』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小野昭・桑原陽一ほか　1988　『丸山遺跡発掘調査報告書』 新潟県大潟町教育委員会

春日真実ほか 1994　『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999　「第４章 第２節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会

春日真実　1999　「第４章 古代 第２節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編　高志書院

春日真実　2002　『二級河川郷本川広域基幹河川改修工事・一般国道116号和島バイパス関係報告書 奈良崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2003　『磐越自動車関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅲ（Ｃ地区）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第123集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　1999　「Ⅴ 上層の調査 Ｃ石器」『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　和泉Ａ遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第92集　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子正典・滝沢規朗・丸山一昭　1999　「第３章 弥生時代・古墳時代 第２節土器 第３項弥生後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編

金子拓男・高橋保・秦繁治　1980　『水科古墳群発掘調査報告書』 三和村教育委員会

神谷佳明・桜岡正信　1997　「群馬県」『古代生産史研究会 '97シンポジウム 東国の須恵器 －関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』 古代生産史研究会

河野一隆・野島　永　1997　「丹後国営農地開発事業（東部・西部地区）関係遺跡　平成８年度発掘調査概要（2）奈具岡遺跡（第７・８次）」『京都府遺跡調査概要』第76冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

川畑　誠　1999　「須恵器貯蔵具の製作痕跡試論」『須恵器貯蔵具を考えるⅠつぼとかめ 北陸古代土器研究』 第８号　北陸古代土器研究会

川村浩司　1996　「弥生後期における北信濃と北陸」『－考古学と遺跡の保護－甘粕健先生退官記念論集』 同刊行会

川村浩司　2000　「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』第５号　新潟県上越市

木島　勉　1987　「新潟県糸魚川市後生山遺跡」『日本考古学年報』38　日本考古学協会

木島　勉・笹澤　浩　2003　「吹上遺跡」『上越市史 資料編２ 考古』 新潟県上越市

北野博司　1991　「第Ⅲ章 冬野遺跡第５節 大型土坑について」『押水町冬野遺跡群』 石川県埋蔵文化財センター

北野博司　1999　「須恵器貯蔵具の器種分類案」『須恵器貯蔵具を考えるⅠつぼとかめ　北陸古代土器研究』 第８号　北陸古代土器研究会

楠　正勝　1989　「絵画土器・記号文・スタンプ文」『西念・南新保遺跡Ⅱ』 金沢市教育委員会

計良由松　1961　「後期弥生式文化の攻玉法」『考古学雑誌』第47巻第１号　日本考古学会

計良勝範・本間信昭　2004　「北陸Ⅰ 新潟県佐渡島」『日本玉作大観』 吉川弘文館

小池義人　1998　「下馬場遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成９年度』　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人ほか 2000　『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ 裏山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人　2004　「上越市裏山遺跡と環濠」『考古学ジャーナル』No.511 特集 環濠と土塁　ニューサイエンス社
小池義人　2004　「上越市裏山遺跡と環濠」『考古学ジャーナル』511　ニューサイエンス社
五泉市史編集委員会　1994 『五泉市史　資料編１　原始・古代・中世』
小林行雄・佐原　眞　1964 『紫雲出 香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究』 香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会
駒井和愛・吉田章一郎　1962 『斐太－新潟県新井市の弥生聚落址－』 慶友社
斎藤基生　1979　「第６章 総括」『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集　新潟県教育委員会
斎藤基生　1983　「新潟県柏崎市下谷地遺跡における細形管玉の製作工程について」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集－』
坂井秀弥　1986　「越後における月影式併行期とその前後の土器」『シンポジュウム「月影式」土器について 報告編』 石川県考古学会
佐々木勝・林　大智　1999 「北陸地域における弥生時代鉄製品の様相」『考古学ジャーナル』467　ニューサイエンス社
笹澤　浩　2004　「長野県側から見た新潟県の弥生時代（要旨）－特に上越地方を中心にして－」『新潟県考古学会第16回大会 研究発表会要旨』 新潟県考古学会
笹澤正史　1999　『新潟県上越市上千原地区ほ場整備関連発掘調査報告書 津倉田遺跡』 上越市教育委員会
笹澤正史　2000　「越後における庄内～布留式併行期の土器の動き－頸城郡を中心として－」『庄内式土器研究』ＸＸⅥ　庄内式土器研究
笹澤正史　2003　「第５章 古代 第１節 時代概説」『上越市史 資料編２ 考古』 新潟県上越市
佐藤　慎　2004　「観音平古墳群の再検討」『頸城文化』第52号　上越郷土研究会
品田高志　1990　「第Ⅶ章 戸口遺跡」『吉井遺跡群Ⅱ－新潟県柏崎市吉井遺跡群第Ⅱ期発掘調査報告書－』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志　1992　「越後における古墳時代土器の変遷Ⅱ－前期土器編年の現状と編年試案－」『柏崎市立博物館館報』第６号　柏崎市立博物館
上越市教育委員会　1989 『下馬場古窯跡群確認調査報告書』 新潟県上越市教育委員会
杉本源造　2004　「袋状貯蔵穴について」『地域と古文化』
関　雅之・藤田富士夫　2004 「北陸Ⅱ 新潟県 富山県」『日本玉作大観』 吉川弘文館
滝沢規朗　1992　「西谷遺跡の編年的位置付け」『西谷遺跡』 刈羽村教育委員会
滝沢規朗　1993　「越後における弥生後期以降の土器文様－凹線文系と刺突文を中心に－」『北越考古学』第６号 北越考古学会
滝沢規朗　1994　「新井市斐太遺跡群出土土器について」『新潟考古』第５号　新潟考古学会
滝沢規朗　1995　「古墳出現前後における集落の動向－越後の集落を考える上での基礎整理として－」『研究紀要』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規郎　1999　「第３章 弥生・古墳時代 第３節 集落」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編　高志書院
滝沢規朗　2000　「新潟県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』第１分冊　東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
田嶋明人ほか 1986　「考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡』 石川県埋蔵文化財センター
田代　弘　1993　「奈具岡遺跡」『京都府遺跡調査概報』第55冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
都出比呂志　1989　「竪穴式住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店
寺崎裕助　2003　「第２章 縄文時代 第１節 時代概説」『上越市史資料編２ 考古』 新潟県上越市
寺沢　薫　1980　『奈良市 六条山遺跡』 奈良県文化財調査報告書第34集　奈良県立橿原考古学研究所
寺沢　薫　1986　『矢部遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所
寺村光晴ほか 1991　『寺泊町史 資料編１』 新潟県寺泊町
田海義正・坂上有紀　2000 『県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
田海義正　2000　「第Ⅴ章石器 Ｄ まとめ」『県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 98集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
田海義正　2003　「新潟県の玉作遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第10号 （財）石川県埋蔵文化財センター
栃木英道　1987　「考察 月影式土器をめぐる編年的な問題について」『吉竹遺跡』（財)石川県埋蔵文化財センター
栃木英道　1995　「第８章 考察」『谷内・杉谷遺跡群』 石川県埋蔵文化財センター

冨山正明　1997　「福井県林・藤島遺跡出土の鉄製品－弥生時代後期の玉作り工具を中心に－」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第４回鉄器文化研究集会発表要旨集　鉄器文化研究会
中島庄一ほか 1994　「第Ⅴ章 成果と課題 第６節　弥生時代中期後半の土器群」『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路　栗林遺跡・七瀬遺跡』　長野県・長野県道路公社・（財）長野県埋蔵文化財センター
成瀬正勝ほか 2000　『砂行遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集　（財）岐阜県文化財保護センター
河野一隆・野島　永　2003　「弥生時代水晶製玉作りの展開をめぐって」『京都府埋蔵文化財情報』第88号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
楢崎彰一　1976　『日本陶磁全集６　白瓷』　中央公論社
野水　仁・加藤　学・石田守之　2000　「4 石器・石製品」『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ 裏山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
橋本博文　1997　「北陸における鉄器の普及と展開－北関東との関わりで－」『第４回鉄器文化研究集会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨集』　鉄器文化研究会
馬場伸一郎　2004　「猫橋遺跡出土の緑色凝灰岩製管玉の製作工程と製作技術について」『加賀市猫橋遺跡』　石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
馬場伸一郎・宮田　明　2004　「緑色凝灰岩製管玉の施溝分割技術について（1）－石川県八日市地方遺跡の事例分析－」『アルカ研究論集』第２号　考古学研究所　株式会社アルカ
久田正弘ほか 2002　『小松市一針Ｂ遺跡・一針Ｃ遺跡』　（財）石川県埋蔵文化財センター
久田正弘・馬場伸一郎　2003　「石川県羽咋市東的場タケノハナ遺跡における弥生時代の管玉加工技術と角柱体の形成」『アルカ研究論集』第１号　株式会社アルカ
藤澤良祐　1991　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館紀要』Ｘ　瀬戸市歴史民俗資料館
前山精明　1999　「第３章 弥生・古墳時代 第２節土器 第４項続縄文時代」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会編　高志書院
前山精明・相田泰臣　2002　『南赤坂遺跡』　巻町教育委員会
三浦純夫　1980　『上田出西山遺跡発掘調査報告書』　押水町教育委員会
水澤幸一　1998　「県営湛水防除事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ　兵衛遺跡・四ツ持遺跡」　新潟県中条町埋蔵文化財報告書第15集　中条町教育委員会
水澤幸一　2004　『上越市史研究』第10号　新潟県上越市
室岡　博　1981　『頸城地方の海と海底海浜遺跡』増補改訂版　上越市総合博物館教養選書第１篇
室岡　博　1983　「弥生時代の遺跡」『ふるさと大潟町』新潟県中頸城郡大潟町
谷内尾晋司　1983　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』　石川県考古学会
山崎忠良ほか 2004　『一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ　下割遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第134集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
山下峰司　1995　「4 灰釉陶器・山茶椀」『概説 中世の土器・陶磁器』　真陽社
横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入陶磁器について」『研究論集』4　九州歴史資料館
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
吉川俊久　2001　「三和村大野古墳群の調査」『第13回新潟県考古学会研究発表会 発表要旨』　新潟県考古学会
渡邉朋和ほか 2001　『八幡山遺跡発掘調査報告書』　新潟県新津市教育委員会

下馬場遺跡　竪穴建物観察表

遺構名	グリッド	平面形	長軸（m）	短軸（m）	深度（m）	床面標高（m）	主軸方向	主柱穴	炉（焼土）	備考
1号竪穴建物	11I	円形	8.5	8.0	0.24	72.9	N-10°-W	P1～5・7・8 7本　円形	西側に2か所焼土あり	壁溝（西～南西）
2号竪穴建物	9G・H、10G・H	隅丸方形	9.0	－	0.36	74.4	N-75°-W	P1～4　4本 方形	中心に炉、南西側に焼土	P5～7貯蔵穴、壁溝（北半分～西～南半分）
3号竪穴建物	10E	隅丸方形	5.0	4.8	0.22	76.2	N-80°-W	P1～4　4本 方形	中心に炉、北東1西2南東2焼土	P5貯蔵穴、壁溝（北東・東で途切れる）
4号竪穴建物	8D・E、9D・E	隅丸方形	6.2	5.7	0.34	69.88	N-83°-W	P1～4　4本 方形	中心に炉	P5貯蔵穴、壁溝（南西を除くすべて）
5号竪穴建物	8F・8G	隅丸方形	4.8	4.5	0.58	74.73	N-65°-W	P1・2　2本（2本不明）方形	不明（検出されず）	P3・4（性格不明）、西～南西に棚状遺構あり
6号竪穴建物	7F	隅丸方形	4.6	4.1	0.70	74.82	N-90°-W	P1・2　2本	中心に炉あり	P3貯蔵穴
7号竪穴建物	5D・6D	円形	8.8	－	0.42	74.64	N-50°-W	P1・2・5～7	不明（検出されず）	P3・4は主柱穴ではないか
8号竪穴建物	4D	隅丸方形	3.7	－	0.12	73.38	N-5°-W	不明	南西に焼土2か所あり	北西隅、南側で一括土器
9号竪穴建物	5F・G、6F・G	長方形	4.4	3.4	0.24	72.39	N-4°-W	P1・2　2本	東側に焼土5か所	北西側の区画から炭化米
10号竪穴建物	8I	（長方形）	－	3.5	0.28	71.9	N-40°-E	P1のみ（2本か）	中心に炉あり	
11号竪穴建物	5I	隅丸方形	6.5	6.2	0.60	70.44	N-24°-E	P1～4　4本 方形	中心に炉あり、北側に2か所焼土あり	壁溝、P5貯蔵穴
12号竪穴建物	6J・7J	隅丸長方形	6.2	4.9	0.68	70.12	N-61°-W	P1・2　2本		P3貯蔵穴
13号竪穴建物	5H	隅丸長方形	5.9	4.9	0.36	71.16	N-81°-W	P1・2　2本		P3貯蔵穴
14号竪穴建物	5J・6J	隅丸方形	4？	－	－	－	－	－		－

下馬場遺跡　竪穴建物内ピット観察表

竪穴建物	遺構名	平面形	断面形	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	備考
1号竪穴	P1	円	台形状	48	54	70	主柱穴
	P2	円	箱状	30		62	主柱穴
	P3	円	箱状	30		72	主柱穴
	P4	円	台形状	34		47	主柱穴
	P5	楕円	箱状	36		68	主柱穴
	P7	円	階段状	60	50	76	主柱穴
	P8	円	台形状	56	52	36	主柱穴
	P9	円	台形状	48		8	他とは配置がずれるため主柱穴ではないか
2号竪穴	P1	円	箱状	60	68	50	主柱穴
	P2	楕円	台形状	66	48	60	主柱穴
	P3	楕円	台形状	98	52	34	主柱穴
	P4	円	弧状	70	62	48	主柱穴
	P5	円	台形状	60	56	38	炉の東側に位置する
	P6	方	台形状	98	90	56	貯蔵穴か
	P7	楕円	台形状	154	68	14	東側の壁際に平行して掘られたものか。貯蔵穴？
3号竪穴	P1	円	台形状	105	68	67	主柱穴
	P2	円	台形状	50		74	主柱穴
	P3	円	台形状	50		64	主柱穴
	P4	円	台形状	48		68	主柱穴
	P5	円	階段状	56		40	貯蔵穴か
4号竪穴	P1	円	箱状	32		72	主柱穴
	P2	円	台形状	38	32	68	主柱穴
	P3	円	台形状	28		76	主柱穴
	P4	円	台形状	30		73	主柱穴
	P5	長方	台形状	86		34	貯蔵穴か
5号竪穴	P1	楕円	階段状	70	54	60	主柱穴
	P2	円	弧状	66	68	42	主柱穴
	P3	楕円	台形状	110	54	32	竪穴中心に位置する
	P4	円	袋状	52		18	竪穴南東側の隅、壁に平行して位置する。貯蔵穴？
6号竪穴	P1	円	台形状	32		50	主柱穴
	P2	円	台形状	32		60	主柱穴
	P3	円	台形状	98	78	28	貯蔵穴か。管玉工程品、砥石（28）出土
7号竪穴	P1	楕円	台形状	32	26	50	主柱穴
	P2	円	台形状	20		33	主柱穴
	P3	円	台形状	43		24	他とは配置がずれるため主柱穴ではないか
	P4	円	台形状	48		24	他とは配置がずれるため主柱穴ではないか
	P5	円	台形状	37	30	62	主柱穴
	P6	円	台形状	31		48	主柱穴
	P7	円	台形状	30		56	主柱穴
9号竪穴	P1	円	弧状	38		20	主柱穴
	P2	円	弧状	29		18	主柱穴
	P3	円	弧状	58		15	貯蔵穴か
10号竪穴	P1	円	弧状	38	35	14	主柱穴
	P2	楕円	弧状	82	52	16	貯蔵穴か
11号竪穴	P1	円	台形状	35		29	主柱穴
	P2	楕円	台形状	35	30	35	主柱穴
	P3	円	台形状	35		46	主柱穴
	P4	円	台形状	30		52	主柱穴
	P5	楕円	弧状	112	80	9	竪穴北東隅、壁に平行して掘られたものか。貯蔵穴？
12号竪穴	P1	円	台形状	25		46	主柱穴
	P2	円	台形状	22		26	主柱穴
	P3	円	弧状	154	62	36	貯蔵穴か
	P1	円	階段状	34		78	主柱穴
	P2	楕円	階段状	54	34	58	主柱穴
	P3	楕円	台形状	112	94	42	貯蔵穴か

下馬場遺跡　弥生時代遺構観察表

遺構名	グリッド	層位	平面形	断面形	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	出土遺物	備考
SK1	13I17・22		円	U字状	135	130	34	－	
SK2	13I6・7・11・12		円	弧状	130	120	20	－	
SK3	13G5、13I1		円	U字状	133	119	125	－	
SK4	13G10、13I6		円	U字状	126	114	145	－	
SX5	10H3・4		楕円	弧状	150	127	14	314	
SK6	10G14		円	袋状	110	100	50	－	底径105cm
SK7	10F8		円	箱状	110	117	47	315	
SX8	9F7・8		楕円	弧状	260	121	6	316～325	南辺に直径30cmのピット
SK9	10I22		円	U字状	67	68	36	－	
SK10	9I3		楕円	箱状	75	58	30	－	
SK11	9H16・21		楕円	箱状	70	53	45	－	
SK12	7G15		楕円	弧状	105	80	25	－	
SX13	7F19・24		楕円	弧状	135	74	14	324	
P14	7E16・24		円	弧状	52	52	24	－	
P15	8D21、8E1		楕円	台形状	63	45	67	－	
P16	7C23		円	箱状	53	52	64	－	
SK17	10G1		円	袋状	96	90	41	327	底径100cm
SK18	10G15・20		円	袋状	95	87	51	328	底径115cm
SK19	7K7		円	袋状	94	82	89	－	底径55cm
SK20	12D6		円	弧状	80	76	19	－	
SK21	13E6		円	台形状	64	55	39	－	
SK22	12E18		楕円	階段状	119	73	47	－	
P23	12F20		円	階段状	48	42	20	－	

下馬場遺跡　時期不明炭窯観察表

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	備考
CSK1	15H22・23	方	台形状	67	70	20	
CSK2	14H9・14	方	台形状	113	117	21	1,240±40BP（放射性炭素年代測定）：古代か
CSK3	14F18・19・23・24	円	台形状	75	76	15	
CSK4	13E9	円	台形状	110	102	21	
CSK5	11I8・9・13・14	円	弧状	114	100	11	SI1のプラン内部で検出された
CSK6	10I24	円	弧状	83	68	6	
CSK7	7H15、8H11	円	弧状	87	77	26	
CSK8	6I19	長方形	台形状	72	52	7	

下馬場遺跡　縄文時代の土坑観察表

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	ピット径	ピット深	備考
JSK1	14I14・15	長方	箱状	109	54	113	－	20	
JSK2	14H24・25	楕円	箱状	109	63	101	－	15	
JSK3	14H14・15	楕円	箱状	105	68	67	－	26	
JSK4	14H5、15H1	楕円	箱状	117	71	67	－	7	
JSK5	15G21・22	楕円	台形状	124	95	123	－	29	
JSK6	15G3	円	台形状	104	100	106	19	32	
JSK7	15F19	円	袋状	130	112	89	15	26	
JSK8	15F5・10	長方	箱状	97	58	92	6	18	
JSK9	15E20、16E16	長方	箱状	101	70	85	7	18	
JSK10	16E1・6	長方	台形状	91	68	99	7	14	
JSK11	16D6・7	長方	台形状	95	55	92	7	15	
JSK12	14H24、14I4・5	円	台形状	104	95	68	－	－	底部のピットは確認されず
JSK13	14G2・3・7・8	楕円	台形状	112	77	80	－	－	底部のピットは確認されず
JSK14	14E23・24	円	台形状	98	82	64	－	－	底部のピットは確認されず
JSK15	13C19・24	円	台形状	99	85	71	－	－	底部のピットは確認されず
JSK16	15E12・13	円	台形状	81	74	16	－	－	

下馬場遺跡　SI1 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1		管玉工程品	石核	鉄石英	2.26	1.86	1.52	4.96	
2		管玉工程品	角柱	鉄石英	2.20	1.13	0.84	2.61	
3		管玉工程品	角柱	鉄石英	1.52	1.36	0.95	1.67	
4		管玉工程品	角柱	鉄石英	1.78	1.41	0.92	2.95	
5		管玉工程品	剥片	鉄石英	2.18	2.03	0.72	2.32	
6		管玉工程品	剥片	鉄石英	1.13	0.97	0.24	0.22	
7	78	管玉工程品	研磨	鉄石英	0.80	0.43	0.48	0.31	
8		管玉工程品	剥片	鉄石英	0.86	0.48	0.22	0.09	
9		管玉工程品	角柱	鉄石英	0.76	0.75	0.49	0.36	
10	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.50	0.33	0.12	0.04	
11	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.43	0.34	0.80	0.03	
12	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.55	0.42	0.15	0.04	
13	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.42	0.30	0.90	0.04	
14	－	管玉工程品	チップ	緑色凝灰岩	0.88	0.58	0.14	0.06	
15	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	1.49	0.51	0.30	0.18	
16	－	管玉工程品	チップ	緑色凝灰岩	0.82	0.44	0.16	0.08	
17	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.80	0.34	0.24	0.08	
18	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	1.14	0.66	0.48	0.28	
19	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.77	0.56	0.14	0.07	
20	－	管玉工程品	チップ	緑色凝灰岩	0.51	0.42	0.12	0.05	
21	－	管玉工程品	角柱	鉄石英	2.01	1.62	1.14	3.81	
22	41	石器	研磨具	軽石	6.70	4.90	3.70	26.60	
23	96	管玉工程品	角柱	緑色凝灰岩	2.45	1.05	0.55	1.31	
24	79	管玉工程品	研磨	鉄石英	0.80	0.50	0.40	0.30	
25	－	管玉工程品	角柱	鉄石英	2.16	1.04	1.10	1.92	
26	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	2.61	1.48	0.54	2.00	
27	－	管玉工程品	角柱	鉄石英	1.43	0.79	0.64	0.63	
28	－	管玉工程品	角柱	鉄石英	1.61	1.17	0.58	1.65	
29	－	管玉工程品	角柱	鉄石英	1.51	1.04	0.52	0.76	
30	－	管玉工程品	石核	鉄石英	4.12	1.77	1.55	14.32	
31	－	管玉工程品	石核	鉄石英	2.24	1.94	1.79	4.77	
32	－	管玉工程品	角柱	鉄石英	1.24	1.10	1.21	1.06	
33	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.86	0.50	0.24	0.07	
34	－	玉関係	原石	チャート	3.64	2.62	2.08	25.56	
35	－	管玉工程品	原石	鉄石英	5.21	3.76	2.89	44.79	
36	87	管玉工程品	剥片	鉄石英	1.40	2.40	0.70	2.16	
37	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	2.92	1.53	1.20	4.12	
38	98	管玉工程品	研磨	緑色凝灰岩	1.70	0.60	0.50	0.54	
39	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	1.26	0.84	0.42	0.45	
40	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.72	0.64	0.10	0.07	
41	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.62	0.44	0.25	0.10	
42	－	管玉工程品	原石	鉄石英	5.70	4.10	3.11	79.38	
43	－	管玉工程品	剥片	鉄石英	0.81	0.36	0.20	0.07	

下馬場遺跡　SI2 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1	－	－	－	－	－	－	－	－	欠番
2	－	管玉工程品	原石	緑色凝灰岩	4.8	3.74	2.11	50	
3	2	石器	砥石	砂岩	14.7	8.4	7.4	660.7	有溝砥石
4	－	石器	磨石類	安山岩	18.6	9.6	5.3	1030	
5	1	石器	砥石	砂岩	17.6	6.6	6	754.5	有溝砥石
6	－	石器	磨石類	砂岩	12.05	7	5.1	530	
7	3	石器	砥石	砂岩	10.8	9.45	5.65	616.7	有溝砥石
8	－	石器	砥石？	砂岩	14.9	6.45	5.5	550	有溝砥石
9	－	石器	磨石類	安山岩	14.5	8.95	5.3	800	
10	－	石器	原石	砂岩	5.18	1.97	1.66	17.5	
11	8	石器	砥石	砂岩	35.7	25.2	13	11810	有溝砥石
12	24	石器	砥石	砂岩	13.6	5.25	5.3	496.6	
13	－	石器	磨石類	安山岩	14.05	8.05	6.5	820	
14	6	石器	砥石	砂岩	15.3	7	7.65	950	有溝砥石
15	4	石器	砥石	泥岩	18.5	9	5.6	1097.9	有溝砥石

下馬場遺跡　SI3 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1	7	石器	砥石	砂岩	7.7	7.95	2.15	150	有溝砥石
2		石器	砥石	砂岩	3.58	2.04	1.26	9.2	
3		石器	砥石？	凝灰岩	8.14	5.31	2.95	9.2	
4	26	石器	台石	ヒン岩	15.6	12.9	8.4	2380	
5		石器	原石	安山岩	4.96	3.88	2.2	50.5	
6		管玉工程品	角柱	鉄石英	1.94	1.43	1.42	4.72	
7	9	石器	砥石	砂岩	12.2	4.6	2.5	248.9	有溝砥石
8	17	石器	砥石	砂岩	24.05	9.1	5.6	1140.5	9と同一
9	17	石器	砥石	砂岩	－	－	－	－	8と同一
10		石器	砥石	砂岩	9	6.3	3.65	208	
11	10	石器	砥石	砂岩	26.4	32.95	17.7	18001	有溝砥石

下馬場遺跡　SI4 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1	115	勾玉	ー	ヒスイ	1.3	0.85	1.35	10.3	
2		管玉工程品	角柱	鉄石英	1.16	0.98	0.42	0.62	
3		管玉工程品	角柱	鉄石英	1.87	1.16	0.76	1.63	
4	25	石器	砥石	凝灰岩	11.65	3.65	4.05	220.1	
5	38	石器	磨石類	ヒン岩	7.3	6.75	3	279.48	
6	27	石器	台石	凝灰岩	68.8	33.8	15.5	26210	
7		管玉工程品	角柱	鉄石英	1.72	1.24	1.07	1.34	
8		石器	磨石類	砂岩	9.1	8.9	5.5	445	
9	22	石器	砥石	凝灰岩	24.85	18.6	9.55	6850	
10		石器	剥片	凝灰岩	0.96	0.96	0.2	0.15	
11	31	石器	磨石類	凝灰岩	11.5	6.8	3.1	382.5	
12		石器	砥石	砂岩	44.2	29.4	23.6	37.8	
13		石器	砥石	凝灰岩	2.4	1.56	0.88	2.5	
14		石器	磨石類	砂岩	11.3	7.7	5.05	430	

下馬場遺跡　SI5 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1	39	剥片石器	剥片	泥岩	12.8	12.3	7.8	1195.5	
2		石器	磨石類	砂岩	15.1	7.6	4.9	810	
3	33	石器	磨石類	砂岩	15.3	7.5	6.6	919.3	
4		石器	磨石類	砂岩	17.6	8.9	7.7	1420	
5	30	石器	磨石類	角閃石安山岩	14.4	6.25	5.1	649.3	
6	18	石器	砥石	砂岩	14.6	8.1	4.8	982.2	

下馬場遺跡　SI6 出土石器観察表

取り上げ No.	註記 No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1	1		管玉工程品	剥片	緑色凝灰岩	0.34	0.29	0.14	0.08	
2	3		玉関係	原石	蛇紋岩	2.13	1.94	0.52	3.53	
3	3	43	石器	研磨具	軽石	4.2	3.7	2.55	7.2	
3	3	111	玉関係	原石	ヒスイ	2.7	1.55	1.5	8.38	
4	6		玉関係	原石	チャート	2.38	2.05	1.46	8.13	
5	7		管玉工程品	剥片	緑色凝灰岩	2	1.98	0.4	2.06	
6	8		玉関係	原石	チャート	1.8	1.61	0.83	3.04	
7	9		玉関係	原石	チャート	3.56	2.24	1.72	11.66	
8	10		玉関係	原石	チャート	1.48	1.04	0.87	1.73	
9	11		玉関係	原石	チャート	3.05	2.77	1.27	22.52	
10	12	97	管玉工程品	角柱	緑色凝灰岩	2.3	1.35	0.95	2.48	
11	13	92	管玉工程品	角柱	緑色凝灰岩	1.9	1.1	0.9	2.16	
12	14		玉関係	原石	チャート	1.92	1.58	0.96	3.61	
13	15		玉関係	原石	チャート	2.02	1.64	1.27	4.33	
14	16		玉関係	剥片	ヒスイ	2.1	1.99	0.79	2.99	
15	17		玉関係	原石	チャート	1.28	0.93	0.74	1.19	
16	18	40	石器	原石	蛇紋岩	6.55	4.45	3.3	104.93	
17	19		玉関係	原石	チャート	2.5	1.95	15	11.31	
18	20		玉関係	原石	チャート	2.81	2.62	1.57	13.84	
19	21		玉関係	原石	チャート	2.16	1.03	0.83	2.76	
20	23		玉関係	原石	チャート	2.1	1.78	1.33	6.13	
21	24		玉関係	原石	チャート	1.62	1.38	0.91	3.42	
22	25		管玉工程品	剥片	緑色凝灰岩	1.4	1.12	0.38	0.44	
23	26		石器	原石	安山岩	3.72	2.16	1.51	20.42	
24	27		玉関係	原石	チャート	2.28	2.05	1.56	11.75	
25	29	42	石器	研磨具	軽石	7	5.05	5.1	32.97	
26	30	19	石器	砥石	砂岩	14.8	10.9	7.3	1265.4	
27	31	34	石器	磨石類	砂岩	10.65	8.55	7.25	702.2	
28	32	21	石器	砥石	砂岩	44.6	19.25	16.1	20140	
29	33	28	石器	台石	砂岩	32.6	22.3	13.55	11910	
30	34		玉関係	原石	チャート	1.8	1.7	1.07	4.76	
31	35	108	玉関係	原石	ヒスイ	1.35	1.1	0.5	1.06	
32	36		玉関係	原石	チャート	1.49	1.16	0.66	1.61	

下馬場遺跡　SI7 出土石器観察表

取り上げ No.	註記	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1		55	管玉工程品	両極状素材	鉄石英	3.1	1.6	0.6	3.13	
2		－	管玉工程品	剥片	鉄石英	2.76	2.25	0.42	2.36	
3		－	管玉工程品	両極状素材	鉄石英	2.36	1.4	0.77	1.94	
4		－	管玉工程品	両極状素材	鉄石英	2.33	2.3	1.14	6.22	
5		－	管玉工程品	角柱	鉄石英	2.6	1.87	1.54	7.98	
6		－	管玉工程品	角柱	鉄石英	3.12	0.94	1.02	1.81	
7		－	石器	原石	蛇紋岩？	3.19	1.92	1.94	18.93	
8		－	石器	原石	蛇紋岩？	4.36	2.94	1.67	30.43	
9		53	管玉工程品	両極状素材	鉄石英	3.5	3.85	2.1	29.27	
10		52	管玉工程品	両極状素材	鉄石英	2.35	2.6	1.27	7.89	
11		－	管玉工程品	角柱	鉄石英	2.43	1.43	1	3.31	
12		85	管玉欠損品	研磨・穿孔	鉄石英	1.42	0.4	0.38	0.38	
13		－	管玉工程品	分割	鉄石英	2.3	1.78	0.86	3.29	
14		56	管玉工程品	両極状素材	鉄石英	2.75	1.15	0.9	2.41	
14		62	管玉工程品	角柱	鉄石英	2.25	1.3	1.35	4.49	
15		－	管玉工程品	石核	鉄石英	1.93	1.85	1.55	5.85	
16		－	管玉工程品	角柱	鉄石英	1.95	1.27	1.08	3.45	
17		－	管玉工程品	分割	鉄石英	3.32	1.74	1.31	6.4	
18		－	管玉工程品	石核	鉄石英	5.14	3.24	1.93	30.06	
19	20	－	管玉工程品	分割	鉄石英	2.49	2.14	1.04	5.24	
20	21	－	管玉工程品	石核	鉄石英	3.27	2.59	2.02	13.6	
21	22	76	管玉工程品	研磨	鉄石英	2.4	0.9	0.65	1.75	
22	23	68	管玉工程品	角柱	鉄石英	2.1	4.9	0.8	1.82	
23	24	－	管玉工程品	分割	鉄石英	2.92	1.3	1.83	6.13	
24	25	72	管玉工程品	角柱	鉄石英	2.15	0.8	0.6	1.19	
25	26	103	管玉	－	緑色凝灰岩	0.92	0.23	0.23	0.08	
26	27	50	管玉工程品	石核	鉄石英	4.6	3	2.3	30.38	
27	28	51	管玉工程品	両極状素材	鉄石英	3.25	3.9	2.75	38.39	
28	29	－	管玉工程品	角柱	鉄石英	1.72	1.34	1.14	2.73	
29	30	11	石器	砥石	砂岩	12.3	10.55	8.5	1188	有溝砥石
30	31	－	管玉工程品	石核	鉄石英	3.68	2.34	1.65	15.77	
31	33	100	管玉工程品	研磨	緑色凝灰岩	1.95	0.59	0.55	0.92	

下馬場遺跡　SI8 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1	49	管玉工程品	石核	鉄石英	5.45	3	3.1	54.29	

下馬場遺跡　SI11 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1	20	石器	砥石	砂岩	13.85	10.3	6.7	1150.6	
2	110	玉関係	原石	ヒスイ	6.65	4.5	3.9	147.58	
3		管玉工程品	角柱	緑色凝灰岩	1.47	1.11	0.9	1.48	
4		管玉工程品	剥片	緑色凝灰岩	1.31	0.83	0.29	0.19	
5		管玉工程品	石核	鉄石英	2.87	2.42	2.35	10.38	
6		石器	磨石類	安山岩	7.1	6.5	4.7	302	
7	37	石器	磨石類？	ヒン岩	3.6	5.1	3.95	99.8	
9		管玉工程品	角柱	緑色凝灰岩	1.29	1.2	0.82	1.53	

下馬場遺跡　SI12 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1		管玉工程品	角柱	鉄石英	1.63	0.7	0.66	0.67	
2		石器	磨石類	砂岩	8.6	5.6	4.2	240.1	
3	104	管玉	－	緑色凝灰岩	1.16	0.27	0.27	0.12	
4	12	石器	砥石	砂岩	19.05	15.15	14.25	3630	有溝砥石
6	114	玉関係	施溝	ヒスイ	3.25	3.2	4.2	24.24	

下馬場遺跡　SI13 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量（g）	備考
1	36	石器	磨石類	安山岩	9.3	10.65	5.65	750.6	
2	45	石器	研磨具	軽石	3.9	3.45	2.5	4.97	
3	151	石器	磨石類	安山岩	7.8	6.6	3.85	189.9	
4	14	石器	砥石	砂岩	29.1	17.5	17.75	11200	有溝砥石
5	15	石器	砥石	泥岩	18.45	14.3	5	1229.6	有溝砥石
6	16	石器	砥石	砂岩	17.3	11.8	10.5	2560	有溝砥石
7	113	玉関係	原石	ヒスイ	3.3	2.8	1.75	28.81	

下馬場遺跡　弥生土器観察表（1）

凡例

［胎土］
チ：チャート　長：長石　小礫：直径～2mm程度
英：石英　赤：赤色粒子　中礫：直径5mm程度
雲：雲母　白：白色粒子　角：角閃石

［部位］
体内：体部内面　体：体部
体外：体部外面　上：上部
口：口縁部　下：下部

報告No.	グリッド	遺構	竪穴地区	遺物No.	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外/内	備考
1	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	有段甕	A1	－	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	口：擬凹線文A	ナデ	体外：スス付着	浅黄橙/浅黄橙	－
2	11I12	SI1		2		弥生土器	有段甕	B2	14.6	－	－	英・長・チ・雲・赤（焼土）・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ（斜）	口：ナデ、体上：指圧痕	口：細かな欠け、体外：スス付着	浅黄橙/淡黄	口縁段に沿って凹線状の窪み
3	11I4・5	SI1	C・D	14	2	弥生土器	小型甕	D	13.2	－	－	英・長・チ・雲	内面下：黒斑	口：ナデ（指圧痕）、体外：ハケ（斜）	体：ハケ（斜）	口内外：欠け・磨耗、体外：スス付着、底外：被熱（赤化）・欠け	にぶい黄橙～橙/橙	八幡山式
4	11I	SI1	C			弥生土器	有段甕	B2	12.2	－	－	英・チ・雲・小礫	－	ナデ	ナデ	－	浅黄/黄灰	－
5	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	有段甕	B2	14.2	－	－	英・チ・雲・白・赤	－	ナデ	ナデ	－	淡黄/淡黄	－
6	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	有段甕	B2	13.8	－	－	英・チ・雲・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：スス付着	浅黄橙/浅黄橙	－
7	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	有段甕	B2	15.6	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：スス付着・被熱（赤化）・磨耗、体内：磨耗	浅黄橙/浅黄橙	－
8	11I	SI1	D		3b	弥生土器	有段甕	B1	15.6	－	－	英・チ・雲・白・赤	－	ナデ	ナデ	口端：被熱（黒化・スス？）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
9	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	有段甕	B1	16.8	－	－	英・チ・雲・白	－	ナデ	ナデ	－	浅黄橙/にぶい黄橙	内面：赤彩一部残存（内外面赤彩？）
10	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	有段甕	B1	17.4	－	－	英・チ・雲・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：スス付着	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
11	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	有段甕	B6	14.2	－	－	英・チ・雲・小礫	－	ナデ	口：ナデ、体：ハケ（横）	体外：炭化物付着	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
12	11I	SI1	C		1	弥生土器	有段甕	B6？	－	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	ナデ	ナデ、体上：指圧痕	－	浅黄橙/浅黄橙	－
13	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	甕	C2	14.4	－	－	英・チ・雲・赤	－	ナデ	ナデ	体外：被熱（黒化）・焼成時の可能性もあり	褐灰/浅黄	－
14	11I	SI1	D		覆土	弥生土器	甕	C2	15.4	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：一部スス付着	橙/橙	－
15	11I7	SI1			9	弥生土器	壺	K	－	－	－	英・チ・雲	体外下：黒斑	体上：ミガキ、体下：ハケ→ミガキ	ナデ？	－	にぶい橙～黒褐/にぶい橙	－
16	11I	SI1	D		2	弥生土器	壺	E2？	－	－	4.0	英・雲・赤	－	ミガキ？	ミガキかナデ	－	橙/橙	－
17	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	甕	E2	13.2	－	－	英・長・チ・雲・赤・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：スス付着	橙/橙	－
18	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	壺	G	12.4	－	－	英・長・チ・雲・赤・小礫・中礫	－	口：ナデ、体：ハケ（斜）	口：ナデ、体：ハケ	口外・体外：スス付着	橙/橙	－
19	11I12	SI1	C	1.3.4.5.7.8	覆土	弥生土器	壺	G	15.0	28.4	5.2	英・チ・赤・小礫	体外下：黒斑	口：ハケ・列点状の押圧痕、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	－	浅黄橙/褐灰	－
20	11I	SI1			7	弥生土器	鉢	B	－	－	－	英・長・チ・雲・白・赤（焼土）	－	磨滅不明	磨滅不明	体外：被熱（二次焼成）	橙/橙	外面に炭化物、内外面共に赤化、器面風化
21	11I4	SI1		13		弥生土器	有段鉢	A	－	－	－	英・チ・白・小礫	－	ミガキ・擬凹線文A	ミガキ	－	橙/橙	内外面：赤彩
22	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	高杯	A	21.5	－	－	英・チ・雲・小礫	－	ミガキ？	ミガキ	－	浅黄橙/浅黄橙	内面：赤彩
23	11I4	SI1		13		弥生土器	高杯	A？	26.0	－	－	英・長・チ・雲	－	ミガキ？	ミガキ？	－	淡黄/淡黄	－
24	11I	SI1	D		覆土	弥生土器	脚台部	－	－	－	16.6	英・長・チ・雲	体内外：黒化	ミガキ	ナデ	端部：細かな欠け	黒褐/黒褐	外面：赤彩一部残存
25	11I4	SI1		15		弥生土器	器台	C？	25.8	－	－	英・長・チ・雲・小礫	端部：黒斑	ミガキ	磨滅、器面剥落	？	橙/橙	－
26	11I	SI1	B		1	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・チ・雲・赤・白・小礫	－	刺突文、ナデ？	ナデ？	－	にぶい橙/にぶい橙	脚有段部上・側面に半裁竹管状の刺突列
27	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	ミニチュア土器	－	－	－	5.0	英・チ・雲	－	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
28	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・雲・白・小礫	－	ミガキ？	ナデ・ケズリ？	－	浅黄橙/橙	－
29	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・チ・赤	－	－	－	－	浅黄橙/浅黄橙	器面磨耗、剥落のため赤彩不明
30	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	甕	底部	－	－	5.4	英・長・雲・白	体内：黒化	ハケ	ハケ	体外：被熱（うすい黒化）	褐灰/黒褐	－
31	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	甕	底部	－	－	4.0	英・雲・赤・小礫	－	ハケ	ハケ	体外：被熱（黒化・赤化）	灰黄褐/黒褐	－
32	11I3・4・8・9	SI1pit8			覆土	弥生土器	甕	底部	－	－	4.2	チ・雲・小礫	－	磨滅	指圧痕	－	橙/橙	－
33	11I	SI1	D		3b	弥生土器	甕	底部	－	－	4.7	英・長・チ・雲・白・赤（焼土）	－	ハケ	ハケ	体外：被熱（黒化・赤化）	にぶい橙/黒褐	－
34	11I	SI1	C		覆土	弥生土器	甕	底部	－	－	3.6	英・長・チ・雲・小礫	－	ハケ（縦）	指圧痕	体外：被熱（赤化）	橙/にぶい黄橙	－
35	11I	SI1	C		1・トレンチ	弥生土器	甕	底部	－	－	4.8	英・チ・雲・小礫	－	指圧痕・ハケ	指圧痕	底～体外：被熱（黒化・赤化）	褐灰～にぶい橙/黒褐	－
36	11I	SI1	C・D		3b・覆土	弥生土器	壺	底部	－	－	3.2	英・チ・雲	－	ミガキ	ナデ	体外：被熱（黒化・赤化）	にぶい褐/にぶい黄橙	－
37	11I3	SI1		10・11		弥生土器	壺	底部	－	－	3.0	英・長・チ・雲・赤・小礫	底内外：うすい黒斑	ミガキ	ハケ	底外：器面剥落、磨耗	にぶい褐/灰褐	－
38	9G、9H、10G、10H	SI2	C		1	弥生土器	有段甕	B2	13.4	－	－	チ・雲・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：スス付着	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
39	9H・10H	SI2	D		覆土	弥生土器	有段甕	B4	16.8	－	－	英・雲・白	－	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
40	9H・10H	SI2	D			弥生土器	甕	C1	16.4	－	－	英・長・チ・小礫	－	ナデ？	ナデ？	－	浅黄/浅黄	－
41	9H・10H	SI2	D			弥生土器	甕	C3	14.4	－	－	英・長・チ・雲・白	－	ナデ？	ナデ？	－	浅黄橙/浅黄橙	－
42	9H・10H	SI2	C		1	弥生土器	甕	C4	13.8	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	－	淡黄/淡黄	－
43	9H・10H	SI2	D			弥生土器	小型甕	C4	12.8	－	－	英・長・雲・白・小礫	体外：黒斑？	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ナデ？	口：被熱（赤化）、体外：被熱（黒化）	暗灰黄/にぶい黄橙	－
44	9G24	SI2pit3	C	2	3	弥生土器	小型甕	C4	14.6	9.1	2.6	英・チ・雲・赤・小礫	－	口：ナデ、体上：ハケ（斜）、体下：ケズリ	口：ナデ、体：指圧痕（ナデ）	体外下：赤化・スス付着、口端部：欠け	にぶい橙～赤褐/にぶい橙	－
45	9H、10H	SI2	D		覆土	弥生土器	有段壺	D	－	－	－	英・長・チ・雲・小礫	－	ナデ	ナデ？	－	明黄褐/灰黄褐	－
46	9H、10H	SI2	C			弥生土器	壺	D？	－	－	－	チ・雲・白・赤・小礫	体内：黒化	ナデ	口：ハケ（横）、体：ナデ？	－	にぶい黄褐/褐灰	－
47	9H、10H	SI2	D		1	弥生土器	壺	D	17.4	－	－	チ・雲・白	体内外：黒化	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
48	9H、10H	SI2	C			弥生土器	小型壺	L	8.0	－	－	英・チ・雲・小礫	－	口：ナデ	口：ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
49	10H6	SI2		1		弥生土器	有段短頸壺	D	11.8	－	－	英・長・チ・白	－	ミガキ？	ナデ	－	にぶい橙/にぶい橙	－
50	9H、10H	SI2	D		覆土	弥生土器	甕	底部	－	－	5.6	チ・雲・白	体内：黒化	ハケ	ハケ	体外下：被熱（赤化）	黄褐～赤橙/黒褐～浅黄	－

下馬場遺跡　弥生土器観察表（2）

報告No.	グリッド	遺構	竪穴地区	遺物No.	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外/内	備考
51	9H、10H	SI2	C			弥生土器	甕	底部	－	－	4.4	英・長・チ・雲・赤・小礫	－	ハケ（ケズリ）	ナデ？	内外面：被熱（黒化）、焼成痕と識別不可	黒褐/褐灰	－
52	9H、10H	SI2	A		覆土	弥生土器	壺	底部	－	－	6.0	英・チ・雲・小礫	体内：黒化	ナデ	ハケ	－	にぶい黄橙/黒褐	－
53	9H、10H	SI2	D		覆土	弥生土器	壺	底部	－	－	6.6	英・長・雲・小礫	体内外：黒化	指圧痕	指圧痕・ナデ	底：磨耗	にぶい黄橙/黒褐	－
54	9H、10H	SI2	C		覆土	弥生土器	蓋	－	2.6	－	－	英・チ・雲	体内外：黒化	ミガキ？	ミガキ？	－	灰黄褐/灰黄褐	－
55	9H、10H	SI2	C		覆土	弥生土器	高杯	A	25.0	－	－	チ・雲	体外：黒化	ミガキ	ハケの残るミガキ	－	灰黄褐/にぶい黄橙	－
56	9H、10H	SI2	C		床直	弥生土器	高杯	A？	－	－	－	英・長・チ・雲・白・小礫	－	ミガキ	磨耗、不明	－	にぶい黄橙～赤褐/にぶい黄橙	外面：赤彩
57	9H、10H	SI2	C		覆土	弥生土器	脚台部	－	－	－	13.0	英・長・チ・雲・白・赤	－	不明	ナデ？	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
58	9H、10H	SI2	C		覆土	弥生土器	鉢	D	－	－	－	英・チ・雲・赤	－	ナデ	ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	－
59	9H、10H	SI2	D		覆土	弥生土器	有段鉢	D	13.6	－	－	英・白	－	不明	ミガキ？	口：磨耗	にぶい褐～灰黄褐/赤褐	内面：赤彩
60	9H、10H	SI2	A		覆土	弥生土器	鉢	底部	－	－	3.4	チ・白	－	ナデ？	指圧痕	－	浅黄橙/浅黄橙	－
61	9H、10H	SI2	C		覆土	弥生土器	鉢	E	11.4	－	－	英・チ・雲・赤	－	ナデ	ナデ	－	浅黄/浅黄	－
62	9H、10H	SI2	D		覆土	弥生土器	鉢	E	14.6	－	－	英・長・チ・雲・赤・角	－	ミガキ？	ミガキ？	－	橙/橙	磨滅、器面剥落、赤彩品？
63	9H、10H	SI2	C		溝	弥生土器	鉢	E	15.0	－	－	英・チ・雲・白	－	？	ナデ？	体外：被熱（赤化・黒化）	浅黄橙/浅黄橙	外面は器面の風化顕著
64	9H、10H	SI2	C		覆土	弥生土器	鉢	E	16.6	－	－	英・長・チ・雲	－	ミガキ	ミガキ	体内外：磨耗	にぶい黄橙/にぶい橙	－
65	10H1	SI2		3		弥生土器	鉢	E	14.9	8.1	6.3	英・チ・雲・白・赤	体外（口）：黒斑	ミガキ	ミガキ？	体内：磨耗	浅黄橙/浅黄橙	内外面：一部赤彩
66	10E、10F	SI3	B		1	弥生土器	有段甕	A	15.4	－	－	英・チ・雲・赤・小礫・中礫	－	口：擬凹線文B	口：ナデ	体外：スス付着・器面剥落	橙/橙	－
67	10E、10F	SI3	A		1	弥生土器	有段甕	A	13.2	－	－	英・長・チ・雲・小礫	－	口：擬凹線文B	ナデ	外面：スス付着	にぶい黄橙/橙	－
68	10E	SI3	C		覆土	弥生土器	有段甕	C1	11.6	－	－	英・チ・白・小礫	－	ナデ	ナデ	内外面：被熱（黒化）	黒褐/黒褐	－
69	10E	SI3	C			弥生土器	有段甕	B5	12.0	－	－	英・チ・赤・小礫	－	ナデ	ナデ	－	にぶい黄/にぶい黄	－
70	10E18	SI3		3		弥生土器	有段甕	B5	13.4	－	－	英・チ・白・赤（焼土）	－	ナデ	ナデ	外面：炭化物付着・被熱（黒化）	にぶい黄褐/にぶい橙	－
71	10E24	SI3		1		弥生土器	有段甕	B3	15.2	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ（斜）、肩部：刺突	口：ナデ、体上～中：ナデ（輪痕残）、体下：ハケ	体外：スス付着	にぶい橙/にぶい橙	－
72	10E22・23、10F2・3	SI3pit5			1	弥生土器	甕	C2	17.0	22.5	4.4	英・チ・雲・赤・小礫	体内：黒斑	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体上～下：ハケ（横）、体下：指圧痕	口：細かな欠け	にぶい黄橙/にぶい黄橙～黒褐	－
73	10E	SI3	C		1	弥生土器	甕	C2	12.4	－	－	チ・雲・赤	－	ナデ	ナデ	－	橙/橙	－
74	10E、10F	SI3	B		覆土	弥生土器	甕	C2	13.2	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	外面：スス付着	橙/橙	－
75	10E、10F	SI3			4	弥生土器	甕	C2	14.6	－	－	英・長・チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	口縁端外面：被熱（赤化）	橙/橙	－
76	10E	SI3	C		覆土	弥生土器	甕	C2	18.0	－	－	英・長・チ・雲・小礫	－	ナデ・ハケ	ナデ	口：細かな欠け、内面：被熱（黒化）	浅黄橙/褐灰	－
77	10E、10F	SI3			4	弥生土器	甕	C4	14.6	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	口：ナデ、体上：ハケ	ナデ	内面：炭化物付着	にぶい黄橙/黒褐	－
78	10E、10F	SI3			4	弥生土器	甕	C4	15.4	－	－	英・チ・雲・白・赤（焼土）	－	口：ナデ、体外：ハケ（斜・縦）	ハケ（横）	口：欠け	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
79	10E	SI3	C		覆土	弥生土器	甕	C4	14.8	－	－	英・長・チ・白・小礫	－	ナデ	ナデ	外面：スス付着・被熱（赤化）	にぶい橙/浅黄橙	－
80	10F3	SI3		8	1～2	弥生土器	甕	C4？	17.6	－	－	英・長・チ・雲・赤	－	ナデ	ナデ	口：磨耗、口外：スス付着	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
81	10E18	SI3		6		弥生土器	甕	C6	16.0	－	－	英・チ・赤・中礫	－	ナデ	ナデ・ハケ（横）	被熱？	橙/橙	－
82	10E・10F	SI3	B		1	弥生土器	甕	C5	13.5	－	－	英・チ・雲・小礫	－	口：ナデ、体外：ハケ（横）	口・体内：ナデ	体外：スス付着	橙/橙	－
83	10E	SI3	D		覆土	弥生土器	甕	C5	12.0	－	－	英・長・チ・雲・小礫	－	口：ナデ、体外：ハケ	口：ナデ、体内：？	口：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
84	10E、10F	SI3			12	弥生土器	甕	E	－	－	－	英・長・チ・雲・角	－	体：ハケ（斜）	ハケ（横）	体外：炭化物付着、体内下：一部炭化物付着	暗灰黄/灰黄	－
85	10E、10F	SI3			12	弥生土器	甕	E	－	－	5.0	英・長・チ・雲・小礫	－	ハケ	ハケ、体下：ケズリ・指圧痕	体外内：炭化物付着	にぶい黄橙/灰黄	－
86	10E、10F	SI3			5	弥生土器	有段壺	A	12.0	－	－	英・長・チ・雲・白・小礫	－	口：凹線文	ナデ	口：磨耗？	橙/橙	－
87	10E、10F	SI3			4	弥生土器	有段壺	B	11.8	－	－	英・長・チ・雲・白・中礫	－	ナデ	ナデ	口：欠け？	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
88	10E	SI3	C		覆土	弥生土器	壺	G？	10.4	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	口・体：ミガキ	ナデ	－	にぶい黄/灰褐	－
89	10E18	SI3		7		弥生土器	壺	E？	－	－	－	長・雲・赤	－	ミガキ？	？	体内器面：剥落	浅黄橙/浅黄橙	－
90	10E18	SI3		5		弥生土器	器台	B？	27.0	－	－	英・長・雲・白・小礫	口外端：黒斑	口：擬凹線文、ナデ	口：ナデ・ミガキ、列点状の刺突あり	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
91	10E、10F	SI3			14	弥生土器	高杯か器台	？	－	－	－	英・チ・雲・小礫	－	ミガキ？	？	－	にぶい赤褐/浅黄橙	内外面：赤彩？
92	10E18	SI3		6		弥生土器	高杯	A	25.4	－	－	英・チ・赤・白	－	－	ナデ？	－	浅黄橙/浅黄橙	－
93	10E、10F	SI3			4	弥生土器	有段鉢	C？	－	－	－	英・チ・雲	－	ミガキ	ミガキ	－	にぶい黄橙/橙	内面：赤彩
94	10E、10F	SI3			11	弥生土器	鉢	？	－	－	－	英・チ・雲・小礫	－	ミガキ	ミガキ	－	赤褐/赤褐	内外面：赤彩
95	10E、10F	SI3			8	弥生土器	高杯	A	－	－	－	英・チ・雲・白・赤	－	ミガキ、擬凹線	ミガキ？	－	暗赤～橙/暗赤～橙	内外面：赤彩
96	10E、10F	SI3			5	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・長・チ・雲・赤・小礫	－	ミガキ	ケズリ？	－	赤～黒褐/黒褐	外面：赤彩（文様状か全体かは不明）
97	10E、10F	SI3	A		覆土	弥生土器	蓋	－	－	－	－	英・長・チ・雲・小礫	－	ナデ・指圧痕	ナデ？	－	灰黄/灰黄	－
98	10E、10F	SI3			4	弥生土器	蓋	－	－	－	摘み4.9	英・長・チ・雲・小礫	摘み頂部・断面：黒化	指圧痕	ナデ？	－	にぶい黄橙/灰黄褐	－
99	10E24	SI3		1		弥生土器	甕	底部	－	－	5.0	英・チ・雲・小礫	－	粗い原体のハケ	外面より細かい目のハケ、体下：指圧痕	体外：スス付着・被熱（若干の赤化）、体内：炭化物付着	にぶい黄橙/にぶい黄褐	－
100	10E	SI3	C		覆土	弥生土器	甕	底部	－	－	4.8	チ・雲・白	－	ハケ？	ハケ	内面：炭化物付着	灰黄/褐灰	－

下馬場遺跡　弥生土器観察表（3）

報告No.	グリッド	遺構	竪穴地区	遺物No.	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外/内	備考
101	10E、10F	SI3			3	弥生土器	甕	底部	－	－	4.9	チ・雲・白・小礫	－	ケズリ	ナデ、指圧痕	内外面：黒化（炭化物）	黒褐/黒褐	－
102	10E、10F	SI3	B		1	弥生土器	甕	底部	－	－	5.4	長・チ・雲・白・小礫	－	不明	不明	外面：被熱（赤化）	橙/灰黄褐	－
103	10E	SI3	C		1	弥生土器	甕	底部	－	－	6.4	英・チ・雲・白	－	ハケ？	指圧痕？	体外：炭化物付着	黒褐/黒褐	－
104	10E18	SI3		4		弥生土器	甕	底部	－	－	4.6	チ・雲・赤・小礫	体外：黒斑	ハケ	指圧痕？	外面：炭化物付着	黒褐～橙/黒褐	－
105	10E18	SI3		6		弥生土器	甕	底部	－	－	4.2	英・チ・雲・赤・小礫	－	ハケ	指圧痕	体外：スス付着	橙/にぶい黄	－
106	10E24	SI3		1		弥生土器	甕	底部	－	－	5.0	英・長・チ・雲・白・小礫	－	－	指圧痕	体外：被熱（赤化）、体内：炭化物付着	橙/にぶい黄橙	－
107	10E	SI3	D		覆土	弥生土器	甕	底部	－	－	5.0	長・チ・雲・小礫	－	ハケ？	ナデ	外面・底面：被熱（黒化・赤化）	褐灰/にぶい黄橙	－
108	10E	SI3	C			弥生土器	甕	底部	－	－	4.8	英・チ・雲・赤・中礫	－	不明	不明	内外面：被熱（赤化・黒化）	灰黄褐/褐灰	－
109	10E、10F	SI3			4	弥生土器	甕	底部	－	－	2.6	英・長・チ・雲・白・小礫	－	ケズリ	ケズリ・ハケ	体外：スス付着・被熱（赤化）	にぶい橙/にぶい黄橙	－
110	10E、10F	SI3			4	弥生土器	甕	底部	－	－	3.6	英・チ・雲・小礫・中礫	－	ケズリ？	指ナデ	体外：被熱（赤化）	浅黄橙/褐灰	－
111	10E	SI3	C		覆土	弥生土器	甕	底部	－	－	3.5	英・チ・雲・白・小礫	内面：黒化	ハケ	ケズリ・指圧痕	－	にぶい黄橙/褐灰	－
112	10E22・23、10F2・3	SI3pit5			1	弥生土器	台付甕	－	－	－	－	赤・小礫・中礫	－	－	－	体外内：被熱（赤化）	橙/橙	－
113	10E18	SI3		7		弥生土器	壺	底部	－	－	4.0	長・雲・赤	下部～底：黒斑	ミガキ	体下：ハケ、底部：指圧痕・砂粒の移動痕（線状痕）	？	にぶい黄橙/橙	－
114	10E、10F	SI3			6	弥生土器	壺	底部	－	－	5.6	チ・雲・白・小礫	内面：黒化	ミガキ、底面：ナデ	ハケ	－	にぶい黄橙/褐灰	－
115	10E	SI3	C		覆土	弥生土器	壺？	底部	－	－	5.0	英・チ・雲・赤	内面：黒化	ミガキ（縦）	ミガキ（斜）	－	浅黄/黒褐	－
116	10E、10F	SI3	B			弥生土器	壺	底部	－	－	5.6	英・チ・雲・小礫・中礫	－	ナデ	ケズリかハケ	底側縁：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
117	10E18	SI3		3		弥生土器	壺？	底部	－	－	4.4	英・チ・雲	－	スリナデ	指圧痕	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
118	10E、10F	SI3			5	弥生土器	壺	底部	－	－	5.2	英・長・チ・雲・白・小礫	内面：黒化	？	指圧痕	－	浅黄/褐灰	－
119	10E、10F	SI3			4	弥生土器	鉢	底部	－	－	5.8	英・長・チ・雲・白・小礫	底面（外）：黒斑	ミガキ、底面：繊維？痕	ミガキ	－	橙/にぶい黄橙	外面：赤彩
120	9E6	SI4		3	12b	弥生土器	有段甕	A	12.0	－	－	英・長・赤・小礫	－	口：ナデ・擬凹線A、体上：耳C刺突文、その他：ハケ	口・体：ナデ	体外：スス付着	橙/にぶい黄橙	－
121	8E、9E	SI4	B		8	弥生土器	有段甕	C1	13.0	－	4.4	雲・白・小礫	底外面：黒斑	口：ナデ、体：ミガキ？	ハケ	－	淡黄/淡黄	－
122	8E、9E	SI4	A		7	弥生土器	甕	C3	12.0	－	－	チ・雲・白・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ・ハケ	口外：スス付着	橙/橙	－
123	8E、9E	SI4	A		7一括	弥生土器	甕	C4	17.0	－	－	英・チ・雲・白	－	口：ナデ～ハケ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	体外：スス付着・被熱（赤化）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
124	8D24	SI4		5	11a	弥生土器	有段甕	B5	15.6	22.5	5.0	英・チ・雲・赤・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	体外：スス付着	橙～黒褐/浅黄橙	－
125	9D21	SI4	D	19	6・8	弥生土器	有段壺	C	12.2	－	－	英・長・チ・雲・赤・小礫	－	口：ナデ、体上：ハケ	口：ナデ	口：磨耗	浅黄橙/黒褐	－
126	8E、9E	SI4	A		サブトレ	弥生土器	有段壺	B	12.0	－	－	英・チ・雲・白・赤	体内外：黒斑	ナデ	ナデ	－	褐灰/にぶい黄橙	－
127	8D、8E、9D、9E	SI4	D		6	弥生土器	有段壺	B	13.0	－	－	英・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
128	9D22	SI4		18		弥生土器	小型壺	I	9.0	9.8	3.0	針・長・雲	－	沈線・列点刺突・ミガキ？	ナデ	内面：漆？付着	暗灰黄/黒褐	－
129	8E、9E	SI4一括	A		12a	弥生土器	小型壺	K	－	－	－	英・チ・雲・白・小礫・中礫	体中半：黒斑	ミガキ？	ナデ？	－	浅黄/浅黄	外面：赤彩の痕跡あり
130	8E、9E	SI4	A		サブトレ	弥生土器	甕	底部	－	－	3.6	英・チ・白・小礫	－	ハケ	ナデ？	体外：被熱（赤化）	橙/淡黄	－
131	8D、8E、9D、9E	SI4	D		7	弥生土器	鉢？	底部	－	－	3.6	英・チ・白・小礫	内外面：薄く黒斑	指圧痕（ハケ）	ナデ	－	褐灰～淡黄/褐灰～淡黄	－
132	8D、8E、9D、9E	SI4	D		6	弥生土器	壺	底部	－	－	6.5	英・チ・雲・白・小礫	内外面：黒化・黒斑	指圧痕	ハケ	－	黒褐/褐灰	－
133	8E・9E	SI4	B		8	弥生土器	壺？	底部	－	－	5.4	英・雲・白・赤・小礫	内面：黒化	体・底：ハケ	ハケ	－	浅黄/黒褐	－
134	8D・8E	SI4	B・C		3・8	弥生土器	鉢	底部	－	－	3.5	英・チ・雲・白・小礫	体外下：黒斑	体外：ミガキ、底面：ケズリ	ミガキ	－	浅黄橙/黒褐	－
135	9E1	SI4		2	7	弥生土器	甕か壺	底部	－	－	5.2	英・チ・雲・白・小礫	－	指圧痕、体・底ケズリ	ハケ	－	橙/橙	－
136	8D25	SI4		7	10	弥生土器	甕	底部	－	－	5.6	英・チ・雲・白・小礫	－	体下：ハケ・スリナデ、底側面：ナデ	ハケ・スリナデ	体外：スス付着、体内：被熱（黒化）	黒褐・にぶい黄橙/褐灰	－
137	9D21	SI4		12		弥生土器	ミニチュア鉢	－	4.6	2.9	2.8	チ・雲・赤・小礫	体外：うすい黒化（黒斑？）	？	指圧痕	－	灰黄/にぶい黄橙	－
138	8D・8E、9D・9E	SI4	D		7	弥生土器	鉢	D	10.2	－	－	雲・白	－	ナデ	ハケ	－	浅黄橙/浅黄橙	－
139	9D21	SI4		14		弥生土器	有段鉢	D	18.0	－	－	英・チ・白・赤・小礫	－	口：凹線状のナデ	ナデ	体内外：被熱（赤化）	赤褐～橙/にぶい黄橙	－
140	9D21	SI4		8	8	弥生土器	有段鉢	A	26.6	－	4.0	英・チ・小礫	－	口：擬凹線文B	ナデ	体内外：被熱（赤化）	赤褐/淡黄	－
141	8D20、25	SI4		10	8	弥生土器	高杯	B	21.0	－	－	チ・雲・白・赤	－	？	？	－	浅黄橙/浅黄橙	外面：赤彩、内面：不明
142	8D25	SI4		6		弥生土器	器台	C	23.0	21.3	17.2	英・長・チ・白・小礫	体外下：黒斑	ミガキ	受部：ミガキ、脚上：ケズリ、脚下：ナデ	－	赤褐～浅黄橙/浅黄橙	－
143	9D21	SI4		16		弥生土器	器台	A	17.0	－	－	チ・雲・赤・小礫	－	ミガキ？	ミガキ	－	浅黄橙/浅黄橙	内外面：赤彩
144	9D21	SI4		15		弥生土器	器台	A	19.4	－	－	長・チ・雲・白・赤・小礫	－	ミガキ？	ミガキ？	？	にぶい橙/にぶい橙	内外面：赤彩
145	9D21	SI4		17		弥生土器	器台	A	22.0	－	－	英・チ・雲・赤	－	ミガキ	受部：ミガキ、脚部：ケズリ	－	浅黄橙/浅黄橙	内外面：赤彩
146	8D、8E、9D、9E	SI4			7	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・チ・雲・小礫	－	ミガキ？	ケズリ	－	浅黄橙/浅黄橙	器面剥落
147	8G、8F	SI5	D		5	弥生土器	有段壺	A3	17.2	－	－	英・チ・雲・白	外面：黒化	口：擬凹線A	ナデ・ミガキ	－	黒褐/淡黄	－
148	8G、8F	SI5	A・D		1・5	弥生土器	有段甕	B6	11.1	－	－	英・チ・雲・白・中礫	－	口：ナデ、体：ハケ（横）	口：ナデ、体：ケズリ	体外：スス付着・被熱（黒化・赤化）	褐灰/褐灰	－
149	8G	SI5pit1	A		5	弥生土器	有段甕	B6	15.4	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ・指圧痕	口：磨耗	橙/にぶい黄褐	－
150	8G8	SI5pit2				弥生土器	有段甕	B4	19.6	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	ナデ	ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	－

下馬場遺跡　弥生土器観察表（4）

報告No.	グリッド	遺構	竪穴地区	遺物No.	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外/内	備考
151	8G、8F	SI5	D		5	弥生土器	甕	B3	17.2	－	－	英・チ・雲・白	－	口：ナデ、体：ハケ	ナデ	体外：スス全面付着	黒褐/淡黄	－
152	8G7	SI5pit3				弥生土器	甕	C3	12.6	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：スス付着	にぶい黄橙/にぶい橙	－
153	8G	SI5	A		5	弥生土器	甕	体部	－	－	－	英・チ・雲・赤	体外下：黒斑	ハケ（斜）	スリナデ・ナデ	体外：スス付着	黒褐～橙/橙	－
154	8G	SI5pit2	A		5	弥生土器	甕	底部	－	－	5.6	英・長・チ	－	指圧痕	指圧痕	外面：被熱（赤化）	橙/明黄褐	－
155	8G、8F	SI5	D		5	弥生土器	甕	底部	－	－	2.6	英・チ・雲・小礫	－	スリナデ（ハケ原体）	ハケ・指圧痕	－	にぶい黄橙/黒褐	－
156	8G	SI5	B			弥生土器	甕	底部	－	－	4.9	英・長・チ・雲・白・小礫	－	ハケ	ハケ・ナデ？	外面：被熱（黒化）	黒褐/にぶい黄橙	－
157	8G	SI5	B		5	弥生土器	有孔鉢	底部	－	－	3.3	英・チ・雲・赤	－	ケズリ	ハケ	被熱？	橙/橙	－
158	7F13・14	SI6pit3				弥生土器	有段壺	A2	15.4	－	－	チ・雲・白・小礫	－	口：擬凹線文A	ナデ？	－	赤褐～橙/橙	外面：赤彩
159	7F	SI6	A・C		4・5	弥生土器	有段甕	B2	12.8	－	－	英・長・チ・雲・赤	－	口：ナデ（凹線状）、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	口外：スス付着・被熱（赤化）	にぶい黄橙/橙	－
160	7F	SI6	D		4	弥生土器	壺	C4	10.4	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ナデ？	ナデ？	－	灰黄褐/灰黄褐	－
161	7F	SI6	C		4・5	弥生土器	甕	C3	13.8	－	－	英・長・チ・雲・白・赤	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：スリナデ	口：細かな欠け	橙/橙	－
162	7F	SI6	A		4・5	弥生土器	甕	C1	24.2	－	－	英・チ・雲・小礫・中礫	－	口：ナデ・ハケ、体：ハケ（縦）	口：ナデ、体：ハケ	－	浅黄橙/浅黄橙	－
163	7F14	SI6		2		弥生土器	有段壺	A	13.0	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	口：擬凹線文B	ミガキ？・ハケ	口端：磨耗、体外：被熱（黒化・赤化）	にぶい赤褐/にぶい黄橙	外面：赤彩
164	7F	SI6	D		4・5	弥生土器	有段壺	A	16.4	－	－	チ・雲・白	－	口：擬凹線文A	ナデ	－	橙/橙	－
165	7F	SI6	C		3	弥生土器	壺	E2	17.2	－	－	長・雲・赤・小礫	－	－	－	－	橙/橙	－
166	7F13・14	SI6pit3				弥生土器	壺	E2	11.2	－	－	英・長・白	口外：一部黒斑	口上：ナデ、口下：ハケ（斜）	口上：ナデ、口下：ハケ（横）	口：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
167	7F14	SI6		1		弥生土器	壺	K	－	－	2.4	英・長・チ・雲・白・小礫	－	ミガキ	体上：指圧痕、体下：指圧痕・ハケ	体上：磨耗	赤褐～浅黄橙/浅黄橙	－
168	7F14	SI6		2		弥生土器	鉢	D	15.2	－	－	英・チ・雲・赤	－	ミガキ？	ミガキ	－	橙/橙	内外面：赤彩
169	7F14	SI6pit3		3		弥生土器	鉢	E	16.8	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	スリナデ・ケズリ	スリナデ	体外：被熱（赤化）	浅黄橙/灰褐	－
170	7F3・8	SI6	C	5	4・5	弥生土器	有段鉢	B	－	－	－	英・雲・白	内面上：黒化	ミガキ	口：ミガキ・指ナデ	－	赤褐～橙/橙	外面：赤彩、内面：赤彩？
171	7F	SI6	B		3	弥生土器	高杯	A？	20.4	－	－	英・雲・白	－	ミガキ	ミガキ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内外面：赤彩
172	7F	SI6	A		4・5	弥生土器	器台	C？	－	－	－	英・長・雲・白	－	ミガキ？	ハケ・ナデ？	－	赤褐～橙/橙	－
173	7F	SI6pit4	A・B		4・5・5d	弥生土器	器台	C	29.2	－	－	英・チ・雲・白	－	ミガキ？	ミガキ？、脚：ケズリ・ナデ	－	橙/橙	－
174	7F3・8	SI6		5		弥生土器	壺	底部	－	－	5.2	英・長・チ・雲・小礫	底～体外下：黒斑	ハケ・指圧痕	ハケ？	－	にぶい黄橙/灰黄褐	－
175	7F	SI6	A		4・5	弥生土器	甕	底部	－	－	5.1	英・チ・雲・赤・小礫	－	ハケ（斜）	ハケ（横）	底・側面：被熱（赤化）	浅黄橙/灰黄褐	－
176	7F	SI6	D		4・5	弥生土器	甕	底部	－	－	5.6	英・チ・赤・小礫・中礫	－	指圧痕	指圧痕	体内外：被熱（赤化）	橙～赤褐/橙～赤褐	－
177	7F	SI6	A		4・5	弥生土器	鉢	底部	－	－	4.8	英・長・雲・赤・角	底～側面：黒斑	ミガキ	ハケ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
178	7F	SI6	A		4・5	弥生土器	壺	底部	－	－	6.0	英・チ・雲・赤・小礫	側面：黒斑	ミガキ	？	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
179	7F14	SI6		2		弥生土器	壺	底部	－	－	2.8	英・チ・雲・小礫	－	ミガキ	ナデ	－	橙/橙	外面：赤彩？
180	5D、6D	SI7	A		4	弥生土器	有段甕	A1	18.0	－	－	英・長・チ・雲・小礫	－	口：擬凹線文C	ナデ	体外：スス付着	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
181	5D、6C、6D	SI7	D		1	弥生土器	有段甕	A1	16.0	－	－	英・チ・雲・小礫	－	口：擬凹線文C	ナデ	体外：スス付着	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
182	5D4	SI7		6	4	弥生土器	有段甕	A1	15.2	18.1	5.0	英・チ・雲・小礫	－	口：擬凹線文C、体：ハケ	口：ナデ、体上：指圧痕、体下：ハケ	体外：スス付着・被熱（黒化）、体外下：被熱（黒化・赤化）	黒褐/にぶい黄橙	櫛歯状工具
183	6D1	SI7		2	4	弥生土器	有段甕	C1	16.8	－	－	英・チ・雲・赤・小礫・中礫	－	口：ナデ、体：ハケ（斜）	口：ナデ、体：ハケ（横）	体外：スス付着	橙/橙	－
184	5D4	SI7		7	4	弥生土器	有段甕	B1	17.3	26.5	4.5	英・チ・赤・小礫	体外下～底：黒斑	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体上：ケズリ、体下：指圧痕	体外・体内下：炭化物付着、体外下：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
185	5C24・25	SI7	C・D	4	4	弥生土器	有段壺	E1	14.4	－	－	英・チ・赤・小礫	－	口上：ナデ、口下：ハケ	口上：ナデ、口下：ハケ	－	橙/橙	－
186	5C24、5D4	SI7		8	4	弥生土器	壺	G	13.0	－	－	英・チ・雲・赤・小礫・中礫	－	口：ナデ、体：ミガキ・ハケ	ハケ	被熱？	浅黄橙/浅黄橙	外面：赤彩？
187	5D、6C、6D	SI7	D		4	弥生土器	壺	A	－	－	4.4	英・長・チ・雲・赤・小礫	－	口：ナデ・擬凹線文A、体上：ミガキ、体下：指圧痕	口・体：ナデ	－	橙/橙	－
188	5D、6C、6D	SI7	D		4	弥生土器	壺	E？	13.0	－	－	英・長・チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	外面：赤彩？
189	5D、6D	SI7	A		4	弥生土器	壺	E	－	－	－	英・長・チ・雲・小礫	－	ハケ、肩部：沈線文	ハケ・ナデ	－	にぶい黄橙/浅黄	－
190	6D1	SI7		9	4	弥生土器	壺	K	－	－	－	英・長・チ・白・赤・小礫	－	不明	不明	体外：被熱（赤化）	橙/橙	－
191	6D1	SI7		3	4	弥生土器	甕	底部	－	－	5.0	英・チ・赤・小礫	－	ミガキ	ハケ	体外：スス付着	黄橙/橙	－
192	5D、6C、6D	SI7	D		4	弥生土器	甕	底部	－	－	4.8	英・チ・白・赤	－	－	－	体外：被熱（赤化・黒化）	橙・灰褐/橙	－
193	5D	SI7	C		1	弥生土器	壺	底部	－	－	5.6	チ・白・小礫	－	ハケ	？	－	にぶい黄橙/橙	－
194	5D	SI7	C		1	弥生土器	甕	底部	－	－	4.4	英・チ・白	－	ハケ	指圧痕	体外：被熱（赤化）	にぶい赤褐～にぶい黄褐/黒褐	－
195	5D4	SI7		8	4	弥生土器	壺	底部	－	－	4.8	雲・白・赤・小礫・中礫	－	ミガキ	－	体外：被熱（赤化）	浅黄橙/浅黄橙	－
196	5D、6D	SI7	D		4	弥生土器	壺？	底部	－	－	4.4	チ・雲・小礫	体内：黒化	ナデ？	指圧痕	－	にぶい黄橙/黒褐	外面：赤彩一部残存
197	6D1	SI7		3	4	弥生土器	蓋	－	－	－	－	英・チ・赤・小礫	－	ミガキ	指圧痕	－	浅黄橙/にぶい黄橙	－
198	5D、6C、6D	SI7			4	弥生土器	鉢	E	11.0	6.1	4.2	英・チ・雲・赤・小礫	体外（口～底）：帯状黒斑	口：ナデ　体：ハケ・指圧痕	体内外：指圧痕	－	黒褐～浅黄橙/にぶい黄橙	－
199	5D、6C、6D	SI7	D		4	弥生土器	有段鉢	B	－	－	－	英・長・チ・小礫	－	ミガキ	ミガキ？	－	浅黄橙/浅黄橙	－
200	5D、6C、6D	SI7	D		4	弥生土器	高杯	A	24.0	－	－	英・チ・雲・赤	－	ミガキ？	ミガキ？	－	浅黄橙/浅黄橙	－

下馬場遺跡　弥生土器観察表（5）

報告No.	グリッド	遺構	竪穴地区	遺物No.	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外/内	備考
201	5D、6D	SI7	B		4	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・チ・白・小礫	－	－	－	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
202	5D、6C、6D	SI7	D		4	弥生土器	高杯	B	24.0	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ミガキ？	？	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
203	4D	SI8	D			弥生土器	有段甕	A2	15.0	－	－	英・雲・白・赤	－	口：擬凹線文B、体：ハケ	口：ナデ、体上：ケズリ	口外：スス付着	橙/にぶい橙	－
204	4D17・18	SI8	C	10		弥生土器	有段甕	B2	16.2	26.1	4.2	英・チ・雲・赤・小礫・中礫	体内下（底）：黒斑	口：ナデ体：ハケ	口：ナデ、体上：ハケ、体中：指圧痕、体下：ケズリ	体外中：スス付着	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
205	4D17・18	SI8	A・B・C・D	6・7・9・10		弥生土器	有段甕	B1	17.6	－	－	英・チ・雲・白・赤・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ（斜）	口：ナデ、体：ケズリ・スリナデ	口外・体外：スス付着	浅黄橙/にぶい黄橙	－
206	4D	SI8	C			弥生土器	甕	B1	13.4	－	－	英・雲・白・赤・小礫	－	口：ナデ	口：ナデ、口下：ハケ	口外：スス付着	にぶい黄橙/橙	近江系の系譜
207	4D17	SI8		7・9		弥生土器	甕	C3	15.6	－	－	英・雲・白・赤・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ（斜）	口：ナデ、体上：ハケ～ケズリ	口外：スス付着・一部被熱（赤化）	橙/橙	－
208	4D	SI8	A			弥生土器	甕	C4	13.0	－	－	英・長・チ・雲・赤	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体上：指スリナデ・ハケ	口・体外：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
209	4D18	SI8		2		弥生土器	甕	C4	14.6	－	－	英・チ・雲・小礫	－	口：ナデ・ハケ、体：ハケ？	口・体：ナデ	－	灰黄褐/灰黄褐	－
210	4D17	SI8	A・D	12		弥生土器	甕	C4	17.4	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体上：ハケ、体下：ナデ	口・肩：スス付着	褐灰/にぶい黄橙	－
211	4D	SI8	A			弥生土器	甕	底部	－	－	4.5	英・長・チ・雲・白	－	ハケ・スリナデ	ハケ・指圧痕	体外：スス付着・被熱（赤化）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
212	4D	SI8	C			弥生土器	甕	底部	－	－	4.0	英・チ・雲・赤・小礫・中礫	－	体上：ハケ（縦）、体下：ハケ（斜）	体上：指圧痕（スリナデ）、体下：ハケ	体外：スス付着・被熱（赤化）	橙～黒褐/にぶい黄橙	－
213	4D	SI8				弥生土器	壺？	体部	－	－	－	英・長・雲	－	沈線（山形）	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
214	4D	SI8	A			弥生土器	壺	E1	12.4	－	－	英・長・チ・雲・白・小礫	体内：黒化	ミガキ	口：ハケ・指圧痕、体：ケズリ・指圧痕	口：欠け	にぶい黄橙/黒褐	－
215	4D18	SI8		3		弥生土器	有孔鉢	底部	－	－	4.8	英・長・チ・雲・赤・小礫・中礫	体外上～下：黒斑	口：指圧痕、体：ハケ	上部：指圧痕・ハケ、下部：ミガキ	体外下：被熱（赤化）	橙～黒褐/にぶい橙	－
216	4D18	SI8		2		弥生土器	有孔鉢	底部	17.0	12.9	3.4	英・長・チ・雲・白・赤・小礫	－	口～体中：ハケ、体下：ミガキ	口：スリナデ、体上：ミガキ、体下：ハケ・指圧痕	体内外：弱い磨耗	橙/橙	－
217	4D18	SI8	D	1		弥生土器	鉢	D	19.6	－	－	英・雲・赤	－	口：ミガキ、体：ハケ	ミガキ	体外：スス付着	橙/明黄褐	－
218	4D18	SI8		4		弥生土器	有段鉢	B	13.6	7.6	2.5	英・チ・雲・赤・小礫	底：黒斑	口：ナデ、体：ミガキ	ミガキ	口：磨耗	橙/橙	－
219	4D17・18	SI8		9・10		弥生土器	有孔鉢	底部	－	－	3.6	英・チ・雲・白・赤	体外下：黒斑	ナデ・ミガキ？	ミガキ？	体外下：磨耗、体内中～下：器面剥落	浅黄橙/浅黄橙	内面：赤彩、焼成後底部穿孔、孔径1.4cm
220	4D18	SI8		5		弥生土器	高杯	A	27.8	－	20.9	英・チ・雲・白・赤	－	杯部・脚部：ミガキ・スタンプ文	杯部：ミガキ、脚部：ナデ・ハケ	－	橙/橙	外面・杯内面：赤彩、脚内部：絞り成形の痕跡
221	4D	SI8				弥生土器	高杯	A	－	－	22.0	英・チ・雲・白	－	脚部：ミガキ・スタンプ文	ナデ	－	にぶい橙/にぶい橙	－
222	4D17	SI8		9		弥生土器	高杯	A	26.0	－	－	長・チ・雲・赤・小礫	－	ミガキ？	－	被熱？	にぶい黄橙/橙	－
223	4D	SI8	D			弥生土器	器台	A	－	－	－	英・チ・雲	－	－	－	－	にぶい黄橙/浅黄橙	－
224	5F、6F	SI9	D		3～6	弥生土器	有段甕	B2	17.1	－	－	英・長・チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：被熱？、体内：被熱（黒化）	橙/褐灰	－
225	6F16・17	SI9		1・2		弥生土器	甕	B2	－	－	－	英・チ・雲・白	体内：一部黒化	ハケ	スリナデ・指圧痕	体外：スス付着	橙/にぶい黄橙	－
226	5F25、6F21	SI9pit・2				弥生土器	甕	B2	－	－	4.4	英・雲・白・小礫	－	ハケ	ハケ・指圧痕	体外：スス付着、体内：被熱（黒化）	にぶい黄橙/褐灰	－
227	5F	SI9	B		1	弥生土器	甕	C4	11.2	－	－	英・チ・雲・白	－	口：ナデ・ハケ	口：ナデ	－	橙/橙	－
228	5F	SI9	B		1	弥生土器	甕	底部	－	－	3.8	英・チ・雲・小礫	－	－	指圧痕	体外：被熱（赤化）	にぶい橙/にぶい黄橙	－
229	6F・6G	SI9	A		2	弥生土器	壺？	底部	－	－	3.2	チ・雲・赤・小礫	－	－	－	－	淡黄/淡黄	粒子細かな土
230	5F	SI9	C		5・6	弥生土器	鉢	E	9.6	－	－	英・チ・雲・小礫	外内：黒化	ナデ	ナデ	－	褐灰/褐灰	－
231	5F25	SI9pit2				弥生土器	甕	底部	－	－	4.6	英・長・チ・雲・白・小礫	体外：黒斑	ハケ	ナデ	被熱？（赤化・黒化）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
232	5F、6F	SI9	C・D		1・2	弥生土器	甕	底部	－	－	5.0	英・チ・雲・赤	－	－	指圧痕	体外：被熱（赤化）	にぶい赤褐/浅黄	－
233	5F	SI9	B		1	弥生土器	壺	底部	－	－	5.4	英・長・チ・雲・白・小礫	底面：黒斑	スリナデ	ケズリ	体外：被熱（赤化）	にぶい橙/にぶい橙	－
234	5F	SI9	C		5・6	弥生土器	有孔鉢	底部	－	－	4.0	英・長・チ・白・赤・小礫	－	不明	不明	－	浅黄/浅黄	－
235	5F	SI9	B		1	弥生土器	甕	底部	－	－	5.6	英・チ・雲・赤・小礫	－	指圧痕	指圧痕	被熱（赤化）	にぶい橙/にぶい黄橙	－
236	5F	SI9	B		2	弥生土器	甕	底部	－	－	5.0	英・チ・雲・赤・小礫	－	指圧痕	ナデ	体外：被熱（赤化）	にぶい黄橙/灰黄	－
237	5F	SI9	B		1	弥生土器	壺	J	10.8	－	－	英・チ・雲・白・小礫	体外上：黒斑	ミガキ？・擬凹線文A	ナデ？	－	淡黄/にぶい黄橙	－
238	5F	SI9	B		1	弥生土器	壺	J	－	－	4.6	英・チ・雲・白・小礫	体外上：黒斑	ミガキ？・突帯上凹線文	ナデ？	－	淡黄/にぶい黄橙	－
239	5G4・5	SI9		5		弥生土器	脚台部	－	－	－	18.6	英・チ・雲・白・赤	裾部：一部黒斑	ミガキ？	ナデ？	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
240	6F21	SI9		3		弥生土器	高杯	A	25.4	－	－	長・チ・雲・白	－	ミガキ	ミガキ	－	赤褐～橙/赤褐～橙	内外面：赤彩
241	5G5	SI9		4		弥生土器	高杯	A	－	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	－	－	－	橙/にぶい黄	－
242	5G1・2、6F21・22	SI9		6		弥生土器	高杯	A？	－	－	－	英・チ・白・小礫	－	？	？	－	浅黄橙/浅黄橙	粉っぽい胎土
243	5G1・2、6F21・22	SI9		6		弥生土器	高杯か器台	？	25.0	－	－	チ・雲・赤・角（少）・少礫	－	ミガキ？	－	－	浅黄橙/浅黄橙	粉っぽい胎土
244	6F	SI9	D		2	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・チ・白・赤・小礫	－	ミガキ	ハケ	－	橙/橙	－
245	8I	SI10	D			弥生土器	有段甕	B2	14.8	－	－	英・長・チ・雲・小礫	－	ナデ	ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	－
246	8I	SI10	A・D			弥生土器	有段甕	B	－	－	－	英・長・チ・雲・白・赤	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ケズリ・ハケ	体外：スス付着	にぶい橙/にぶい橙	－
247	8I	SI10	A・D			弥生土器	有段甕	体部	－	－	－	英・長・チ・雲・白・赤	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ケズリ・ハケ	体外：スス付着	にぶい橙/にぶい橙	－
248	8I	SI10	D			弥生土器	甕	C4	11.0	－	－	チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：スス付着	にぶい橙/浅黄橙	－
249	8I	SI10	D			弥生土器	甕	C4	13.4	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	ハケ	ハケ	体外：スス付着	黒褐/にぶい黄橙	－
250	8I	SI10	D			弥生土器	甕	C2	15.0	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	－

下馬場遺跡　弥生土器観察表（6）

報告No.	グリッド	遺構	竪穴地区	遺物No.	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外/内	備考
251	8I	SI10	D			弥生土器	甕	C6	10.4	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	ナデ	ナデ	体内外：被熱（赤化）	にぶい橙/淡橙	－
252	8I	SI10	A			弥生土器	壺	E	－	－	－	英・チ・雲・白・赤・小礫	体内外：弱く黒化	ハケ	ハケ	－	灰黄/浅黄橙	－
253	8I	SI10	D			弥生土器	壺	E2	13.4	－	－	英・チ・雲・小礫	－	ナデ	ナデ	体内外：被熱（黒化）	褐灰/褐灰	－
254	8I	SI10	D			弥生土器	壺	E2	－	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ハケ	ナデ？	－	褐灰/褐灰	器面の剥落顕著
255	8I	SI10	A・D			弥生土器	甕	底部	－	－	4.8	英・チ・雲・白・小礫	－	ハケ	ハケ・スリナデ	体外：スス付着・被熱（黒化・赤化）	赤/橙	－
256	8I	SI10	A			弥生土器	壺か鉢	底部	－	－	5.4	英・長・チ・雲・小礫	体下：黒斑	ナデ？	ナデ？	体外～底：被熱（赤化・黒化）	橙～褐灰/黄灰	－
257	5I17	SI11	B	13		弥生土器	有段甕	C2	16	19.7	4.4	英・チ・雲・小礫	－	口：ナデ（凹線状）、体上：ハケ、体下：ハケ・ナデ	口：ナデ、体上：スリナデ、体下：ハケ	体外下：スス付着・被熱（赤化）	淡黄/淡黄	－
258	5I17	SI11	B	15	3	弥生土器	有段甕	B1	14.6	14	4.4	英・チ・雲	口～底：黒斑（顕著）口4箇の電跡	口：ナデ、体：ハケ・指圧痕	口：ナデ、体：ハケ・指圧痕	口：磨耗、体下～底：被熱（赤化）	淡黄～黒褐/浅黄橙	－
259	5I	SI11	B		3	弥生土器	有段甕	B2	18	－	－	英・チ・雲・小礫	－	口：ナデ、肩：列点状刺突、体下：ハケ	口：ナデ、体：ナデ・スリナデ	体外：スス付着	浅黄橙～黒褐/浅黄橙～黒褐	－
260	5I	SI11	C・D		2e	弥生土器	有段甕	B6	17.6	－	－	英・チ・雲・白・赤	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ・指圧痕	体内外：被熱（赤化）	赤橙/赤橙	－
261	5I8	SI11		4		弥生土器	有段甕	C2	16	19.8	4.4	英・チ・雲・白・赤	口外～体外上下：黒斑	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ケズリ	体内外：磨耗	浅黄橙/浅黄橙	－
262	5I	SI11	A		3	弥生土器	有段甕	B6	14.4	－	－	英・チ・雲	－	ナデ	ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	－
263	5I	SI11	D		3	弥生土器	有段甕	C2	9.4	15.2	4.2	英・雲・白・赤・小礫	－	口：ナデ、肩：列点状刺突、体：ハケ、体下：ケズリ	口：ナデ、体：ハケ	体外下：被熱（赤化）・スス付着	にぶい黄橙/橙	－
264	5I	SI11	D		3	弥生土器	有段甕	C2	15.2	－	－	英・雲・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	体外：被熱（黒化・赤化）	にぶい黄橙/橙	－
265	5I	SI11	D		3	弥生土器	有段甕	底部	－	－	4.6	雲・赤	－	－	ハケ	体外：被熱（黒化・赤化）	黒褐～赤褐/にぶい黄橙	－
266	5I	SI11	B		3	弥生土器	有段甕	底部	－	－	5.4	英・チ・雲・小礫	－	口：ナデ、肩：列点状刺突、体下：ハケ	口：ナデ、体：ナデ・スリナデ	体外：スス付着	浅黄橙～黒褐/浅黄橙～黒褐	－
267	5I	SI11	D		3	弥生土器	甕	底部	－	－	4.4	英・チ・雲・白・小礫	－	スリナデ	ハケ	体外：被熱（赤化・黒化）	橙/淡黄	－
268	5I	SI11			1	弥生土器	甕	底部	－	－	5.2	英・長・チ・雲・小礫	体内：黒化	？	指圧痕	体外：磨耗	淡黄～にぶい橙/黒褐	－
269	5I17	SI11	B	16		弥生土器	甕	底部	－	－	5	英・チ・雲・小礫	体内外：黒化（底部に明瞭できない）	ハケ	指圧痕・ナデ	体外：スス付着、体内：被熱（黒化）	浅黄橙～黒褐/黒褐	－
270	5I	SI11	A		3	弥生土器	有段壺	E2	18.2	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	ナデ	ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	－
271	5I	SI11	A		3	弥生土器	有段壺	D	－	－	－	英・雲・白・小礫	－	？	？	－	淡黄/淡黄	－
272	5I8	SI11	D	5		弥生土器	有段壺	A	13.8	－	－	チ・雲・白・小礫	－	ナデ？、擬凹線文	ナデ？	－	橙/橙	－
273	5I16	SI11	B	11	3	弥生土器	有段壺	C	13.8	28.2	5.6	英・白・赤・小礫・中礫	体外下：黒斑	口：ナデ、体：ミガキ	ナデ	体内外：磨耗	橙/橙	－
274	5I6	SI11	C	9		弥生土器	壺	E2	13.2	－	－	英・雲・白・赤・小礫	－	口：ナデ・ミガキ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	口：欠け・磨耗	橙/橙	－
275	5I	SI11	B		3	弥生土器	壺	E2	14.4	－	－	チ・雲・小礫	－	口上：ナデ、口下：ハケ	口上：ナデ、口下：ハケ？	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
276	5I7	SI11	D	1	3	弥生土器	壺	H	11.7	－	－	英・長・チ・雲・小礫	内面：黒化	ミガキ	ナデ	口：磨耗	浅黄橙/黒褐	－
277	5I7	SI11	D	1	3	弥生土器	甕	H	－	－	5.4	英・長・チ・雲・小礫	内面：黒化、体外上半：黒斑	ハケ（斜）	指圧痕・ハケ（横）	体外下部～中半：スス付着	にぶい黄橙/黒褐	－
278	5I	SI11	B		3	弥生土器	有段鉢	B	12	－	－	英・長・チ・雲・白	内面：黒化	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ・ハケ、体：ハケ	－	灰黄/黒褐	－
279	5I17	SI11	B	12		弥生土器	有段壺	K	8.3	－	－	英・チ・雲・白・赤	－	口：ナデ→ミガキ	ナデ	－	淡黄/にぶい黄橙	－
280	5I8	SI11	D	6		弥生土器	壺	底部	－	－	5	英・チ・雲・白・小礫	体内外下：黒斑	ハケ、ミガキ	体中：指圧痕、体下：ケズリ	－	にぶい黄橙/暗灰黄	－
281	5I	SI11	B			弥生土器	壺	底部	－	－	4.8	英・チ・雲・小礫	体内外：縦に帯状の黒斑	体内中～下：ハケ、体下：ミガキ	ハケ・指圧痕	－	浅黄/浅黄	－
282	5I16・17	SI11	B	11		弥生土器	壺	底部	－	－	5	英・チ・雲・白	－	ハケ→ミガキ	ハケ	体外中半：スス付着	暗灰黄/浅黄	－
283	5I	SI11			3	弥生土器	壺	底部	－	－	4.6	チ・雲・白・小礫・中礫	体外：黒斑（正位）	ミガキ	ナデ	－	灰黄褐/橙	－
284	5I7	SI11	D	1		弥生土器	壺か鉢	底部	－	－	3.2	チ・雲・白	－	？	？	－	淡黄～灰黄/灰黄	－
285	5I17	SI11	B	14		弥生土器	有段鉢	B	20.8	－	－	英・雲・赤（多）・小礫	－	ミガキ	ミガキ	－	橙/橙	内外面：赤彩？
286	5I11・16・17	SI11	B・C	10・11		弥生土器	高杯	A	26.5	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ハケ→ミガキ	ミガキ？	－	浅黄～赤褐/浅黄～赤褐	－
287	5I17	SI11	B	14		弥生土器	鉢	B	－	－	－	英・雲・赤・小礫	体外：黒斑	体：ミガキ	体：ミガキ	－	にぶい黄橙/橙	－
288	5I	SI11	C・D		1・3	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・チ・雲	－	ミガキ	ナデ？	－	にぶい黄/黄灰	－
289	5I	SI11	C		1	弥生土器	脚台部	－	－	－	20	チ・雲・赤・小礫	－	ミガキ？	－	－	にぶい橙/にぶい黄橙	－
290	7J	SI12	A		5c	弥生土器	有段甕	A2	14.6	－	－	雲・白	－	口：擬凹線文	口：ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
291	6J、7J	SI12	C		5b'	弥生土器	有段甕	A2	14.8	－	－	英・雲・白・角	－	口：凹線文	口：ナデ	口外：被熱（赤化）・スス付着	浅黄橙/褐灰	－
292	7J22	SI12		9	5c	弥生土器	有段甕	B2	18.2	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	体外：スス付着	浅黄橙/浅黄橙	－
293	7J	SI12	D		5b	弥生土器	有段甕	B2	12.6	－	－	英・チ・雲・赤	－	口：ナデ、体：スリナデ？	口：ナデ、体：スリナデ？	体外：スス付着	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
294	6J、7J	SI12	C		5b'	弥生土器	有段甕	B2	15	－	－	英・長・チ・赤・小礫	－	ナデ	ナデ	体外：スス付着	浅黄橙～黒褐/浅黄橙	－
295	7J	SI12	D		5c	弥生土器	甕	C4	8.4	10.5	4.6	英・雲・白・赤	－	－	－	体外下：スス付着	橙～灰黄褐/橙	－
296	7J18	SI12		7	5c	弥生土器	甕	C2	15	－	－	英・チ・白・赤	体内：一部黒化	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ・指圧痕	体外：スス付着	浅黄橙/浅黄橙	－
297	7J18	SI12		7	5c	弥生土器	壺	C4	17	－	－	英・チ・雲・白	－	口：ナデ、体：ハケ（斜）	口：ハケ（横）、体：ハケ	体外：被熱（黒化）	褐灰/にぶい黄橙	－
298	7J18	SI12		5	5c	弥生土器	壺	底部	－	－	5.6	英・チ・雲・白	体内：黒化	ハケ→ナデ	ハケ・スリナデ	－	灰黄褐/褐灰	－
299	7J12	SI12		3	5a	弥生土器	壺	底部	－	－	5.4	英・チ・白・赤・小礫	体内中半：黒斑	ミガキ	ハケ	体外（底）：被熱（赤化）	橙/橙	－
300	7J	SI12	D		5c	弥生土器	有段壺	F	17	－	－	英・チ・白・小礫	－	口：ナデ、口端：刻み、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ・指圧痕	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－

下馬場遺跡　弥生土器観察表（7）

報告No.	グリッド	遺構	竪穴地区	遺物No.	層位	種別	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外/内	備考
301	6J・7J	SI12	C		5b'	弥生土器	甕	底部	－	－	4.4	英・チ・雲	－	ケズリ？	ナデ	体外：被熱（赤化）	褐灰/にぶい黄橙	－
302	7J11	SI12		2	5a	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・チ・雲・白	－	ミガキ	ナデ	体外：被熱？（赤化）	橙/橙	－
303	5H18	SI13	A		3	弥生土器	有段甕	B2	17.6	25.4	4.7	英・チ・赤・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ	体外：スス付着、体内下：炭化物付着	にぶい橙～黒褐/にぶい黄橙～氷黒褐	－
304	5H13	SI13	A			弥生土器	壺	E2	12.8	－	－	英・チ・小礫	－	－	－	－	淡黄～淡橙/淡黄	外面：赤彩
305	5H18	SI13	A		3	弥生土器	有段壺	E1	14.6	－	－	チ・雲	－	－	－	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	器面の風化顕著
306	5H	SI13	B			弥生土器	甕	底部	－	－	5.2	チ・雲	－	ハケ・指圧痕	ハケ	体外：スス付着	にぶい黄褐/にぶい黄橙	－
307	5H	SI13	A			弥生土器	脚台部	－	－	－	4.8	英・チ・雲・白	－	ナデ？	ナデ？	－	灰黄/灰黄	－
308	5H	SI13	A		2	弥生土器	蓋	－	－	－	摘み2.3	英・長・チ・雲	－	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	－	にぶい橙/にぶい橙	－
309	5J、6J	SI14			覆土	弥生土器	甕	C4	15.6	－	4.6	英・雲・赤	－	口：ナデ、体下：ハケ	口：ナデ、体下：ハケ	体外：スス付着	橙～黒褐/橙	－
310	5J、6J	SI14			覆土	弥生土器	有段鉢	A2	－	－	－	英・チ・雲・小礫	－	口：擬凹線A類、体：ミガキ	？	－	浅黄橙～赤褐/浅黄橙	－
311	5J、6J	SI14			覆土	弥生土器	有段鉢	C	16.6	－	－	英・チ・白・赤	－	ナデ？	ナデ？	－	橙/にぶい橙	内外面：赤彩
312	5J、6J	SI14	B		3	弥生土器	有段鉢	C	21.0	－	－	英・長・チ・雲	－	ミガキ（単位不明）	ミガキ（単位不明）	口：細かな欠け	赤～浅黄橙/赤～浅黄橙	内外面：赤彩
313	5J、6J	SI14	B		3・4	弥生土器	有段鉢	C	13.0	－	－	英・長・チ・小礫	－	刺突文（口・肩）、ミガキ？	ナデ、指圧痕	－	浅黄橙/浅黄橙	体外・口内：赤彩
314	10H3・4	SX5				弥生土器	有段壺	B	12.6	－	－	英・長・チ・雲・白・赤	－	ミガキ	口：ナデ、体：ハケ	－	褐灰/浅黄	－
315	10F8	SK7				弥生土器	甕	底部	－	－	5.2	英・雲・白・小礫	－	ハケ（斜）	ハケ（斜）・指圧痕	体外：スス付着	浅黄橙/褐灰	－
316	9F7・8	SX8				弥生土器	甕	C4	14.0	－	－	チ・雲・白・赤・小礫	－	口：ナデ、体：スリナデ？	口・体：ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
317	9F7・8	SX8				弥生土器	甕	C4	16.0	－	－	チ・雲・白・小礫	－	ナデ	ナデ	体内外：被熱（赤化）	橙/橙	－
318	9F7・8	SX8				弥生土器	甕	C4	16.6	－	－	英・長・チ・白・赤・小礫	－	口・体：ハケ（斜）	口・体：ハケ（横）	体外：被熱（黒化・赤化）・スス付着、体内：被熱（赤化）	にぶい黄橙/にぶい橙	－
319	9F7・8	SX8				弥生土器	甕	体部	－	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	ハケ（斜）	ケズリ	体外：被熱（黒化・赤化）	にぶい橙/にぶい黄橙	－
320	9F7・8	SX8				弥生土器	有段鉢	？	－	－	－	英・長・チ・雲・赤	－	ハケ	ナデ	体外：スス付着、体内外：被熱（赤化）	にぶい黄橙/橙	－
321	9F7・8	SX8				弥生土器	鉢	E	10.6	－	4.8	英・長・チ・雲・赤	体外下：黒斑	ナデ・スリナデ	口：指圧痕、体：ハケ（縦）	－	灰黄褐/灰黄褐	－
322	9F7・8	SX8				弥生土器	甕	底部	－	－	2.8	英・雲・白・小礫	－	ハケ	ケズリ（スリナデ？）	体外：スス付着	黒褐～にぶい黄橙/褐灰	－
323	9F7・8	SX8				弥生土器	甕？	底部	－	－	3.8	長・チ・雲・白・赤・小礫	体内・体外：一部黒化	ハケ	指圧痕	－	にぶい黄橙/黒褐	－
324	7F19・24	SX13				弥生土器	壺？	J？	－	－	－	英・雲・小礫	体内：黒化	刺突文・突帯	ナデ	－	にぶい黄橙～赤褐/黒褐	外面：赤彩
325	9F7・8	SX8				弥生土器	壺	G	16.4	－	6.2	英・長・チ・雲・白・赤	体内：黒化	口：ナデ、体：ミガキ	口・体上：ナデ、体下：ハケ	－	浅黄橙/浅黄橙～黒褐	－
326	9F7・8	SX8				弥生土器	有孔鉢	底部	－	－	1.0	チ・雲・赤	－	ハケ	ハケ・指圧痕	体内外下：被熱（赤化）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
327	10G5	SK17				弥生土器	鉢	C6	16.0	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	口：ハケ	口：ナデ	－	橙/橙	－
328	7K7	SK19				弥生土器	鉢	体部	－	－	－	英・チ・雲・角	－	ハケ・ミガキ？	ナデ	－	にぶい黄橙/褐灰	外面：赤彩
329	4E				Ⅱ	弥生土器	有段甕	A1	14.0	－	－	英・長・チ・雲	体内：黒化	口：擬凹線文A、体：ハケ	口：ナデ	口外：スス付着	浅黄橙/浅黄	－
330	4E				b	弥生土器	有段甕	A1	17.0	－	－	英・長・チ・雲・赤	－	口：凹線	口：ナデ	口外：スス付着	にぶい橙/にぶい橙	－
331	4H				Ⅱ	弥生土器	有段壺	A3	18.0	－	－	針・英・長・雲・赤・小礫	－	口：凹線	口：ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
332	5D				Ⅱ	弥生土器	有段鉢	B	16.0	－	－	英・チ・雲	－	ミガキ	ミガキ	－	淡黄～赤褐/赤褐	－
333	5I				Ⅰ	弥生土器	有段甕	C2	14.0	－	－	英・チ・雲・白	－	口：ナデ、体：ハケ	口・体：ナデ	口・体外：スス付着	浅黄～黒褐/にぶい黄	－
334	5I				Ⅰ	弥生土器	有段壺	A	13.0	－	－	英・雲・白・小礫	－	口：擬凹線	口・体：ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
335	5F1				Ⅱb	弥生土器	有段壺	B	12.8	－	－	英・雲・赤・小礫	－	ナデ	ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	口内・外面：赤彩
336	5F13				Ⅱ	弥生土器	有段壺	E1	15.2	－	－	英・チ・雲・白・小礫	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	－	にぶい赤褐～浅黄橙/浅黄橙	外面：赤彩
337	4D				Ⅱ	弥生土器	壺	H	9.6	－	－	英・チ・雲・赤	－	ミガキ（精緻）	口：ミガキ、体：ケズリ・ハケ	体外：スス付着	橙/橙	－
338	5E16				Ⅱ	弥生土器	壺	J	－	－	－	英・チ・雲・赤	－	ミガキ・突帯（貼付）	ハケ	－	赤褐/淡黄	－
339	4D13				Ⅰ・Ⅱ	弥生土器	壺	I	－	－	－	英・チ・雲・角	－	ミガキ?、スタンプ文（渦文）・羽状文	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
340	5D				Ⅱ	弥生土器	甕	底部	－	－	3.8	英・チ・雲・白・小礫	－	ケズリ・ハケ	ハケ・指圧痕	体外：スス付着	にぶい橙/橙	－
341	4D				Ⅱ	弥生土器	壺	底部	－	－	4.6	英・チ・雲・赤・小礫	－	ミガキ・ハケ	ハケ	体外：スス付着	にぶい橙/橙	－
342	4E				Ⅱ	弥生土器	高杯	A	－	－	－	チ・雲・白・小礫	－	スタンプ文（渦文）	ナデ	－	浅黄橙～赤褐/黒褐	－
343	4E				Ⅱb	弥生土器	高杯	C	19.8	－	－	英・チ・雲・白・赤・小礫・中礫	－	ミガキ	ミガキ	－	橙/橙	内外面：赤彩
344	14G				Ⅰb	弥生土器	脚台部	－	－	－	8.8	英・チ・雲・赤・小礫	体内：黒化	ミガキ	スリナデ（ケズリ）	－	灰黄/黒褐	－
345	4D13				Ⅰ・Ⅱ	弥生土器	脚台部	－	－	－	－	英・チ・雲・赤・小礫	－	－	－	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
346	9J					縄文		－	－	－	－	英・長・白・小礫	－	沈線文・刺突文	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
347	7J	SI12	D		5C	縄文		－	－	－	－	英・長・白・小礫	体内：黒化	沈線文・刺突文	ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	－

下馬場遺跡　弥生時代石器観察表

NO.	グリッド	遺構	とりあげ	遺構内区画	層位	分類	石材	砂岩粒度	重量（g）	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	備考
1	10G21	SI2	S5	D	床上	砥石（有溝）	砂岩	中	754.50	17.60	6.60	6.00	断面Ｖ字状の溝あり（金属刃器か）、下部欠損
2	10G21	SI2	S3	D	床上	砥石（有溝）	砂岩	中	660.70	14.70	8.40	7.40	表の欠損面に断面Ｖ字状の溝あり（金属刃器か）、裏面も使用面
3	10G21	SI2	S7	C	床上	砥石（有溝）	砂岩	中	616.70	10.80	9.45	5.65	断面Ｖ字状の溝あり（金属刃器か）、下部欠損、表・裏使用面
4	9G25	SI2	S15	D	床上	砥石（有溝）	砂岩	中	1097.90	18.50	9.05	5.60	断面Ｖ字状の溝あり（金属刃器か）、表・右側面・裏面の一部使用面
5	9H	SI2		C	床上	砥石（有溝）	砂岩	中	49.80	7.50	4.35	3.40	断面皿状の溝あり。表面のみ使用面、その他は欠損
6	9G25	SI2	S14	D	床上	砥石（有溝）	砂岩	粗	950.00	15.30	7.00	7.65	金属刃器によると思われる溝あり。正面に列点上の打痕あり
7	10F3	SI3	S1	C	床上	砥石（有溝）	砂岩	中	150.00	7.70	7.95	2.15	断面皿状の溝あり。表面のみ使用面。下部・裏面は欠損
8	9G25	SI2	S11	C	床上	砥石（有溝）	砂岩	粗	11810.00	35.70	25.20	13.00	断面Ｖ字状の溝あり（金属刃器か）。左右および上下の側面に集中して見られる
9	10E24	SI3	S7	D	床上	砥石（有溝）	凝灰岩		248.90	12.20	4.60	2.50	粒子細かい。右側面には裏面方向からの溝があったと思われるが、使用により半分ほどに摩滅している
10	10E22	SI3	S11	A	床上	砥石（有溝）	砂岩	粗～中	18001.00	26.40	32.95	17.70	大型の砥石。正面右側が使用により断面孤状にくぼむ
11	5D4	SI7	S29	D	Ⅳ	砥石（有溝）	砂岩	中	1188.00	12.30	10.55	8.50	断面Ｖ字状の溝あり（金属刃器か）
12	7J17	SI12	S4		覆土	砥石（有溝）	砂岩	粗	3630.00	19.05	15.15	14.25	金属刃器による切込（深さ１～1.5cm）、断面Ｖ字状の溝あり
13	7G				Ｉｂ	砥石（有溝）	砂岩	粗	3130.00	17.45	13.85	12.75	径約 1mmの穿孔が見られる。断面錘状であることから針状の工具によるものか
14	5G23	SI13	S4	D	床上	砥石（有溝）	砂岩	中	11200.00	29.10	17.50	17.75	径約 2mmの穿孔が見られる。断面錘状であることから針状の工具によるものか
15	5G22	SI13	S5	C	床上	砥石（有溝）	泥岩		1229.60	18.45	14.30	5.00	金属刃器による線状痕（溝）、正面上部に棒状のものを連続して敲打した痕跡が認められる。
16	5H6	SI13	S6	B	床上	砥石（有溝）	砂岩	粗	2560.00	17.30	11.80	10.50	金属刃器による線状痕（溝）、裏面左側面に凹痕あり
17	10E23	SI3	S8・9	C	床上	砥石	砂岩	中	1140.50	24.05	9.10	5.60	接合
18	8G13	SI5	S6	A	床上	砥石	砂岩	中	982.20	14.60	8.10	4.80	原石そのままの利用。使用が顕著ではない
19	7F10	SI6	S26	A	床上	砥石	砂岩	中	1265.40	14.80	10.90	7.30	裏面に直径 1mmの穿孔？
20	5I8	SI11	S1	D	床上	砥石	砂岩	粗	1150.60	13.85	10.30	6.70	使用面は正面・左右両面
21	7F3	SI6	S28	A	床上	砥石	砂岩	中	20140.00	44.60	19.25	16.10	広い平端面が見られる。比較的長尺の金属刃器の研磨によるものか？正面は粒度の違いで研磨による滅滅に差が生じている
22	8D25	SI4	S9	C	床上	砥石	凝灰岩		6850.00	24.85	18.60	9.55	正面は使用により浅くくぼむ。左側面は平坦面をもつ（金属刃器の研磨によるものか）。
23	5F				Ⅱ	砥石	泥岩		76.70	6.90	4.60	2.00	断面Ｖ字状の線状痕が表面に見える。裏面は剥離面を残すが、微細な擦痕が見える。
24	9G	SI2	S12	C	床上	砥石	砂岩	中	496.60	13.60	5.25	5.30	
25	8D24	SI4	S4	C	10	砥石	凝灰岩		220.10	11.65	3.65	4.05	正・裏・左・右を使用。粒子細い
26	10E18	SI3	S4	C	床上	台石？	ヒン岩		2380.00	15.60	12.90	8.40	裏面が使用により平滑
27	9E6	SI4	S6	A	床上	台石	凝灰岩		26210.00	38.80	33.80	15.50	大型の礫。台石として使用か？
28	7F14	SI6（pit3）	S29	C	覆土	台石	砂岩	粗	11910.00	32.60	22.30	13.55	凹み痕あり。凹み内は摩耗により平滑
29	9H	SI2		C	覆土	磨石類	砂岩	粗	811.20	15.85	7.80	6.10	表・右・左に凹痕。中央部から欠損。使用時の破損か。
30	8G13	SI5	S5	A	床上	磨石類	角閃石安山岩		649.30	14.40	6.25	5.10	
31	9E1	SI4	S11	D	7	磨石類	火山礫凝灰岩		382.50	11.50	6.80	3.10	表裏面は研磨痕、側縁に敲打痕あり。
32	8G	SI5		A	覆土	磨石類	砂岩	中	4000.00	5.20	4.60	3.10	裏面が研磨により平滑
33	8G9	SI5	S3	D	床上	磨石類	砂岩	中	919.30	15.30	7.50	6.60	
34	7F10	SI6	S27	A	床上	磨石類	砂岩	中	702.20	10.65	8.55	7.25	敲打痕
35	4E				Ⅱ	磨石類	安山岩		702.40	9.90	7.90	6.20	敲打痕が見られる。表裏は凹石のように顕著に窪まない
36	5H8	SI13	S1	A	床上	磨石類	安山岩		750.60	9.30	10.65	5.65	上側面（側縁）に敲打痕。表・裏・下面は使用（研磨）による微細な擦痕が見られる。
37	5I17	SI11	S7	B	床上	磨石類？	ヒン岩		99.80	3.60	5.10	3.95	上面に擦痕あり
38	8D24	SI4	S5	D	11a	磨石類	ヒン岩		279.48	7.30	6.75	3.00	下面に擦痕あり。
39	8G3	SI5	S1	D	床上	剥片	泥岩		1195.50	12.80	12.30	7.80	
40	7F5	SI6	S16	D	4・5	剥片	蛇紋岩		104.93	6.55	4.45	3.30	上下方向からの打撃が見られる。敲石的な使用によるものか？
41	11I12	SI1	S22	D	床上	軽石製研磨具	軽石		26.60	6.70	4.90	3.70	
42	7F14	SI6	S25	A	床上	軽石製研磨具	軽石		32.97	7.00	5.05	5.10	
43	7F9	SI6	S3	B	床上	軽石製研磨具	軽石		7.20	4.20	3.70	2.55	
44	5I	SI11		A	1	軽石製研磨具	軽石		10.50	6.20	5.90	2.70	
45	5H3	SI13	S2	C	2	軽石製研磨具	軽石		4.97	3.90	3.45	2.50	
46	5E				Ⅱ	石錘？	凝灰岩		35.60	5.10	4.45	1.55	上下方向からの剥離。表裏は使用（研磨？）により平滑。縄文期の可能性もある。
47	6J				Ⅰ	石錘？	安山岩	細	39.70	4.90	4.00	1.80	上下方向からの剥離。裏面は使用により平滑。縄文期の可能性もある。

下馬場遺跡　石製品（玉関係工程品・ヒスイ・その他）観察表

No.	仮No.	グリッド	遺構	とりあげ	遺構内区画	層位	種別	分類	石材	重量(g)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
48	62	5C・5D・6D	SI7		C	1	管玉工程品	原石	鉄石英	29.24	4.80	3.00	2.20	裏面は主要剥離面、上下は分割面
49	67	4D24	SI8	S1	A	1	管玉工程品	石核	鉄石英	54.29	5.45	3.00	3.10	下は古い素材面、裏面は原石面
50	60	6D12	SI7	S26	D	4	管玉工程品	石核	鉄石英	30.38	4.60	3.00	2.30	
51	2	6D12	SI7	S27	D	4	管玉工程品	打割（両極状）	鉄石英	38.39	3.25	3.90	2.75	下面は両極打撃により平坦な面をもつ
52	3	5D5	SI7	S10	C	4	管玉工程品	打割（両極状）	鉄石英	7.89	2.35	2.60	1.27	裏面は両極打撃による平坦な面をもつ
53	4	5D5	SI7	S9	C	4	管玉工程品	打割（両極状）	鉄石英	29.27	3.50	3.85	2.10	表面は両極打撃による剥離痕、裏面は原石面を残す
54	66	6D	SI7		D	3	管玉工程品	打割（両極状）	鉄石英	3.10	2.70	1.40	1.00	表面は両極打撃による剥離痕
55	7	5C25	SI7	S1	C	4	管玉工程品	打割（両極状）	鉄石英	3.13	3.10	1.60	0.60	裏面は両極打撃による剥離・平坦な面をもつ
56	5	6D1	SI7	S14	D	4	管玉工程品	打割（両極状）	鉄石英	2.41	2.75	1.15	0.90	裏面は両極打撃による剥離面
57	100	7I				Ⅱ	管玉工程品	打割（両極状）	鉄石英	3.27	2.15	1.60	1.00	裏面は両極打撃による剥離面
58	101	7I				Ⅱ	管玉工程品	打割（両極状）	鉄石英	2.48	2.65	1.20	0.65	裏面は原石面を残し、側面は分割面
59	57	6D	SI7		D	3	管玉工程品	打割（両極状）	鉄石英	2.92	2.40	1.20	0.85	裏面は古い素材面を残す。右側面に針状工具による
60	70	11I18	SI1（pit9）		B	埋土	管玉工程品	角柱状素材	鉄石英	5.70	1.75	1.80	1.50	ピット９出土
61	69	11I18	SI1（pit9）		B	埋土	管玉工程品	角柱状素材	鉄石英	3.76	2.20	1.50	1.40	ピット９出土
62	6	6D1	SI7	S14	D	4	管玉工程品	角柱状素材	鉄石英	4.49	2.25	1.30	1.35	
63	58	6D	SI7		D	1	管玉工程品	角柱状素材	鉄石英	2.46	2.40	0.90	0.90	
64	61	6D	SI7		D	3	管玉工程品	角柱状素材	鉄石英	2.36	1.60	1.15	1.10	
65	64	6D	SI7		D	1	管玉工程品	角柱状素材	鉄石英	1.80	2.45	0.85	0.80	
66	13	6D	SI7		D	1	管玉工程品	角柱状素材	鉄石英	3.30	3.00	1.10	0.95	
67	12	6D	SI7		D	1	管玉工程品	角柱状素材	鉄石英	1.93	2.45	0.90	0.80	
68	8	6D7	SI7	S22	D	4	管玉工程品	側縁剥離	鉄石英	1.82	2.10	0.90	0.80	
69	24	5D	SI7		B	1	管玉工程品	側縁剥離	鉄石英	1.85	2.22	0.80	0.80	側縁に細かい剥離
70	65	6D	SI7		D	3	管玉工程品	側縁剥離	鉄石英	1.63	2.50	0.90	0.75	両側縁に連続した細かい剥離
71	34	10E	SI2		D	2	管玉工程品	側縁剥離	鉄石英	1.13	1.90	0.65	0.75	側縁に細かい剥離
72	9	6D12	SI7	S24	D	4	管玉工程品	側縁剥離	鉄石英	1.19	2.15	0.80	0.60	側縁に細かい剥離
73	1	6D	SI7		D	1	管玉工程品	側縁剥離	鉄石英	5.17	2.45	1.85	1.55	
74	15	5D	SI7		B	4	管玉工程品	研磨	鉄石英	1.45	2.15	0.90	0.75	正面は研磨、側面には細かい剥離
75	59	5D・6D	SI7		C	サブトレンチ	管玉工程品	研磨	鉄石英	1.45	1.80	0.95	0.50	
76	10	6D7	SI7	S21	D	4	管玉工程品	研磨	鉄石英	1.75	2.40	0.90	0.65	
77	39	11I	SI1		B	耕作土	管玉工程品	研磨	鉄石英	5.27	3.30	1.60	0.90	
78	33	11I9	SI1	S7	D	4	管玉工程品	研磨	鉄石英	0.31	0.80	0.43	0.48	四角柱状
79	43	11I7	SI1	S24	C	1	管玉工程品	研磨	鉄石英	0.30	0.80	0.50	0.40	多角柱状
80	16	6D	SI7		D	4	管玉工程品	研磨	鉄石英	0.57	1.12	0.51	0.51	多角柱状
81	35	10E	SI3		C	5	管玉工程品	研磨	鉄石英	0.63	1.40	2.50	0.45	多角柱状
82	17	5D・6D	SI7		A	4	管玉工程品	穿孔	鉄石英	0.35	0.85	0.53	0.50	多角柱状
83	25	13G				Ⅰb	管玉工程品	研磨	鉄石英	1.05	0.32	0.40	0.10	両端に深さ0.05mmの穿孔。多角柱状
84	19	5D	SI7		B	1	管玉欠損品	研磨・穿孔	鉄石英	0.03	0.51	0.30	0.35？	
85	11	5D10	SI7	S12	C	4	管玉欠損品	研磨・穿孔	鉄石英	0.38	1.42	0.40	0.38	
86	18	6D	SI7		D	4	管玉工程品	穿孔	鉄石英	0.02	0.44	0.41	0.01	穿孔をもつ剥片
87	68	11I3	SI1	S36	D	3	管玉工程品	剥片	鉄石英	2.16	1.40	2.40	0.70	
88	63	6D	SI7		D	1	管玉工程品	剥片	鉄石英	3.94	2.70	3.70	0.75	
89	71	5F24				Ⅱ	管玉工程品	石核	緑色凝灰	35.33	3.35	4.30	2.40	
90	54	5H	SI13		A	3	管玉工程品	石核	緑色凝灰	8.13	2.25	3.00	1.45	
91	56	5H	SI13		C	3	管玉工程品	形割	緑色凝灰	0.91	1.95	0.80	0.75	
92	53	7F14	SI6	S11	B	4～5	管玉工程品	形割	緑色凝灰	2.16	1.90	1.10	0.90	
93	51	7F	SI6		D	3	管玉工程品	形割	緑色凝灰	3.79	1.85	1.60	1.30	
94	22	6D	SI7		D	4	管玉工程品	形割	緑色凝灰	0.75	1.40	0.90	0.60	
95	20	5D・6D	SI7		C	サブトレンチ	管玉工程品	形割	緑色凝灰	0.79	1.85	0.90	0.45	サブトレ
96	42	11I4	SI1	S23	D	3	管玉工程品	形割	緑色凝灰	1.31	2.45	1.05	0.55	
97	52	7F14	SI6	S10	B	4～5	管玉工程品	形割	緑色凝灰	2.48	2.30	1.35	0.95	
98	27	11I17	SI1	S38	B	1	管玉工程品	研磨	緑色凝灰	0.54	1.70	0.60	0.50	
99	21	6D	SI7		D	4	管玉工程品	側稜剥離	緑色凝灰	0.44	1.70	0.75	0.65	
100	31	6D11	SI7	S31	D	4	管玉工程品	研磨	緑色凝灰	0.92	1.95	0.59	0.55	
101	26	11I	SI1		B	耕作土	管玉工程品	研磨	緑色凝灰	0.40	1.48	0.40	0.38	
102	28	11I	SI1		B	耕作土水洗	管玉工程品	研磨・穿孔	緑色凝灰	0.40	1.48	0.40	0.38	
103	29	6D12	SI7	S25	D	4	管玉	－	緑色凝灰	0.08	0.92	0.23	0.23	
104	30	7J12	SI12	S3	D	5a	管玉	－	緑色凝灰	0.12	1.16	0.27	0.27	
105	37	5H	SI13		C		管玉欠損品	－	緑色凝灰	0.04	0.88	0.28	0.28	
106	40	11I	SI1		C	南ベルト水洗	管玉	－	緑色凝灰	0.06	0.50	0.31	0.31	
107	23	6D	SI7		D		管玉欠損品	－	緑色凝灰	0.02	0.48	0.35	-	
108	48	7F14	SI6	S31	B	5	原石	－	ヒスイ	1.06	1.35	1.10	0.50	
109		6G				Ⅱ	原石	－	ヒスイ	25.04	4.10	2.50	2.25	
110	71	5I11	SI11	S2	C	3	原石	－	ヒスイ	147.58	6.65	4.50	3.90	
111	49	7F9	SI6	S3	B	4	原石	－	ヒスイ	8.38	2.70	1.55	1.50	
112	186	6J16			B	Ⅰ	玉関係	施溝	ヒスイ	247.76	8.20	6.30	4.10	施溝分割（擦切）
113	55	5H1	SI13	S7	B	覆土	原石	－	ヒスイ	28.81	3.30	2.80	1.75	
114	45	7J22	SI12	S5	A	9	玉関係	施溝	ヒスイ	24.24	3.25	3.20	2.40	施溝分割（擦切）
115		9E6	SI4	S1	A	褐色土	勾玉	－	ヒスイ	10.30	1.30	0.85	1.35	
116	36	5H	SI13		C		丸玉	－	滑石	0.44	0.70	0.75	0.75	
117		8G				Ⅰ	石偶	－	黒曜石	3.60	1.95	1.40	0.70	
118	503	9G				Ⅰb	不明石製品	－	泥岩	21.06	3.00	5.70	1.30	左右両側が面取りか？

下馬場遺跡　鉄製品観察表

No.	グリッド	遺構	竪穴地区	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
119	11I	SI1	ベルト南	3b	鉄鏃	（2.1）	1.2	0.2	1.4	
120	9・10H	SI2	A	褐色土	板状鉄製品	（2.9）	1.4	0.1	3.53	表面に木質が付着
121	7F	SI6	D	4・5	板状鉄製品	（3.0）	1.0	0.2	4.32	
122	6D	SI7	D	黒褐色土	板状鉄製品	（2.1）	0.5	0.15	1.06	木質が付着
123	5F・G	SI9	B		鉈	（3.0）	0.65～0.8	0.2～0.3	3.7	先端部にかけて両刃、彎曲する
124	5H	SI13	D	周溝覆土	針状鉄製品	（7.5）	-	-	10.79	銹化により９本？が癒着。太さ約1mmと2mmがあり、断面方形。2mmのものは長く上下破断している

下馬場遺跡縄文・その他の土器観察表

NO	出土地点	層位	時期	種別	残存部位	調整・施文	胎土	備考
348	5F	Ⅱ	早期前葉	深鉢	口縁部	内外面に密接施文しない山形文	繊維・石英・角閃石・白色粒子・小礫	３本１単位
349	8E	Ⅰb	早期前葉	深鉢	体部	外面に山形文	繊維・石英・白色粒子	３本１単位
350	6I	Ⅱb	早期前葉	深鉢	体部	外面に山形文	繊維・石英・白色粒子	
351	5E	Ⅱb	早期前葉	深鉢	体部	外面密接しない菱目文	繊維・石英・白色粒子	
352	5E	Ⅱ	早期前葉	深鉢	体部	外面密接しない菱目文	繊維・石英・黒色粒子	
353	5E	Ⅱb	早期前葉	深鉢	体部	外面密接しない菱目文	繊維・石英・白色粒子・黒色粒子	
354	4E	Ⅱb	早期前葉	深鉢	体部	外面密接しない菱目文	繊維・石英・白色粒子	
355	5H	－	早期前葉	深鉢	体部	楕円文	繊維・石英・白色粒子・赤色粒子	弥生のSI13　A区出土
356	4D	Ⅱ	早期前葉	深鉢	口縁部	山形状に刺突列（貝殻か）、貝殻腹縁	繊維・石英・角閃石・白色粒子・小礫	
357	5E	Ⅱ	前期前葉？	深鉢	体部	羽状縄文	繊維・石英・雲母・白色粒子・赤色粒子	357・358と同一
358	5E	Ⅱ	前期前葉？	深鉢	体部	羽状縄文	繊維・石英・雲母・白色粒子・赤色粒子	356・358と同一
359	5E	Ⅱ	前期前葉？	深鉢	体部	羽状縄文	繊維・石英・雲母・白色粒子・赤色粒子	356・357と同一
360	4E	Ⅱ	前期後葉	深鉢	体部	結節浮線（山形・横位）、粘土貼付（斜格子状）	石英・角閃石・雲母・白色粒子・小礫	十三菩提式
361	7J	－	前期？	深鉢	底部	絡条体圧痕文	石英・角閃石・雲母・白色粒子・小礫	弥生のSI12　A区出土
362	4D	Ⅱ	中期初頭	深鉢	口縁部	口縁端部連続爪形文、口縁部小突起？、小突起？から垂下する隆帯、隆帯上連続爪形文、平行横区画（半隆起線）、	石英・雲母・白色粒子	
363	8J	Ⅰb	中期初頭	深鉢	口縁部	口縁端部連続爪形文、口縁部平行横区画（平行半隆起線）、斜方向の集合沈線	石英・白色粒子・小礫	
364	4E	Ⅱ	晩期	甕	口縁部	口縁部無文帯	石英・長石・雲母・白色粒子・小礫	
365	4E	Ⅰ	晩期	甕	口縁部	口縁部無文帯	石英・長石・雲母・白色粒子・小礫	
366	4E	Ⅱ	晩期	甕	口縁部	口縁部無文帯	石英・長石・雲母・白色粒子・小礫	
367	4E	Ⅱ	晩期	深鉢	口縁部	口縁部に楕円状突起	石英・白色粒子（多い）	368と同一か
368	4E	Ⅱ	晩期	深鉢	体部上位	浮線文	石英・白色粒子（多い）	367と同一か
369	7J	Ⅱ	後期	壺	体部上位	磨消、沈線、RL縄文	石英・雲母・白色粒子	加曽利Ｂ・Ｃ式
370	6I	Ⅰb	後・晩期？	壺	体部上位	磨消、沈線、蕨手状、RL縄文	角閃石・雲母	
371	5D	Ⅰ	晩期	深鉢	口縁部	磨消、沈線	石英・雲母・白色粒子・赤色粒子	
372	4D10	Ⅱ	晩期	甕	口縁部	口縁部山形の突起	石英・角閃石・雲母	
373	4D10・6J	Ⅱ	晩期	甕	口縁部	縄文（地文不明）	石英・角閃石・雲母	6JはⅠ層出土。撹乱か
374	5I	Ⅱ	不明	不明	底部	外側面に沈線１条	雲母・小礫	
375	5H	Ⅰb	不明	土器円盤	－	外面に沈線	石英・雲母・小礫	
376	7I	Ⅱ	弥生中期？	甕	体部	外面斜方向の粗いハケ、内面横方向ハケ	石英・白色粒子（多い）	外面に炭化物付着
377	6I	Ⅰ	弥生中期？	甕	体部	外面斜方向の粗いハケ、内面横方向ハケ	石英・白色粒子（多い）	外面に炭化物付着
378	15G	－	弥生中期？	甕？	体部	地文縄文・櫛歯状工具による山形の沈線	石英・白色粒子・赤色粒子	

下馬場遺跡　縄文時代石器観察表

No.	グリッド	遺構	遺構内区画	層位	種別	分類	石材	砂岩粒度	重量（g）	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	備考
125	6J	SI14		覆土	石刃		泥岩(珪化)		10.83	7.15	2.45	1.00	旧石器　左右側縁に微細剥離
126	6J	SI14		3	石刃		安山岩		3.72	4.60	1.50	0.56	旧石器　風化のため側縁の微細剥離痕不明
127	5F・5G	SI9	B	床上	尖頭器		頁岩		0.36	2.45	0.80	0.20	早期か
128	5H	SI13	D		石鏃		黒曜石		0.43	1.45	1.40	0.35	早期か
129	4I			Ⅱ	石鏃		黒曜石		0.78	1.25	1.15	0.25	早期か
130	5E			Ⅱ	石鏃未製品		安山岩		6.85	3.20	2.30	0.95	
131	6H			Ⅰ・Ⅱ	磨製石斧		蛇紋岩		30.03	5.50	2.75	1.00	
132	4D25			Ⅱ	磨製石斧		蛇紋岩		25.63	6.50	3.20	1.00	
133	5H	SI13	B		磨製石斧		結晶片岩		85.33	8.20	4.10	1.50	
134	8E			Ⅰb	磨製石斧		蛇紋岩		121.20	8.80	5.00	1.80	
135	5E			Ⅱ	磨製石斧		凝灰岩		51.27	8.10	2.90	1.40	両側縁平坦な面を持つ
136	14G			Ⅱ	打製石斧		凝灰岩		352.23	14.70	6.40	2.90	
137	4F			Ⅰ	両極石器		チャート		4.34	3.10	2.20	0.50	
138	4F3			Ⅱ	両極石器		チャート		6.28	3.40	2.65	1.10	
139	4E			Ⅰ	不定形石器		安山岩		1.47	1.20	2.45	0.40	
140	10E			Ⅰb	不定形石器		安山岩		150.57	9.00	7.90	1.90	
141	5F	SI9	C	5	不定形石器		安山岩		17.20	5.10	3.40	1.10	打製石斧の調整剥片？
142	沢排土				不定形石器		珪化岩		21.23	3.50	5.60	1.40	
143	6J			Ⅰ	磨石類	A	安山岩		761.10	13.90	6.60	5.75	特殊磨石
144	4E			Ⅰ	磨石類	A	安山岩		572.90	14.20	7.30	5.20	特殊磨石
145	4E9			Ⅱ	磨石類	A	安山岩		973.50	15.80	6.50	6.80	特殊磨石
146	6I25			Ⅱ	磨石類	A	安山岩		472.64	11.70	5.90	5.20	特殊磨石
147	6G			Ⅱ	磨石類	A	安山岩		167.10	6.35	6.05	3.00	
148	5E			Ⅱ	磨石類	A	安山岩		693.80	11.65	9.25	4.55	
149	4F			Ⅱ	磨石類	A	安山岩		226.80	9.40	8.70	2.50	
150	4G			Ⅰ	磨石類	B	安山岩		255.10	8.10	7.00	3.50	
151	5H1				磨石類	B	安山岩		189.90	7.80	6.60	3.85	
152	9F			Ⅰb	磨石類	B	砂岩	細	504.50	12.45	7.55	4.75	
153	6J4			Ⅱ	磨石類	B	安山岩		247.00	9.25	6.40	3.60	
154	6G21			Ⅱ	磨石類	B	安山岩		175.40	8.00	7.40	2.50	
155	4H			Ⅰ・Ⅱ	磨石類	B	安山岩		386.00	10.40	8.90	3.40	
156	6J			Ⅱ	磨石類	B	砂岩	粗	390.60	11.30	8.00	4.75	
157	4F3			Ⅱ	磨石類	B	砂岩	中	254.30	10.40	6.50	3.45	
158	6I25			Ⅱ	磨石類	B	砂岩	中	244.60	10.70	6.25	3.20	
159	5D			Ⅱ	磨石類	B	砂岩	細	303.70	7.85	7.00	4.20	
160	5H			Ⅰ・Ⅱ	磨石類	B	安山岩		248.20	9.00	7.40	3.40	
161	5F			Ⅱ	磨石類	B	砂岩	中	310.00	9.50	5.20	4.75	
162	6I9			Ⅱ	磨石類	B	凝灰岩		404.30	10.25	9.00	3.20	
163	4D			Ⅱ	磨石類	C?	安山岩？		54.60	5.85	4.20	1.65	
164	6J			Ⅰ	磨石類	D	砂岩	細	287.10	7.35	7.00	4.30	
165	5D16			Ⅱ	磨石類	D	安山岩		218.00	6.80	5.85	3.95	
166	5F			Ⅱ	磨石類	E	砂岩	中	214.40	13.00	5.30	2.90	
167	4H			Ⅱ	磨石類	E	砂岩	中	214.00	6.95	9.10	2.90	
168	8K12			Ⅱ	磨石類	E	安山岩		340.70	9.20	7.05	4.15	
169	5I			Ⅰ・Ⅱ	磨石類	E	安山岩		207.10	10.45	7.50	3.10	
170	4H			Ⅰ・Ⅱ	磨石類	E	凝灰岩		363.20	9.50	7.95	4.05	
171	4E25			Ⅱ	磨石類	E	安山岩		384.70	9.60	8.40	4.00	
172	17D			Ⅱ	磨石類	E	安山岩		516.60	10.30	10.20	3.90	
173	4D			Ⅱ	磨石類	F	砂岩	粗～中	320.60	9.60	7.50	4.50	
174	5E22			Ⅱ	磨石類	G	安山岩		571.80	10.50	7.55	5.20	
175	5E			Ⅰ	磨石類	G	砂岩	中	219.70	9.10	4.50	3.90	

細田遺跡　掘立柱建物観察表

遺構名	グリッド	桁行（間）	梁間（間）	長さ（m）	幅（m）	構造	主軸方向	面積（m²）	ピット平面形	備考
SB21	13C'10・15・20、14C'6・11・12・16	2	2	3.8	3.2	側柱	N－71°－W	8.4	円・楕円	
SB22	13C'14・15・19・20・25、14C'11・12・16・17・21	3	2	4.8	2.95	側柱	N－20°－W	14.1	円・楕円	SB26と軸を同じか？
SB20	14C'16・21・22、14D'2・7・12	4+	－			側柱	N－70°－E	－	円・楕円	SB26と軸を同じにする
SB26	13C'18・19・23・24、13D'4・9・14・15・18～20・23～25	(5)	2+	(10)	3+	側柱	N－66°－E	－	隅丸方形	SB20と軸を同じにする

細田遺跡　遺構観察表

遺構名	グリッド	断面記号	平面形	断面形	長さ（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	時期	出土遺物	遺構前後関係	備考
SD6	14L'2・3・7・8・13・14・19	－	－	弧状	－	220	15	古代	153～161	SD4との切り合いは不明	
SK39	13A'4・9	A	円	台形	－	139	34	中近世	349～351		
Pit28	13B'4	B	円	台形	74	70	52	古代？	－		
Pit24	13A'25、13B'5	C	円	台形	68	68	52	古代？	－	－	
Pit29	13B'9・14	D	円	台形	82	80	66	古代	138	－	
Pit30	13B'10、14B'6	E	円	台形	80	72	54	古代？	－	－	
Pit31	13B'19	F	円	台形	40	36	27	古代？	－	－	
SD27	13C'3～5・8・9 14C'1	G	－	弧状	－	100	12	古代	－	掘立柱建物と軸を同じにする	
Pit33	13C'9	H	円	台形	48	44	57	古代	－	－	
Pit9	13C'8・9	I	円	U字状	38	34	43	古代	－	－	
Pit13	14C'1	J	円	U字状	30	26	38	古代	－	－	
SK36	14C'7・8	K	円	U字状	63	－	85	中世	324	－	
Pit18	14C'11	L	円	U字状	28	26	39	古代	－	掘立柱建物の柱穴の可能性あり	
SK12	13C'19	M	楕円	台形	74	38	35	古代	－	－	
Pit19	13C'24	N	円	台形	30	22	28	古代	－	－	
SE37	14C'17	O	円	U字状	104	110	185	古代	139・140	SB21P5に切られる	
SX23	14D'1・2・6・7	P	楕円	弧状	310	180	30	古代	141～144	SB20P3、SB20P4の覆土上面を切る	
Pit25	14D'6	Q	円	U字状	30	26	42	古代	－	－	
Pit8	13D'15	R	円	台形	45	40	37	古代	－	－	
SD38	13E'8	S	－	弧状	－	255	46	古代	－	近年の水田跡に切られる	
Pit32	13D'13	T	円	U字状	46	38	45	古代	－	－	
SK34	13E'3	U	円	台形	52	46	17	古代	－	－	
Pit2	13E'13	V	方形	台形	56	47	35	古代	－	－	
Pit15	13E'18	W	円	U字状	28	24	32	古代	－	－	
SK35	13E'18	X	楕円	弧状	82	64	21	古代	須恵器有台杯・無台杯	－	
Pit16	13E'23	Y	方形	台形	54	51	52	古代	－	－	
SX10	13F'2・3・7・8・12	Z・a	楕円？	弧状	－	286	55	古代	－	－	地形の窪み？
SK1	13G'9・14	b	円	弧状	244	208	91	古代	－	SD5を切る	
SD5	13G'10・16～18	c	－	弧状	－	16	13	古代	－	SK1に切られる	
SX3	13J'25、13K'5・9・10・14・15、14J'2、14K'1・6	d・e	長楕円	漏斗状	－	224	81	古代	148～151	－	縄文。古墳後期の遺物混入
SK7	13L'14	f	円	弧状	94	37	10	古代	－	－	
SD4	14L'12・13・17・18・23	g	－	弧状	－	112	10	古代	162～222	SD6との切り合いは不明	
SK14	14N'14・15	h	楕円	台形	－	81	48	不明	－	－	
Pit11	14N'23	i	円	台形	－	34	40	不明	－	－	

細田遺跡　縄文土器観察表

No.	仮	出土地点	層位	種別	残存部位	調整・施文	胎土	備考
1	329	13D'20	Ⅱ	深鉢	体部	半隆起線文、隆帯上連続爪形文、結節浮線文	石英・小礫	中期前葉
2	320	14P'10	Ⅱ	深鉢	体部	磨消縄文、隆帯上刺突文	石英・雲母・小礫・白色粒子(特に多い)	後期前葉
3	504	14O'19	Ⅱ	深鉢	体部	沈線、隆帯上刺突文	石英・チャート・白色粒子・赤色粒子	後期前葉　堀之内式
4	321	14P'5	Ⅱ	深鉢	体部	沈線、隆帯上刺突文	石英・チャート・白色粒子・赤色粒子	後期
5	502	14P'10	Ⅱ	深鉢	口縁部	沈線、磨消縄文	石英・チャート・白色粒子	後期
6	322	14P'10	Ⅱ	深鉢	体部	沈線、磨消縄文	石英・チャート・白色粒子	後期
7	327	15P'6	Ⅱ	深鉢	体部	沈線、磨消縄文	石英・チャート・白色粒子	後期
8	325	15P'1	Ⅱ	深鉢	体部	磨消縄文	石英・雲母・チャート	後期前葉　堀之内式
9	323	15N'12	Ⅱ	深鉢	体部	沈線	雲母・小礫・白色粒子	後期？
10	328	15P'12	Ⅱ	深鉢	体部	磨消縄文、多条細沈線？、円形刺突	石英・角閃石・雲母	後期後半？
11	503	14N'19	Ⅱ	深鉢	体部	磨消縄文、沈線	角閃石・雲母・白色粒子	後期
12	326	15P'12	Ⅱ	深鉢	口縁部	沈線	石英・雲母（以上２種多い）	晩期
13	500	14P'10、15P'16	Ⅱ	深鉢	体部	羽状縄文（縦位）	石英・小礫・白色粒子（特に多い）	後期後半
14	324	15P'21	Ⅱ	深鉢	底部	底部敷物圧痕（網代痕）	角閃石・雲母・白色粒子	時期不明

細田遺跡　縄文時代石器・中世石製品観察表

No.	グリッド	遺構	層位	種別	石材	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
15	13J'・K'、14J'・K'	SX3		不定形石器？	泥岩	13.33	7.6	2.9	1.0	
16	13L'25			磨製石斧	蛇紋岩	47.06	7.9	3.8	1.1	
17	13G'25			磨製石斧	凝灰岩	47.92	5.45	4.4	2.0	
18	13D'20			磨製石斧	蛇紋岩	23.27	5.75	3.35	0.8	
19	14D'5			磨製石斧	蛇紋岩	137.29	6.6	6.2	2.4	
20	14D'	SX23		磨製石斧	蛇紋岩	131.76	9.7	4.1	2.1	
21	15P'11			打製石斧	凝灰岩	107.38	11.8	5.4	1.6	
349	13A'4・9	SK39	2	五輪塔（空風輪）	凝灰岩	3,700.00	23.5	14.05	－	角閃石多く含む
350	13A'4・9	SK39	2	五輪塔（地輪）	凝灰岩	22,630.00	22.3	26.7	26.5	角閃石多く含む
351	13A'4・9	SK39	2	五輪塔（水輪）	凝灰岩	6,470.00	18.5	18.1	14.1	

細田遺跡　弥生終末～古墳時代の土器観察表（1）

凡例

［胎土］
チ：チャート　長：長石　小礫：直径1～2mm程度
英：石英　赤：赤色粒子　中礫：直径5mm程度
雲：雲母　白：白色粒子　角　：角閃石

［部位］
口：口縁部　下：下部
体：体部
上：上部

No.	遺構	グリッド	時期	器種	分類	口径	底径	器高	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外面/内面	備考
22	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	有段甕	甕A1	10.0	－	－	チ・雲・小礫	－	－	－	体内：炭化物付着・被熱(赤化)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	器形は壺に分類できるが、被熱痕跡あり
23	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	有段甕	甕A1	12.0	－	－	チ・長・雲・英	－	口：擬凹線	ナデ	外面：スス付着、内面：被熱(赤化)	黒褐/にぶい黄橙	－
24	14・15P'土器集中区	15P'6・11	弥末～古前	有段甕	甕A2	20.2	－	－	チ・長・雲・英	－	口：擬凹線、体：ハケ	口：ナデ、体：ナデ	－	黒～にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
25	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	有段甕	甕B	14.0	－	－	チ・雲・赤・小礫	－	口：ナデ	－	－	にぶい橙/にぶい橙	－
26	14・15P'土器集中区	14P'5、15P'1	弥末～古前	甕	甕C2	14.4	－	－	チ・長・雲・小礫	体内：黒斑	－	－	－	浅黄橙/浅黄橙	－
27	14・15P'土器集中区	15P'1・6・11	弥末～古前	甕	甕C1	15.5	－	－	チ・長・英	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	－	灰黄褐/灰黄褐	－
28	14・15P'土器集中区	15P'16・21	弥末～古前	甕	甕C1	18.0	－	－	チ・雲・英	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	－	褐灰～灰白/灰白	－
29	14・15P'土器集中区	15O'21、15P'1	弥末～古前	甕	甕C1	15.2	－	－	チ・長・雲・英・角・小礫	口~体外上：一部黒斑	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	被熱（黒化・赤化）	灰黄褐～赤褐/赤褐	－
30	14・15P'土器集中区	15O'21、15P'1	弥末～古前	甕	甕E類	15.8	－	－	チ・長・雲・英・小礫	－	口：ナデ波状文?、体：ハケ	口・体：ナデ	被熱（黒化・赤化）	黒褐/赤褐	櫛描波状文？
31	14・15P'土器集中区	15P'13	弥末～古前	有段壺	壺A	14.3	－	－	チ・英・白	－	口：擬凹線	口：ナデ	－	褐灰～赤/赤	内外面：赤彩
32	14・15P'土器集中区	15P'	弥末～古前	有段壺	壺A	11.8	－	－	チ・雲・英	－	口：擬凹線、体：？	口：ナデ	－	淡黄/淡黄	－
33	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	有段壺	壺B	－	－	－	チ・長・英	－	－	－	－	淡黄/淡黄	－
34	14・15P'土器集中区	14P'5、15P'12	弥末～古前	有段壺	壺B	－	－	－	チ・長・雲・英・小礫	体内：黒化	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙/褐灰	－
35	14・15P'土器集中区	15P'	弥末～古前	壺	壺B？	－	－	－	チ・長・雲・英	肩：一部黒斑	ミガキ	上：ナデ、下：ハケ	－	にぶい黄橙/灰黄褐	－
36	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	甕	底部	－	5.0	－	チ・長・雲・英	内外：黒化	ハケ	ハケ	－	灰白/灰白	－
37	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	甕	底部	－	8.0	－	チ・長・雲・英	体下：黒斑	ミガキ・ナデ	－	体下：被熱（赤化）	浅黄橙/浅黄橙	－
38	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	壺	底部	－	6.0	－	チ・長・雲・英	－	ハケ	ハケ	体外：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
39	14・15P'土器集中区	15P'11、15Q'25	弥末～古前	蓋		－	摘み2.2	－	チ・長・英・白	－	ミガキ摘み：ナデ	ミガキ	体外：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内外面：赤彩
40	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	蓋		－	11.5	4.5	チ・長・雲・英	口：一部黒斑	－	ハケ・ナデ	二次焼成、口：磨耗	浅黄橙/浅黄橙	－
41	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	鉢		8.6	2.0	5.5	チ・赤・白	体下部：黒斑	－	－	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	内面：黒色の付着物あり
42	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	高杯？		10.8	－	－	チ・長・雲・英	下部：全体黒化	ミガキ	ナデ	－	にぶい黄橙/灰白	－
43	14・15P'土器集中区	15P'11	弥末～古前	器台		9.8	－	－	チ・長・英・白	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ナデ	－	にぶい褐～黒褐/にぶい黄橙	－
44	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	器台		6.8	－	－	チ・長・雲・英	－	受：ナデ、脚：ハケ	受：ナデ、脚：ハケ	－	褐灰/褐灰	－
45	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	器台		10.4	－	－	チ・長・英	外面：黒斑	ミガキ	ミガキ	－	黒褐～褐灰/浅黄橙	－
46	14・15P'土器集中区	15P'7	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	長・英・小礫	－	ミガキ	ハケ	－	浅黄橙/浅黄橙	－
47	14・15P'土器集中区	15P'22	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	英・白	－	－	－	被熱（黒化・赤化）	にぶい橙/にぶい橙	－
48	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	器台	脚部	－	8.8	－	チ・長・雲・赤	－	－	－	被熱（黒化・赤化）	にぶい橙/褐灰	－
49	14・15P'土器集中区	15P'7	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	チ・長・雲・小礫	－	ミガキ	スリナデ	－	灰白/灰白	－
50	14・15P'土器集中区	14P'5	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	チ・長・雲・英	－	ミガキ？	スリナデ？	－	灰白/灰白	三か所の透孔
51	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	チ・長・雲・英	－	－	－	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
52	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	チ・長・雲・英	－	ミガキ	ハケ	－	灰黄褐/灰黄褐	－
53	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	器台	脚部	－	10.6	－	チ・長・雲・英・小礫	－	－	－	被熱（赤化）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
54	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	器台	脚部	－	11.5	－	チ・長・雲・英	－	口内：一部黒斑	ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	－
55	14・15P'土器集中区	15P'1	弥末～古前	器台	脚部	－	10.5	－	チ・長・雲・英	－	ハケ	－	被熱（赤化）	にぶい橙/にぶい橙	－
56	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'25	弥末～古前	有段甕	甕A1	15.4	－	－	チ・英・赤	外面：黒化・黒斑か？	口：擬凹線	ナデ	－	褐灰～黒褐/褐灰～黒褐	－
57	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'25	弥末～古前	有段甕	甕A2	16.8	－	－	チ・長・雲・英	－	口：擬凹線	ナデ	－	淡黄/淡黄	－
58	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'25	弥末～古前	有段甕	甕A1	15.0	－	－	チ・長・英・小礫・中礫	－	口：擬凹線	口：ナデ、体：ハケ？	口：磨耗、体外：被熱（黒化・赤化）	灰白/灰白～にぶい橙	－
59	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'25	弥末～古前	有段甕	甕B	12.6	－	－	チ・長・英・白	－	ナデ	ナデ	体外：スス付着	灰黄褐/灰黄褐	－
60	15Q'25・15R'1土器集中区	15R'5	弥末～古前	有段甕	甕B	13.6	－	－	チ・英・白	－	ナデ	ナデ	－	灰黄褐/灰黄褐	外面に幅0.05mmの線状痕あり、擬凹線を意識したものか?
61	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'20	弥末～古前	甕	甕C2	15.0	－	－	チ・長・英・赤・白	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：不明	体外：スス付着、体内：磨耗	浅黄/浅黄	－
62	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'20	弥末～古前	甕	甕C2	18.4	－	－	チ・長・雲・英	－	口：ナデ～ハケ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	口：磨耗、体外：スス付着	にぶい黄褐/にぶい黄褐	－
63	15Q'25・15R'1土器集中区	15R'5	弥末～古前	甕	甕C2	16.6	－	－	チ・雲・赤・白・角	－	口：ナデ、体：ハケ	ナデ	外：スス付着、口端：磨耗	にぶい橙～黒褐/にぶい橙	－
64	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'20	弥末～古前	甕	甕C2	17.0	－	－	チ・長・赤・白	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	口内：被熱（黒化）、体外：スス付着	褐灰～黒褐/浅黄	－
65	15Q'25・15R'1土器集中区	15R'5	弥末～古前	甕	甕C2	15.0	－	－	チ・雲・赤・白	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：不明	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
66	15Q'25・15R'1土器集中区	15R'5	弥末～古前	甕	甕C4	15.4	－	－	チ・長・雲・白	外：黒化・黒斑か？	口：ナデ～ハケ、体：ハケ	口：ナデ	外～口内端部：被熱（黒化）	褐灰/にぶい黄橙	器面の黒化は、焼成か使用によるものか判別できず
67	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'25	弥末～古前	壺	壺C	20.4	－	－	チ・長・雲・英	－	ナデ	ミガキ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	下部の破断面に、擬口縁刻みの痕跡
68	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'25	弥末～古前	有段壺	壺A	15.0	－	－	長・雲・英・小礫	－	口：擬凹線	ナデ	－	灰白/灰白	外面：赤彩
69	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'25	弥末～古前	壺	壺F	3.4	－	－	チ・長・雲・英	－	体：ナデ	－	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	外面：赤彩、口縁部に径3mmの孔あり
70	15Q'25・15R'1土器集中区	15R'5	弥末～古前	壺	壺F	－	－	－	チ・雲	－	ミガキ	ハケ→ミガキ	－	褐灰～にぶい赤褐/褐灰	外面：赤彩
71	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'20	弥末～古前	壺	底部	－	6.6	－	チ・赤・小礫	内：黒化	ナデ	ミガキ	－	にぶい黄橙/黒褐	底外にモミ圧痕と草の圧痕

細田遺跡　弥生終末～古墳時代の土器観察表（2）

No.	遺構	グリッド	時期	器種	分類	口径	底径	器高	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外面/内面	備考
72	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'20	弥末～古前	壺	底部	－	7.0	－	長・赤・小礫・中礫	外・顔：黒化、肩：黒化	ミガキ	ハケ	底内：器面が剥落	浅黄橙/黒褐	－
73	15Q'25・15R'1土器集中区	15R'5	弥末～古前	有孔鉢		－	1.6	－	チ・英・雲・赤・白・角	－	－	－	器面の風化	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
74	15Q'25・15R'1土器集中区	15R'5	弥末～古前	器台		－	－	－	白・赤（混入物少ない土）	－	同心円スタンプ文列点状刺突文	－	－	灰白/灰白	胎土：粉っぽい
75	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'26	弥末～古前	器台		－	－	－	チ・長・雲・英	－	刺突文	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	外面：赤彩
76	15Q'25・15R'1土器集中区	15Q'20	弥末～古前	器台		－	－	－	チ・長・雲・英	－	ミガキ？	ハケ	－	灰黄/灰黄	－
77		14P'10	弥末～古前	有段甕	甕A1	15.6	－	－	チ・雲・英・赤	－	口：擬凹線	ナデ	体外：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
78		14N'4	弥末～古前	有段甕	甕A2	18.0	－	－	チ・長・雲・英	－	口：擬凹線	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
79		14O'7	弥末～古前	有段甕	甕A2	18.2	－	－	チ・長・雲・英	－	口：擬凹線	ナデ	外：スス付着	灰黄褐/にぶい黄橙	－
80		14O'19	弥末～古前	有段甕	甕A2	20.8	－	－	チ・雲・白・小礫	－	口：擬凹線	口：ナデ、体：ハケ	口外：磨耗・スス付着	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
81		14P'15	弥末～古前	有段甕	甕B	13.0	－	－	チ・長・赤	－	ナデ	－	体外：被熱（黒化・赤化）・スス付着	褐灰～にぶい褐色/褐灰	ナデによる条線あり
82		14P'5	弥末～古前	有段甕	甕B	16.0	－	－	チ・長・赤	－	－	－	外：スス付着	褐灰/浅黄橙	外面の稜をナデにより強調したタイプ
83		14N'2	弥末～古前	有段甕	甕B	17.5	－	－	チ・雲・英・白	－	口：ナデ、体：ハケ？	口：ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	外面にナデによる条線あり
84		15P'1	弥末～古前	甕	甕C1	13.2	－	－	チ・長・雲・赤	－	口：ナデ	口：ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	上方の摘み上げとともに、下方の引き出しも行うもの
85		14P'5	弥末～古前	甕	甕C1	15.8	－	－	チ・長・英・赤	口内：黒化	口：ナデ、体：ハケ？	口：ナデ、体：スリナデ？	口：欠け	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
86		15O'21	弥末～古前	甕	甕C2	16.2	－	－	チ・赤・小礫	－	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
87		14P'5	弥末～古前	甕	甕C2	17.2	－	－	チ・長・雲・英	－	口・体：ナデ	口：ナデ、体：ケズリ	口：細かな欠け	褐灰/にぶい橙	－
88		15R'10	弥末～古前	甕	甕C2	15.0	－	－	チ・長・雲・白	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ	口：磨耗、体内：被熱（黒化・赤化）、体外：スス付着	灰黄褐/にぶい橙	下方への引き出しが若干認められる
89		14N'22・23	弥末～古前	甕	甕C3	16.0	－	－	チ・長・雲・英	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ、体：ハケ	－	にぶい黄橙/灰褐	－
90		14O'13	弥末～古前	甕	甕D？	14.2	－	－	チ・長・雲・英	－	口：ナデ～ハケ、体：ハケ	口：ハケ、体：指圧痕	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	口縁部もハケ調整
91		14P'3	弥末～古前	甕	甕C3？	13.8	－	－	チ・長・雲・英	－	口：ナデ、体：ハケ	口・体：ハケ	口：ハケ	黄褐/灰黄褐	口外に粘土の貼付け（肥厚させている）
92		14P'	弥末～古前	甕	甕D？	15.3	－	－	チ・英・雲	－	口：ナデ	口：ナデ	口：被熱（若干の赤化がみられる）	浅黄橙/浅黄橙	布留系？内弯気味
93		14N'17	弥末～古前	甕	甕D	14.0	－	－	チ・英・白	－	ナデ	ナデ	外：磨耗	浅黄橙/浅黄橙	布留系
94		14N'17	弥末～古前	甕	甕D	15.0	－	－	チ・雲・英・白	－	ナデ	ナデ	体外：被熱（赤化）・磨耗	にぶい橙/浅黄橙	布留系
95		14N'23	弥末～古前	甕	甕D	16.0	－	－	チ・英・白	－	ナデ	ナデ	内：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	布留系
96		15O'21	弥末～古前	台付甕？		－	7.0	－	チ・長・雲・英・角	－	ミガキ	体：ハケ、脚：不明	－	浅黄/浅黄	－
97		15O'6	弥末～古前	甕	底部	－	2.6	－	チ・長・英・小礫	－	ハケ	指圧痕	磨耗	にぶい橙/にぶい橙	タタキを模したような太く粗いハケ
98		14O'24	弥末～古前	壺	壺E	16.8	－	－	チ・雲・英	－	口：ナデ、体外下：ケズリ	口：ナデ	口：欠け・磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	口外にナデの条線がみられる引き出し部分のナデを強調
99		14O'7	弥末～古前	壺	壺E	12.8	－	－	雲・白	－	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙/褐灰	－
100		14N'22	弥末～古前	甕？	壺D	18.0	－	－	チ・長・雲・英	－	ナデ？	ナデ？	口内外：スス付着（端部の方に集中）	橙/橙	器形は壺に分類できるが、被熱痕跡あり
101		14O'24	弥末～古前	有段壺	壺B	－	－	－	チ・長・雲・英	－	ミガキ	ナデ	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	器面に条線状の窪みあり（0.05mmくらいの幅）
102		14O'24	弥末～古前	有段壺	壺B	14.4	－	－	チ・長・雲	－	ナデ	ナデ	－	橙/にぶい黄橙	外面：赤彩？（一部に化粧土残存）
103		14P'5	弥末～古前	壺	壺F	10.6	－	－	チ・長・雲・英	－	口：ミガキ？、体：ミガキ	－	口：欠け	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
104		15P'11	弥末～古前	壺	壺F	8.6	－	－	チ・長・雲・小礫	－	体：ハケ？	－	－	にぶい黄橙/褐灰	－
105		14N'25	弥末～古前	高杯		20.0	－	－	チ・長・雲・英	－	－	－	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
106		14P'20、15P'21	弥末～古前	壺	壺D	13.0	－	－	チ・長・雲・英	－	口：ナデ、体：ハケ	口：ナデ・ハケ、体：ハケ	体外：スス付着	褐灰～黒褐/にぶい黄橙～黒褐	－
107		14O'7	弥末～古前	壺	底部	－	8.2	－	チ・長・英	体内：黒化	ミガキ	ハケ・ナデ	－	褐灰/黒褐	－
108		14P'10	弥末～古前	器台	器台A	16.4	－	－	チ・長・雲・赤	－	口：擬凹線ミガキ？	－	－	にぶい黄橙/黄橙	－
109		14N'18	弥末～古前	器台	器台A	23.0	－	－	チ・長・雲・英	－	－	－	－	灰白/灰白	口に粘土を添付して、段状に作り出す
110		14P'4	弥末～古前	器台	器台A	18.6	－	－	チ・雲・英・中礫	内外面：黒斑	ハケ→ミガキ	ミガキ	口：細かな欠け	暗灰黄～灰黄/暗灰黄～灰黄	－
111		14P'15	弥末～古前	器台？		－	－	－	チ・長・赤・白	－	円形スタンプ文、刺突文	－	－	淡黄/淡黄	－
112		15P'2	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	チ・長・雲・英	－	刺突文（半裁列点）	ナデ	－	淡黄/淡黄	三段の刺突文
113		14O'19	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	チ・雲・英	－	刺突文（W字状刺突列）	ナデ	－	にぶい黄橙/浅黄橙	－
114		14P'5、15P'1	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	チ・長・雲・英	－	ミガキ	一部ナデ、ほか不明	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
115		14P'10、15P'6・11	弥末～古前	器台	器台D	9.0	14.0	－	チ・長・雲・英	－	ミガキ	受：ミガキ、脚：スリナデ	－	にぶい赤褐/赤橙	－
116		14O'19	弥末～古前	高杯		12.0	16.0	7.5	チ・白・小礫	－	ミガキ	体内：ミガキ、脚内：ハケ	－	褐灰/褐灰	－
117		14P'3・5	弥末～古前	高杯	脚部	－	－	－	チ・長・雲・英・中礫	－	ハケ	スリナデ（ケズリ）	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
118		14O'19	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	チ・雲・英	－	－	－	－	浅黄橙/浅黄橙	－
119		14O'21	弥末～古前	高杯	脚部	－	－	－	チ・雲・英	－	ミガキ	ケズリ？	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
120		14N'9	弥末～古前	高杯	脚部	－	－	－	チ・長	－	？	ケズリ・指圧痕	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
121		13H'15	弥末～古前	器台	脚部	－	－	－	チ・長・雲	－	体：ハケ→ミガキ	体：ハケ→ナデ	－	浅黄橙/浅黄橙	－

細田遺跡　弥生終末～古墳時代の土器観察表（3）

No.	遺構	グリッド	時期	器種	分類	口径	底径	器高	胎土	焼成痕跡	外面調整・施文	内面調整	使用痕跡	色調　外面/内面	備考
122		14O'24	弥末～古前	高杯	脚部	－	－	－	チ・長・雲・英	－	ミガキ？	ナデ	－	にぶい黄橙/黒褐	－
123		14M'19	弥末～古前	高杯	脚部	－	－	－	チ・長・雲・英	－	ミガキ	ナデ・ケズリ	－	褐灰～にぶい黄橙/にぶい黄橙	外面：赤彩
124		14P'15	弥末～古前	鉢?（高杯?）		－	－	－	長・英・白	－	ミガキ	ミガキ	－	にぶい橙/褐灰	外面：赤彩
125		14P'5	弥末～古前	有孔鉢		20.4	－	－	チ・長・雲・英	－	口：ナデ、体外：ハケ	体：ハケ	口・体下：磨耗	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
126	SD4	14L'17	弥末～古前	高杯	脚部	－	－	－	チ・雲・英・小礫	－	ミガキ	－	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
127		15P'2	古墳前期	高杯	脚部	－	－	－	チ・長・雲・白	－	杯・脚：ミガキ	杯：ミガキ、脚：ケズリ	－	褐色/褐色	褐色系の胎土（信州系に類似）
129		15Q'25	古墳前期	高杯	脚部	－	－	－	チ・長・雲・英・白	－	－	ナデ	－	にぶい黄橙/褐灰	脚内面上部に直径2～3mmの棒状工具痕あり
128		14N'4	古墳前期	高杯	脚部	－	－	－	チ・雲・英・白	－	ミガキ	ナデ?	－	にぶい橙/にぶい橙	－
130		13G'14	－	須恵器長頸瓶		－	－	7.2	チ・長・英	回転方向：右	回転ヘラ	ロクロナデ、ロクロケズリ	単体？	還硬暗灰黄/暗灰黄	西側丘陵（下馬場窯跡）か
131		13K'9	古墳後期	甕	底部	－	10.0	－	チ・雲・英・白	－	ハケ	ナデ	体外：スス付着	黒褐/灰黄褐	－
132		15O'21	古墳後期	高杯	脚部	－	9.0	－	チ・雲・英・白	－	ミガキ	ナデ・ケズリ？	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
133		14M'14	古墳後期	高杯	脚部	－	－	－	チ・長・雲・白・小礫	－	杯：ミガキ？、脚：ミガキ	杯：ミガキ、脚：ナデ	－	にぶい黄橙/杯・黒、脚・橙	内面黒色処理
134		15Q'19	古墳後期	内黒高杯	脚部	－	－	－	チ・長・英	体外上・体内：黒化	ミガキ	ケズリ	－	褐灰/褐灰	－
135		14P'5	古墳後期	土器支脚		3.5	－	10.5	チ・長・英	－	指圧痕	－	－	浅黄橙/不明	－
136		13K'9	古墳後期	ﾐﾆﾁｭｱ鉢		－	4.0	－	チ・雲・英・白	－	指圧痕	指圧痕	口：欠け	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－
137		14N'7	古墳後期	ﾐﾆﾁｭｱ鉢		3.0	2.8	1.5	チ・長・雲・英	－	指圧痕	指圧痕	－	にぶい黄橙/にぶい黄橙	－

細田遺跡　古代・中世土器観察表（1）

No.	遺構	グリッド	種別	器種	分類	口径	器高	底径・摘み径	器高指数	胎土群	胎土	回転方向	底部頂部調整	その他の調整	降灰	焼成	使用痕跡	転用痕跡	備考
138	SK29	13B'9・14	土師器	甕	－	－	－	－	－		チ・長・雲	－	－	体外：縦ハケ、体内：横ハケ	－	－	－	－	非ロクロ
139	SE37	14C'17	須恵器	小瓶類	－	－	－	－	－	西	チ・長・白	右	－	体外：カキメ、その他：ロクロナデ	単体	還硬	体外：磨耗	－	赤紫色の還元色、陶色っぽい
140	SE37	14C'17	須恵器	甕	－	－	－	－	－	西	長・白	－	－	体外：平行タタキ、体内：同心円当て具痕	単体	還硬	－	－	－
141	SX23	14D'	須恵器	有台杯	B	－	－	8.8	－	西	チ・長・英	右？	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅱb類？	還硬	高台：弱い磨耗	－	－
142	SX23	14D'	須恵器	有台杯?	C?	12.0	－	－	－	西	チ・長・白	右	－	ロクロナデ	?	還硬	－	－	－
143	SX23	14D'	土師器	椀	－	11.3	4.0	5.4	35		チ・長・英・赤・白	右？	回転糸？	ロクロナデ	－	－	口・体外下：磨耗	口内外：タール状の付着物	－
144	SX23	14D'	土師器	小甕	－	12.5	－	－	－		チ・雲・白	－	－	－	－	－	口内・体外：スス付着	－	－
145	SK35	13E'18	須恵器	無台杯	B	12.0	3.5	6.8	29	西	チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬(赤紫呈する)	口端・体内：磨耗	－	底部墨書「人人」
146	SK35	13E'18	須恵器	無台杯	B	12.9	4.9	7.0	38	西	チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ	Ⅲ類	還軟(赤褐)	－	内面：炭化物？付着	底部墨書「人人」
147	SK35	13E'18	須恵器	有台杯	B	12.0	3.7	8.4	31	西	チ・長・英	右	回転糸後、ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅱb類？	還硬	口：欠け、体外：磨耗	口内外：磨耗	－
148	SX3	13～14J'・K'	土師器	ﾐﾆﾁｭｱ鉢	－	6.2	3.2	5.0	－		チ・長・英・雲・角	－	－	体外：ナデ、体内：ナデ・ハケ	－	－	－	－	古墳後期か
149	SX3	13～14J'・K'	土師器	小甕	－	－	－	7.4	－		チ・長・雲（小礫多い）	右	回転ヘラ？	ナデ	－	－	－	－	－
150	SX3	13～14J'・K'	土師器	椀	C	11.3	4.4	5.5	39		チ・長・赤・白	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口内：磨耗、見込み：弱い磨耗	－	－
151	SX3	13～14J'・K'	須恵器	甕	－	－	－	－	－	西	長・英・白	－	－	体外：平行タタキ、体内：同心円当て具痕	単体	還硬	－	－	－
152	SD5	13G'	須恵器	甕	－	－	－	－	－	西	英	－	－	体外：平行タタキ、体内：同心円当て具痕	単体	－	－	－	－
153	SD6	14L'	須恵器	杯蓋	A?	15.6	－	－	－	西	チ・長・白（多）	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅰ類？	還硬	体内：磨耗	－	－
154	SD6	14L'	須恵器	有台杯	C	－	－	8.0	－	東	チ・長・英・赤・白	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅱ類？	還硬	－	－	－
155	SD6	14L'	須恵器	有台杯	B	11.2	3.5	8.0	31	西	チ・長・白（多）	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅱ類？	還硬	口・高台：磨耗	－	－
156	SD6	14L'	須恵器	小瓶類	－	－	－	－	－	西	チ・長	－	－	ロクロナデ	単体	還硬	－	－	－
157	SD6	14L'	灰釉陶器	皿	－	11.0	－	－	－		白	右？	ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	Ⅲ類？	還硬	－	－	－
158	SD6	14L'	須恵器	甕	－	－	－	－	－	西	チ・長	－	－	体外：タタキ、体内：同心円当て具痕	単体	還硬	－	－	－
159	SD6	14L'	須恵器	甕	－	－	－	－	－	西	チ・長	－	－	体外：タタキ、体内：同心円当て具痕	単体	還硬	－	－	－
160	SD6	14L'	須恵器	甕	－	－	－	－	－	東	チ・長	－	－	体外：タタキ、体内：同心円当て具痕	単体	還硬	－	－	－
161	SD6	14L'	須恵器	甕	－	26.0	－	－	－	西	チ・長・白	右	－	ロクロナデ、ナデ	単体	還硬	口：磨耗	－	－
162	SD4	14M'22	須恵器	杯蓋	A	15.0	3.4	2.5	23	西	チ・長・小礫（2mm大）	右	回転糸後、ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅱa類	還硬	摘み・体外下：磨耗	－	－
163	SD4	14M'7	須恵器	有台杯	A	－	－	10.4	－	東	チ・長・小礫	右	回転ヘラ後、板目圧痕	ロクロナデ	－	－	－	－	－
164	SD4	14M'13	須恵器	有台杯	C	13.0	4.3	7.9	33	東	チ・白・小礫	右	回転ヘラ	ロクロナデ	不明	還硬	体内：磨耗	－	泥っぽい土、177の甕と同じ土
165	SD4	14L'11	須恵器	有台杯	B	－	－	8.0	－	西	チ・長・英	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅲ類	酸硬	体内：磨耗、高台：欠け	－	－
166	SD4	14M'3	須恵器	有台杯	C?	－	－	7.0	－	東	チ・長・雲	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	体内：磨耗、高台：欠け	高台内：漆付着（ごく少量）	内面すべて自然釉

細田遺跡　古代・中世土器観察表（2）

No.	遺構	グリッド	種別	器種	分類	口径	器高	底径・摘み径	器高指数	胎土群	胎土	回転方向	底部頂部調整	その他の調整	降灰	焼成	使用痕跡	転用痕跡	備考
167	SD4	14L'21・22	須恵器	無台杯	B	12.0	－	－	－	西	チ・長	右	－	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	体内：磨耗	－	－
168	SD4	14M'2	須恵器	無台杯	B	11.8	3.8	6.0	32	西	チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	酸軟	口：欠け・磨耗	－	極めて軟質
169	SD4	14L'17	須恵器	無台杯	C	－	－	6.8	－	小泊	チ・長・白	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	体外：磨耗	－	黒色の吹き出し
170	SD4	14L'17	須恵器	無台杯	C	－	－	6.5	－	小泊	チ・長・針	左	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	底外：磨耗	－	黒色の吹き出し
171	SD4	14L'7	須恵器	長頸瓶	－	－	－	－	－	西	チ・長・雲	右	－	ロクロナデ	単体	還硬	－	－	－
172	SD4	14M'2	須恵器	長頸瓶	－	－	－	11.3	－	東	チ・長・雲	右	ロクロケズリ	ロクロナデ、見込み：不整方向のナデ	？	還硬	高台：打欠け	高台内に墨痕あり	黒色の吹き出し
173	SD4	14L'22	須恵器	壺	－	－	－	19.0	－	東	チ・白	右	板目圧痕	ロクロナデ、ナデ	単体	還硬	－	－	－
174	SD4	14M'2	須恵器	甕	－	－	－	－	－	東	白雲	－	－	ロクロナデ、体外：平行タタキ後カキメ、体内：同心円当て具痕	単体	還硬	体外：磨耗	－	泥っぽい土 流理構造のように土が縞状
175	SD4	14M'2	須恵器	甕	－	－	－	－	－	西	チ・長・雲	左	－	ロクロナデ、体外：平行タタキ・カキメ、体内：同心円当て具痕	単体	還硬	体外：磨耗	－	－
176	SD4	14L'11・12・16・17・18、14M'3	須恵器	甕	－	－	－	－	－	西	チ・白（多）	－	－	体外：平行タタキ、体内：同心円当て具痕	単体	還硬	－	－	断面に漆付着 （漆接ぎか？）
177	SD4	14M'8	珠洲焼	擂鉢	－	18.9	－	－	－	西	長・白	－	－	ロクロナデ	単体？	還硬	口端：磨耗	－	断面に黒色の吹き出しあり
178	SD4	14M'8	珠洲焼	擂鉢	－	23.4	－	－	－	西	チ・長・英	右	－	ロクロナデ	－	－	口端：欠け	－	－
179	SD4	14L'11	土師器	椀	A1	13.0	－	－	－		チ・長・英・赤・白	右	－	ロクロナデ	－	－	口端：磨耗	－	体外墨書「凡」
180	SD4	14L'11	土師器	椀	A1	13.2	3.7	6.7	28		チ・長・英・雲	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口：磨耗	－	体外墨書「凡」
181	SD4	14L'11	土師器	椀	A1	12.7	3.5	7.4	28		チ・長・英・赤	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口：磨耗	－	体外墨書「凡」の一部
182	SD4	14L'11	土師器	椀	A1	13.0	－	－	－		チ・雲・英・赤・白	右	－	ロクロナデ	－	－	口：細かな欠け	－	体外墨書「凡」
183	SD4	14M'8	土師器	椀	A1	13.0	－	－	－		チ・長・雲	右	－	ロクロナデ	－	－	口端：磨耗	－	体外墨書「凡」の一部
184	SD4	14L'6	土師器	椀	A1	13.0	－	－	－		チ・雲・赤	右	－	ロクロナデ	－	－	－	－	体外墨書「凡」の一部？
185	SD4	14L'11・17	土師器	椀	A1	12.5	3.1	6.4	25		チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	体内：磨耗	－	－
186	SD4	14L'17・21	土師器	椀	A1	12.6	3.7	6.4	30		チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口・体外下：磨耗	－	－
187	SD4	14L'13	土師器	椀	A1	13.3	3.5	6.6	26		チ・長・雲・赤	左	回転糸	ロクロナデ	－	－	体内・体外下・底：磨耗	－	－
188	SD4	14L'11	土師器	椀	A1	12.5	3.6	5.7	29		チ・長・英・赤	？	回転糸	ロクロナデ	－	－	被熱（黒化・赤化）	－	磨滅が著しい
189	SD4	14L'11	土師器	椀	A2	13.4	3.9	6.0	29		チ・長・赤	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	不明	－	－
190	SD4	14M'2	土師器	椀	A2	11.9	3.7	6.4	31		チ・長・英・赤	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	底外：磨耗	口内・体外：スス付着	－
191	SD4	14L'11・17	土師器	椀	A2	12.4	3.6	6.0	29		チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	見込：炭化物少量付着、二次焼成	－	灯明？
192	SD4	14L'6	土師器	椀	A2	11.4	3.5	5.0	31		チ・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	底外：磨耗	－	－
193	SD4	14L'11・17	土師器	椀	A2	13.0	3.7	6.5	28		チ・長・雲	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	－	口内：タール状の付着物体外：スス付着、磨耗体内：見込黒化	－
194	SD4	14L'6	土師器	椀	A2	13.0	3.2	6.0	25		チ・長・雲	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	底外：弱い磨耗	体内：スス付着	－
195	SD4	14L'8・11	土師器	椀	A2	13.6	3.6	6.4	26		チ・長・赤	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口端：弱いナデ	－	－
196	SD4	14L'6・11・12・17	土師器	椀	A2	13.0	3.5	6.8	27		チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口：細かな欠け・磨耗	－	－
197	SD4	14L'6	土師器	椀	A2	12.3	3.9	5.6	31		チ・長・雲・赤	－	回転糸	ロクロナデ	－	－	体外・底外：磨耗	－	－
198	SD4	14L'12	土師器	椀	A2	13.1	3.8	6.5	29		チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	体外：被熱（赤化）、体内外：磨耗	－	－
199	SD4	14L'2	土師器	椀	A2	12.6	3.5	5.8	28		チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口：磨耗・欠け	－	－
200	SD4	14L'11	土師器	椀	A2	12.8	3.6	5.5	28		チ・長・雲	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口内：磨耗、見込：細かな剥落、体外下：磨耗、細かな剥落	－	－
201	SD4	14L'11・17	土師器	椀	A2	13.4	4.5	5.6	34		チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口・体外・底：磨耗	－	－
202	SD4	14L'13	土師器	椀	A2	13.1	－	－	－		チ・長・英・赤・白	左	－	ロクロナデ	－	－	体内：磨耗	－	－
203	SD4	14L'6	土師器	椀	B	13.8	－	－	－		チ・雲・赤	－	－	ロクロナデ	－	－	－	－	－
204	SD4	14L'6	土師器	椀	B	12.5	3.8	5.4	30		チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口：磨耗	－	－
205	SD4	14L'17	土師器	椀	B	12.2	－	－	－		チ・雲・英	右	－	ロクロナデ	－	－	体外：欠け	－	－
206	SD4	14M'2	土師器	椀	B	12.0	3.9	5.4	33		チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ、体外：カキメ	－	－	体外：磨耗	－	－
207	SD4	14L'12	土師器	椀	B	12.0	3.9	5.1	33		チ・長・雲・英・赤	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口・体内外：磨耗	－	－
208	SD4	14L'22	土師器	椀	B	13.6	3.3	5.6	24		チ・長・雲・英	左	回転糸	ロクロナデ	－	－	口・体外：磨滅	－	－
209	SD4	14L'6・17	土師器	椀	B	13.8	4.6	6.4	33		チ・長・英・赤	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	体内外：磨耗、二次焼成	－	－
210	SD4	14L'11	土師器	椀	C1	12.9	4.8	7.2	37		チ・長・英・赤	右	回転糸	ロクロナデ（体内：カキメ）	－	－	体内外・底：磨耗	－	－
211	SD4	14L'16・20	土師器	椀	C1	15.0	－	－	－		チ・英・赤	－	－	体外：ロクロナデ、体内上：ロクロナデ、体内中～下：カキメ	－	－	口端：磨耗	－	－

細田遺跡古代・中世土器観察表（3）

No.	遺構	グリッド	種別	器種	分類	口径	器高	底径・摘み径	器高指数	胎土群	胎土	回転方向	底部頂部調整	その他の調整	降灰	焼成	使用痕跡	転用痕跡	備考
212	SD4	14L'11・12	土師器	椀	C1	16.0	4.8	7.4	30		チ・長・雲・赤	右	回転糸	ロクロナデ、体内：カキメ	－	－	体内外：磨耗	－	－
213	SD4	14L'6・11・17	土師器	椀	C1	17.0	4.9	6.8	29		チ・長・赤	右	回転糸	ロクロナデ、内面：ミガキ	－	－	体外：磨耗	－	－
214	SD4	14L'11・12	土師器	椀	C2	17.2	6.4	7.4	37		チ・長・英	左	回転糸	ロクロナデ	－	－	口：部分的に磨耗、体外中・体内・見込み：磨耗	－	－
215	SD4	14L'6	土師器	椀	C?	－	－	7.0	－		チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	体内外：磨耗	－	－
216	SD4	14M'2・8	土師器	小甕	－	12.0	－	－	－		チ・長・雲・英	右	－	ロクロナデ	－	－	口内・体外：スス付着（黒化）	－	－
217	SD4	14L'11・21	土師器	小甕	－	－	－	6.4	－		チ・長・雲・英・赤	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	体内外・底：磨耗、体外：スス付着	－	－
218	SD4	14L'11・16・17	土師器	小甕	－	10.5	10.0	6.4	－		チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口内外：スス付着、体外：被熱（赤化）	－	－
219	SD4	14L'11・21	土師器	小甕	－	－	－	4.7	－		チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	体外：スス付着、体内：弱い磨耗	－	－
220	SD4	14L'11・21	土師器	内面黒色椀	－	15.0	－	－	－		チ・長・雲・英	右	－	体外下：ロクロケズリ、体外上：ロクロナデ、体内：ミガキ	－	－	体外：磨耗	－	－
221	SD4	14L'17	土師器	甕	－	20.7	－	－	－		チ・長・英・赤	－	－	体外：ナデ、体内：ナデ	－	－	－	－	－
222	SD4	14L'17	灰釉陶器	有台碗	－	－	－	9.0	－		白・堅緻	右	ロクロケズリ？	ロクロナデ	－	還硬	－	－	－
223		15P'12	須恵器	杯蓋	A	12.3	2.5	2.8	20	東	チ・白	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅱｂ類	還硬	摘み：欠け・磨耗	－	－
224		15O'21、15P'7	須恵器	杯蓋	A	16.8	4.1	3.2	24	西	チ・長・白（多）	右	ロクロケズリ	ロクロナデ、内面頂部：不整方向のナデ	単体？	還硬	口：欠け、体内：磨耗、摘み：欠け、磨耗	－	白色の小礫多い
225		15Q'20	須恵器	蓋	A	14.6	－	－	－	西	チ・長	左	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅰ類	還硬	体内外：磨耗（特に端部）	－	－
226		15P'13	須恵器	突帯付蓋	－	13.0	1.3	2.3	10	西	チ・長・英・白	左	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅱｂ類	還硬	摘み：欠け・磨耗、体外：磨耗	－	－
227		15P'28、15Q'1	須恵器	杯蓋	A	16.8	－	3.1	－	西？	チ・長・白	左	－	ロクロナデ、内面：不整方向のナデ	高台～口縁まで	還硬	口：欠け、体内：磨耗	－	外面上部に同心円状の条線・突帯あり
228		15O'16・21	須恵器	有台杯	D	16.4	－	－	－	西	チ・長・英	左	ロクロケズリ	ロクロナデ	ⅠかⅡ類	還硬	口：欠け、体内：磨耗	－	－
229		15O'21	須恵器	有台杯	C	－	－	8.0	－	西	チ・長・英	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅱ類	還硬	高台：細かな欠け	－	底部墨書（欠損により文字不明）
230		15O'16、15P'12	須恵器	有台杯	C	－	－	9.0	－	西	チ・赤・白	右	回転糸	ロクロナデ	－	還硬	体内：磨耗、高台：欠け	高台内に墨痕あり	－
231		15Q'20	須恵器	有台杯	A	13.8	5.2	7.4	38	東	チ・長	左	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅱｂ類	還硬	体外：磨耗	－	－
232		15Q'14	須恵器	有台杯	C	14.2	4.3	8.0	30	東	チ・長・英・白	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅱ類？	還硬	口：欠け、体内外・高台：弱い磨耗	－	－
233		15O'12・17	須恵器	有台杯	B	11.2	3.4	7.8	30	東	チ・長・白・針	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅱ類？	酸軟	口：欠け、体内：磨滅	－	－
234		15O'11	須恵器	有台杯	B	12.0	3.5	8.4	29	東	チ・白	左	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅲ類？	還硬	－	－	－
235		15O'21、15P'	須恵器	有台杯	B	10.4	3.7	7.4	36	西	チ・長	右	回転ヘラ後、ロクロケズリ	ロクロナデ	－	還硬	口・高台：欠け、体内外：磨耗	－	－
236		15P'12・13	須恵器	有台杯	B	11.0	3.6	8.3	33	西	チ・長・英・白・小礫	－	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅱ類	－	口：磨耗、見込み：弱い磨耗	－	底部墨書「凡」
237		14N'25、15O'16	須恵器	有台杯	B	10.8	3.7	9.0	34	西	チ・長・雲・英・赤・小礫	右	回転糸後、ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅱ類？	還硬	口・体内：磨耗	－	底部墨書「几」
238		15O'21・23、15P'2	須恵器	有台杯	B	15.6	6.7	11.0	43	西	チ・長・英	右	回転ヘラ後、ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅰ類？	還硬	体内：弱い磨耗	－	－
239		15O'16・17、15P'2・7	須恵器	有台杯	B	15.0	6.2	9.8	41	西	チ・長	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅱ類	還硬	体内・見込み：磨耗	－	－
240		15O'11、15P'2・6	須恵器	無台杯	A	12.8	3.1	8.4	24	東	チ・長・針	右	回転ヘラ後、板目圧痕	ロクロナデ	Ⅲ類（内面も）	還硬	体内外・見込み：磨耗	－	－
241		15Q'20	須恵器	無台杯	A	12.0	3.4	7.6	28	東	チ・長・英・針	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	体内外：磨耗	－	－
242		15O'16	須恵器	無台杯	A	11.0	3.5	7.3	32	西	チ・長・白	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	体外下：磨耗	－	－
243		15O'11	須恵器	無台杯	A	12.4	3.2	7.0	26	西	チ・長・雲	右	回転ヘラ	ロクロナデ	－	酸硬	－	－	－
244		14N'25、15O'6	須恵器	無台杯	A	13.0	3.7	9.0	28	西	チ・長・雲	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅲ類？	－	体内：磨耗	－	－
245		15O'16	須恵器	無台杯	A	12.0	3.7	7.4	31	東	チ・長・赤	右	回転ヘラ	ロクロナデ	－	酸硬	口・体内・見込み：磨耗	－	－
246		15P'12	須恵器	無台杯	A	12.8	3.9	5.0	30	東	チ・長・針	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅲ類？	還軟	口：欠け・磨耗	－	－
247		15P'8	須恵器	無台杯	A	12.0	3.1	8.3	26	東	チ・英・白	左	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅲ類？	還硬	口：磨耗	－	底部墨書「＋」
248		15P'7	須恵器	無台杯	B	11.8	3.4	6.0	29	西？	チ・英・白	－	回転糸	ロクロナデ	－	還軟	口：磨耗	－	－
249		15O'16	須恵器	無台杯	B	11.6	3.3	8.2	28	東	チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	酸軟	口：欠け、体内：磨耗	－	－
250		15O'1、15P'7	須恵器	無台杯	B	11.6	3.8	7.4	33	西	チ・長・英・白	右	回転糸	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	口：細かな欠け・磨耗	－	底部墨書「下」
251		15O'16	須恵器	無台杯	B	11.7	3.4	7.1	29	西	チ・長	右	回転糸	ロクロナデ	Ⅲ類？	還軟	口：欠け、体内：磨耗	－	8mm 大の小礫
252		15P'2	須恵器	無台杯	B	12.0	－	－	－	西	チ・長・雲・白	右？	－	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	口：磨耗	－	体外墨書「几几」？
253		15P'12	須恵器	無台杯	B	11.6	3.4	6.8	29	西	チ・長・雲	右	回転糸	ロクロナデ	Ⅲ類？	還軟	体内外・見込み：磨耗	－	－
254		14M'19、14N'17、15O'1、15P'9	須恵器	無台杯	B	－	－	7.0	－	東	チ・長・雲	右	回転糸	ロクロナデ	？	還軟	見込み：磨耗	－	見込み外縁に、棒状工具による沈線状の凹み
255		15P'7	須恵器	壺	－	9.0	－	－	－	西	チ・長・針	左	－	ロクロナデ	単体	還硬	－	－	－
256		15O'6	須恵器	小瓶	－	－	－	5.4	－	西？	チ・長・白	左	回転ヘラ	ロクロナデ	単体	還硬	－	－	黒色の吹き出し
257		15O'16	須恵器	小瓶	－	－	－	4.8	－	西？	チ・長・英	右	回転ヘラ	ロクロナデ、体外下：ロクロケズリ	単体	還硬	－	－	底外に「×」のヘラ記号
258		15Q'25	土師器	椀	D	14.8	－	－	－		チ・長・雲・英	右	－	ロクロナデ	－	－	口：磨耗	－	体外墨書「宮」
259		15O'16	土師器	椀	D	14.0	4.1	5.0	29		チ・長・雲・英	右	回転糸後、ナデ	ロクロナデ、体外下：ロクロケズリ	－	体外：黒斑あり	体外：磨耗、体内：細かな剥落	－	－
260		15Q'20	土師器	小甕	－	－	－	5.2	－		チ・雲・英・白	右	静止糸	ロクロナデ、体外下：ケズリ	－	－	体外：スス付着、体内：炭化物付着	－	－

細田遺跡古代・中世土器観察表（4）

No.	遺構	グリッド	種別	器種	分類	口径	器高	底径・摘み径	器高指数	胎土群	胎土	回転方向	底部頂部調整	その他の調整	降灰	焼成	使用痕跡	転用痕跡	備考
261		13G'20	須恵器	杯蓋	A	－	－	2.0	－	西	チ・長・白	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅰ類	還硬	摘み：弱い磨耗	－	黒色の吹き出し
262		13G'20	須恵器	杯蓋	A	－	－	2.8	－	東	チ・長・雲・英	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	－	還軟	摘み：磨耗	－	－
263		13K'8	須恵器	杯蓋	A?	13.2	－	－	－	東	チ・長・英	右	回転ヘラ後、板目圧痕	ロクロナデ	Ⅱｂ類	還軟	口：欠け	－	－
264		14O'5・10・14	須恵器	杯蓋	A	17.6	4.5	3.1	26	西	チ・長・英・白	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	Ⅰ類？	還硬	体外下：磨耗、摘み：磨耗	－	－
265		13J'11、13K'13	須恵器	杯蓋	B	－	－	4.3	－	西	チ・長・雲	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	－	還硬	摘み：欠け、体内：磨耗	－	内面頂部に板目圧痕
266		14P'25	須恵器	有台杯	A	－	－	8.6	－	西	チ・長・英・白（多）	右	回転ヘラ後、板目圧痕	ロクロナデ	単体？	還硬	高台：欠け・磨耗、見込み：磨耗	－	砂っぽいザラついた感じの土
267		14L'16	須恵器	有台杯	C	14.4	3.7	8.0	26	東	チ・長・英	右	回転ヘラ	ロクロナデ	－	還硬	口端：磨耗・細かな欠け、体内・高台：磨耗	－	－
268		13D'21	須恵器	有台杯？	B	11.4	－	－	－	西	チ・長・英	右	－	ロクロナデ	Ⅰ類？	還硬	内外：弱い磨耗	－	－
269		13G'20	須恵器	有台杯	B	－	－	9.8	－	西	チ・長・英	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅱ類？	還硬	体内：磨耗	－	－
270		13D'21	須恵器	有台杯	B	13.4	4.0	9.4	30	東	チ・白	右	回転ヘラ	ロクロナデ、見込み：不整方向のナデ	Ⅱ類？	還軟	高台：細かな欠け、体外：弱い磨耗	－	－
271		13D'14	須恵器	有台杯	B	12.6	3.2	6.8	25	東	チ・長・白	右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅱ類？	還硬	口：弱い磨耗	－	－
272		13G'14	須恵器	有台坏	D	－	－	6.4	－	小泊？	チ・長・白	右	回転ヘラ	ロクロナデ	－	還硬	－	－	底部に穿孔あり
273		13G'20	須恵器	有台杯	D	－	－	7.0	－	西	チ・長・雲・英	－	回転糸後、ロクロケズリ	ロクロナデ	－	還軟	－	－	底部墨書（欠損により文字不明）
274		13F'25	須恵器	有台杯	B	9.4	4.8	5.3	51	小泊Ⅳ～Ⅴ期	チ・長・白	左	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅲ類？	還硬	体外：磨耗、高台：細かな欠け	－	黒色を呈する
275		14N'19	須恵器	無台杯	A	12.2	3.8	7.8	31	東	チ・長	右	回転ヘラ・ナデ	ロクロナデ、内面：不整方向のナデ	Ⅲ類	還硬	磨耗	－	－
276		14N'19	須恵器	無台杯	A	13.0	3.9	9.0	30	東？	チ・長	左	回転ヘラ後、板目圧痕	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	口：欠け、体内：磨耗	－	－
277		14N'7	須恵器	無台杯	B	－	－	8.0	－	東	チ・白	右	回転ヘラ	ロクロナデ	－	還硬	見込み：磨耗	－	－
278		14L'22	須恵器	無台杯	B	14.0	－	－	－	西or小泊	チ・長	右	－	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	口：欠け、体内外：磨耗	－	－
279		13I'5	須恵器	無台杯	B	11.8	3.5	6.6	30	西	チ・長・白	右	回転糸	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	口内：磨耗、体外下：磨耗（スレ）	－	－
280		13H'13	須恵器	無台杯	B	13.0	3.8	6.2	29	西	チ・長・雲・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	還硬	口：磨耗、見込み：磨耗	－	底部墨書「凡」？
281		13H'6	須恵器	無台杯	B	12.2	3.3	6.5	27	西	チ・長・雲・英・小礫	右	回転糸	ロクロナデ	－	還軟	口・見込み：磨耗、底外：欠け・磨耗	－	底部墨書「人人」
282		13G'19	須恵器	無台杯	B	－	－	6.0	－	西	チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ	Ⅲ類？	還硬	－	－	底部墨書「人人」
283		13G'15	須恵器	無台杯	B	－	－	7.4	－	西	チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ	Ⅲ類？	還硬	体内：磨耗	－	底部墨書「人人」
284		13G'20	須恵器	無台杯	B	－	－	7.0	－	西	チ・長	右	回転糸	ロクロナデ	－	還軟	－	－	底部墨書「人人」
285		13L'15	須恵器	無台杯	C	12.0	－	－	－	小泊	チ・長・英・白	右？	－	ロクロナデ	－	還硬	口：磨耗	－	体外墨書（欠損により文字不明）黒色の吹き出しあり
286		14J'11・16・21	須恵器	無台杯	C	12.0	2.8	7.4	23	小泊	チ・長・英	水挽き左、切りはなし右	回転ヘラ	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	口：磨耗	－	黒色の吹き出し
287		14O'10	須恵器	円面硯	－	11.0	－	－	－	西	チ・長・英	左	－	ロクロナデ	単体	還硬	－	－	黒色の吹き出し
288		13H'4	須恵器	小型壺	－	5.0	5.0	丸形	－	西？	チ・長・白	右	回転ヘラ	ロクロナデ	単体	還硬	口：弱い磨耗	底部に穿孔あり	黒色の吹き出し
289		14M'18	須恵器	小瓶	－	5.0	－	－	－	西？	チ・英・白	右	－	ロクロナデ	単体（内面にはない）	還硬	－	－	－
290		13H'24	須恵器	長頸瓶	－	8.2	－	－	－	東？	チ・長・英	右？	－	ロクロナデ	単体（内外に自然釉）	還硬	口外：器面剥落・磨耗	－	提瓶？
291		13G'19・25	須恵器	長頸瓶	－	9.1	－	－	－	東	チ・長・英	右	－	ロクロナデ	単体	還硬	口：磨耗	－	赤紫味を帯びた色調
292		14L'24	須恵器	長頸瓶	－	－	－	－	－	西	チ・長	右	－	ロクロナデ	単体	還硬	－	－	－
293		13G'20・24	須恵器	長頸瓶	－	－	－	－	－	東	チ・長・英	右？	－	ロクロナデ	単体	還硬	－	－	体外に自然釉
294		14L'17、14N'25	須恵器	長頸瓶	－	－	－	8.0	－	小泊	白	左	回転ヘラ	ロクロナデ	単体	還硬	体外：弱い磨滅、高台：欠け	－	黒色の吹き出し
295		14L'17、14M'3	須恵器	長頸瓶	－	－	－	7.3	－	東	チ・長・白	右	回転糸	ロクロナデ	単体	還硬	高台：欠け	－	－
296		14L'22	須恵器	長頸瓶	－	－	－	13.2	－	東	チ・長・英	右	回転ヘラ	ロクロナデ	単体	還硬	高台：弱い磨耗	－	－
297		13I'5、13J'5	須恵器	長頸瓶	－	－	－	10.6	－	？	チ・長・雲・英	左	回転ヘラ	ロクロナデ、体外下：ロクロケズリ	－	－	体外：磨耗、高台：欠け	－	高台に板目状の圧痕瓦器様の黒色の発色がみられる
298		13J'17	須恵器	甕	－	20.0	－	－	－	東	チ・長・英・白	右	－	ロクロナデ	単体	還硬	口外：欠け	－	－
299		14L'12	須恵器	甕	－	22.4	－	－	－	西	チ・長・英	右	－	ロクロナデ、体外：タタキ、体内：同心円当て具痕	単体	還硬	体外：磨耗	－	－
300		13L'15	須恵器	甕	－	－	－	－	－	東	チ・長・英	右	－	体外：カキメ・横方向タタキ、体内：ナデ・同心円当て具痕	単体？	還硬	体外：磨耗	－	－
301		14M'17	須恵器	突帯付壺	－	－	－	－	－	西	チ・長・白	－	－	体外：タタキ、体内：ナデ	単体？	還硬	－	－	－
302		13C'13	緑釉陶器	壺蓋？	－	－	－	3.8	－		精緻	－	－	体外：ナデ、体内：ナデ	－	－	体外：磨耗？	－	－
303		14K'6	土師器	無台椀	－	15.2	－	－	－		チ・雲・英	右	－	ロクロナデ	－	－	体内外下半：磨耗	－	－
304		14J'20	土師器	無台椀	－	－	－	4.9	－		チ・赤・白	－	回転糸	ロクロナデ	－	－	体外：磨耗	－	－

細田遺跡古代・中世土器観察表（5）

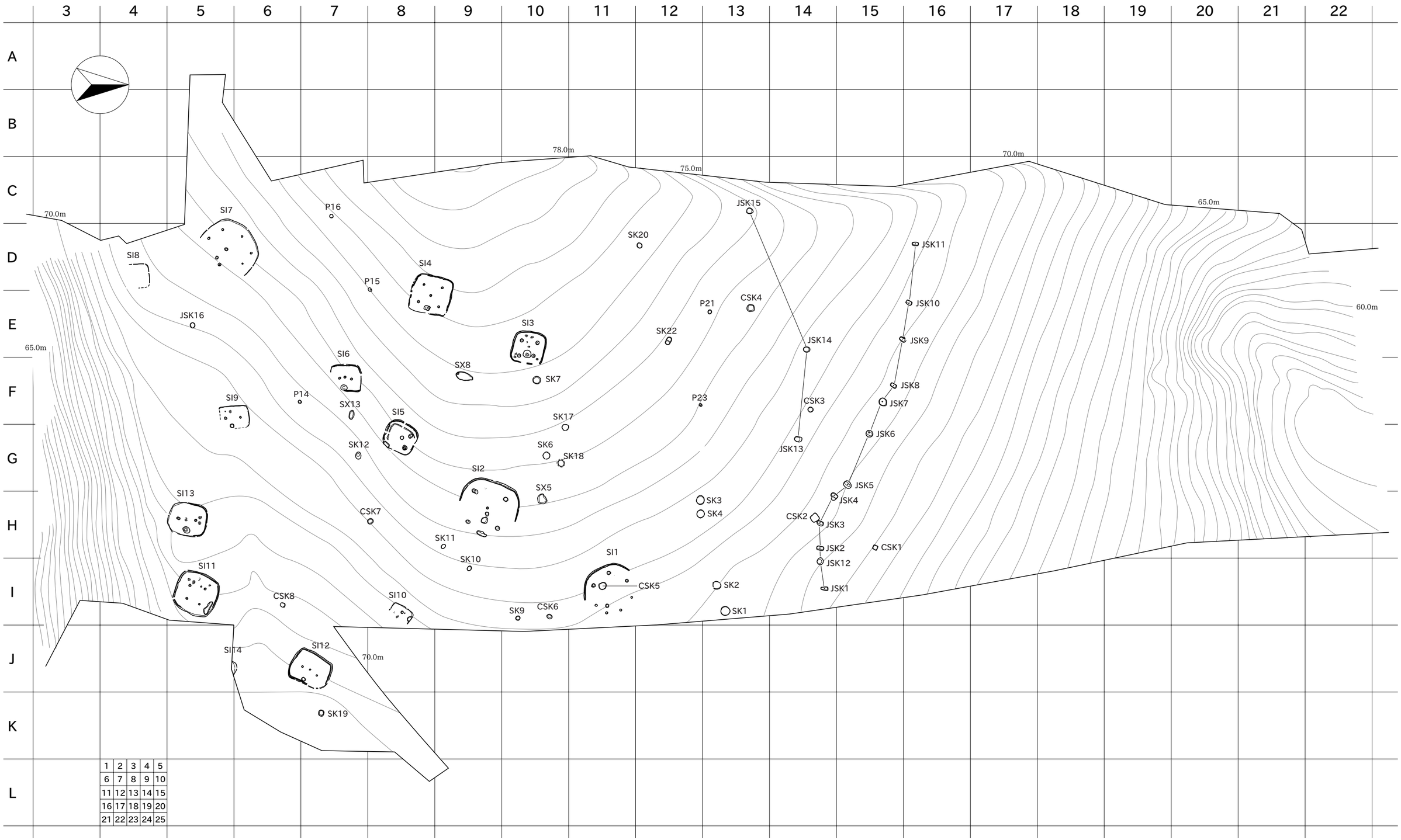
黒笹90号－猿投窯黒笹90号窯［楢崎1976］

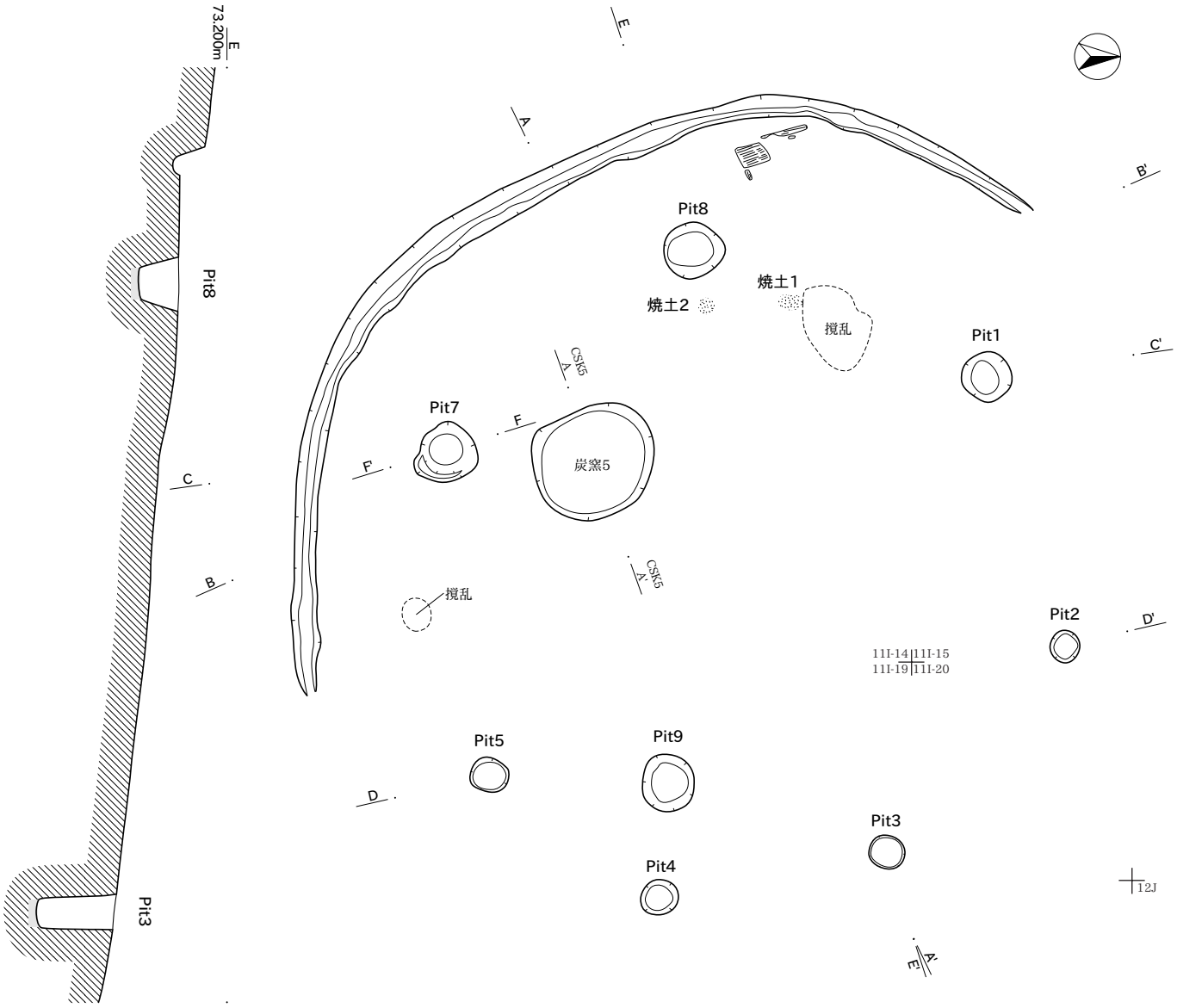
No.	遺構	グリッド	種別	器種	分類	口径	器高	底径・摘み径	器高指数	胎土群	胎土	回転方向	底部頂部調整	その他の調整	降灰	焼成	使用痕跡	転用痕跡	備考
305		13J'18	土師器	有台椀	－	－	－	6.5	－		チ・長・雲・英	右	－	ロクロナデ	－	－	高台：磨耗・欠け	－	高脚高台
306		13K'10、14K'1・6	土師器	内面黒色処	－	12.8	4.3	6.0	34		チ・長・雲・英	右	回転糸後、ロクロケズリ	ロクロナデ、体内：ミガキ（黒色処理）	－	－	体内外：磨耗	－	－
307		14J'20	土師器	内面黒色処	－	15.1	5.1	5.8	34		チ・長・雲・英	右	回転糸後、ロクロケズリ	ロクロナデ、体外下：ロクロケズリ、体内：ミガキ（黒色処理）	－	－	口端・体内下：磨耗	－	－
308		14K'1	土師器	甕	－	18.8	－	－	－		チ・長・雲・英・赤	右	－	ロクロナデ、カキメ（スリナデ状のもの）	－	－	口内外：磨耗	－	－
309		14K'1	土師器	甕	－	22.0	－	－	－		チ・長・雲・英	－	－	ロクロナデ	－	－	被熱（赤化）	－	－
310		14N'19・20	土師器	鍋	－	15.0	－	－	－		チ・長・雲・英・小礫	右	－	ロクロナデ、体外下：ケズリ	－	－	体外：スス付着（全面）	－	－
311		14L'17	灰釉陶器	碗	－	16.4	－	－	－		－	左？	－	ロクロナデ	Ⅲ類？	還硬	口：細かな欠け・磨耗	－	黒色の吹き出しあり。黒笹90号か
312		13K'14	灰釉陶器	碗	－	18.0	－	－	－		－	－	－	ロクロナデ、体外下：ロクロケズリ	－	－	－	－	－
313		14K'1	灰釉陶器	碗	－	16.2	－	－	－		白	右	－	ロクロナデ	－	還硬	－	－	－
314		カクニン	灰釉陶器	碗	－	－	－	－	－		長・白	右	－	ロクロナデ、体外下：ロクロケズリ	Ⅲ類？	還硬	－	－	黒笹90号2段階?内外面灰釉
315		13G'14	灰釉陶器	碗	－	－	－	8.0	－		長？・白	右	ロクロケズリ	ロクロナデ	－	還硬	－	－	－
316		13J'25	灰釉陶器	皿	－	14.0	－	－	－		－	－	－	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	体内外：磨耗	－	黒笹90号　2段階？内外面灰釉
317		14M'8	灰釉陶器	皿	－	14.8	－	－	－		長	左？	－	ロクロナデ	Ⅲ類	還硬	体内：弱い磨耗	－	内外面灰釉
318		15O'	灰釉陶器？	長頸壺	－	9.5	－	－	－		長・白	右	－	ロクロナデ	単体	還硬	口：細かな欠け	－	－
319		14M'8	中世土師器	皿	－	－	－	3.4	－		チ・雲・英	左？	回転糸	ロクロナデ	－	－	－	－	柱状高台
320		13H'20	中世土師器	皿	－	－	－	4.0	－		チ・長・雲・英	左？	回転糸	ロクロナデ	－	－	－	－	柱状高台
321		14J'20	中世土師器	皿	－	－	－	5.0	－		チ・雲・英	左？	回転糸	ロクロナデ	－	－	体内外：スス付着	－	柱状高台
322		14J'20	中世土師器	皿	－	－	－	4.8	－		チ・雲・白	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	体外：磨耗、体内：被熱（赤化）	－	－
323		14J'20	中世土師器	皿	－	－	－	5.0	－		チ・長・英	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	－	－	－
324	SK36	14C'7・8	中世土師器	皿	－	7.8	2.1	5.8	27		チ・長・雲	右	回転糸	ロクロナデ	－	－	口：タール付着、内外面：スス付着	－	混入か
325		14M'8	中世土師器	皿	－	8.4	1.7	3.3	20		雲・白	－	－	ナデ	－	－	体外：被熱（黒化）、体内：炭化物塊付着	－	京都系土師皿
326		13D'20	中世土師器	皿	－	9.0	－	－	－		雲・白	－	－	ナデ	－	－	－	－	京都系土師皿
327		14L'2	白磁	碗	－	－	－	2.8	－		緻密	－	回転糸後、ロクロケズリ	見込みに穀あり、黄色味を帯びた白色の釉、表面に貫入	－	－	－	－	大宰府Ⅱ類畳付～体外下、釉ハギ
328		15O'6	青磁	碗	－	－	－	5.4	－		緻密	－	回転糸後、ロクロケズリ	畳付～高台内：無釉	－	－	－	－	－
329		15O'21	青磁	蓮弁文碗	－	15.6	－	－	－		白	－	－	－	－	－	体外：擦痕	－	－
330		13C'17	瀬戸美濃焼	天目碗	－	－	－	－	－		長・英・白	－	－	体外：鉄釉	－	－	体外：擦痕	－	－
331		13I'5	瀬戸美濃焼	皿	－	9.0	2.2	5.4	－		白	－	回転糸	ロクロナデ、ナデ	－	－	体内外：擦痕	－	－
332		14L'2	瀬戸	鉢	－	30.0	－	－	－		チ・長・白	－	－	ロクロナデ、黄緑色の釉かかる	－	－	口：磨耗	－	－
333		14M'8	珠洲焼	擂鉢	－	27.0	－	－	－		長・白・針	－	－	ロクロナデ	－	還硬	口：細かな欠け・磨耗	－	－
334		15P'17	珠洲焼	擂鉢	－	－	－	8.6	－		チ・長	右	回転糸	ロクロナデ	単体	還硬	体内外：磨耗	－	－
335		14G'11	珠洲焼	擂鉢	－	－	－	9.8	－		チ・長・赤・白・針	－	静止糸？	ロクロナデ	－	－	体内：磨耗	－	－
336		15Q'25	珠洲焼	擂鉢	－	26.4	－	－	－		チ・長・白・針	右	－	ロクロナデ	－	還硬	体内：弱い磨耗	－	12条1単位の卸目
337		13I'5	珠洲焼	擂鉢	－	31.4	－	－	－		チ・長・白・針	右	－	ロクロナデ	－	還硬	体内外：磨耗	－	－
338		15P'11	珠洲焼	擂鉢	－	34.0	－	－	－		チ・長・白・針	右？	－	ロクロナデ	－	還硬	体内外：弱い磨耗	－	10条以上1単位の卸目
339		13C'14	珠洲焼	擂鉢	－	－	－	9.6	－		チ・長・白・針	右？	静止糸	ロクロナデ	－	還硬	体内外：磨耗、体内下部：剥離	－	15条1単位の卸目が密に入る
340		13I'5	珠洲焼	擂鉢	－	－	－	14.0	－		チ・長・白・針・小礫	－	静止糸？	ロクロナデ	－	還硬	体内外：磨耗、体内下部：剥離	－	－
341		14G'11	珠洲焼	擂鉢	－	－	－	14.0	－		チ・長・白	－	静止糸？	ロクロナデ	－	還硬	体内・底部：磨耗、断面漆接ぎ	－	－
342		15Q'20	珠洲焼	擂鉢	－	－	－	15.0	－		チ・白・小礫	－	静止糸	ロクロナデ	－	還硬	体内：磨耗	－	不整方向の太い卸目
343		13L'4	珠洲焼	壺	－	－	－	－	－		チ・白・小礫	－	－	外面：平行タタキ、内面：無文の当て具痕	－	還硬	－	－	－
344		SK36	珠洲焼	甕	－	－	－	－	－		白	－	－	外面：平行タタキ、内面：無文の当て具痕	－	還硬	－	－	－
345		13C'14	珠洲焼	甕	－	－	－	－	－		白・針	－	－	外面：平行タタキ、内面：無文の当て具痕	－	還硬	－	－	－
346		13L'8	珠洲焼	甕	－	－	－	－	－		針（多）	－	－	外面：平行タタキ、内面：無文の当て具痕	－	還硬	－	－	－
347		14G'11	珠洲焼	甕	－	－	－	－	－		白・針	－	－	外面：平行タタキ、内面：無文の当て具痕	－	還硬	体内：スス付着	－	－
348		14K'1	中世土師器？	鍋	－	32.0	－	－	－		チ・長・雲・英	－	－	ロクロナデ、体外下：ケズリ	－	－	体外：スス付着、体内：一部被熱（黒化）	－	－

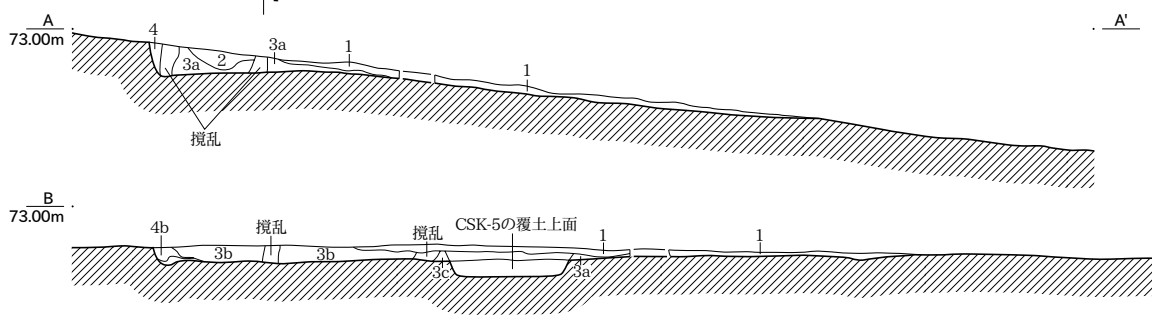
細田遺跡　近世陶磁器観察表

No.	グリッド	種別	器種	口径	器高	底径	製作痕跡	釉薬	施釉部位	文様	備考
352	15P'8	肥前系磁器	丸碗	10.2	－	－	ロクロナデ	透明釉	内外面施釉	外面草花文	外面唐草文　V-2　1750～1770？
353	15Q'	肥前系磁器	仏飯器	－	－	3.4	ロクロナデ	透明釉	畳付以外全面施釉	幾何学模様・圏線	Ⅳ　1690～1780？
354	15P'17	京焼系陶器	皿	12.0	－	4.2	ロクロナデ	高台内鉄釉、内外面透明釉、貫入あり	高台内鉄釉、畳付釉なし	無文	－
355	13H'5	肥前系陶器	碗	－	－	4.5	ロクロナデ	透明釉	体内白泥塗り？、畳付以外全面施釉		Ⅳ
356	13C'18	越中瀬戸焼	皿	13.2	－	－	ロクロナデ	鉄釉	内外面：鉄釉	無文	－
357	13L'4	越中瀬戸焼	広口壺	10.2	－	－	ロクロナデ	鉄釉	内外面：鉄釉	無文	－
358	13H'8	越中瀬戸焼	広口壺	10.0	－	－	ロクロナデ	鉄釉	内外面：鉄釉	無文	－
359	15O'16	越中瀬戸焼	広口壺	13.0	－	－	ロクロナデ	鉄釉	内外面：鉄釉	無文	－

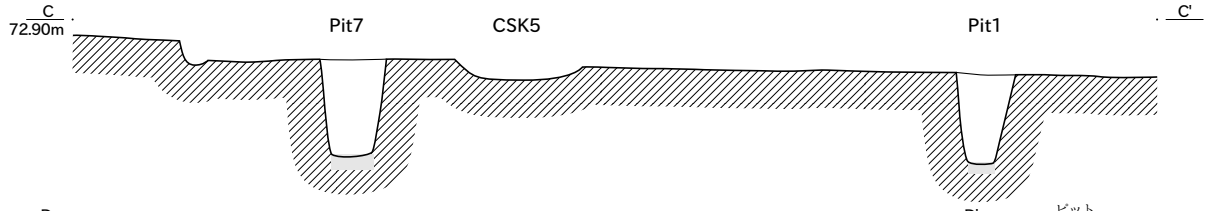
図　　版

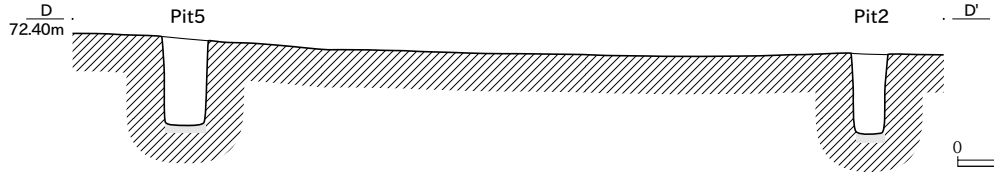

3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
78.0m
75.0m
70.0m
65.0m
60.0m
SI7
SI8
P16
P15
SI4
SK20
JSK15
JSK11
JSK16
SI3
P21
CSK4
JSK10
SK22
JSK14
JSK9
SI6
SX8
SK7
JSK8
SI9
P14
SX13
SI5
P23
CSK3
JSK7
SK17
JSK6
SK12
SK6
SK18
JSK13
SI2
SX5
JSK5
SI13
SK3
JSK4
CSK7
SK4
CSK2
JSK3
SK11
JSK2
CSK1
SK10
SI1
JSK12
SI11
CSK5
SK2
JSK1
CSK8
SI10
SK9
CSK6
SK1
SI14
SI12
SK19
1 2 3 4 5
6 7 8 9 10
11 12 13 14 15
16 17 18 19 20
21 22 23 24 25
0
(1 : 500)
25m





1　耕作土　　炭化物粒（径1mm以下）少量含む。しまり強く、粘性なし。
2　褐灰色土　（10YR4/1）　炭化物粒（径1mm以下）含む。３層より堅く、粘性なし。
3a 明褐色土　（7.5YR6/6）　炭化物粒（径1～5mm以下）含む。しまり、粘性強い。
3b 基本的に3a層と同じ。　炭化物粒（径1～5mm以下）3a層より多く含む。
3c 明褐色土　（7.5YR5/6）　炭化物粒（径1mm以下）3a層より少量。堅さ3a層と同じくらい。粘性3a層より強い。
4　明褐色土　（7.5YR5/6）　炭化物粒（径1mm以下）わずかに含む。周溝より流入。３層よりやや堅い。粘性は3a・４b層よりやや強い。
4b 基本的に4層と同じ。
4c にぶい褐色土（7.5YR5/4）　基本的４層に同じだが若干色調が暗い。

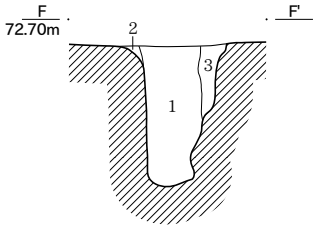




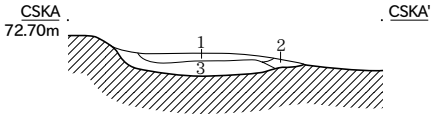
ピット
Pit2　炭化粒・炭化材を多く含む。
Pit3　炭化粒（直径8mm以下）を多く含む。
Pit4　炭化粒（直径5mm以下）を多く含む。
Pit5　炭化粒（直径5mm以下）を多く含む。
Pit8　炭化粒（直径10mm以下）を多く含む。

0　（1：60）　3m

1号竪穴実測図（2） 1号竪穴遺物出土位置図



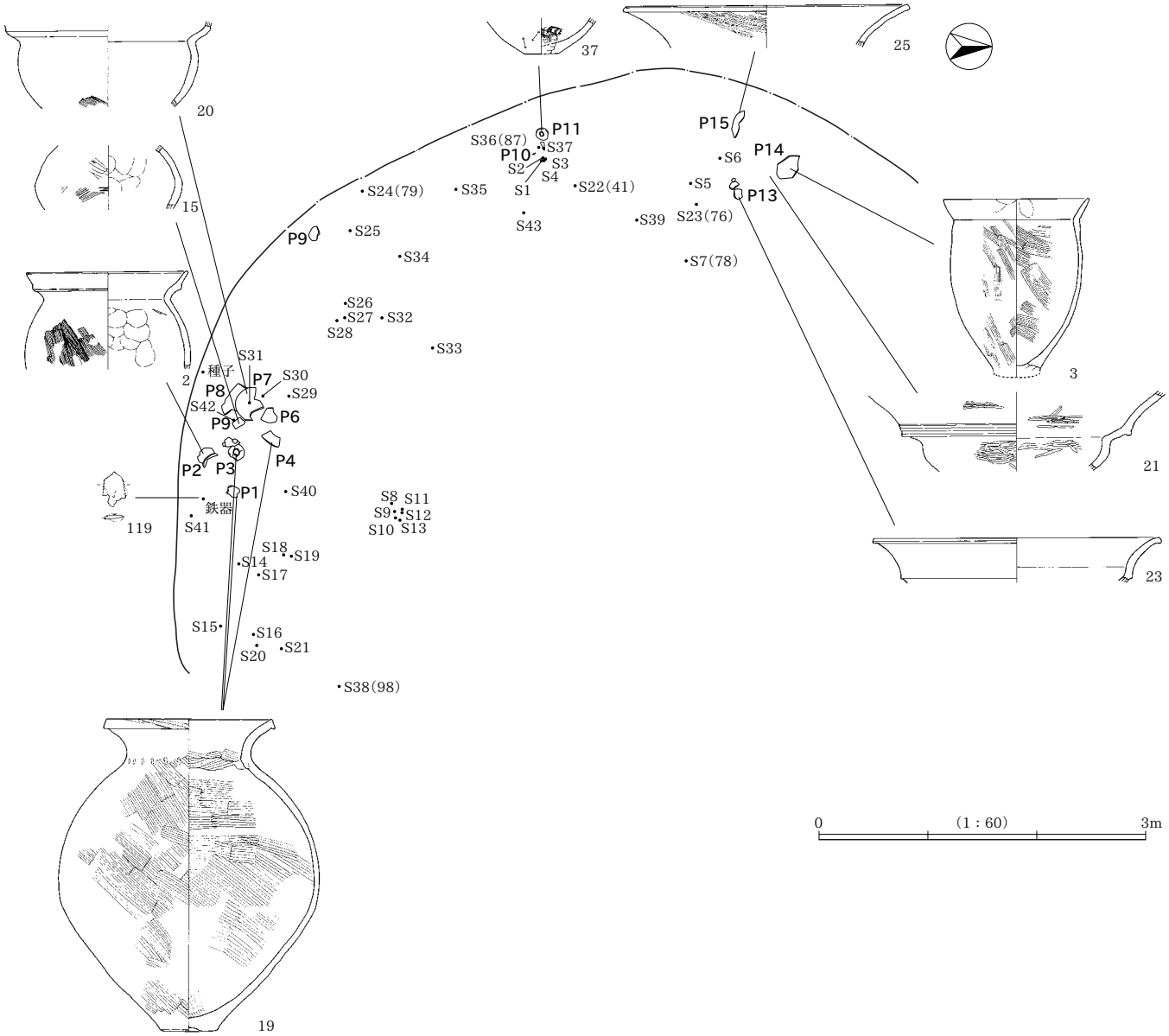
Pit7
1 褐色土 （7.5YR4/6） 柱状の炭化物（長さ10mm以下）特に多く含む。層下部はしまりなし。
2 明褐色土（7.5YR5/8） 炭化物粒（径3mm以下）少量含む。
3 明褐色土（7.5YR5/8） 炭化物粒（径1mm以下）極少量含む



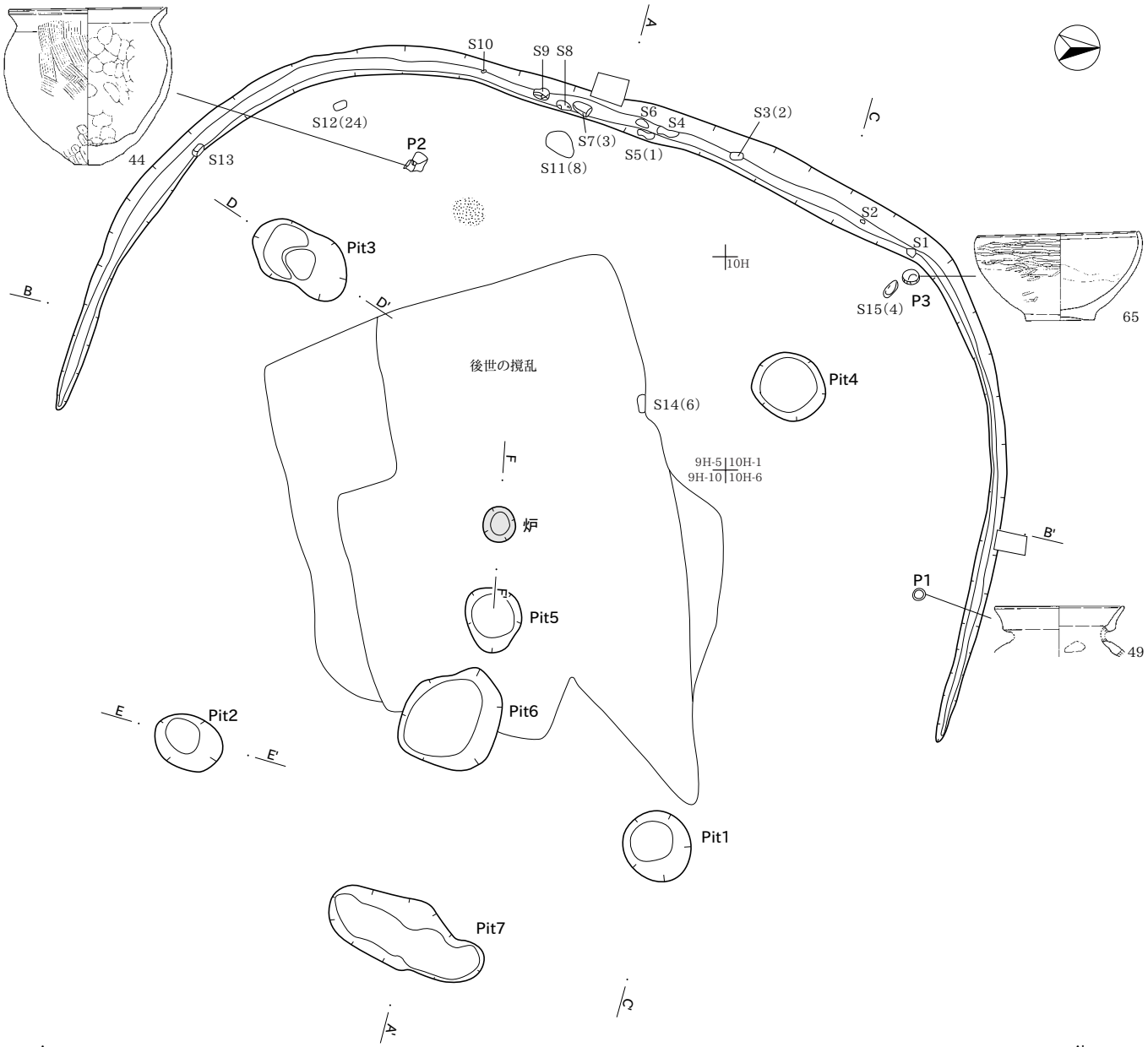
CSK（炭窯）5
1 褐色土 （7.5YR4/6） 微細な炭化物粒を少量含む。炭化材（長12 以下）・焼土粒（径10 以下）多く含む。
2 ごく暗褐色土（7.5YR2/3） 微細な炭化物粒を主とする層。炭化材（長7 以下）特に多く含む。
3 暗褐色土 （7.5YR3/4） 微細な炭化物粒・炭化材（長3～5 程度）・焼土粒（径1 以下）多く含む。

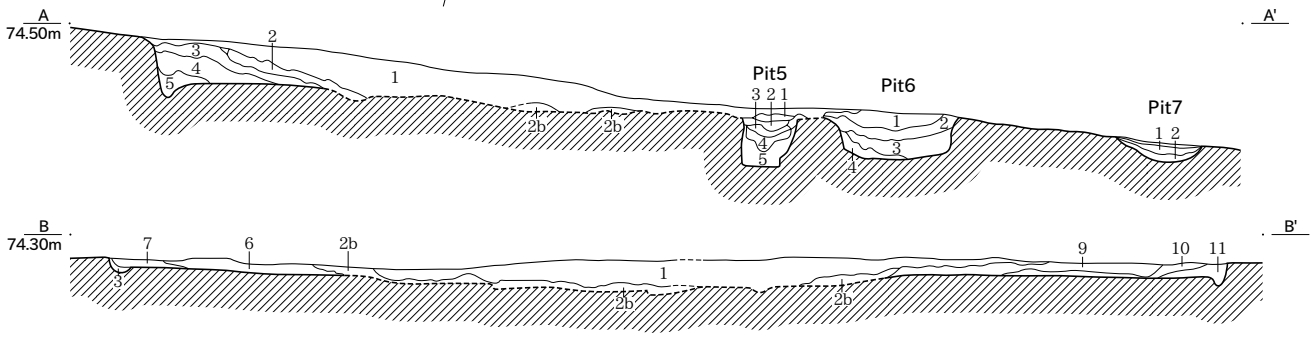
0 （1：40） 2m

1号竪穴遺物出土位置図



2号竪穴実測図（1） 2号竪穴遺物出土位置図





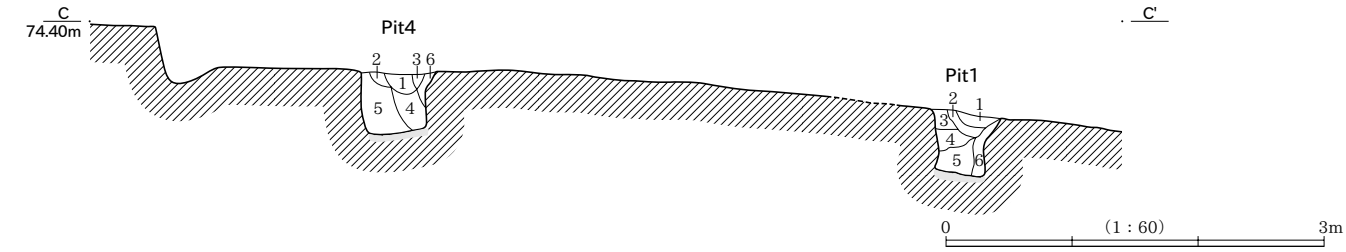
A・Bライン
1 明褐色土（7.5YR5/6） 耕作土。褐色土粒と暗褐色土粒がまだらに混じる。炭化物粒（径1～2mm程度）少量含む。
2 褐色土層（7.5YR4/4） 耕作により撹乱・踏固められた土層。炭化物粒（径3mm以下）多く含む。焼土粒（径3mm以下）少量含む。III層土粒（径2mm以下）多く含む。しまり強い。
2b 明褐色土（7.5YR5/8） III層（地山層）が撹乱、踏固められた土層。
3 褐色土 （7.5YR4/4） 色調、混入物は2層とほぼ同様。
4 明褐色土（7.5YR5/6） 炭化物粒（径5mm以下）少量含む。焼土粒（径5mm以下）極少量含む。しまり弱い。
5 褐色土 （7.5YR4/6） 炭化物粒（径8mm以下）多く含む。焼土粒（径2mm以下）極少量含む。しまり弱い。
6 褐色土 （7.5YR4/4） 炭化物粒（径2mm以下）多く含む。焼土粒（径2mm以下）多く含む。
7 明褐色土（7.5YR5/6） 基本的に3層と同じ土層。炭化物粒（径2mm以下）少量含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。
8 褐色土 （7.5YR4/6） 炭化物粒（径8mm以下）多く含む。焼土粒（径2mm以下）極少量含む。
9 褐色土 （7.5YR4/4） 基本的に3層と同じ土層。炭化物粒（径4mm以下）多く含む。炭化材（径8mm程度）まばらに含む。
10 明褐色土（7.5YR5/6） 炭化物粒（径2mm以下）少量含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。
11 褐色土 （7.5YR4/6） 炭化物粒（径8mm以下）多く含む。焼土粒（径2mm以下）極少量含む。

Pit 5
1 明黄褐色土（10YR6/6） 炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。堅く締まる。
2 明黄褐色土（10YR6/6） 炭化物粒（径1mm以下）まばらに含む。堅く締まる。
3 灰黄褐色土（10YR4/2） 炭化物粒（径1mm以下）多く含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。堅く締まる。
4 黒褐色土 （7.5YR3/1） 炭化物粒（径1mm以下）多く含む。地山土粒（径8mm以下）まだらに少量含む
5 褐灰色土 （10YR4/1） 地山土を主とし、黒褐色土層がまだらに混じる。炭化物粒（径3mm以下）多く含む。

Pit 6
1 黒褐色土 （7.5YR3/2） 炭化物粒（径1mm以下）多く含む。堅く締まる。
2 黄褐色土 （10YR5/6） 炭化物粒（径3～5mm程度）まばらに含む。炭化物粒（径2mm以下）多く含む。
3 黒褐色土 （10YR3/2） 炭化物粒（径3～5mm程度）まばらに含む。炭化物粒（径3mm以下）多く含む。地山土粒（径15mm以下）まだらに多く混じる。
4 明黄褐色土（10YR7/6） 地山土を主とする。炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。

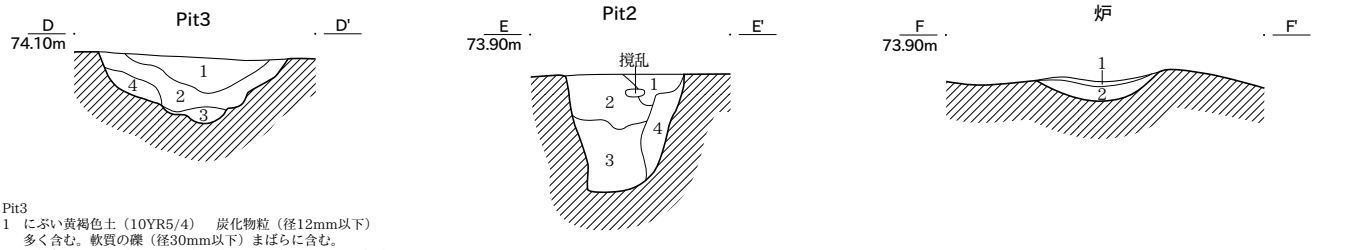
Pit 7
1 にぶい黄褐色土（10YR4/3） 炭化物粒（径1mm以下）まばらに含む。
2 明黄褐色土 （10YR6/6） 地山土を主とする。炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。

0 （1：60） 3m



Pit 4
1　黒褐色土　(7.5YR3/1)　炭化物粒（径3mm以下）・炭化粉を特に多く含む。焼土粒（径4mm以下）極少量含む。
2　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　炭化物粒（径1mm以下）少量含む。
3　２層と近似した土層。
4　明褐色土　(7.5YR5/6)　炭化物粒（径4mm程度）まばらに含む。炭化物粒（径2mm以下）少量含む。しまり弱い。
5　明黄褐色土　(10YR6/6)　柱穴の埋め土と思われる。炭化物粒（径2mm以下）少量含む。
6　明黄褐色土　(10YR6/6)　柱穴の埋め土と思われる。混入物をほとんど含まない。

Pit 1
1　黒褐色土　(7.5YR3/1)　炭化物粒（径8mm以下）・炭化粉を特に多く含む。地山土粒（径15mm以下）まばらに含む。焼土粒（径3mm以下）少量含む。
2　にぶい橙色土　(7.5YR6/4)　焼土粒（径3mm以下）少量含む。地山土粒（径8mm以下）まばらに含む。
3　黄褐色土　(10YR5/6)　混入物をほとんど含まない。
4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　炭化物粒（径2mm以下）まばらに含む。
5　明黄褐色土　(10YR6/6)　炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。
6　５層とほぼ同じ。柱穴の埋め土と思われる



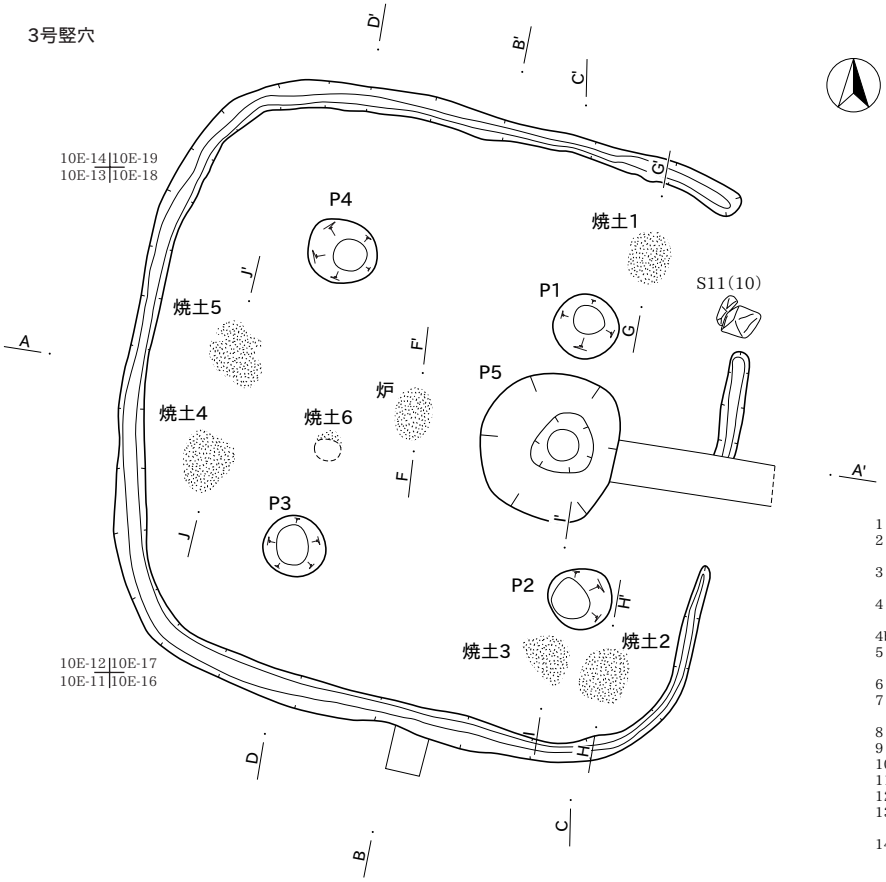
Pit3
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　炭化物粒（径12mm以下）多く含む。軟質の礫（径30mm以下）まばらに含む。
2　黒褐色土　(7.5YR3/1)　炭化物粒（径10mm以下）多く含む。地山中の軟質の礫（径20mm以下）まばらに含む。
3　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　地山土を主に少量の黒褐色土が混じる。地山中の軟質の礫が混じる。炭化物粒（径2mm以下）少量含む。
4　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　3層とよく近似する。色調は３層よりやや明るい。

Pit2
1　黒褐色土　(7.5YR3/1)　炭化物粒（径15mm以下）多く含む。焼土粒（径3mm以下）多く含む。地山土粒（径15mm以下）まばらに含む。
2　にぶい橙色土（7.5YR6/4）　炭化物粒（径1mm以下）まばらに含む。
3　にぶい橙色土（7.5YR6/4）　炭化物粒（径1mm以下）まばらに含む。
4　明黄褐色土　(10YR6/6)　柱穴の埋め土と思われる。炭化物粒（径0.5mm以下）極少量含む。

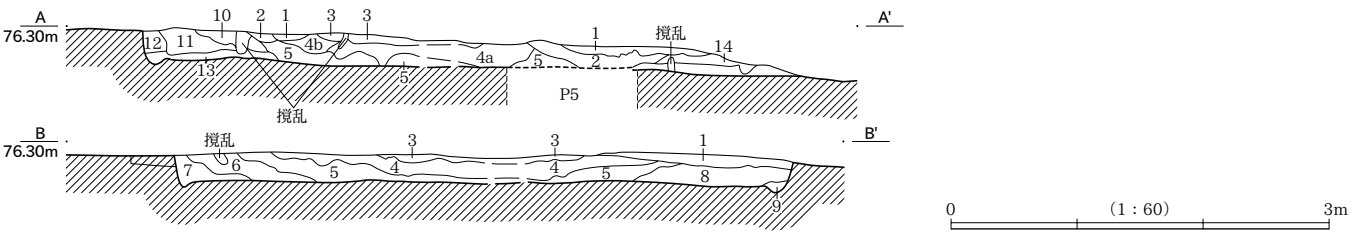
炉
1　黒色土　(7.5YR2/1)　炭化粉を主とする。
2　極暗褐色土（7.5YR2/3）　炭化物粒（径8mm以下）特に多く含む。焼土粒（径8mm以下、赤化していないものも含む）多く含む。

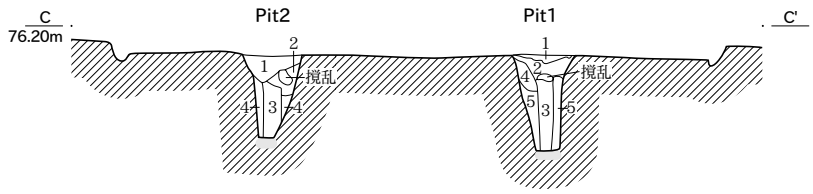
(D・E)　0　(1：40)　2m
(F)　0　(1：20)　1m

3号竪穴



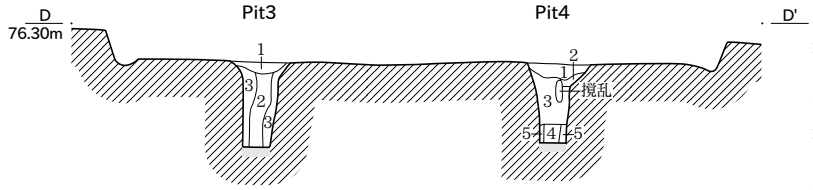
1　耕作土。　炭化物粒（径1mm以下）少量含む。
2　褐色土　(7.5YR4/4)　搬乱・踏固められた土。炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。
3　暗褐色土（7.5YR3/3）　炭化物粒（径2mm以下）・炭化材（径8mm程度）少量含む。
4　明褐色土（7.5YR5/6）　炭化物粒（径2mm以下）・炭化材（径8mm程度）少量含む。
4b 褐色土　(7.5YR4/6)　４層と近似する。色調は４層よりやや暗い。
5　褐色土　(7.5YR4/4)　炭化物粒（径2mm以下）多く含む。炭化材（径10mm程度）まばらに含む。焼土粒（径3mm以下）極少量含む。
6　褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径5mm以下）少量含む。
7　褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径2mm以下）・炭化材（径10mm程度）少量含む。
8　褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径3mm以下）含む。
9　褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。
10 褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径5mm以下）少量含む。
11 褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径5mm以下）多く含む。
12 明褐色土（7.5YR5/8）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。
13 褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径2mm以下）少量含む。焼土粒（径2mm以下）極少量含む。
14 褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径2mm以下）少量含む。炭化物粒（径2mm以下）・炭化材（径10mm程度）少量含む。





Pit 1
1　暗褐色土（7.5YR3/4）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒（径2mm以下）少量含む。
3　褐色土　（7.5YR4/6）　柱根。混入物をほとんど含まない。特にしまり弱い。
4　明褐色土（7.5YR5/8）　埋土と思われる。炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。
5　明褐色土（7.5YR5/8）　埋土と思われる。混入物をほとんど含まない。しまり弱い。

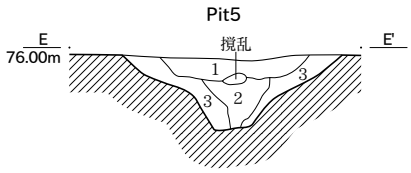
Pit2
1　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒（径3～5mm程度）少量含む。
2　明褐色土（10YR5/8）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。しまり弱い。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　柱根。炭化物粒（径5mm以下）多く含む。特にしまり弱い。
4　褐色土　（10YR4/6）　埋土と思われる。混入物をほとんど含まない。しまり弱い。



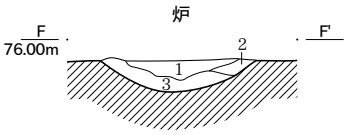
Pit 3
1　褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒（径1mm以下）少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/6）　柱根。炭化物粒（径2mm以下）多く含む。特にしまり弱い。
3　暗褐色土（7.5YR5/8）　埋土と思われる。混入物をほとんど含まない。しまりは弱い。

Pit 4
1　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。
3　明褐色土（7.5YR5/8）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。しまり弱い。
4　暗褐色土（7.5YR3/3）　柱根。炭化物粒（径2mm以下）多く含む。特にしまり弱い。
5　褐色土　（7.5YR4/6）　埋土と思われる。混入物をほとんど含まない。しまり弱い。

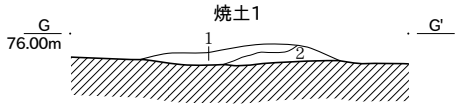
0　（1：60）　3m



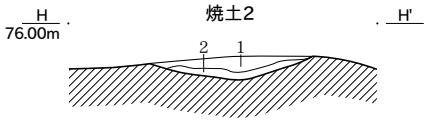
Pit 5
1　褐色土（7.5YR4/3）　炭化物粒（径3mm以下）少量含む。炭化材（径5～10mm程度）極少量含む。
2　褐色土（7.5YR4/4）　炭化物粒（径3mm以下）少量含む。
3　褐色土（10YR4/6）　炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。



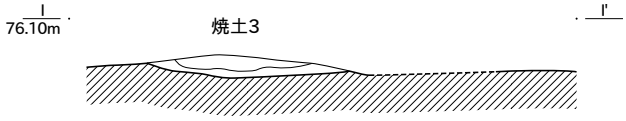
炉
1　暗褐色土　（7.5YR3/4）　炭化物粒（径1mm以下）多く含む。炭化材（径3～5mm程度）少量含む。焼土粒（径7mm以下）まばらに含む。焼土粒（径4mm程度、赤化していない）極まばらに含む。
2　褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。焼土粒（径4mm程度）極まばらに含む。
3　暗赤褐色土（2.5YR3/6）　硬化した焼土ブロック層。炭化物粒（径3mm以下）極少量含む。



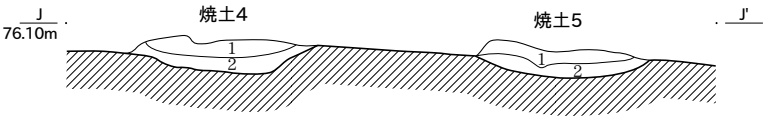
焼土1
1　赤褐色土（10R4/6）　硬化した焼土ブロック層。炭化物粒（径1mm以下）少量含む。炭化材（径3mm程度）まばらに含む。
2　黄褐色土（10YR5/8）　炭化物粒（径1mm以下）多く含む。炭化材（径4mm程度）少量含む。



焼土2
1　赤褐色土（10R4/4）　硬化した焼土ブロック層。炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。
2　黄褐色土（10YR5/8）　赤化していないが硬化した」層土。



焼土3
1　暗赤色土（10R3/4）　硬化した焼土ブロック層。炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。
2　黄褐色土（10YR5/8）　赤化していないが硬化した」層土。

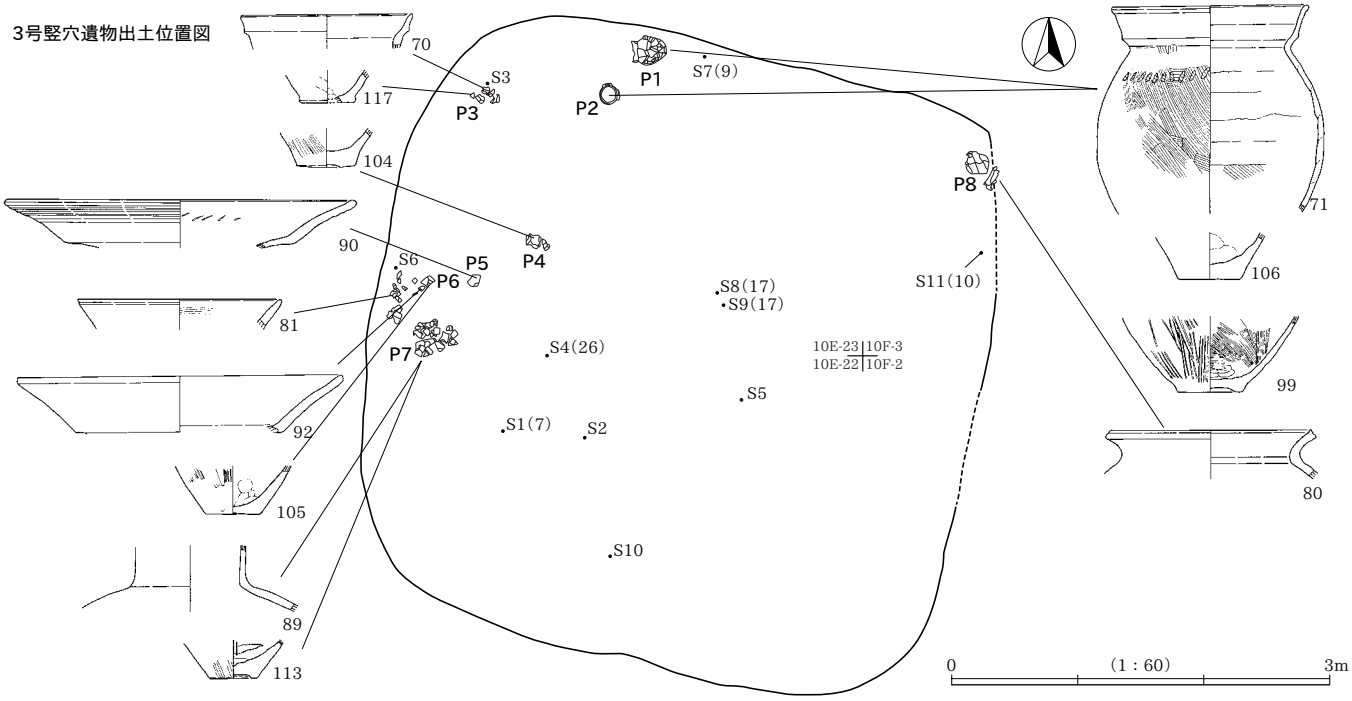


焼土4
1　赤褐色土（2.5YR4/8）　硬化した焼土ブロック層。炭化物粒（径1mm以下）少量含む。炭化材（径3mm程度）少量含む。
2　黄褐色土（10YR5/8）　赤化はしていないが硬化したIII層土。

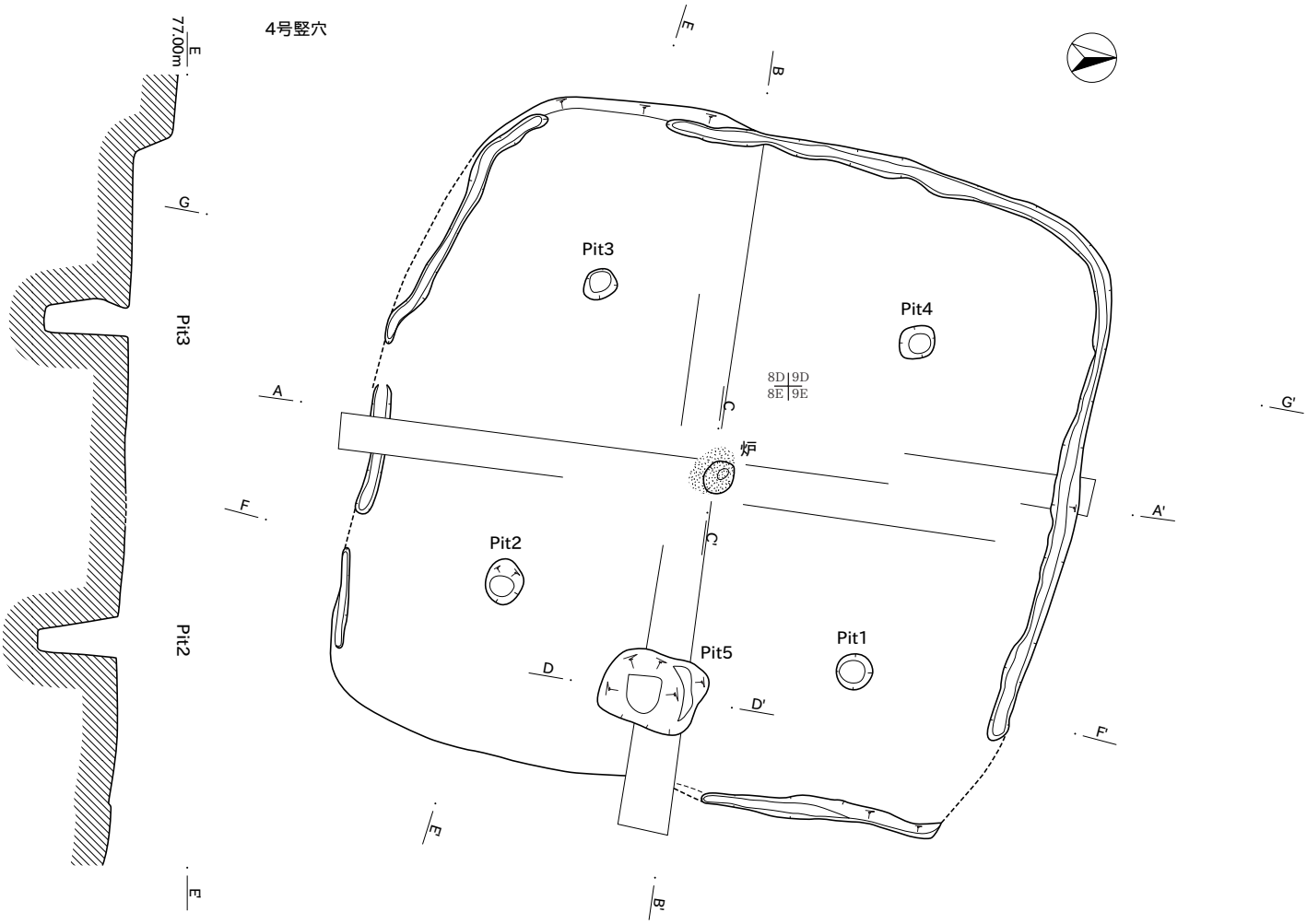
焼土5
1　黄褐色土（10YR5/6）　炭化物粒（径1mm以下）極少量含む。焼土粒（径2cm以下）特に多く含む。
2　黄褐色土（10YR5/6）　炭化物粒（径2mm以下）少量含む。

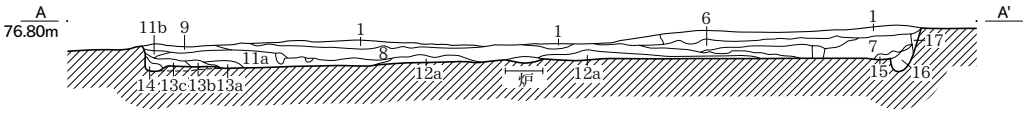
（E～J）　0　（1：20）　1m

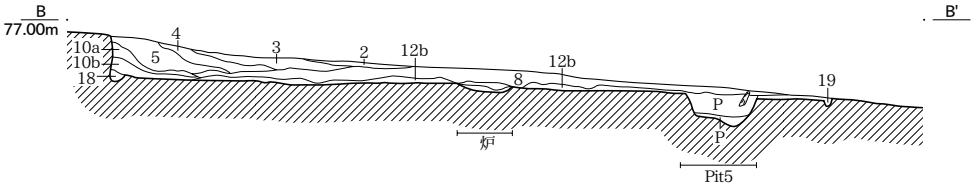
3号竪穴遺物出土位置図



0　（1：60）　3m

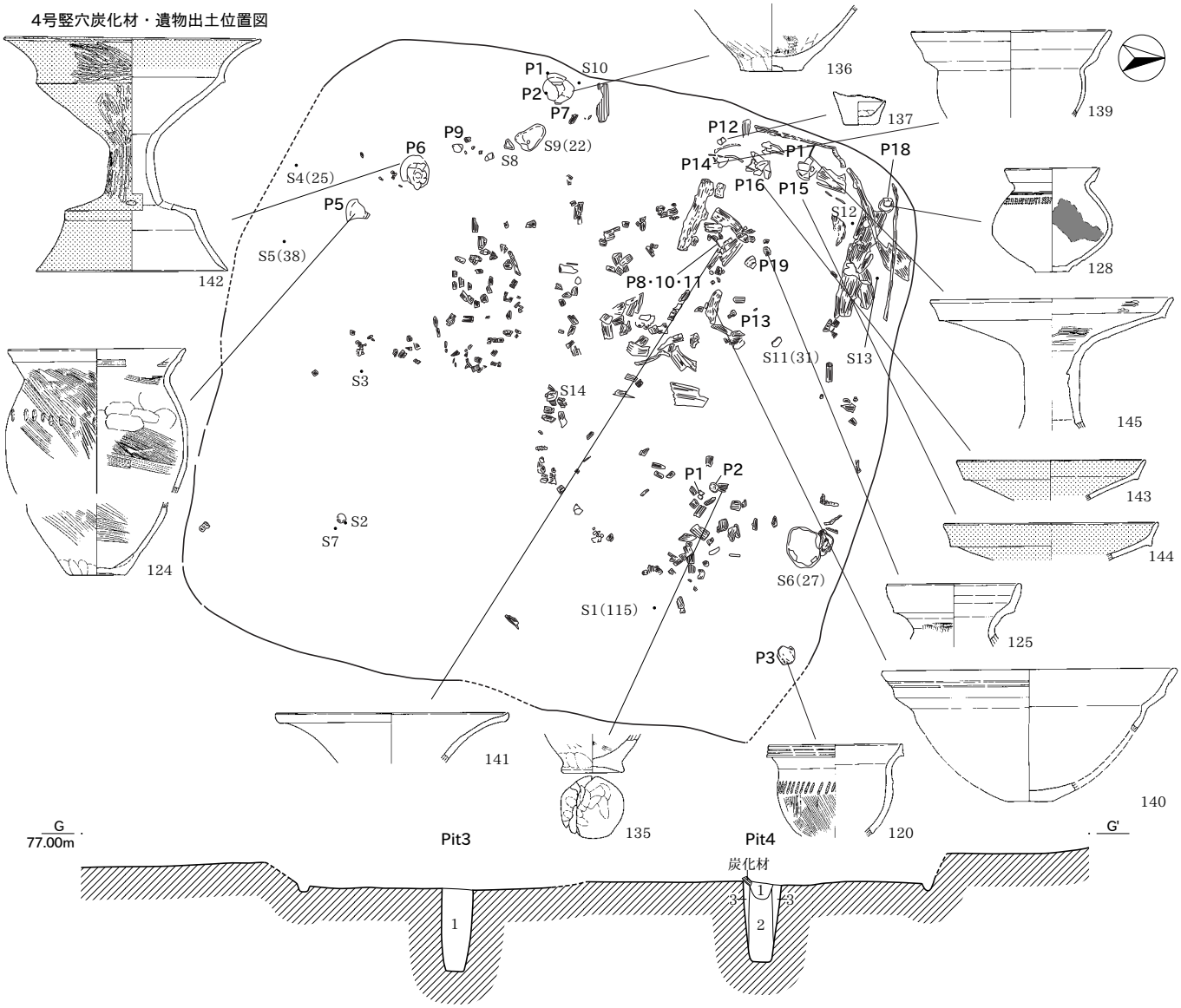






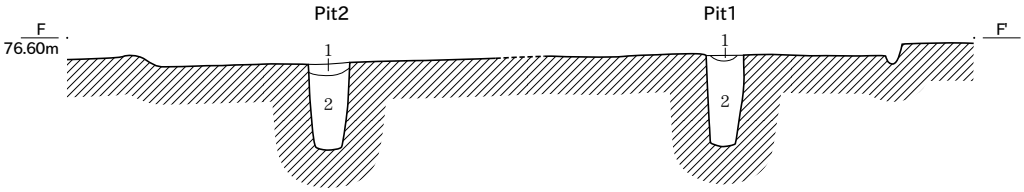
1　耕作土　しまり弱い。
2　褐色土　(7.5YR4/4)　耕作により、部分的に残存する。炭化物粒（径1～2mm程度）・炭化材（径1～5cm程度）少量含む。しまり、粘性やや強い。
3　暗褐色土　(7.5YR3/3)　褐色土粒をまばらに含む。炭化物粒（径1mm程度）少量含む。炭化物粒（径3～5mm程度）ごく少量含む。しまりやや弱く、粘性強い。
4　褐色土　(7.5YR4/4)　微細な炭化物粒を少量含む。しまりやや強く。粘性強い。
5　にぶい褐色土　(7.5YR5/4)　褐色土粒（径1cm程度）まだらに含む。炭化物粒（径1～５mm程度）少量含む。しまり強く、粘性やや弱い。
6　にぶい黄褐色土　(10YR4/3)　微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり、粘性やや強い。
7　明褐色土　(7.5YR5/6)　褐色土粒（径1cm程度）・微細な炭化物粒多く含む。炭化材（径5～15mm程度）も少量含む。遺物片。しまり強く、粘性弱い。
8　黒褐色土～褐色土（10YR2/3～10YR4/6）　炭化物層。黒褐色土を主体とし、褐色土粒多く含む。北・西側の壁際で焼土塊（径1～3cm程度）顕著。炭化物粒極めて多く含む。しまり、粘性強い。
9　にぶい褐色土　(7.5YR5/4)　微細な炭化物粒を少量含む。しまりやや強く、粘性強い。
10a　にぶい褐色土　(7.5YR5/4)　微細な炭化物粒を少量含む。大きな炭は含まない。しまり、粘性強い。
10b　にぶい褐色土　(7.5YR5/4)　土質は10a層に同じ。炭化物粒（径1cm程度）・焼土粒（径1～1.5cm程度）少量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
11a　褐色土　(10YR4/4)　黄褐色の地山土塊が斑状に含まれる。微細な炭化物粒を少量含む。しまり強く、粘性やや強い。
11b　褐色土　(7.5YR4/3)　土質は11a層に同じ。微細な炭片を全体的に含む。
12a　褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径１～４mm程度）少量含む。しまり強く、粘性やや強い。
12b　明褐色土　(7.5YR5/6)　12a層より明色、炭の混入少ない。しまり強く、粘性やや弱い。
13a　明褐色土　(7.5YR5/6)　土質的にほぼ同じだが若干の色調差a～bでわけられる。微細な炭化物粒ごく少量含む。しまり強く、粘性やや弱い。
13b　にぶい褐色土　(7.5YR5/4)
13c　褐色土　(10YR4/6)
14　褐色土　(10YR4/6)　周溝覆埋土。微細な炭化物粒ごく少含む。しまりやや弱く、粘性強い。
15　にぶい褐色土　(7.5YR5/4)　地山質土で炭の混入認められない。壁の崩落土か。しまり、粘性強い。
16　にぶい褐色土　(7.5YR5/4)　周溝埋土。土質は15層に類似。炭化物粒（径5～10mm程度）・焼土粒（径1～5mm程度）ごく少量含む。しまり弱く、粘性強い。
17　にぶい褐色土　(7.5YR5/4)　地山質土である。炭化物粒（径1～２cm程度）を少量含むため、竪穴内の土層とした。壁の崩落土か。しまり、粘性強い。
18　にぶい褐色土　(7.5YR5/3)　周溝埋土。土質は10層と類似するが炭化物が10層より多い。しまりやや弱く、粘性強い。
19　明褐色土　(7.5YR5/6)　周溝埋土。土質は12b層に類似。しまり強く、粘性やや強い。

0　(1：60)　3m



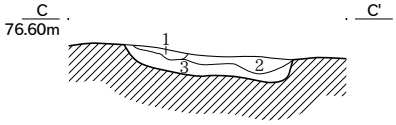
Pit3
1　褐色土（10YR4/6）　層上部に炭化物粒（径1～3mm程度、径1cm程度）少量含む。
　焼土粒（径1～10mm程度）少量含む。しまり上方強く、下方弱い。粘性強い。

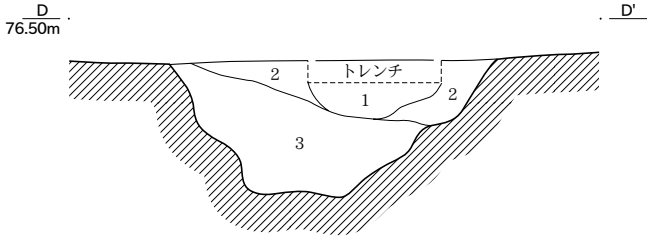
Pit4
1　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物粒（径1～2mm程度）多く含む。炭化材（径5cm長15cm）が斜めに落ち込む。
　焼土塊（径1～2cm程度）多く含む。しまり強く、粘性弱い。
2　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径1～2mm程度）まばらに含む。しまり弱く、粘性強い。
3　明褐色土（7.5YR5/6）　炭化物粒少量含む。しまり、粘性強い。



Pit2
1　褐色土（10YR4/4）　炭化物粒（径1～15mm程度）多く含む。焼土粒少量含む。しまり強く、粘性やや弱い。
2　褐色土（10YR4/6）　炭化材（長1～10cm程度）少量含む（細長い材）。しまり弱く、粘性ややあり。

Pit1
1　暗褐色土（10YR5/6）　炭化物粒（径1～3mm程度）多く含む。炭化材に（長3～5cm程度）多く含む。
　焼土粒少量含む。しまり強く、粘性弱い。
2　褐色土　（10YR4/6）　炭量は１層に比べ少量、大きさも材ではなく塊状。土器片含む。
　しまり弱く下の方砂っぽい。粘性やや弱い。



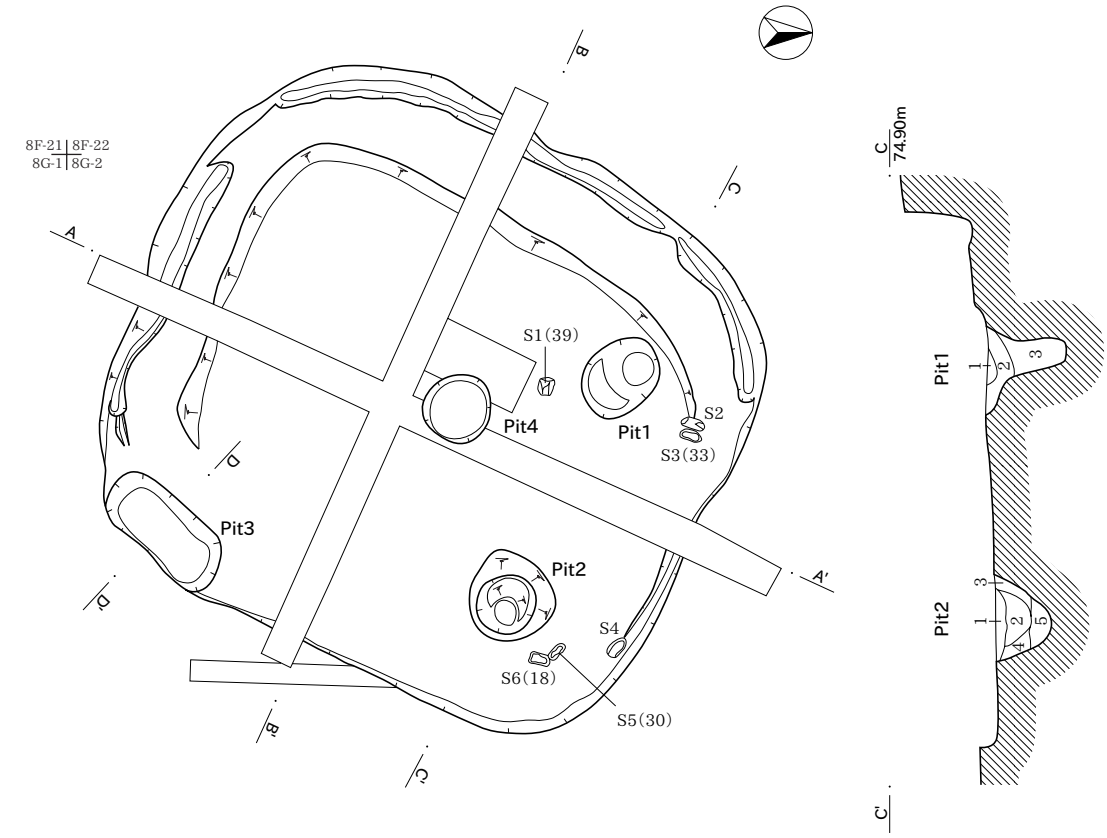


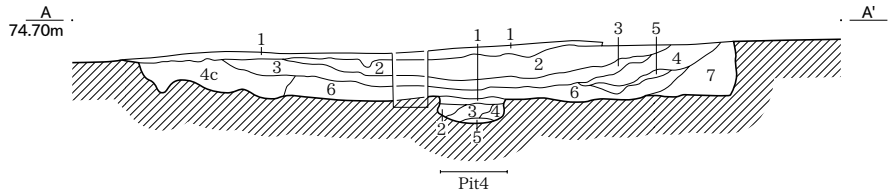
炉
1　褐色土　（7.5YR 4/3）　炭化材（径1～3cm程度）多く含む。焼土粒（径１mm程度）少量含む。
　黄褐色塊（径1～10mm程度）少量含む。２層を切る。しまり強く、粘性やや強い。
2　赤褐色土（2.5YR3/8）　～にぶい赤褐色土（5YR4/4）　焼土が塊状を呈する。
　炭化物粒（径1～10mm程度）まばらに含む。しまり、粘性弱い。
3　褐色土　（7.5YR 4/6）　被熱による硬化面。赤化は認められない。しまり特に強く、粘性強い。

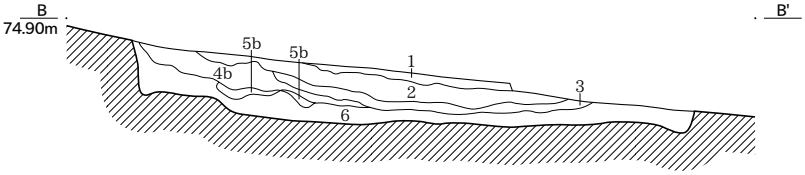
Pit5
1　明褐色土（7.5YR5/6）　炭化物粒（径1mm以下）ごく少量含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径2mm以下）・炭化材（径10mm程度）少量含む。焼土粒（径10mm以下）
　ごく少量含む。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒（径2mm以下）・炭化材（径20mm程度）多く含む。焼土粒（径10mm以下）
　少量含む。

0　（1：60）　3m
0　（1：20）　1m
（C・D）

5号竪穴





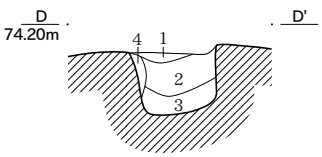


1　褐色土　（7.5YR4/6）　耕作土。2層土□がまだらに混じる。微細な炭化物粒を少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/4）　褐鉄鉱の沈着が認められる。微細な炭化物粒を少量含む。しまり強い。
3　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒を多く含む。
4　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。炭化材（径5～10mm程度）まばらに含む。
4b 褐色土　（7.5YR4/4）　4層と近似する。微細な炭化物粒を少量含む。
4c 褐色土　（7.5YR4/4）　4層と近似する。微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径2mm以下）ごく少量含む。
5　褐色土　（10YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。
5b 褐色土　（10YR4/4）　5層と近似するが5層より炭化物粒の混入が少ない。
6　明褐色土（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
7　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物を多く含む。炭化材（長5mm程度）ごく少量含む。焼土粒（径5mm以下）少量含む。

Pit 4
1　褐色土　（7.5YR4/6）　II層土に近似する。混入物は見られない。
2　明褐色土（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径4mm以下、赤化していない）まばらに少量含む。
3　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径5mm以下、赤化していない）多く含む。
4　明褐色土（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
5　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。

Pit1
1　明褐色土（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
2　暗褐色土（7.5YR3/3）　炭化物粒（径5mm以下）多く含む。黄褐色土粒（径3mm以下）多く含む。しまり弱い。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　黄褐色土に黒色土がまだらに混じる。しまり弱い。

Pit 2
1　褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒（径8mm以下）まばらに含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。
2　暗褐色土（7.5YR3/3）　炭化物粒（径4mm以下）少量含む。焼土粒（径5mm以下、赤化していないものも含む）多く含む。
3　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　地山質土を主とする。微細な炭化物粒を多く含む。
4　3層と近似する。（7.5YR4/2）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径3mm以下、ほとんどは赤化していない）特に多く含む。しまり弱い。
5　褐色土

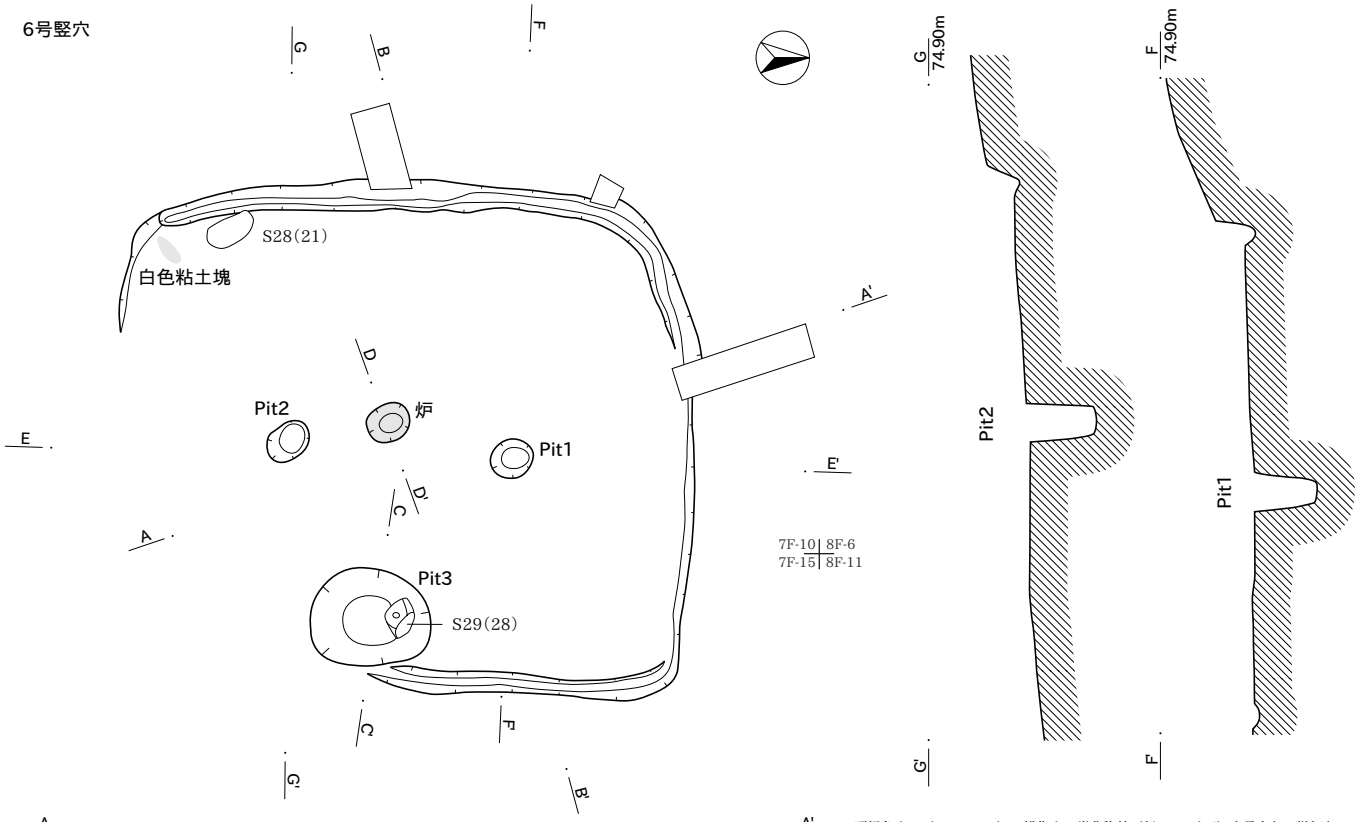


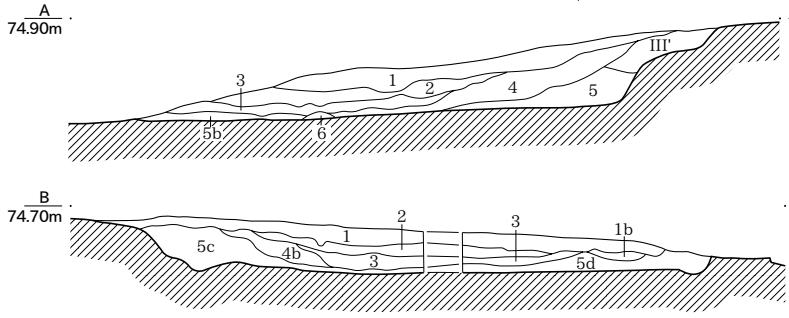
Pit 3
1　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径5mm以下、赤化していない）特に多く含む。
2　にぶい黄褐色土（7.5YR5/4）　微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径5mm以下、赤化していない）多く含む。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　2層にくらべて色調はやや暗い。混入物は2層に近似する。
4　黄褐色土　（7.5YR5/6）　地山質土を主とする。微細な炭化物粒を多く含む。

0　（1：60）　3m

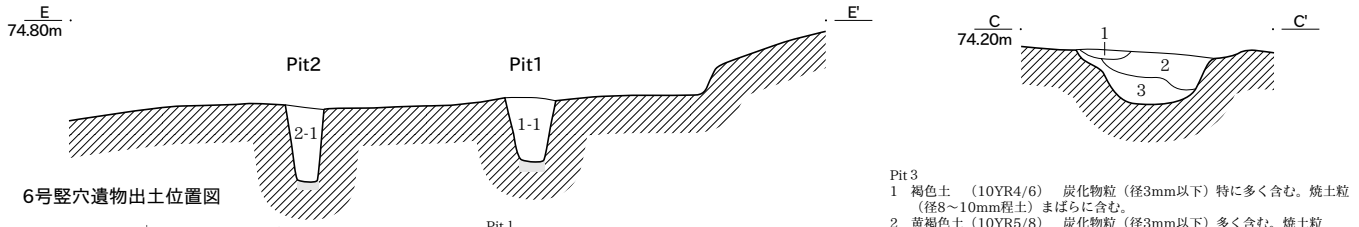
0　（1：40）　2m
(D)

6号竪穴





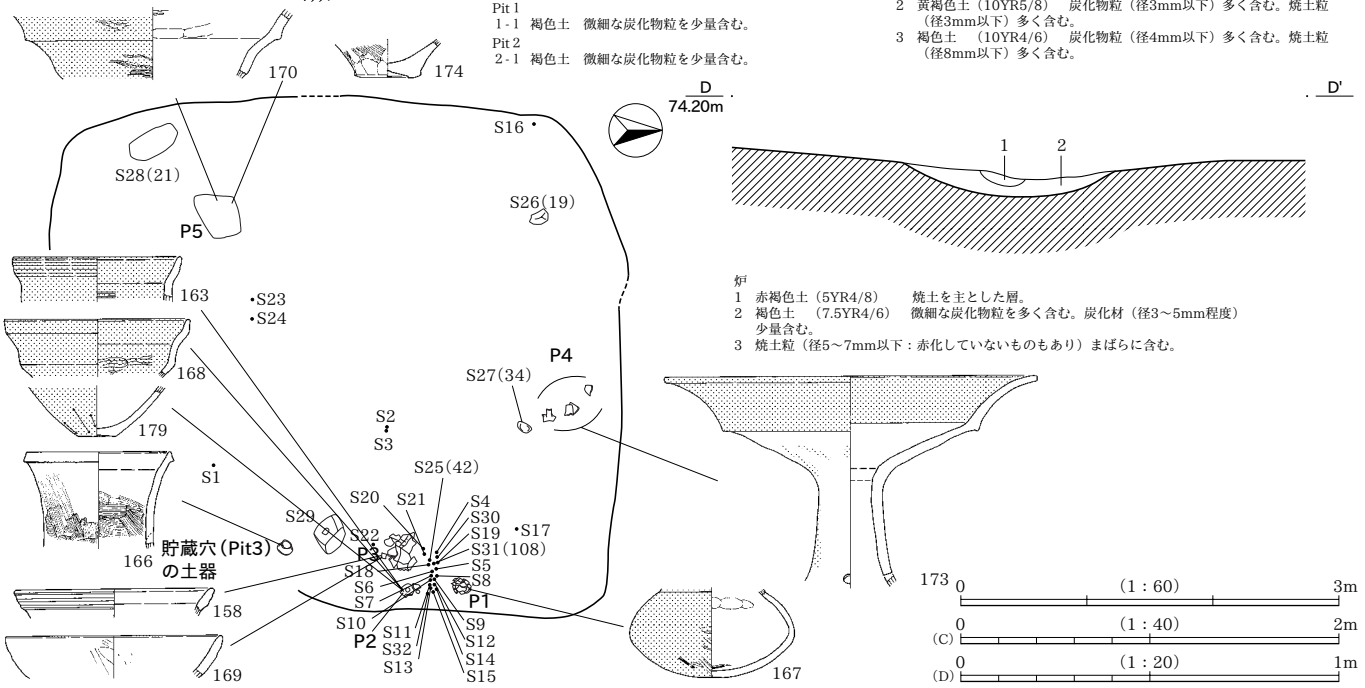
1　明褐色土　(7.5YR5/6)　耕作土。炭化物粒（径4mm以下）少量含む。微細な炭化物粒をごく少量含む。
1b 褐色土　(7.5YR4/6)　撹乱、踏固められた土。微細な炭化物粒を少量含む。
2　褐色土　(7.5YR4/4)　炭化物粒（径4mm以下）多く含む。
3　暗褐色土　(7.5YR3/4)　炭化物粒（径4mm以下）多く含む。
4　褐色土　(7.5YR4/6)　炭化物粒（径4mm以下）多く含む。炭化材（径5～12mm程度）少量含む。焼土粒（径3mm以下）少量含む。
4b 褐色土　(7.5YR4/6)　4層と類似するが、炭化材をほとんど含まない。
5　褐色土　(7.5YR4/6)　微細な炭化物粒を多く含む。
5b 明褐色土　(7.5YR5/6)　5層と類似するが、炭化物粒の混入が少ない。
5c 褐色土　(7.5YR4/6)　5層と類似するが、炭化材（径6mm程度）をまばらに含む。
5d 褐色土　(7.5YR4/4)　5層と類似するが、炭化材（径8mm程度）をまばらに含む。
6　暗赤褐色土（2.5YR3/4）　焼土がまだらに少量混じる。炭化物粒（径0.5mm以下）ごく少量含む。
III' 黄褐色土　(10YR5/8)　微細な炭化物粒をごく少量含む。II層の崩落と思われる。



6号竪穴遺物出土位置図

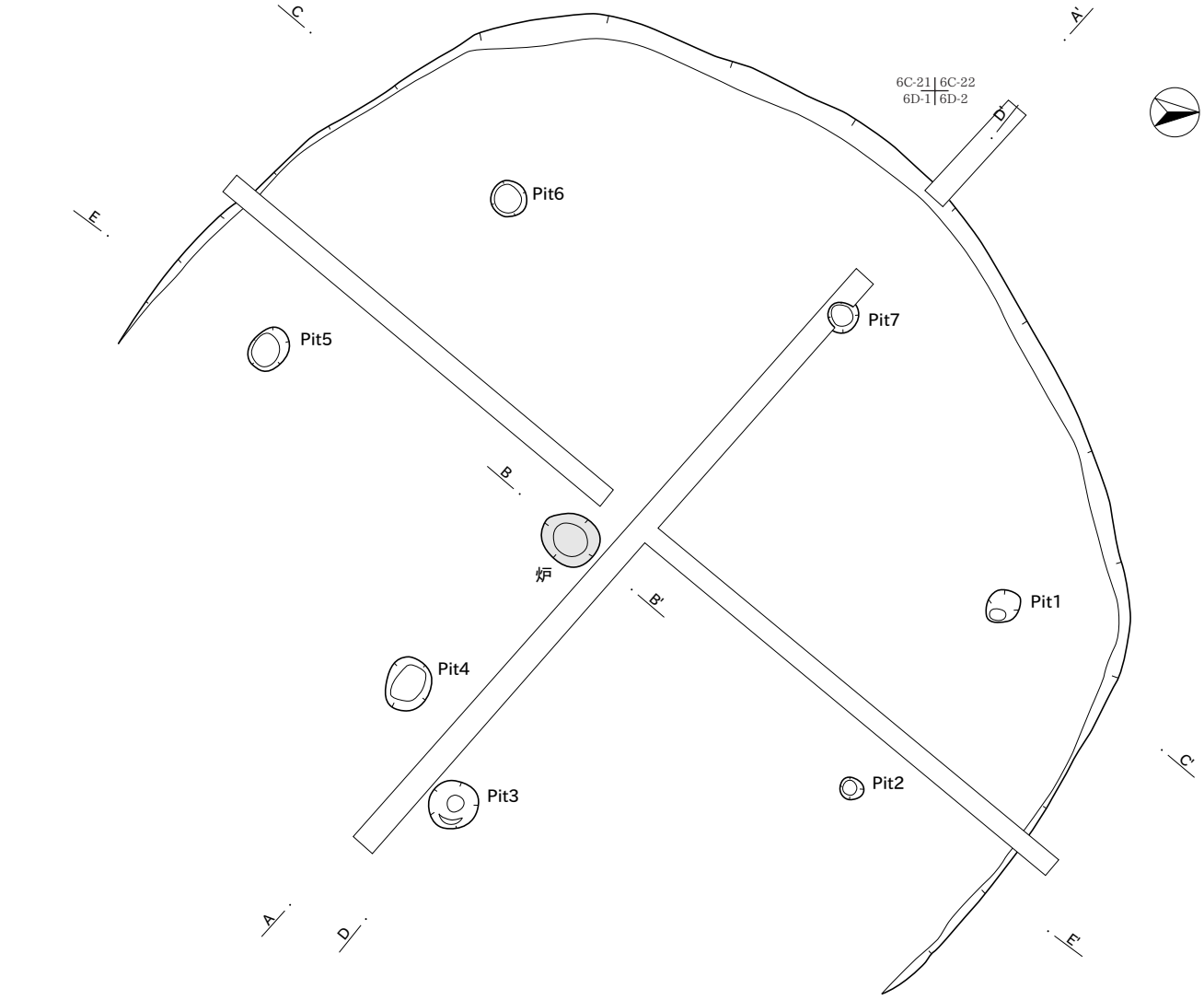
Pit 1
1-1　褐色土　微細な炭化物粒を少量含む。
Pit 2
2-1　褐色土　微細な炭化物粒を少量含む。

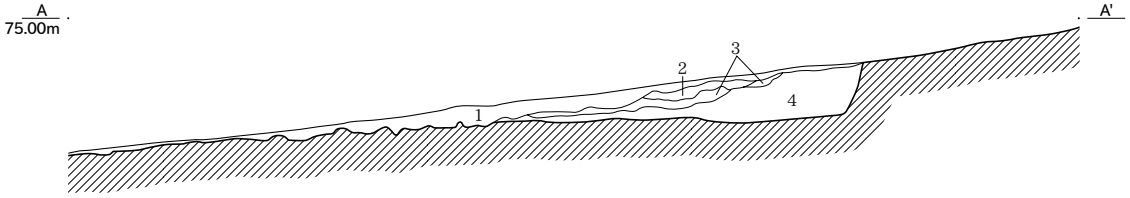
Pit 3
1　褐色土　(10YR4/6)　炭化物粒（径3mm以下）特に多く含む。焼土粒（径8～10mm程土）まばらに含む。
2　黄褐色土（10YR5/8）　炭化物粒（径3mm以下）多く含む。焼土粒（径3mm以下）多く含む。
3　褐色土　(10YR4/6)　炭化物粒（径4mm以下）多く含む。焼土粒（径8mm以下）多く含む。



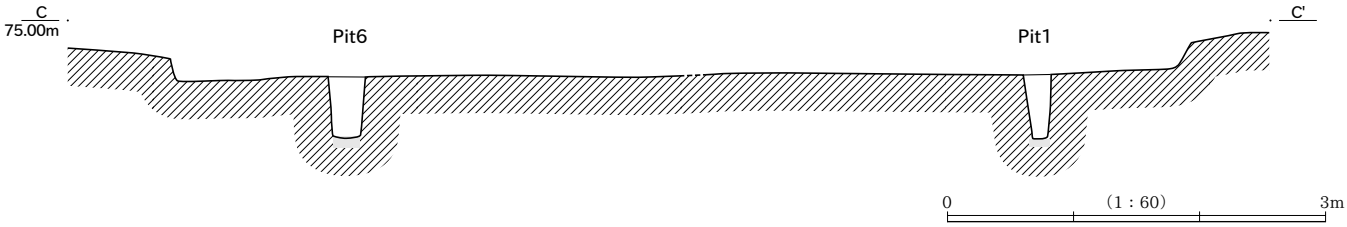
炉
1　赤褐色土（5YR4/8）　焼土を主とした層。
2　褐色土　(7.5YR4/6)　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（径3～5mm程度）少量含む。
3　焼土粒（径5～7mm以下：赤化していないものもあり）まばらに含む。

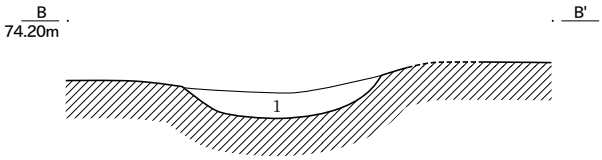
7号竪穴実測図（1）





1　明褐色土（7.5YR5/6）　耕作土。地山土ブロックがまだらに多く混じる。炭化物粒（径8mm以下）少量含む。
2　明褐色土（7.5YR5/6）　耕作により撹乱・踏固められた土層。炭化物粒（径8mm以下）少量含む。しまり強い。
3　褐色土　（7.5YR4/3）　炭化物粒（径5mm以下）を多く含む。
4　明褐色土（7.5YR5/6）　炭化物粒（径5mm以下）少量含む。炭化材（径5～12mm程度）まばらに含む。III層との区別（床面）は明瞭ではない。

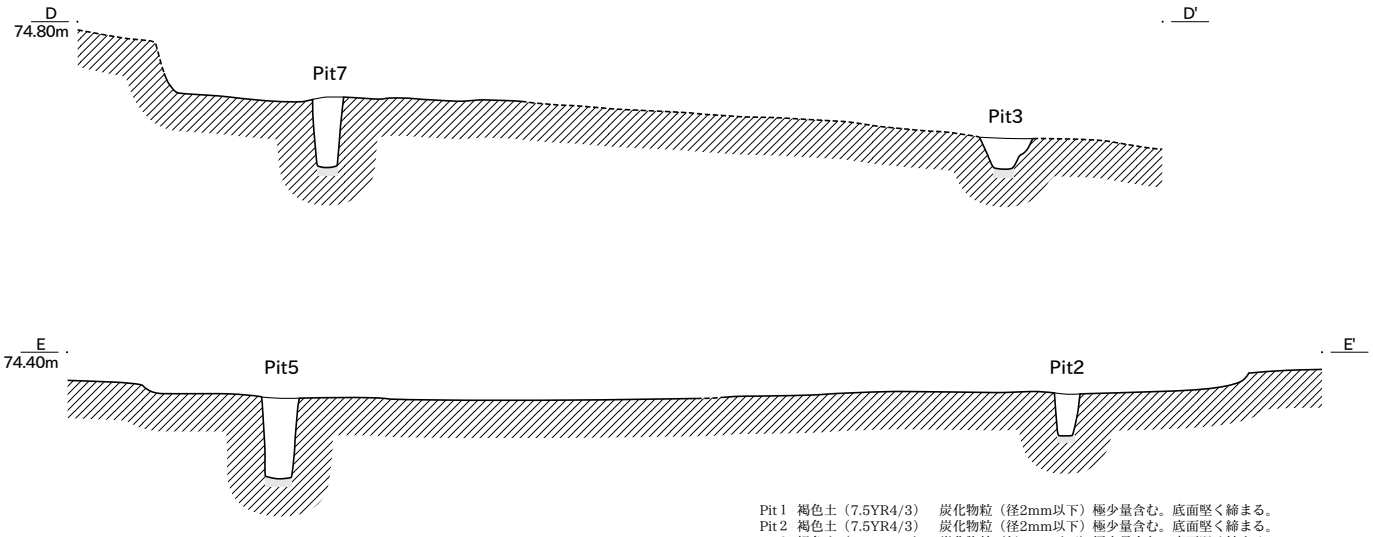




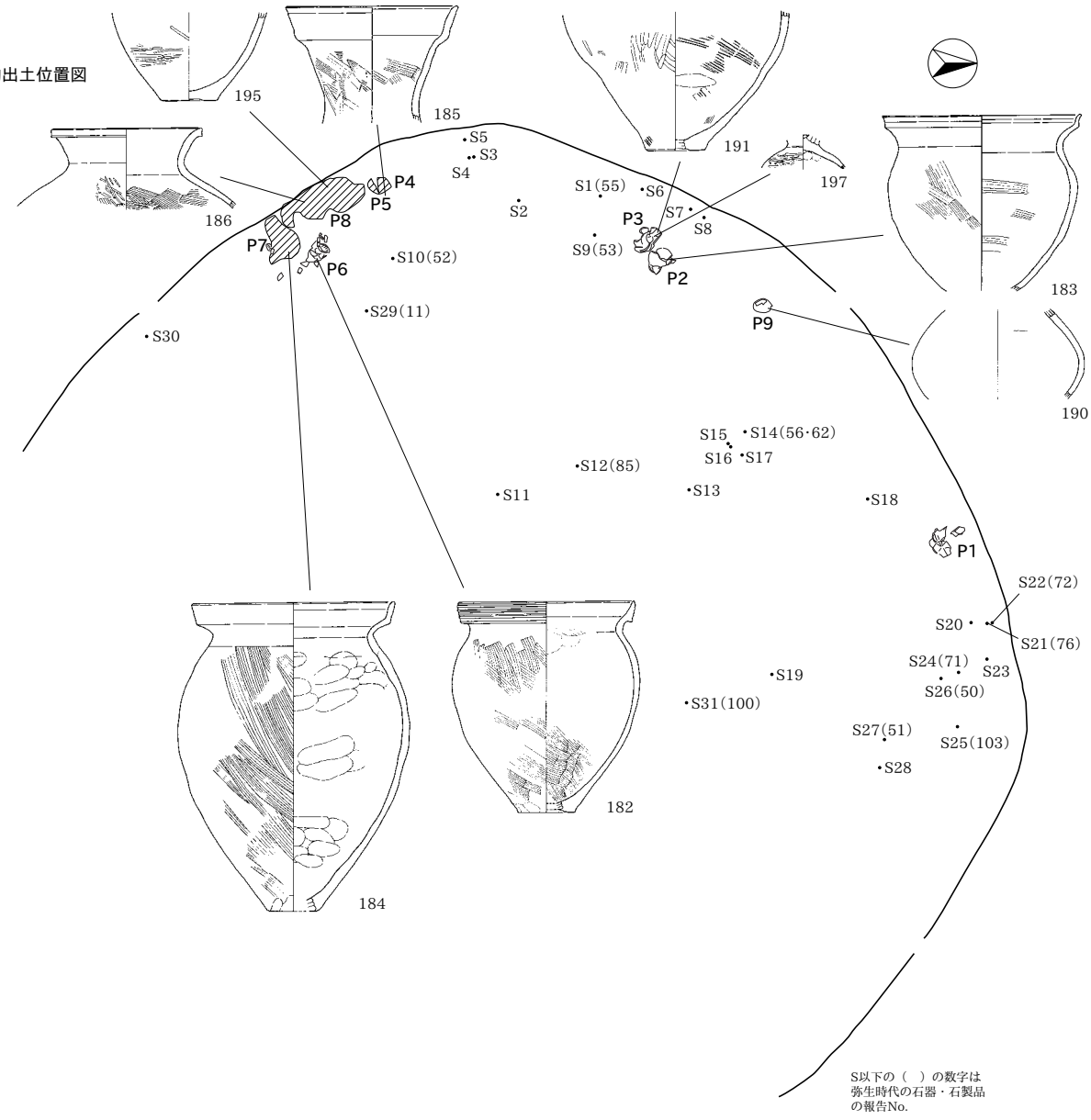
1　赤褐色土（5YR4/6）　炭化物粒（径1mm以下）多く含む。炭化材（径3mm程度）少量含む。
　　焼土粒（径10mm以下）多く含む。焼土粒（径10mm以下、赤化していない）まばらに含む。

0　（1：20）　1m

７号竪穴実測図（2）　７号竪穴遺物出土状況

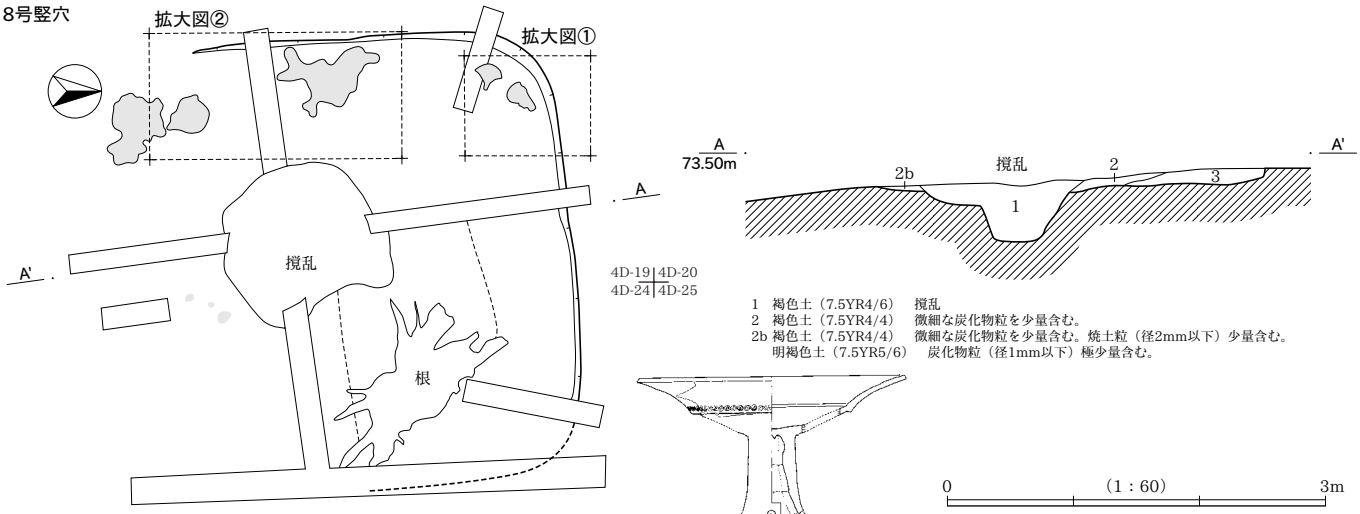


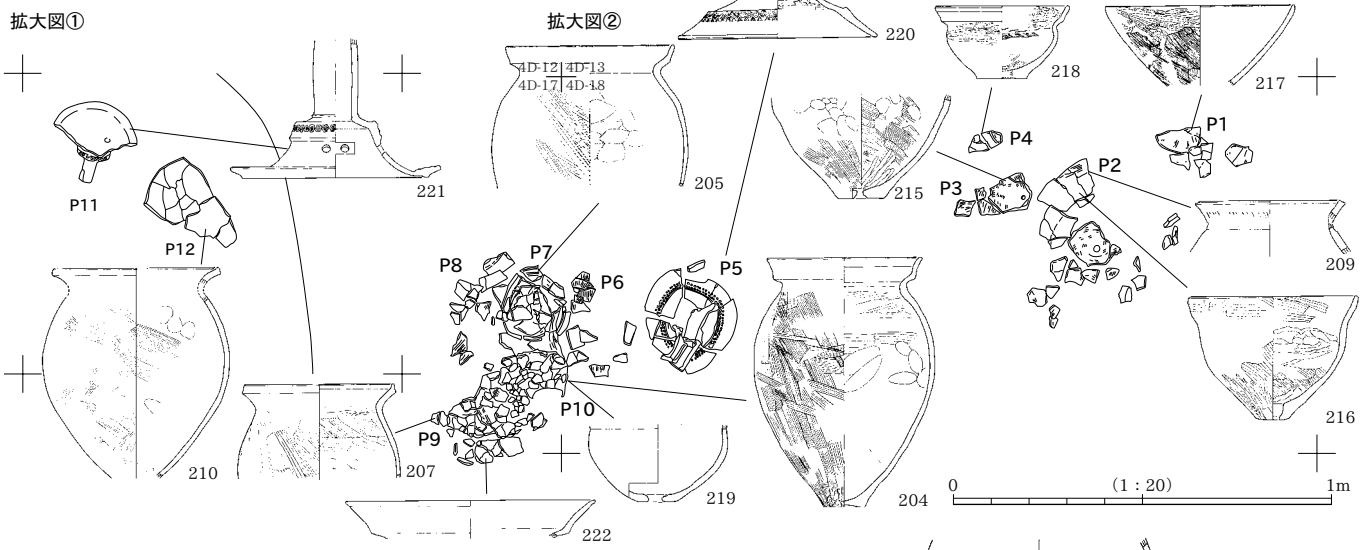
Pit１　褐色土（7.5YR4/3）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。底面堅く締まる。
Pit２　褐色土（7.5YR4/3）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。底面堅く締まる。
Pit３　褐色土（7.5YR4/3）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。底面堅く締まる。
Pit４　褐色土（7.5YR4/3）　炭化物粒（径5mm以下）焼土粒（径8mm以下）まばらに含む。
Pit５　褐色土（7.5YR4/3）　炭化物粒（径5mm以下）まばらに含む。
Pit６　褐色土（7.5YR4/3）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。
Pit７　褐色土（7.5YR4/3）　炭化物粒（径2mm以下）極少量含む。

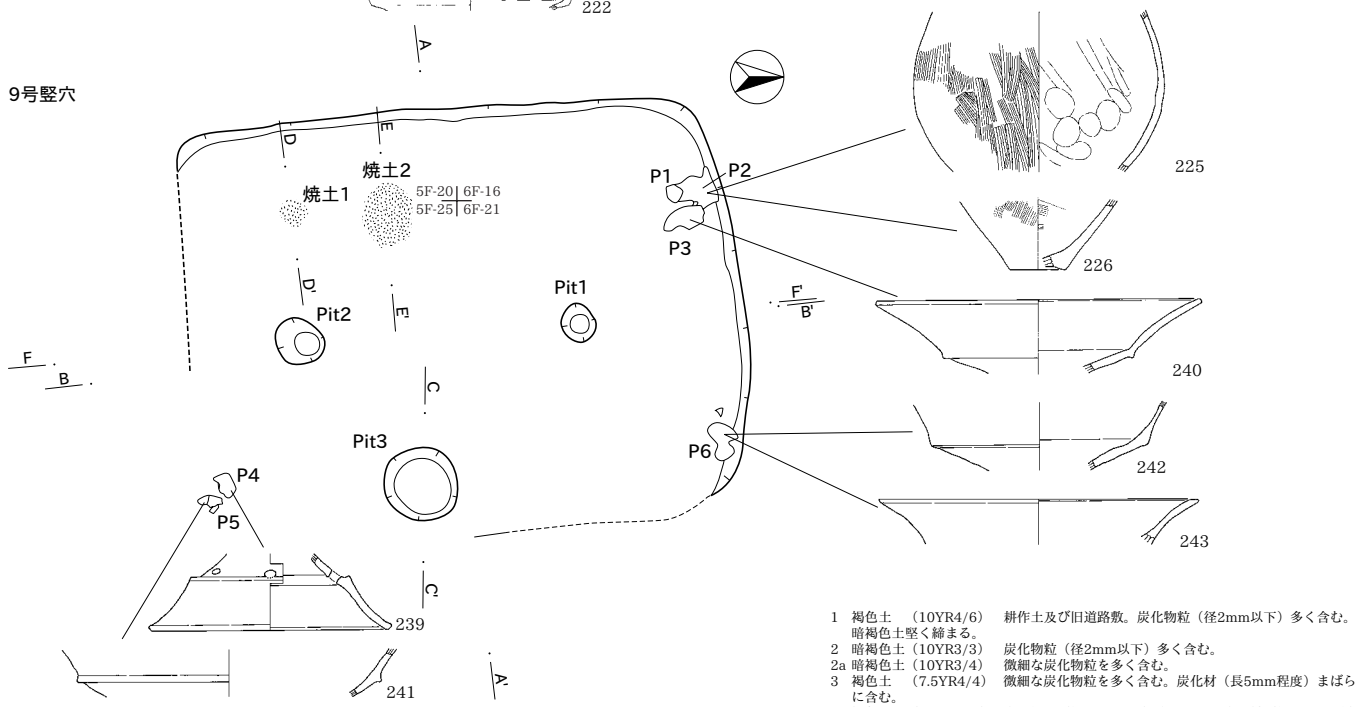


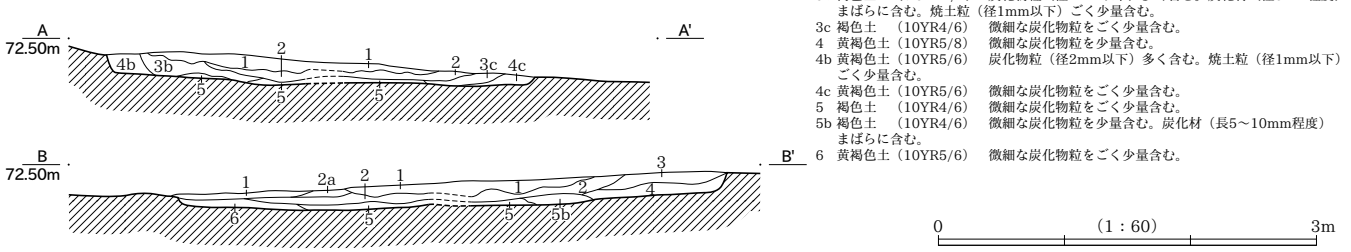
0　（1：60）　3m

8号竪穴

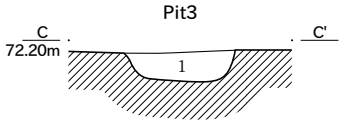




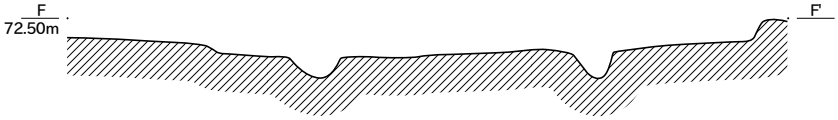




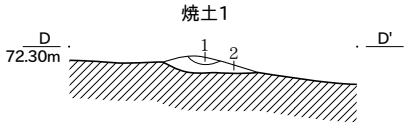
1　褐色土　（10YR4/6）　耕作土及び旧道路敷。炭化物粒（径2mm以下）多く含む。暗褐色土堅く締まる。
2　暗褐色土（10YR3/3）　炭化物粒（径2mm以下）多く含む。
2a 暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒を多く含む。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長5mm程度）まばらに含む。
3b 褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒（径2mm以下）多く含む。炭化材（径5mm程度）まばらに含む。焼土粒（径1mm以下）ごく少量含む。
3c 褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
4　黄褐色土（10YR5/8）　微細な炭化物粒を少量含む。
4b 黄褐色土（10YR5/6）　炭化物粒（径2mm以下）多く含む。焼土粒（径1mm以下）ごく少量含む。
4c 黄褐色土（10YR5/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
5　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
5b 褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。炭化材（長5～10mm程度）まばらに含む。
6　黄褐色土（10YR5/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。



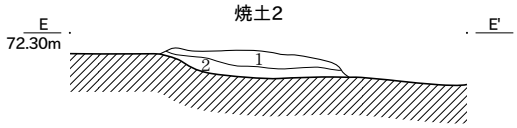
Pit 3
1　褐色土（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長5mm程度）まばらに含む。



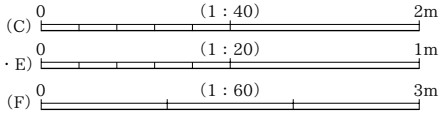
Pit
Pit 1 褐色土　炭化物粒（径3mm以下）少量含む。
Pit 2 褐色土　土器片を多く含む。炭化物粒（径5mm以下）多く含む。底面堅く締まる。



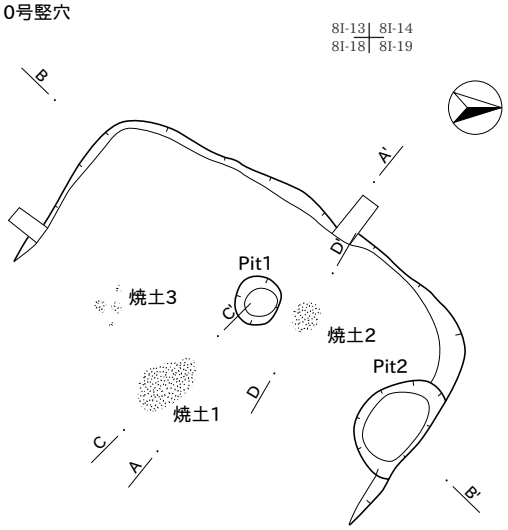
焼土 1
1　赤色土　（10R4/8）　硬化した焼土粒層。
2　明褐色土（7.5YR5/8）　赤化していないが、硬化したIII層土。

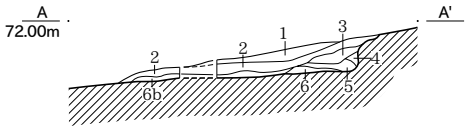


焼土 2
1　暗赤色土（10R3/6）　硬化した焼土粒層。炭化物粒（径2mm以下）まばらに含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　赤化はしていないが、硬化したIII層土。

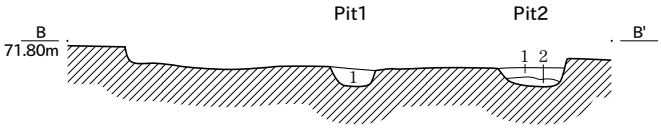


10号竪穴



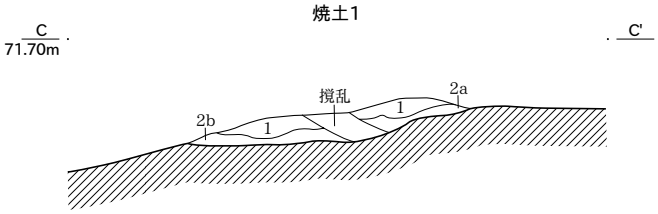


1　褐色土　（10YR4/4）　耕作土。微細な炭化物粒を多く含む。
2　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物粒（径2mm以下）多く含む。炭化米を含む層。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。
4　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
5　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物粒（径2mm以下）多く含む。炭化材（長5mm程度）ごく少量含む。
6　明褐色土（7.5YR5/8）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
6b 明褐色土（7.5YR5/8）　微細な炭化物粒をごく少量含む。

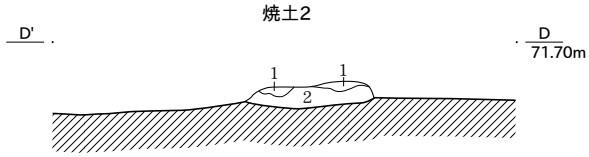


Pit 1
1　褐色土（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。

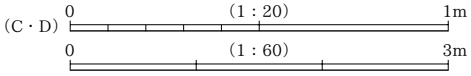
Pit 2
1　褐色土（7.5YR4/3）　炭化物粒（径2mm以下）多く含む。炭化材（径10mm程度）ごく小量含む。
2　褐色土（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。



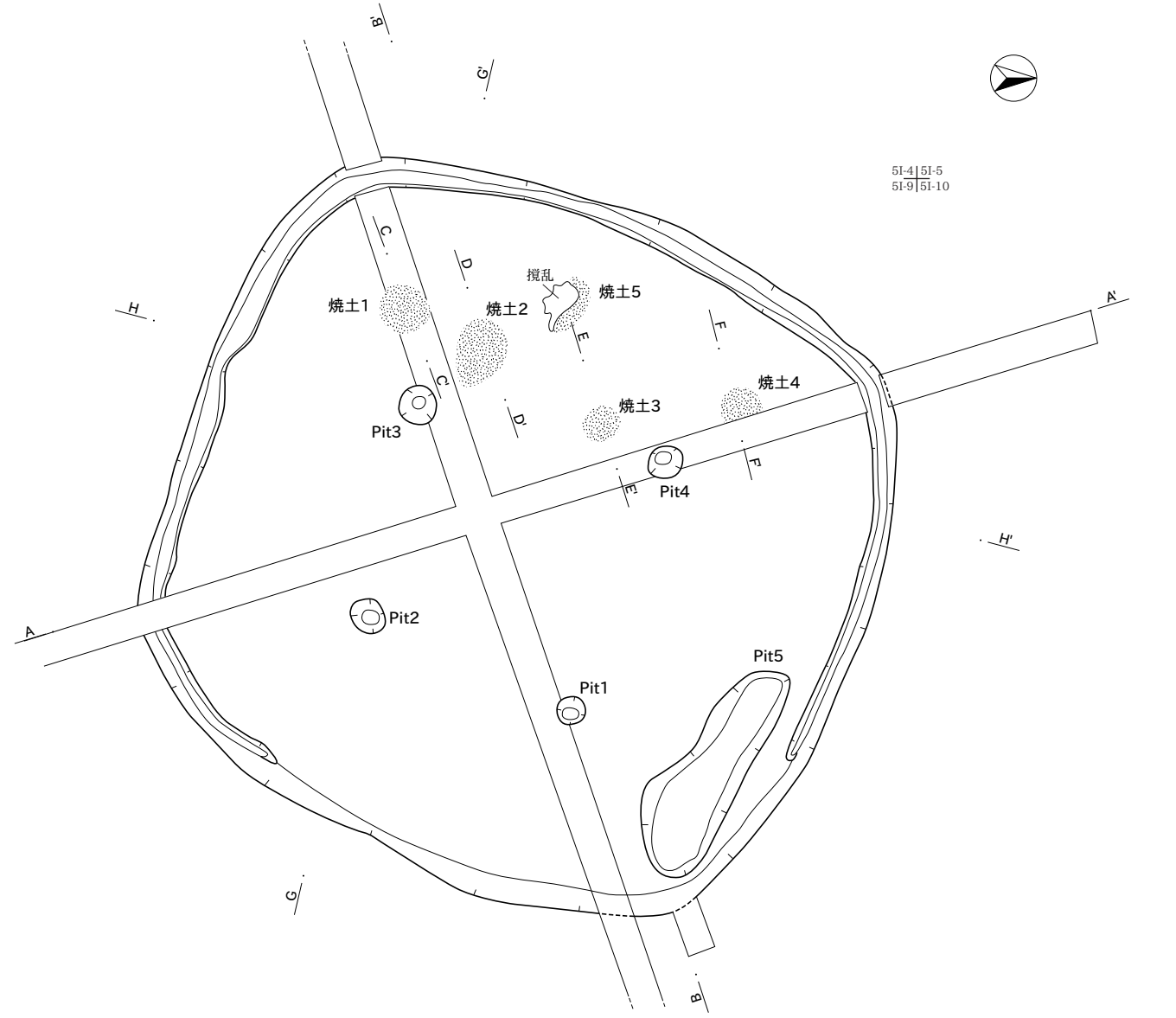
焼土 1
1　赤褐色土（5YR4/8）　炭化物粒（径2mm以下）多く含む。炭化材（長3mm程度）少量まばらに含む。
焼土粒（径3、以下）を主とし、暗褐色土が混じる。
2a 褐色土　（7.5YR4/6）　硬化した地山土。
2b 明褐色土（7.5YR5/8）　硬化した地山土。

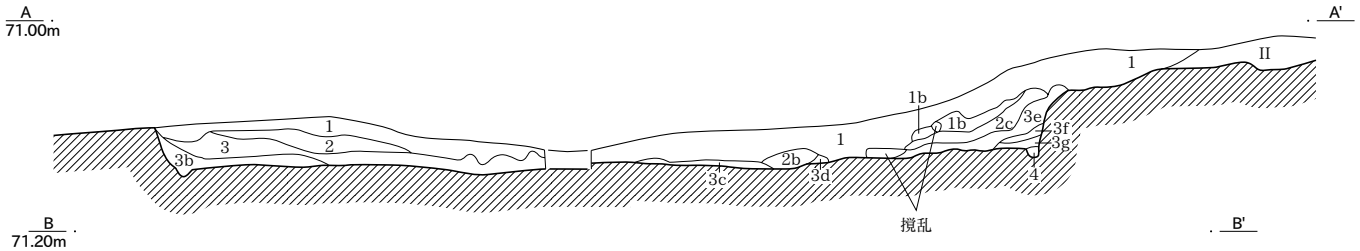


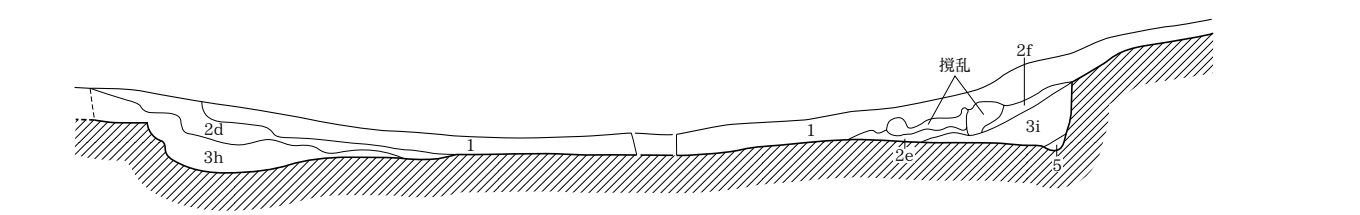
焼土 2
1　褐色土（2.5YR4/6）　炭化物粒（径2mm以下）少量含む。炭化材（長4mm程度）まばらに含む。
焼土粒（径10mm以下）を主とし暗褐色土が混じる。
2　褐色土（10YR4/6）　硬化した地山土。



11号竪穴実測図（1）

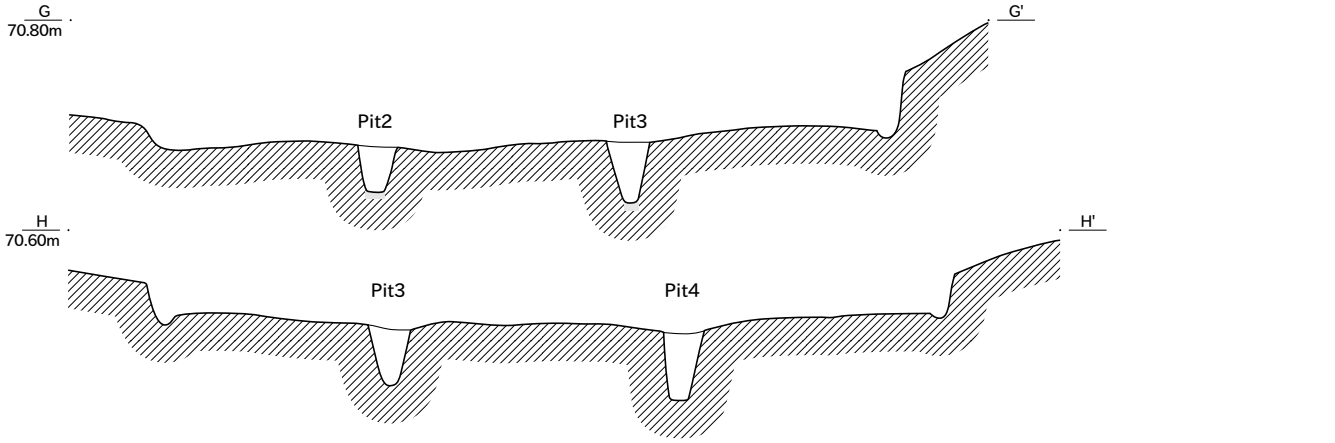






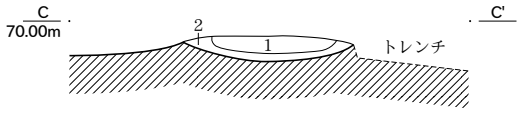
1 褐色土 （10YR4/6） 微細な炭化物粒をごく少量含む。木根による撹乱顕著。
1b 褐色土 （10YR4/6） 1層と近似する。炭化物粒（径2mm以下）ごく少量含む。
2 暗褐色土（10YR3/4） 炭化物粒（径2mm以下）少量含む。
2b 暗褐色土（10YR3/4） 2層と近似する。微細な炭化物粒をごく少量含む。
2c 暗褐色土（10YR3/4） 2層と近似する。炭化物粒（径2mm以下）少量含む。焼土粒（径1mm以下）ごく少量含む。
2d 暗褐色土（10YR3/4） 2層と近似する。微細な炭化物粒を少量含む。炭化材（長8mm程度）ごく少量含む。
2e 暗褐色土（10YR3/4） 2層と近似する。微細な炭化物粒をごく少量含む。焼土粒（径1mm以下）少量含む。
2f 暗褐色土（10YR3/4） 2層と近似する。微細な炭化物粒を少量含む。
3 褐色土 （10YR4/6） 炭化物粒（径2mm以下）少量含む。土器出土層。
3b 褐色土 （10YR4/6） 3層と近似する。炭化物粒（径2mm以下）多く含む。炭化材（長8mm程度）ごく少量含む。
3c 褐色土 （10YR4/6） 3層と近似する。微細な炭化物粒をごく少量含む。
3d 褐色土 （10YR4/6） 3層と近似するが、混入物はほとんど認められない。
3e 褐色土 （10YR4/6） 3層と近似する。炭化物粒（径3mm以下）少量含む。焼土粒（径1mm以下）ごく少量含む。
3f 褐色土 （7.5YR4/6） 3層と近似する。炭化物粒（径2mm以下）ごく少量含む。
3g 褐色土 （7.5YR4/4） 3層と近似する。炭化物粒（径2mm以下）少量含む。
3h 褐色土 （10YR4/6） 3層と近似する。微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長8mm程度）ごく少量含む。
3i 褐色土 （10YR4/6） 3層と近似する。炭化物粒（径2mm以下）多く含む。炭化材（長8mm程度）ごく少量含む。
4 明褐色土（7.5YR5/6） 微細な炭化物粒をごく少量含む。
5 明褐色土（7.5YR5/6） 微細な炭化物粒をごく少量含む。

0 （1：60） 3m

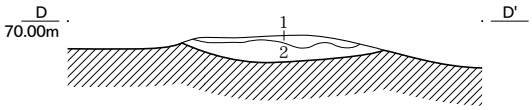


Pit2・3・4
Pit2 褐色土（7.5YR4/6）　炭化物粒（径2mm以下）ごく少量含む。下半部はややしまりが弱い。
Pit3 褐色土（7.5YR4/6）　炭化物粒（径2mm以下）ごく少量含む。下半部はややしまりが弱い。
Pit4 褐色土（7.5YR4/6）　炭化物粒（径2mm以下）ごく少量含む。下半部はややしまりが弱い。

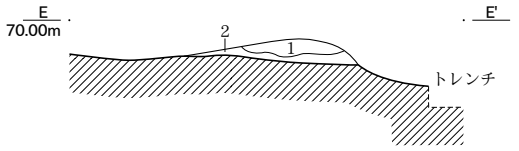
0　（1：60）　3m



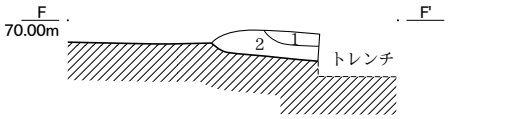
焼土1
1　暗赤褐色土（2.5YR3/6）　硬化した焼土ブロック層。炭化物粒（径2mm以下）多く含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　赤化はしていないが硬化した地山土。



焼土2
1　赤褐色土（2.5YR4/6）　硬化した焼土ブロック層。炭化物粒（径2mm以下）少量含む。
2　明褐色土（7.5YR5/8）　赤化はしていないが硬化した地山土。



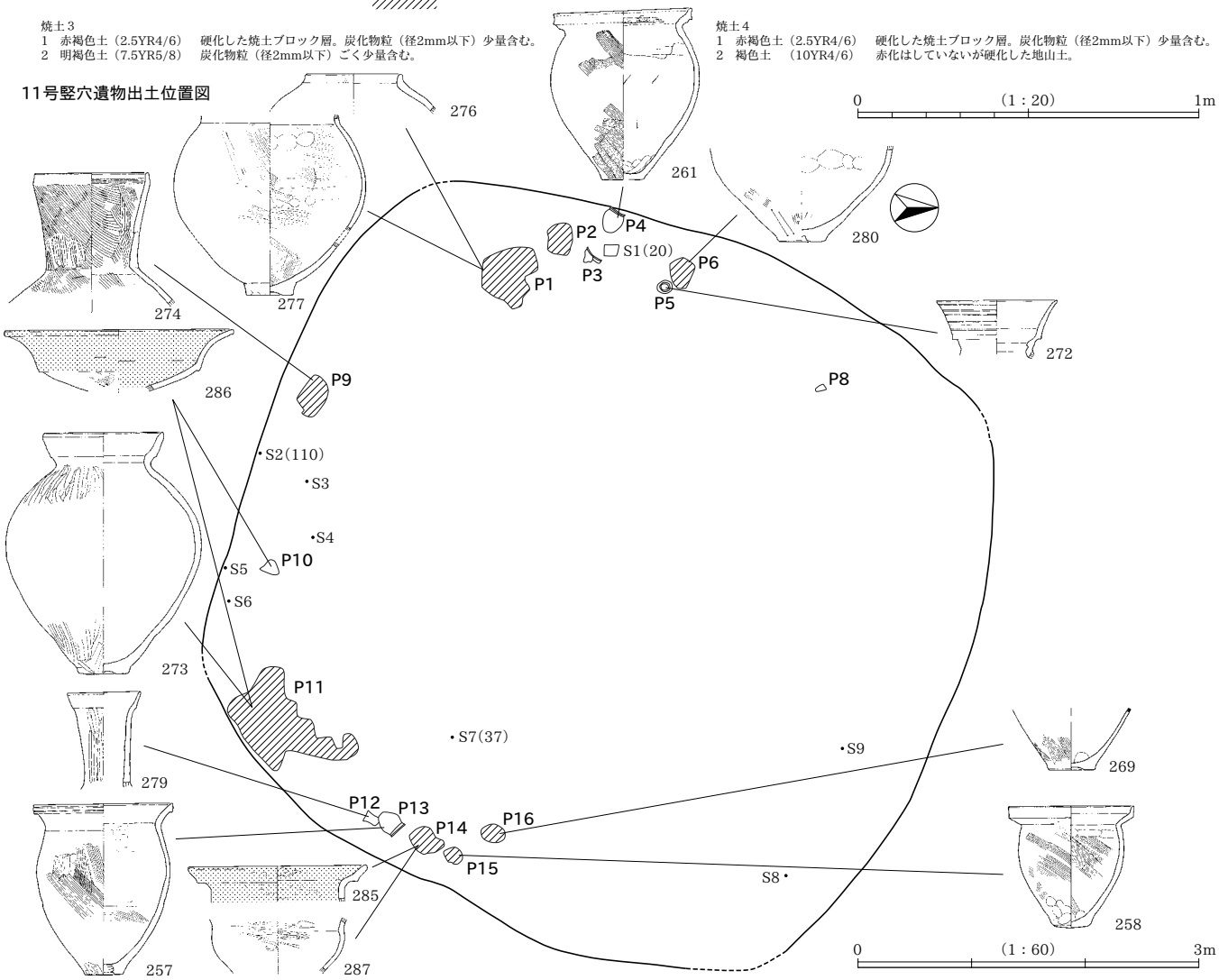
焼土3
1　赤褐色土（2.5YR4/6）　硬化した焼土ブロック層。炭化物粒（径2mm以下）少量含む。
2　明褐色土（7.5YR5/8）　炭化物粒（径2mm以下）ごく少量含む。



焼土4
1　赤褐色土（2.5YR4/6）　硬化した焼土ブロック層。炭化物粒（径2mm以下）少量含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　赤化はしていないが硬化した地山土。

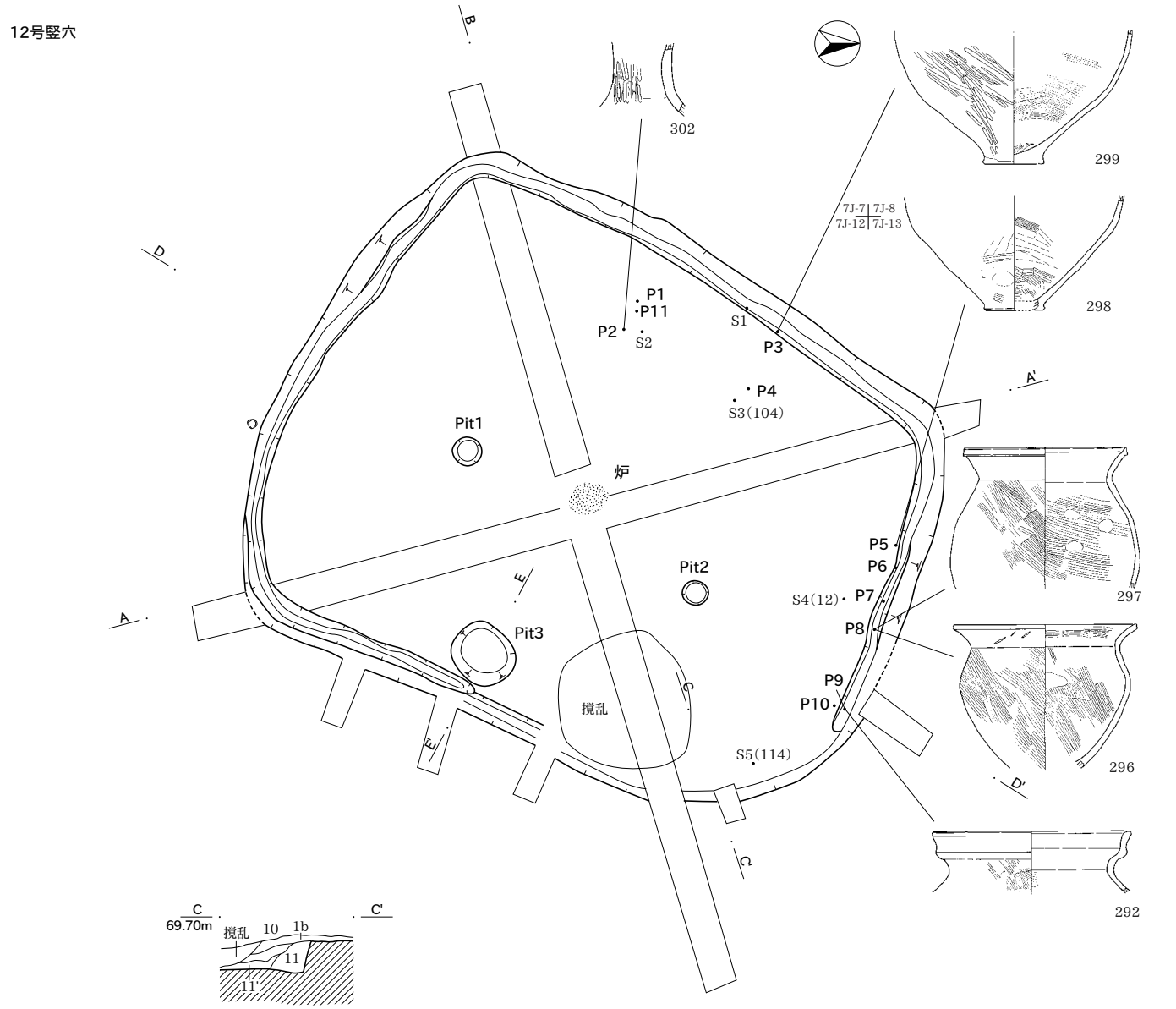
0　（1：20）　1m

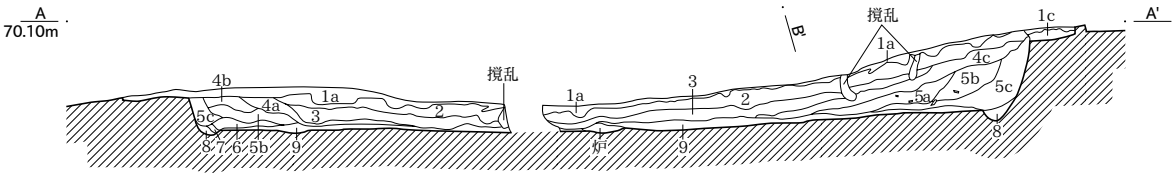
11号竪穴遺物出土位置図

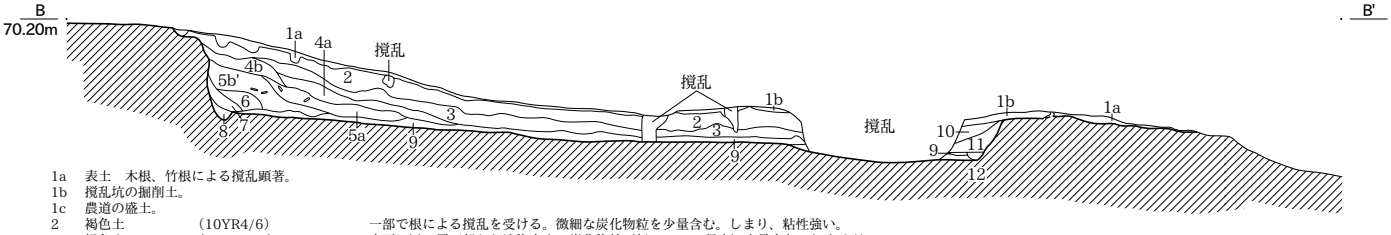


0　（1：60）　3m

12号竪穴



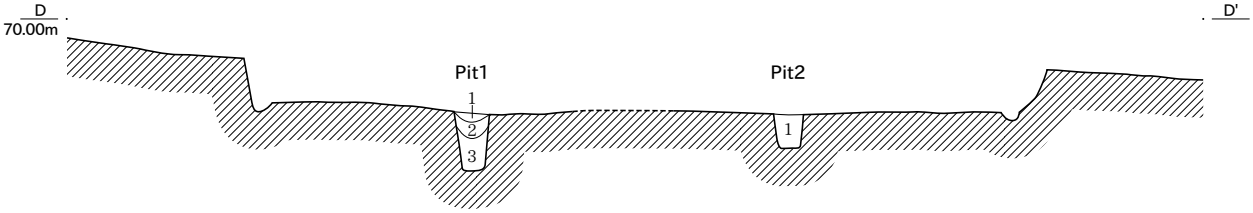


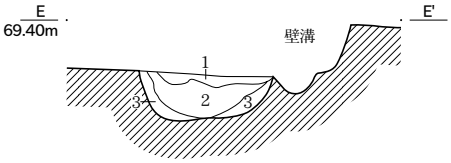


1a　表土　木根、竹根による撹乱顕著。
1b　撹乱坑の掘削土。
1c　農道の盛土。

2	褐色土	(10YR4/6)	一部で根による撹乱を受ける。微細な炭化物粒を少量含む。しまり、粘性強い。
3	褐色土	(7.5YR4/3)	床面に近い層下部から遺物出土。炭化物粒（径1～5mm程度）少量含む。しまり弱い。
4a	褐色土	(7.5YR4/4)	炭化物粒（径1～3mm程度）少量まばらに含む。遺物少量あり。しまり強く、粘性弱い。３・５層に比べて明色を呈する。
4b	褐色土	(10YR4/6)	遺物少量あり。2層よりやや明色を呈する。しまり4a層よりやや強い。粘性4a層よりやや弱い。
4c	褐色土	(7.5YR4/4)	4a層と同質だが、焼土粒（径1～5mm程度）少量含む。
5a	暗褐色土	(10YR3/4)	粒子細かく均質。遺物片含む。炭化物粒（径1～15mm程度）・地山土塊（径5～20mm程度）まばらに含む。
5b	褐色土	(10YR4/4)	地山土塊を多く含み、5a層より明色を呈する。炭化物粒（径1～20mm程度）多く含む。炭化材・焼土粒（径1～15mm程度）少量含む。遺物片含む。しまり、粘性やや弱い。
5b'	褐色土	(10YR4/4)	5bに比べ炭化物・焼土粒はほとんど見られない。遺物片含む。しまり、粘性やや弱い。
5c	褐色土	(10YR4/6)	5b層に比べ明色を呈す。一括遺物を含む。炭化物粒（径1～5mm程度）まばらに含む。地山土粒（径10mm以上）多く含む。しまり弱い。
5c'	土質は5c層に同じ。遺物少量。しまり、粘性強い。		
6	黄褐色土	(10YR5/6)	地山土塊。遺構の南～西側のみ存在。炭化物粒（径1～3mm程度）焼土粒（径3mm程度）少量まばらに含む。
7	褐色土	(10YR4/4)	有機質土で５層に類似。遺構の南～西側でのみ検出。炭化物粒（径1～3mm程度）少量含む。
8	褐色土	(10YR4/6)	炭化物粒（径1mm程度）ごく少量まばらに含む。しまりごく弱い。粘性７層より強い。
9	明褐色土	(7.5YR4/6)	遺構底部の土。６層より明るく、炭化物粒（径1～3mm程度）少量含む。しまり、粘性強い。
10	褐色土	(10YR4/4)	4層に対応すると考えられる層。微細な炭化物粒を少量含む。しまり弱く、粘性やや強い。
11	褐色土	(10YR4/6)	5c' 対応層。炭化物粒（径5～10mm程度）少量まばらに含む。しまり、粘性強い。
11'	褐色土	(10YR4/4)	5b対応層
12	黄褐色土	(10YR5/6)	炭化物粒（径1mm程度）ごく少量。周辺よりしまりが弱く、粘性も弱い。
13	褐色～黄褐色の漸移層。しまり弱く、粘性強い。壁土の崩落土か。		
炉	橙色土～明褐色土（2.5YR6/8～7.5YR5/6）		硬化面・掘り込みは確認できなかった。

0　(1：60)　3m





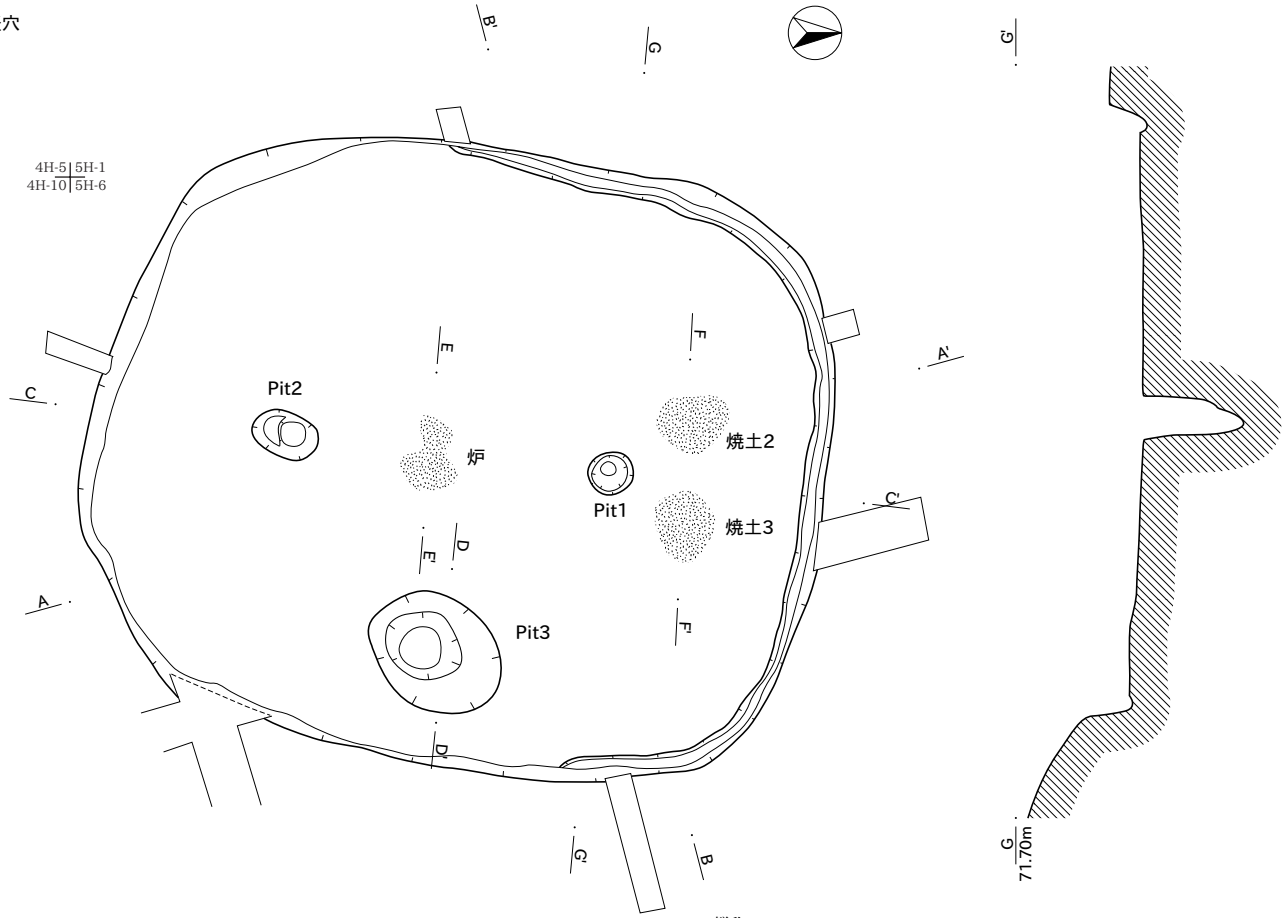
Pit 1
1　褐色土（10YR4/4）　炭化物粒（径1～5mm程度）ごく少量含む。土器含む。しまり、粘性強い。
2　褐色土（10YR4/6）　炭化物粒（径1～5mm程度）少量含む。しまり、粘性強い。
3　褐色土（10YR4/6）　炭化物等の混入物ほとんど認められない。層下部ほどしまりが弱く、砂質強い。

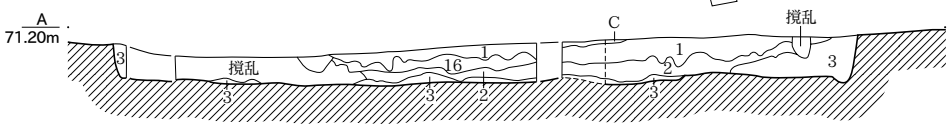
Pit 2
1　褐色土（10YR4/4）　炭化物粒（径1～5mm程度）少量含む。しまり強く、粘性弱い。層下部ほどしまり弱く、砂質強い。

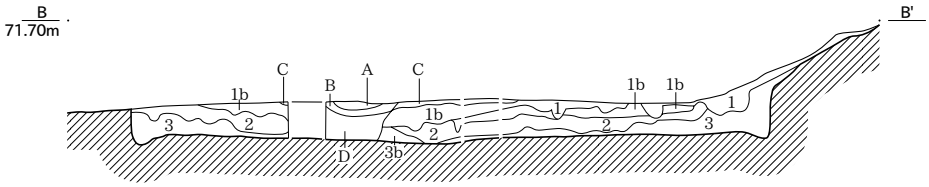
Pit 3
1　褐色土　（10YR4/4）　炭化物粒（径1～10mm程度）少量含む。遺物少量含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径1～5mm程度）少量含む。遺物少量含む。しまり強く、粘性弱い。
3　黄褐色土（10YR5/6）　炭化物粒（径1mm程度）少量含む。しまり弱く、粘性強い。

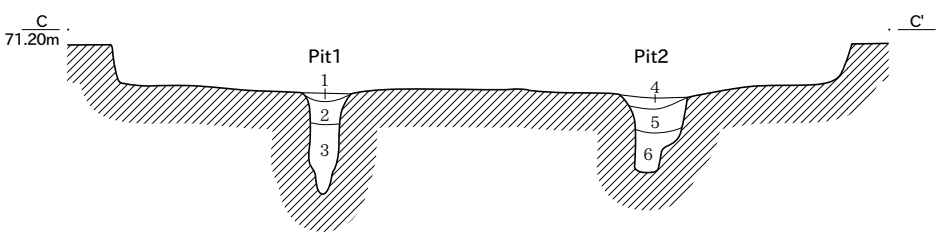
0　（1：60）　3m
(E) 0　（1：40）　2m

13号竪穴







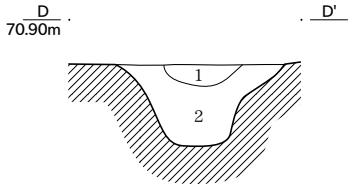


1　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。木根による撹乱顕著。
1b 明褐色土（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒（径4mm以下）少量含む。炭化材　（長5～7mm程度）まばらに含む。
3　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒（径4mm以下）少量含む。炭化材　（長5～７mm程度）まばらに含む。
3b 褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。

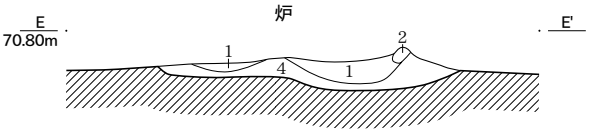
火葬場による撹乱層
A　褐色土　（7.5YR4/6）　火葬によって生じた焼土層。
B　黒褐色土（7.5YR2/2）　炭化物粒、炭化材を主とする。
C　褐色土　（7.5YR4/6）　火葬によって硬化した焼土層。色調は赤橙色・黒・黄褐色を呈する。
D　褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒（径４mm以下）少量含む。

Pit1・Pit2
1　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。
2　明褐色土（7.5YR5/6）　焼土粒（径10mm以下、赤化していないものもあり）まばらに含む。しまり強い。
3　褐色土　（7.5YR4/6）　混入物をほとんど含まない。しまり弱い。
4　暗褐色土（7.5YR3/4）　微細な炭化物粒を多く含む。
5　明褐色土（7.5YR5/6）　炭化物粒（径5mm以下）まばらに含む。焼土粒（赤化していない）多く含む。しまり強い。
6　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒（径8mm以下）まばらに含む。しまり弱い。

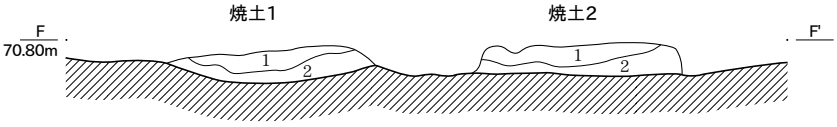
0　（1：60）　3m



Pit 3
1　暗褐色土（7.5YR3/4）　微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径5mm以下、赤化していない）多く含む。
2　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。炭化材（長5～10mm程度）・焼土粒（径5mm以下、赤化していない）まばらに含む。



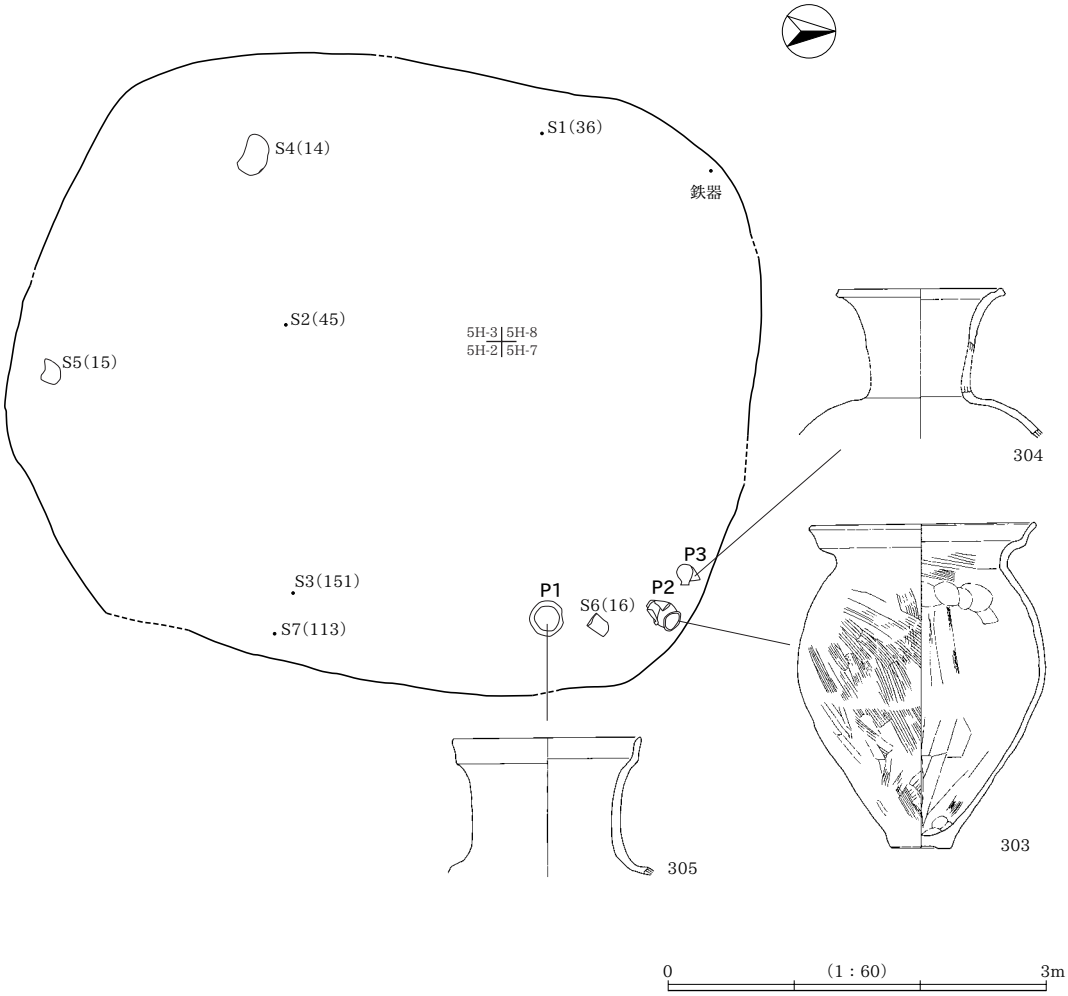
炉
1　赤褐色土（2.5YR4/8）　硬化した焼土塊層。
2　赤褐色土（2.5YR4/8）　硬化した焼土塊層。
3　赤褐色土（5YR4/8）　微細な炭化物粒を少量含む。硬化した焼土粒（径10mm以下）多く含む。
4　褐色土　（10YR4/6）　赤化はしていないが被熱によるⅢ層硬化層。



焼土２・３
1-1　赤褐色土（2.5YR4/6）　硬化した焼土塊層。
1-2　褐色土　（10YR4/8）　赤化はしていないが被熱によるⅢ層硬化層。
2-1　赤褐色土（2.5YR4/8）　硬化した焼土塊層。
2-2　褐色土　（10YR4/8）　赤化はしていないが被熱によるⅢ層硬化層。

(D)　0　(1：40)　2m
(E・F)　0　(1：20)　1m

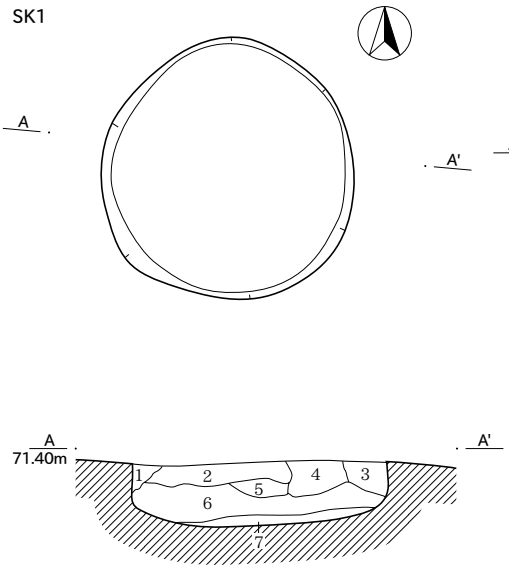
13号竪穴遺物出土位置図



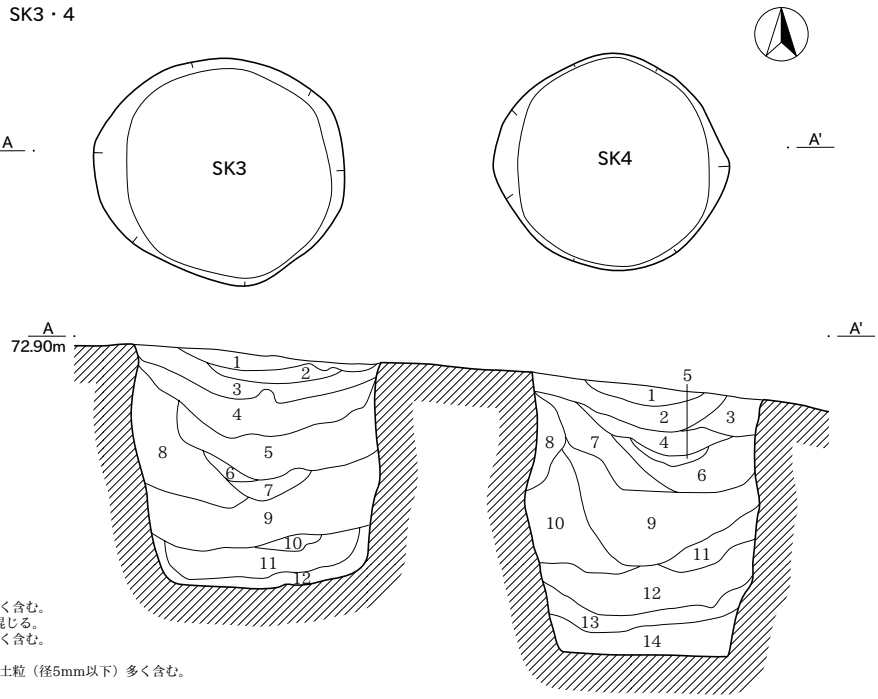
14号竪穴断面図61-1
1　褐色土（7.5YR4/6）　炭化物粒（径5mm以下）まばらに含む。
2　明褐色土（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
3　褐色土（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
4　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　炭化物粒（径1mm以下）ごく少量含む。
※用地外の土層
1　明褐色土　（7.5YR5/6）
2　暗褐色土　（7.5YR3/4）
3　褐色土　（7.5YR4/6）

0　（1：40）　2m

SK1

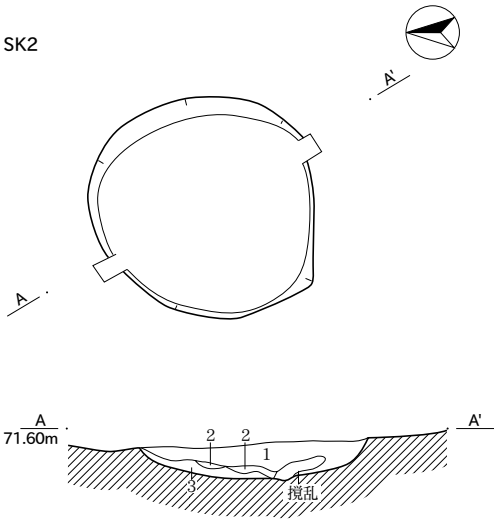


SK3・4



SK1
1　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
2　黒褐色土（10YR2/3）　微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径5mm以下）多く含む。
3　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。暗褐色土がまだらに混じる。
4　暗褐色土（10YR3/3）　微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径4mm以下）多く含む。
5　黒褐色土（7.5YR2/2）　微細な炭化物粒・焼土粒（径4mm以下）少量含む。
6　黒褐色土（10YR3/2）　炭化材（径5mm程度）少量含む。微細な炭化物粒・焼土粒（径5mm以下）多く含む。
7　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。

SK2

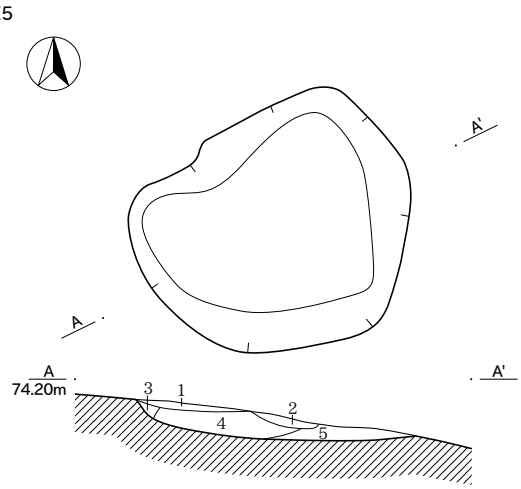


SK3
1　黒褐色土（10YR2/2）　微細な炭化物粒・焼土粒（径2mm以下）を多く含む。炭化材（径5mm程度）少量含む。
2　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒・焼土粒（径3mm以下）を多く含む。炭化材（径5mm程度）ごく少量含む。
3　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒をごく少量含む。焼土粒（径2mm以下）多く含む。
4　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒・焼土粒（径2mm以下）を多く含む。炭化材（径8mm程度）ごく少量含む。
5　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
6　黒褐色土（10YR2/3）　微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径3mm以下）多く含む。
7　黒色土　（10YR2/1）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。
8　暗褐色土（10YR3/3）　微細な炭化物粒・焼土粒（径3mm以下）多く含む。
9　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒・焼土粒（径3mm以下）を多く含む。炭化材（長5mm程度）ごく少量含む。
10 褐色土　（10YR4/4）　微細な炭化物粒・炭化材（径10mm程度）ごく少量含む。
11 褐色土　（10YR4/4）　黄褐色土まだらに混じる。微細な炭化物粒・炭化材（長5mm程度）ごく少量含む。しまり弱い。
12 暗褐色土（10YR3/3）　微細な炭化物粒・炭化材（長5～10mm）少量含む。しまり弱い。
13 褐色土　（10YR4/6）　炭化材（径10mm程度）・焼土粒（径2mm以下）ごく少量含む。
14 暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒・焼土粒（径2mm以下）ごく少量含む。しまり弱い。

SK4
1　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒・焼土粒（径2mm以下）少量含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　炭化材（長5mm程度）・微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径2mm以下）多く含む。
3　褐色土　（10YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径2mm以下）多く含む。
4　黒褐色土（10YR3/2）　微細な炭化物粒・炭化材（長5mm程度）少量含む。焼土粒（径2mm以下）多く含む。
5　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒・炭化材（長5mm程度）ごく少量含む　焼土粒（径2mm以下）多く含む。
6　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒焼土粒（径2mm以下）を多く含む。炭化材（径5mm程度）まばらに含む　しまり弱い。
7　黒褐色土（10YR2/3）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径2mm以下）ごく少量含む。
8　褐色土　（10YR4/4）　微細な炭化物粒・炭化材（長5mm程度）・焼土粒（径2mm以下）少量含む。
9　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒・炭化材（長5mm程度）まばらに含む　焼土粒（径2mm以下）多く含む。
10 黄褐色土（10YR5/6）　微細な炭化物粒・炭化材（長5mm程度）ごく少量含む
11 赤褐色土（5YR4/8）　焼土を主とする。微細な炭化物粒を少量含む。炭化材（長5～10mm）多く含む。
12 黄褐色土（10YR5/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。

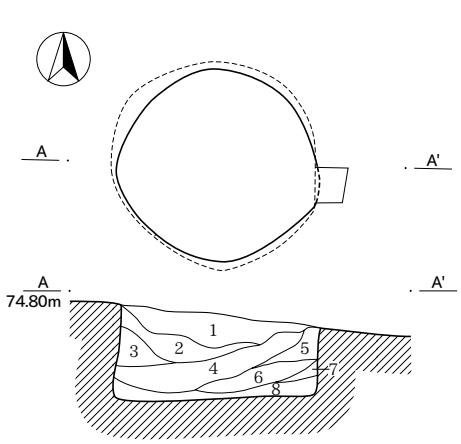
SK2
1　黒褐色土（10YR2/3）　炭化材（長5mm程度）ごく少量含む。微細な炭化物粒・焼土粒（径5mm以下）多く含む。
2　黒褐色土（10YR2/2）　微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径5mm以下）多く含む。
3　暗褐色土（10YR3/3）　炭化材（長5mm程度）・微細な炭化物粒を少量含む。焼土粒（径5mm以下）多く含む。

SX5



SX5　土層註記　Y5
1　褐色土　（10YR4/6）　耕作土。暗褐色土まだらに混じる。微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径1mm以下）ごく少量含む。
2　黒褐色土（10YR2/3）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径2mm程度）少量含む。
3　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
4　暗褐色土（10YR3/3）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長5mm程度）・焼土粒（径2mm以下）少量含む。
5　黄褐色土（10YR5/6）　微細な炭化物粒・焼土粒（径2mm以下）少量含む。

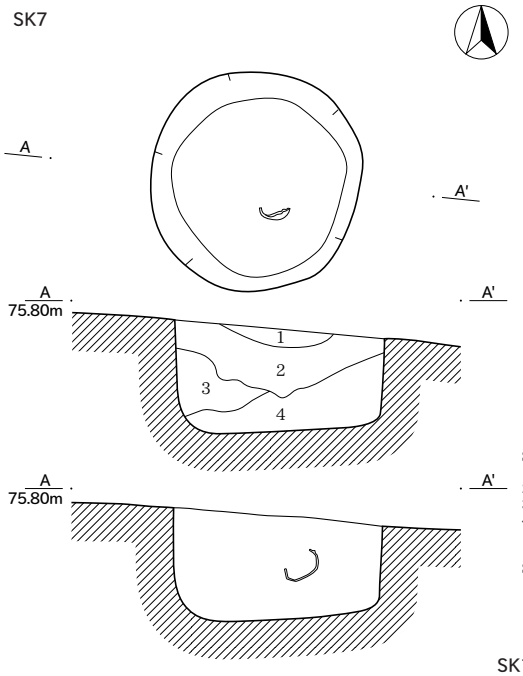
SK6



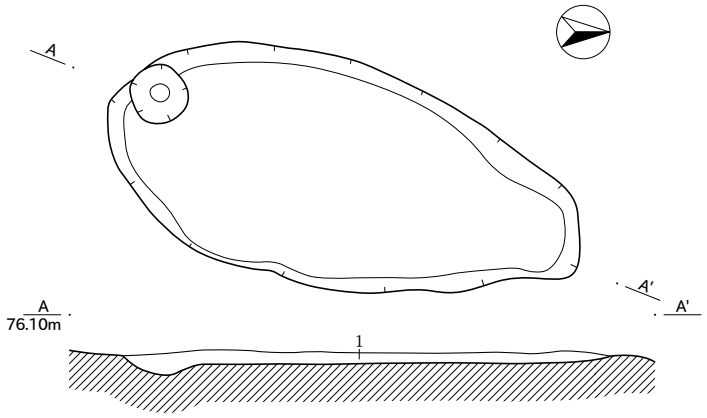
SK6　土層註記　Y6
1　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。炭化材（長4～7mm程度）・焼土粒（径4mm以下）少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒（径2～4mm程度）少量含む。炭化材（長4～7mm程度）・焼土粒（径4mm以下）少量含む。
3　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒（径5mm以下）少量含む。焼土粒（径4mm以下）多く含む。
4　暗褐色土（7.5YR3/3）　炭化材（長5mm程度）まばらに含む。微細な炭化物粒・焼土粒（径4mm以下）多く含む。
5　褐色土　（7.5YR4/6）　Ⅱ層土の再堆積。微細な炭化物粒をごく少量含む。
6　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長3～5mm程度）少量含む。
7　褐色土　（7.5YR4/6）　地山土の再堆積。微細な炭化物粒を少量含む。
8　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒・炭化材（長4mm程度）をごく少量含む。

0　（1：40）　2m

SK7



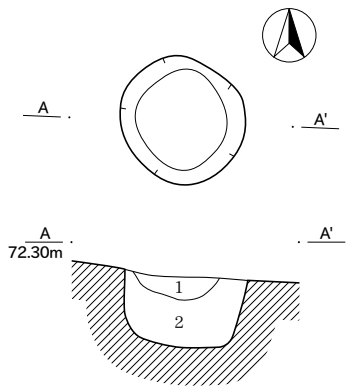
SX8



SK7
1　黄褐色土（10YR5/8）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長5～10mm程度）・焼土粒（径2mm以下）少量含む。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。
4　黄褐色土（10YR5/6）　微細な炭化物粒・炭化材（長5mm程度）少量含む。明褐色土粒がまだらに多く混じる。

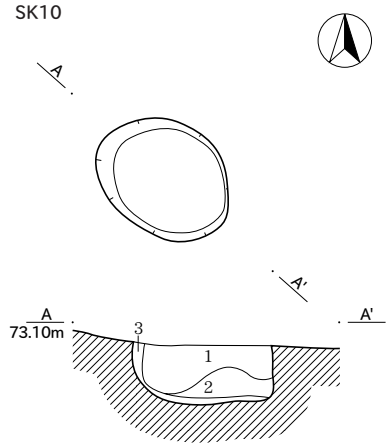
SX8
1　褐色土（7.5YR4/6）　炭化物粒（径4mm以下）特に多く含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。土器片が多く含まれる。

SK9



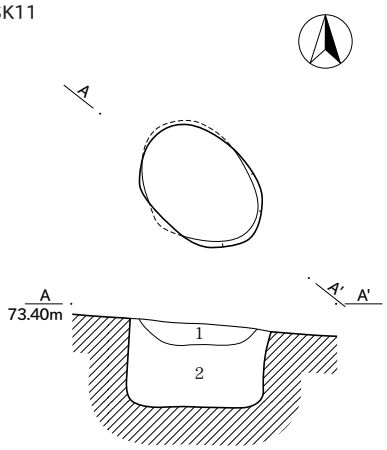
SK9
1　明褐色土（7.5YR5/8）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
炭化材（長4mm程度）まばらに含む。

SK10



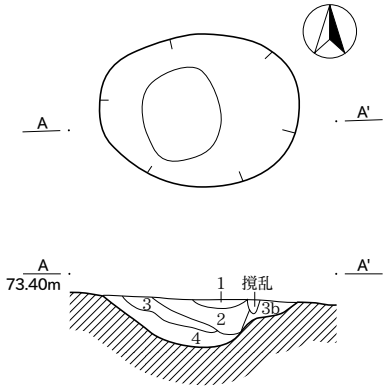
SK10
1　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長5～10mm程度）少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長5mm程度）少量含む。
3　明褐色土（7.5YR5/8）　微細な炭化物粒をごく少量含む。

SK11



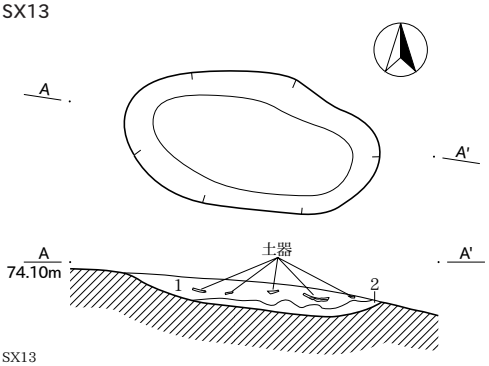
SK11
1　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
2　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒を少量含む。

SK12



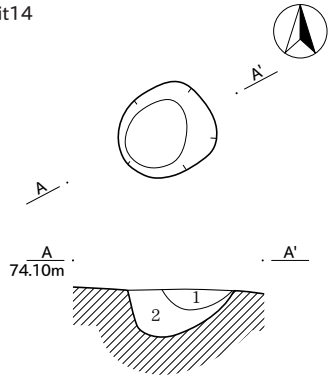
SK12
1　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　微細な炭化物粒を特に多く含む。
焼土粒（径2mm以下）まばらに含む。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長3～6mm程度）少量含む。焼土粒（径2mm以下）多く含む。
3b 褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径2mm以下）まばらに含む。
4　褐色土　（7.5YR4/6）　地山土の再堆積土を主とする。微細な炭化物粒をごく少量含む。

SX13



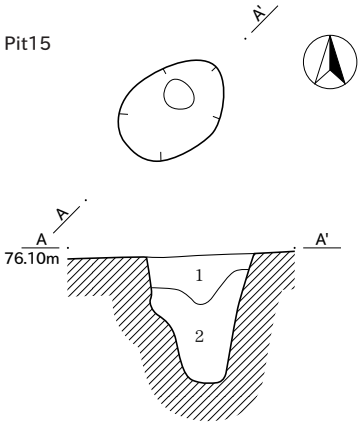
SX13
1　褐色土（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長4～7mm程度）多く含む。
2　褐色土（7.5YR4/6）　微細な炭化粒を少量含む。炭化材（長4mm程度）少量含む。

Pit14



Pit14
1　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。
2　暗褐色土（7.5YR3/3）　微細な炭化物粒を多く含む。
焼土粒（径4mm以下）まばらに含む。

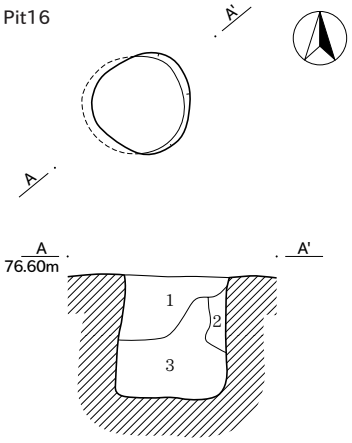
Pit15



Pit15
1　明褐色土（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長4mm程度）少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長4mm程度）少量含む。焼土粒（径3mm以下）少量含む。

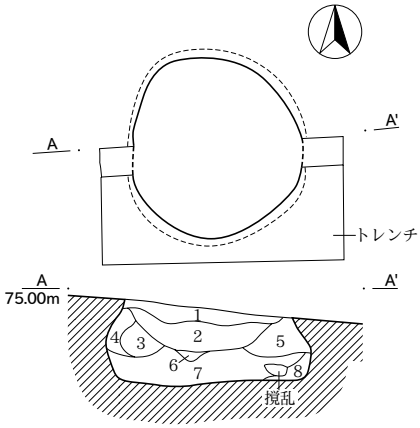
0　（1：40）　2m

Pit16



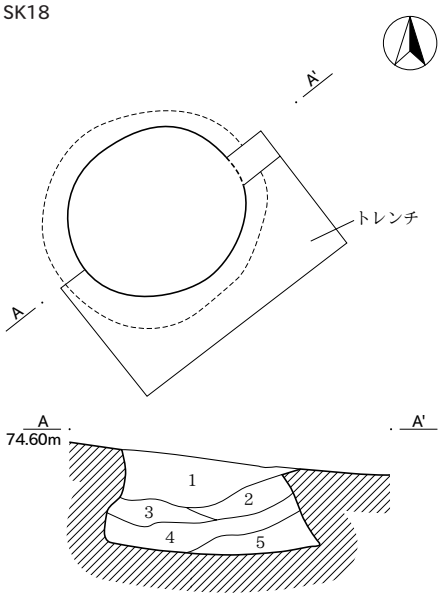
Pit16
1　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。
2　明褐色土（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長4mm程度）まばらに含む。焼土粒（径3mm以下）まばらに含む。

SK17



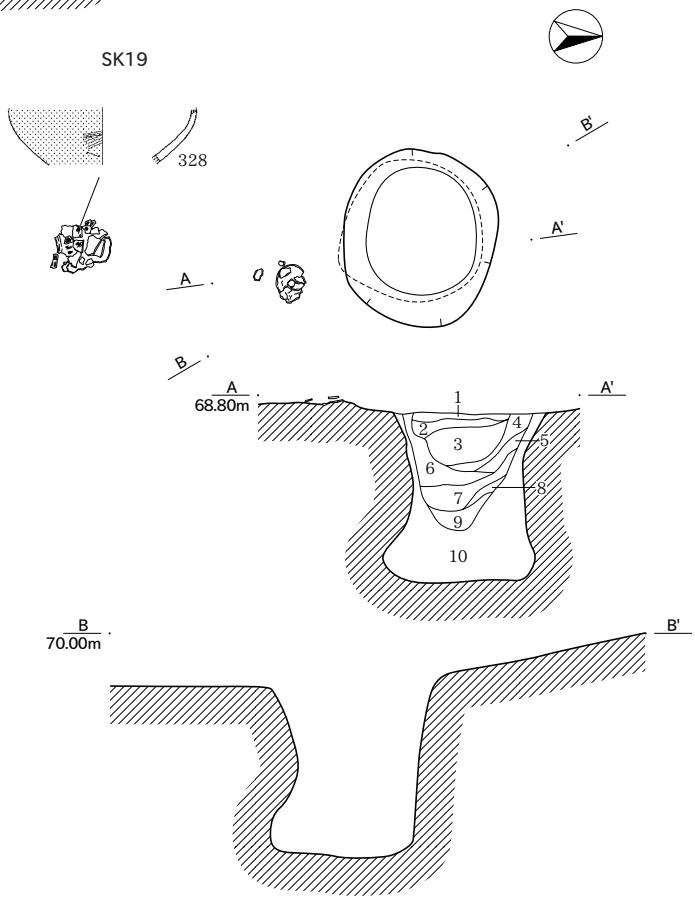
SK17
1　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒多く含む。炭化材（長3mm程度）少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長5mm程度）少量含む。
3　明褐色土　（7.5YR 5/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
4　明褐色土　（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
5　明褐色土　（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長5～7mm程度）ごく少量含む。
6　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒（径1mm以下）少量含む。
7　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　炭化物粒（径1mm以下）多く含む。炭化材（径5mm程度）まばらに含む。
8　明褐色土　（7.5YR5/8）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
撹乱　明褐色土　（7.5YR5/8）　木の根による撹乱層。微細な炭化物粒をごく少量含む。

SK18



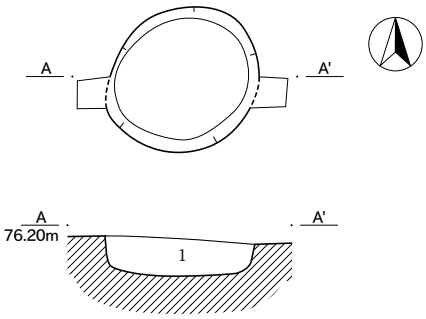
SK18
1　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒・炭化材（長5～10mm程度）・焼土粒（径2mm以下）多く含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。
2　明褐色土（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒・炭化材（長5～10mm程度）を少量含む。
3　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒・炭化材（長5～15mm程度）を少量含む。
4　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒・炭化材（長5～10mm程度）多く含む。
5　明褐色土（7.5YR5/8）　炭化物粒・炭化材（長5～10mm程度）を少量含む。

SK19

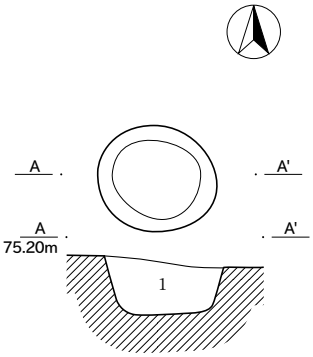


SK19
1　褐色　（7.5YR4/4）　暗褐色土粒をまだらに含む。炭化物粒（径1～5mm程度）少量含む。しまり弱く、粘性強い。
2　褐色　（7.5YR4/3）　1層と同質土だが、明色を呈する。しまり、粘性強い。
3　黒褐色土（5YR3/1）　砂っぽい黄褐色土粒（径1～5mm程度）多く含む。炭化粒（径1～3mm）少量含む。しまり2層より弱く、粘性強い。
4　灰褐色土（7.5YR4/2）　褐色土粒をまばらに含む。しまり、粘性やや強い。
5　褐色土　（10YR4/4）　褐色土粒は4層と同様。しまり、粘性やや強い。
6　褐色土　（10YR4/6）　褐色土粒は5層より少ない。炭化物粒（径1～3mm程度）少量含む。しまり弱く、粘性やや強い。
7　褐色土　（10YR4/4）　炭化物粒少量含む。しまり強く、粘性弱い。
8　褐色土　（10YR4/4）　黄褐色土粒少量含む。しまりやや強く、粘性強い。
9　暗褐色土（10YR4/6）　黄褐色土粒が多く混じる。炭化物粒少量含む。しまり弱く、粘性やや強い。
10 褐色　（7.5YR4/4）　土質的には9層と同じ。しまり弱く粘性やや強い。

SK20



Pit21

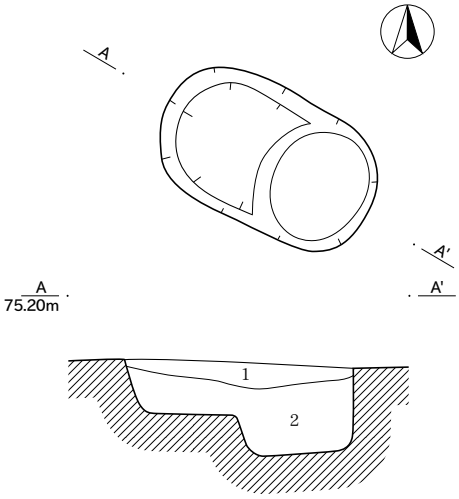


SK20
1　暗褐色土（7.5YR 3/4）　炭化物粒（径4mm以下）多く含む。

Pit21
1　褐色土（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。

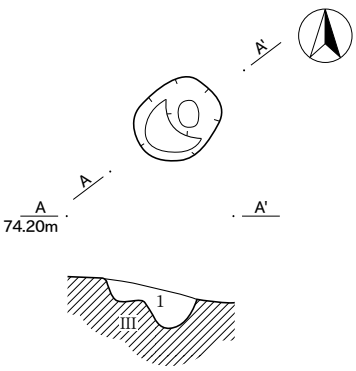
0　（1：40）　2m

SK22



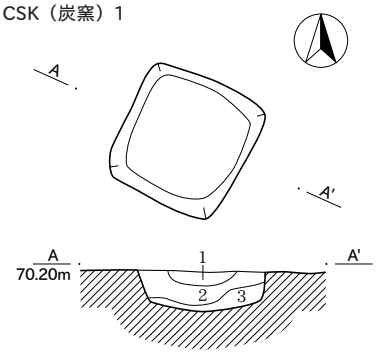
SK22
1　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物粒（径8mm以下）特に多く含む。土器片多く含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径3mm以下）少量含む。土器片含まない。

Pit23



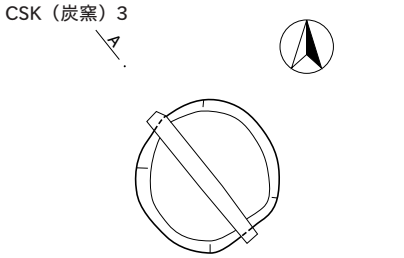
Pit23
1　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物粒（径3mm以下）少量含む。

CSK（炭窯）1



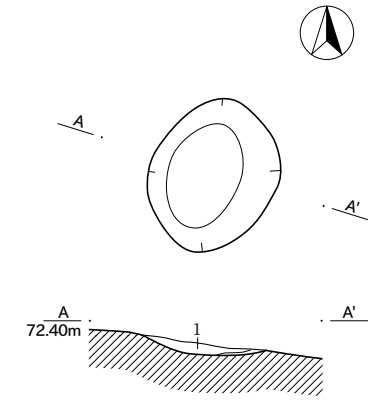
CSK（炭窯）1
1　暗褐色土　（10YR3/4）　微細な炭化物粒を多く含む。柱状の炭化材（長4mm程度）まばらに含む。焼土粒（径2mm程度）ごく少量含む。
2　褐色土　（10YR4/4）　炭化物粒（径5～10mm程度）少量含む。炭化物粒（径4mm以下）多く含む。焼土粒（径3mm程度）ごく少量含む。
3　極暗褐色土（7.5YR2/3）　炭化物粒（径5mm程度）極めて多く含む。微細な炭化物粒も多く含む。焼土粒（径2～5mm程度）少量含む。

CSK（炭窯）3



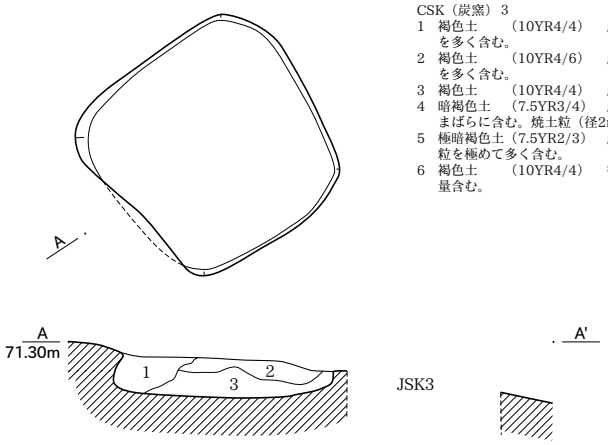
CSK（炭窯）3
1　褐色土　（10YR4/4）　炭化物粒（径5mm程度）をまばらに、微細な炭化物粒を多く含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径10mm程度）をまばらに、微細な炭化物粒を多く含む。
3　褐色土　（10YR4/4）　炭化物粒（径5～10mm程度）・微細な炭化物粒を多く含む。
4　暗褐色土　（7.5YR3/4）　炭化物粒（径5mm以下）多く含む。炭化材（長40mm程度）まばらに含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。
5　極暗褐色土（7.5YR2/3）　炭化物粒（径5mm程度）まばらに含む。微細な炭化物粒を極めて多く含む。
6　褐色土　（10YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径2mm以下）ごく少量含む。

CSK（炭窯）6



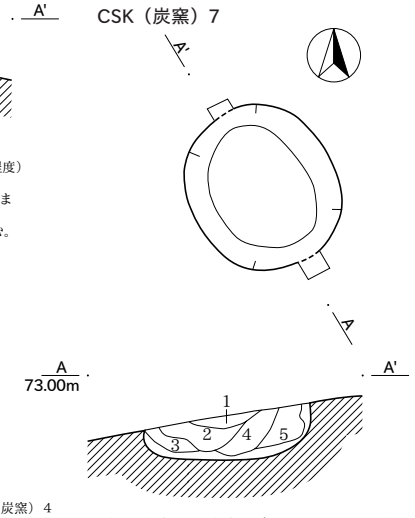
CSK（炭窯）6
1　黒褐色土（7.5YR2/2）　微細な炭化物粒を主とする層。焼土粒（径12mm以下）多く含む。柱状の炭化材（最長5cm程度）特に多く含む。

CSK（炭窯）2

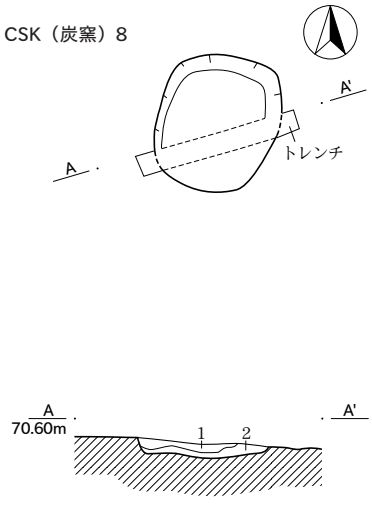


CSK（炭窯）2
1　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。柱状の炭化材（径10～20mm程度）まばらに含む。焼土粒（径3mm程度）少量含む。
2　黒褐色土（10YR2/3）　微細な炭化物粒を多く含む。柱状の炭化材（長10mm程度）まばらに含む。焼土粒（径2mm以下）を少量含む。
3　黒褐色土（10YR2/2）　炭化物粒（径5mm程度）・微細な炭化物粒を極めて多く含む。柱状の炭化材（長20mm程度）まばらに含む。焼土粒（径3mm以下）少量含む。

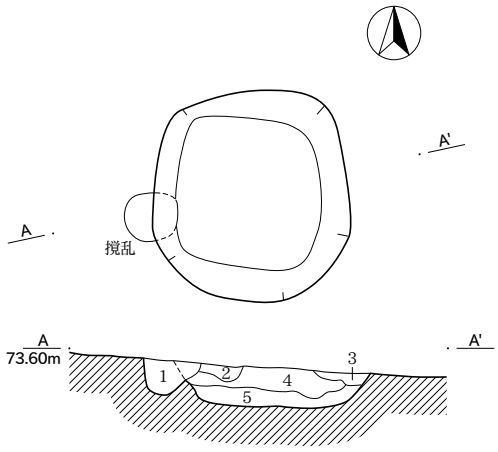
CSK（炭窯）7



CSK（炭窯）8



CSK（炭窯）4



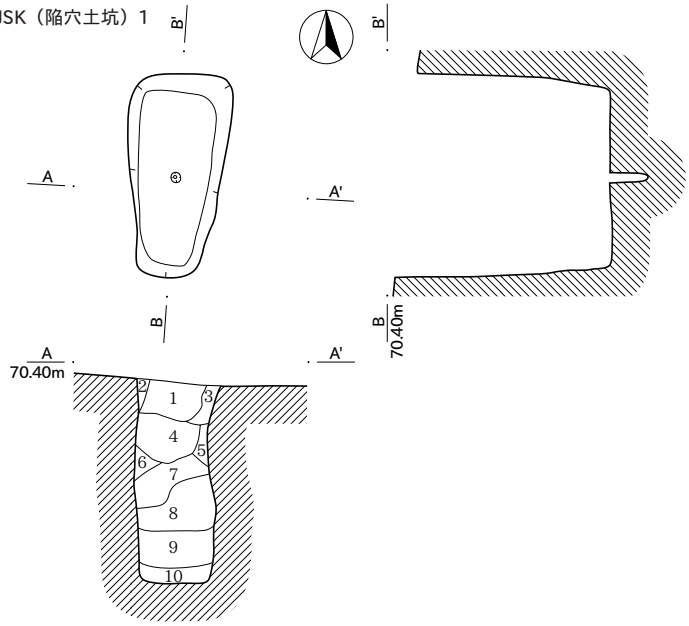
CSK（炭窯）4
1　褐色土　（7.5YR4/4）　黒褐色土に黄褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径2mm以下）ごく少量含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（径10～20mm程度）・焼土粒（径1mm以下）ごく少量含む。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒（径3mm程度）・焼土粒（径5～10mm程度・径2mm以下）少量含む。微細な炭化物粒多く含む。
4　黒褐色土（10YR2/3）　炭化物粒（径5mm程度）・焼土粒（径10mm程度・径2mm以下）少量含む。微細な炭化物粒多く含む。
5　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物粒（径5～10mm程度）・微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径5mm程度・径2mm以下）少量含む。

CSK（炭窯）7
1　黒褐色土（10YR2/3）　微細な炭化物粒を多く含む。
2　褐色土　（10YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径5mm以下）ごく少量含む。
3　暗褐色土（10YR3/3）　微細な炭化物粒を多く含む　炭化材（長5mm程度）・焼土粒（径5mm以下）を少量含む。
4　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒・炭化材（長5～10mm）多く含む。焼土粒（径10mm以下）少量含む。
5　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒・焼土粒（径5mm以下）少量含む。

CSK（炭窯）8
1　褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒（径1～5mm程度）・炭化材（長1～4cm程度）多く含む。しまり強く、粘性やや弱い。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　炭化物粒・炭化材１層より多く含む。焼土粒（径1～5mm程度）ごく少量含む。しまりやや弱く、粘性あり。

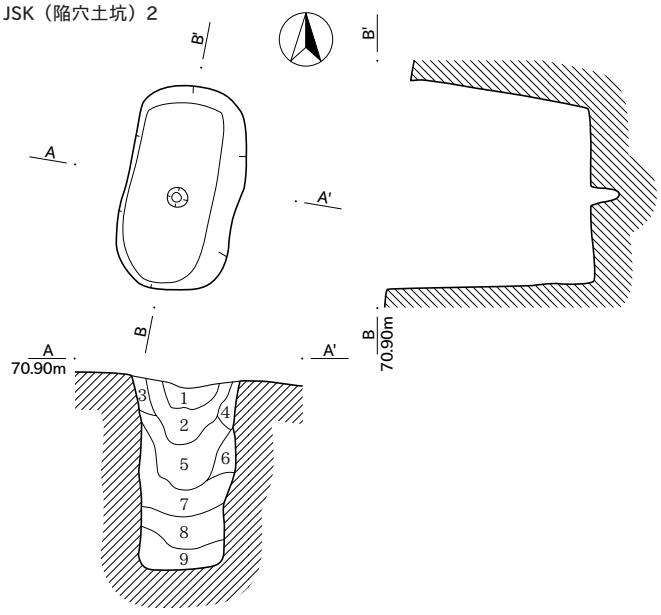
0　（1：40）　2m

JSK（陥穴土坑）1



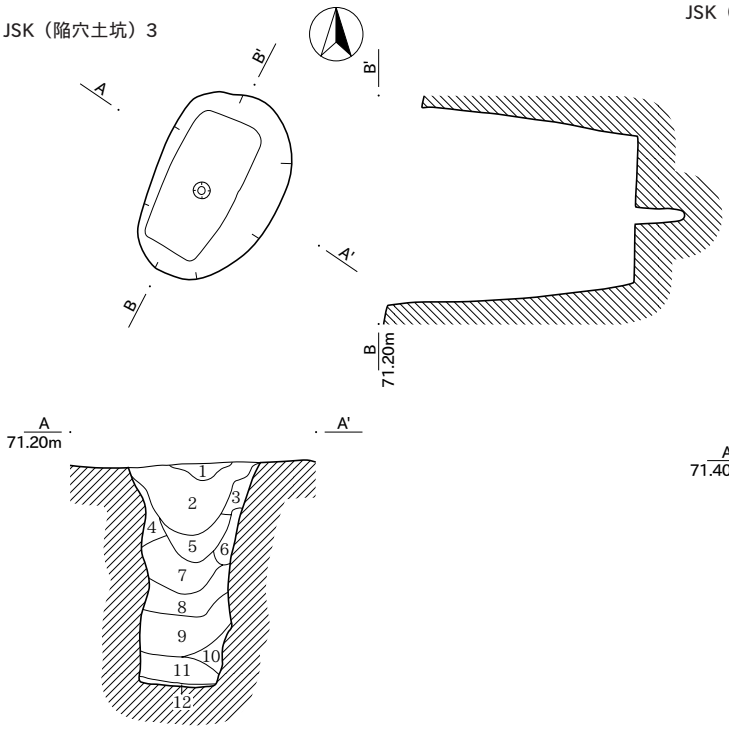
JSK（縄文土坑）1
1　黒褐色土　（7.5YR3/1）　微細な炭化物粒・焼土粒（径3mm以下）多く含む。
2　明黄褐色土　（10YR6/6）　黄褐色土（「層土）を主とする。微細な炭化物粒をごく少量含む。
3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
4　黒褐色土　（10YR2/2）　微細な炭化物粒・焼土粒（径2mm以下）多く含む。
5　灰褐色土　（7.5YR4/2）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
6　黒褐色土　（7.5YR3/1）　微細な炭化物粒を多く含む。微細な焼土粒少量含む。しまり弱い。
7　黒褐色土　（10YR2/3）　微細な炭化物粒・焼土粒を少量含む。しまり弱い。
8　黒褐色土　（10YR2/3）　黄褐色土粒（径5mm以下）まだらに多く含む。しまり弱い。
9　黄褐色土　（10YR5/8）　地山土（」層）の再堆積。混入物をほとんど含まない。
10 黒褐色土　（10YR2/3）　微細な炭化物粒を少量含む。

JSK（陥穴土坑）2



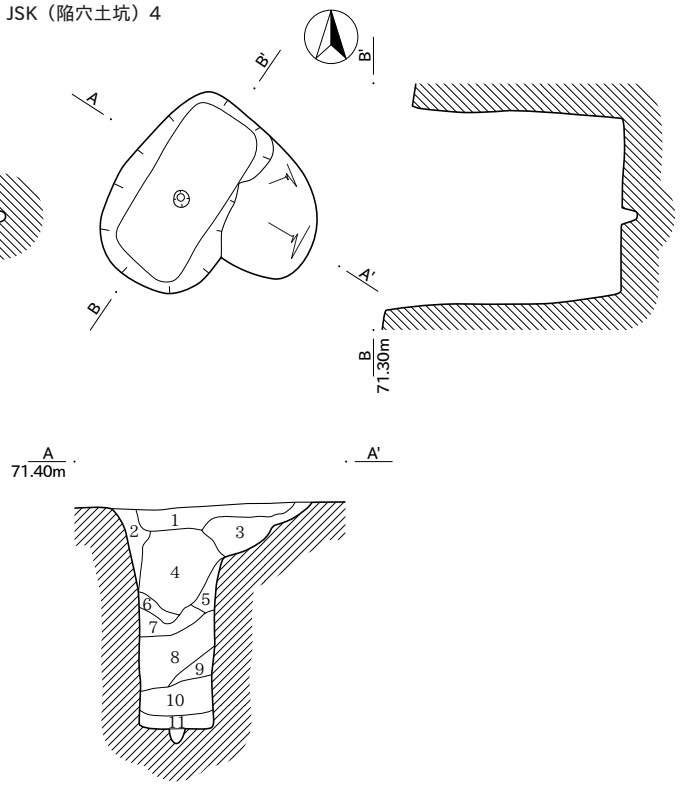
JSK（縄文土坑）2
1　黒色土　（7.5YR2/1）　炭化物粒（径5mm程度）・微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径2mm以下）少量含む。
2　灰黄褐色土　（10YR4/2）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径3mm以下）少量含む。
3　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　微細な炭化物粒を少量含む。
4　黄褐色土　（10YR5/8）　黄褐色土（「層土）を主とする。微細な炭化物粒をごく少量含む。
5　極暗褐色土　（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒・焼土粒（径3mm以下）少量含む。
6　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をまばらに含む。しまり弱い。
7　暗褐色土　（10YR3/4）　炭化物粒（3～5mm程度）を少量含む。微細な炭化物粒を多く含む。しまり特に弱い。
8　黒褐色土　（10YR2/3）　微細な炭化物粒を少量含む。しまり弱い。
9　暗褐色土　（10YR3/3）　微細な炭化物粒を少量含む。しまり弱い。

JSK（陥穴土坑）3



JJSK（縄文土坑）3
1　暗褐色土（7.5YR3/3）　炭化物粒（径3mm以下）多く含む。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　炭化物粒（径3～8mm程度）を少量含む。微細な炭化物粒を多く含む。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。
4　明褐色土（7.5YR5/6）　「層土を主とし、黒褐色土が少量混じる。微細な炭化物粒を少量含む。
5　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物粒（径1.5～5mm程度）を少量含む。微細な炭化物粒を多く含む。しまり弱い。
6　明褐色土（7.5YR5/8）　4層とほぼ同じ。微細な炭化物粒を少量含む。
7　暗褐色土（10YR3/4）　微細な炭化物粒を多く含む。しまり特に弱い。
8　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。しまり特に弱い。
9　黒褐色土（7.5YR2/2）　地山土粒（」層土：径3mm以下）少量含む。
10 褐色土　（7.5YR4/4）　8層と同じ。しまり弱い。
11 明褐色土（7.5YR5/8）　主に地山土（」層）を主とする。混入物なし。
12 褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。

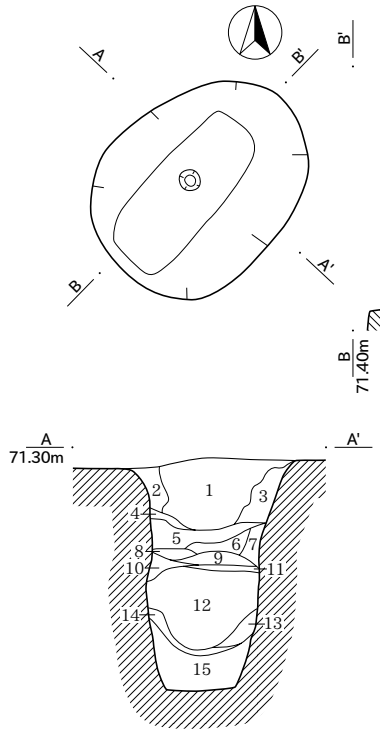
JSK（陥穴土坑）4



JSK（縄文土坑）4
1　極暗褐色土（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒を多く含み、炭化物粒（3～5mm程度）少量含む。
2　黄褐色土　（10YR5/6）　微細な炭化物粒少量含む。
3　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒少量含む。
4　黒褐色土　（10YR2/3）　微細な炭化物粒を多く含む。
5　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり弱い。
6　黄褐色土　（10YR5/8）　微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり弱い。
7　極暗褐色土（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり弱い。
8　極暗褐色土（7.5YR2/3）　黄褐色土粒・微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり弱い。
9　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり特に弱い。
10 黄褐色土　（10YR5/8）　黄褐色土（」層土）を主とする。微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり弱い。
11 黒褐色土　（10YR2/3）　微細な炭化物粒を少量含む。

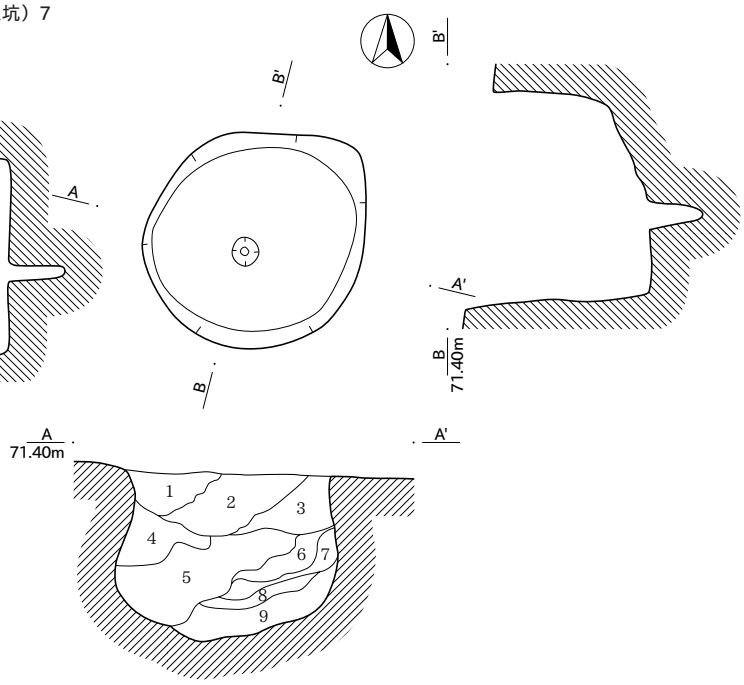
0　（1：40）　2m

JSK（陥穴土坑）5



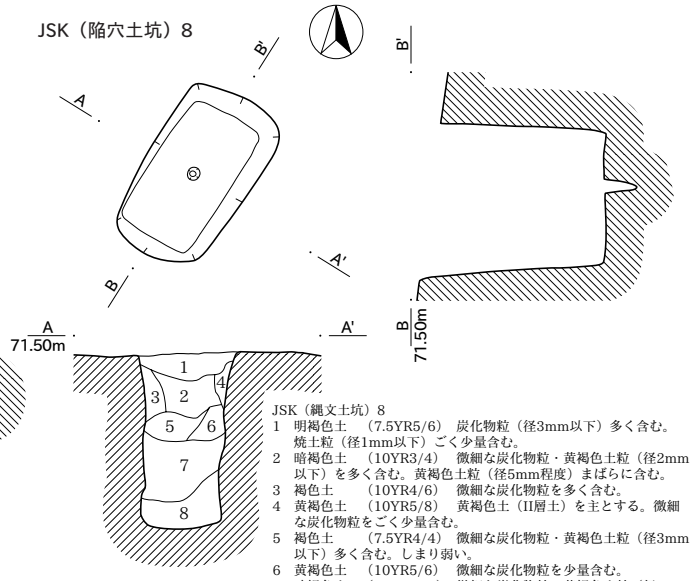
JSK（縄文土坑）5
1　極暗褐色土（7.5YR2/3）　炭化物粒（径5～20mm程度）をまばらに含み、微細な炭化物粒・焼土粒を多く含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
3　明褐色土　（7.5YR5/8）　黄褐色土（II層土）を主とする。微細な炭化物粒をごく少量含む。
4　黄褐色土　（10YR5/8）　黄褐色土（II層土）を主とする。微細な炭化物粒をごく少量含む。
5　極暗褐色土（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒を少量含む。
6　暗褐色土　（10YR3/4）　微細な炭化物粒を少量含む。
7　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
8　黄褐色土　（10YR5/6）　黄褐色土（II層土）を主とする。微細な炭化物粒をごく少量含む。
9　黒褐色土　（7.5YR3/2）　微細な炭化物粒・黄褐色土粒（径3mm以下）多く含む。しまり弱い。
10 褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり弱い。
11 褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり弱い。
12 暗褐色土　（7.5YR3/4）　微細な炭化物粒を多く含む。しまり特に弱い。
13 黄褐色土　（10YR5/6）　炭化物粒は殆ど含まない。
14 黄褐色土　（10YR5/6）　しまり特に弱い。
15 黒褐色土　（7.5YR3/2）　微細な炭化物粒をごく少量含む。しまり弱い。

JSK（陥穴土坑）7



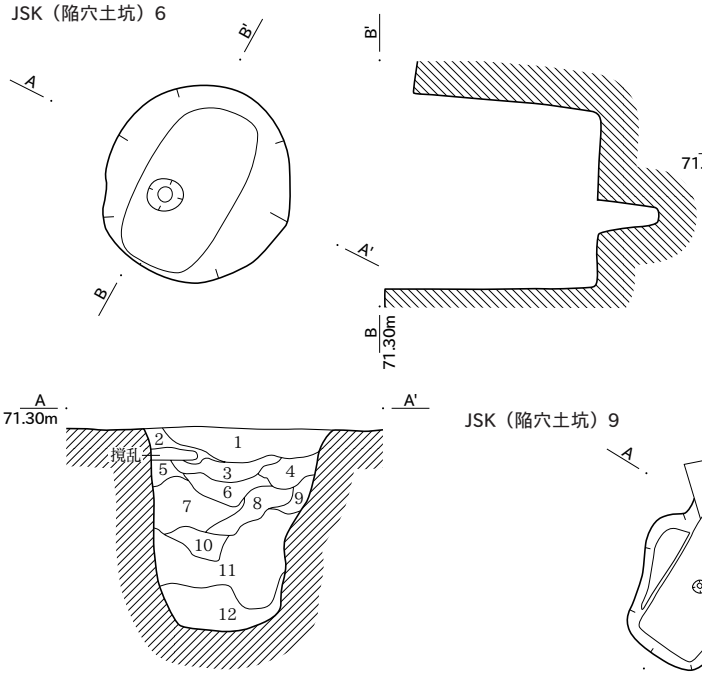
JSK（縄文土坑）7
1　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径5mm程度）・微細な炭化物粒・焼土粒を少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/3）　炭化物粒（径20～30mm程度）をまばらに含み、微細な炭化物粒・焼土粒を多く含む。
3　褐色土　（7.5YR4/4）　炭化物粒・焼土粒（径2～5mm程度）ごく少量含む。
4　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。しまり弱い。
5　褐色土　（10YR4/4）　炭化物粒（径5mm程度）焼土粒（径2mm以下）を少量含む。微細な炭化物粒・黄褐色土粒（径2mm程度）を多く含む。しまり弱い。
6　黄褐色土（10YR5/6）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒（径３mm以下）ごく少量含む。しまり弱い。
7　褐色土　（7.5YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。しまり弱い。
8　黄褐色土（10YR5/6）　微細な炭化物粒を少量含む。しまり弱い。
9　黒褐色土（10YR2/3）　炭化物粒（径5～10mm程度）・焼土粒（径3mm以下）を少量含む。微細な炭化物粒を多く含む。しまり特に弱い。

JSK（陥穴土坑）8



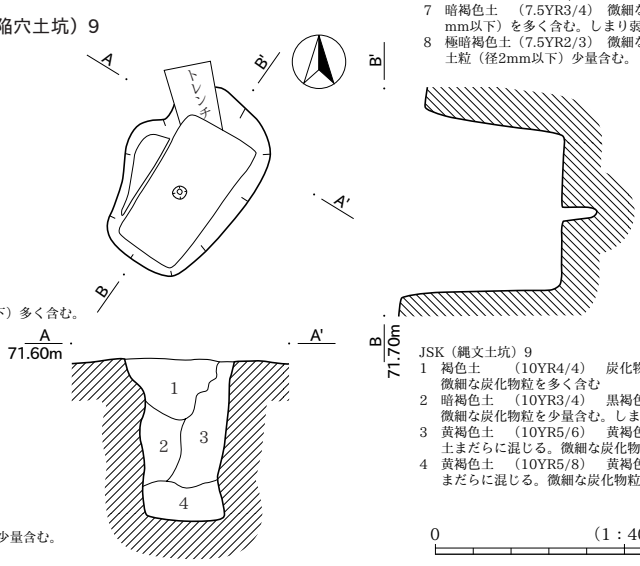
JSK（縄文土坑）8
1　明褐色土　（7.5YR5/6）　炭化物粒（径3mm以下）多く含む。焼土粒（径1mm以下）ごく少量含む。
2　暗褐色土　（10YR3/4）　微細な炭化物粒・黄褐色土粒（径2mm以下）を多く含む。黄褐色土粒（径5mm程度）まばらに含む。
3　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。
4　黄褐色土　（10YR5/8）　黄褐色土（II層土）を主とする。微細な炭化物粒をごく少量含む。
5　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒・黄褐色土粒（径3mm以下）多く含む。しまり弱い。
6　黄褐色土　（10YR5/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
7　暗褐色土　（7.5YR3/4）　微細な炭化物粒・黄褐色土粒（径5mm以下）を多く含む。しまり弱い。
8　極暗褐色土（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒を多く含む。黄褐色土粒（径2mm以下）少量含む。しまり弱い。

JSK（陥穴土坑）6



JSK（縄文土坑）6
1　黒褐色土（10YR2/3）　微細な炭化物粒をまばら含む。黄褐色土粒（径3mm以下）多く含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
3　黒褐色土（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。
4　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径3mm以下）少量含む。
5　黄褐色土（10YR5/8）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
6　黒褐色土（7.5YR2/2）　炭化物粒（径3～5mm程度）まばらに含み、微細な炭化物粒を多く含む。
7　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。
8　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。黄褐色土粒（II・III層土：径2mm程度）特に多く含む。焼土粒（径1mm以下）ごく少量含む。
9　明褐色土（7.5YR5/6）　炭化物粒（径3mm以下）ごく少量含む。
10 黄褐色土（10YR5/8）　微細な炭化物粒を少量含む。しまり弱い。
11 黄褐色土（10YR5/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
12 黄褐色土（10YR5/8）　黄褐色土（II層土）を主とする。微細な炭化物粒をごく少量含む。

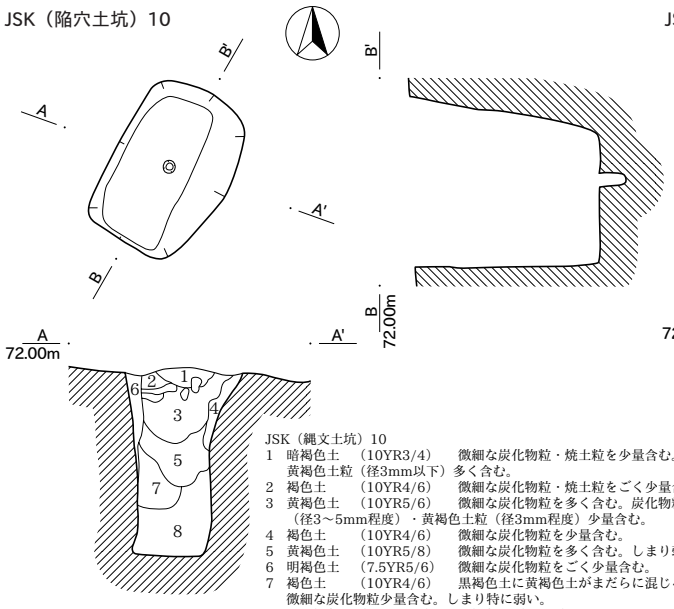
JSK（陥穴土坑）9



JSK（縄文土坑）9
1　褐色土　（10YR4/4）　炭化物粒（径3～5mm程度）少量含む。微細な炭化物粒を多く含む
2　暗褐色土　（10YR3/4）　黒褐色土に黄褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒を少量含む。しまり弱い。
3　黄褐色土　（10YR5/6）　黄褐色土（II層土）を主とし、黒褐色土まだらに混じる。微細な炭化物粒をごく少量含む。
4　黄褐色土　（10YR5/8）　黄褐色土（II層土）を主とし、黒褐色土まだらに混じる。微細な炭化物粒をごく少量含む。

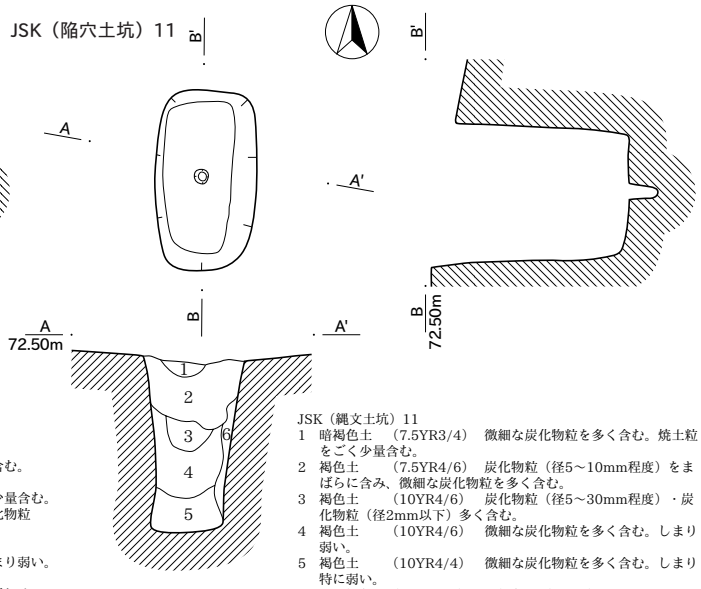
0　（1：40）　2m

JSK（陥穴土坑）10



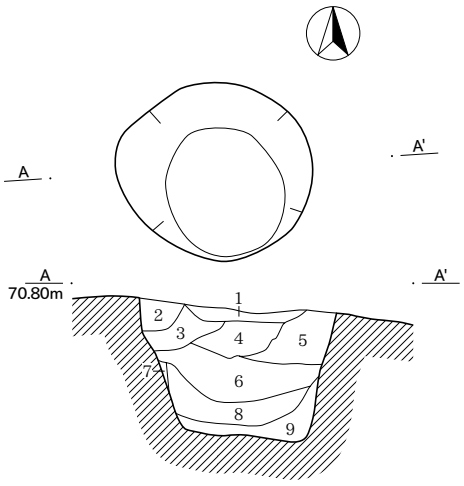
JSK（縄文土坑）10
1　暗褐色土　（10YR3/4）　微細な炭化物粒・焼土粒を少量含む。黄褐色土粒（径3mm以下）多く含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒・焼土粒をごく少量含む。
3　黄褐色土　（10YR5/6）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化物粒（径3～5mm程度）・黄褐色土粒（径3mm程度）少量含む。
4　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。
5　黄褐色土　（10YR5/8）　微細な炭化物粒を多く含む。しまり弱い。
6　明褐色土　（7.5YR5/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
7　褐色土　（10YR4/6）　黒褐色土に黄褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒少量含む。しまり特に弱い。
8　明黄褐色土（10YR6/8）　黄褐色土（II層土）を主とする。しまり弱い。

JSK（陥穴土坑）11



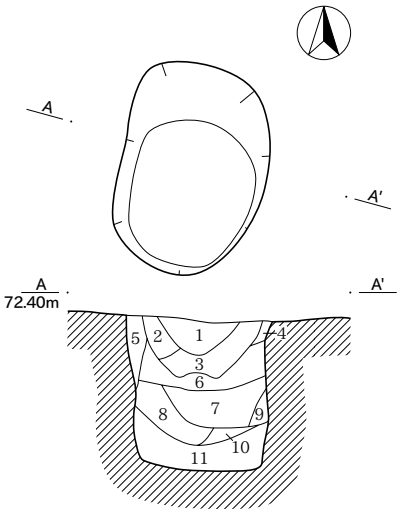
JSK（縄文土坑）11
1　暗褐色土　（7.5YR3/4）　微細な炭化物粒を多く含む。焼土粒をごく少量含む。
2　褐色土　（7.5YR4/6）　炭化物粒（径5～10mm程度）をまばらに含み、微細な炭化物粒を多く含む。
3　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径5～30mm程度）・炭化物粒（径2mm以下）多く含む。
4　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を多く含む。しまり弱い。
5　褐色土　（10YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。しまり特に弱い。
6　明黄褐色土（10YR6/8）　黄褐色土（II層土）を主とする。微細な炭化物粒を少量含む。

JSK（縄文土坑）12



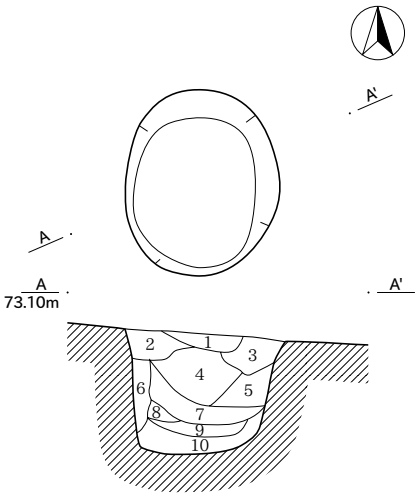
JSK（縄文土坑）12
1　黒褐色土　（10YR2/3）　微細な炭化物粒をごく少量含む。黄褐色土粒（径4mm以下）まばらに含む。
2　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒をごく少量含む。
3　暗褐色土　（7.5YR3/3）　黄褐色土粒（径3mm以下）まばらに含む。
4　黒褐色土　（7.5YR3/2）　微細な炭化物粒・焼土粒を少量含む。黄褐色土粒（径5mm以下）多く含む。
5　暗褐色土　（7.5YR3/3）　微細な炭化物粒・焼土粒を少量含む。黄褐色土粒（径5mm程度）を少量含み、微細な黄褐色土粒を多く含む。
6　ごく暗褐色（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒・黄褐色土粒を少量含む。黄褐色土粒（径15mm程度）まばらに含む。
7　褐色土　（10YR4/6）　黄褐色土（II層土）を主とする。混入物なし。
8　黒褐色土　（10YR2/2）　黄褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒・黄褐色土粒含む。黄褐色土粒（径5mm程度）をまばらに含む。
9　褐色土　（10YR4/6）　黄褐色土（II層土）を主とする。微細な炭化物粒を少量含む。

JSK（縄文土坑）13



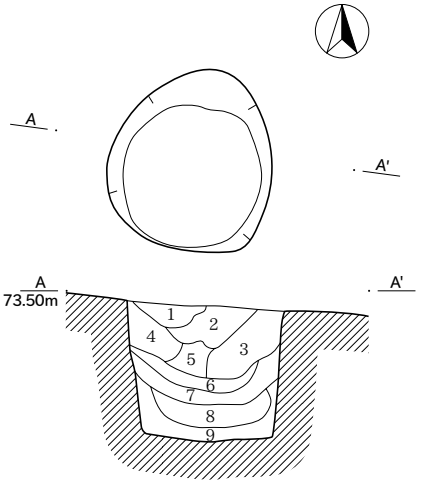
JSK（縄文土坑）13
1　黒色土　（10YR2/1）　黄褐色土粒（径5mm程度）まばらに含む。微細な黄褐色土粒を多く含む。
2　褐色土　（10YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。黄褐色土粒（径3mm以下）多く含む。
3　黒褐色土　（10YR2/3）　微細な炭化物粒・黄褐色土粒を少量含む。
4　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を少量含む。
5　褐色土　（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒・焼土粒を少量含む。
6　極暗褐色土（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒・焼土粒を少量、黄褐色土粒を多く含む。
7　極暗褐色土（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒・黄褐色土粒を少量含む。黄褐色土粒（径5mm程度）まばらに含む。
8　黄褐色土　（10YR5/6）　黒褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒を少量含む。
9　黄褐色土　（10YR5/6）　黒褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒を少量含む。
10 暗褐色土　（7.5YR3/3）　微細な炭化物粒・黄褐色土粒を少量含む。黄褐色土粒（径5mm程度）まばらに含む。
11 黒色土　（10YR2/1）　微細な炭化物粒・黄褐色土粒を少量含む。

JSK（縄文土坑）14



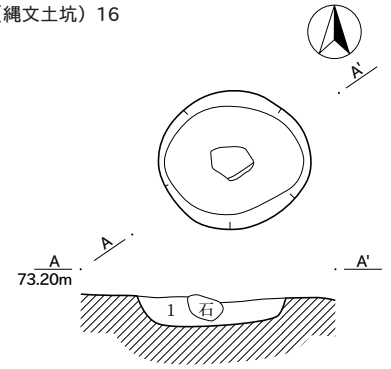
JSK（縄文土坑）14
1　黒色土　（7.5YR2/2）　微細な黄褐色土粒を少量含む。
2　褐色土　（10YR4/4）　黒褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒を少量含む。
3　極暗褐色土（7.5YR2/3）　黄褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒を少量含む。微細な黄褐色土粒多く含む。
4　黒色土　（10YR2/1）　黄褐色土がまだらに混じる。微細な黄褐色土粒を多く含む。
5　褐色土　（10YR4/6）　黄褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒・黄褐色土粒を少量含む。炭化物粒（径10mm程度）まばらに含む。
6　褐色土　（10YR4/6）　微細な炭化物粒を少量含む。黄褐色土（II層土）を主とする。
7　暗褐色土　（7.5YR3/4）　微細な炭化物粒を少量含む。微細な黄褐色土粒多く含む。
8　極暗褐色土（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒を少量含む。微細な黄褐色土粒を多く含む。
9　黒褐色土　（7.5YR2/2）　微細な黄褐色土粒を多く含む。
10 褐色土　（7.5YR4/4）　黒褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒を多く含む。

JSK（縄文土坑）15



JSK（縄文土坑）15
1　褐色土　（7.5YR4/4）　黒褐色土がまだらに混じる。炭化物粒（径5mm程度）・微細な炭化物粒・黄褐色土粒を少量含む。
2　黒褐色土　（7.5YR3/2）　黄褐色土がまだらに混じる。炭化物粒（径5～10mm程度）・微細な炭化物粒・焼土粒を少量含む。微細な黄褐色土粒を多く含む。
3　黄褐色土　（10YR5/6）　黒褐色土がまだらに混じる。炭化物粒（径3mm程度）・微細な焼土粒（径2mm以下）少量含む。微細な炭化物粒・黄褐色土粒を多く含む。
4　黄褐色土　（10YR5/6）　黒褐色土がまだらに混じる。炭化物粒（径3mm程度）まばらに含む。炭化物粒（径1mm以下）少量含む。
5　極暗褐色土（7.5YR2/3）　微細な炭化物粒・焼土粒を少量含む。黄褐色土粒（径3mm以下）多く含む。
6　褐色土　（7.5YR4/4）　黒褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒を少量含む。
7　褐色土　（10YR4/6）　炭化物粒（径3mm以下）まばらに含む。微細な炭化物粒を少量含む。
8　黒褐色土　（7.5YR3/2）　微細な炭化物粒を少量含む。
9　黄褐色土　（10YR5/8）　黄褐色土（II層土）を主とする。一部で黒褐色土がまだらに混じる。微細な炭化物粒を少量含む。

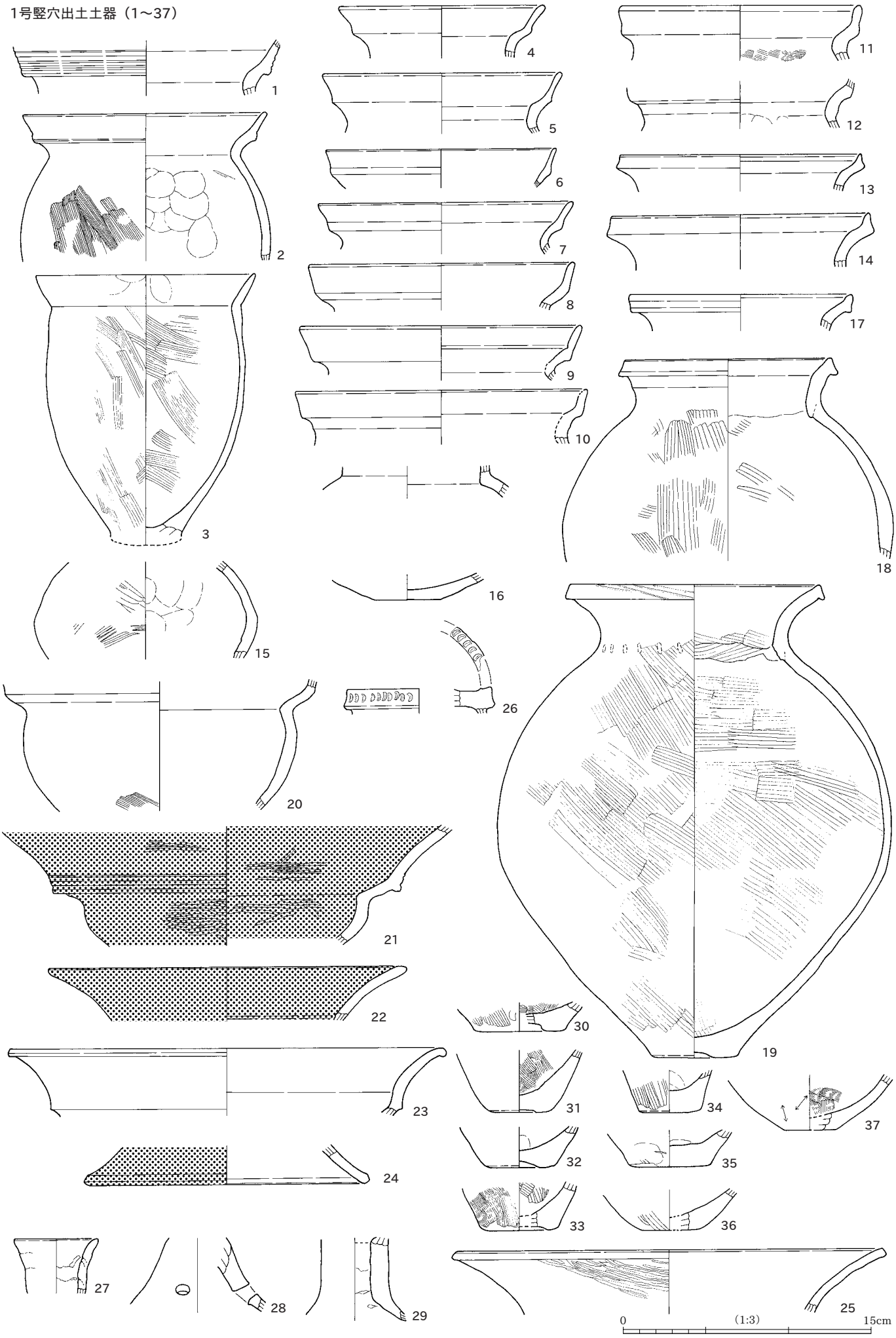
JSK（縄文土坑）16



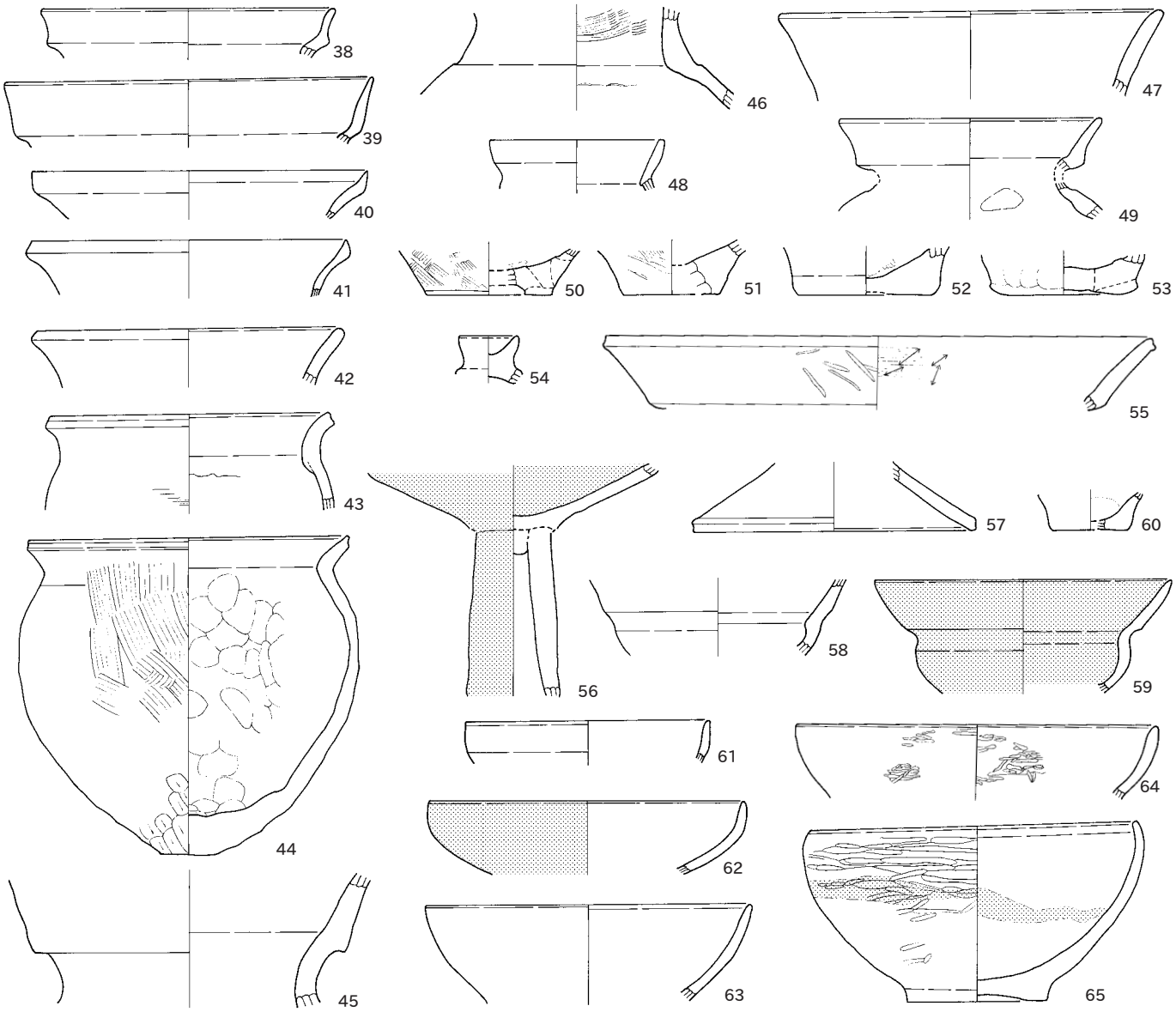
JSK（縄文土坑）16
1　褐色土（7.5YR4/4）　微細な炭化物粒を多く含む。炭化材（長10mm以下）多く含む。

0　（1：40）　2m

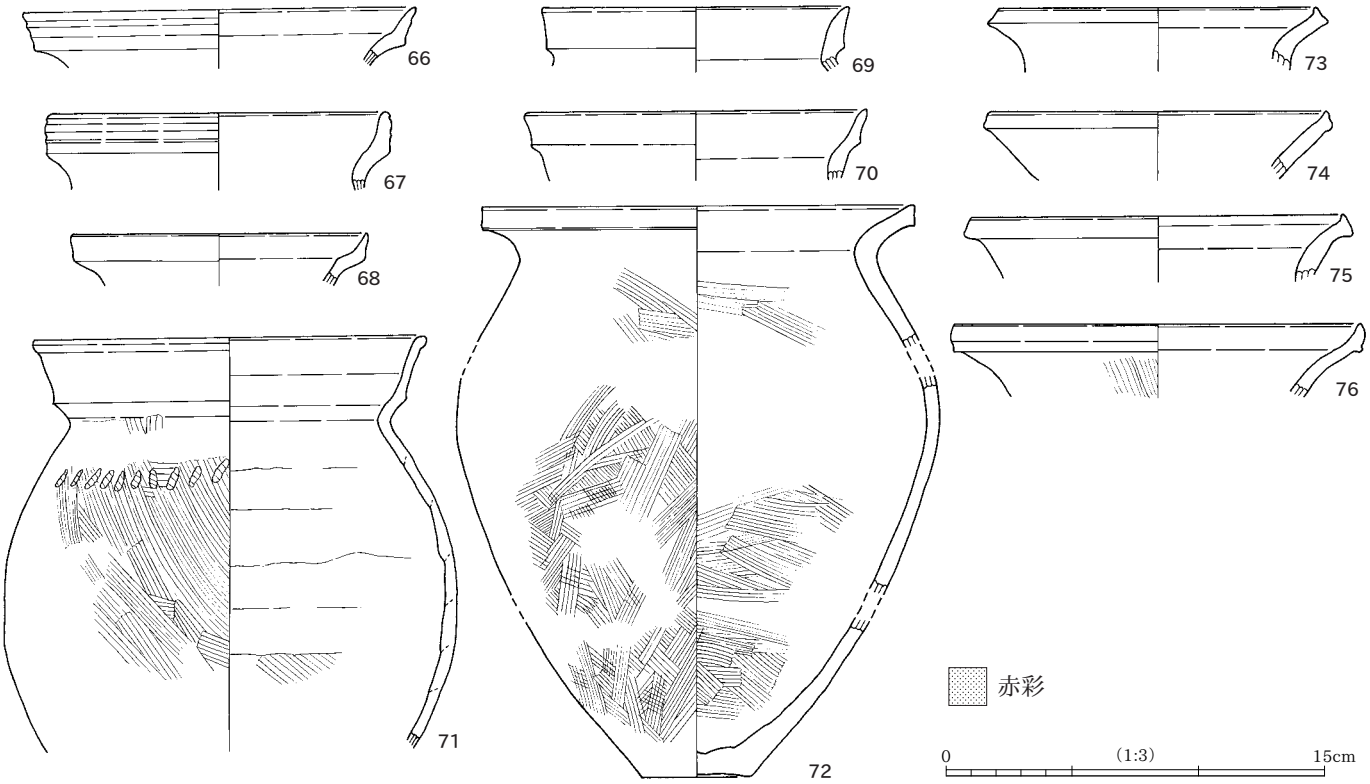
1号竪穴出土土器（1～37）



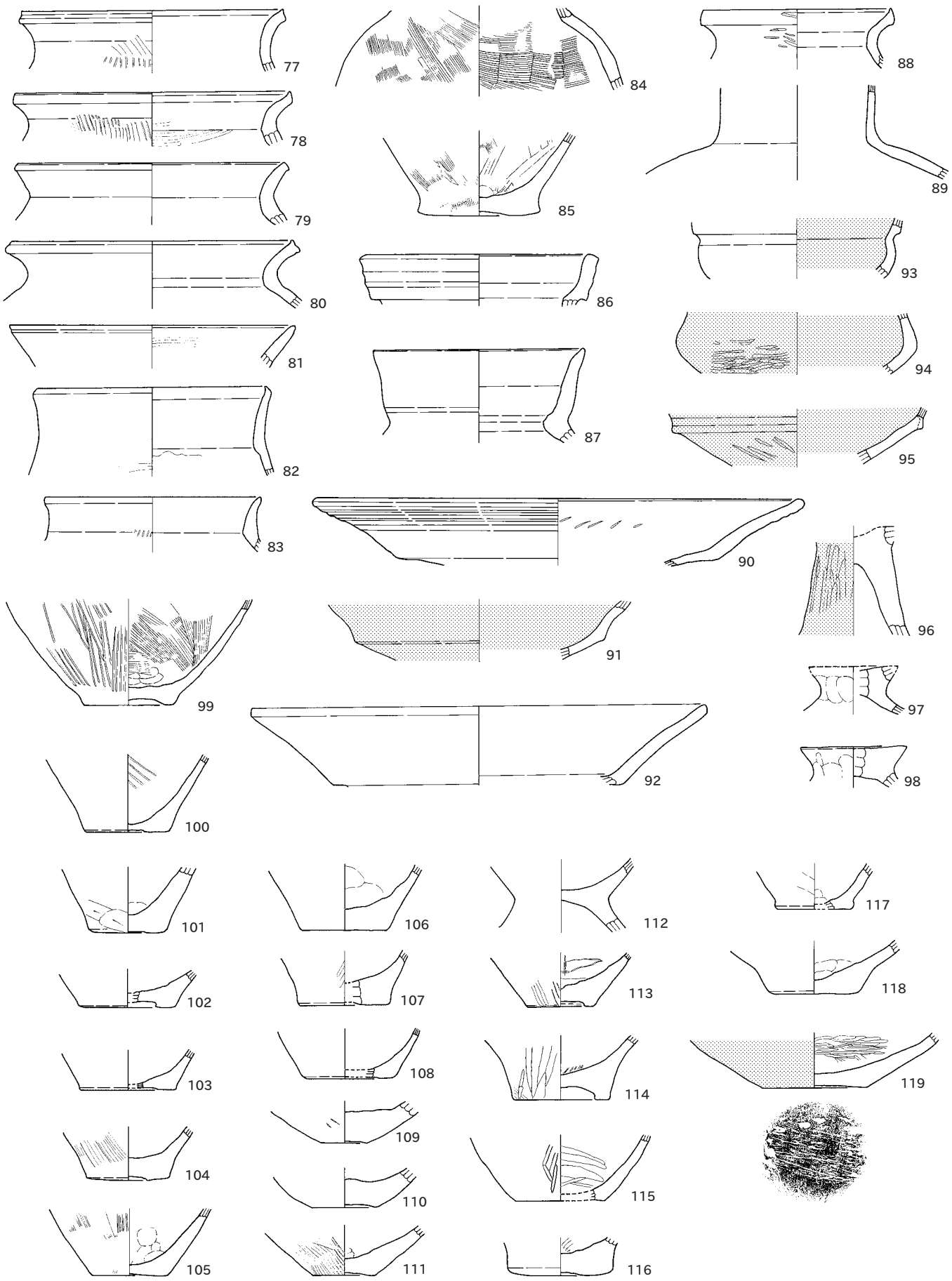
2号竪穴出土土器（38～65）



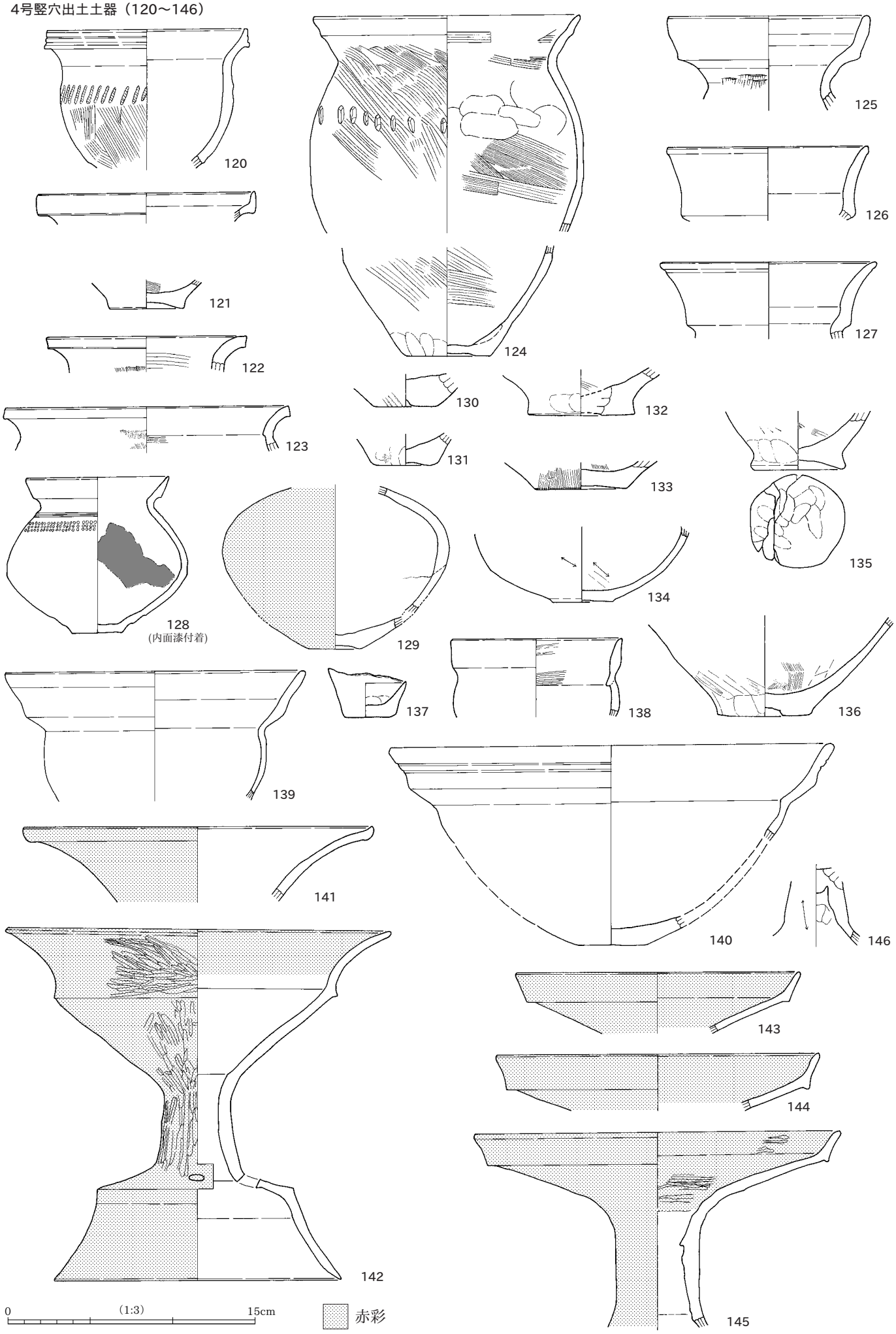
3号竪穴出土土器1（66～119）



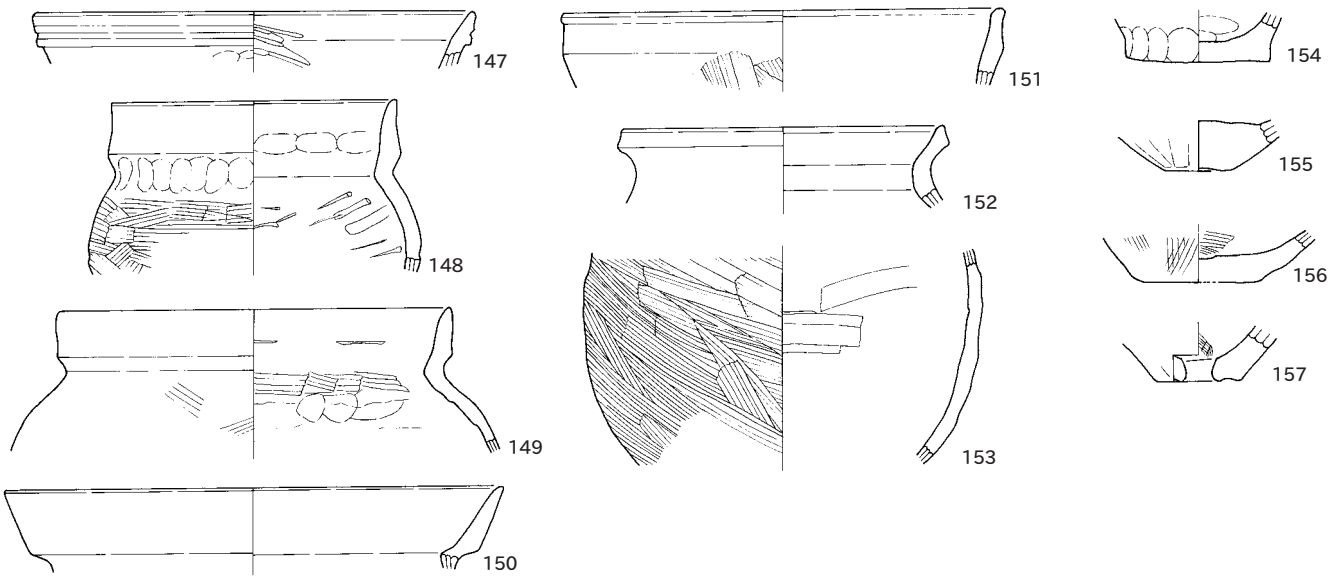
3号竪穴出土土器2（66～119）



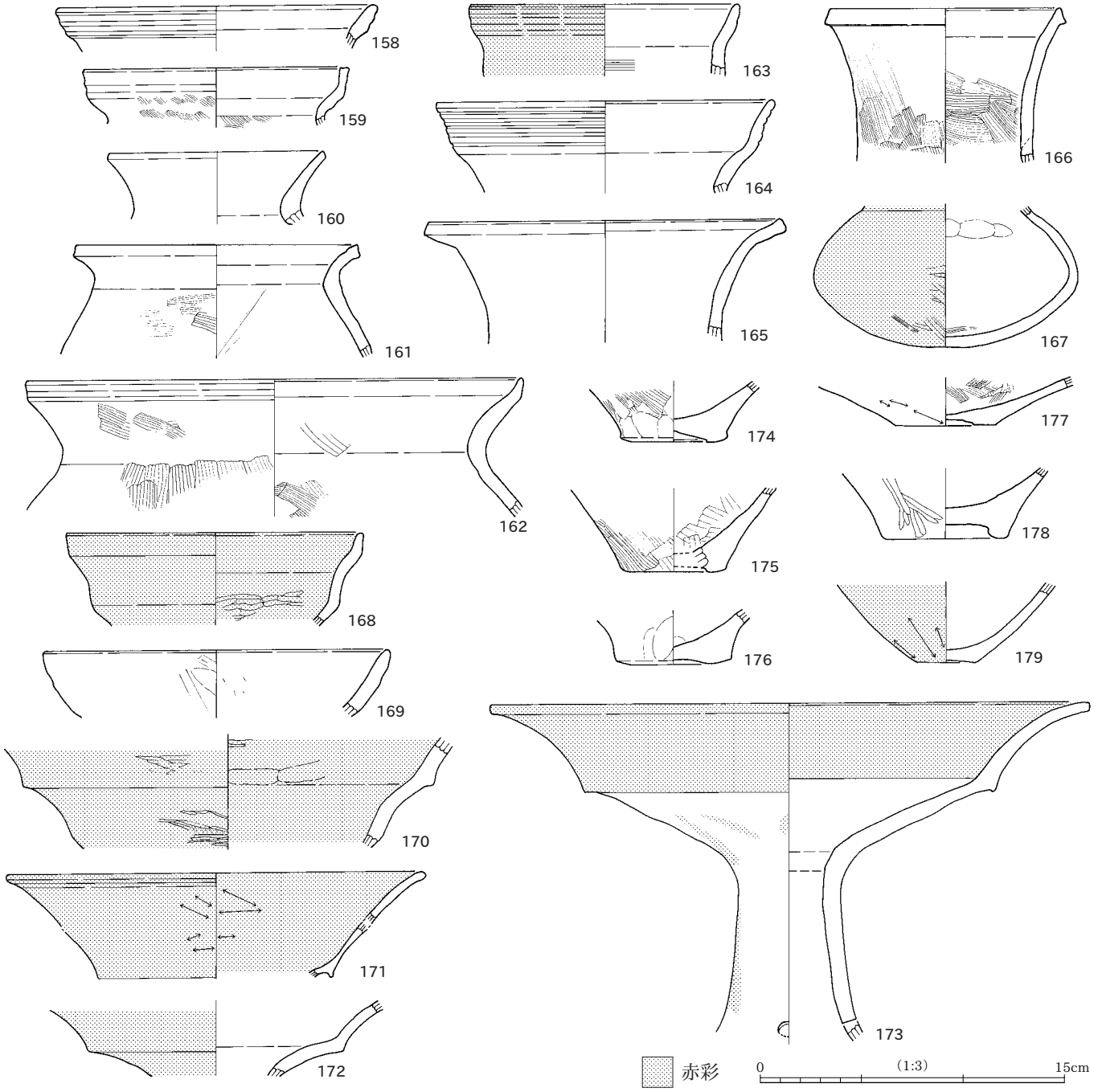
4号竪穴出土土器（120～146）



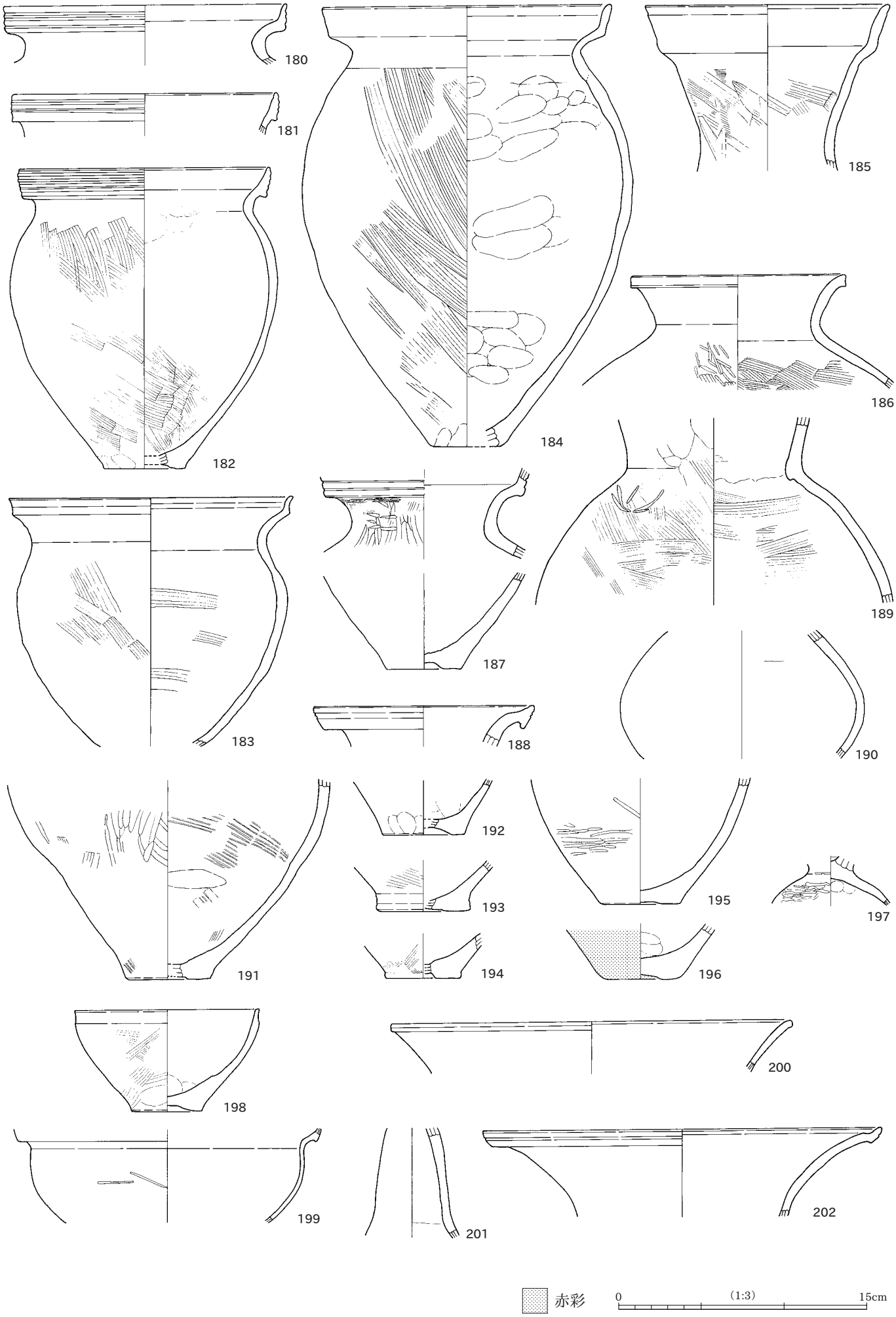
5号竪穴出土土器（147～157）



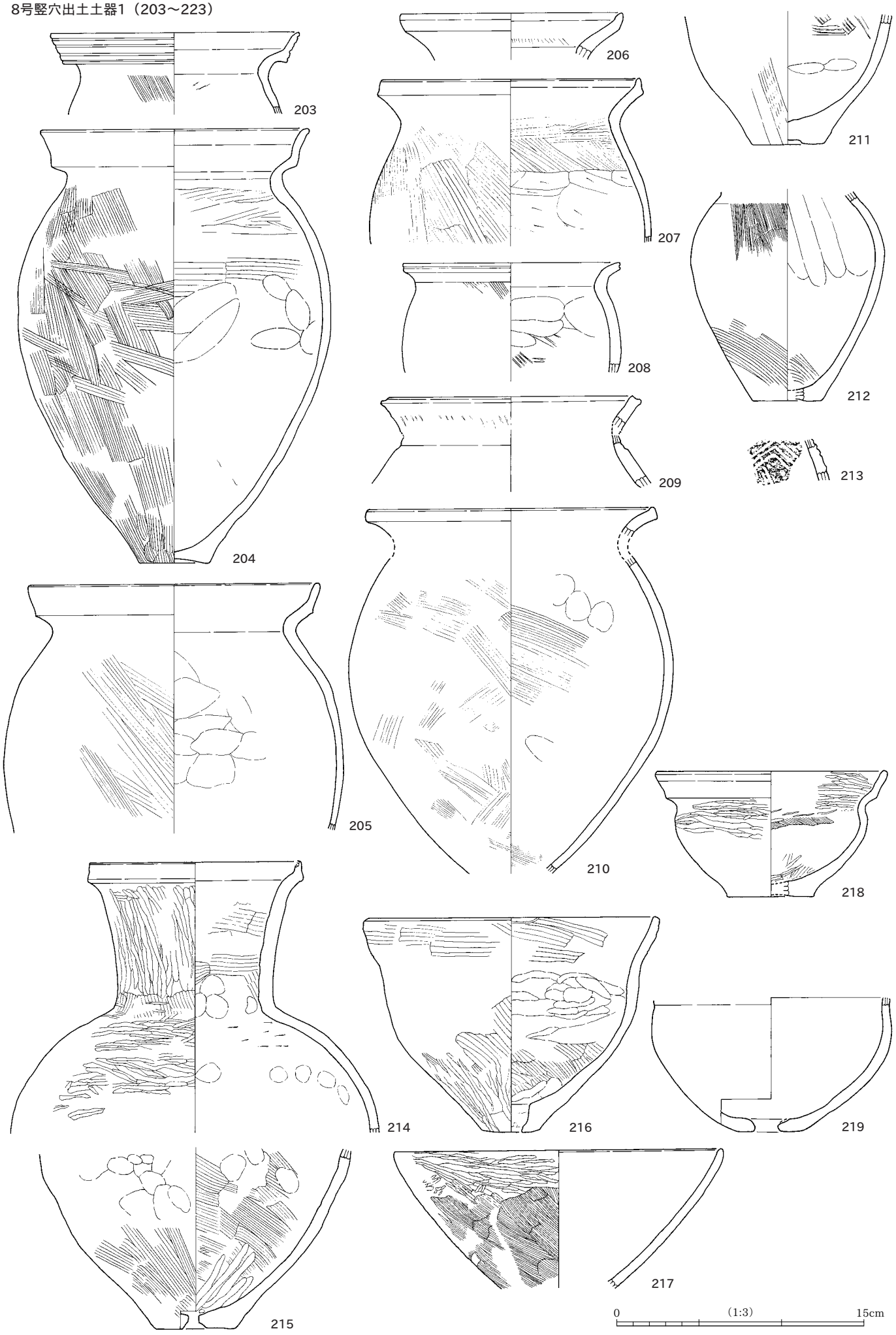
6号竪穴出土土器（158～179）

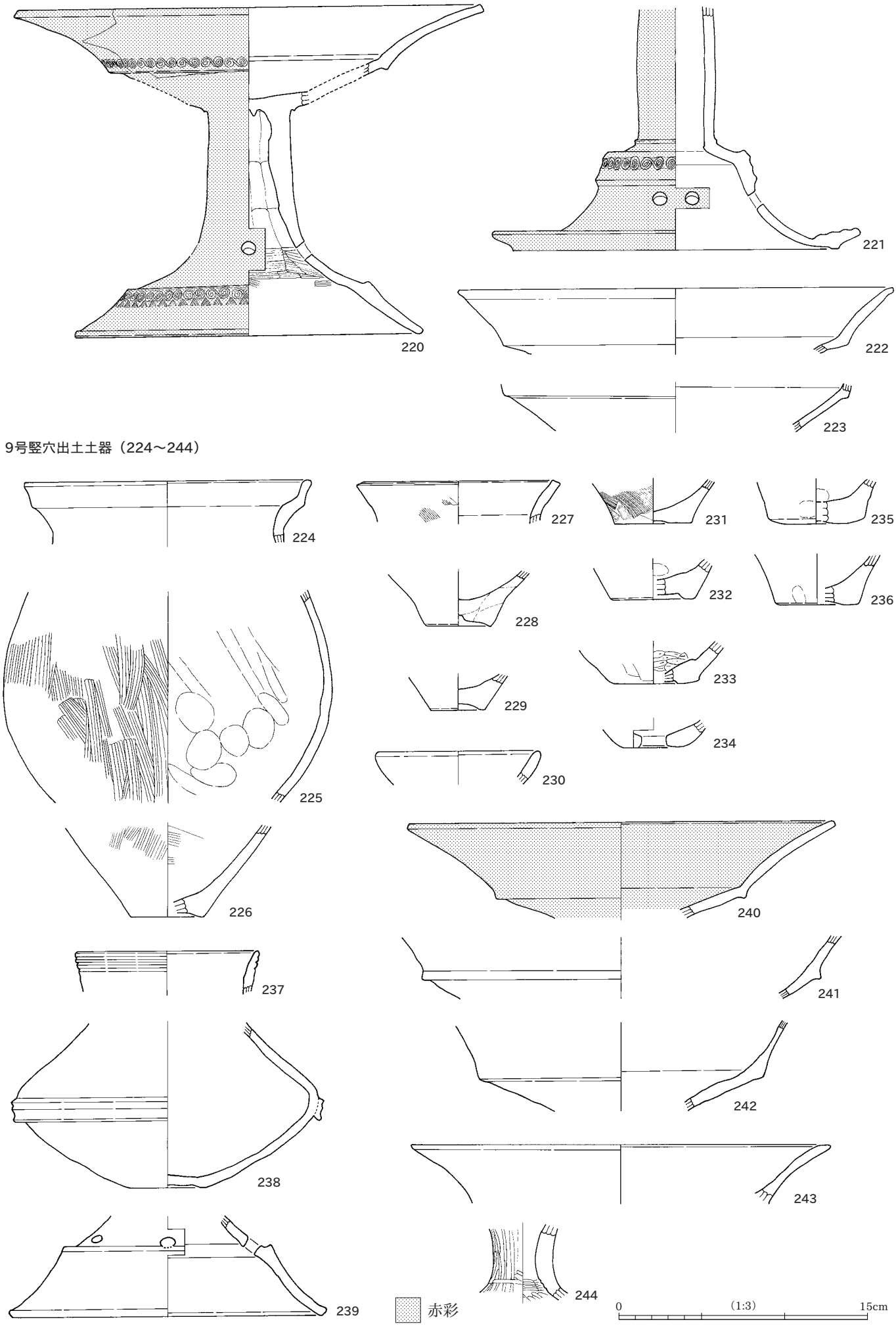


7号竪穴出土土器（180～202）

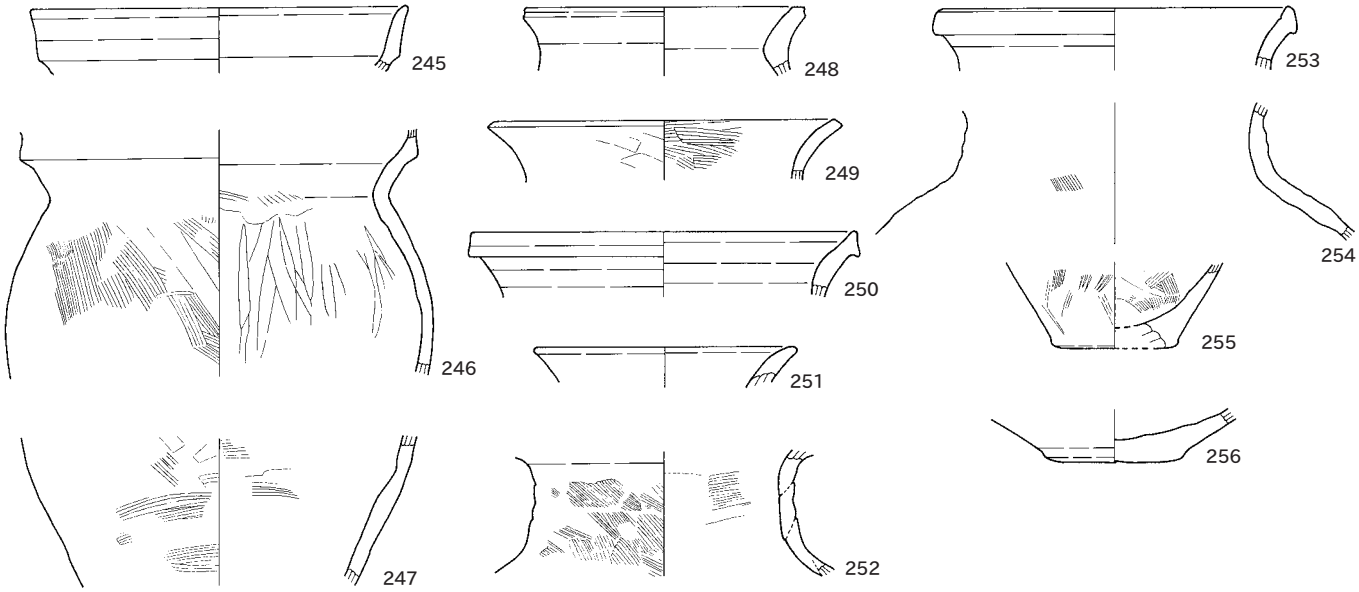


8号竪穴出土土器1（203～223）

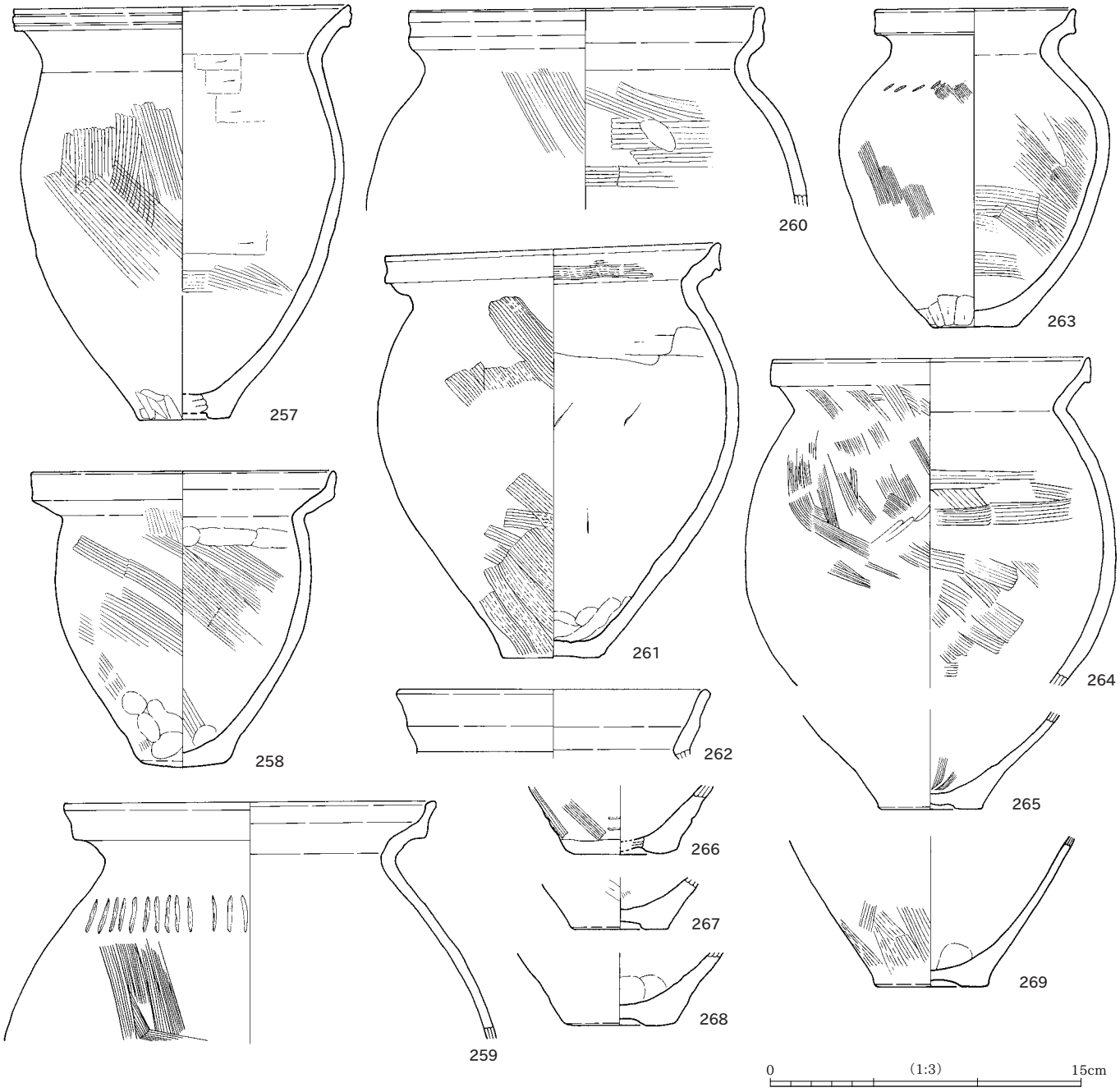



220
221
222
223
9号竪穴出土土器（224～244）
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
赤彩
0
(1:3)
15cm

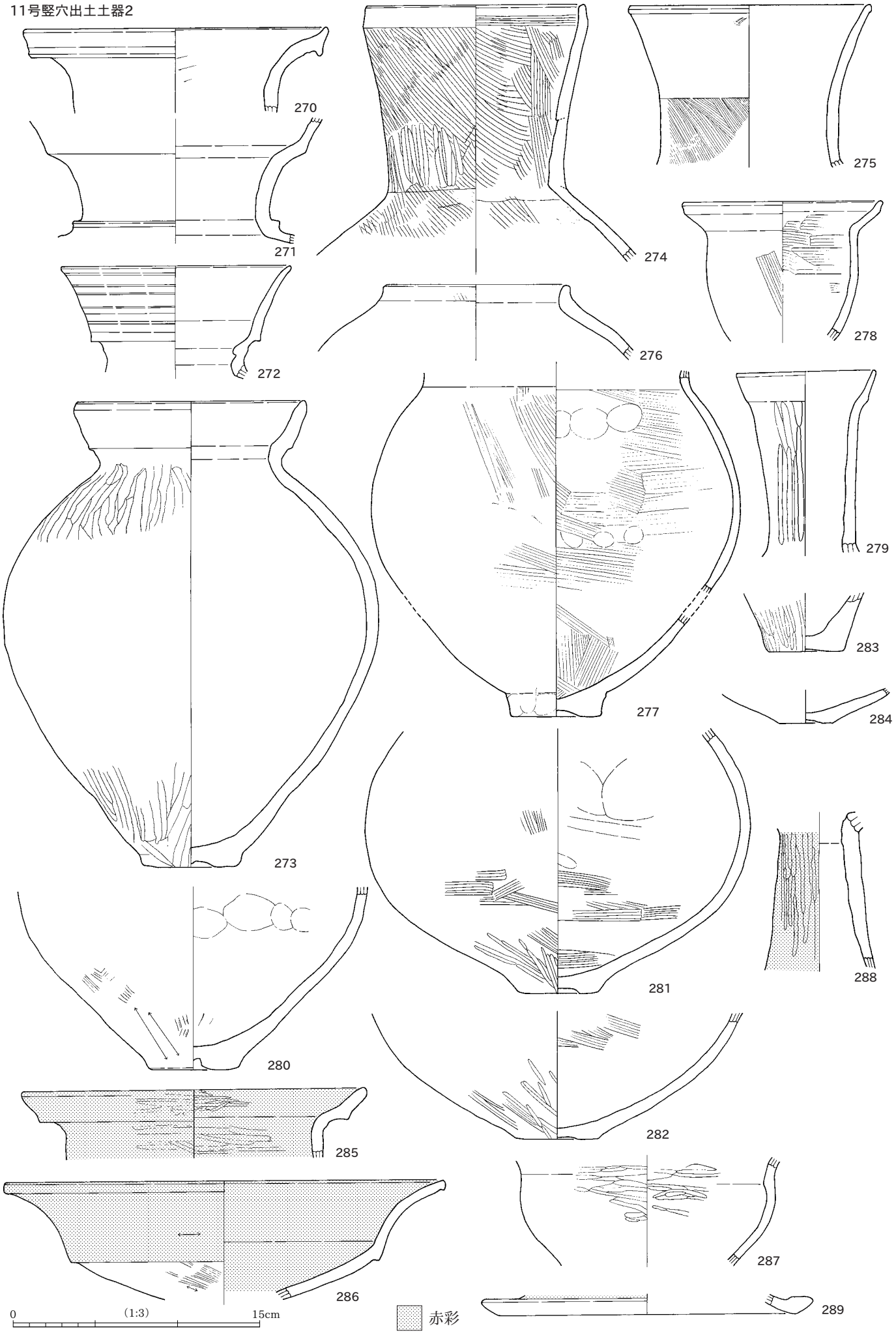
10号竪穴出土土器（245～256）



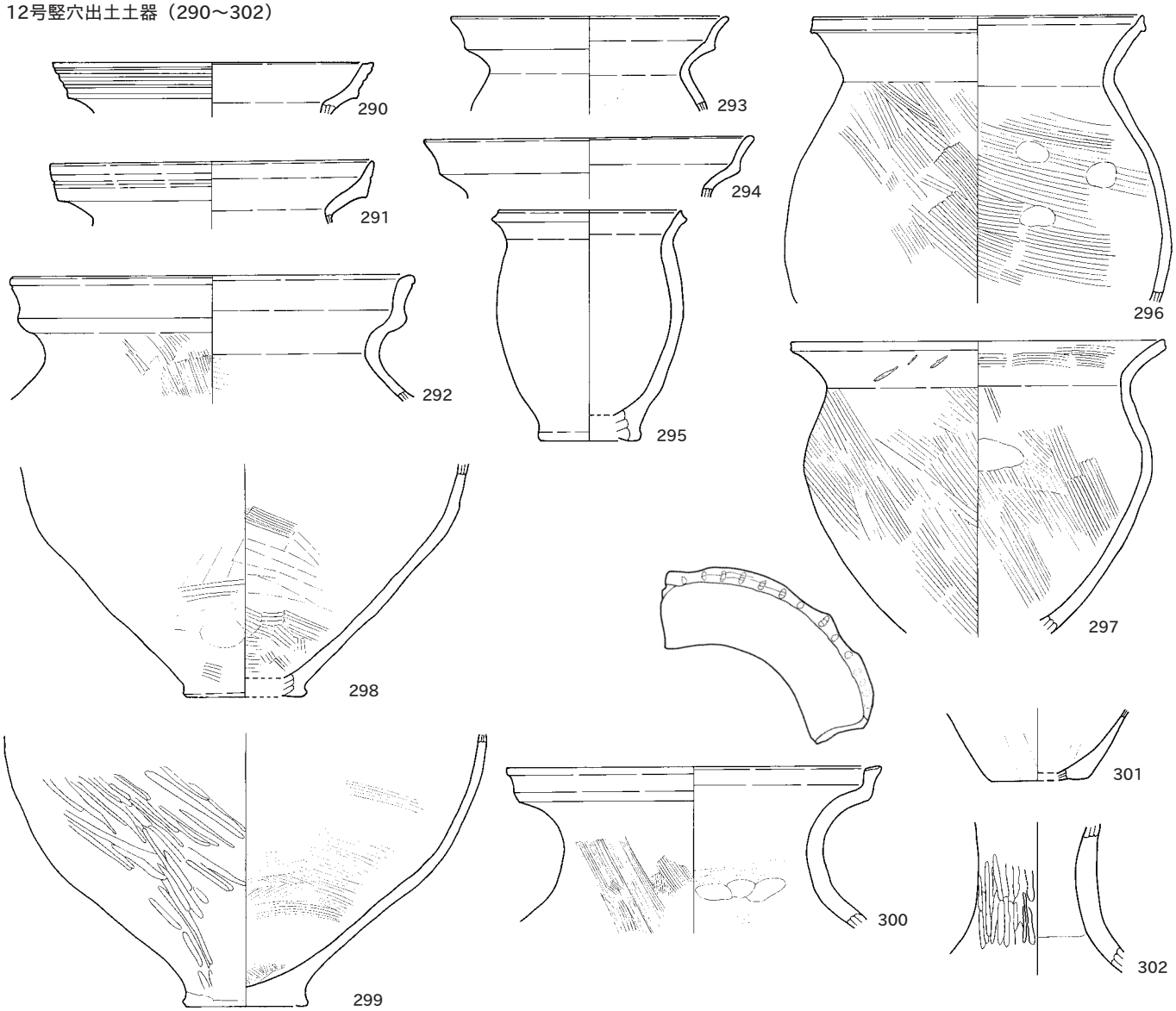
11号竪穴出土土器1（257～289）



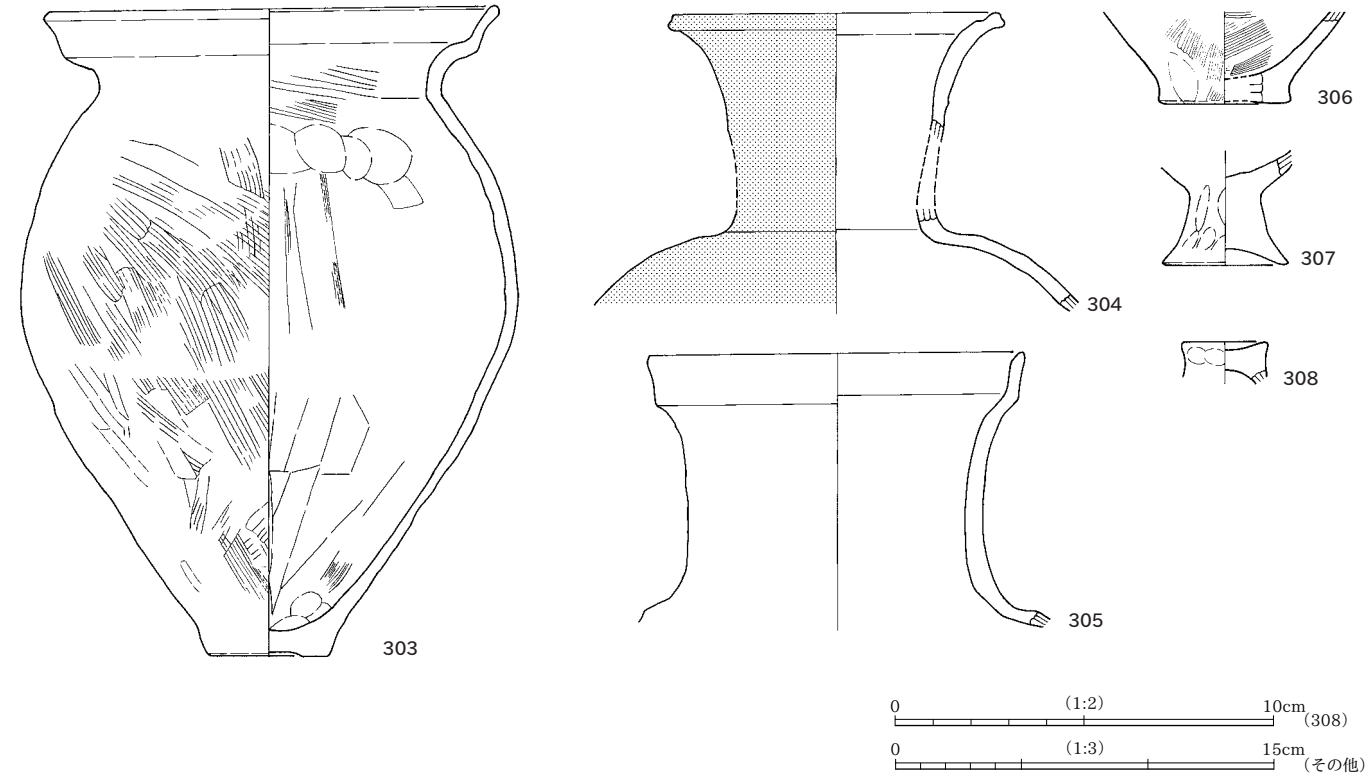
11号竪穴出土土器2


270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
0
(1:3)
15cm
赤彩

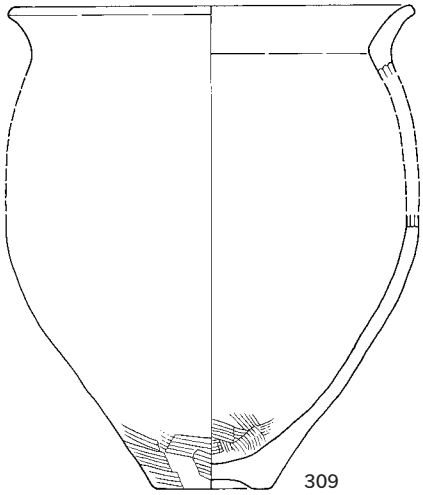
12号竪穴出土土器（290～302）

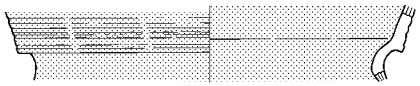


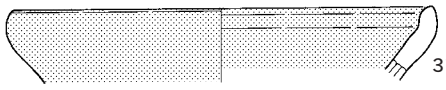
13号竪穴出土土器（303～308）

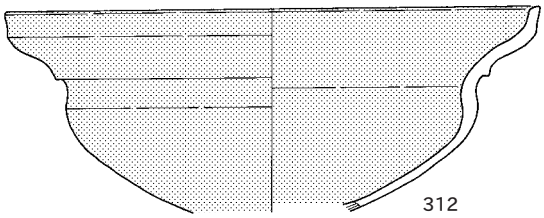


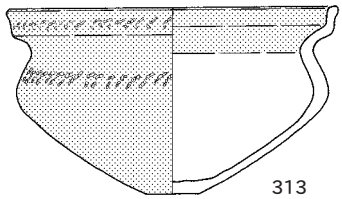
14号竪穴出土土器（309～313）



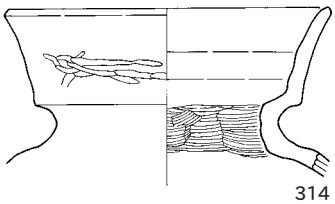




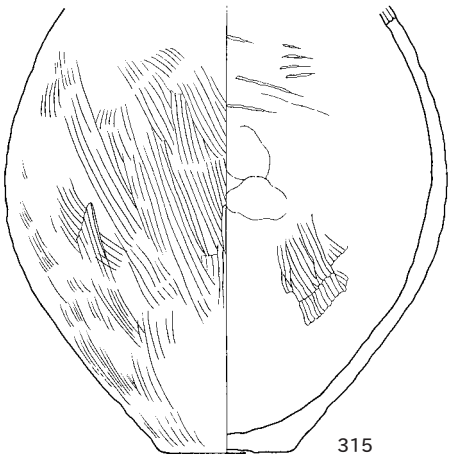




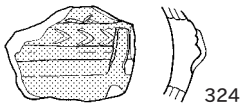
SX5出土土器



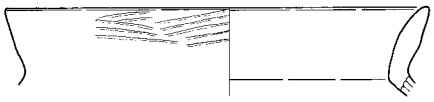
SX7出土土器



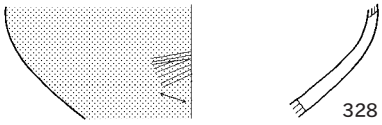
SX13出土土器



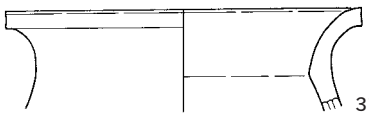
SX17出土土器

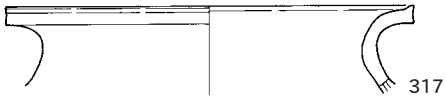


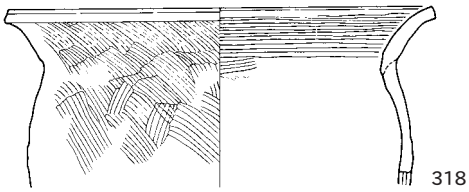
SK19出土土器

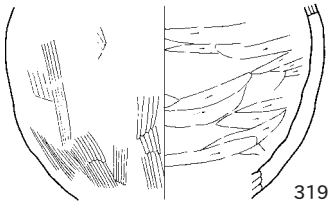


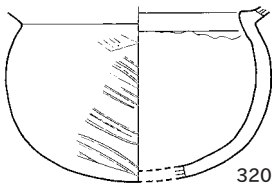
SX8出土土器（316～326）

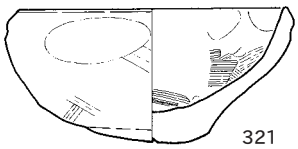


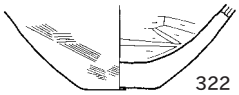


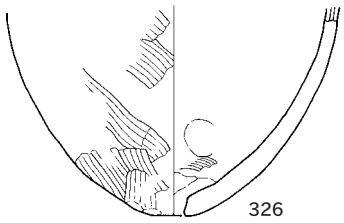


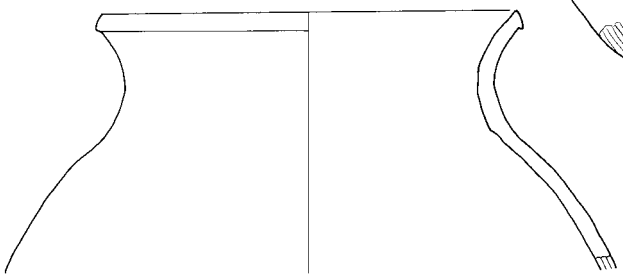


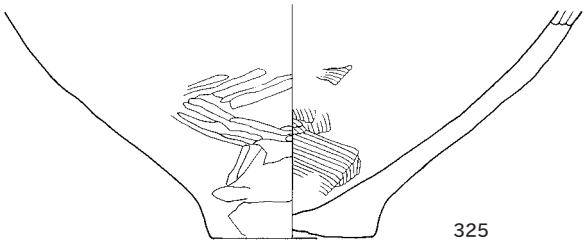




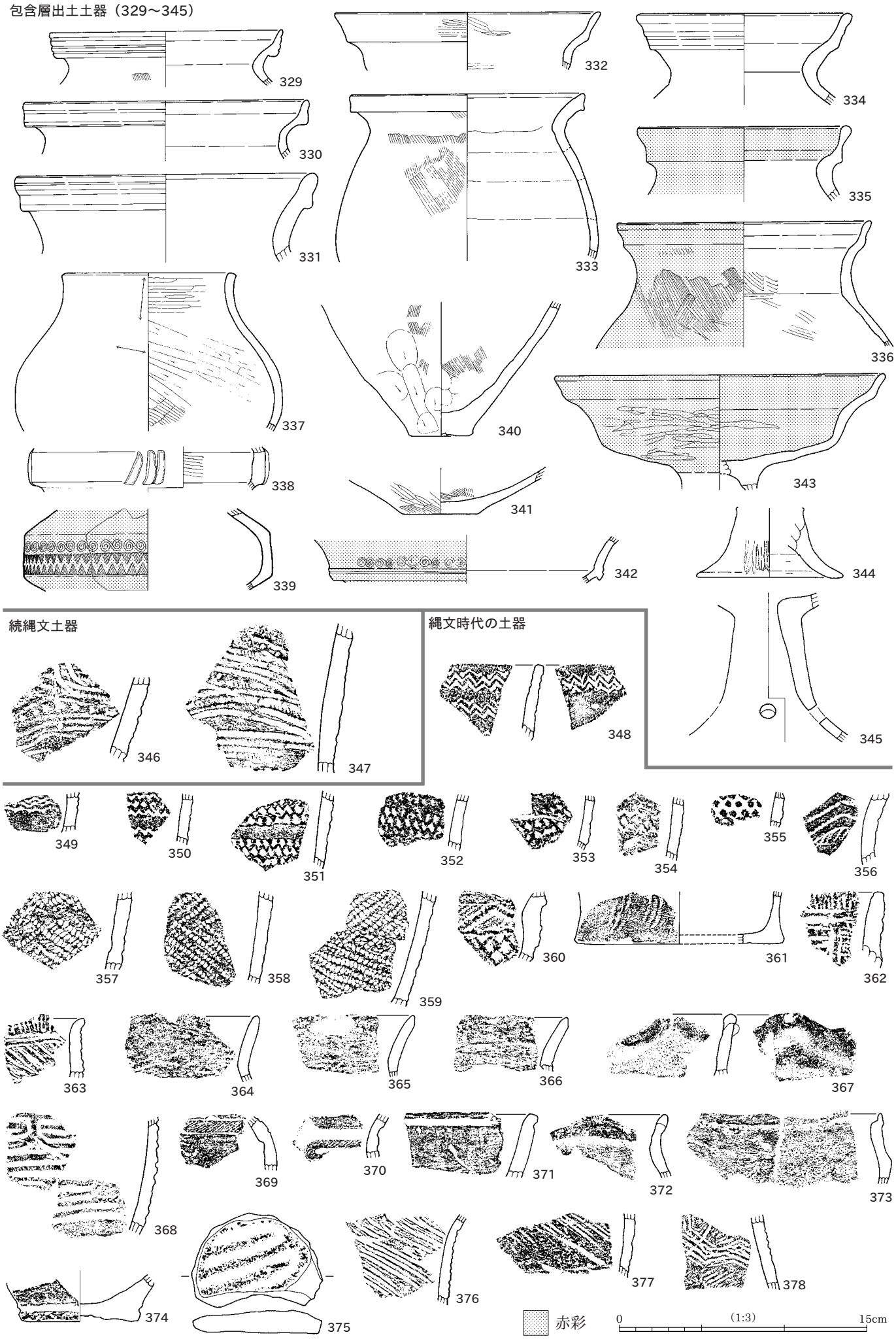


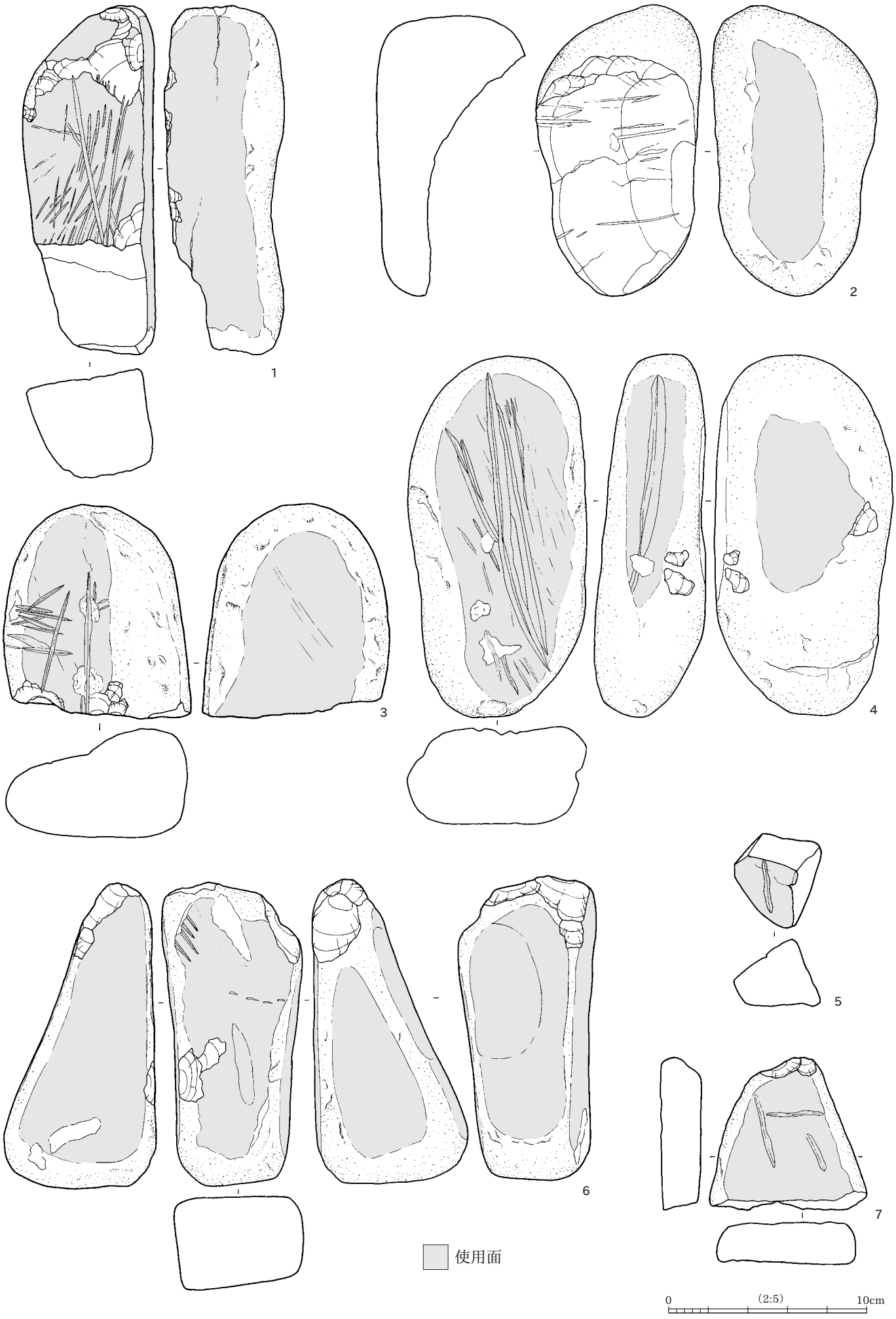


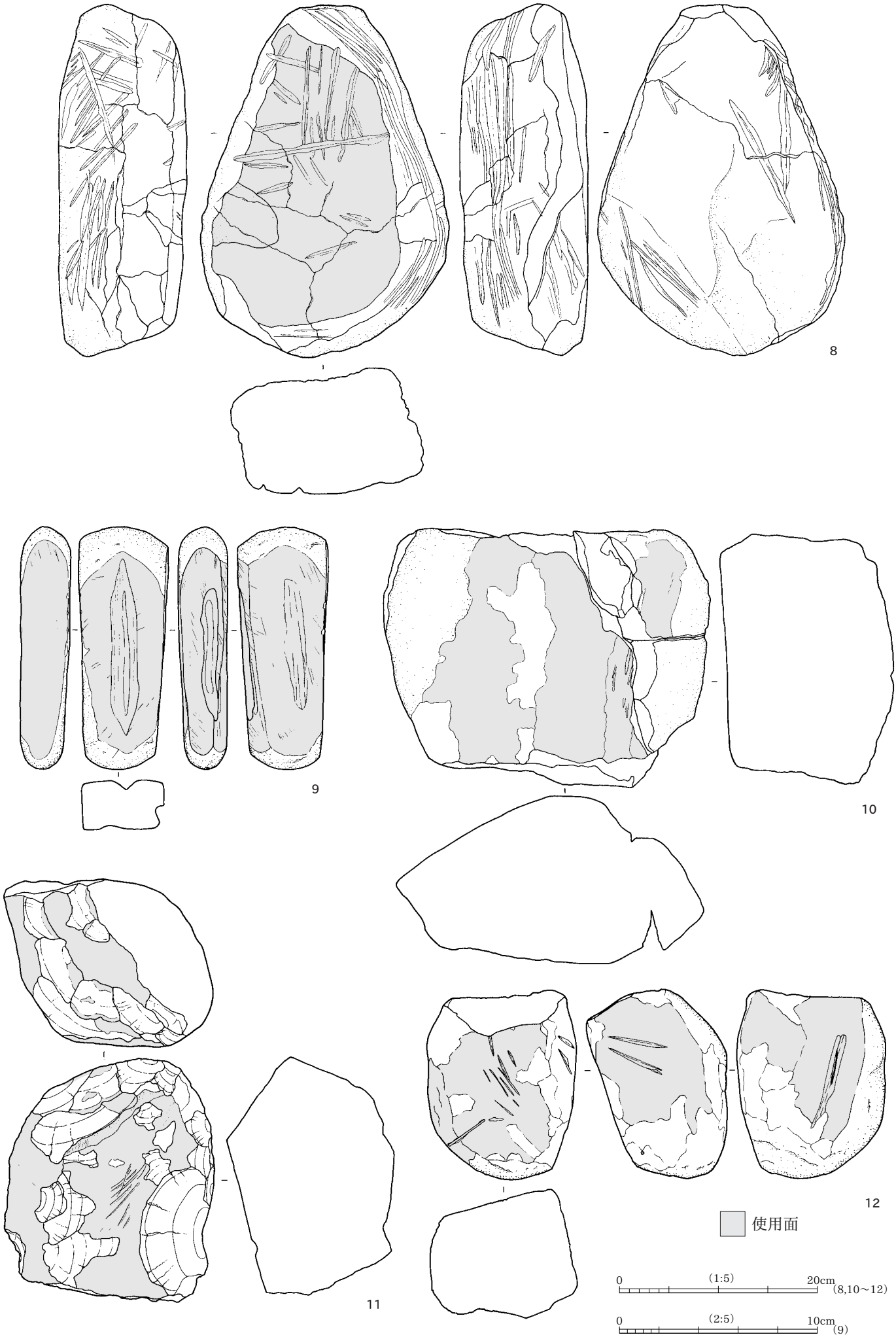


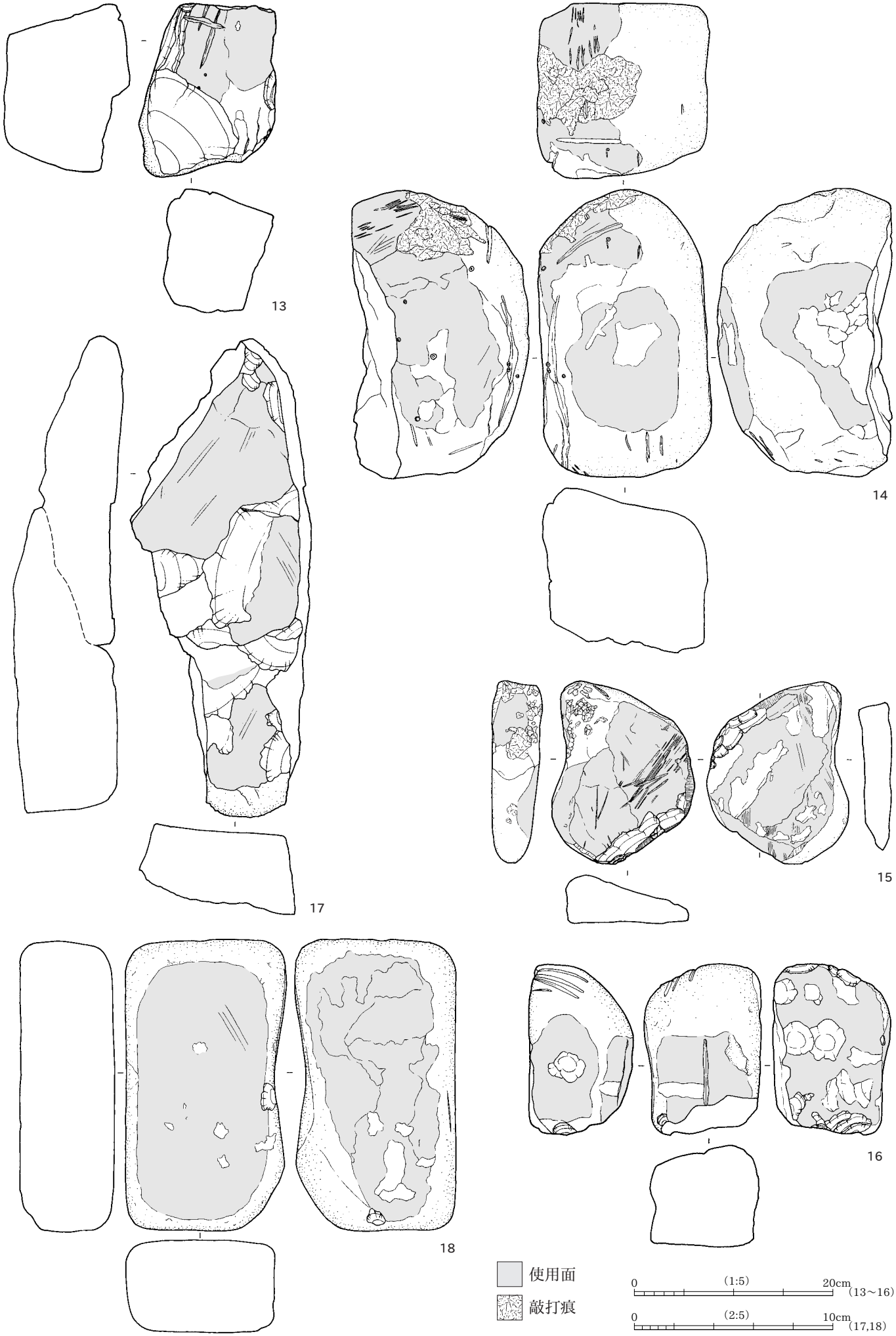


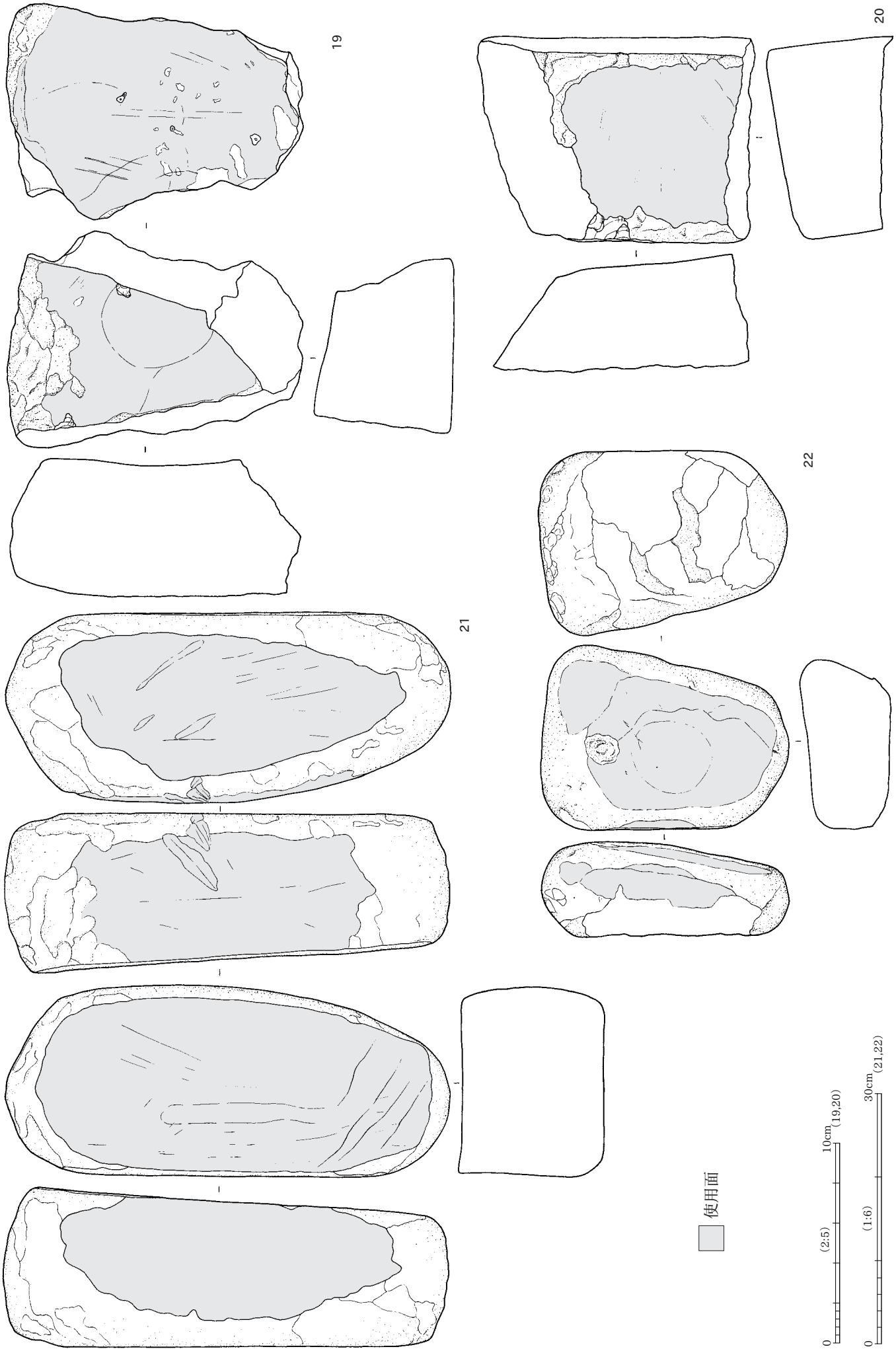
赤彩　0　(1:3)　15cm

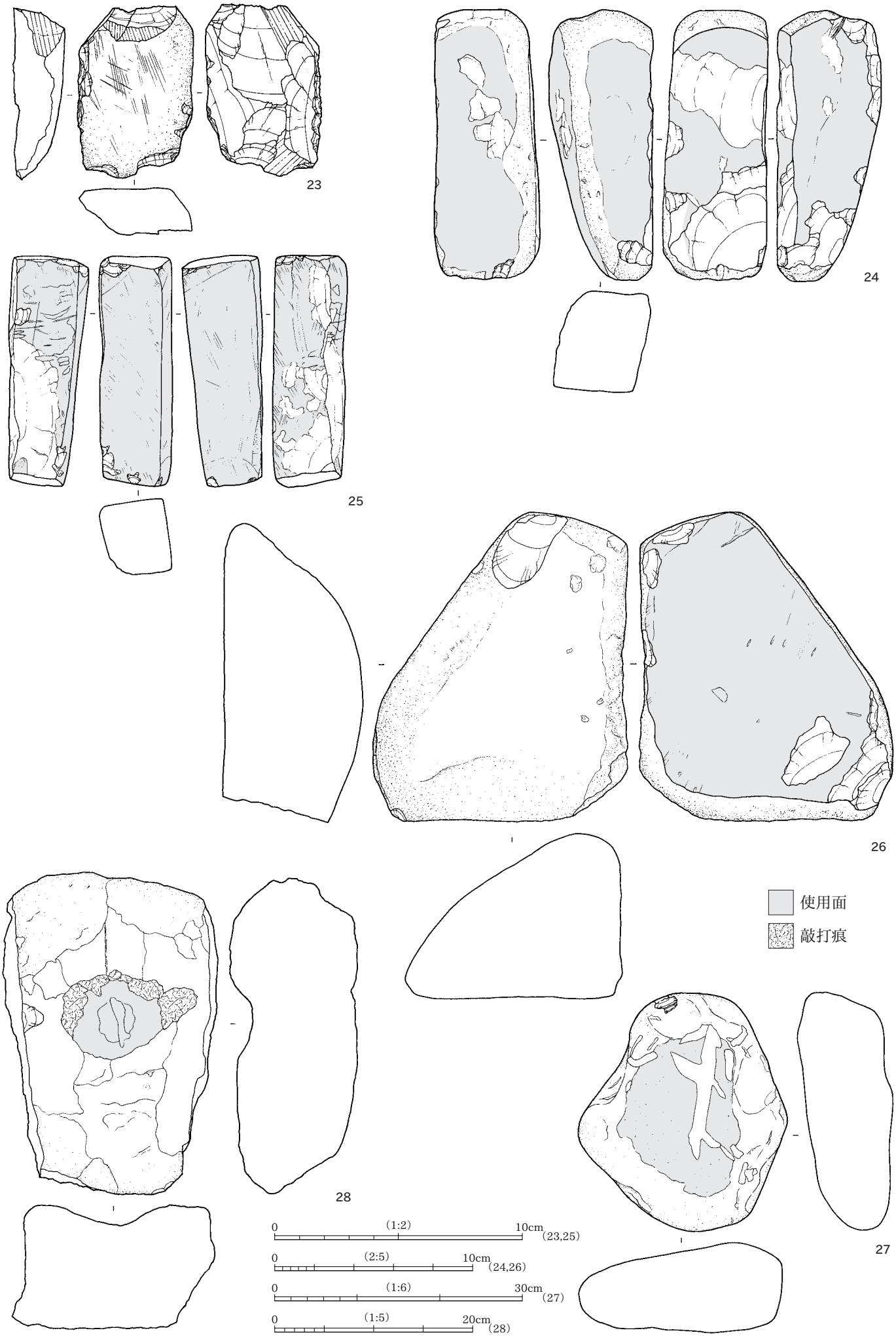

包含層出土土器（329～345）
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
続縄文土器
346
347
縄文時代の土器
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
赤彩
0
(1:3)
15cm

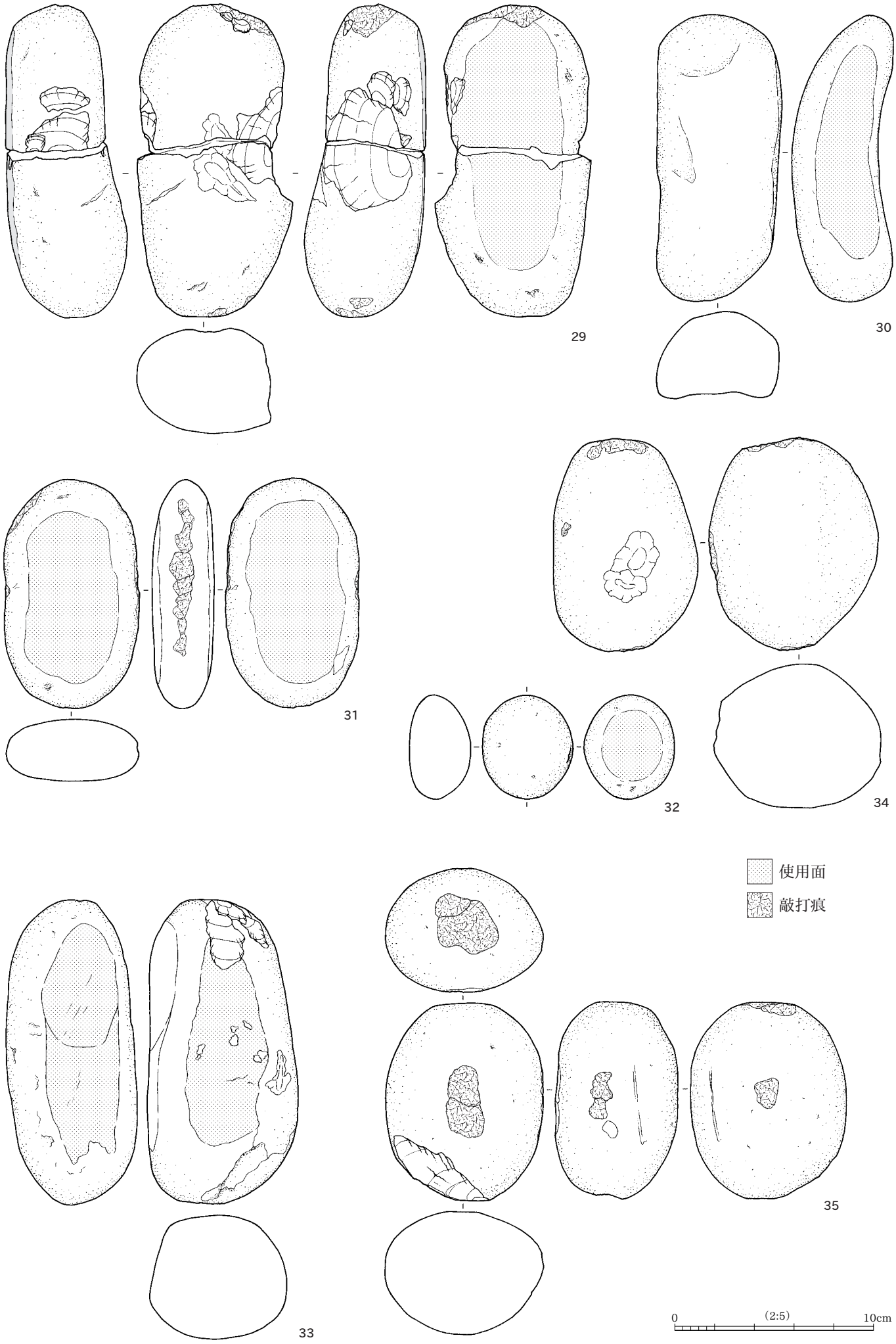

1
2
3
4
5
6
7
使用面
0
(2:5)
10cm


8
9
10
11
12
使用面
0
(1:5)
20cm
(8,10～12)
0
(2:5)
10cm
(9)

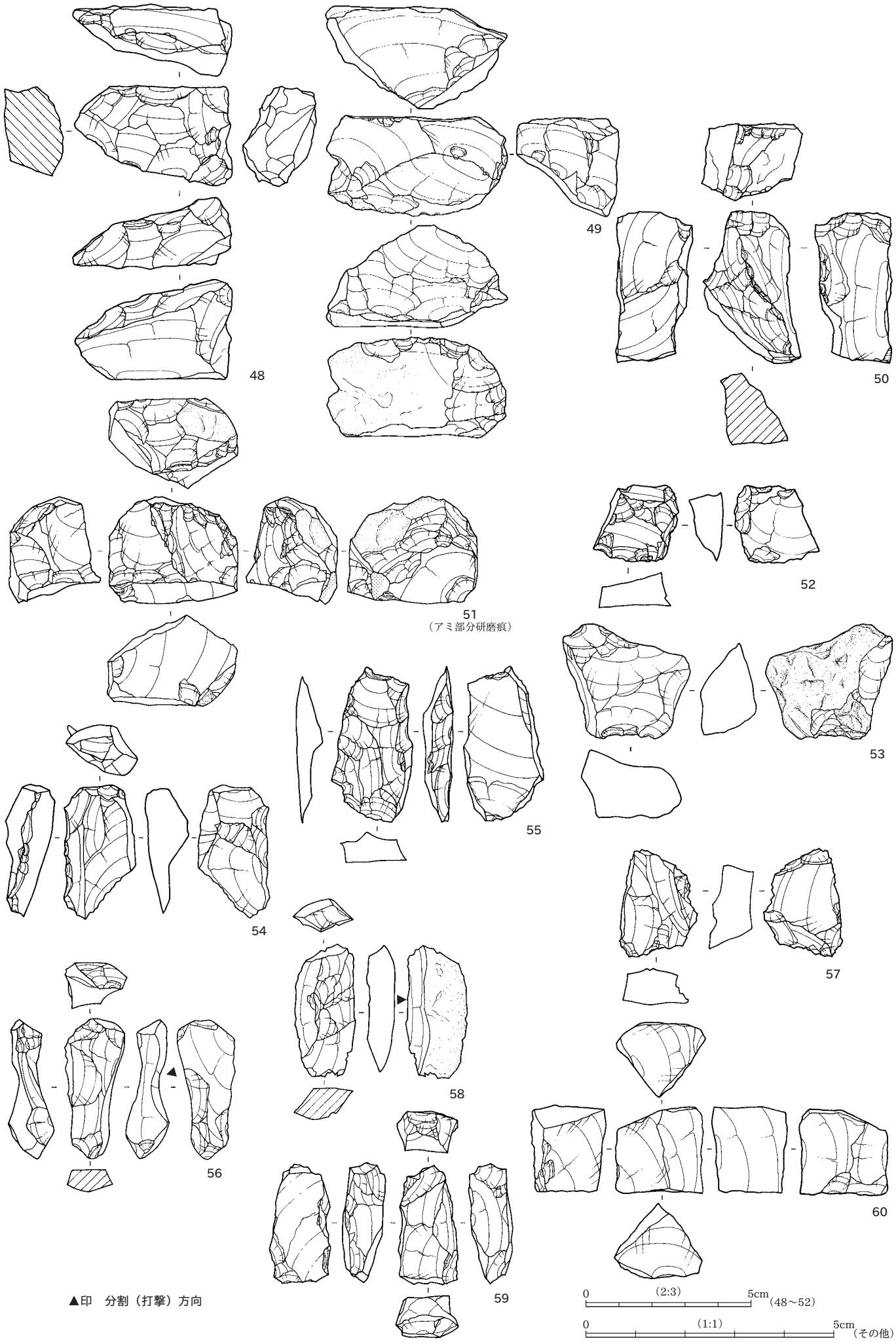

13
14
15
16
17
18
使用面
敲打痕
0
(1:5)
20cm
(13～16)
0
(2:5)
10cm
(17,18)

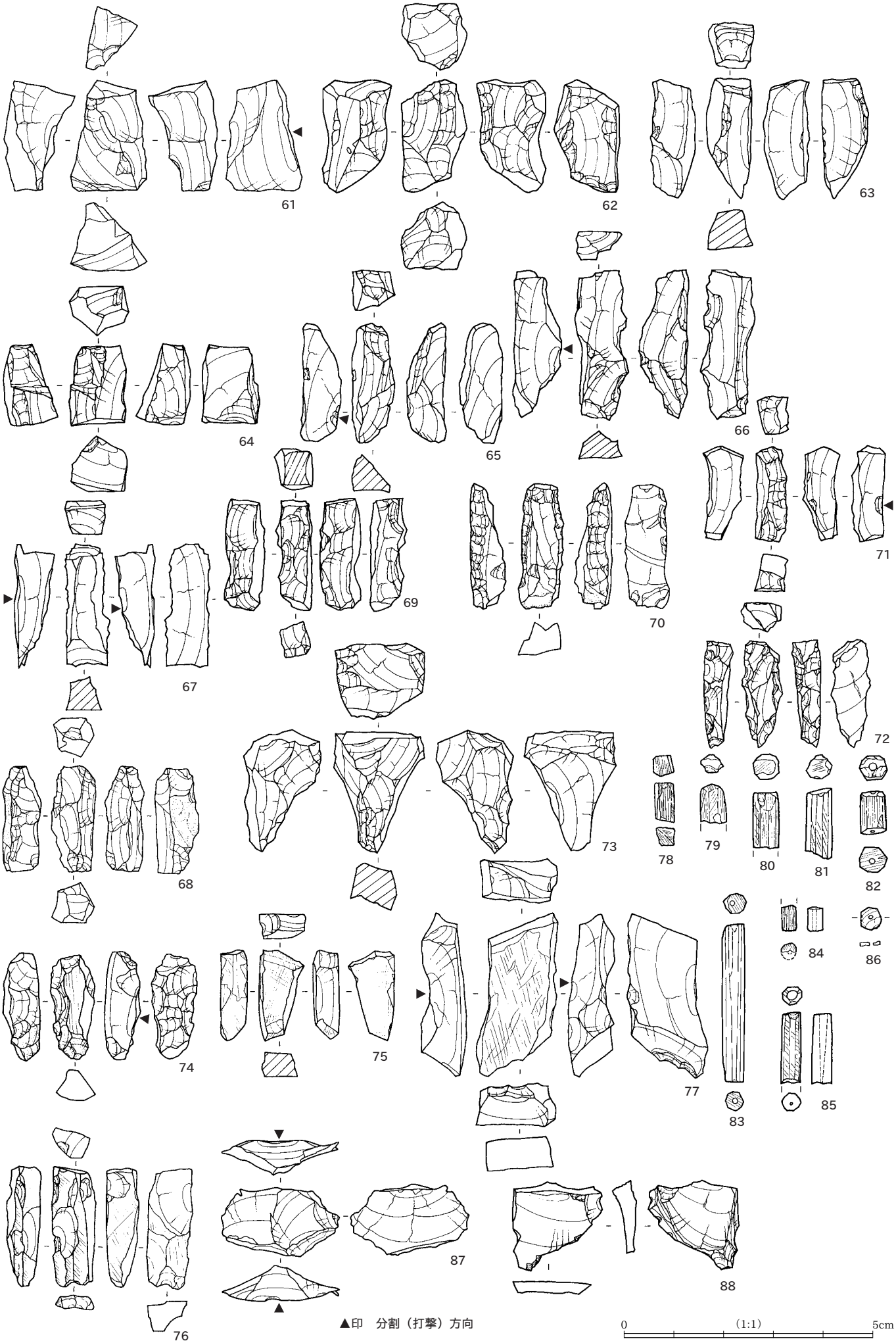

19
20
21
22
使用面
0
10cm
(2:5)
(19,20)
0
30cm
(1:6)
(21,22)

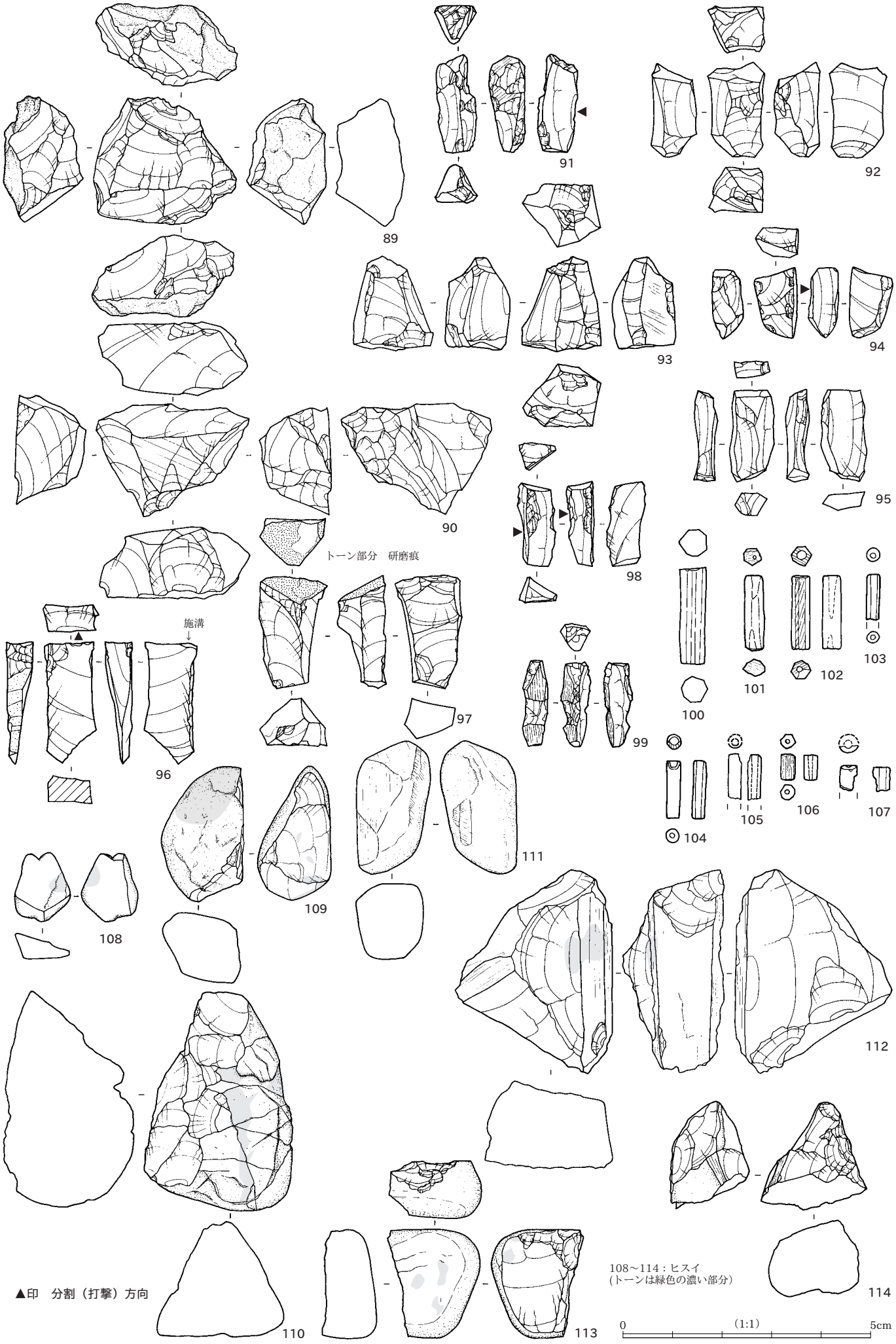

23
24
25
26
27
28
使用面
敲打痕
0 (1:2) 10cm (23,25)
0 (2:5) 10cm (24,26)
0 (1:6) 30cm (27)
0 (1:5) 20cm (28)

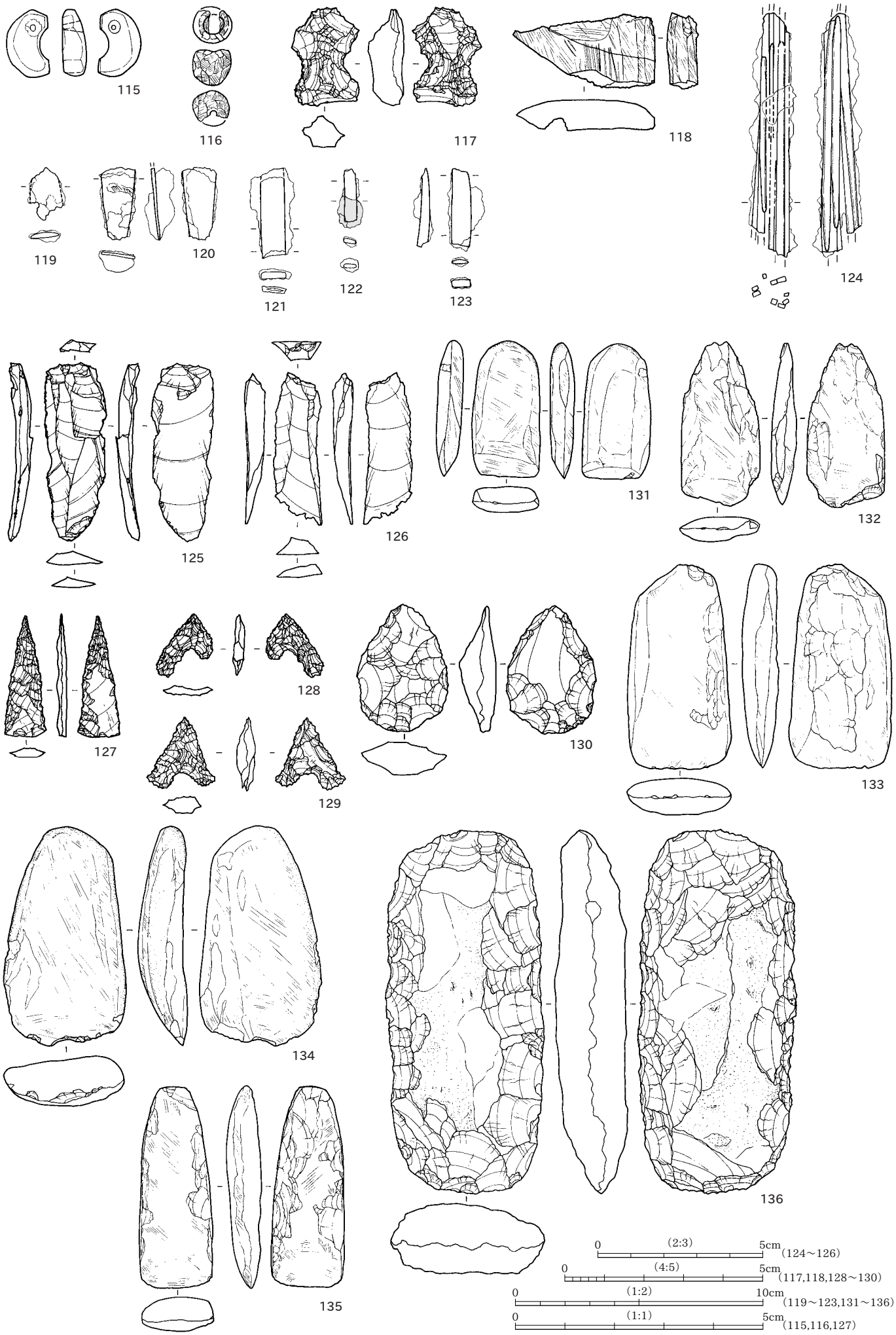

29
30
31
32
33
34
35
使用面
敲打痕
0
(2:5)
10cm

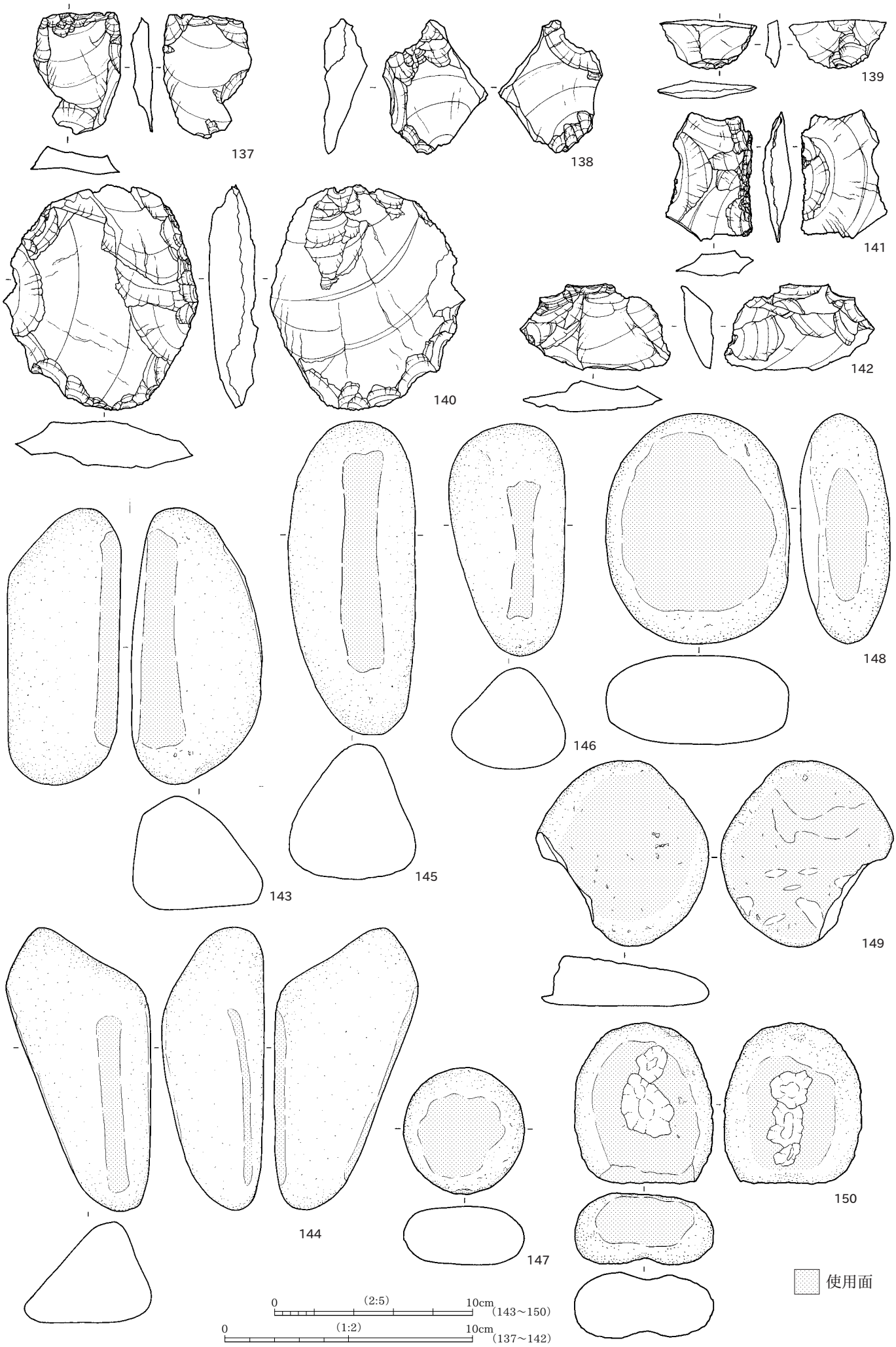
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
使用面
0 (1:3) 15cm (39)
0 (2:5) 10cm (36～38)
0 (1:2) 10cm (40～45)
0 (2:3) 5cm (46,47)


48
49
50
51
（アミ部分研磨痕）
52
53
54
55
56
57
58
59
60
▲印　分割（打撃）方向
0　(2:3)　5cm（48～52）
0　(1:1)　5cm（その他）


61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
▲印　分割（打撃）方向
0
(1:1)
5cm

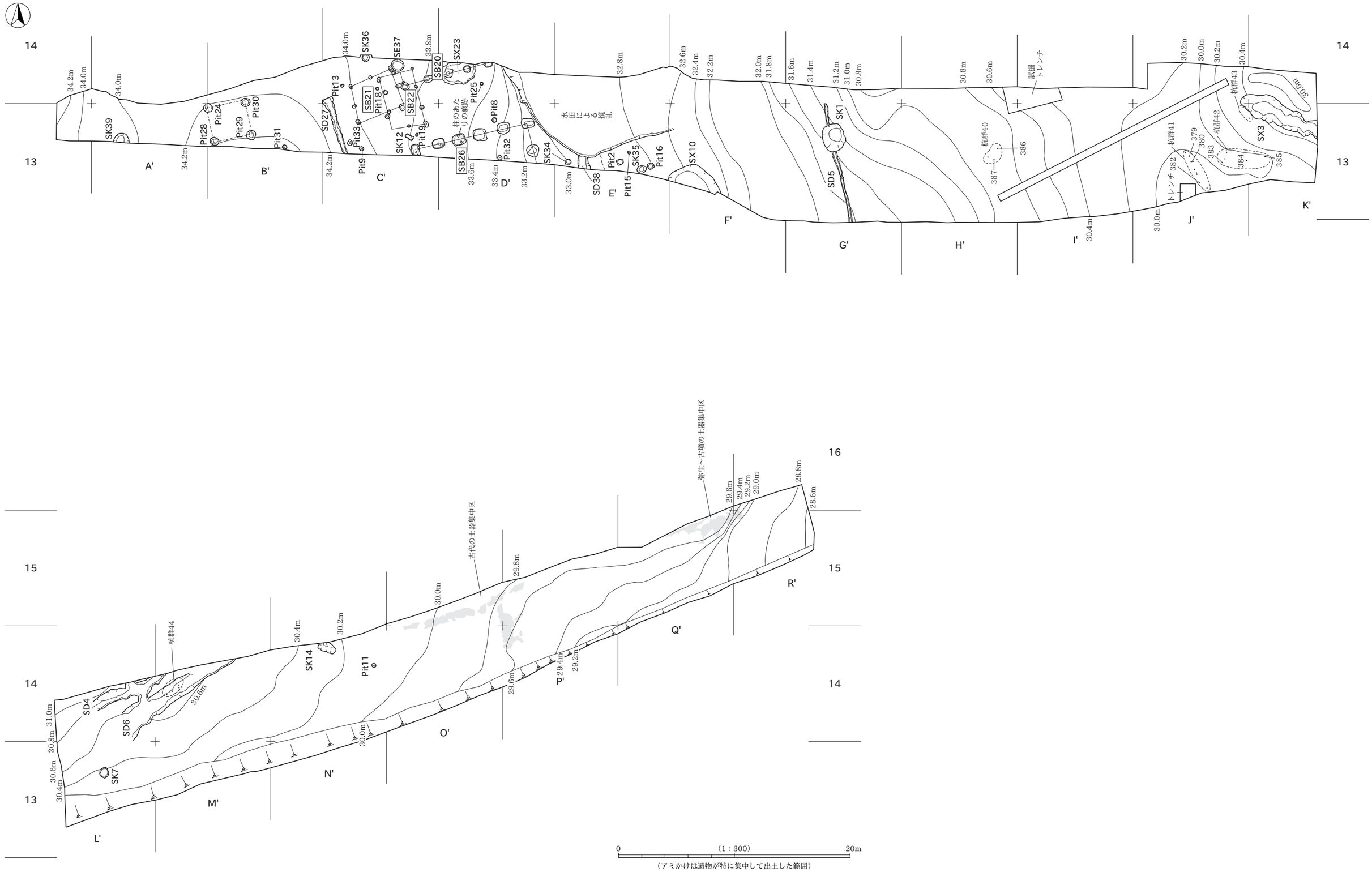

89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
施溝
トーン部分　研磨痕
▲印　分割（打撃）方向
108～114：ヒスイ
（トーンは緑色の濃い部分）
0
(1:1)
5cm

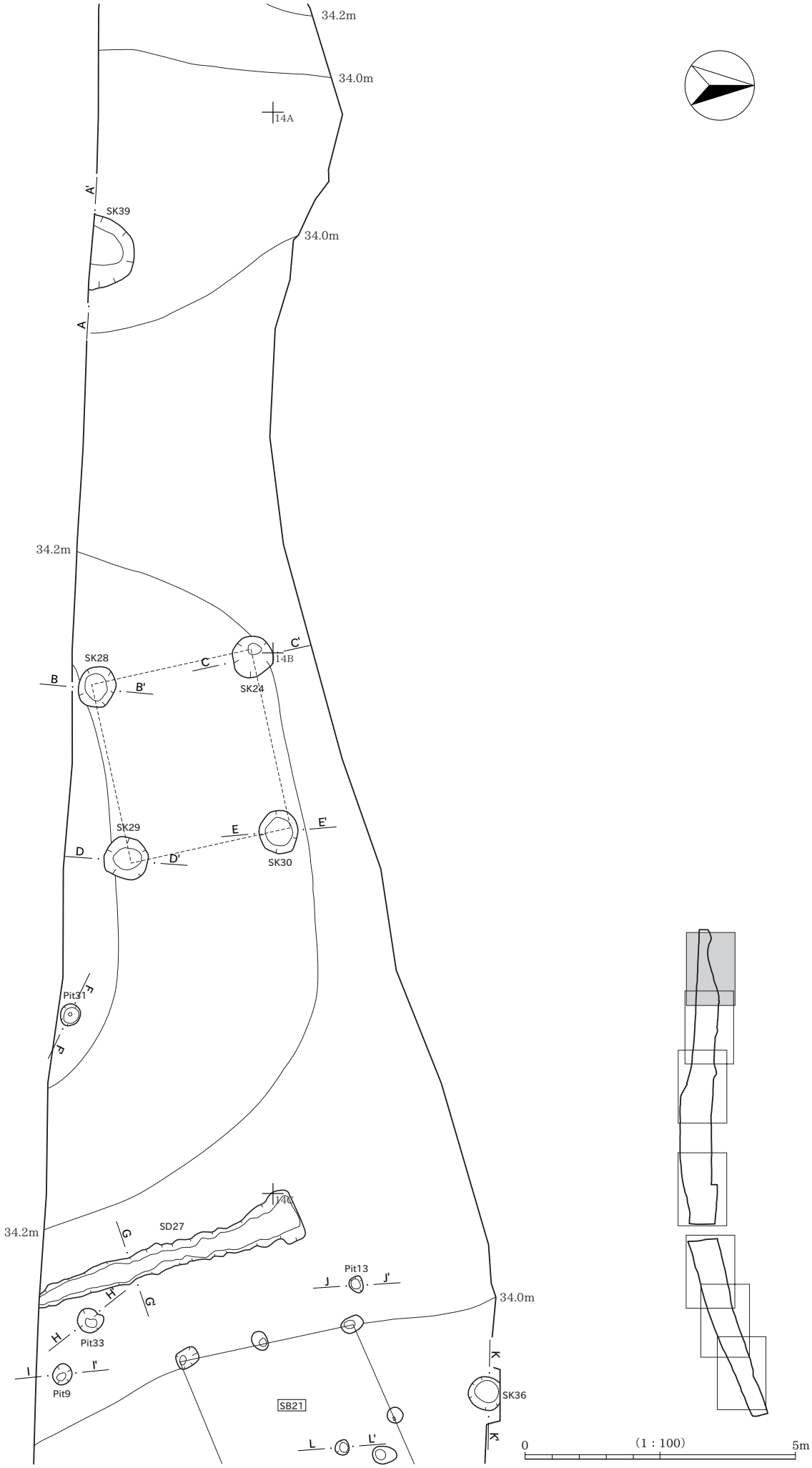

115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
131
132
127
128
129
130
133
134
135
136
0 (2:3) 5cm (124～126)
0 (4:5) 5cm (117,118,128～130)
0 (1:2) 10cm (119～123,131～136)
0 (1:1) 5cm (115,116,127)


137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
使用面
0 (2:5) 10cm (143～150)
0 (1:2) 10cm (137～142)

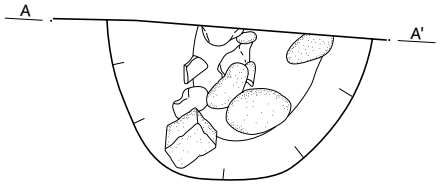
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
使用面
0
(2:5)
10cm

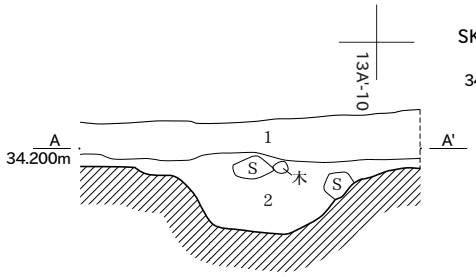
163
164
167
165
166
169
168
170
171
172
173
174
175
使用面
敲打痕
0
(2:5)
10cm


14
13
15
16
A'
B'
C'
D'
E'
F'
G'
H'
I'
J'
K'
L'
M'
N'
O'
P'
Q'
R'
SK39
Pit28
Pit24
Pit29
Pit30
Pit31
SD27
Pit13
SK36
SE37
SB21
Pit18
SB22
SK12
Pit19
Pit33
Pit9
SB20
SX23
Pit25
柱のあたりの痕跡
SB26
Pit8
Pit32
SK34
水田による攪乱
SD38
Pit2
SK35
Pit15
Pit16
SX10
SK1
SD5
杭群40
386
387
試掘トレンチ
杭群41
379
380
382
383
384
385
トレンチ
杭群42
杭群43
SX3
30.0m
杭群44
SD4
SD6
SK7
SK14
Pit11
古代の土器集中区
弥生～古墳の土器集中区
0
(1：300)
20m
（アミかけは遺物が特に集中して出土した範囲）


34.2m
34.0m
14A
A'
SK39
34.0m
A
34.2m
SK28
C
C'
14B
B
B'
SK24
SK29
E
E'
D
D'
SK30
Pit31
F
F'
14C
34.2m
SD27
G
G'
Pit13
J
J'
34.0m
H
H'
Pit33
I
I'
Pit9
K
K'
SK36
SB21
L
L'
0
(1 : 100)
5m

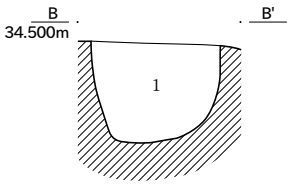
SK39





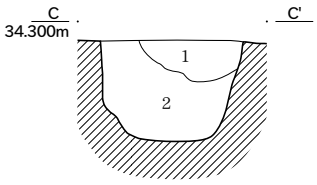
SK39
1　褐色土（7.5YR4/3）　しまり、粘性弱い。
2　暗褐色土（7.5YR3/3）　しまり、粘性弱い。

SK28



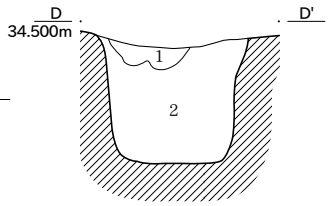
SK28
1　明褐色土（7.5YR5/6）　黒褐色土魂（径10～50mm程度）多く含む。

SK24



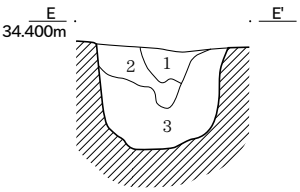
SK24
1　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　しまり、粘性弱い。
2　明褐色土（7.5YR3/3）　黒褐色土魂（径１～5cm程度）多く含む。

SK29



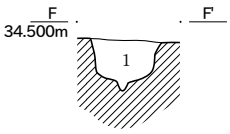
SK29
1　暗褐色土（7.5YR3/4）　しまり、粘性なし。
2　明褐色土（7.5YR5/6）　しまり、粘性なし。

SK30



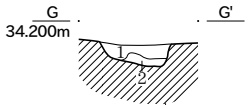
SK30
1　暗褐色土（7.5YR3/3）　しまり、粘性なし。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　しまり、粘性弱い。
3　黄橙色土（10YR7/8）　黒褐色土がまだらに混じる。

Pit31



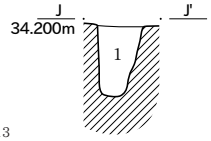
Pit31
1　暗褐色土（7.5YR3/3）　しまり、粘性なし。

SD27



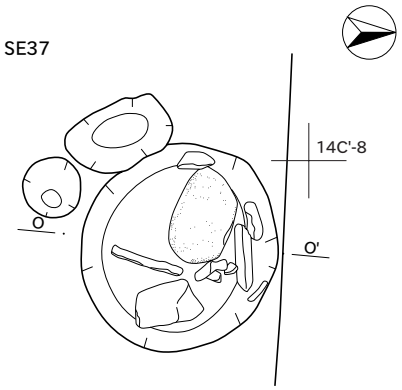
SD27
1　暗褐色土（7.5YR3/3）　黄褐色土粒（径5～10mm程度）しまり、粘性なし。
2　明褐色土（7.5YR5/6）　黄褐色土多く混じる。しまり、粘性なし。

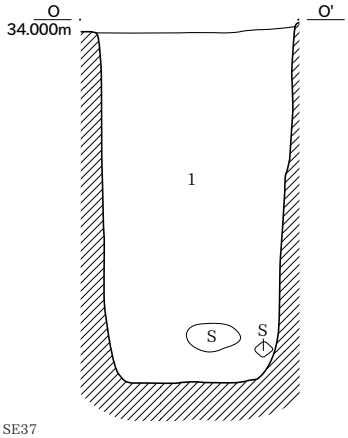
Pit13



Pit13
1　暗褐色土（7.5YR3/3）　しまり、粘性なし。

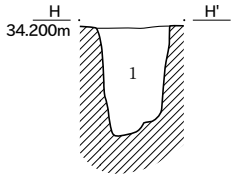
SE37





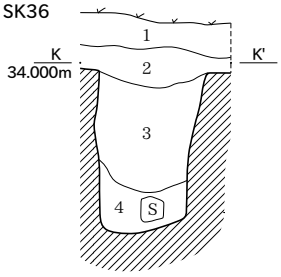
SE37
1　黒色土（10YR2/1）　黄褐色土粒（径5mm程度）少量含む。しまり、粘性なし。

Pit33



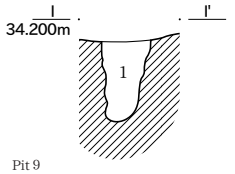
Pit33
1　褐色土（7.5YR4/4）　黄褐色土粒（径5～50mm程度）多く含む。

SK36



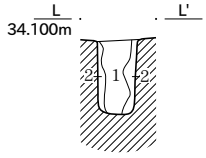
SE36
1　表土（暗褐色土）
2　暗褐色土（7.5YR3/3）　黄褐色土粒（径5mm程度）少量含む。しまり、粘性弱い。
3　褐色土（7.5YR4/3）　黄褐色土粒（径5～50mm程度）多く含む。しまり、粘性弱い。
4　暗褐色土（7.5YR3/3）　黄褐色土粒（径5～10mm程度）少量含む。しまり、粘性なし。

Pit9



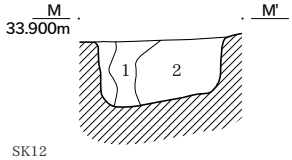
Pit 9
1　褐色土（10YR3/4）　黄褐色土粒（径5mm程度）多く含む。しまり、粘性なし。

Pit18



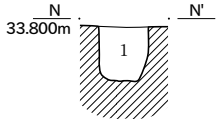
Pit18
1　黒褐色土（7.5YR3/1）　黄褐色土粒（径10～20mm程度）少量含む。しまり、粘性なし。
2　明褐色土（7.5YR5/6）　しまり、粘性なし。

SK12



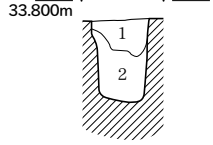
SK12
1　黒色土（10YR2/1）　しまり、粘性なし。
2　黒褐色土（10YR2/3）　黄褐色土がまだらに混じる。

Pit19



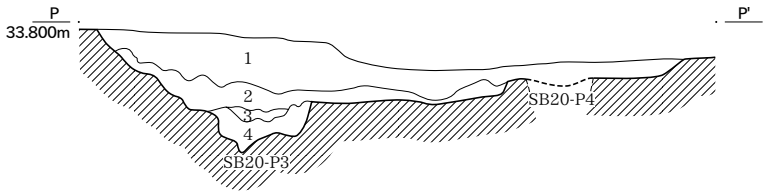
Pit19
1　暗褐色土（7.5YR3/3）　黄褐色土粒（径5～30mm程度）多く含む。

Pit25



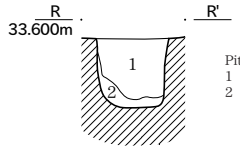
Pit25
1　黒褐色土（7.5YR3/1）　黄褐色土粒（径10～20mm程度）少量含む。しまり、粘性なし。
2　褐色土（7.5YR4/4）　黒褐色土がまだらに多く混じる。しまり、粘性なし。

SX23



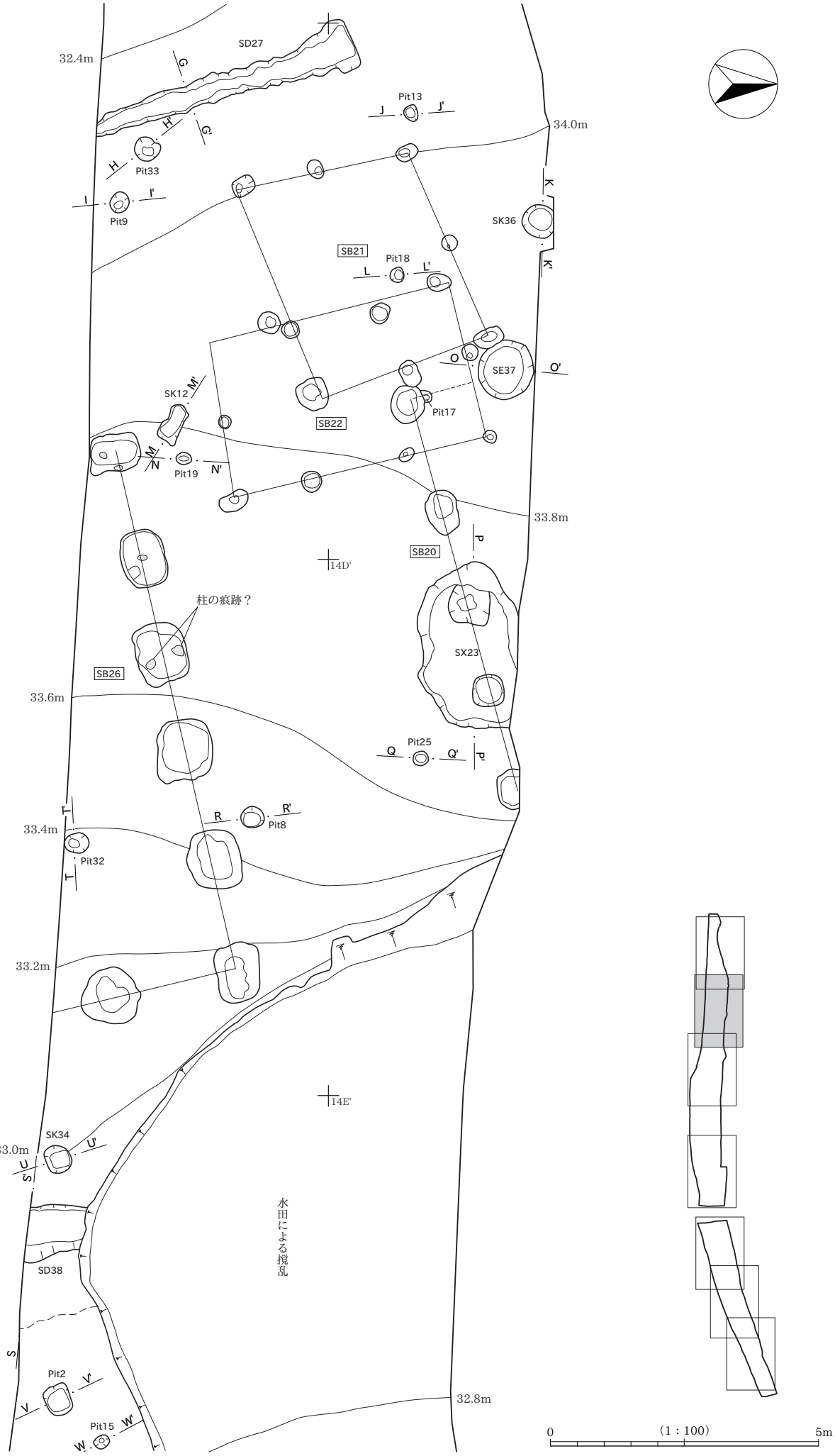
SX23
1　黒褐色土（7.5YR3/1）　黄橙色土粒（径5～30mm程度）少量含む。しまり粘性弱い。
2　褐色土（7.5YR4/4）　黄橙色土粒（径10～30mm程度）多く含む。しまり、粘性なし。
3　黄橙色土（7.5YR8/8）しまり、粘性弱い。
4　灰褐色土（7.5YR4/2）しまり、粘性弱い。

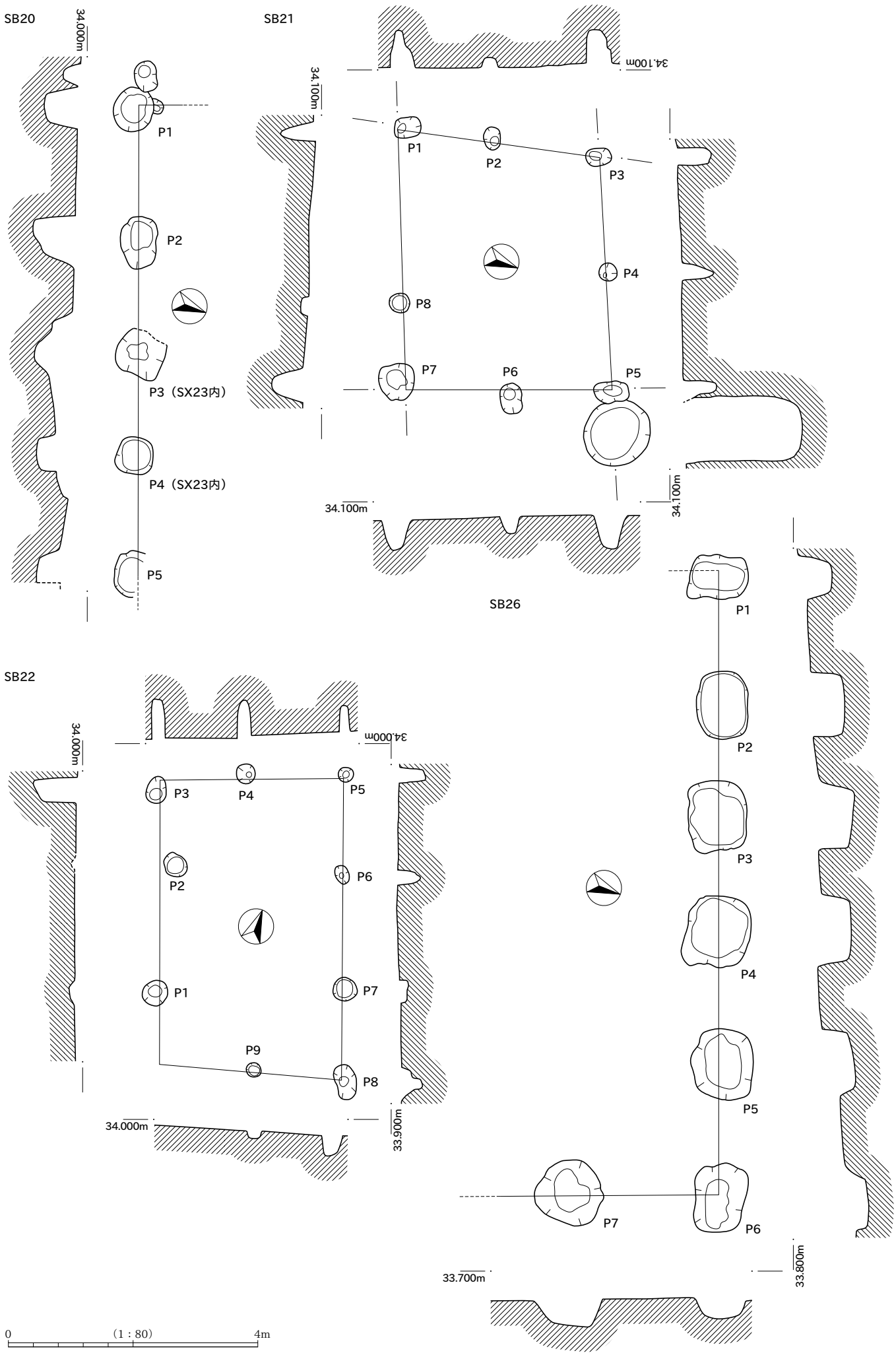
Pit8

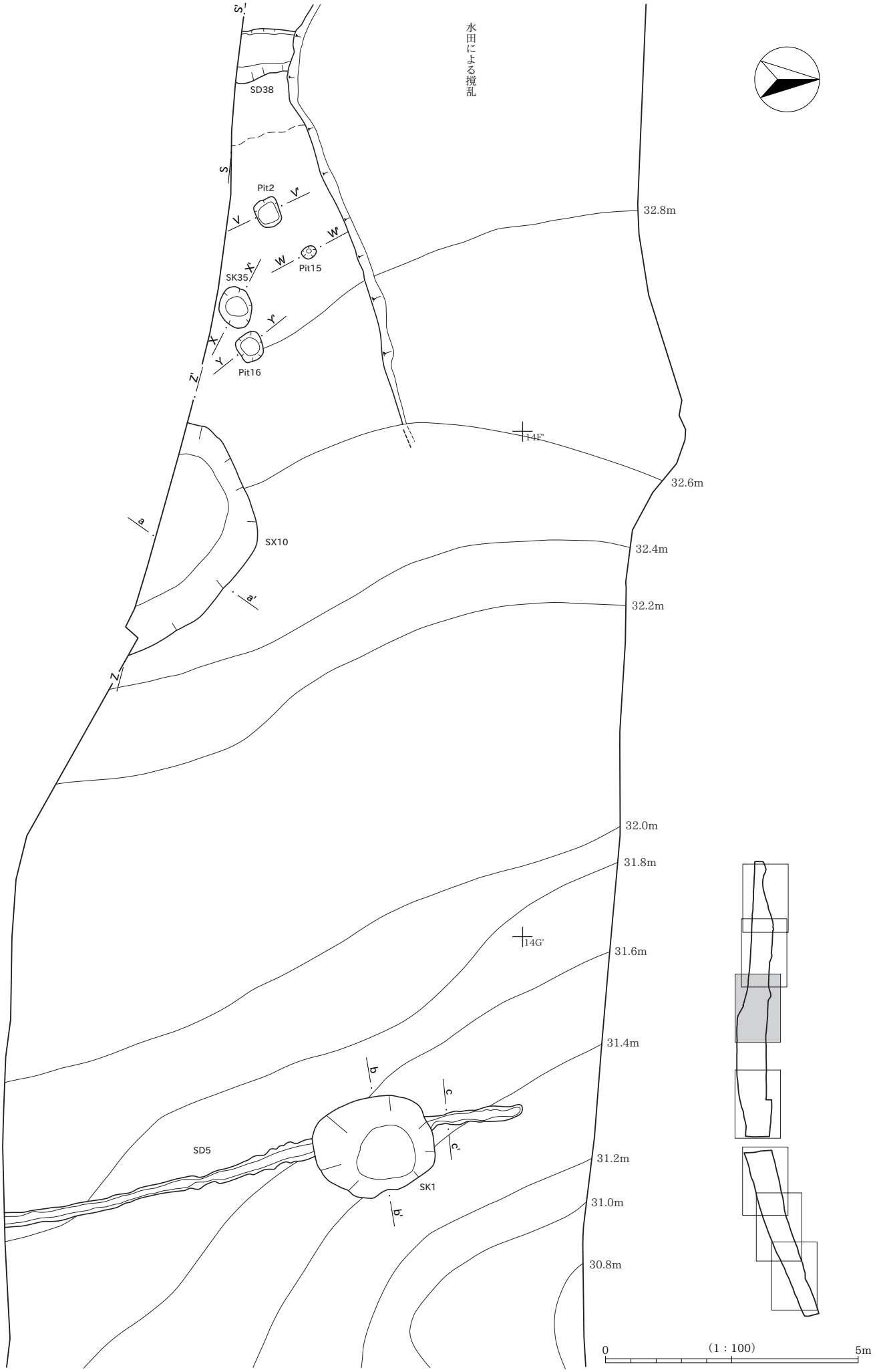


Pit8
1　黒褐色土（10YR3/1）　しまり、粘性弱い。
2　褐灰色土（10YR4/1）　しまり、粘性弱い。

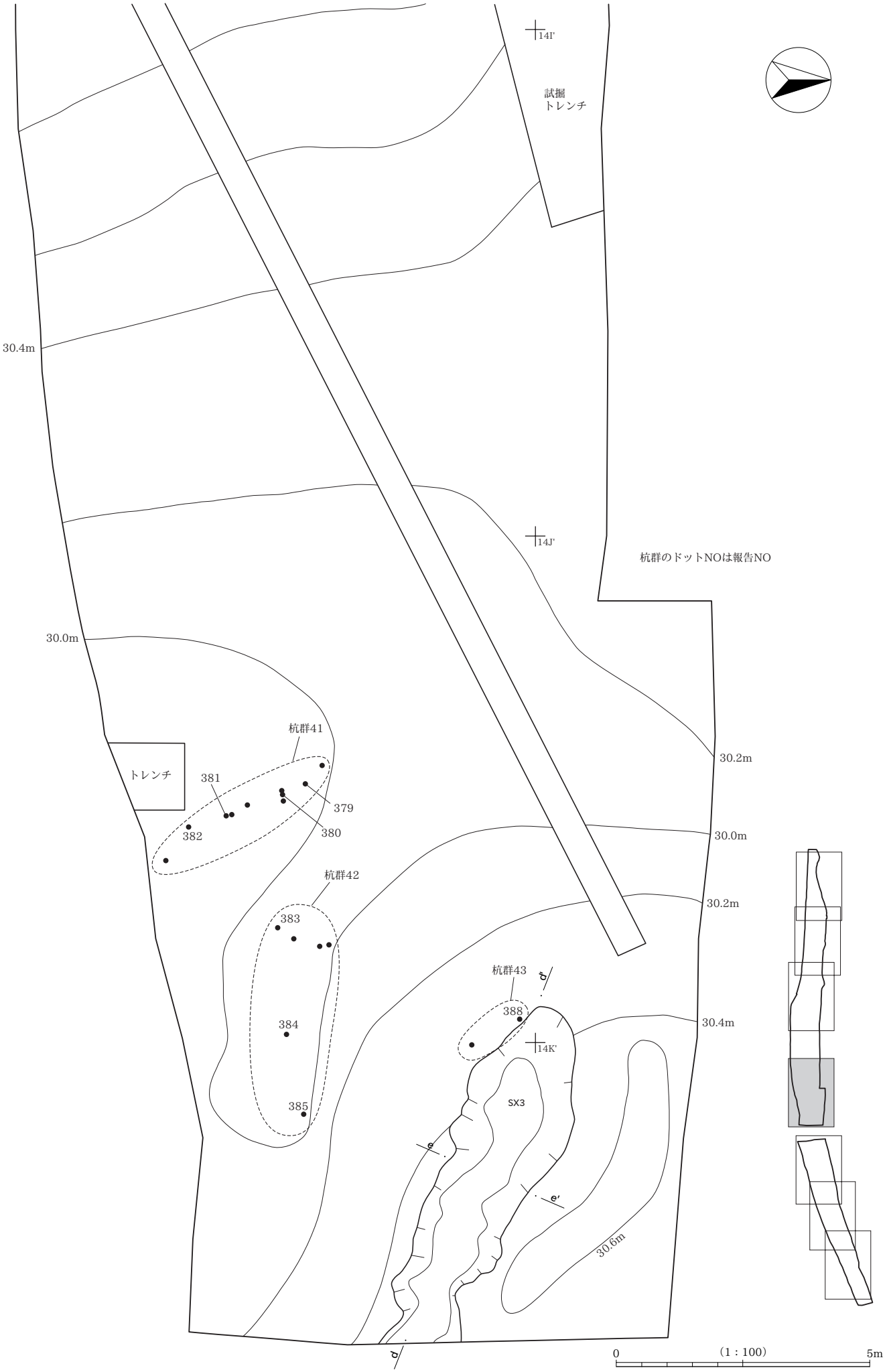
0　（1：40）　2m


32.4m
SD27
G
G'
H
H'
Pit33
I
I'
Pit9
Pit13
J
J'
34.0m
K
K'
SK36
SB21
Pit18
L
L'
O
O'
SE37
SK12
M
M'
SB22
Pit17
N
N'
Pit19
33.8m
P
P'
SB20
14D'
柱の痕跡？
SX23
SB26
33.6m
Pit25
Q
Q'
R
R'
Pit8
T
T'
33.4m
Pit32
33.2m
14E'
SK34
U
U'
S
S'
33.0m
水田による撹乱
SD38
Pit2
V
V'
Pit15
W
W'
32.8m
0
(1：100)
5m

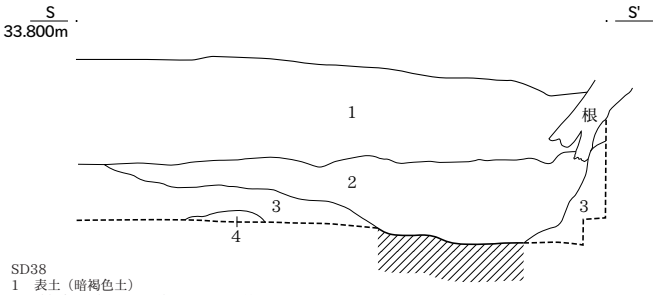

SB20
34.000m
P1
P2
P3（SX23内）
P4（SX23内）
P5
SB21
34.100m
34.100m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
34.100m
34.100m
SB22
34.000m
34.000m
34.000m
33.900m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
SB26
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
33.700m
33.800m
0
（1：80）
4m


水田による撹乱
SD38
Pit2
Pit15
SK35
Pit16
SX10
SD5
SK1
14F'
14G'
32.8m
32.6m
32.4m
32.2m
32.0m
31.8m
31.6m
31.4m
31.2m
31.0m
30.8m
0
(1：100)
5m

遺構平面図（4）

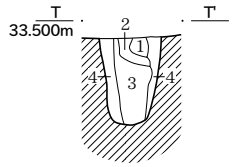

14I'
試掘
トレンチ
30.4m
14J'
杭群のドットNOは報告NO
30.0m
杭群41
トレンチ
381
379
380
382
30.2m
30.0m
杭群42
383
30.2m
杭群43
d'
388
30.4m
384
14K'
SX3
385
e
e'
30.6m
d
0
(1：100)
5m

SK38



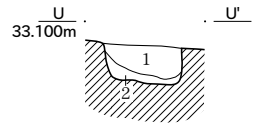
SD38
1　表土（暗褐色土）
2　暗褐色土（7.5YR3/3）　しまり、粘性弱い。
3　褐色土（7.5YR4/3）　しまり、粘性弱い。
4　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　しまり、粘性弱い。

Pit32



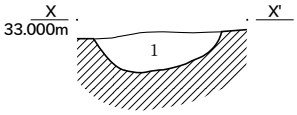
Pit32
1　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　しまり、粘性弱い。
2　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　しまり、粘性弱い。
3　灰黄褐色土（10YR4/2）　しまり、粘性弱い。
4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　黄橙色土粒（径10～20mm程度）少量含む。しまり、粘性弱い。

SK34



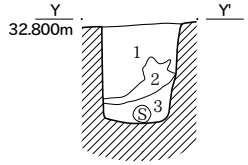
SK34
1　褐色土（7.5YR4/3）　しまり、粘性弱い。
2　橙色土（7.5YR7/6）　しまり、粘性弱い。

SK35



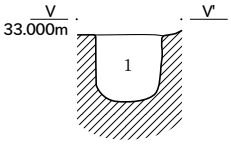
SK34
1　褐色土（7.5YR4/3）　しまり、粘性弱い。
2　橙色土（7.5YR7/6）　しまり、粘性弱い。

Pit16



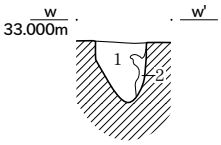
Pit16
1　黒褐色土（7.5YR3/2）　黄褐色土粒（径10mm程度）少量含む。しまり、粘性弱い。
2　褐色土（7.5YR4/3）　黒褐色土がまだらに多く混じる。しまり、粘性弱い。
3　黒褐色土（7.5YR3/2）　黄褐色土が少量混じる。しまり、粘性弱い。

Pit2



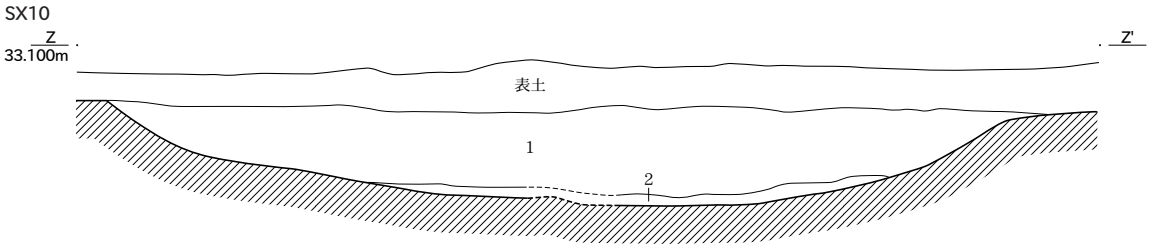
Pit2
1　暗褐色土（7.5YR3/3）　黄褐色土粒（径5～30mm程度）多く含む。しまり、粘性弱い。

Pit15

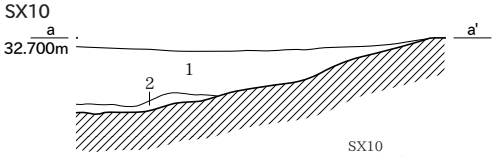


Pit15
1　褐色土（7.5YR4/3）　しまり、粘性弱い。
2　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　しまり、粘性弱い。

SX10

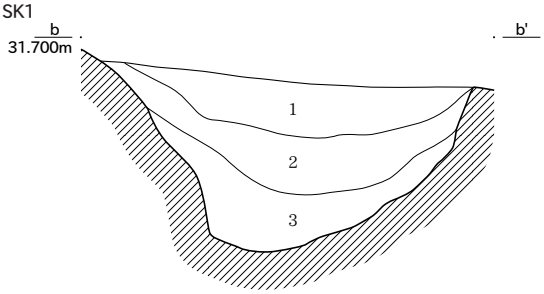


SX10



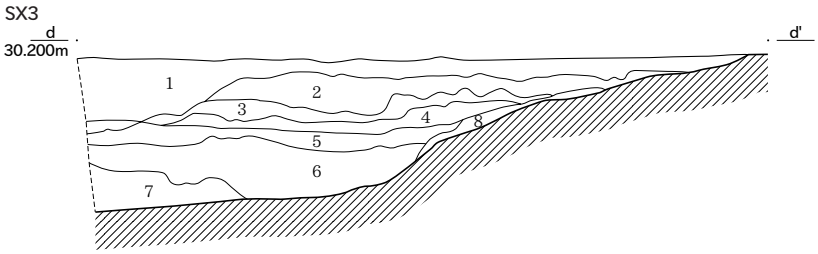
SX10
1　暗褐色土（7.5YR3/2）　しまり、粘性弱い。
2　暗褐色土（7.5YR3/3）　黄褐色土粒（径10～30mm程度）多く含む。

SK1

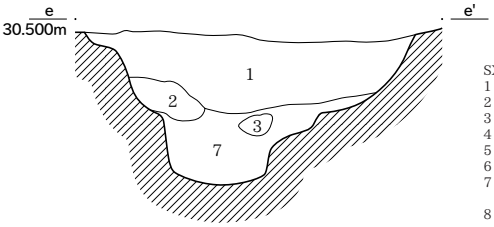


SK1
1　黒色土（5YR1.7/1）　しまりやや弱く、粘性強い。
2　黒色土（7.5YR2/1）　しまり弱く、粘性強い。
3　黒色土（2.5Y2/1）　礫（径3～5cm程度）少量含む。砂多く含む。しまり弱く、粘性強い。

SX3

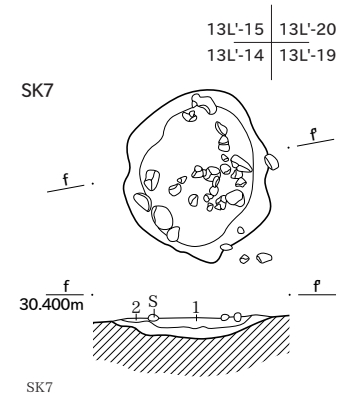


SX3

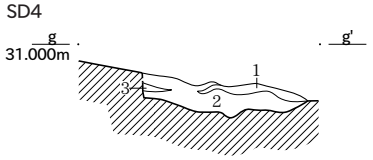


SX3
1　オリーブ黒色土（5Y2/2）　しまりやや強く、粘性強い。
2　オリーブ黄色土（5Y6/4）　しまりやや強く、粘性弱い。
3　灰オリーブ色土（5Y6/2）　砂多く含む。しまり、粘性弱い。
4　灰色土（5Y4/1）　しまり、粘性やや強い。
5　灰色土（5Y6/1）　砂多く含む。しまり、粘性なし。
6　オリーブ黄色土（5Y6/3）　シルト質土。しまり、粘性やや強い。
7　灰オリーブ色土（5Y5/2）　砂礫層。礫（径5～10mm程度）多く含む。しまり、粘性なし。
8　灰白色土（5Y7/1）　しまり弱く、粘性強い。

0　（1：40）　2m

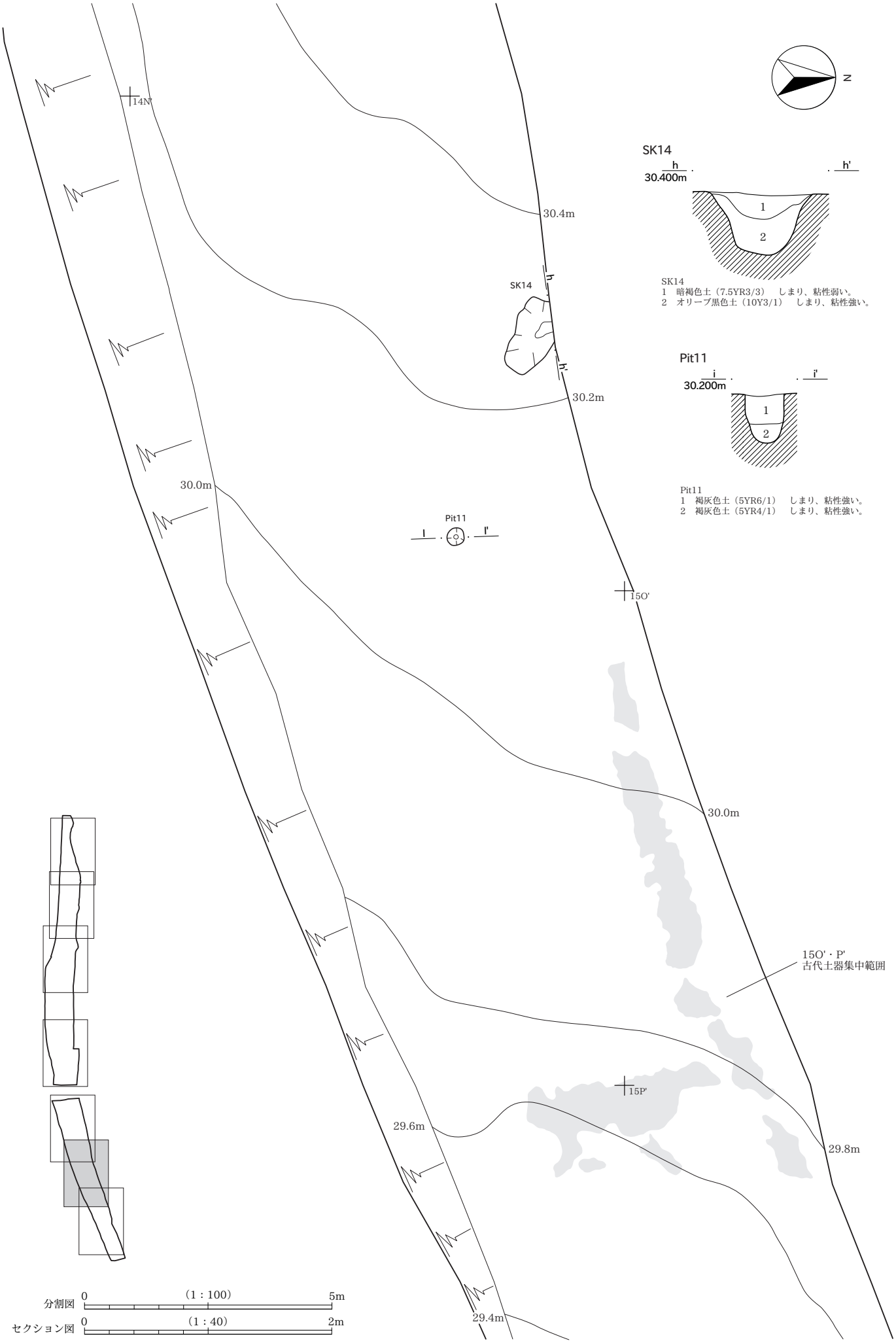


SK7
1　黒色土（5YR1.7/1）　しまり弱く、粘性やや強い。
2　灰色土（7.5Y5/1）　しまりやや弱く、粘性強い。

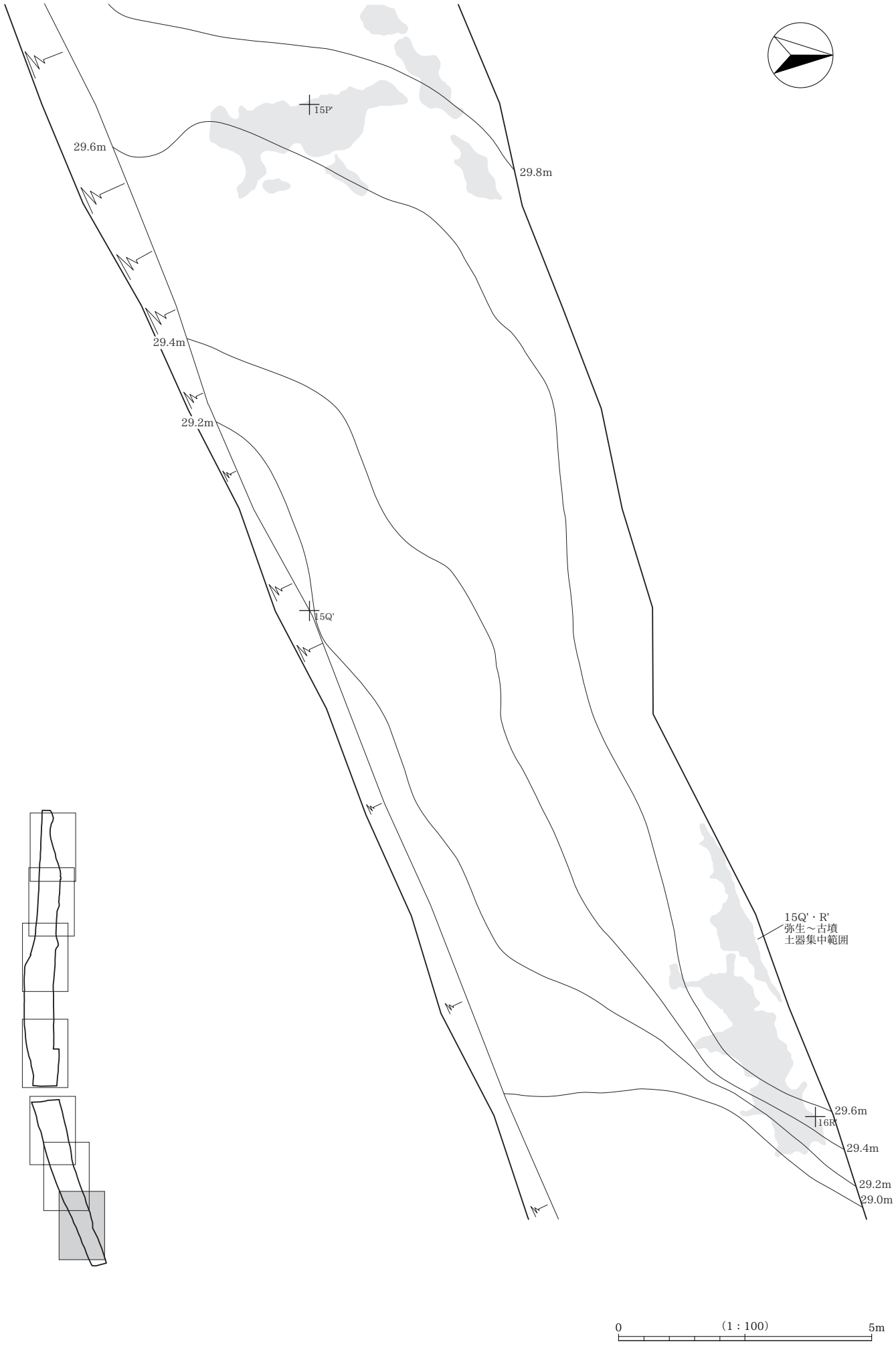


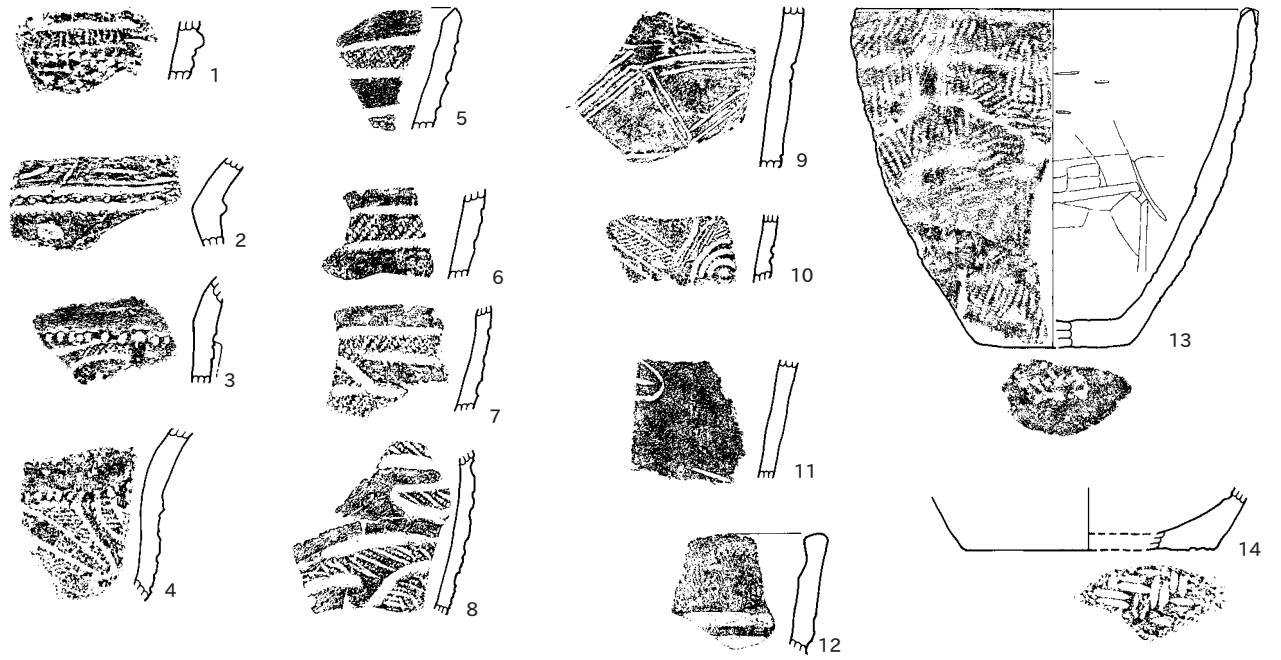
SD4
1　灰黄褐色土（10YR6/2）　しまり、粘性強い。
2　灰白色土（10YR7/1）　しまり、粘性強い。
3　黄褐色土（10YR5/6）　しまり、粘性強い。

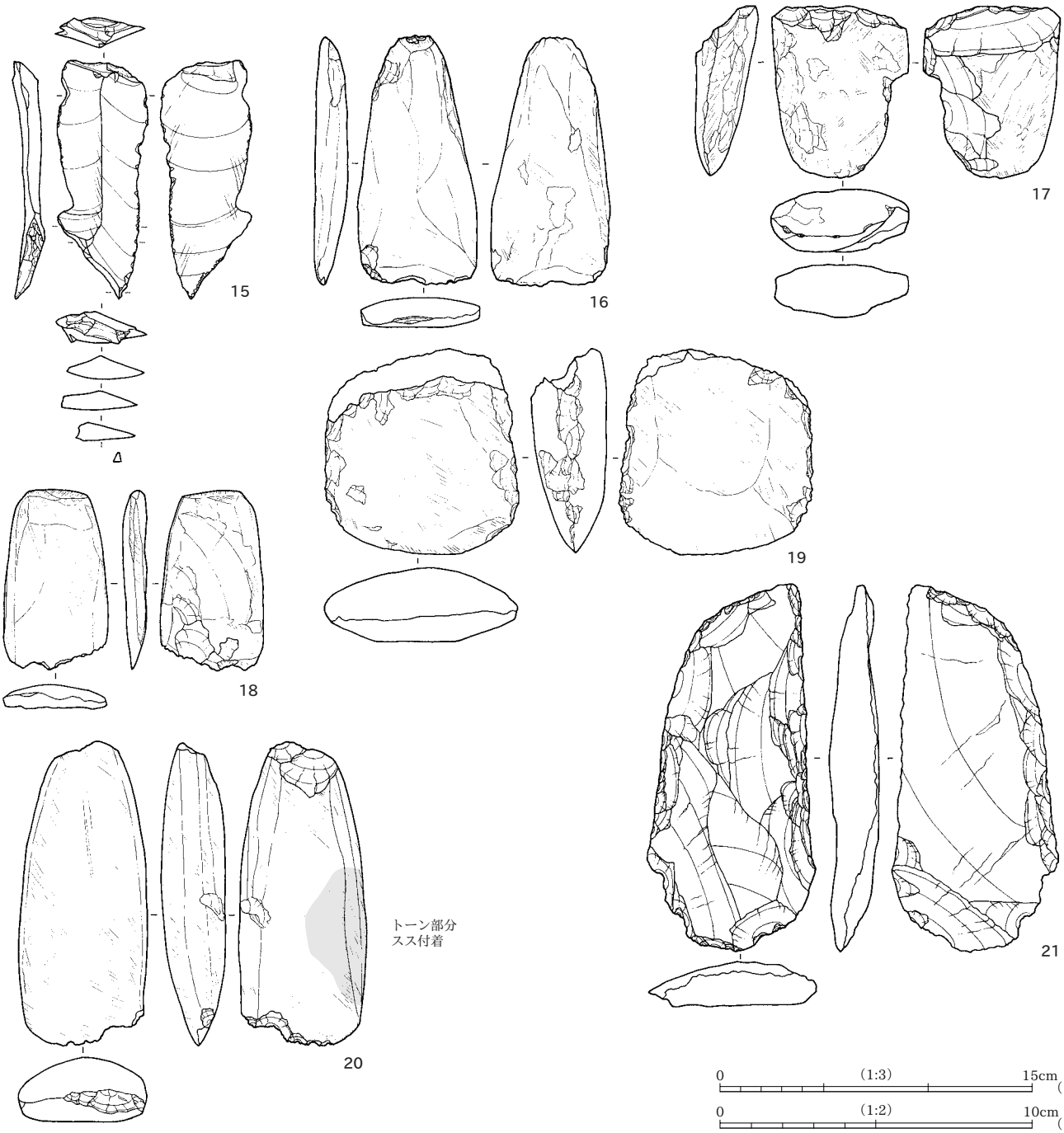
分割図　0　（1：100）　5m
セクション・個別図　0　（1：40）　2m


N
SK14
h
30.400m
h'
1
2
SK14
1　暗褐色土（7.5YR3/3）　しまり、粘性弱い。
2　オリーブ黒色土（10Y3/1）　しまり、粘性強い。
Pit11
i
30.200m
i'
1
2
Pit11
1　褐灰色土（5YR6/1）　しまり、粘性強い。
2　褐灰色土（5YR4/1）　しまり、粘性強い。
14N'
30.4m
SK14
h
h'
30.2m
30.0m
Pit11
I
I'
15O'
30.0m
15O'・P'
古代土器集中範囲
15P'
29.6m
29.8m
29.4m
分割図　0　（1：100）　5m
セクション図　0　（1：40）　2m

遺構平面図（7）


15P'
29.6m
29.8m
29.4m
29.2m
15Q'
15Q'・R'
弥生～古墳
土器集中範囲
29.6m
16R'
29.4m
29.2m
29.0m
0
(1：100)
5m

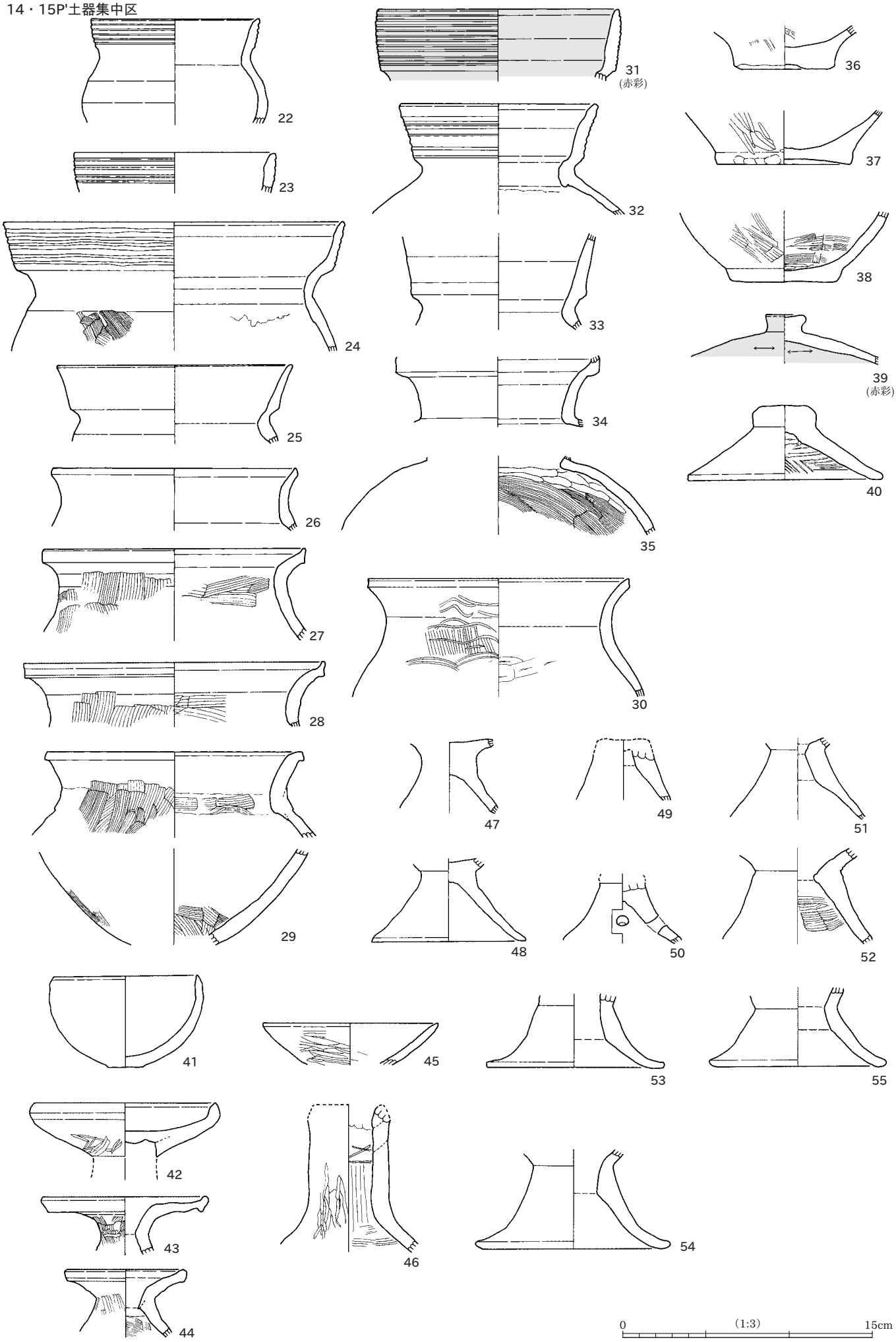




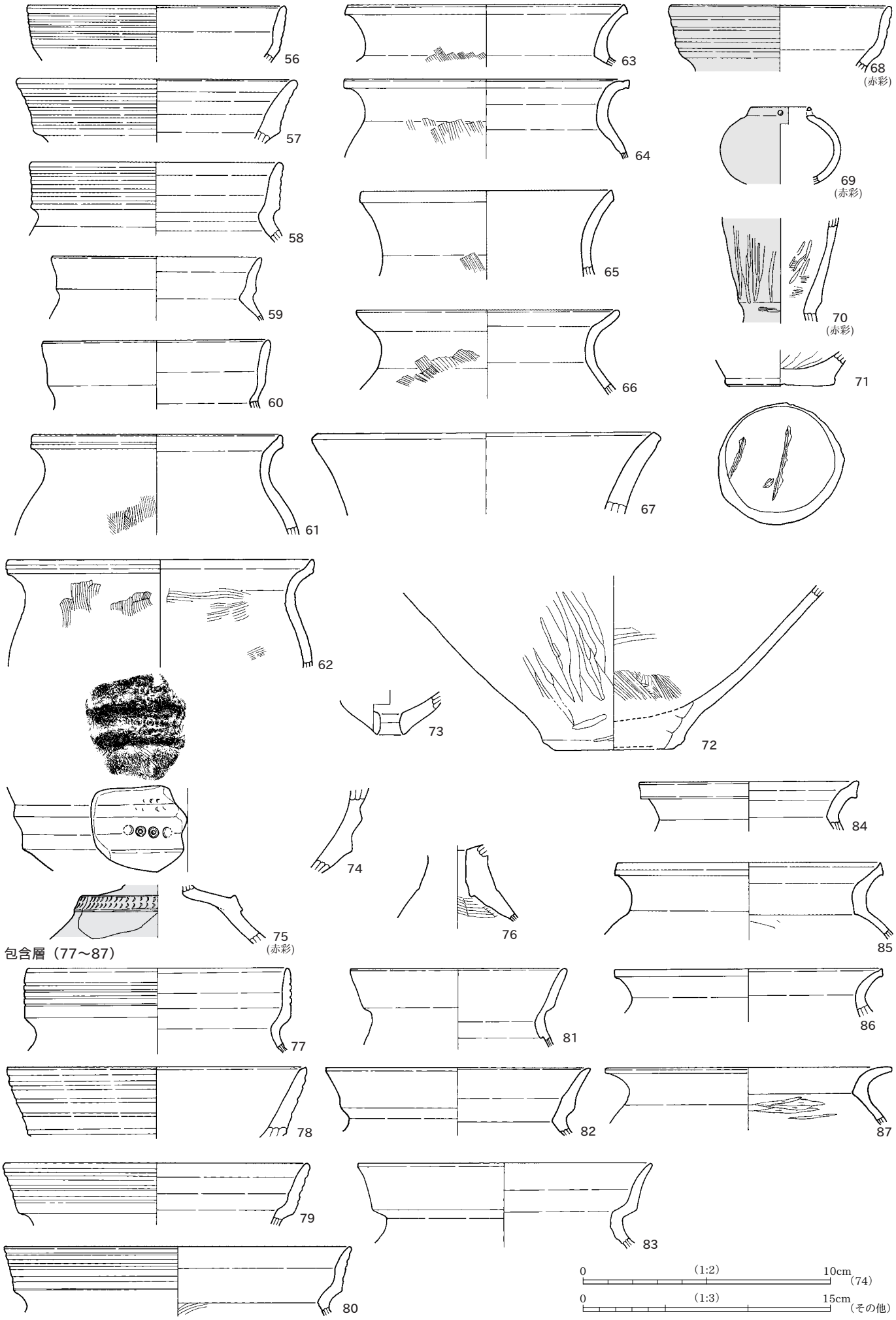
0 (1:3) 15cm (1～14)

0 (1:2) 10cm (15～21)

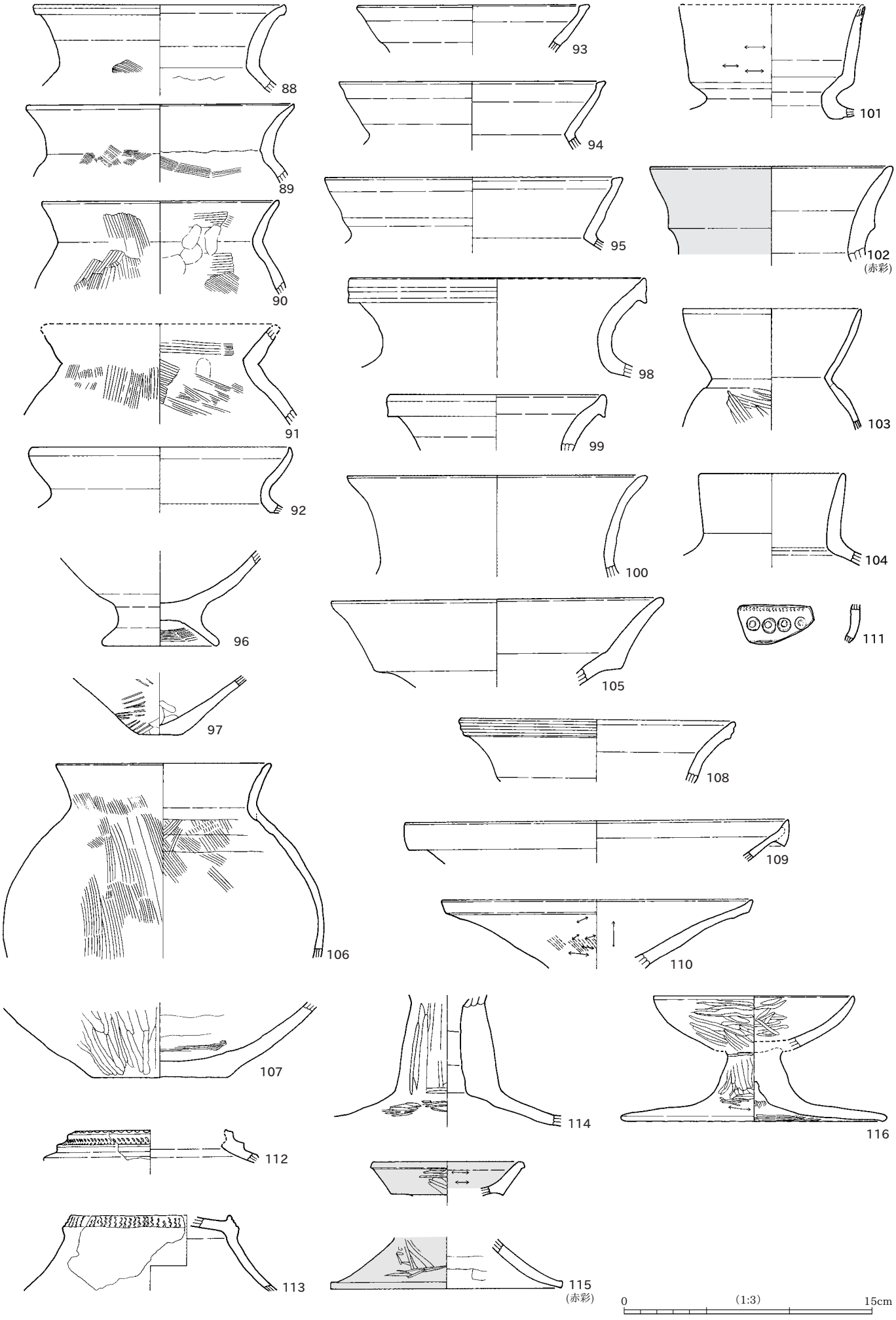
14・15P'土器集中区

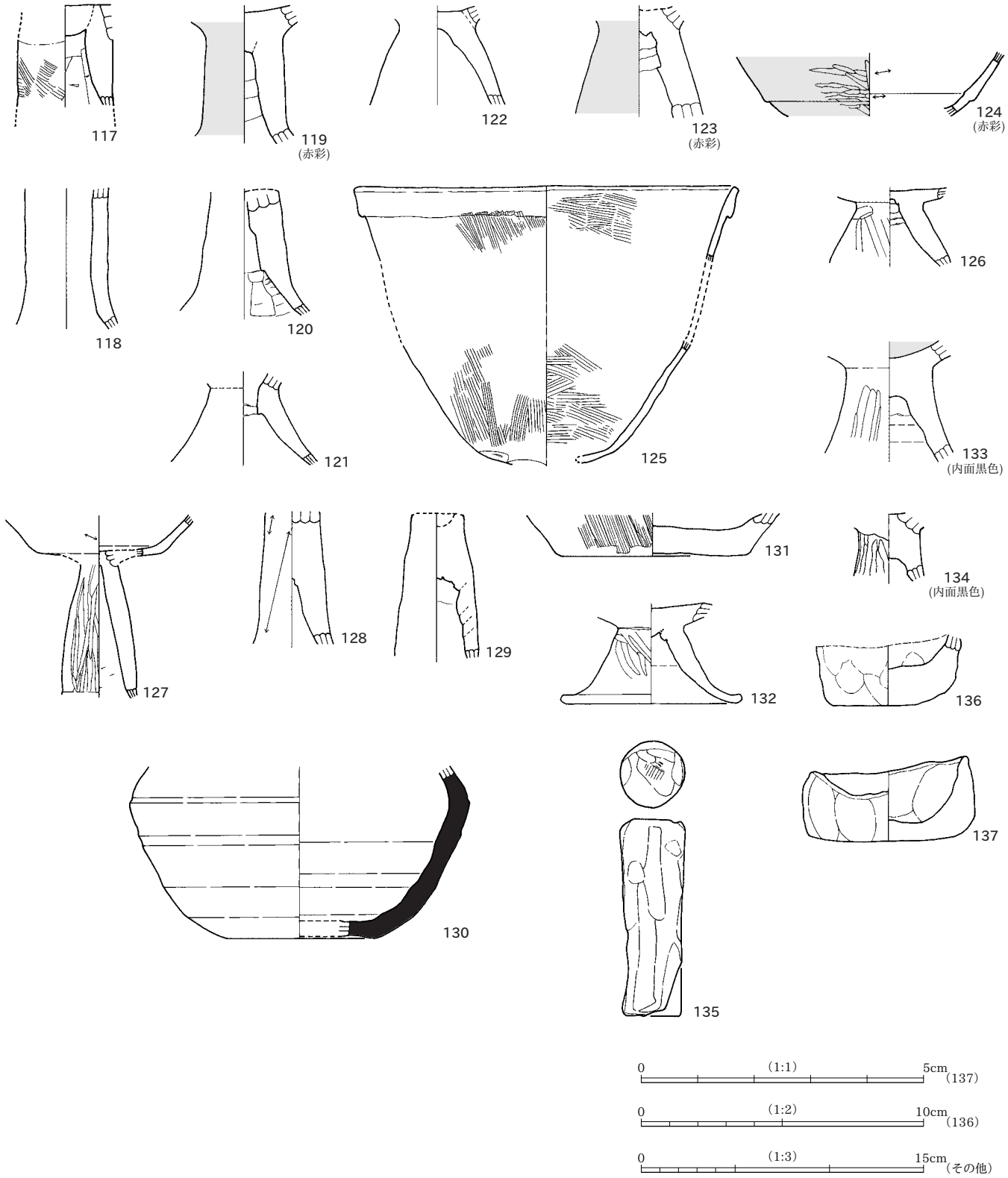

22
23
24
25
26
27
28
29
31
(赤彩)
32
33
34
35
30
36
37
38
39
(赤彩)
40
47
49
51
48
50
52
41
45
53
55
42
43
44
46
54
0
(1:3)
15cm

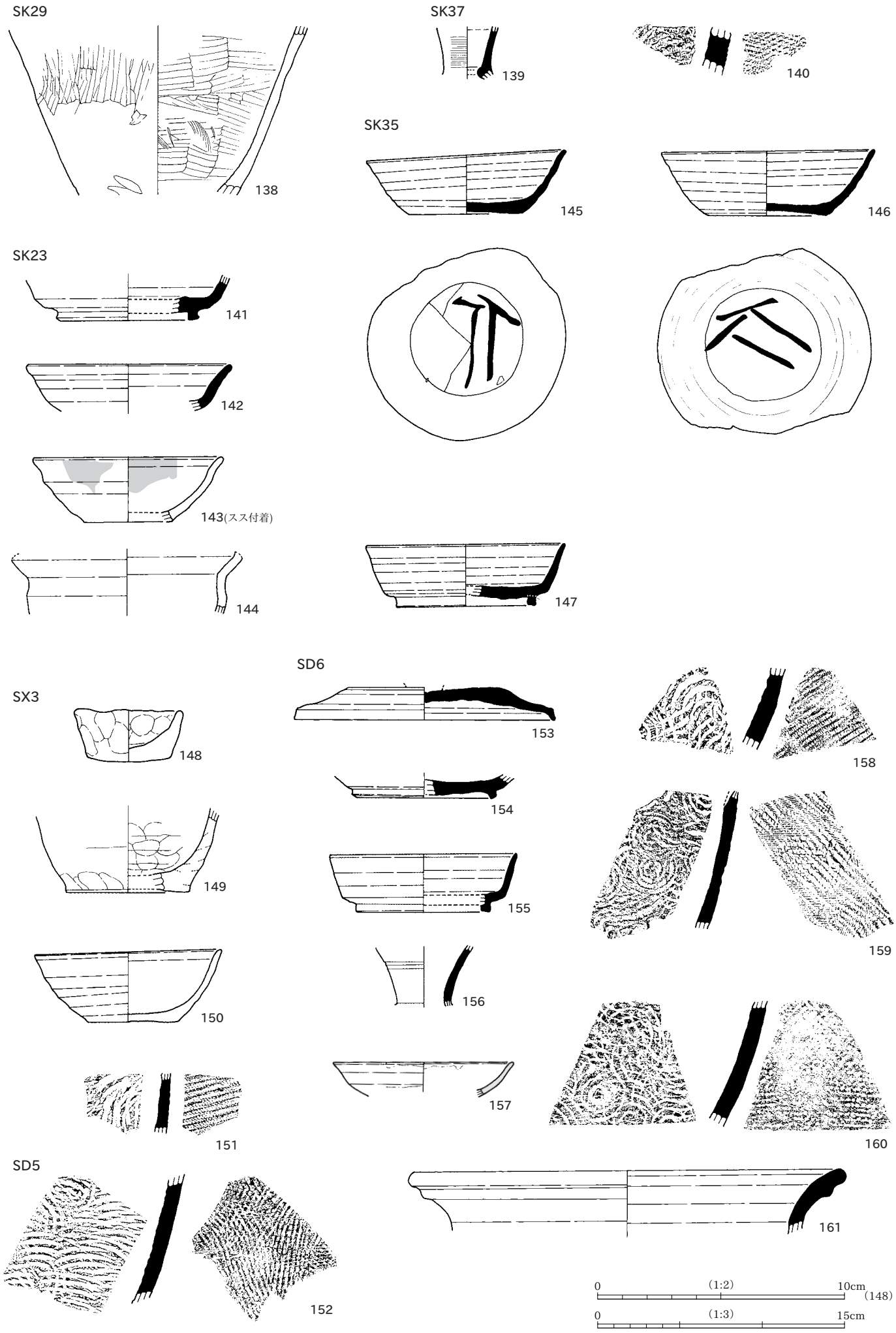
15Q'-25,15R'-1土器集中区（56～76）



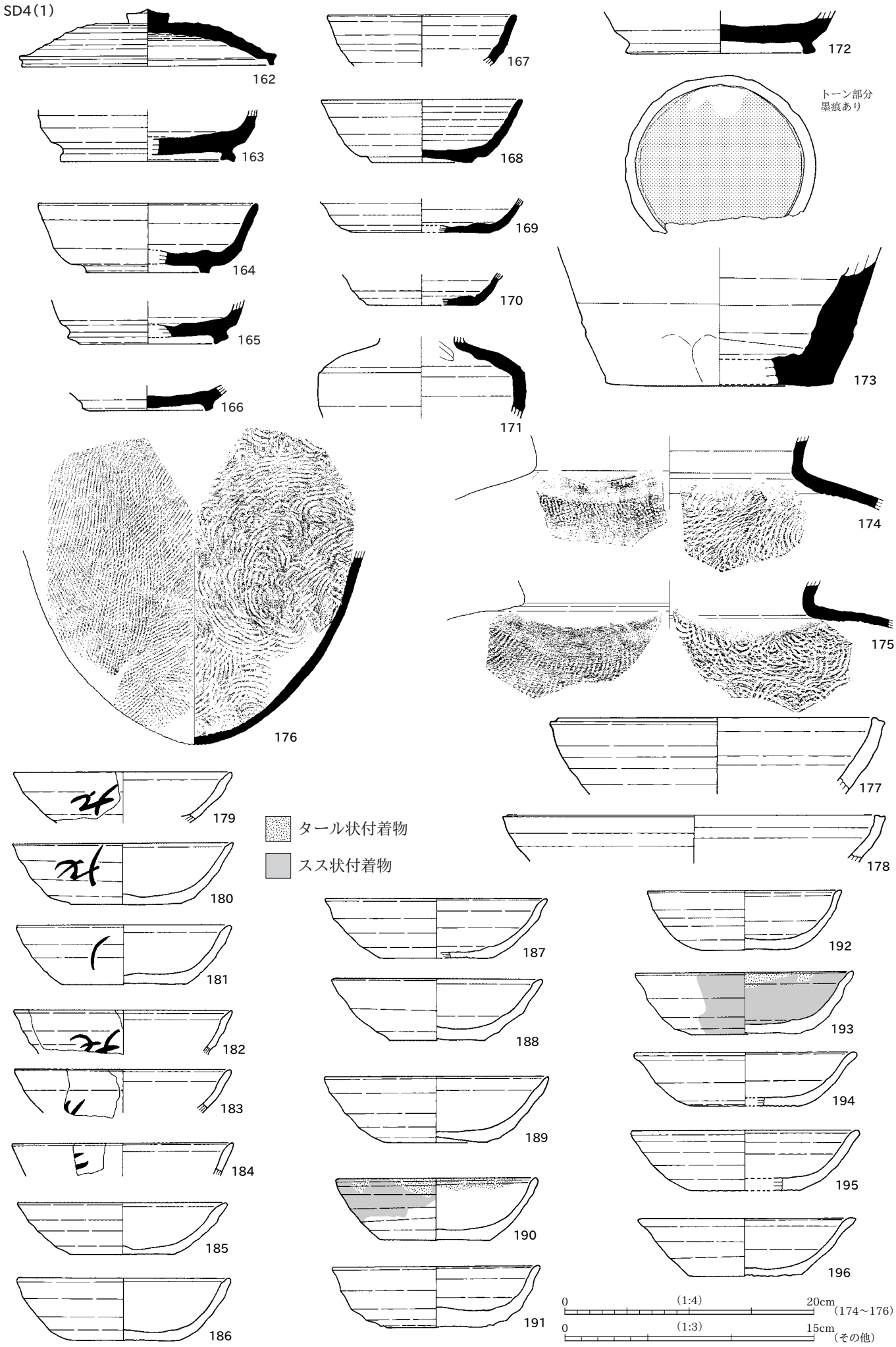
包含層（88～116）


88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
(赤彩)
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
(赤彩)
116
0
(1:3)
15cm

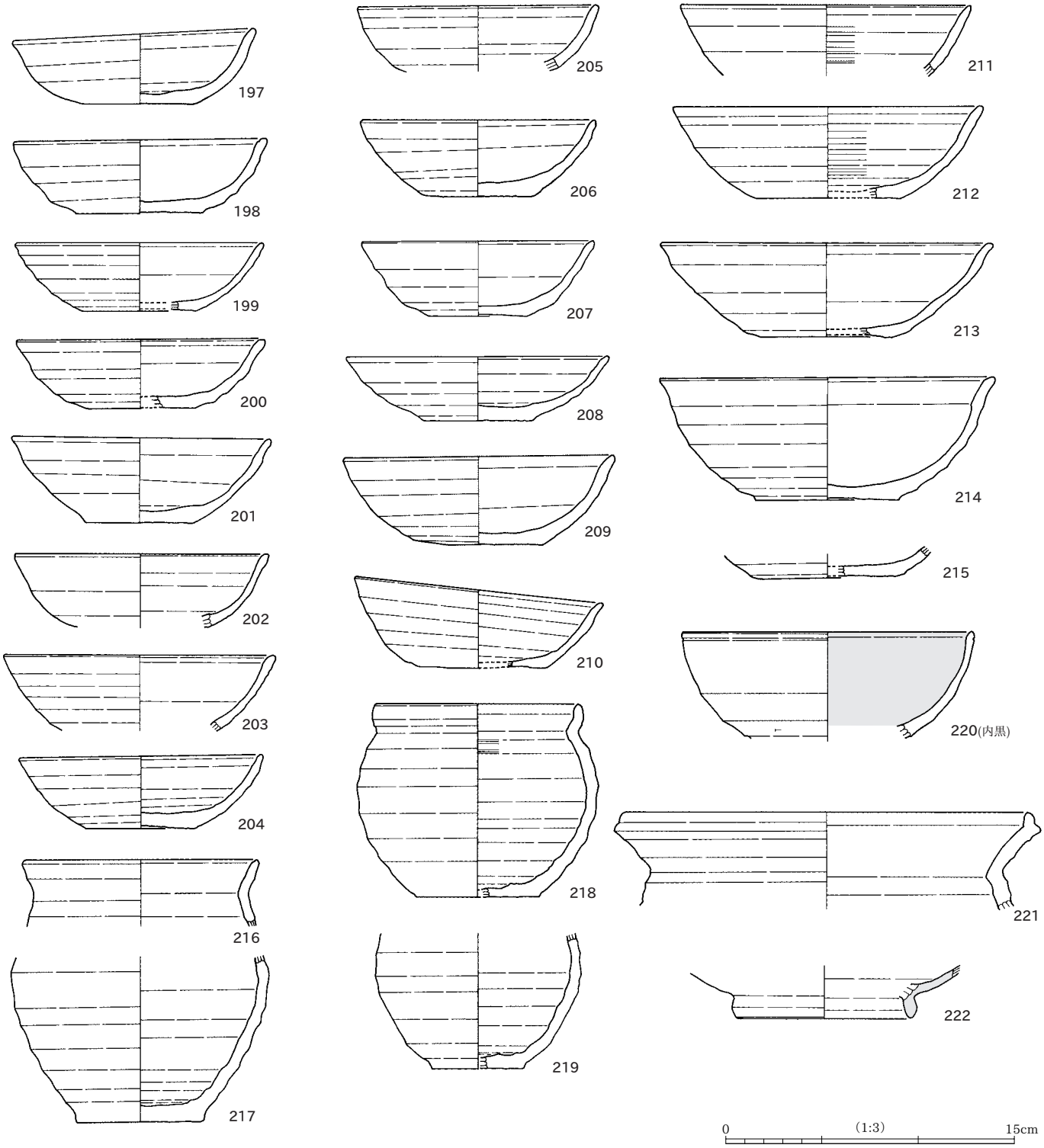

117
119
(赤彩)
122
123
(赤彩)
124
(赤彩)
118
120
125
126
121
133
(内面黒色)
127
128
129
131
134
(内面黒色)
132
136
130
137
135
0
(1:1)
5cm
(137)
0
(1:2)
10cm
(136)
0
(1:3)
15cm
(その他)


SK29
138
SK37
139
140
SK35
145
146
SK23
141
142
143(スス付着)
144
147
SX3
148
149
150
151
SD6
153
154
155
156
157
158
159
160
SD5
152
161
0 (1:2) 10cm (148)
0 (1:3) 15cm

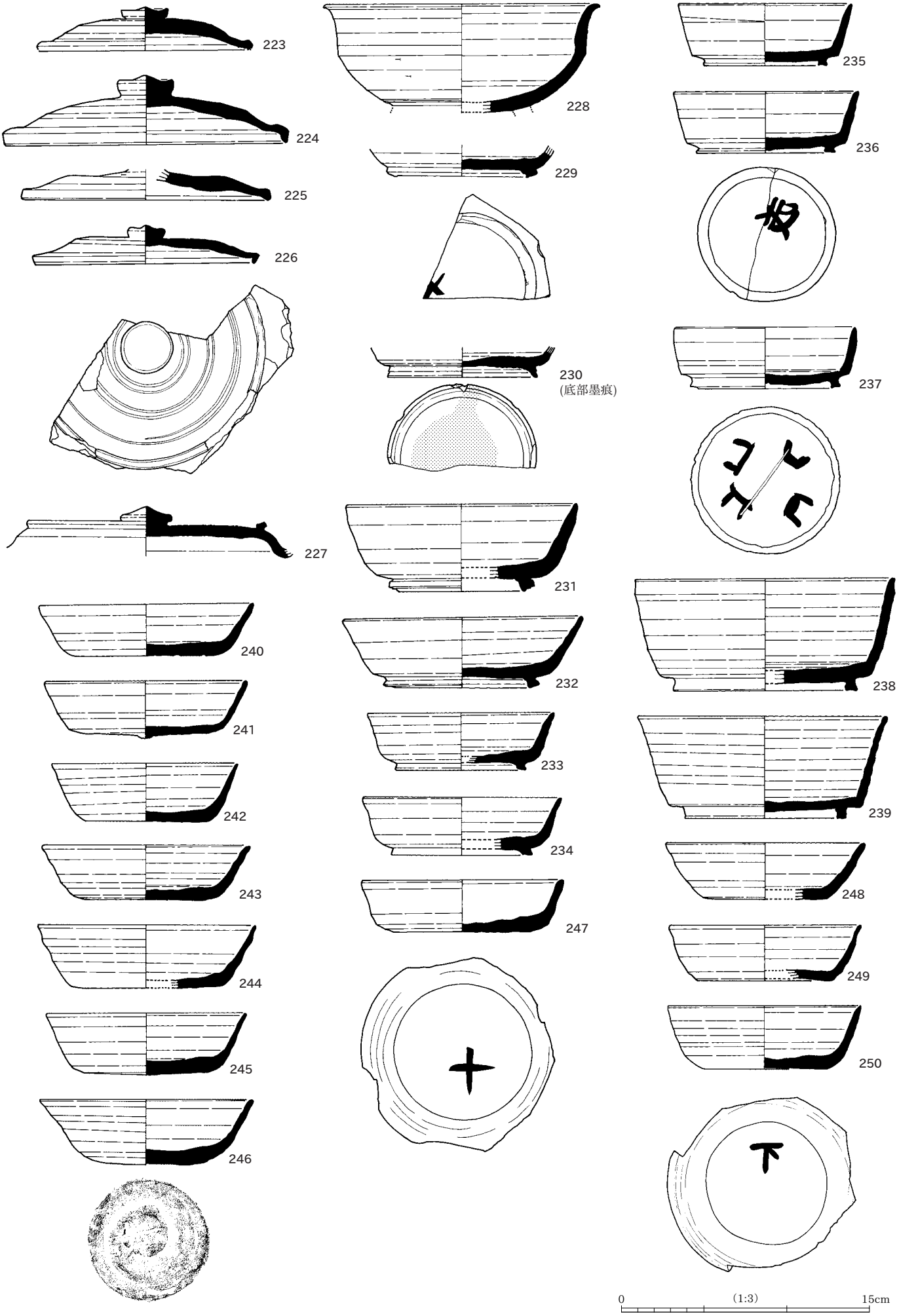
SD4(1)

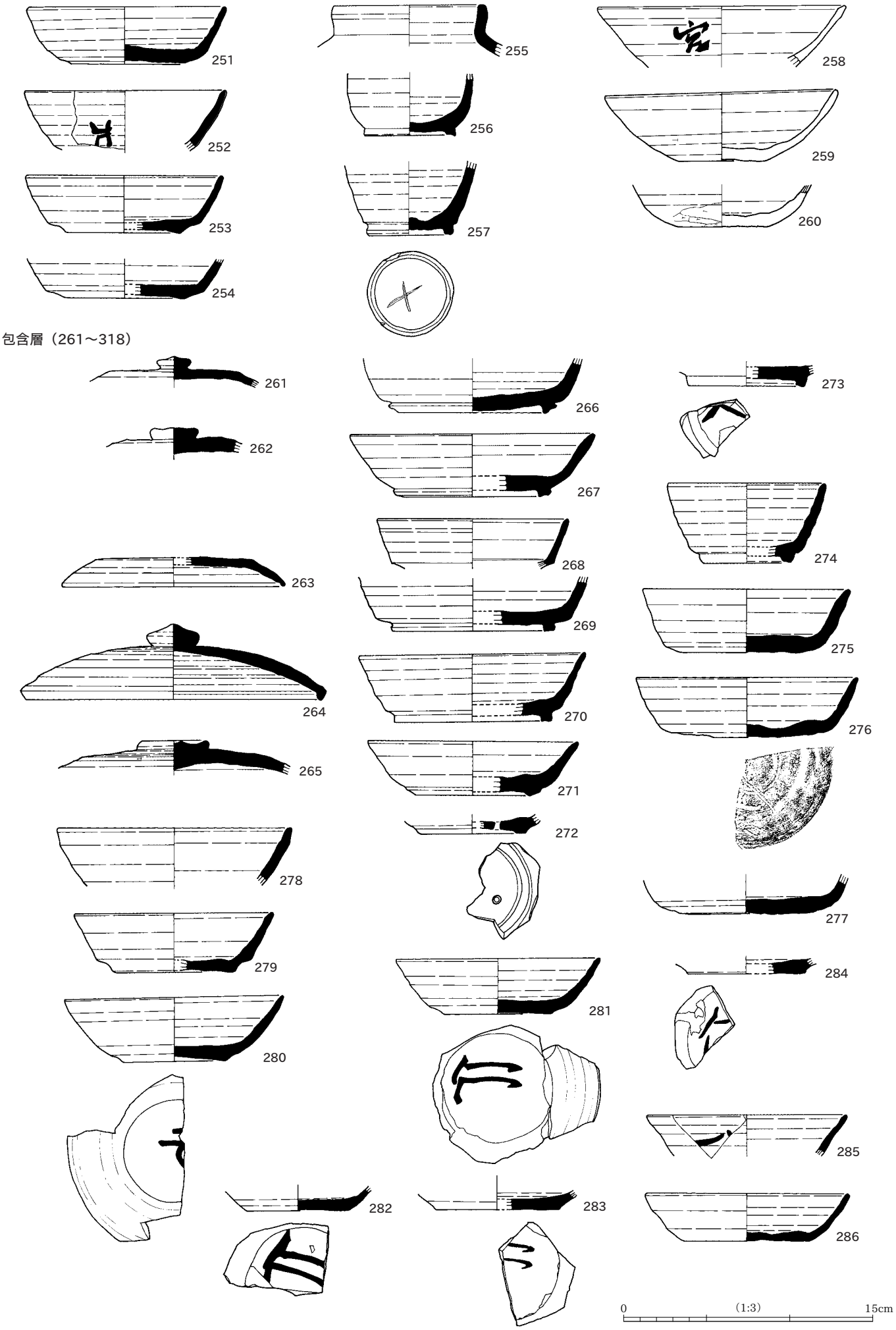

162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
トーン部分
墨痕あり
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
タール状付着物
スス状付着物
0
(1:4)
20cm
(174～176)
0
(1:3)
15cm
(その他)

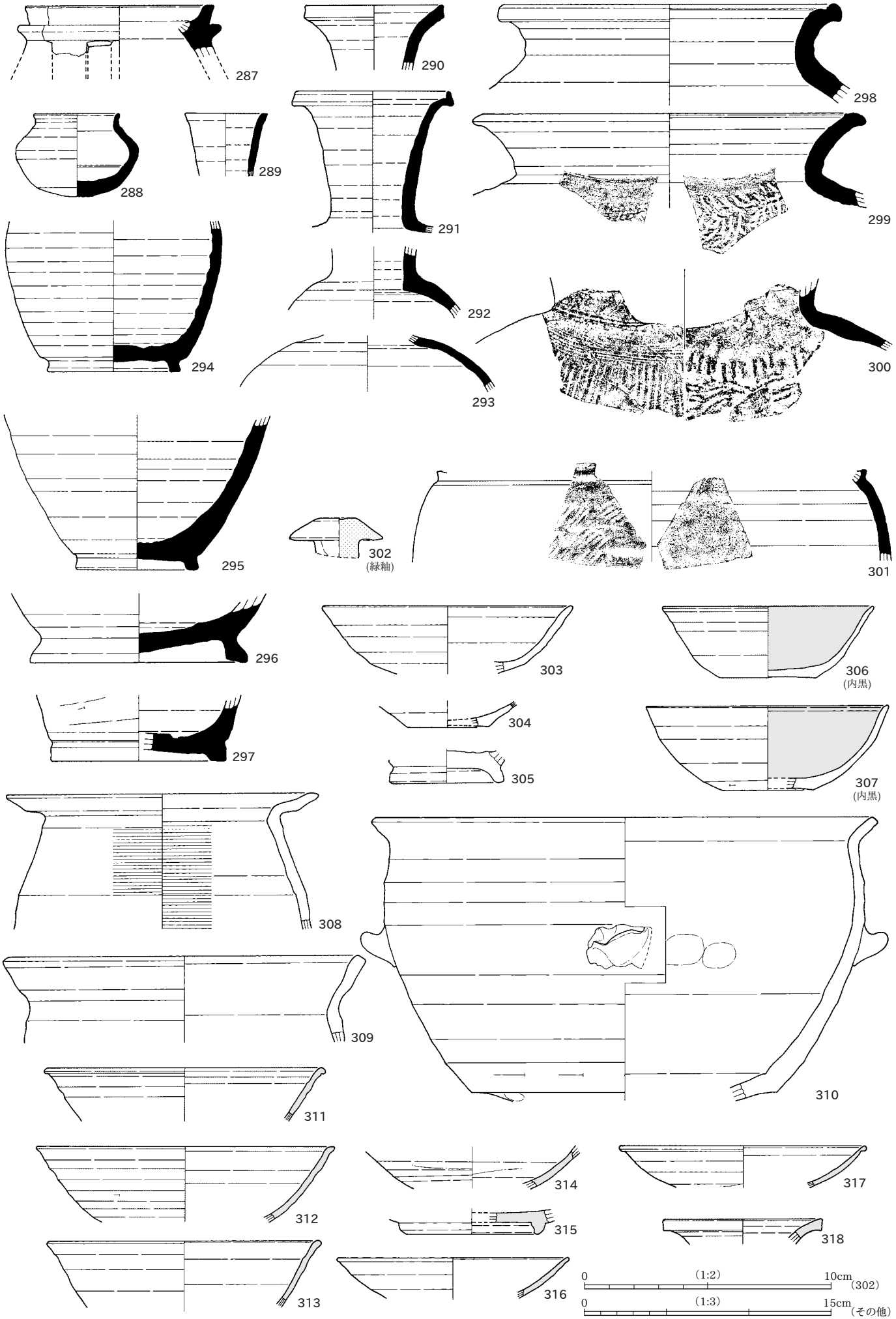
SD4(2)

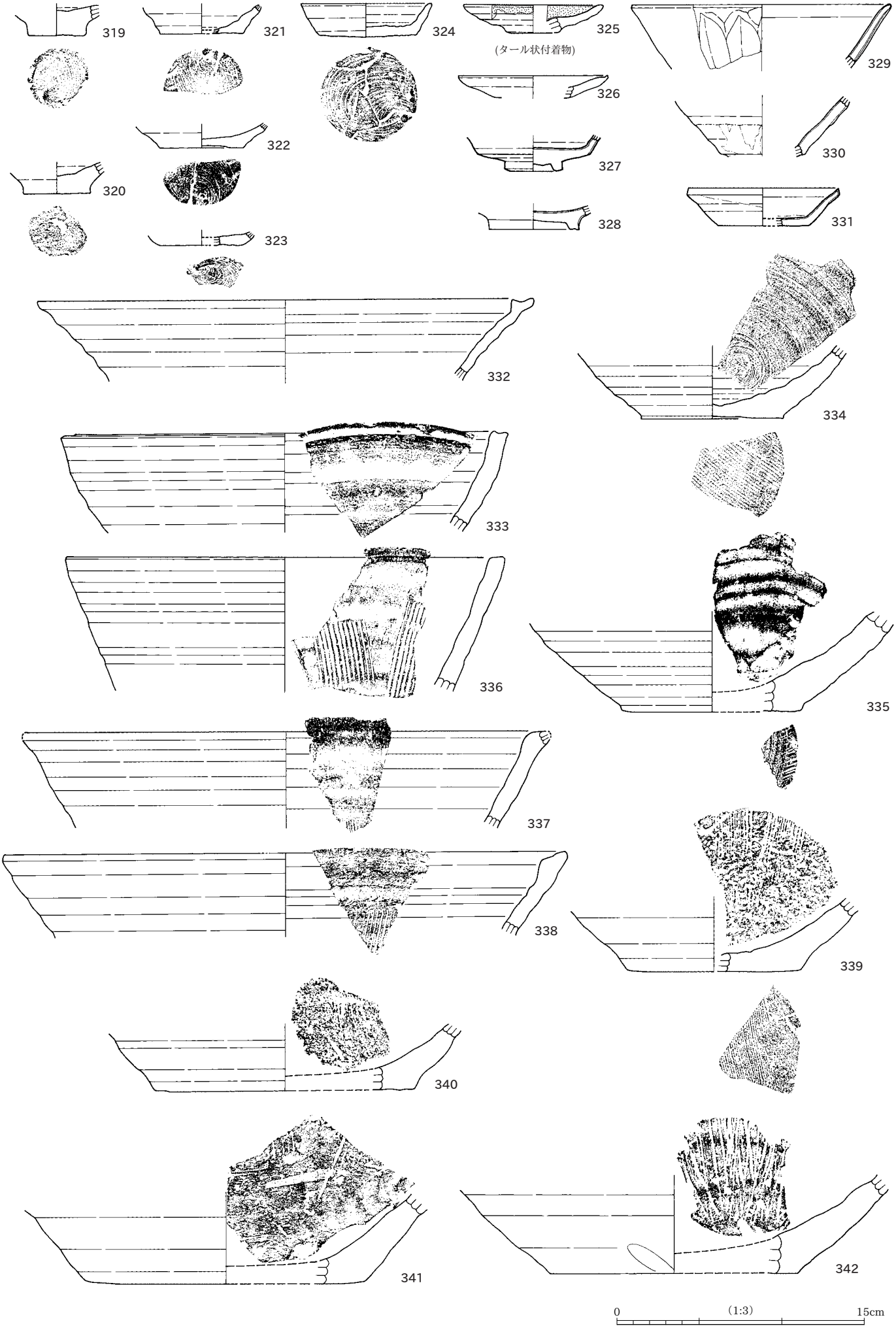

197
198
199
200
201
202
203
204
216
217
205
206
207
208
209
210
218
219
211
212
213
214
215
220(内黒)
221
222
0
(1:3)
15cm

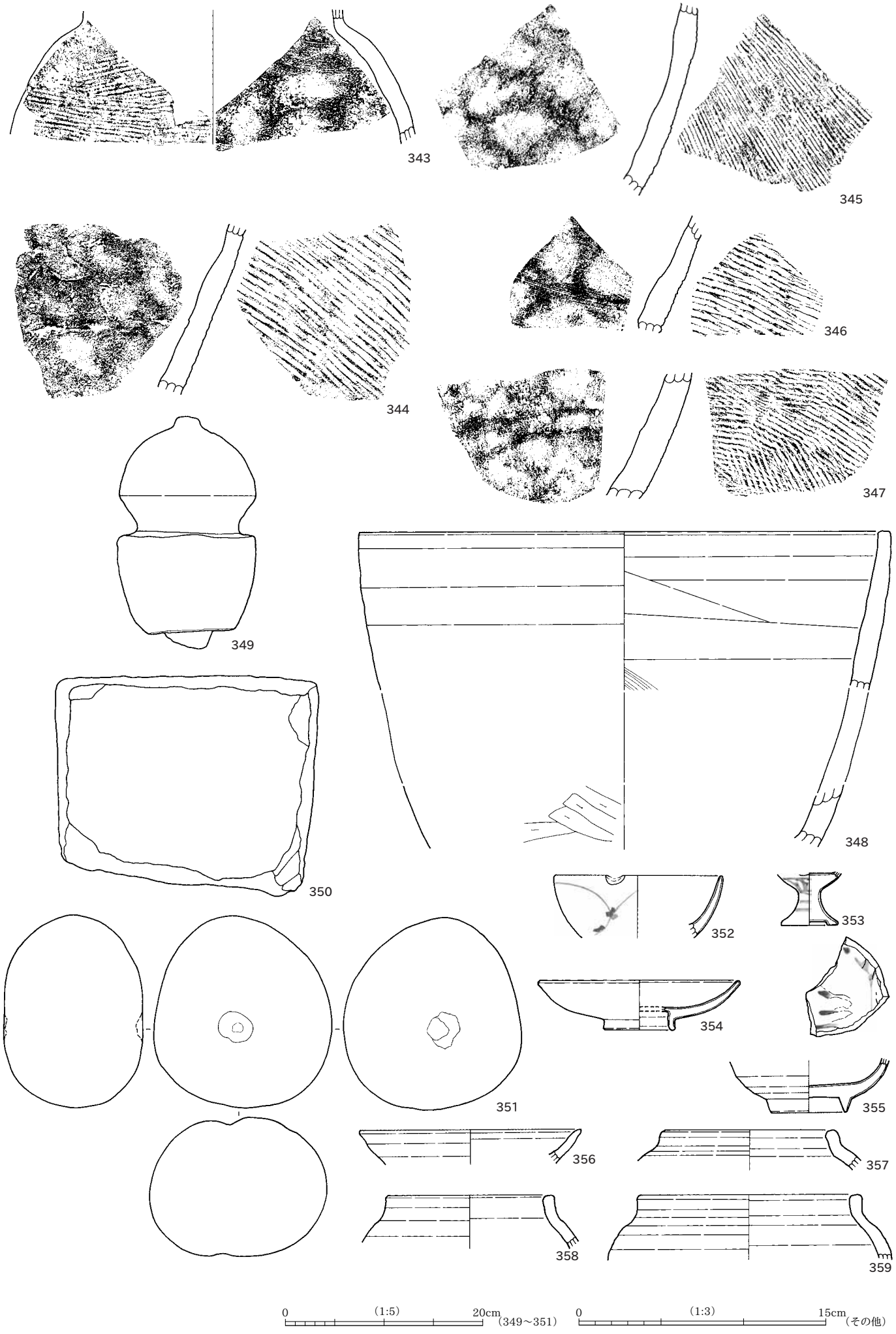
15O'・15P'・15Q'北側端土器集中区

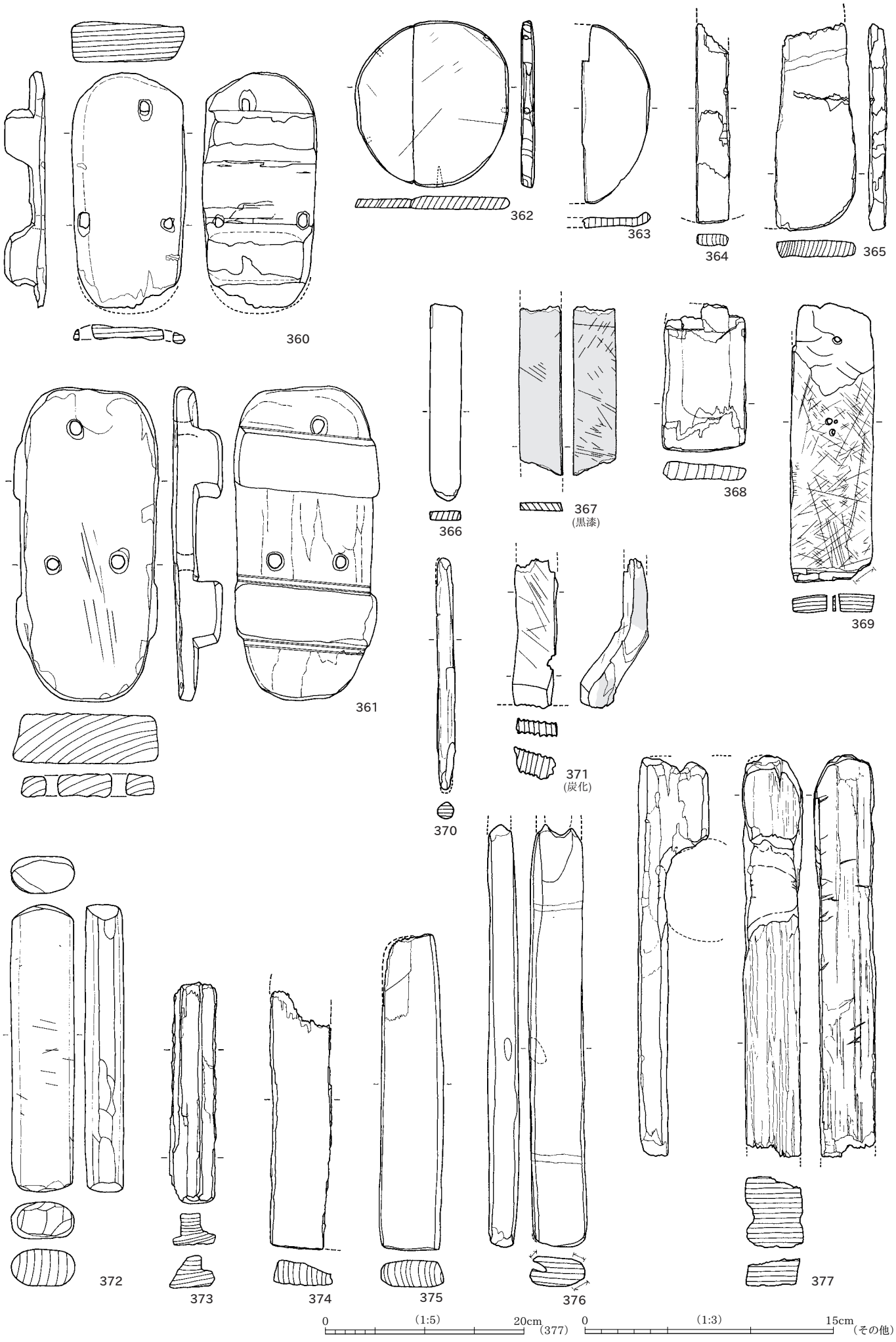


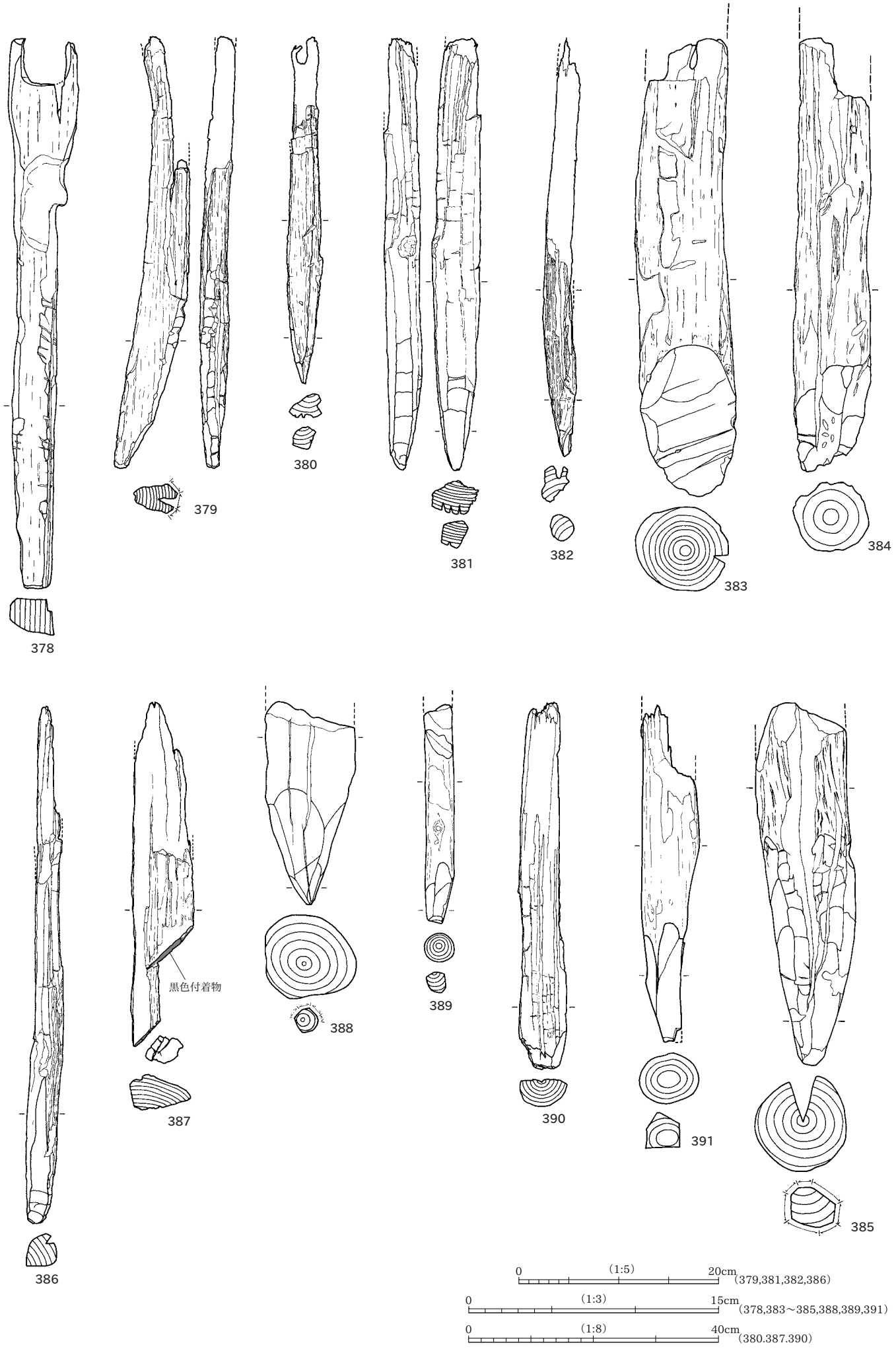

251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
包含層（261～318）
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
0
(1:3)
15cm


287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
(緑釉)
303
304
305
306
(内黒)
307
(内黒)
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
0
(1:2)
10cm
(302)
0
(1:3)
15cm
(その他)


319
321
324
325
(タール状付着物)
329
326
322
327
330
320
328
331
323
332
334
333
336
335
337
338
339
340
341
342
0
(1:3)
15cm


343
345
344
346
347
349
348
350
352
353
354
351
355
356
357
358
359
0
(1:5)
20cm
(349～351)
0
(1:3)
15cm
(その他)


360
361
362
363
364
365
366
367
(黒漆)
368
369
370
371
(炭化)
372
373
374
375
376
377
0
(1:5)
20cm
(377)
0
(1:3)
15cm
(その他)


378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
黒色付着物
0 (1:5) 20cm (379,381,382,386)
0 (1:3) 15cm (378,383～385,388,389,391)
0 (1:8) 40cm (380.387.390)

遺跡周辺の景観（南から）

遺跡周辺の景観２（遺跡から北東方向をのぞむ）

遺跡全景１（北から）

遺跡全景２（東上空から）

遺跡全景３（北東から）

４号竪穴建物（東から）

６号竪穴建物　出土土器（南から）

８号竪穴建物　出土土器（西から）

11 号・14 号竪穴付近調査前現況（西から）

基本層序（南東から）

管玉製作工程品・ヒスイ勾玉

続縄文類似土器・石偶

6号竪穴土器（167）内原石

竪穴出土鉄製品

スタンプ文（器台：土器220）

スタンプ文（器台：土器221）

刺突文（鉢：313）

10号竪穴出土炭化米

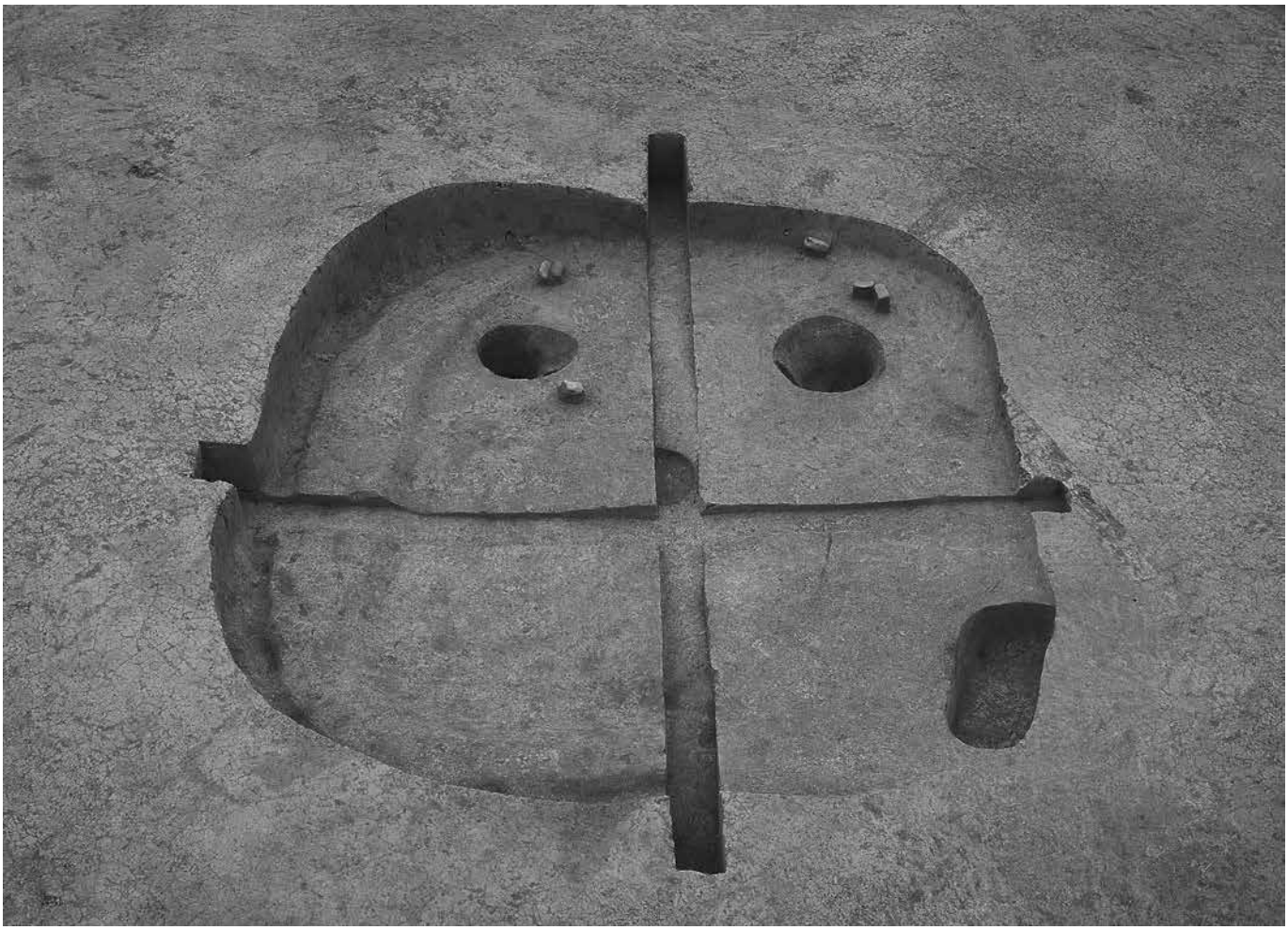
下馬場遺跡　１・２号竪穴建物完掘 全景

１号竪穴建物（東から）

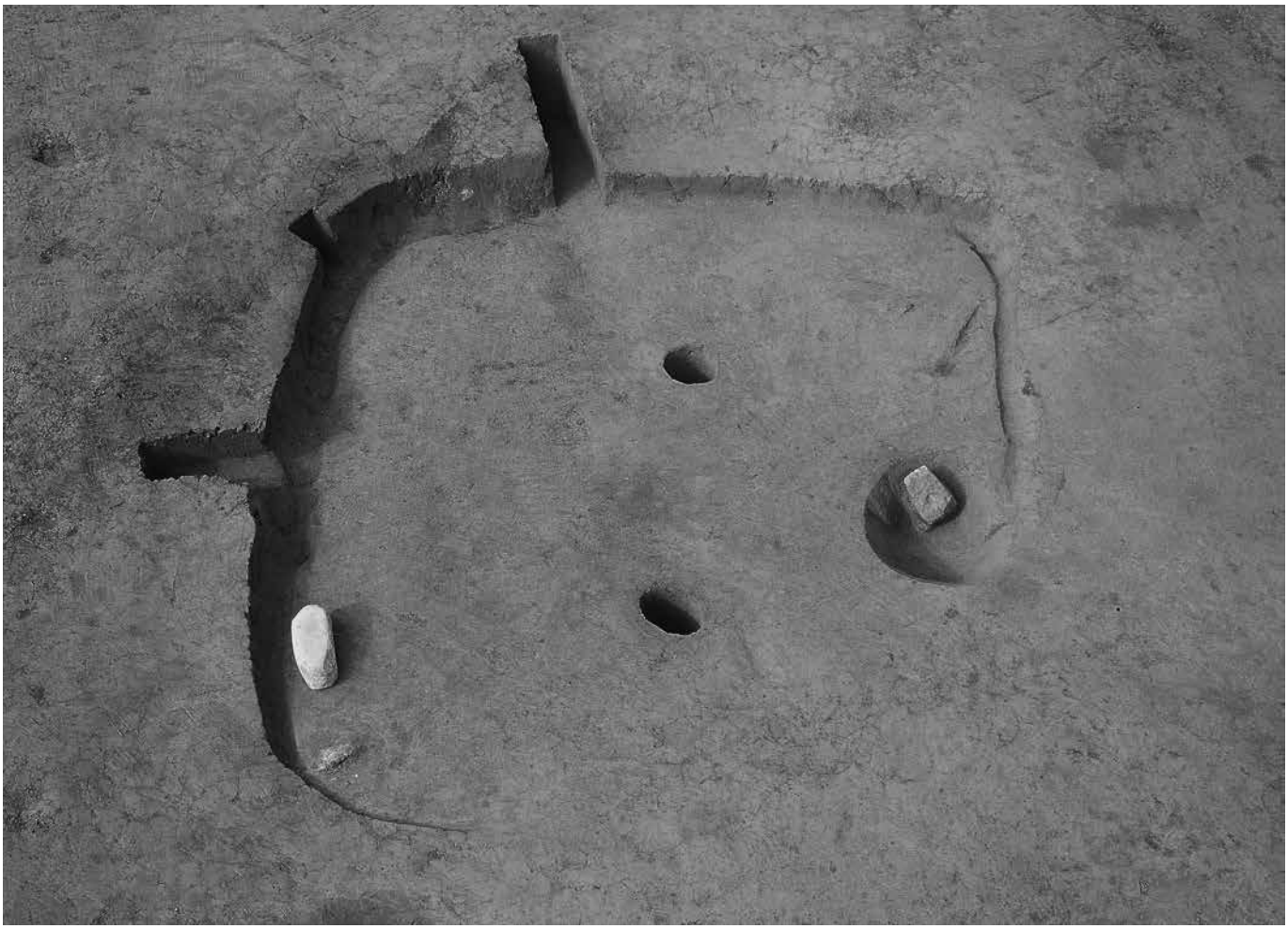
２号竪穴建物（東から）

３号竪穴建物（東から）

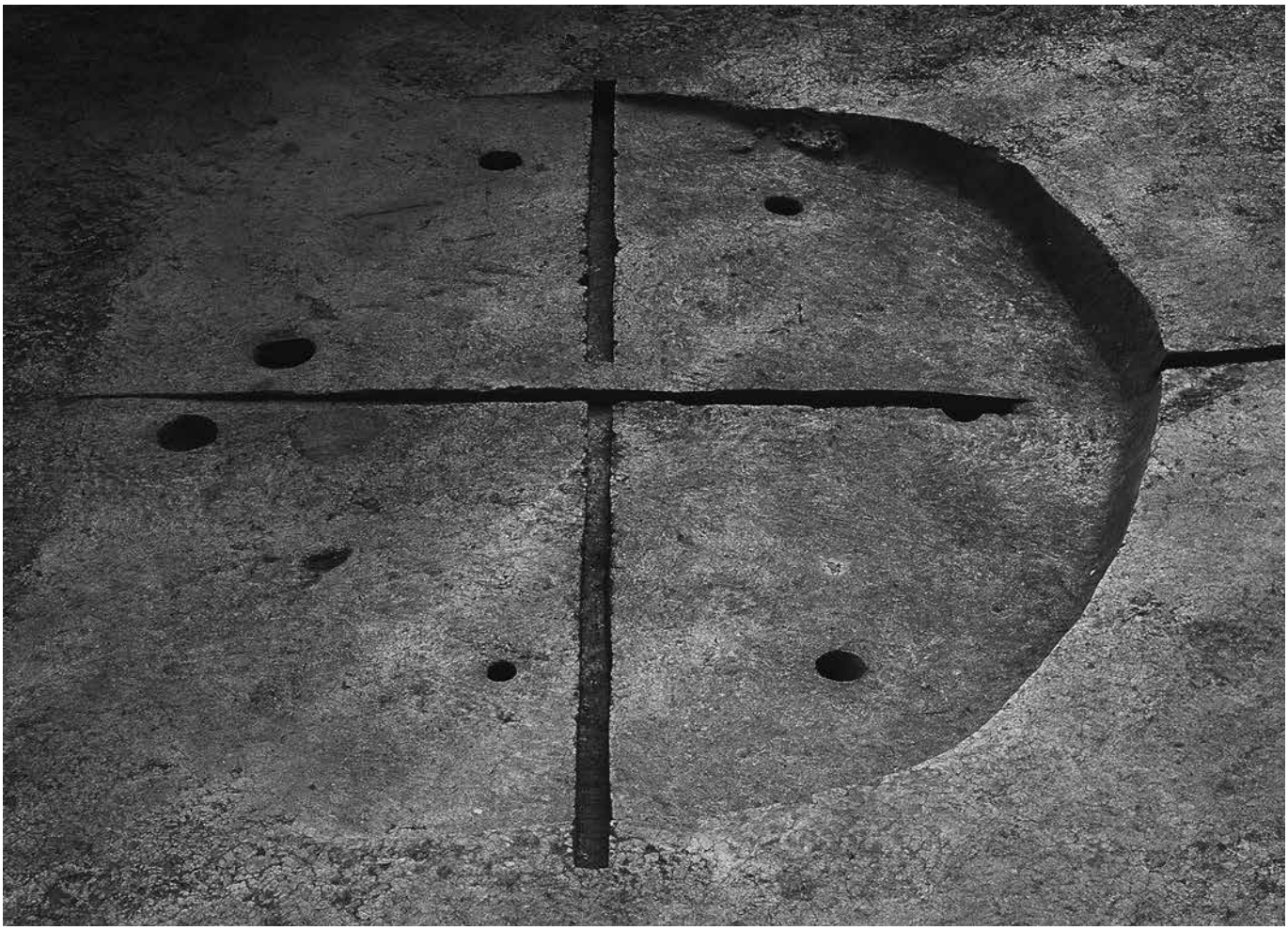
４号竪穴建物（南から）



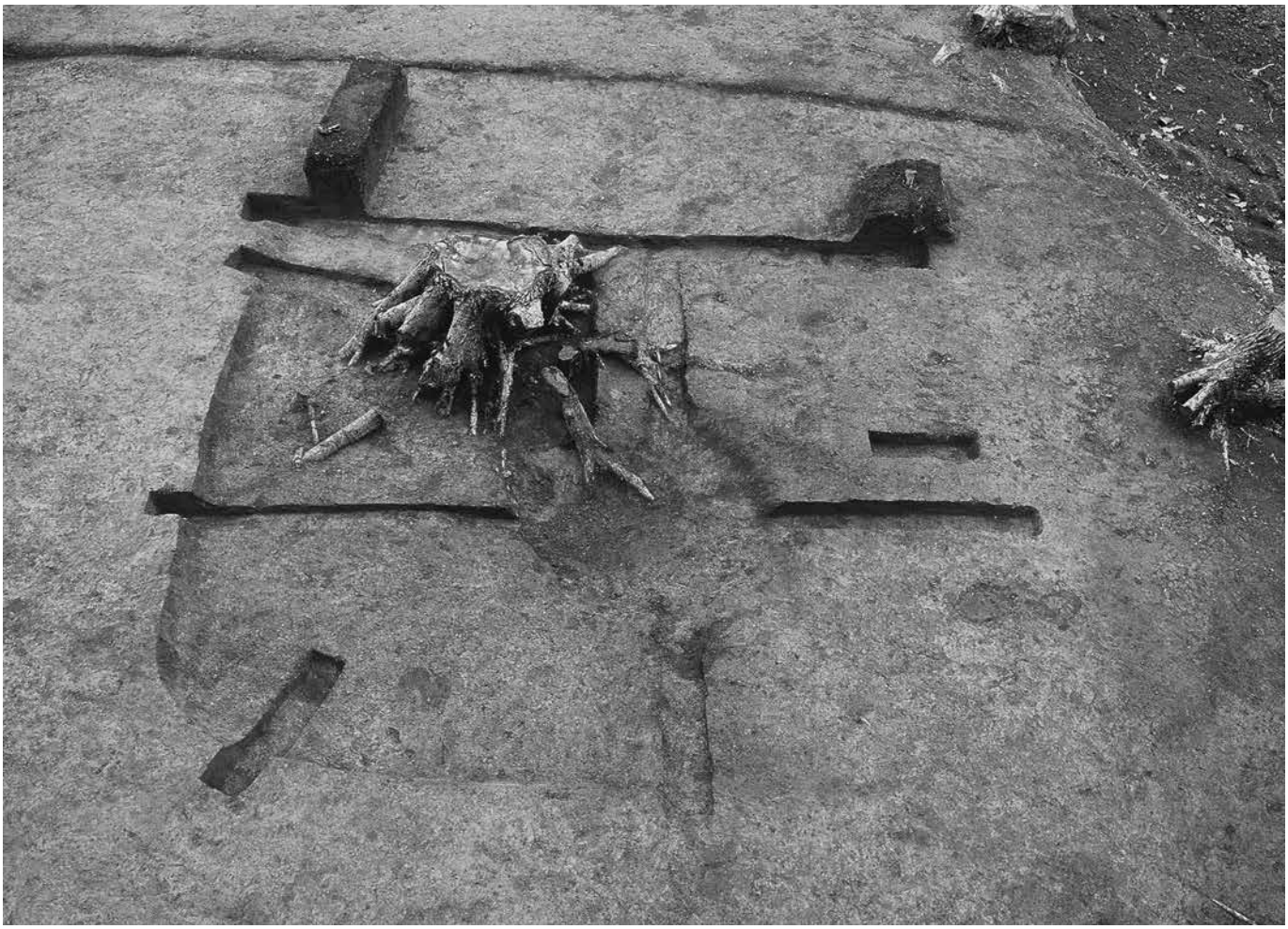
5号竪穴建物（南から）



6号竪穴建物（南から）

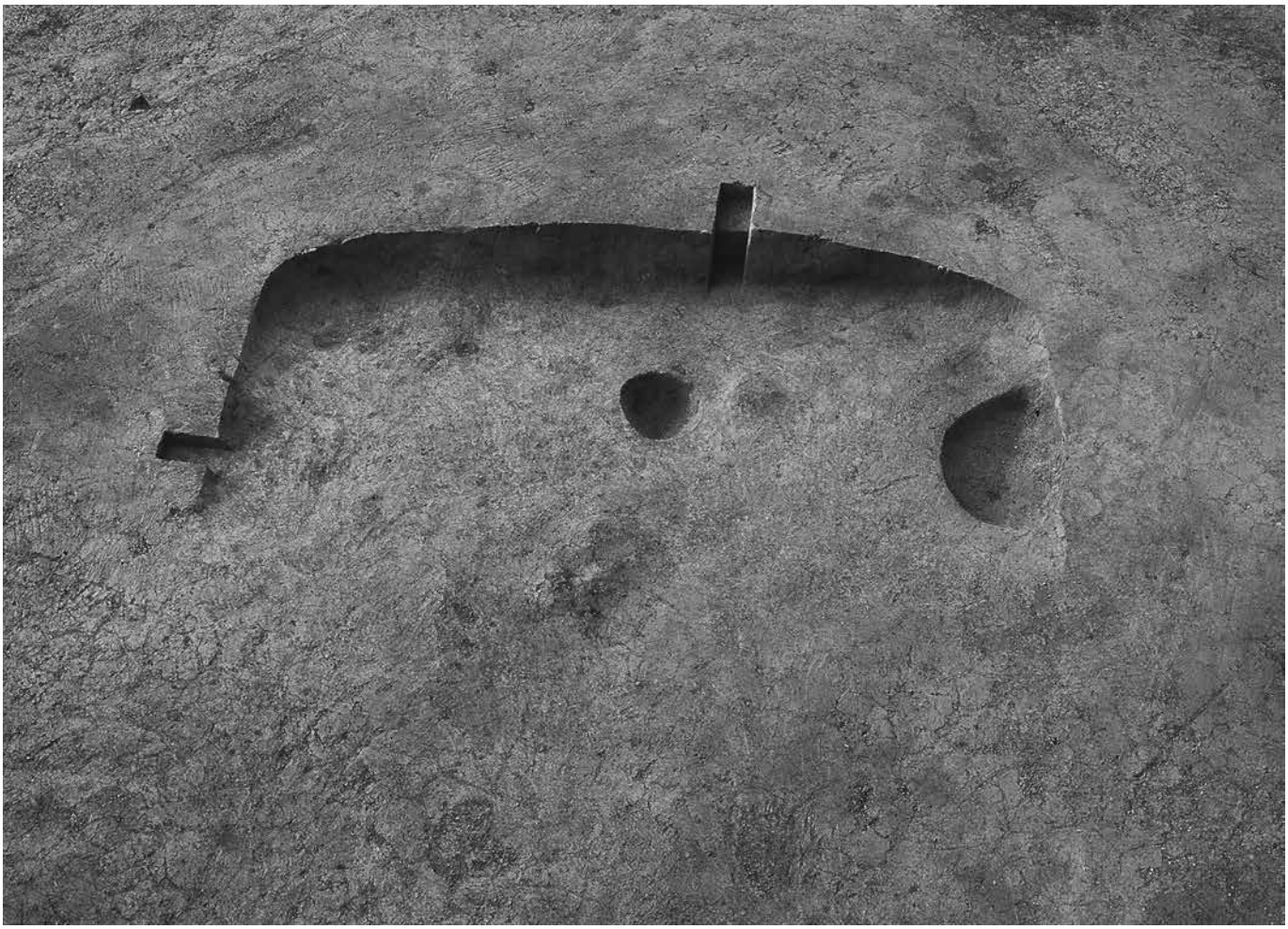


7号竪穴建物（東から）

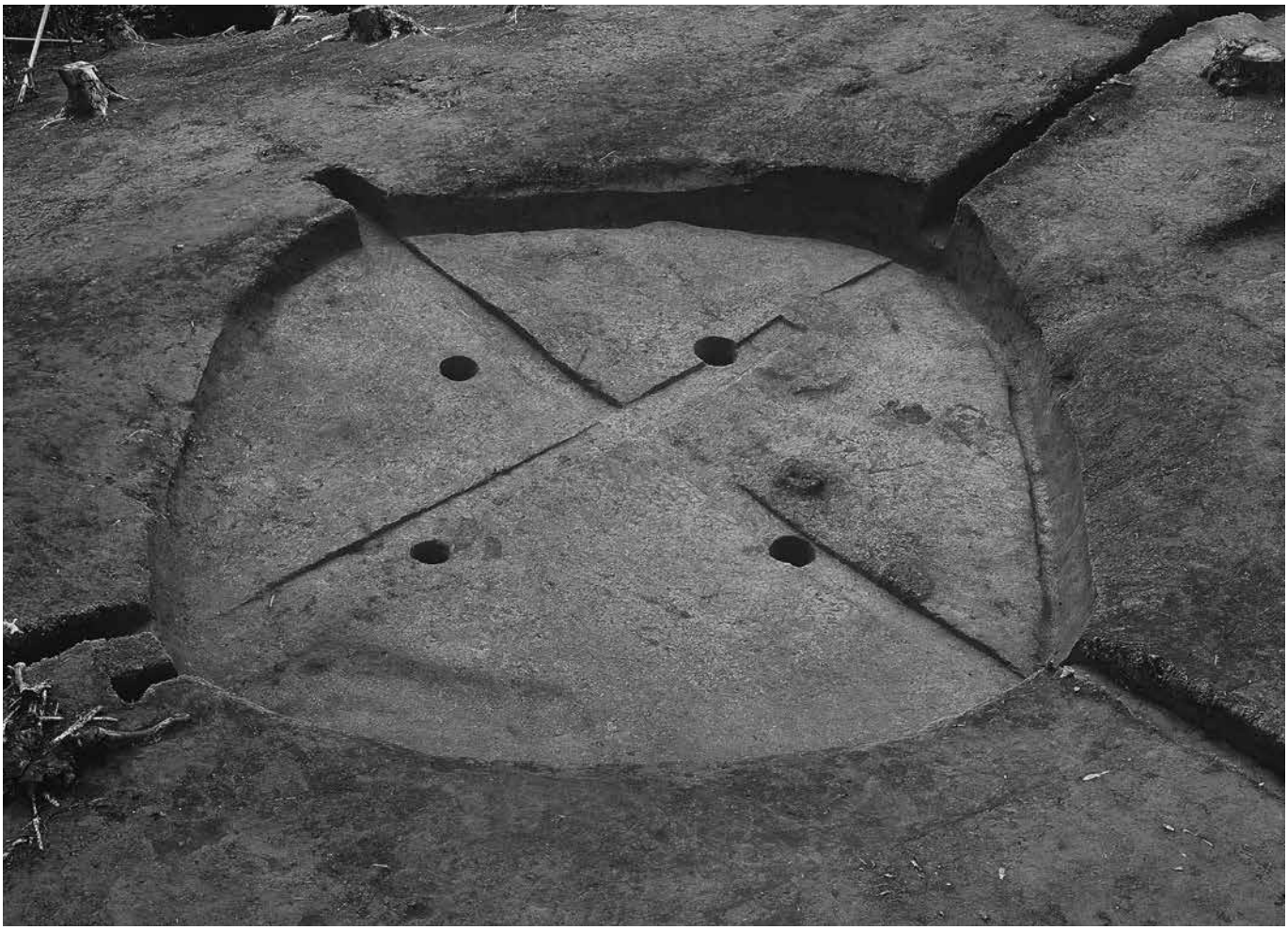


8号竪穴建物（西から）

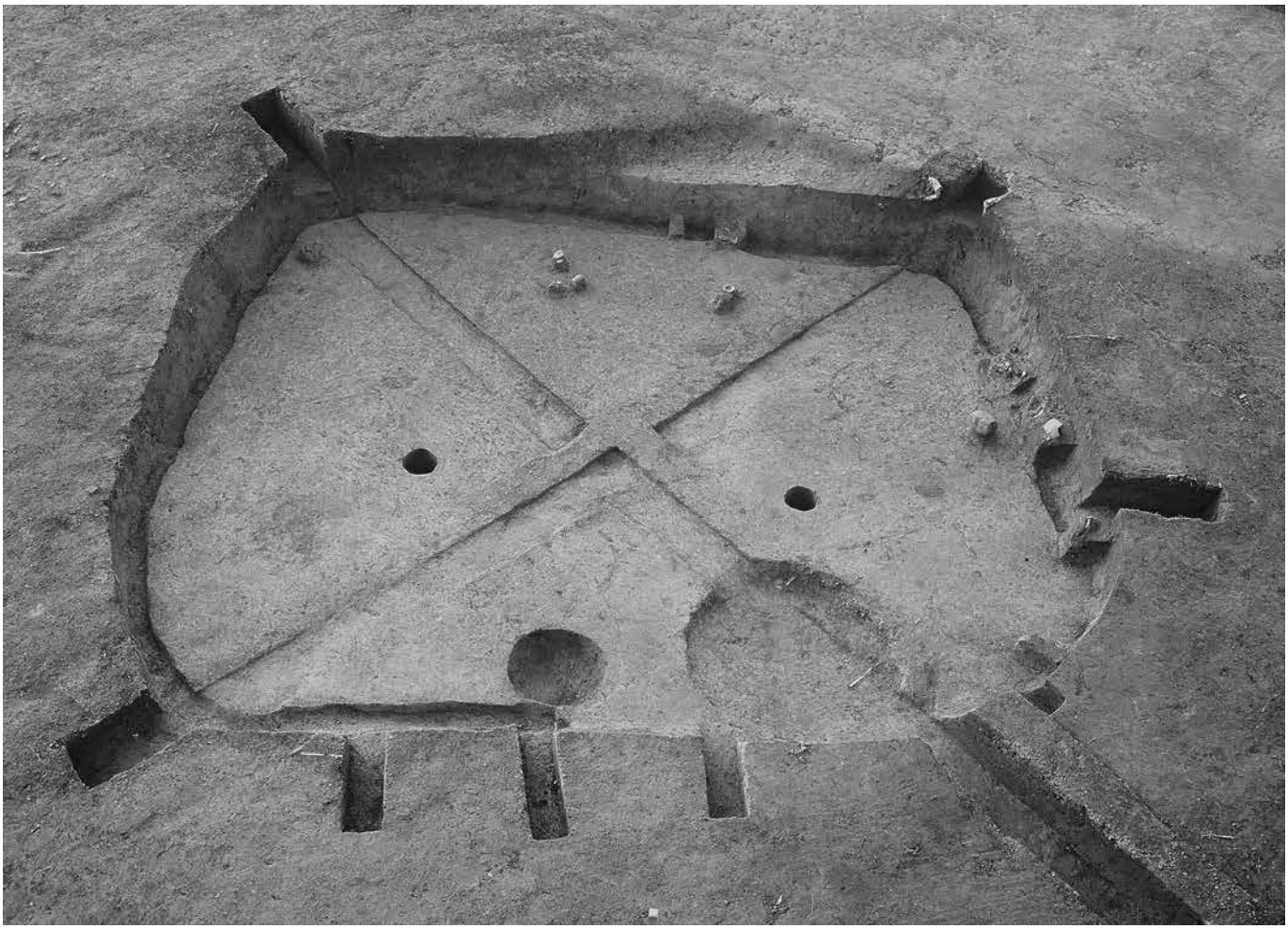
9号竪穴建物（南から）



10号竪穴建物（南から）

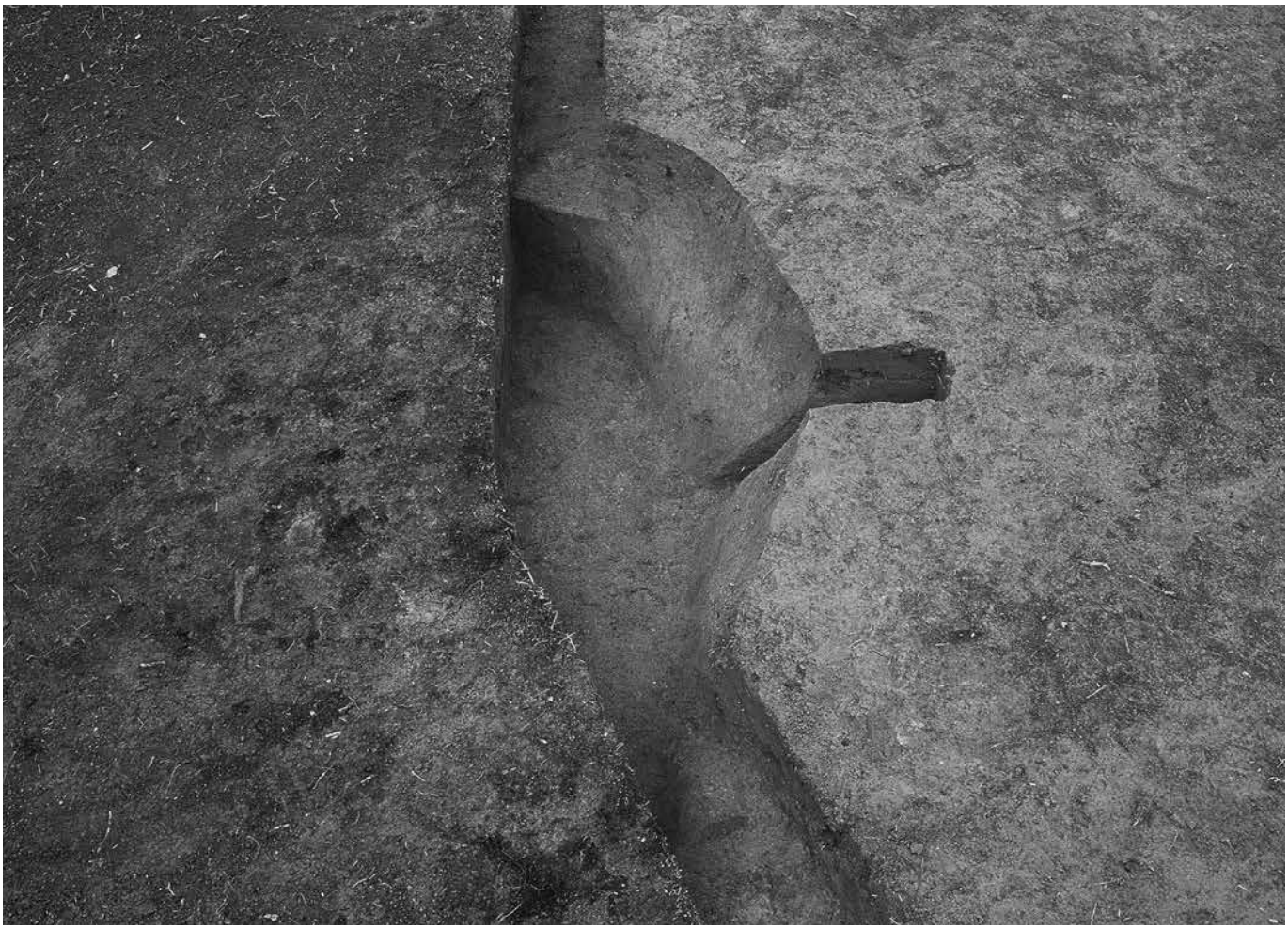


11号竪穴建物（北から）



12号竪穴建物（南から）

13号竪穴建物（北から）



14号竪穴建物（東から）

１号竪穴　土層断面（南から）

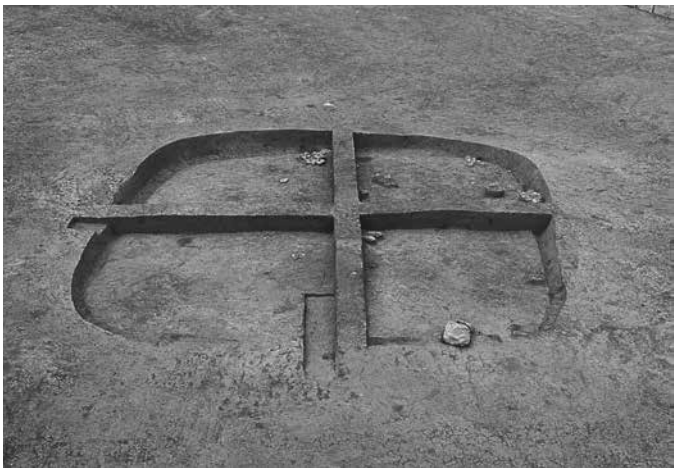
１号竪穴　Ｄ区　炭化材出土状況（東から）

２号竪穴　土層断面（東から）

２号竪穴　西側土層断面、遺物出土状況（南から）

２号竪穴　東側土層断面（南から）

２号竪穴　炉　断面（東から）



３号竪穴　土層断面（東から）

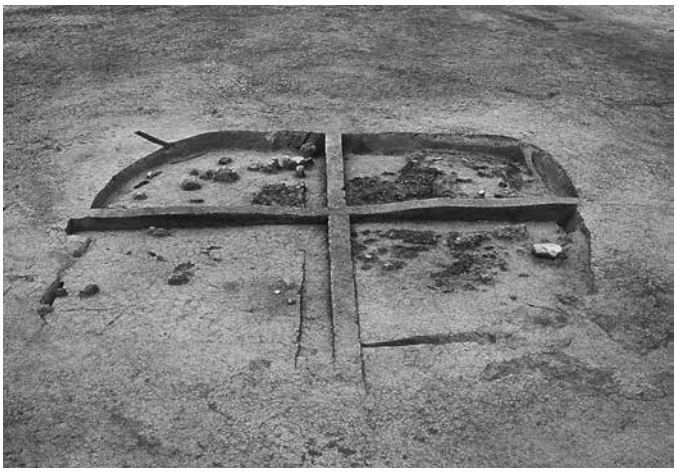
３号竪穴　Pit5　断面（東から）

３号竪穴　焼土１　断面（東から）

３号竪穴　焼土２・３　断面（東から）

３号竪穴　焼土４・５　断面（東から）

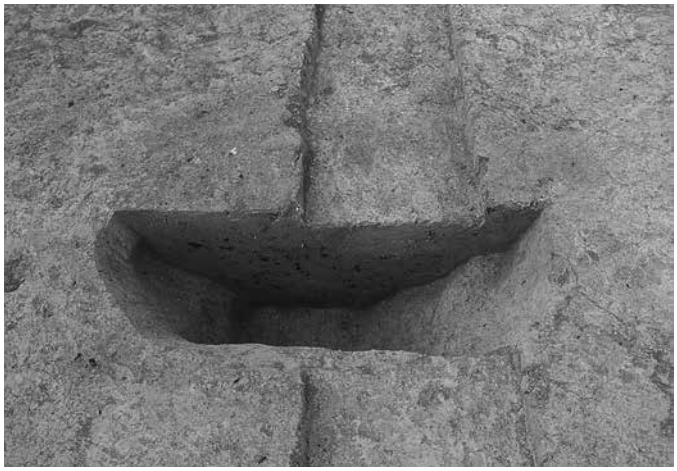
３号竪穴　炉　断面（東から）



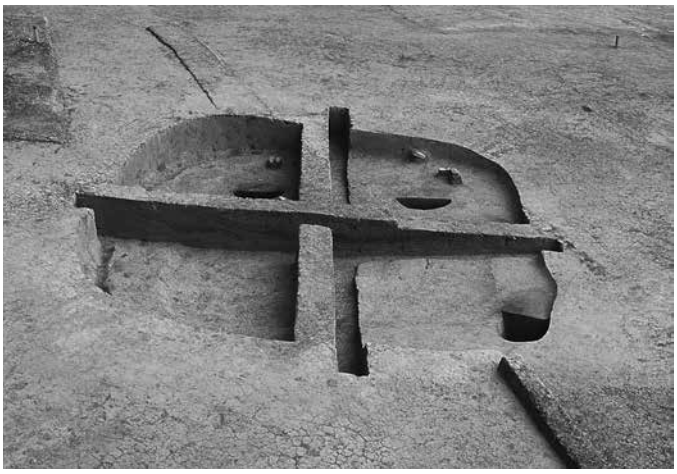
４号竪穴　土層断面（東から）

４号竪穴　Ｄ区　炭化材出土状況（東から）

４号竪穴　炉　断面（北から）



４号竪穴　Pit5　断面（東から）

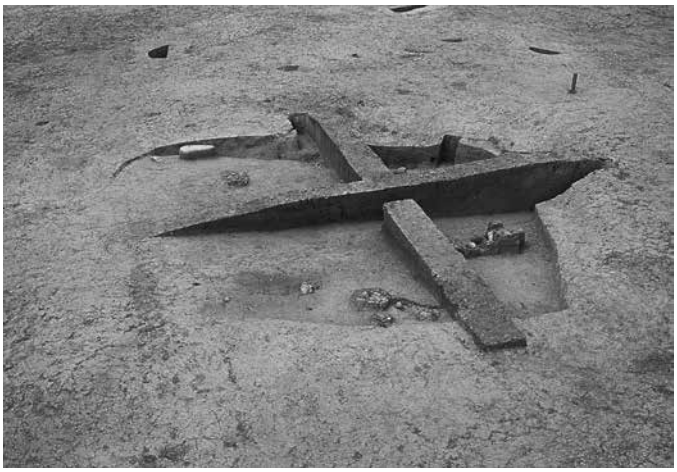


5号竪穴　土層断面（南から）

5号竪穴　Pit3　土層断面（南から）

5号竪穴　Pit4　土層断面（東から）

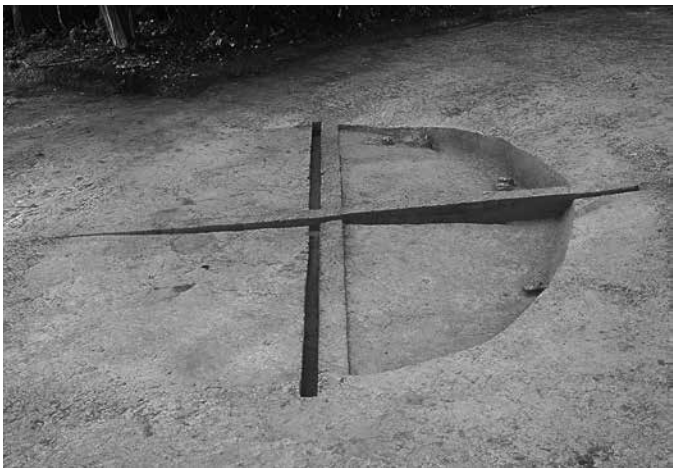
6号竪穴　遺物出土状況（南から）



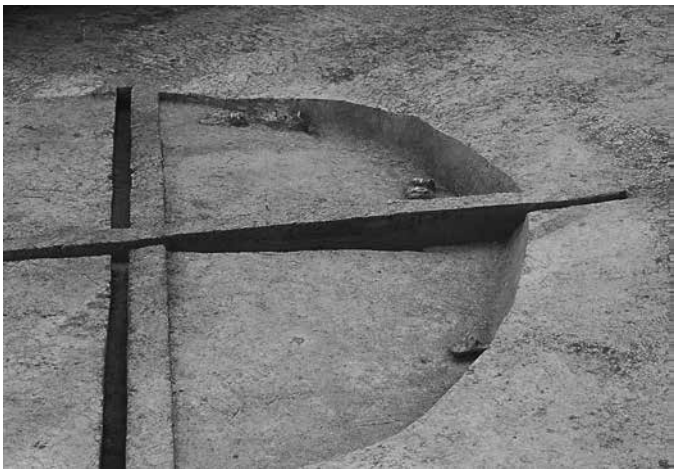
6号竪穴　土層断面（東から）

6号竪穴　炉　断面（南から）

6号竪穴　Pit3　断面（南から）



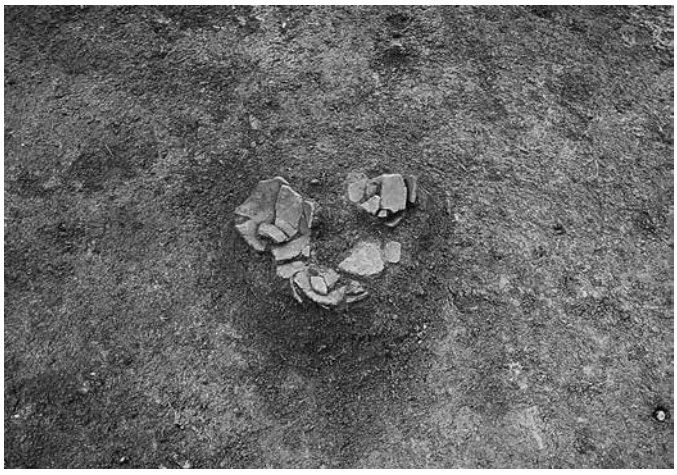
7号竪穴　断面（東から）



7号竪穴　断面、遺物出土状況（東から）

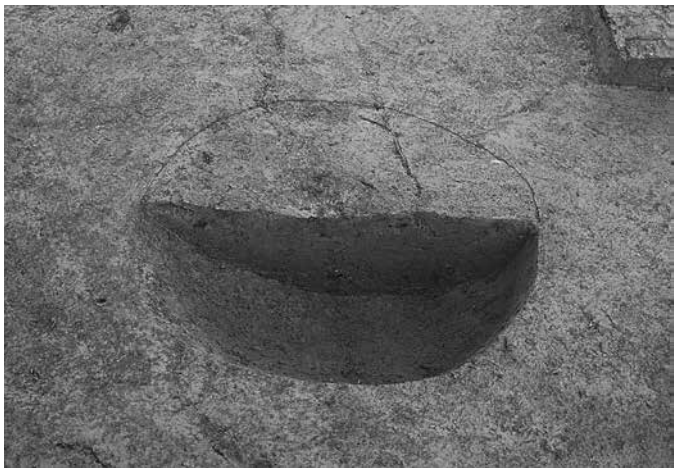
7号竪穴　炉　断面（南から）

8号竪穴　遺物出土状況（器台）（南から）

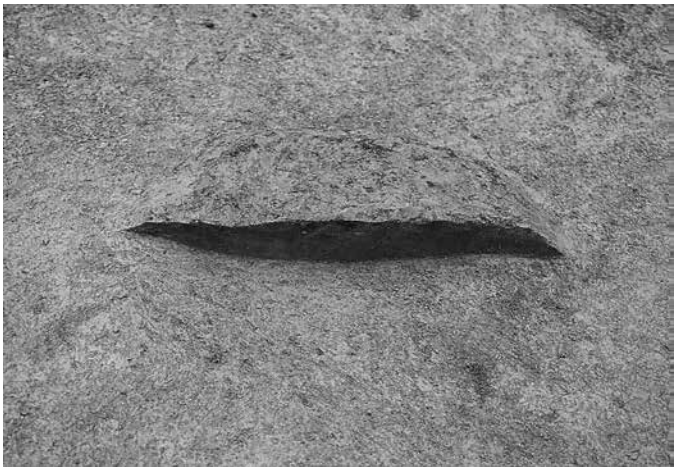


8号竪穴（4D18）　遺物出土状況（東から）

9号竪穴　土層断面



9号竪穴　Pit3　断面

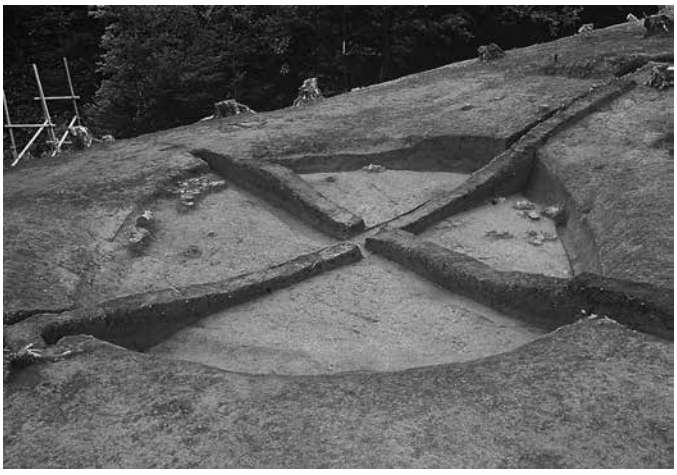


9号竪穴　焼土2　断面

10号竪穴　断面（東から）

10号竪穴　完掘状況（東から）

10号竪穴　焼土1（西から）



11号竪穴　土層断面（南から）

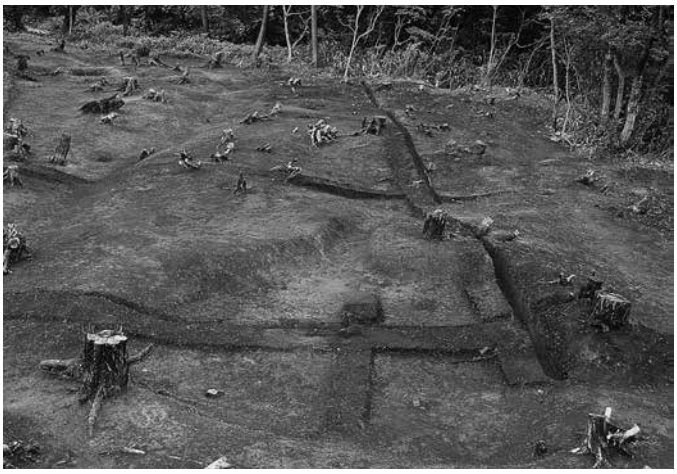
11号竪穴（南東：B区）　遺物出土状況（北西から）

11号竪穴　焼土1・2　断面（南から）

12号竪穴　土層断面（南東から）

12号竪穴　Pit3　断面（南西から）

13号竪穴上の火葬場跡（西から）



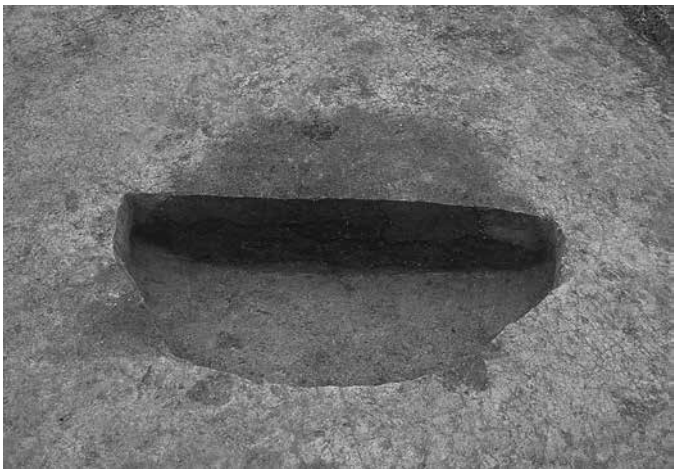
13号竪穴周辺の状況（西から）（手前13号、中11号）

13号竪穴　土層断面（南東から）

13号竪穴　焼土２・３　断面（南から）

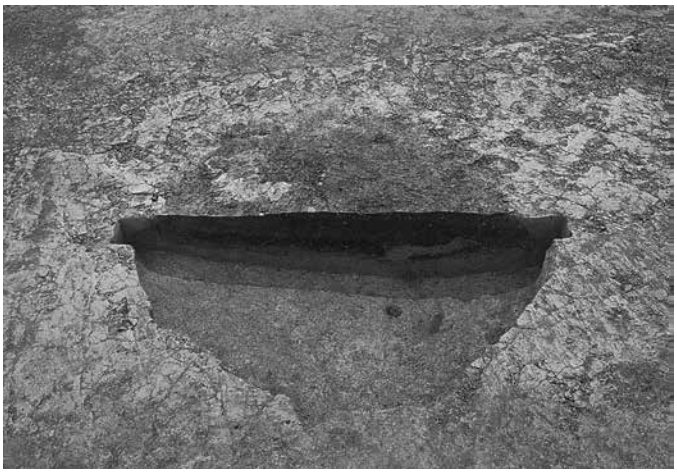
14号竪穴　土層断面（東から）

竪穴群（東から）

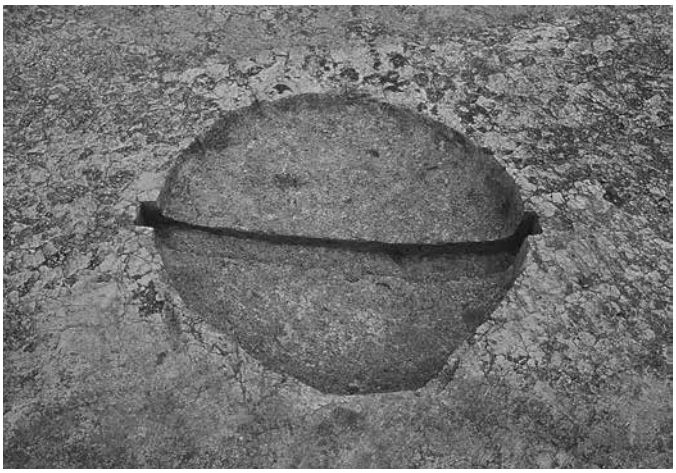


SK1　断面（南から）

SK1　完掘（南から）



SK2　断面（南から）



SK2　完掘（東から）

SK3　土層断面（南から）

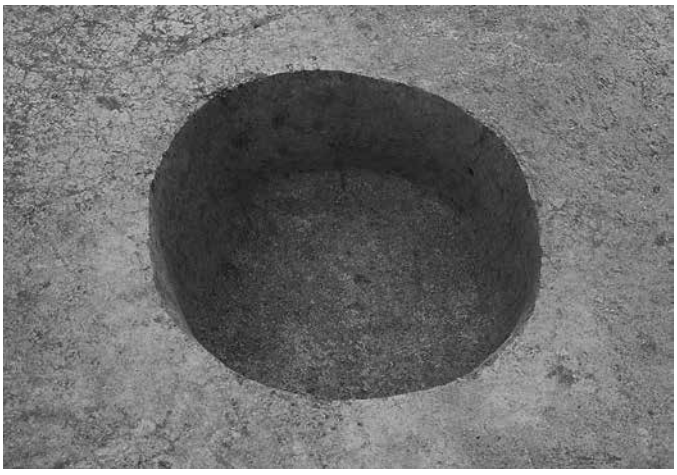
SK3　完掘（南から）

SK4　断面（南から）

SK4　完掘（南から）

SX5　断面（南から）

SK6　完掘（南から）

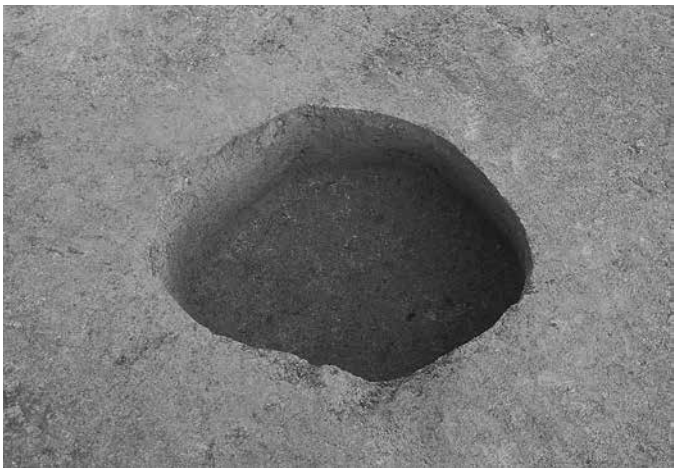


SK7　完掘（南から）

SX8　断面（東から）

SX8　完掘（東から）

SK9　完掘（南西から）

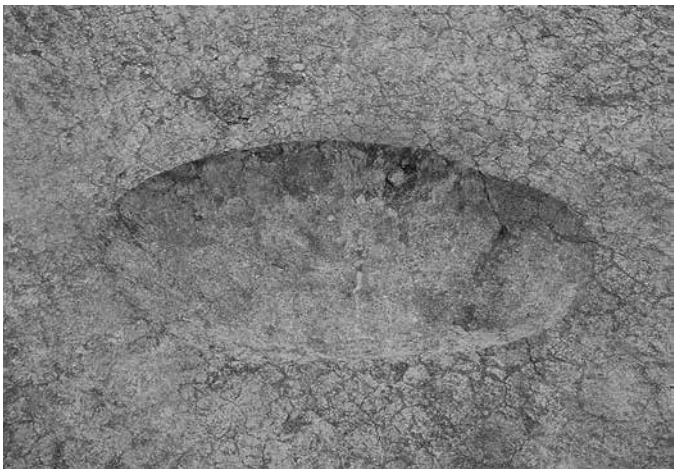


SK10　完掘（南西から）

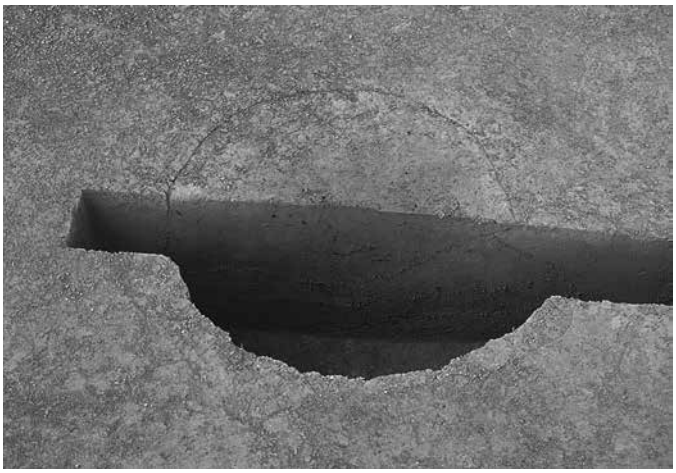
SK11　完掘（南西から）

SK12　完掘（南から）

SX13　断面（南から）



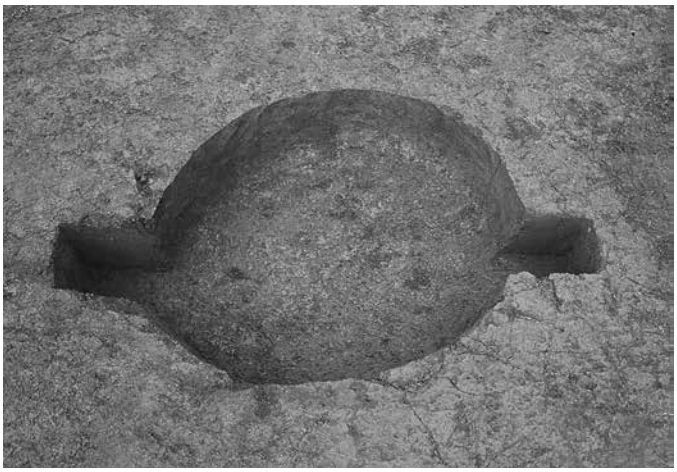
SK17　完掘（南から）



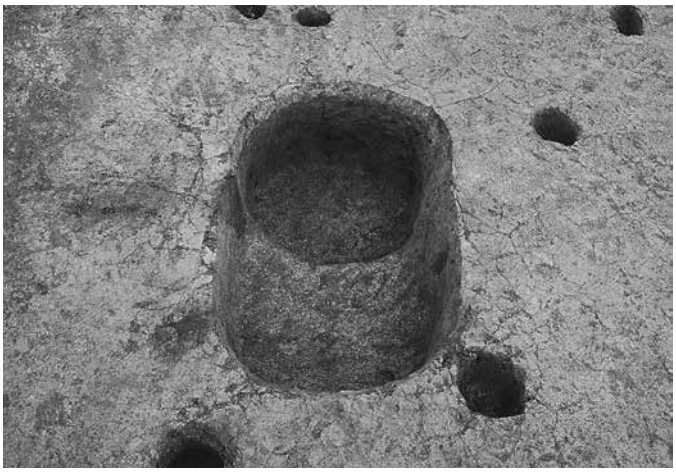
SK18　断面（南から）

SK18　完掘（南から）

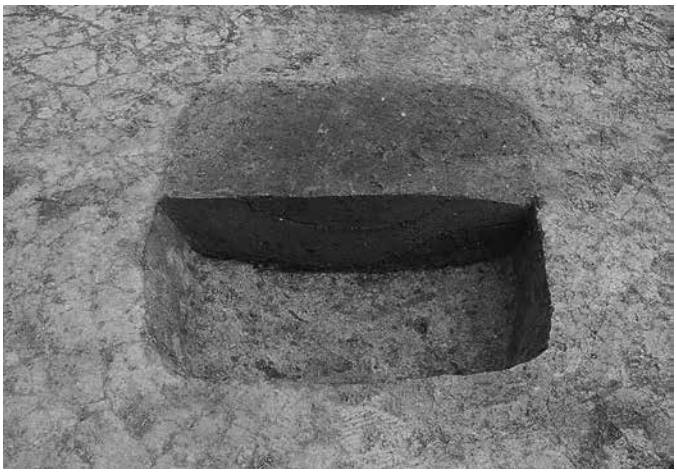
SK19　完掘（東から）



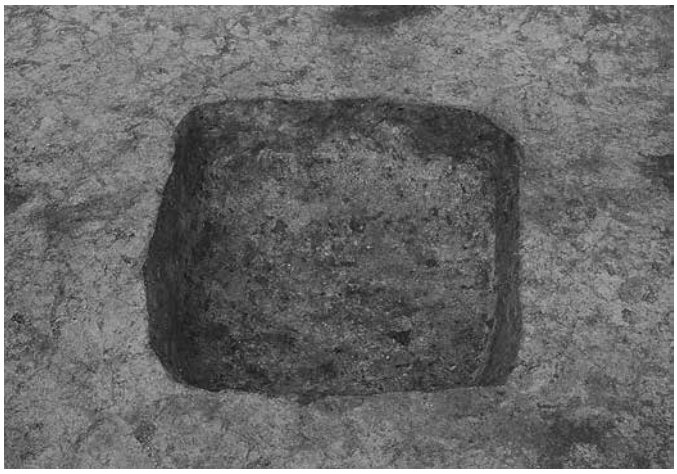
SK20　完掘（南から）



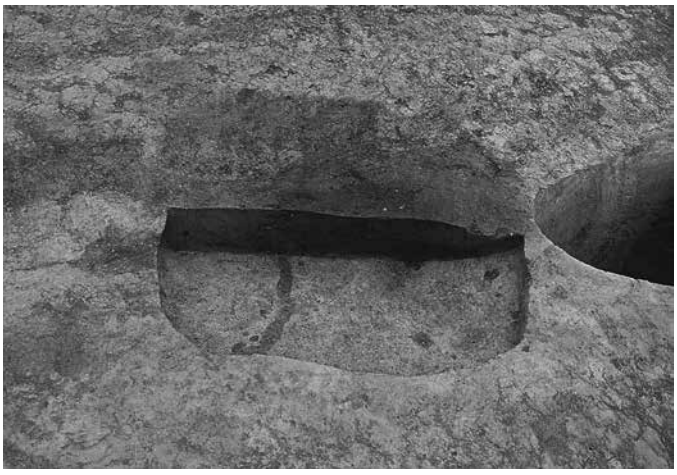
SK22　完掘（北西）



CSK（炭窯）1　断面（南から）

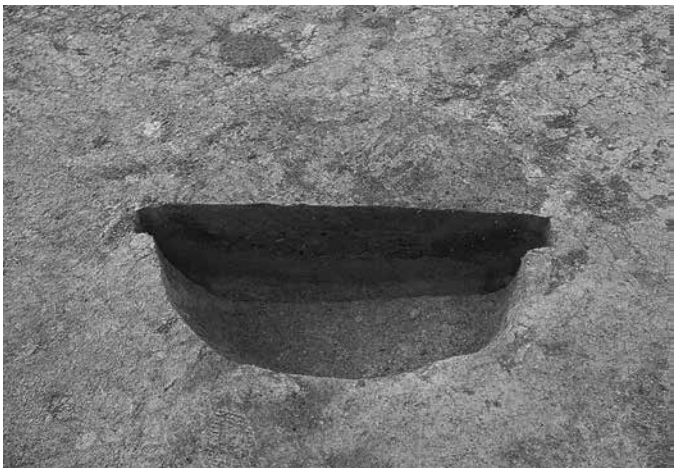


CSK（炭窯）1　完掘（南から）

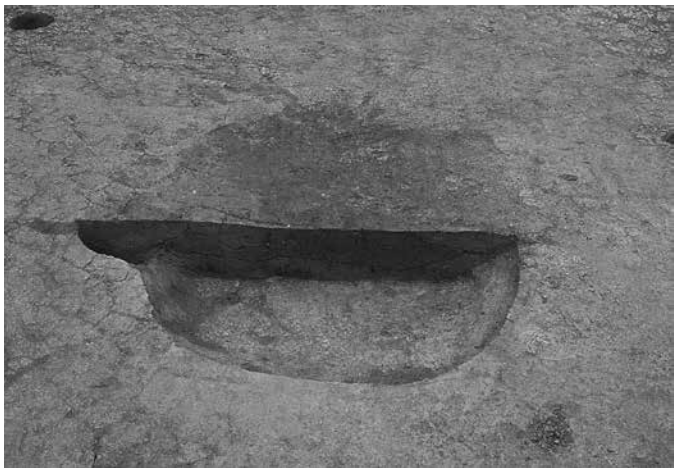


CSK（炭窯）2　断面（南東から）

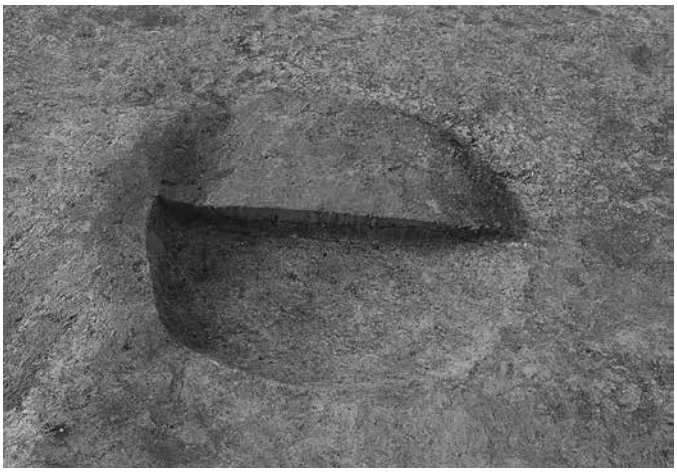
CSK（炭窯）2　完掘（南東から）



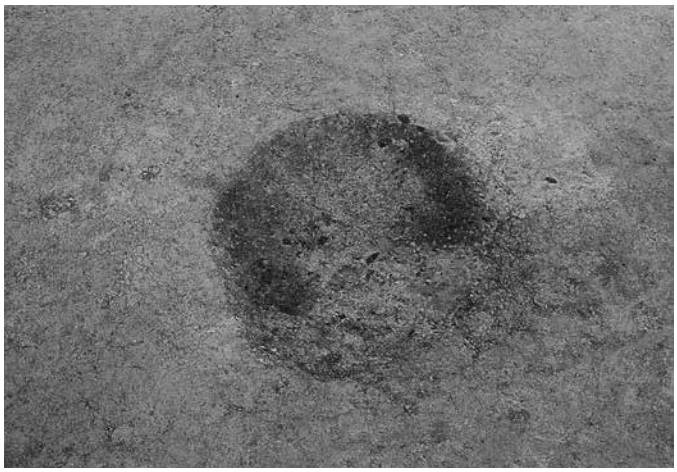
CSK（炭窯）3　断面（南西から）



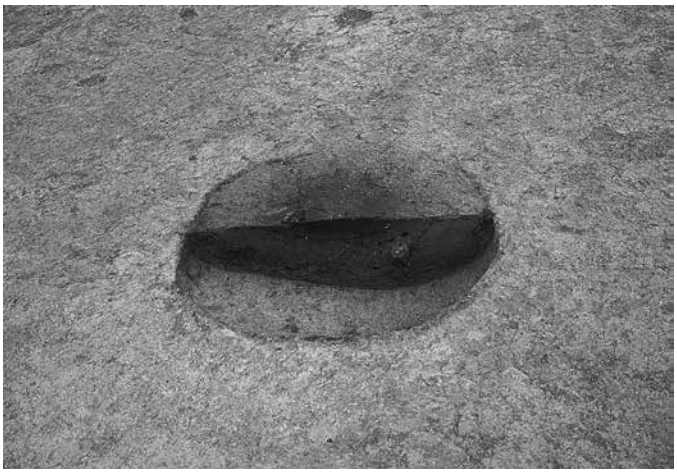
CSK（炭窯）4　断面



CSK（炭窯）5　断面（南から）



CSK（炭窯）6　完掘（南から）



CSK（炭窯）窯７　断面（南から）

CSK（炭窯）８　完掘（南から）

縄文陥穴状土坑列（1）（北から）

縄文陥穴状土坑列（2）（東から）

JSK（陥穴土坑）１　完掘（南から）

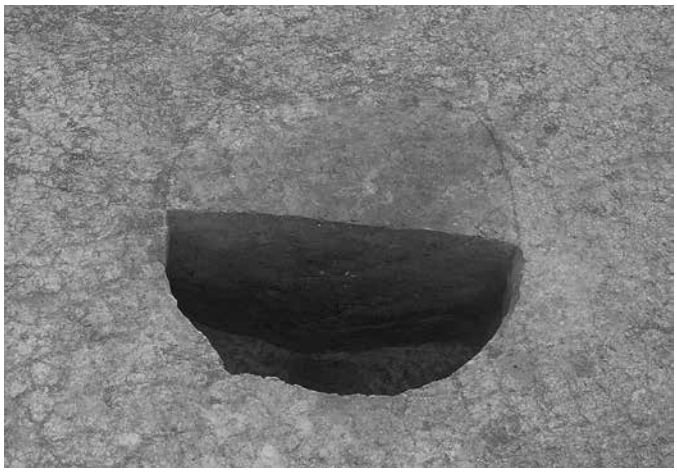
JSK（陥穴土坑）2　完掘（南から）

JSK（陥穴土坑）3　完掘（南から）

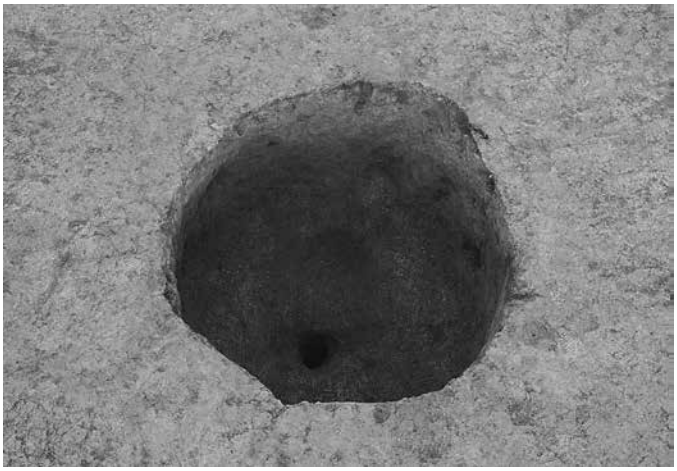
JSK（陥穴土坑）4　完掘（南から）

JSK（陥穴土坑）5　完掘（南から）

JSK（陥穴土坑）6　完掘（南から）



JSK（陥穴土坑）7　完掘（南から）



JSK（陥穴土坑）7　完掘（南から）

JSK（陥穴土坑）8　完掘（南から）

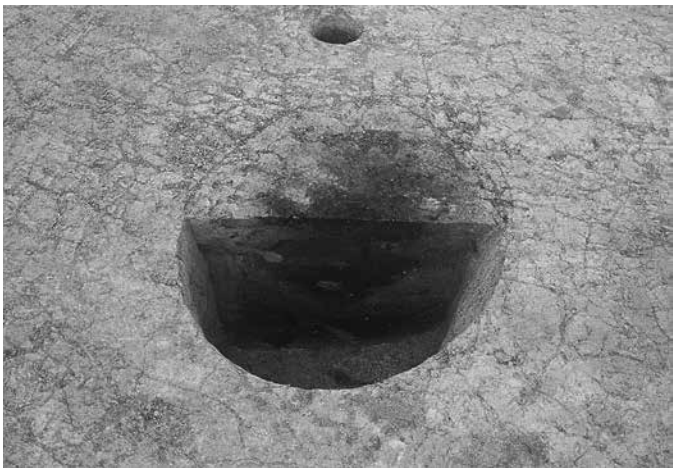
JSK（陥穴土坑）9　完掘（南から）

JSK（陥穴土坑）10　完掘（南から）

JSK（陥穴土坑）11　完掘（南から）

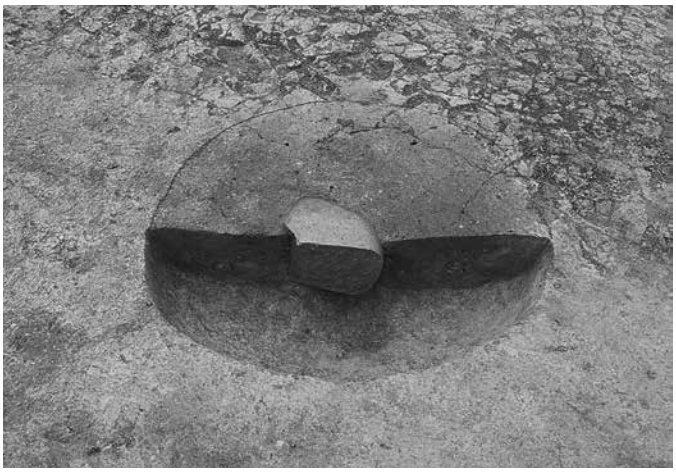
JSK（縄文土坑）12　完掘（南から）

JSK（縄文土坑）13　完掘（南から）

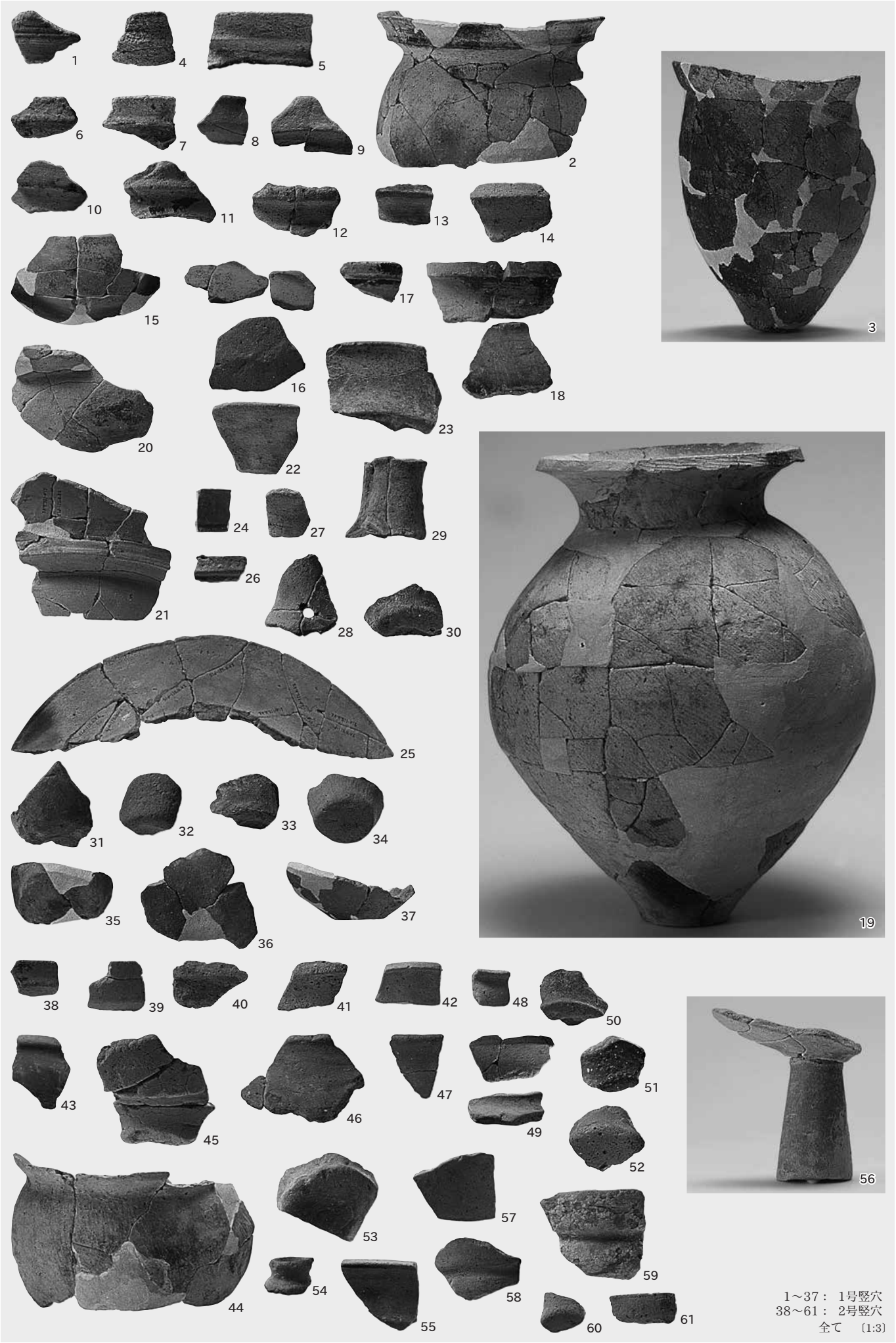


JSK（縄文土坑）14　断面（南から）

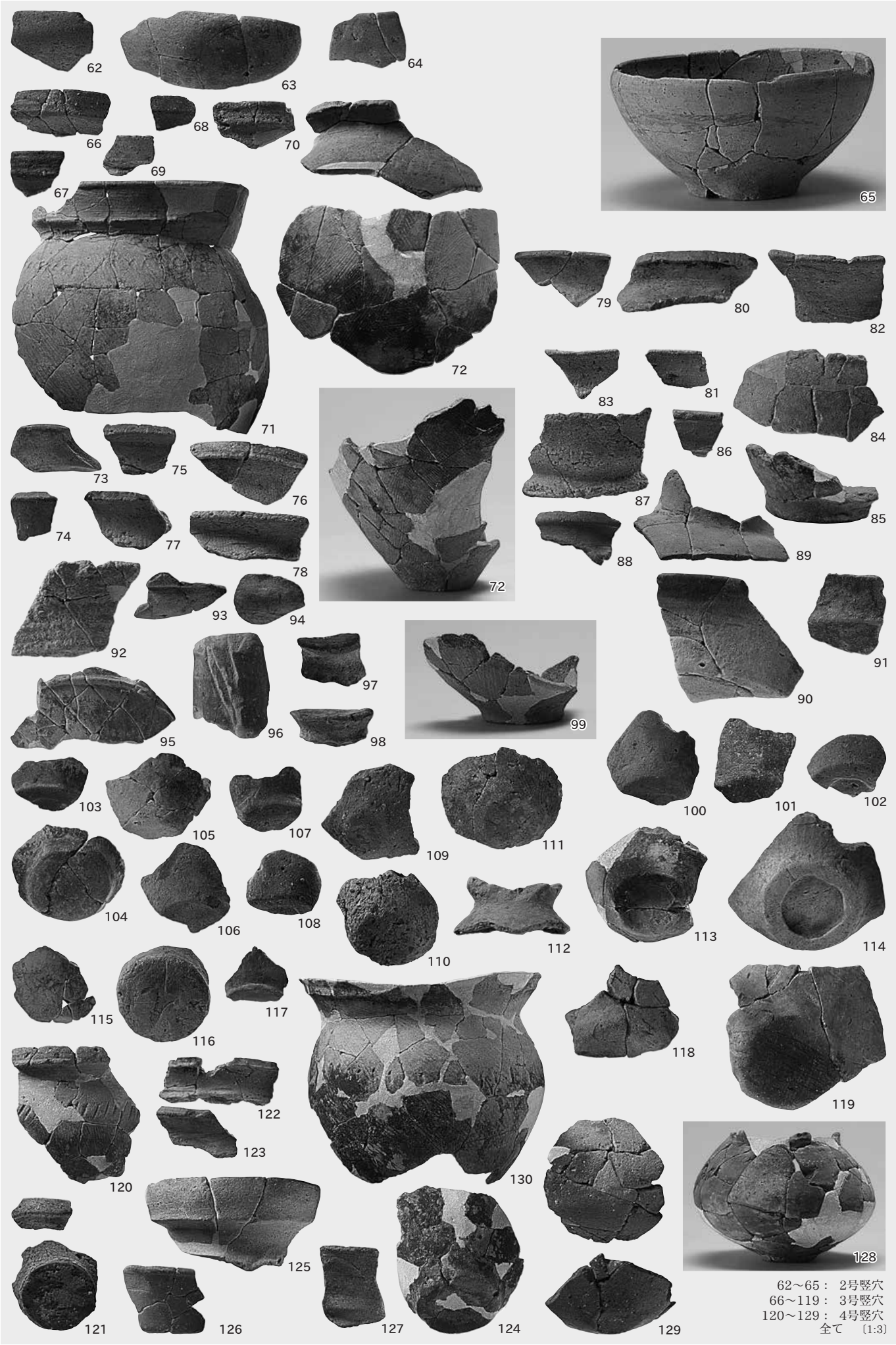
JSK（縄文土坑）15　断面（南から）



JSK（縄文土坑）16　断面（南から）



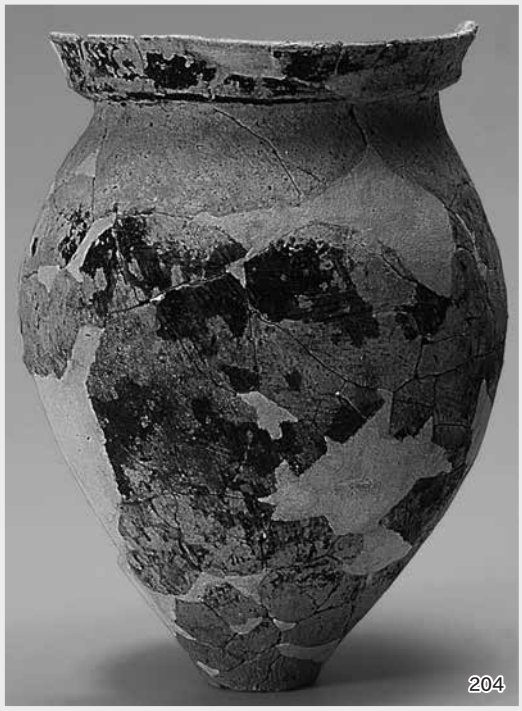
1～37： 1号竪穴
38～61： 2号竪穴
全て　〔1:3〕



62～65：　2号竪穴
66～119：　3号竪穴
120～129：　4号竪穴
全て　〔1:3〕

130～146：　4号竪穴
147～157：　5号竪穴
158～173：　6号竪穴
全て　〔1:3〕

174～179：　6号竪穴
180～202：　7号竪穴
全て　〔1:3〕


204

203

206

208

207

209

213

217

205

211

210

212

214

215

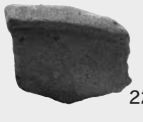
219

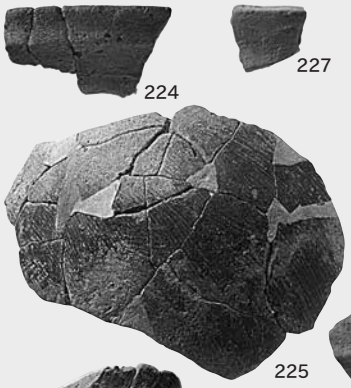
218

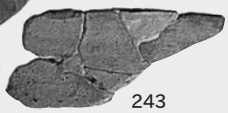
219

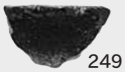
216

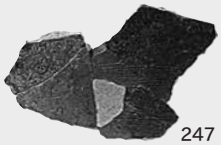
203～219： 8号竪穴
全て 〔1:3〕

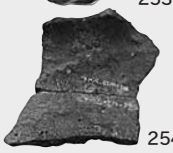


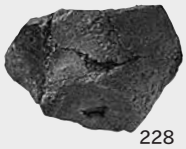


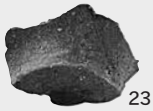




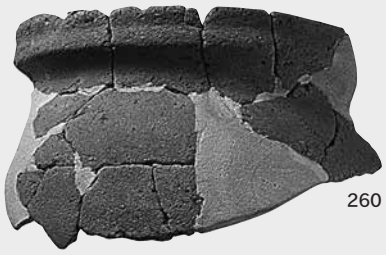




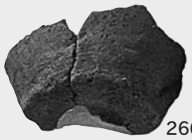




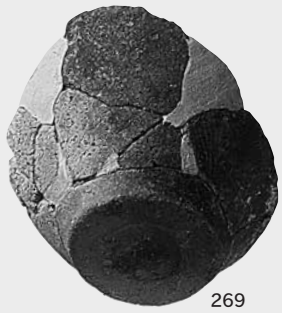
220～223：　8号竪穴
224～244：　9号竪穴
245～256：10号竪穴
257～259：11号竪穴
全て　〔1:3〕


260

262


266

267


269

265

268

261

263

264

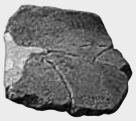
270

275

272

273

271


276

274

273

277

279

280

278

260～280：11号竪穴
全て　〔1:3〕

281

282

286

283

284

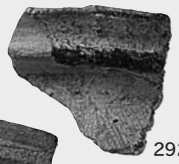
285

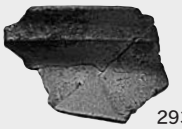
287

288

289

290


292


293

291

294

295

296

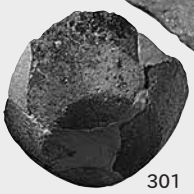
299

298

303

300

297


301

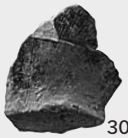
308

303

302

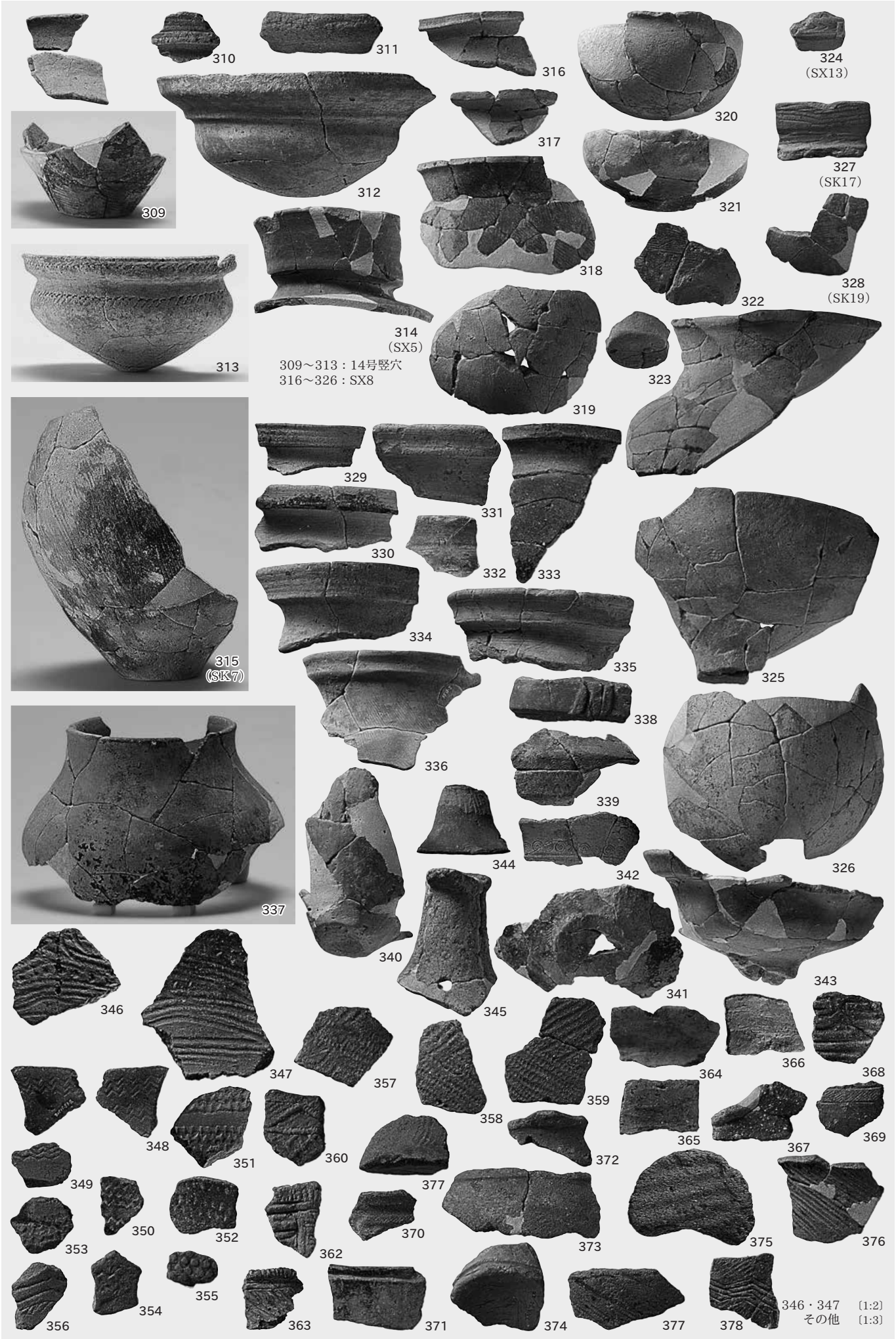
304

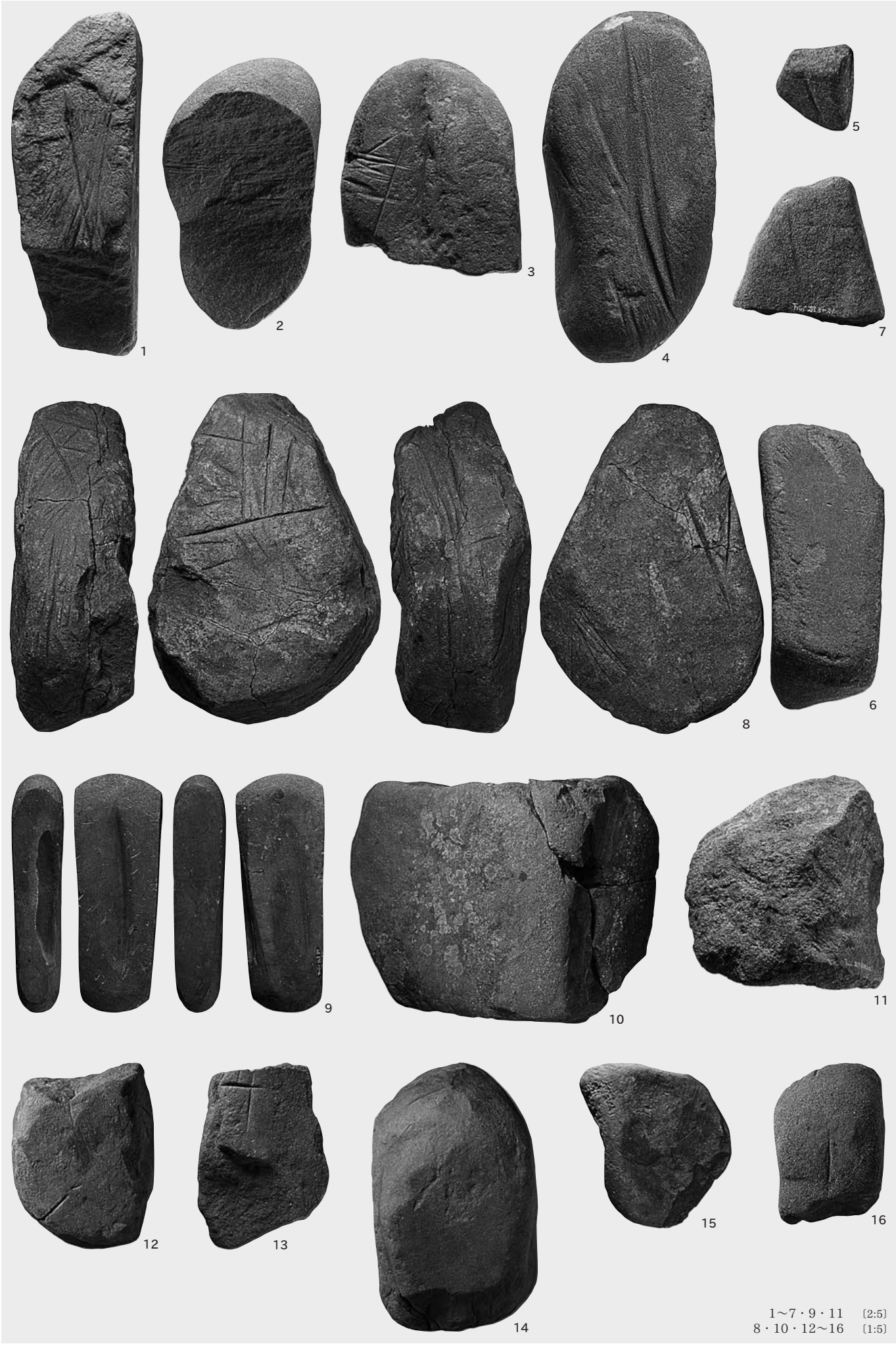
305


306

307

281～289：11号竪穴
290～302：12号竪穴
303～308：13号竪穴
全て　〔1:3〕

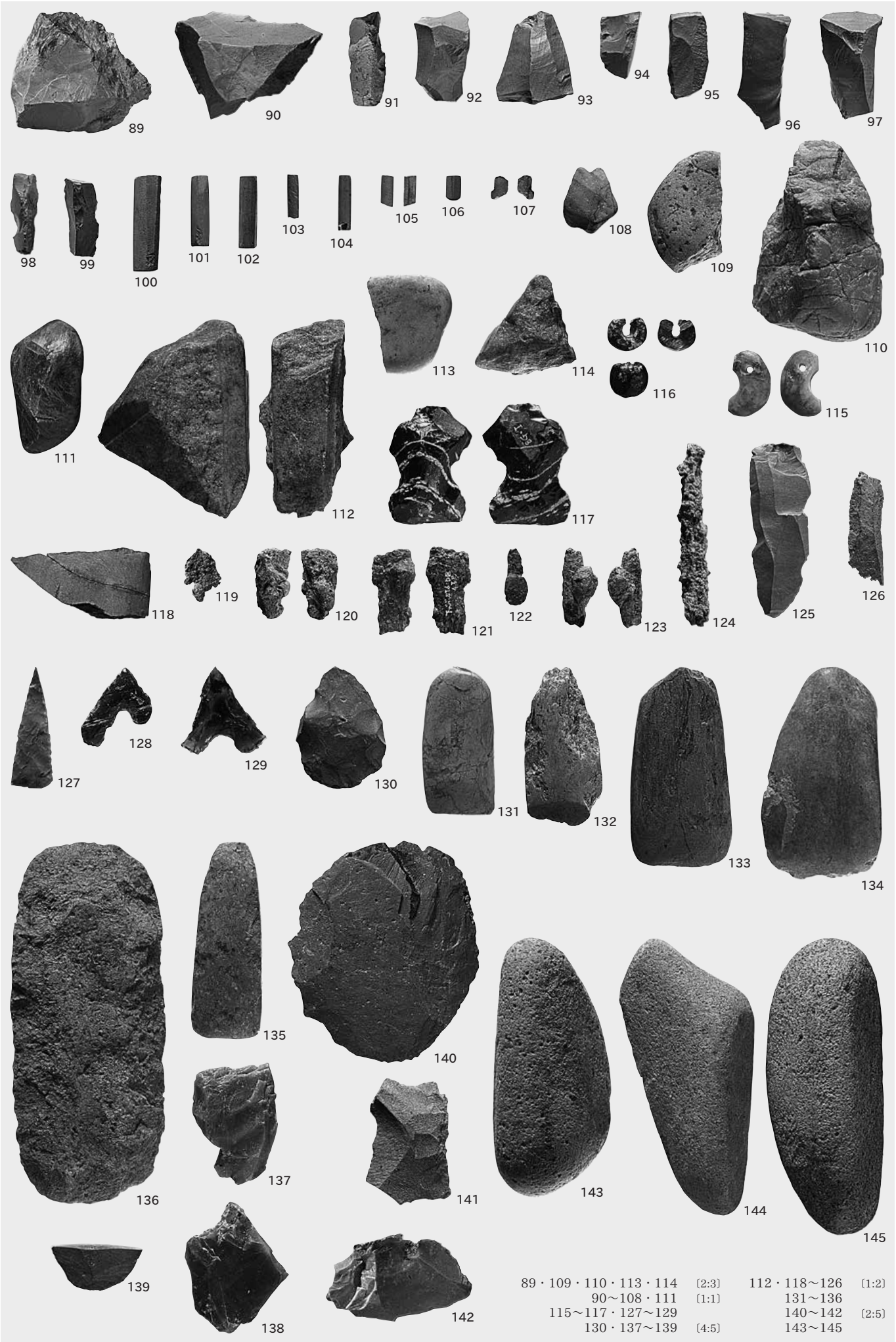

309
310
311
312
313
314
(SX5)
315
(SK7)
316
317
318
319
320
321
322
323
324
(SX13)
325
326
327
(SK17)
328
(SK19)
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
377
378
309～313：14号竪穴
316～326：SX8
346・347　〔1:2〕
その他　〔1:3〕



1～7・9・11　〔2:5〕
8・10・12～16　〔1:5〕

17～20・24～26　〔2:5〕
29・30・31～34
21・22・28　〔1:5〕
23　〔1:2〕
27　〔1:8〕

35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
87
88
78
79
80
81
82
83
84
85
86
35～38 〔2:5〕
39～47 〔1:2〕
48～53 〔2:3〕
54～88 〔1:1〕



89・109・110・113・114	〔2:3〕	112・118～126	〔1:2〕
90～108・111	〔1:1〕	131～136	
115～117・127～129		140～142	〔2:5〕
130・137～139	〔4:5〕	143～145	

146
148
149
150
152
147
151
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175

146～175　〔2:5〕

C'～E'グリッド付近　完掘（東から）

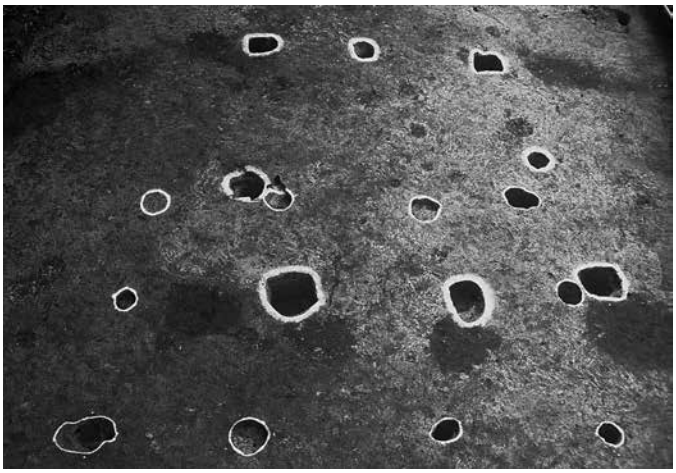
L'～N'付近　完掘（西から）

D'～F'付近　完掘（西から）

G'～I'付近　完掘（西から）

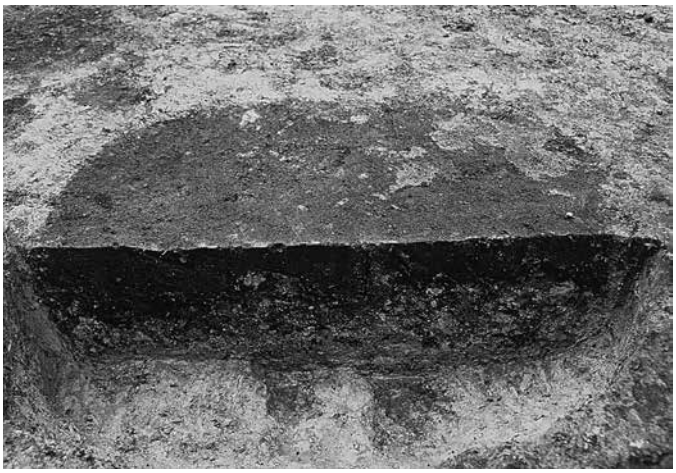
14O'付近　基本層序

SB20　完掘（東から）



SB21・22完掘（東から）

SB26　検出状況（東から）

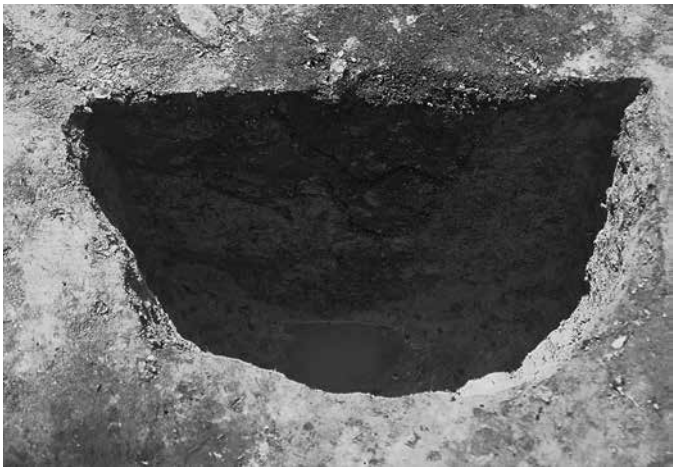


SB26　Pit5セクション（東から）

SK39　礫出土状況（東から）

SK28　断面（東から）

SK24　断面（東から）



SK30　断面（東から）

SD27　完掘（南から）

SK36　断面（南から）

SE37　完掘（東から）

SK23　断面（南から）

SD38　断面（北から）

SX10　断面（西から）

SK1　断面（南から）

SK1　完掘（南東から）

SK3　断面（南から）

SK3　断面（西から）

SK3　完掘（北から）

SK7　検出状況（北から）

SK7　完掘（南から）

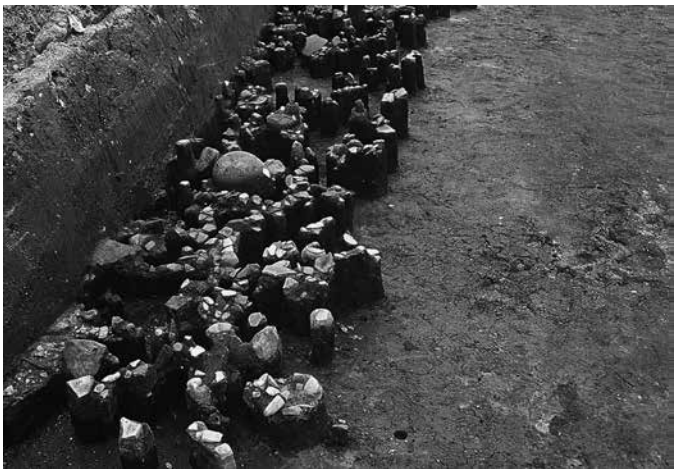
SD4　遺物出土状況（西から）

SD4　遺物出土状況（東から）

SK14　断面（南から）

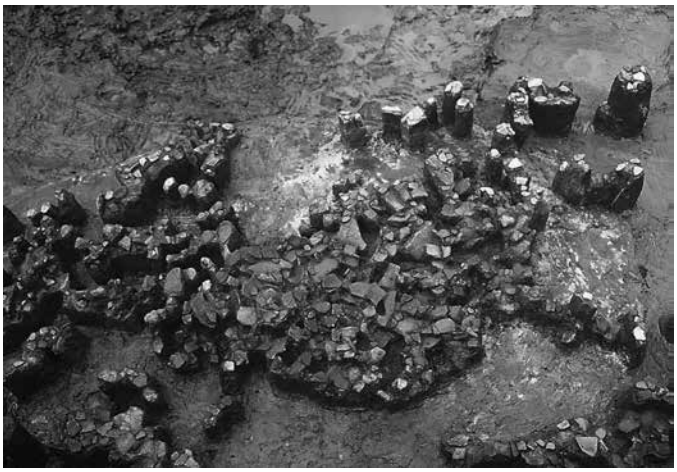
杭２・３　断面（東から）

杭26　断面（東から）



15O'　遺物出土状況（東から）

15O'-17　遺物出土状況（南から）

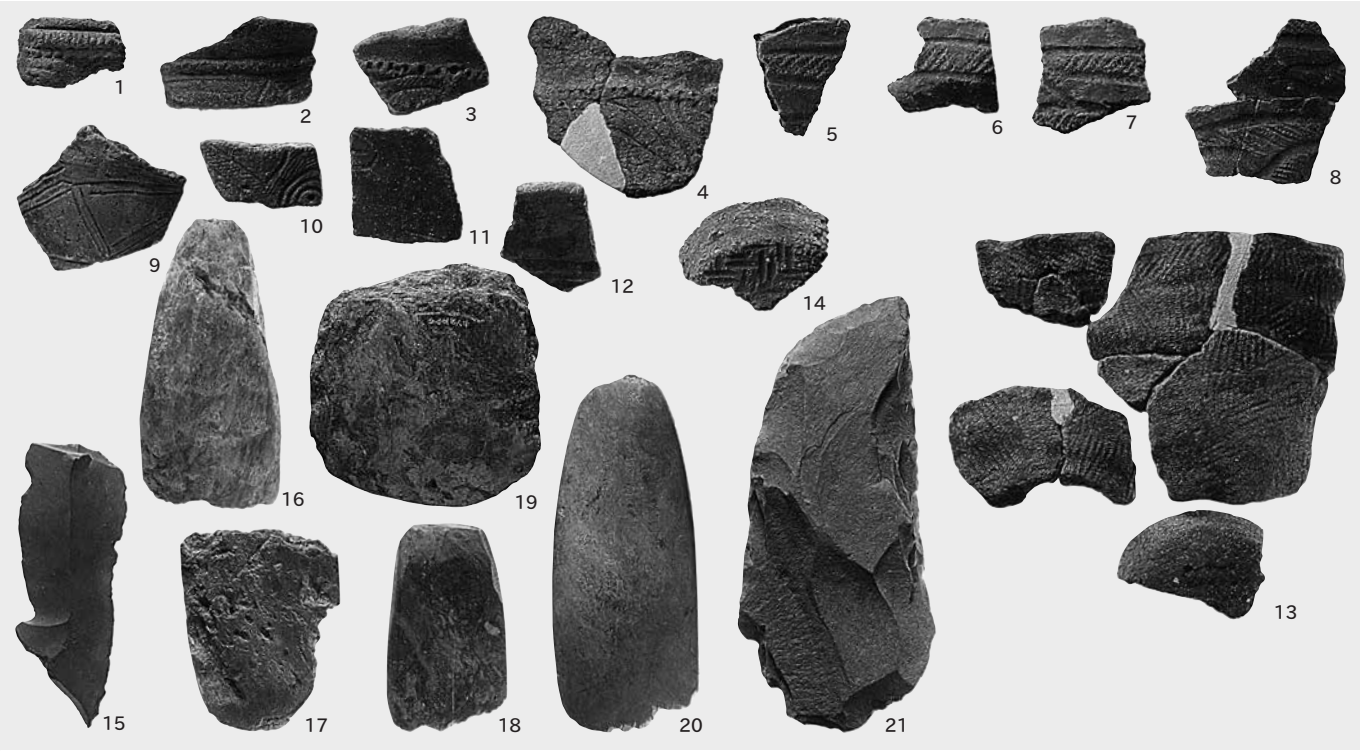


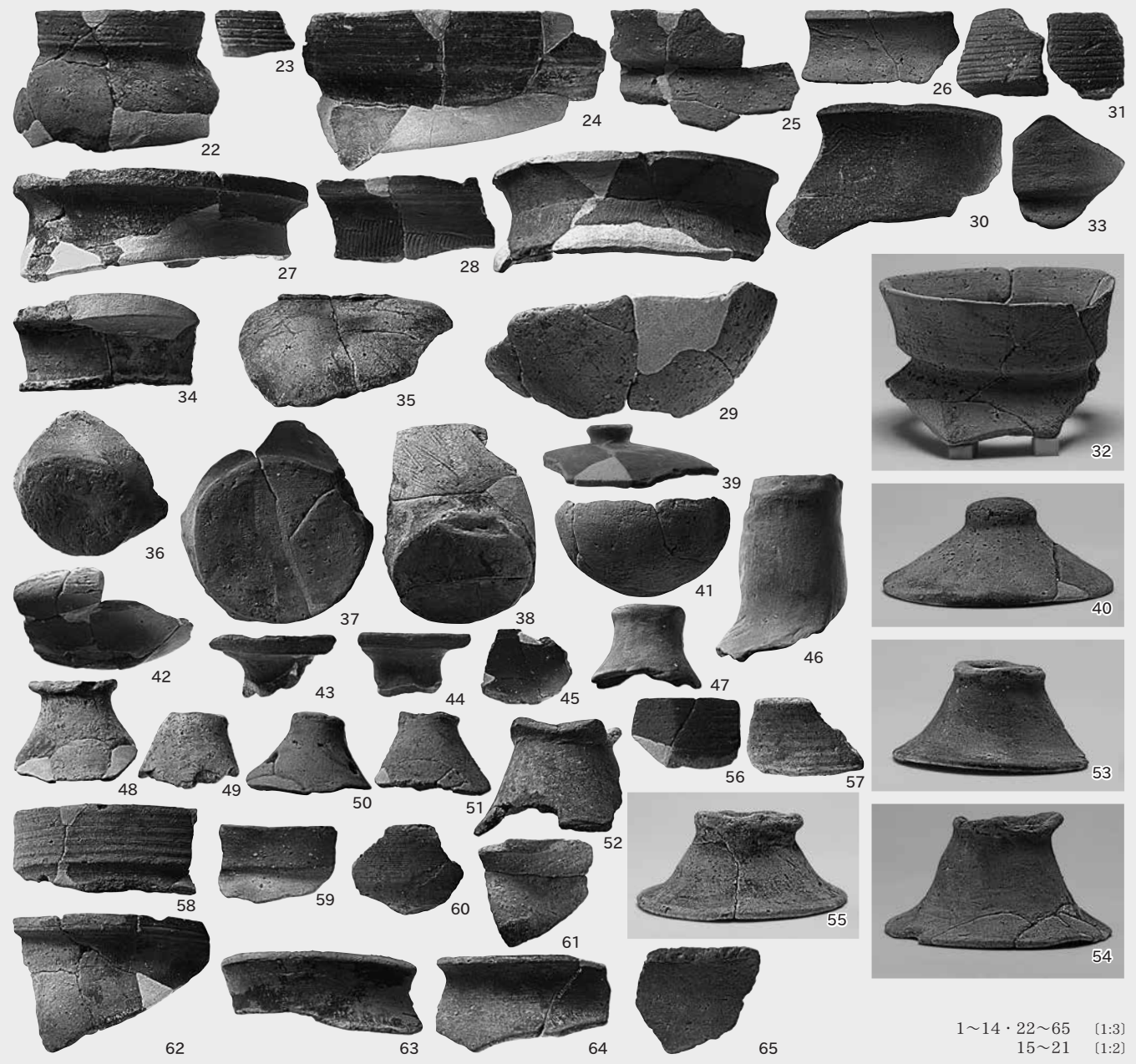
15O'-20　遺物出土状況（南から）

15O'-25　遺物出土状況（南から）

15P'　遺物出土状況（南から）

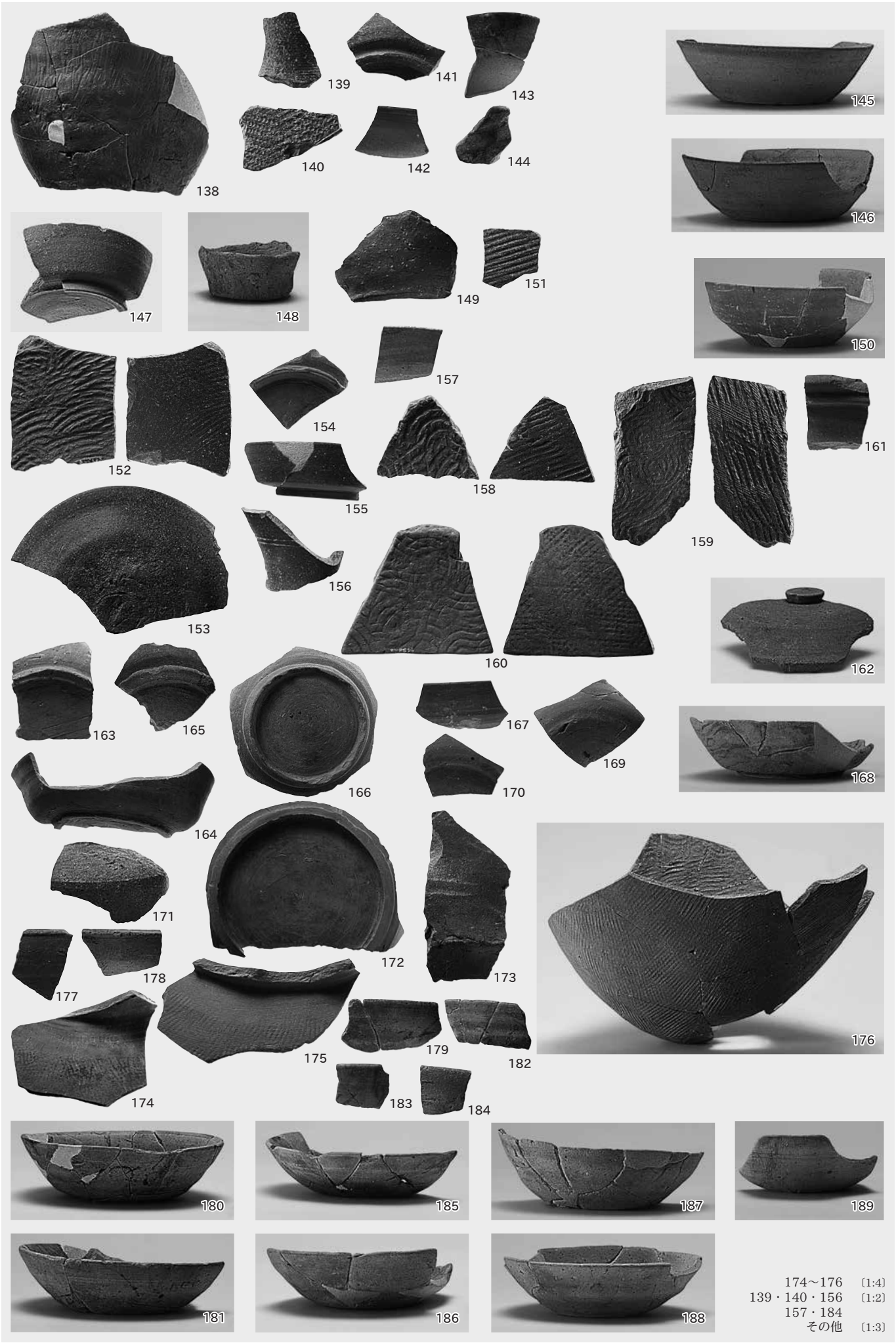
N'～P'付近　完掘（東から）





1～14・22～65　〔1:3〕
15～21　〔1:2〕

136 〔1:2〕
137 〔1:1〕
その他 〔1:3〕



174～176　〔1:4〕
139・140・156　〔1:2〕
157・184
その他　〔1:3〕

190

191

193

203

196

197

198

194

200

201

195

199

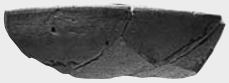
192

205

206

207

202


204

211

208

209

210

215

212

213

214

216

217

218

219

220

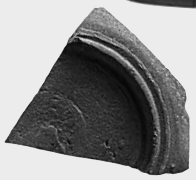
221

222

223

224

225


229

231

227

226

230

234

228

233

227

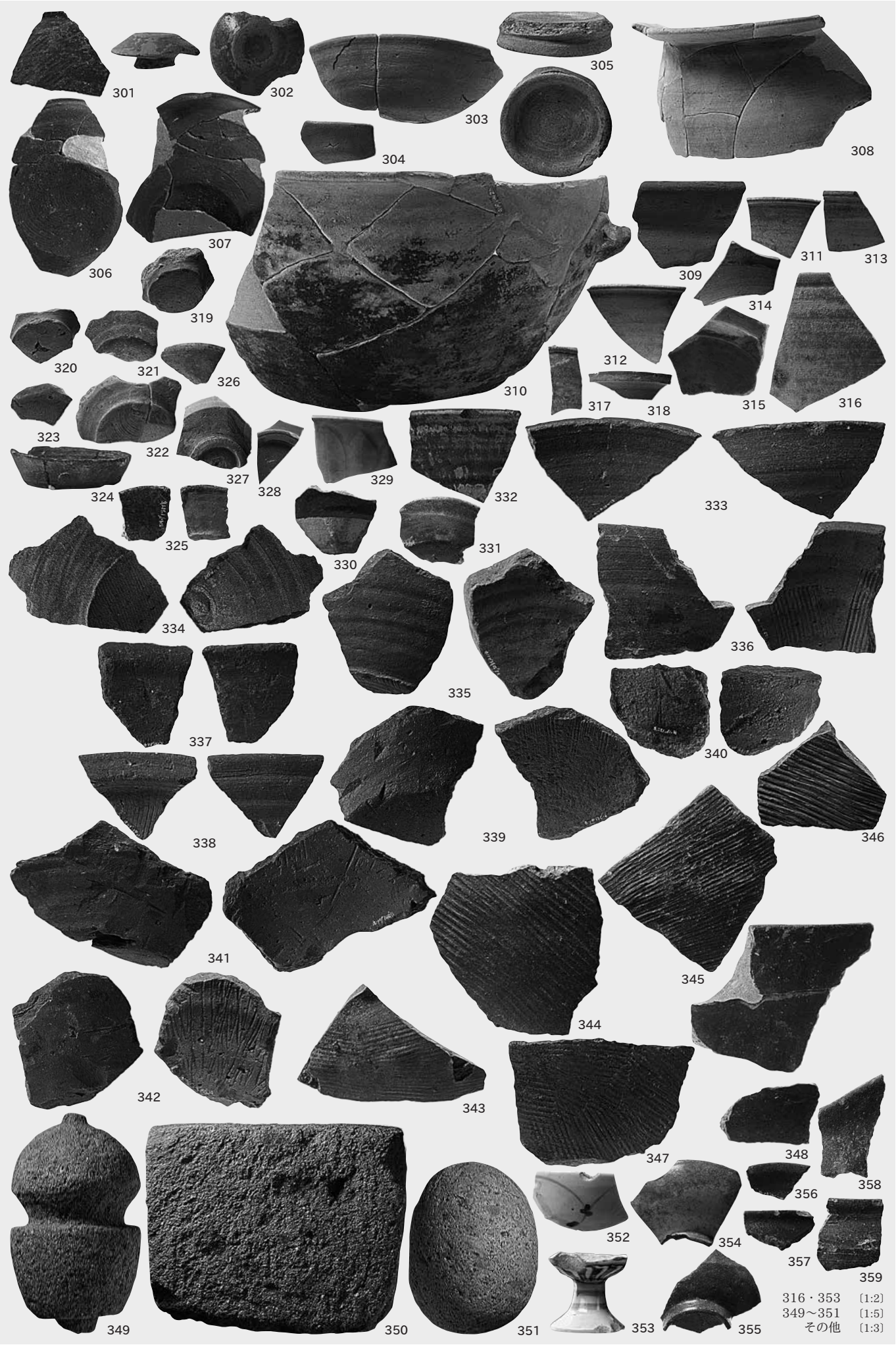
232

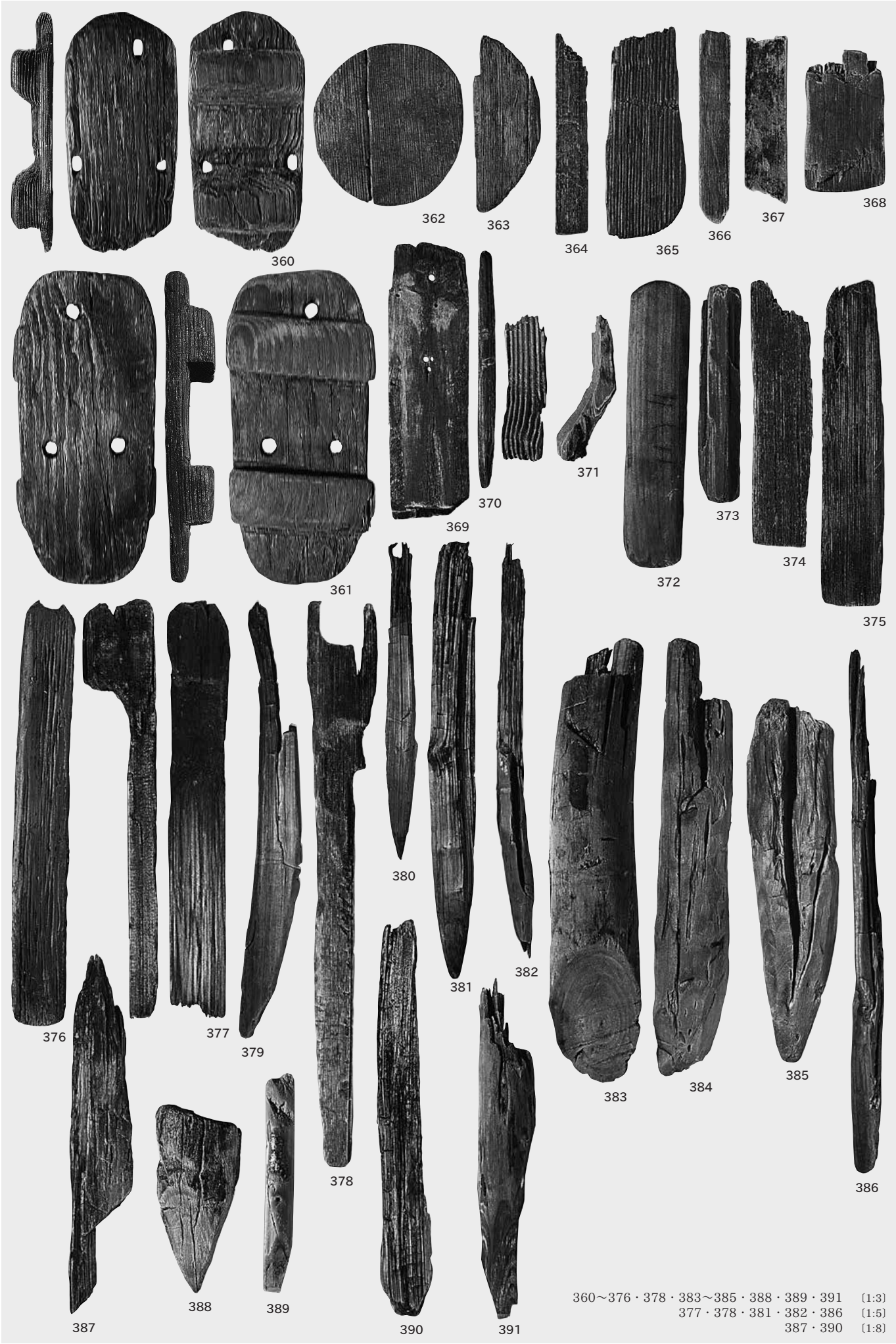
235

184　〔1:2〕
全て　〔1:3〕

236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
252
249
250
251
253
254
257
256
255
258
259
260
261
262
264
263
264
268
266
267
270
265
269
275
280
271
272
273
274
285
286
281
278
287
294
288
276
277
279
292
282
283
289
290
291
293
296
295
284
297
298
299
300

全て　〔1:3〕


301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
316・353 〔1:2〕
349～351 〔1:5〕
その他 〔1:3〕



360～376・378・383～385・388・389・391　〔1:3〕
377・378・381・382・386　〔1:5〕
387・390　〔1:8〕

145

146

179

180

181

182

183

184

184

236

237

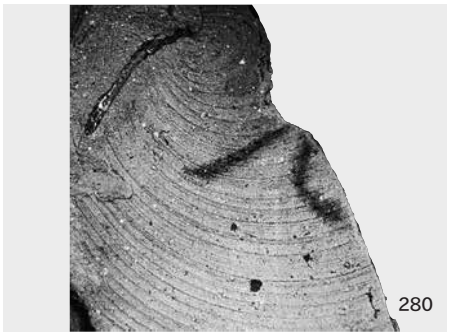
229

250

252

258

273


280

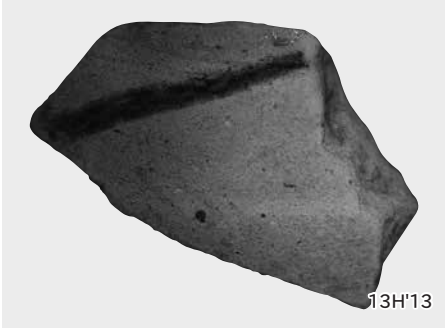
281

282

283

284

285


13H'13

13K'8

報告書抄録

ふりがな	しもばばいせき・ほそだいせき
書名	下馬場遺跡・細田遺跡
副書名	上信越自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅨ
巻次	
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第152集
編著者名	尾崎高宏
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新潟市大字金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	西暦2005（平成17）年5月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
下馬場遺跡（しもばばいせき）	新潟県上越市大字下馬場字浦山836番地ほか（にいがたけんじょうえつしおおあざしもばばあざうらやま）	152226	253	37度 04分 28秒	138度 13分 27秒	19961202 ～19961213 19970421 ～1114	16,300 m²	上信越自動車道建設工事
細田遺跡（ほそだいせき）	新潟県上越市大字黒田字細田305番地1ほか（にいがたけんじょうえつしおおあざくろだあざほそだ）	152226	254	37度 04分 49秒	138度 13分 28秒	19961224 ～1225 19970414 ～0826	2,670 m²	上信越自動車道建設工事

所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
下馬場遺跡	集落跡	弥生時代後期	竪穴建物14、土坑16、ピット4、性格不明遺構3	弥生土器、石器（砥石・磨石類）、石製品（勾玉・丸玉）、玉作関連遺物、鉄製品	管玉製作関連資料
	生産跡	古代・中世？	炭窯（伏焼窯）8		
	散布地	旧石器時代		石器	
		縄文時代（早期・前期・中期・後期・晩期）	陥穴土坑15、土坑1	縄文土器、石器	
細田遺跡	散布地	縄文時代（中・後・晩期）		縄文土器、石器	
		弥生時代終末期～古墳時代前期		土器	土器の集中範囲2か所
		古墳時代後期	性格不明遺構1	須恵器、土師器、土製品	
	集落跡	奈良～平安時代	掘立柱建物4、井戸1、土坑・ピット17、溝5、性格不明遺構2	須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器	
	散布地	中世（12～15世紀）	土坑1	青磁・白磁・土師器・珠洲焼・五輪塔	
		江戸時代		肥前系陶磁器・越中瀬戸焼	
		時期不明		木製品（下駄・曲物底板・板状木製品・棒状木製品・杭）	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第152集

上信越自動車道関係発掘調査報告書XIX

下馬場遺跡・細田遺跡

平成17年4月29日印刷
平成17年4月30日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町４番地１
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新津市大字金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　新高速印刷株式会社
〒950-0963 新潟市南出来島２丁目１番25号
電話　025（285）3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第152集『下馬場遺跡 細田遺跡』 正誤表追加

2023年6月追加

頁	位置	誤	正
図版107	写真中央下から２列目	遺物番号：１３０	遺物番号：１２４
図版129	写真右端上から５列目	遺物番号：２６４	遺物番号：２５７
図版129	写真左端上から４列目	遺物番号：２４６	遺物番号：２７５

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第152集『下馬場遺跡 細田遺跡』 正誤表追加　　2018年11月追加

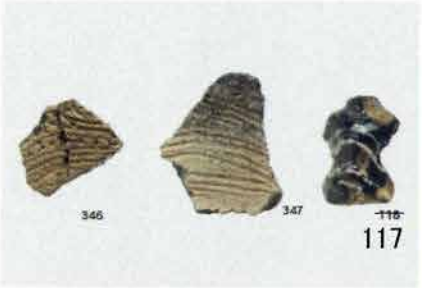
頁	位置	誤	正
抄録	下馬場遺跡　北緯	３７度０４分２８秒	３７度０４分３２秒
抄録	細田遺跡　東経	１３８度１３分２８秒	１３８度１３分３８秒

『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 152 集　細田遺跡・下馬場遺跡』　正誤表

H25.11.5追加

図版 84

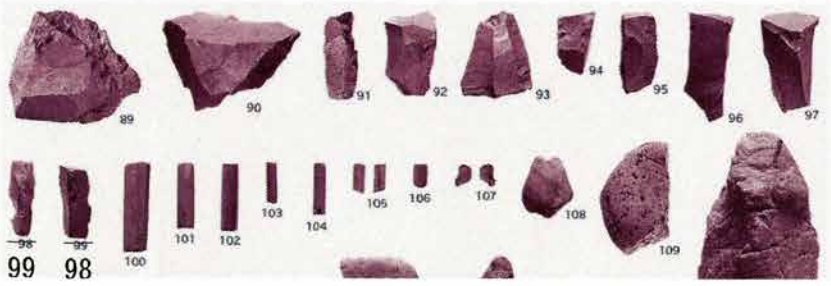
管玉製作工程品・ヒスイ勾玉



縄縄文類似土器・石偶

6号竪穴土器（167）内原石

図 版 118　　玉作関連資料（2）　ヒスイ関連資料　石製品　鉄製品　遺物包含層出土石器（1）



新潟県埋蔵文化財報告書第152集『下馬場遺跡・細田遺跡』正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
62	6	当初は法仏式単一の遺跡と・・・	当初は法仏式単一の遺跡と推測されていたが土器変遷から月影式期を含むことがわかった。	69	17	図版94	図版66
				70	1	図版106～109	図版67～70
				72	19	図版106	図版67
65	8	第18図	第24図	73	10	図版107	図版68
65	29	（13ページ・・・	（12ページ・・・	73	19	図版108・109	図版68・69
67	10	図版97・98	図版58・59	74	19	図版109	図版70
67	31	図版97	図版58	75	1	図版99～104	図版71～76
67	35	図版95・97・99・102	図版56・58・60・63	78	8	図版110～112	図版71～73
68	12	図版95～99、101～103	図版57～60、62～64	79	9	図版113・114	図版74・75
68	18	図版96～101	図版57～62	80	17	図版114・115	図版75・76
68	28	図版95・96	図版56～58	81	4	図版116・117	図版77・78
68	34	図版94・100・102	図版55・61・63	82	10	図版118・119	図版79・80